

聖闘士星矢—龍星伝記
— White Songs

発屋ハジメ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※こちらの作品はすでに自前のサイトに掲載済み、完結済みのものです。4〜5年ぐ
らい前の作品なので、拙い部分には目を瞑ってくださいと幸いです。

五老峰で修行を重ね、龍星座となった少年・白虎。このお話はそんな白虎がさまざま
な戦いを前に立ち上がっていくお話である。

目次

聖衣搜索編

01 : 「誕生、龍星座の白虎」	1
02 : 「廬山昇龍覇」	27
03 : 「天馬星座の翔馬」	44
04 : 「双子座の聖衣」	70
05 : 「ラズリの正体」	97
06 : 「差し伸べた手」	113
07 : 「休日風景」	141
08 : 「天秤座の聖衣」	165
09 : 「遊舞乱虎」	192
10 : 「クオーツの目的」	219
11 : 「決着」	245

冥王復活編

12 : 「約束」	272
13 : 「遭逢の夜」	282
14 : 「琴の旋律」	306
15 : 「冥軍侵攻」	331
16 : 「聖戦開始」	357
17 : 「十二宮侵攻」	379
18 : 「氷の師師弟再会」	394
19 : 「積尸気」	420
20 : 「青銅の底力」	446
21 : 「双子座再会」	470
22 : 「双子決着」	494
23 : 「女神始動」	518

24	：「ハーデス城」	535
25	：「別れと裏切り」	560
26	：「豎琴と氷槍」	584
27	：「甘い匂い」	606
28	：「前進せよ」	626
29	：「戦場へ」	648
30	：「真実」	671
31	：「終わりの絶唱」	693
32	：「聖なる日」	714
海王編		
33	：「始まりのパーティ」	718
34	：「海闘士」	741
35	：「決意を秘めて」	762

36	：「海底神殿」	784
37	：「黄金の血」	805
38	：「獣と凍気」	827
39	：「氷上での戦い」	849
40	：「理想への逃避」	871
41	：「怒りの歌が鳴り響き」	892
42	：「重き旋律」	913
43	：「本音の覚悟」	934
44	：「ポセイドンへ」	955
45	：「思いを一矢貫いて行けると」	
977		
46	：「光の一閃、世界の平和」	999

アトロポス編

- 1173 5 4 : 「もう、何失わぬと誓った」
 へ | 1152
- 5 3 : 「カデンツァからシンフォニア
 さえ棄て」 | 1131
- 5 2 : 「Dead or Dead、友
 1111
- 5 1 : 「天からの使者」 | 1111
- 1090 5 0 : 「覚悟は己の誇りを描く」
 4 9 : 「心を剣にして貫く」 | 1069
 4 8 : 「新たな戦いの信号」 | 1047
 4 7 : 「パルナツソス」 | 1024
- 5 5 : 「真実、それは残酷な運命」
 1194
- 5 6 : 「向き合うこの瞳は君のために」
 1214
- 5 7 : 「Get the futur
 e」 | 1235
- 5 8 : 「ステージの幕開け、開戦」
 1256
- 5 9 : 「何も怖がらなくともいい」
 1276
- 6 0 : 「翼を授けられた戦士たち」
 1297
- 6 1 : 「未来への咆哮と笑顔」 | 1318

1339 6
2
:
:]
W
h
i
t
e

S
o
n
g
s
[

聖衣捜索編

01：「誕生、龍星座の白虎」

この世に邪悪が蔓延る時、必ず現れるという希望の戦士、聖闘士。その拳は空を裂き、蹴りは大地を割った。

そして——女神アテナと冥王ハーデスによるあの激戦からおよそ二世紀を過ぎた時代。

新たなる伝説がそこに生まれようとしていた——……。

中国、廬山五老峰。

聖闘士になるべくして修行し、そしてとうとう、聖闘士になれる資格を持った少年がそこにいた。

「……どこや、どこにある……龍星座の聖衣！」

女の子のような可憐な顔とは裏腹に、口元にはやんちゃである証だろうと言わんばか

りの八重歯。そして、無造作で癖つ毛がある焦茶色の髪の毛にシンブルな白の中華服で、なおかつ少し乱暴な訛り口調を使う少年——この少年こそがその少年の白虎だ。

白虎は聖衣を探すために、廬山の滝をくまなく探していた。

「まったく……」

(老師も無茶なこと言うなあ……)

白虎はフウ、と溜め息を吐き、廬山の滝を見、怒りに任せて叫んだ。

「こんなでつかい滝ん中から聖衣探せって!? そんなん出来るわけないやろうがツツ!!!」

その甲高い声は周りの小動物は勿論、草木までもが怯えるような大きさであった。

「——くそっ!」

白虎はダンツとその場で右足に力を込めて、地面を思いつきり踏んだ。

聖衣がなかなか見つからないストレスから、相当イライラしているらしい。

「何で滝ん中に放っておいたんや……」

ハァー、と白虎が不機嫌そうな顔をし、長い溜め息を吐いた時であった。

「そんな険しい顔をして、どうしたんだ? 白虎」

「……!」

バツ、と声が聞こえる方に白虎は振り向いた。

「そんな顔していると折角の美形が台無しだぞ、白虎」

ザツと足跡を鳴らしながら、白虎に話しかけてくる青年。白虎よりも一つや二つ上ぐらいで、顔立ちもキリツとしていて、とても整っている。髪の毛も光に当たったら藍色になるような綺麗な黒髪。白虎はこの人物を知っている。

「——水鹿！」

そう、白虎の幼馴染みにして、親友である、水鹿である。

「なんでアంతがこんなところに!?!」

「白虎が聖闘士になると聞いて飛んできたんだ。とうとう同じように一緒に戦えるぞ」

水鹿はわしやわしやと白虎の頭を撫でた。「で、でもなあ」と白虎は若干目を伏せた。

「一緒に戦える言うても、水鹿は白銀聖闘士やろ? わいみたいなやつと青銅聖闘士になれるような奴とそんな……」

そう、実は水鹿は称号に杯座を守護星座を持つ白銀聖闘士である。その上、白銀聖闘士の中でも優秀で、優良かつ、その実力も聖闘士の中でも一番上位に君臨する黄金聖闘士に匹敵することさえある。そんな水鹿を親友に持つ白虎が得た称号は龍星座の青銅聖闘士——つまり水鹿よりワンランク下のものだ。

白虎がそれを気にしていたのを悟った水鹿は「気にするな」と言わんばかりの表情で白虎に言った。

「青銅だの白銀だの、そんなもの表面だけの称号に過ぎん。どちらにせよ、同じ聖闘士で仲間だ。一緒に戦えるのは事実だろう?」

「……せやな」

白虎は水鹿の言うことに、微笑みながらコクンと顔を縦に振った。水鹿も微笑んだ白虎に「いい表情だ」と言つて頷いた。

「で、一体何をしているんだ?」

「ああ、実は聖衣をこの滝ん中から探せ言われたんよ」

白虎は滝の方を向いて言つた。水鹿は「ふむふむ」と頷いて、しばらく間を置いてから言つた。

「……無茶振りだな」

「せやで、無茶振りや」

その時の二人の顔は何か無茶な課題を目の前にし、いざやろうとして諦め掛けているようなものだった。

「ということは、教皇——というか、老師から直に聖衣を授かるわけではないのか」

「うん、まあな」

大抵、聖衣というものは教皇から直に授かることが多く、水鹿もそのうちの一人であつた。だが、その前に師から該当の聖衣を纏えると判断されたらそこでも聖闘士とし

て成立することになる。パターンも多い。

白虎はどちらかと言えば、後者の色が強い。

特に白虎の師匠は二百年以上生きている人物で、現在は教皇として聖域を統治している。それ故か、龍星座の聖衣もただで譲るはずがない（現に龍星座の聖闘士は二百年いない）。ちゃんと見極めて白虎に譲るはずだ。

だから、これは教皇としてではなく、白虎の師として判断したものであろう。だから水鹿も思わず言い方を変えたのである。

水鹿は白虎の方に顔を向け、ふと疑問を投げかけた。

「一体どういう経緯だ？」

「ん？ ああ……」

白虎は面倒臭そうな顔をしつつ、水鹿に話した。

それは今朝のことだった。

白虎が寝ていると、突然聖域から白虎の携帯に電話がかかってきたのである。

勿論、その電話の主は白虎の師である教皇だった。

白虎は眠そうな声で師に対応した。朝の六時という早朝に電話を掛けてまで何か重大なことがあるのか。一体何なんだ——とこんなことを白虎は師に説明した。

すると師の返事が、本当に重大なことだったのだ。

——白虎に龍星座の聖闘士になって聖衣搜索を手伝って欲しい——と。

白虎は師が言ったその一文だけで目が覚め、師の話を真剣に聞いた。

因みに聖衣搜索とは、二百年程前に起こった女神アテナ対冥王ハーデスの戦いによって、壊れた黄金聖衣が五つの搜索を指す。

その聖衣は天秤座の聖衣、射手座の聖衣、水瓶座の聖衣、乙女座の聖衣、獅子座の聖衣。

以上の聖衣が戦いにより見事に粉碎され、しかも、そこが地上ではなくエリシオンという別のところで粉碎されたのだ。しかもそのエリシオンはハーデスが倒されたと同じ時に崩壊したとされており、見つけ出すのも相当な難易度となっている。

しかし、近年は粉碎された欠片の破片が地上に集まり、どこかに埋まっているらしいのだ。

現に獅子座の聖衣、乙女座の聖衣、水瓶座の聖衣は見つかっており、特に獅子座と乙女座に関してはつい最近まで聖闘士がいた。

要するに現在見つかってないのは、天秤座の聖衣と射手座の聖衣の二つで、天秤座の聖衣に至っては教皇の現在の守護星座である。

つまりは——白虎にこの二つの聖衣の搜索、特に天秤座の聖衣の搜索を手伝って欲しい

いということだ。

その時の師の声は何かを急いでいるようであった。

その様子に白虎は『師のためならば』と了承。

こうして、ようやく晴れて聖闘士になれる——はずだったのだが。

「龍星座聖衣は滝のどこかに放置してあるって言われた途端、これは夢だと思いたくなくなつたわ……」

白虎は酷く溜め息を吐き、焦燥感を漂わせていた。

確かに二百年も龍星座の聖闘士に相応しい者が出てこなければ、どうせ今回もダメだろうと油断はするが。

せめて聖衣そのものの保管はしっかりしてほしかった。

「なるほどな……」

水鹿は苦笑しながら白虎の肩の上に自分の手をポンと軽く置き、同情していた。

「で、そして見つからないのか」

「ああ……一体どないしたらええんやろう」

白虎は滝を眺めながら言った。

このまま龍星座の聖衣が見つからなければ、自分は役立たずの名ばかりの聖闘士と

なってしまう。それだけはどうしても嫌だった。

「わい、何とかして見つけ出したいんよ」

「白虎……」

水鹿はそんな白虎の胸の内を悟ったのか、フツと優しく微笑んだ。

「じゃあ、オレも微力ながら手伝うよ」

「……水鹿！」

一瞬で白虎の顔が明るく、軽くなった。水鹿は「ああ」と頷き、続けた。

「幼馴染みが困ってるを助けない手はないからな」

「ありがとう〜っ！」

白虎は嬉しそうに笑った。自分一人で探すよりも誰かと一緒に探した方が心強い。

「では、オレはあっちを探す。白虎は滝壺の方を探してくれないか？」

「うん！」

そうして二人は二手に分かれて龍星座の聖衣を探し始めた。

一方で五老峰に向かう一つの影があった。

その身には麻でできたマントを纏い、一目ではその風貌が分からないような姿をしていた。

「……」

その手には何故か白虎の写真。

(こいつが……なるほど)

マントの下から見える青みがかかった黒いを鋭く光らせた。

「水鹿ー、見つかったー?」

「いや、全くだな……」

あれから数時間程度、探せるところは全て探し尽くした。しかし、龍星座の聖衣は見つかるどころか、その気配すらなかった。

その上、龍星座の聖衣自体がどこか奥深く沈むように身を隠している気さえした。

(……やっぱり、わい、聖闘士になれないちゃうん?)

白虎の端麗な顔にも既に諦めが始まっていた。

白虎はハア、と溜息を吐き、ここまでくるまでにあつたことを思い返した。

白虎は幼い頃、町の中でも裕福な家庭に産まれた。

しかし、産まれてからすぐのこと——母親と父親は赤ん坊だった白虎を連れて、日本へと亡命した。

その理由は白虎が家系の事情に囚われてしまう、ということだった。

そもそも白虎の家系は、何代かごとに四神のどれかの名前を付け、その子を神の生まれ変わりとして称えあげる——今の白虎からしたらとんでもなく迷惑な家系の話である。

つまり、白虎の両親は、自分の子どもに自由にさせたかったのだ。こんな家系の事情に囚われていては、白虎も苦しいだろうと。

しかし、白虎が幼稚園へ上がり、一年した時、とうとう追手に見つかり、そのまま中国へと帰ることになった。

そして、家へ帰った途端、両親が突然銃殺されたのである。それも——白虎の祖父母によって。

白虎は呼びかけてももう応答しない両親に必死になって呼びかけた。子どもながらに白虎は両親が死んだという事実を受け入れられなかったのだ。

その後、白虎は祖父母の手によって育てられた。その間に信頼できる両親がいないことによる過剰なショックとストレスで体調を崩すこともあった。

それから三年ぐらい経ち、日本では小学生に上がる頃だろう、白虎は何故、祖父母に自分の両親を殺したのか問い詰めた。

祖父母の答えはこうだった。

『白虎は何年か一度生まれる神の生まれ変わり。それを黙って連れ去り誘拐した二人は両親ではなく、泥棒だ』と。

白虎は自分のために尽くした家系の事情で両親を泥棒扱いされ、黙っていられず、今までの思いの内を祖父母にぶちまけた。

『ふざけるな！ 何が神の生まれ変わりや！ わいはただの普通の人間や！ 普通の人間として産まれてきた！ そしてその普通の人間として育ててくれたんもわいの両親や！ わいの両親はアンタらみたく家系の事情に囚われて、神の生まれ変わりだと称えたりせず、自分たちの意思で一人の子どもとして……人間として接してくれた！ アンタらにわいの両親のことなんて分からないんや！』

それを聞いた祖父母は頭に血が上り、とうとう白虎も両親と同じように殺そうと、銃を仕向けた。

正直、白虎はそのまま死んでも良かった。こんなふざけた家から解放されるなら、死んだ方が良くだろうと。だから逃げようとしなかった。

しかし、その時、突然白虎の脳内に声が語りかけてきたのである。

《逃げろ——逃げるのだ！ お前の命はここで終わってはならない！》

その声は白虎の知り合いにもおらず、耳にしたことがなかった。しかし、何故か両親と同じように信頼に置ける、と感じた。

そして、その声の通りに動くと、なんと、全ての銃弾を避けきり、その場を脱出することができた。

しかし——問題はそこからだった。

なんとか家から脱出できたのは良かったものの、この先どうやって生きていくか。

数日間遠くへと彷徨い続けた。金もなく、せいぜい口にできるのは公園の水道水だけだった。

そうして、とうとう白虎が力尽きようとした時であった。

白虎の師——今の教皇に偶然拾われたのである。

最初は疑り深かった。今まで出会ってきた男性や人物のように、身寄りがない自分をそういう道具として扱うのではないかと。

しかし——教皇は身寄りがなく白虎に優しく接した。そこには両親と同じような暖かさを感じられた。

それからというもの、白虎はどんどん回復して、健康になっていった。祖父母にいた頃にあつた体調をよく崩す、ということも不思議と全くなかった。

そして、師から聖闘士の存在を聞かされた。

——アテナという戦女神を筆頭に地上を守り続ける、勇敢で強い戦士である——と。

白虎はそれを聞いた途端、『もし、自分が強ければ、あのまま日本で平和に過ごせるこ

とができたかもしれない』と。両親を守れたのではないかと。

そして、決意したのである。

『これ以上大切な人を守れない自分は嫌だから、人を守る自分になりたい。だから、聖闘士になる』と。

(せやつたな……それから水鹿という心強い親友もできて……うん)

白虎は一通り思い出すと、上半身に纏っていた中華服をスツと脱ぎ始め、半裸になった。その時に受ける風がとても心地よく、白虎はそれをずっと浴びていたかった。そんな暇がないことが残念だ。

(そういえば、家を脱出する時のあの声は一体何やったんやろう……?)

白虎の脳内に直接語りかけてきたあの不思議な声。あの時は急いでて今まで忘れていたが、今思うと白虎の体験の中で一番謎深いものだ。

(まあ、ええんやけどな……)

あまり気にしないことにしよう。

そうして、白虎は裸足になり、滝壺の中に足を入れた。

「よい、しよつと……」

(今日もええ風やな……)

雲一つない青い空を見上げる。

その時、白虎の口から綺麗な歌声が放たれ始めた。

「爽やかな風が僕たちを包んでくれる——……」

その歌声はその場にいた小動物達を安らかな気持ちにするものだった。

「おっ?」

(相変わらず、歌が上手いな、白虎は)

白虎の歌声が偶然にも耳に入った水鹿は、一旦聖衣の搜索をやめて、白虎の歌の観賞へと入った。

今でこそ、白虎は昔から歌が上手かった。そして、白虎本人も歌うことが大好きなのである。

性格には合わない、なんというおしとやかな趣味だろうか。

そんなこと、本人に言ったらそれこそ怒られるかもそれないが。

(さて、聞き終えたら搜索の続きをやらなければな……ん?)

水鹿はふと、この五老峰の滝の近くに不審な小宇宙がこちらに向かってきていることに気付いた。

因みに小宇宙というのは、人や動物の生命エネルギーみたいなもので、生物ならず

持つているものだ。その小宇宙から大体どんな雰囲気で、どんな感情をしているのか大方読み取れる。

今回は明らかに敵意がある小宇宙だ。

(……何事もなければ良いが)

特に白虎は聖衣がない。もし、白虎が襲われたら――。

(……不安だな)

水鹿はスツと立ち上がり、白虎の元へと駆け出した。

「ふう……」

(今日も歌い切ったで……!)

白虎からしたら、一曲すべて歌い切ったあとの満足感は並のものでなかった。

「さて、聖衣を探さな……ん?」

聖衣を探そうとして、滝壺の中を潜ろうとした時だった。

白虎の後ろに麻布をその身に纏った一人の人物がいた。

(……こんなところに何か用があるのかな?)

五老峰に用事があるということは、聖闘士の誰かか、迷い込んだ観光客だろうか。

もし聖闘士ならば教皇は聖域にいるし、観光客ならばここは危ないから安全なところ

へ誘導しなければならぬ。

白虎は服を着て、人物のところへ寄った。

「あの……」

と、白虎が話しかけた時であった。

相手は突然その麻布から手を出し、拳を白虎に向けて放った。

「うわっ!？」

白虎は驚きつつもその拳を避けた。

「な、なんやねん！ いきなり拳振るうとか！」

（しかも話しかけた瞬間やで……!?! 一体……!?!）

自分が何かしたのであろうか。

しかし、白虎からしたら相手に面識はなく、全くの初対面である。

「……チッ」

相手は舌打ちすれば、もう一度その拳を白虎に振るった。

「つとー!」

（ああ、もう！本当なんやねん!）

そしてそのまま攻防一戦のバトルが始まった。

相手が拳を振るえば、白虎がそれを避ける。また、白虎が相手に蹴りを入れようとし

たら、相手もまた、それを避け、白虎に蹴りをくわえる。

(このままじゃ拉致があかへん……!)

どうにかして相手に一撃をくらわせたいが、どうしたらよいのだろうか。

ふと、相手が白虎に呟いた。

「龍星座の聖衣をお前に纏わせん……!」

「!?」

(な、なんや……! どういうこつたい!?)

自分が龍星座の聖衣を纏ったら都合が悪いことがあるのだろうか。

そんなことを思っていると、とうとう相手の拳が、白虎の腹に直撃した。

「ぐ、わはあつ!」

そのまま白虎は後ろへと後退した。

なんとか耐え切ったことを確認したものの、すぐに相手の蹴りが即座に白虎の胸付近

に直撃し、吹っ飛んだ。

運悪く——滝壺の一番深いところであろうところまで。

「うわあああああッ!!!」

そのまま白虎の体は水中深くへと落下し、沈んでいった。

「……案外、容易かったな」

麻布の人物をそれを確認すれば、その場を即座に立ち去ろうとした時だった。

「おい……そこのお前」

ザツと目の前に顔立ちの整った青年——水鹿が立ちはだかった。

麻布の人物は都合が悪そうな声で水鹿にこう応答した。

「何だ？ お前も倒されたいのか？」

水鹿はギリツと歯ぎしりを軽くしてから、声を張り上げた。

「先程悲鳴が聞こえたから急いできたのだ！ 白虎に何をした!?!」

ガシツと水鹿は麻布の人物の胸倉を掴んだ。相手は水鹿の手を振りほどけば、サラツと答えた。

「あつちが勝手に滝壺に落ちただけだ」

「なっ……!」

水鹿はバツと滝壺の方を覗いた。

しかし、そこには白虎はいなかった。

それもそのはずだ。白虎は既に滝壺の中へと身を沈めていたのだ。

水鹿は相手をキツと睨むと、すぐに再び滝壺の方を見た。

（白虎……!）

白虎が次に目を覚ましたのは謎の光の空間であった。

（……）は……）

桃色のような赤色のような……また、オレンジのような黄色のような不思議な光が白虎の周りの空間を包んでいた。

しばらく白虎がうろついていると、そつと囁く優しい声が聞こえてきた。

『……はお前の夢の中だ、白虎』

「!?」

（この声——……？）

この声——白虎は前に聞いたことがある。

確か、あの家から脱出した時、逃げることができるように仕向けてくれた声だ。

「アンタ……何モン……」

白虎が問い詰めようとした時であった。唇に何か指みたいなのが押し付けられた気がした。黙っている、ということらしい。

『いいか、落ち着いて聞いてくれ。滝壺に落とされ——今、お前は生死の狭間にいる』

「……！」

そういえば、と白虎は思い出していた。

先程、謎の麻布の人物と戦い、そのまま滝壺の一番奥深いところへと落とされたのだ。

相手はまるで自分が龍星座の聖衣を着させないといわんばかりの様子だった。

「あつ、せや！ 龍星座の聖衣——……！」

バツと白虎は振り向いた。

自分は正式な聖闘士になるために龍星座の聖衣を探している途中であつたのだ。早く探し出さなければ。

謎の声はそんな白虎にそつと語りかけた。

『大丈夫だ。そんな焦らなくとも、龍星座の聖衣は見つかる』

「えっ……？」

白虎の頭の上に手の感触。そして、白虎の頭が若干ゆらゆらと揺れた。撫でられているのだろう。

『お前が聖闘士になれないことはない。いや、むしろ、なるべき者としてこの世に生を受けてきたのだからな』

「……それってどういうことなん？」

白虎がそう問いた瞬間、白虎は何者かに抱き締められるような感覚に陥った。体の周りがどんどん生暖かくなっていった。

(この感じ……)

母親や師に抱き締められた時の感覚に似ていた。安心できる居場所はここにある、と

暗示するかのようなこの感覚。

『安心しろ。お前は立派な龍星座の聖闘士であり、女神の聖闘士だ』

「わいが……立派な」

『ああ。そうだ。これから先、お前は辛い運命を背負うことになるかもしれない。だが、自分が女神の聖闘士であること忘れなければ、これからできる大切な仲間と共に乗り越えられるだろう』

「仲間……」

『さあ——龍星座の聖闘士、白虎よ自分の聖衣を迎えに行くんだ』

「う、わあっ!?!」

そう声が言うと、抱き締められるような感覚はなくなった。その代わりに、そこから放り出されるように突き飛ばされた気がした。

「ま、待って、アンタのなま……ゴフボア!?!」

気が付けば白虎は水中にいた。迂闊に声を出したせいで息が苦しくなった。

(いい、いいい、息っ! 息イッ! 息……あっ……)

そして、目の前には龍星座の聖衣の聖衣箱があった。

(こんなところに……!)

手を伸ばせば届きそうな距離だが、息ができない状態にある白虎からすれば、手も動かすのも苦しいものであった。

(ぐっ、もう目の前にあるのに……！)

夢の中での声は白虎に、聖闘士になるべく者としてこの世に生を受けた、と言った。もし、本当にそうなら、今、龍星座の聖衣をここで手に入れなければならぬ。

(アンタさんのその言葉……信じたる……！)

白虎はぐつと聖衣箱に手を伸ばした。

その時、龍星座の聖衣が滝壺の奥でピカッと光を纏った。

水鹿は滝壺をジツと眺めて、白虎が浮上してくるのを待っていた。

(白虎……！)

こんなところで死ぬ白虎ではないはずだ。きつと生きてこの滝壺から浮上してくるはずだ。水鹿はそう、信じていた。

しかし、麻布の人物がそれに追い打ちをかけるかのように、心無いことを言った。

「こんなところで待っていても、白虎とやらがこんな滝壺から這い上がってくるわけないだろう。無駄だ無駄」

「確かにそうかもしれないが……」

水鹿はグツと滝壺を真つ直ぐ見た。

「白虎は死にそうになつても、どうにかしてそれを跳ね返すような奴だ。だから、今回も生きて帰ってくるはずだとオレは信じる」

「……そうか」

麻布は一瞬水鹿の言葉に驚いたかのように間を空けた。

「なら一生そこで待っていていれば良い」

と、麻布がスツとその場から立ち去ろうとした、その時であつた。

突然、異常なほどまでの小宇宙が滝壺から湧き上がっていることを感じ取ることができた。

やはり水鹿もそれは同じだつたようで、驚いたように滝壺を見ていた。

(まさか……!)

二人が驚いているのも束の間、滝壺の水が何か龍が出てくるかのように、天高く浮かび上がった。

そして、その中にチラツと見える人物の影——……。

「白虎!」

そう、龍星座の聖衣をその身に纏つた白虎が滝壺から龍のように出てきたのだ。

白虎は「よつ」と地に降り立つと、申し訳なさげに笑つて言った。

「ごめん、水鹿！　心配させたな！」

「いや、お前が無事で良かった！　それよりも……」

水鹿は白虎が身に纏っている龍星座の聖衣を見た。綺麗な深緑色に輝き、白虎の性格には似合わないなかなか落ち着いた色合いだ。

「ああ、これな。偶然滝壺に落っこちてたらしくてな。わいを助けてくれたんや」

白虎はそつと龍星座の盾に触れ、それを撫でる。

(夢の声……アンタの言うとおり、わい、聖闘士に……)

そつ、と白虎は他の誰にも気付かれないように微笑んだ。

「……とうとうその身に纏ったか」

「！」

気が付けば、そこには先ほどの麻布の姿があつた。

白虎と水鹿はキツとその姿を睨みつけた。

麻布は睨みつけられて、少し焦つたように手を振った。

「いやいや、そんな睨みつけなくても良いって。実は俺、敵じゃ無いから」

「ふにゃ!?!」

「え!?!」

驚く白虎と水鹿の正面で、麻布はそつと麻布を剥いだ。

ちよっとお調子者そうな深みの持った瞳の青色は黒に近く、髪のももそれに合わせて綺麗な黒であった。

水鹿はその姿を見て、「あ……あ……」と声を震わせた。

「水鹿、知つとるん？」

「し、知ってるも何も……」

水鹿は顔を真っ青にして相手を指差して言った。

「お前は山羊座の黄金聖闘士ディアンじゃないか……!」

「……はあ!?　ちよ、どういふことやねん!」

白虎はディアンと水鹿を交互に見た。

水鹿の反応からして、この青年が黄金聖闘士なのは嘘ではないらしい。

「ここら、白銀聖闘士が黄金聖闘士に指差すもんじゃないぞ、水鹿ちゃん!」

麻布——いや、ディアンは水鹿を宥めながら、白虎に言った。

「ごめん、白虎ちゃん!　あれ全部演技!」

「演技?!」

「実は教皇から『龍星座の聖衣を探し出すために白虎に協力してくれ』っていわれてて

!」

「だからあんなことしたん!」

「最初はびっくりのはずだったんだけど、君がマジにするから俺もマジになっちゃって……！」

白虎の中にふつつつと怒りが湧き上がってきた。

(そのせいで滝壺に落とされて……！)

そんなおふぎけな気持ちで自分はあるな目に遭って、死にかけて……。

白虎の肩がぶるぶると震えていた。

「び、白虎ちゃん？」

ディアンはまさか、と思いきやおそろおそろ白虎の顔を覗き込んだ。

その途端、白虎の怒りが爆発した。

「……ふぎけんなっ！」

「えっ、ちょ、白虎ちゃん、その構え……えっ……」

白虎は水鹿を宥めて身動きがとれないディアンに思いつき飛び蹴りをくらわせた。

その横で、水鹿は「はあ」とため息を吐いていた。

「ディアン……オレは知らんぞ」

「え、な、水鹿ちゃん待つて！ 白虎ちゃんつて見た目の愛らしい印象と全然違——う

ぎやあああああ!!!」

その後、数分程度、五老峰にディアンの悲鳴が響いたという。

02：「廬山昇龍覇」

ギリシヤ聖域。

「なーなー、白虎ちゃん。許してくれよ」

「許さん！ 絶対に許さん！」

「……がつくし」

ディアンと白虎は未だに五老峰での出来事を引きずっていた。と、いうよりは、白虎がああのせいで、ディアンを一方的に嫌いになったと言った方が正しい。

白虎は何か下手物を見るような目つきでディアンを見た。

「アンタみたいな無責任な奴が黄金聖闘士とか、世も末やな」

「……白虎ちゃん、その言葉結構心に突き刺さるからやめて」

ディアンは凶星をつかれたように顔を真っ青にし、縮小した。どうやら自分に責任感が欠けているのを自覚しているようである。

水鹿はその横で「全く、調子に乗るから……」とディアンを呆れた目で見ていた。

ディアンは「ところで」と、話の矛先を変えた。

「白虎ちゃんはこれから教皇のところへ挨拶しに行くんだっけ」

「せやで。ああ、でも、案内は水鹿がやってくれるからアンタは付いてこんでええで」
白虎はディアンに向かってしっしっ、と虫でも追い払うかのように手をぶらぶらと振った。

「……ああ、そう」

がつくりしているディアンをよそに、白虎はさっさと水鹿の元へと駆け寄り、そのまま教皇の間へと向かった。

（俺と仲良くなる気ないよね、白虎ちゃん……）

折角聖闘士同士なのだから、仲良くやりたいものだ。ディアンは思ったが、そういうわけにもいかなさそうだ。

「——で、聖闘士になったのか、おめでとう。白虎」

そして白虎は水鹿と教皇の間に向かってみれば、教皇である白虎の師が教皇のマスクを取り、腰まである黒く長い髪の毛をサラサラと靡かせていた。癖っ毛持ちの白虎からしたら、それがとても羨ましいものに見える。

白虎は若干悔しそうにそれを見ながら、憤りながら教皇に向かって言い放った。

『おめでとう』じゃないですよ、老師！」

「……何かあったのか？」

教皇は何か怒っているような白虎を不思議そうに見ていた。

白虎はカチン、ときて声を張り上げた。

「なんでディアンみたいな聖闘士をこちらに向かわせたのですか!」

「ん? ダメだったか?」

白虎は肩を震わせて「あのですねえ……」と続けた。

「ダメも何も最悪ですよ! わい、あいつのせいで滝壺に落とされて、死にかけたんです

よ!」

「……失敗だったか」

教皇は額に手をあてて、溜め息を吐いていた。さすがの教皇でも、そうなることは予想していなかったようだ。

「かと言ってディアン以外に初対面で気兼ねなくできる聖闘士もなかなかいないからな……今回のことは許してやってくれないか」

「……分かりました。老師がそう言うなら」

白虎は「仕方ない」とぶつくさ呟きながら荒げてた声を落ち着かせた。

「ところで、水鹿に白虎よ。今日からお前たち二人で聖衣の搜索を頼みたいのだが……」

「ああ、分かっています。な、白虎」

「うん」

白虎と水鹿はお互い頷き合って、お互いの意思を確認した。

「待て待て、まだ話は終わつとらんぞ」

教皇は苦笑しながら、二人への話しを続けた。白虎と水鹿は「？」と頭の上にクエスチョンマークを浮かべて教皇を見ていた。

「ごほん、と教皇は軽く咳払いをして、本題に入った。

「実は射手座の聖衣はこのギリシャ近くにあるのではないか、という情報が出ている」
「！」

なんと有力な情報なのだろうか。

白虎と水鹿はそのまま教皇の話を聞き続けた。

「そこで、お前たち二人でこの付近で射手座の聖衣を調べてくれないか？」
「分かりました。けど……」

白虎は教皇を心配そうな目で見つめた。

「ろ、老師は……?」

「私は教皇の仕事があるゆえ、一緒に探せんのだ、すまんな」

「……そうですか」

白虎は「折角老師と一緒にいられると思ったのに……」と、しょぼんとしていた。
教皇はしょぼりしている白虎を見、「だからな」と付け足した。

「そのうち暇が空いたら一緒に探そう、白虎」

「……はい」

しかしながら、白虎の表情はいまいち晴れないままであった。

「白虎は本当に老師が大好きなんだな」

水鹿は白虎と聖域を歩き回りながら言った。白虎は「うーん、そうやろうか……」と少し悩ましげに答えた。

「わいってそんなに師匠っ子って感じる？」

「ああ、するする」

水鹿はいまいち腑に落ちない白虎を尻目にクスクスと笑っていた。

「老師の言うことは絶対だろ？」

「だって、言うこと聞かないと怒られんねん……」

「それもそうか」

水鹿はフツと笑った。

因みに水鹿の師匠は元々水瓶座の聖闘士であり、少し変わり者だったが、頭が良く、物知りであった。水鹿はそんな師匠が大好きであったが、水鹿が白銀聖闘士になった直後、任務先で殉職してしまった。

だから、今、師匠が生きている白虎が羨ましく思える上に、微笑ましく見えた。

(老師が生きているうちに、一緒に任務出来るように頑張ろうな、白虎)

あの教皇が死ぬとは思えないが、と付け足しながら水鹿は心の中で白虎に言った。

そして、聖域を出て、その近郊をうろつき始めた二人。

キヨロキヨロと辺りを眺めて聖衣がありそうな場所を探しても、そのような場所はない。

「あーあ、金属探知機使えればなあ……」

「黄金聖衣はそういうわけにはいかんからな。金属ではないし」

「せやなあ……」

白虎はハア、と息を漏らした。

聖衣というものは、オリハルコン、ガマニオン、星砂粉(スターダストサンド)を材料として作られている。それは青銅聖衣にしろ、白銀聖衣にしろ、黄金聖衣にしろ変わらない。

「それにしたって、他の三つの聖衣はどうやって見つけたんやろうかね。気になるで」

「うーん、噂に聞いた話だと……」

まず、手始めに獅子座の聖衣はいつの間にか聖域に戻ってきたらしい。気が付いた

ら、獅子宮にドン、と置いてあったそうだ。

次に乙女座の聖衣。これはインドで任務を務めていた聖闘士が見つけたと聞く。ガングス川の中でキラキラ光るものが見つかったと思えば、それが乙女座の聖衣だったらしい。

で、水瓶座の聖衣はシベリアで見つかった。なんと、氷壁の中から出てきたらしい。

「で、その共通点が、破壊された時の持ち主……と言うか、最後に正規に持ち主だった者の出身地や修行地らしい」

「……つてことは」

「ああ、もしかしたら手当たり次第探して行けば見つかるかもしれん」

水鹿は真っ直ぐ目の前を見つめた。

その目には絶対に見つけてみせる、という意思が強く光っていた。

それは白虎も同じだったのか、こくん、と頷いて、「せやな」と同調した。

「さ、そうと決まればまずはありそうな所を探さねばな。行くぞー！」

「うん！ オッケー！」

そうして二人の射手座の聖衣探しが始まった。

そして聖域付近にある草木が生い茂る林。

白虎は茂みをガサガサと漁りながら、水鹿に言った。

「水鹿ー、ありそうなところ、見つかった？」

「いや、全然だな」

水鹿は首をブンブンと横に振った。

あれからありそうな場所を探してみたものの、一向に見つかる気配がない。むしろ、こうして探すことで射手座の聖衣が遠いものに感じられた。

白虎はうーん、と頭をぽりぽりと掻いた。

「本当にこの辺にあるん？ もう少し先行っても良い気がするんやけど」

「そうだな。よし、行ってみるか」

水鹿はコクン、と頷いた。

ここで見つからないのでは、もっと先に進むしかない。

白虎と水鹿がそう思い立った時であった。

「……！」

「っ！」

突如として、二人に何か突き刺さるような小宇宙を感じたのである。この小宇宙は人間のものでも、かといって動物や植物のものでもない。では、一体何がこの小宇宙を放っているのだろう。

白虎は顔を上げた。

「……水鹿、この小宇宙……行ってみよ！」

「ああ！」

二人はコクン、頷き合い、小宇宙が感じ取れる方向へと突っ走った。

二人が着いたのは、林の奥の方にあるわりと大きめの滝壺であった。

その滝壺は綺麗な青で光っており、キラキラと輝いていた。

「……白虎」

「……うん。多分ここからだとは思うんやけど」

白虎はスツと滝壺の岸に座り込んだ。ザアツと滝を流れる音が白虎からしたらとても気持ち良かった。

昨日のことを水鹿は思い出していた。

「また滝壺の中にあるんじゃないかなろうな……」

「……そうかな」

白虎はスツと小宇宙を感じ取っていた。

しかしながら、滝壺からは小宇宙を感じ取れなかった上に、水深が20センチぐらいしかなかった。

ここまで大きな滝壺とはいえども、この水深は最近できたものかもしれないが、それにしたって不自然かもしれない。

(……まさか)

白虎はバツと滝を見上げる。

もしかしたら、この小宇宙、滝の中から放たれているのではないか。そして、この小宇宙がこの滝を作っていたとしたら――。

(なるほどな……)

全てに合点がいった。

白虎はスツと立ち上がり、滝壺の中へ入っていく。そして、この滝壺を作っているであろう滝の目の前に立つ。

水鹿はそんな白虎を見て、「お、おい……」と声をかけた。

「何をするつもりだ？」

突然のことに焦っている水鹿を尻目に、白虎はニツと笑う。

「この滝を逆流させんねん！」

「……はあっ!？」

水鹿は思わず、ずっこけかけた。

この大きな滝を逆流させるなんて、新米聖闘士の白虎にできるのであろうか。できた

ところで、一体何が起こるといふのだろうか。

いまいち想像がつかない水鹿に白虎は不機嫌そうな顔で見つめた。

「むー、信頼しとらんな？」

「当たり前だ！ 滝を逆流つて……」

「いーか、水鹿！」

白虎は自分の右手の人差し指をピツと立てて、それを水鹿の唇の前に差し出した。

「言うておくけど、わいは龍星座の聖闘士や！ 龍星座の聖闘士はあの廬山の滝をも逆流させることができる拳を放つんやで？」

そういえば、そのようなことは耳にしたことはある。

龍星座の聖闘士はどんなに大きな滝でも逆流させる威力の拳を持っていると。

「でも、ただの例えだろ……」

「いーや、例えやないで！ それをわいが証明したるよ！」

白虎は再び滝を向いた。そして拳を作った。

(だ、大丈夫か、本当に……)

水鹿が不安でドキドキしている中、白虎は目を閉じ、小宇宙を高めようと意識を集中し始めた。

「はあああ……」

(この大きな滝を逆流させる力を……！)

自分がどうやって滝を逆流させたいのか、逆流した時どうなるかなど、想像しながら、その小宇宙を徐々に高めていった。

(……老師)

閉じた目を、白虎はそつと開きながら、拳に想った。

(貴方から受け継いだ技——しかと使わせて頂きます！)

そして、目をカツと開いた途端、白虎の小宇宙と力を込めたアツパーカットが目の前の大きな滝に一撃をくらわした。

「廬山、昇、龍、覇——ツツ!!!」

拳圧が昇龍のように舞い上がり、とうとう目の前の滝の水をももっていき、逆流させた。

水鹿はポカン、目を丸くして、逆流した滝を見ていた。

(ほ、本当にやってのけた……!?)

龍星座の聖闘士が廬山の滝を逆流させる威力の拳を持つ、ということは嘘ではなかったのである。

そして、逆流した滝の向こうに見えたものは——。

「洞、窟……?」

何でこんなところにこんな洞窟が、と水鹿がボヤボヤとしているのも束の間、白虎は水鹿の腕を掴み、言った。

「はよせんと、滝が戻って入れなくなるで！」

「そ、そうか！ さっさと入るか！」

水鹿ははっ、と気付き、白虎が何故こんなことをしたのか把握した。

（フツ、なかなか勘が鋭い奴だ……）

洞窟の中は暗く、上からぼちちゃん、ぼちちゃん、とりズムよく、水滴が雫となって水玉の中へと落ちていた。

水鹿と白虎はその中をひたすら突き進んでいた。

しばらく進んでいくと、二人が先ほどから感じていた小宇宙が体にひしひしと感じ取れるようになっていた。奥に進めば進むほど、それもどんどん強くなっていく。

そして、洞窟の道を抜けたとき、白虎と水鹿の瞳に映ったものは、ぼつかりと上に空いた穴から眩いばかりに漏れている白い光と、そこに自分はここにいる、と存在感を示しているらしい一つの黄金聖衣の姿。

大きな羽を広げ、矢をつがえた人馬の聖衣――。

「射手座の……黄金聖衣……！」

そう、射手座の黄金聖衣である。

この聖衣から莫大な小宇宙が伝わってくる。先ほどから感じていた小宇宙はこれだろう。

白虎はバツと走り、射手座の黄金聖衣のところまで向かった。

「こんなところに……!」

そつと白虎は聖衣に触れた。ひんやりとした聖衣の感触が白虎の手を伝った。

「白虎! 聖衣箱もここにゐるぞ!」

「!」

水鹿のその手には射手座の聖衣箱。

二人はオブジェ形態で見つけても、どう持ち帰るか困っていたが——持ち帰るためには聖衣箱さえあれば十分だ。

「わっ!?!」

すると、オブジェ形態の射手座の聖衣と聖衣箱がお互い共鳴するかのようには輝き始め、聖衣はそのまま聖衣箱の中へと入っていった。

「……持ち帰れることか?」

「らしいな」

白虎は、よつ、と射手座の聖衣箱を手を持った。背負うのは聖衣の肩のパーツが許し

てくれなかったのである。

「出口は？」

「えーっと、あそこにあるで！」

白虎か指をさした先には、外から漏れる光が洞窟を照らしていた。出口だ。

「よし、出るぞ！」

「あつ、待って水鹿ーっ！ ととっ！」

白虎は聖衣箱持っていて上手く走れないのか、途中で何度も聖衣箱を落としかけた。その度に水鹿から苦笑されていた。

「よし、出たな！」

「あー、見つかつて良かった！」

白虎はハア、と息を吐いて、射手座の聖衣箱をポン、と下に置いた。

聖闘士になって早速、射手座の聖衣が見つかり、この先も順風満帆かもしれないと二人は見ていた。

「このまま天秤座の聖衣も見つかればええんやけどな」

「そうだな……」

もし、このまま例の法則に則っていけば、天秤座の聖衣は中国にある可能性が高い。

「まだ道のりは長い。急がなくても大丈夫だろう」

「うん、せやな……つて、あれ？」

白虎はふと気付いた。足元に置いたはずの射手座の聖衣箱がなくなっていた。

「どうした白虎……つて、なっ!？」

水鹿もそのことに気付いたのか、声を上げて驚いていた。

「い、一体、ど、どこに……あつ!」

白虎がきよろきよろと辺りを見渡していると、射手座の聖衣箱を背負っている——白虎とそこまで年に違いはないであろう少年が、こちらを睨み、そこに立っていた。

癖っ毛のある黒髪寄りの焦げ茶のショートカットで、後ろには一束髪の毛がちよこん、と結んであるように残っている。釣り目がちな赤寄りな茶眼がそれを際立たせていた。

「アンタ……その聖衣……」

と、白虎が問い質すのも束の間、相手の少年は後ろを向いて去り、こんなことを吐き捨てた。

「……これは俺のものだ」

そして、走り去った。

「ま、待って!」

白虎が追いかけてようとした時には、少年の姿はすでになかった。

03：「天馬星座の翔馬」

サアツ……とゆっくりしていて、でもすぐに去ってしまう夜の風の冷たい感覚がその少年を襲った。

その背中には射手座の聖衣箱があつた。

「……」

少年は黙ったまま、目を閉じた。

(……あの龍星座の聖闘士)

昼間のことを思い出していた。

射手座の聖衣をあの龍星座の聖闘士——つまり白虎から奪った時に感じた、ふとした

小宇宙。

(……やはり、あの龍星座の聖闘士がそうなのか)

少年はその龍星座の聖闘士のことを思い出しながら、目を開き、そつと聖衣箱を下に置いた。

あまり自分と年が変わらなかつた、あの龍星座の聖闘士の少年。

(あの聖闘士をこの手で……)

少年は自分の拳を見た。

使命とはいえ、自分とそう年の変わらない少年に手をかけることは躊躇われた。

(いや……でも……使命は使命だ……が、その使命と同時に今やらなければならいこともある……)

ザツ、と足音を立てて、少年が立つと、少年を明るい小宇宙が包み込んだ。すると、目の前に表れたのは天馬星座の聖衣のオブジェ。多分、この近くにあったであろう——いや、持ち主である少年が誰にも見つからないように細工して、置いたのであろう。

「——天馬星座の聖衣よ、我が身を纏え」

ボソツと少年が呟けば、天馬星座のオブジェが分解し、それぞれのパーツに分かれた。それはガチャン、ガチャンと音を立てて、少年の身を鎧のように纏ってみせた。

「——装着完了」

そして、そこには悠然と闇夜の中に立っている天馬星座の聖闘士の姿があった。

「射手座の聖衣よ、あの場所へ転送を」

パチン、と指を鳴らせば、射手座の聖衣が魔法のように少年の姿から消え去った。

「……あとは」

(天秤座や他の黄金聖衣があれば——女神を——……)

天馬星座の聖闘士の少年は夜の星空を見上げた。

（もう少しお待ち下さい、女神よ——……そして——クオーツよ——……）
ヒュウ、と一瞬強い風が吹いた。

聖域近くにあるロドリオ村の食堂。

白虎と水鹿、白虎の師である教皇がそこで食事をしていた。

しかしながら、白虎は折角、大好きな自分の師と楽しく食事ができると言うのに、顔が浮かなかつた。

「——そういうことなんです。ごめんなさい、老師……」

「なに、気にするな」

白虎は昼間、折角見つけた射手座の聖衣が奪われたことを気にし、そして教皇に話していた。

自分の甘さや、自分の使命感の弱さに責任感の弱さを感じていた。自分がもつとしっかりしていれば、聖衣は奪われなかつたはずだと。

「せっかく見つかつたのに……」

「……白虎が負い目を感じることはない」

教皇はポンポンと白虎の頭を撫でた。

しかし、白虎はそれでもしよぼん、と顔を曇らせていた。

もし、このまま天秤座の聖衣も今回のように奪われてしまったら——それこそどうしたら良いのであろう。絶対に避けなければならぬ事態だ。

水を一口飲み、教皇は少し口元を緩め、白虎に言った。

「責任を感じてしまうのも無理はないが、あまり背負い込んでも、体にも心にも悪いぞ」

「……はい」

コクンと静かに白虎は頷いた。

「大丈夫だ。皆で取り戻せば良いのだからな」

「……」

白虎は静かに俯いて、ギョツと拳を握った。やはりどこか腑に落ちない様子だ。

なかなか元気にならず、グダグダと昼間のことを引きずっている白虎に見兼ねた水鹿はポン、と白虎の肩に手を置いた。

「そうだ、そんなに気を落とさなくとも良いんだぞ、白虎」

「水鹿……」

水鹿はこくん、と頷いて微笑み、言葉が続けた。

「オレにも責任だつてある上に、何よりもお前だけの問題じゃない。聖域の問題だ。違うか？」

「……」

確かにその通りだ、と言うように白虎は首をフルフルと横に振った。水鹿は白虎のその反応にフツと微笑んだ。

「だから一人でそこまで思い詰めるな」

「……うん。水鹿、ありがとう」

とは言っても、やはり責任を感じてしまうのは変わらないわけで。

（どうにかして、返して貰わんとなあ……）

いつ会えるかどうか分からぬ少年。

白虎は再び会えることを祈るのみであった。

「おお、兄ちゃん、新記録突破したぜ！」

そして、店主であろう料理人が声を上げて驚いていた。

その目の前に座っているのは、ラーメンの器を何枚も何枚も重ねて食べている、帽子を深く被っている青年の姿。その青年のお腹の中は無限に広がる宇宙なのだろうかは分からないが、あり得ないほどの速度と手つきでどんどん食べていった。

（う、うわあ……すごい……）

（あそこまで食べられるとかどんな胃袋してんだ……）

白虎と水鹿もそれを見て、目を見開き驚いていた。

「——はいっ、時間切れ！」

料理人は手に持っていたストップウォッチをピツと鳴らして、カウントを止めた。青年も同時に手に持っていた箸と蓮華を机に置いた。

「なんと、十杯更新だぜ！ おめでどう、兄ちゃん！」

青年はぶへつと軽くゲツプすると、不満足そうにボソリと呟いた。

「たったの十杯……？」

「たったじゃねえって！ 兄ちゃんからしたら不満かもしれねえけど、ラーメンを30分内に25杯なんて人間じゃねえ！」

(にっ……)

(にじゅうごはっ……)

白虎と水鹿は、時間的にとんでもないであろう数字を聞いて、飲んでいた水を思わず噴き出しかけた。

30分の内に25杯——一杯何分計算になるだろうか。どちらにせよ、とんでもないスピードで一杯を食べていることは事実だ。

「とりあえず記録は更新したわけだ！ 約束通りタダにしてやるぞ！」

「——ありがとうございます」

青年はスツと立ち上がり、ストールを首に巻いて、出口まで向かい、そのまま出て行ってしまった。

白虎はぶるぶると肩を震わせながら教皇の方に振り返った。

「ろ、老師……」

「ん？」

「30分で25杯つて一杯どのくらいで食べているんですか……」

「一分弱、だな……」

教皇はゴクン、と水を飲む。白虎はぽかん、と、口を大きく開き、目を見開いたまま、青年が出て行つた出口を見た。

（な、なんとという強靱な胃の持ち主……）

そして、なお、まだ更新できるといった様子だったあの顔つき。完全に只者ではない。教皇は「やれやれ」といった様子でラーメンを啜っていた。

翌日。

白虎はうーん、と腕を伸ばし、聖域で朝を迎えていた。

これから長期に渡って聖衣搜索が始まるだろうから、と、師が白虎と水鹿のために自宮の天秤宮を整理して解放し、長期間泊まれるように確保してくれたのだ。白虎はともかく、水鹿は師の弟子でもないのです、と遠慮したのだが、白虎と師の謎の圧力に圧され、天秤宮で一夜を過ごすこととなった。

その時と同時に、水鹿はこんなことを言っていた。

「ああ、もう！ 我が友の師は我が師だ！」

と。

天秤宮の入り口に立った白虎は、そのことを思い出し笑いしていた。

（水鹿つて、昔からそういうこと言つてて、友情に厚い奴やったなあ……）

小さい頃にあつた話なのだが、昔、白虎が過去に両親と亡命するように日本に出て、追手に捕まり、その後両親を殺されたこと。そして数年後祖父母に殺されかけたこと。これらを水鹿に話したのである。そうしたら、水鹿は「オレの友達の過去はオレの過去も同然だ……」などと言いながら泣いてくれたのである。

（昔からしつかりしてて、大人びておつたけど、友達思いで、友情に厚くて……）

そして今回も白虎と共に聖衣搜索に力を入れてくれていた。

（うん、これからも水鹿と一緒に聖闘士、頑張るんや……）

きつと、何があつても二人なら大丈夫であろう、と白虎は確信した。

そうこうしている間にも水鹿も天秤宮から出てきて、白虎の横に立った。

「おはよう、白虎」

「うん、おはよう、水鹿！」

「おつ、立ち直ったようだな？」

水鹿は昨日、射手座の聖衣を奪われしよんぼりしていた白虎を思い出しながら、目の前にいる白虎を見、クスクスと笑っていた。「だ、だって」と白虎は返した。

「いつまでもしよんぼりしてたら、皆に迷惑かけるから……」

「それもそうか。よし、今日も頑張るぞ！」

「うん！」

二人はお互い微笑み合い、お互いの拳をコツン、と軽く当て合った。

今日は、昨日奪われた射手座の聖衣についての調査、及び、射手座の聖衣を奪った少年についての調査である。

何か知っている村人はいないか、目撃した村人はいないか。ひたすら探し、調べていた。

しかしながら、返ってくる返答は

「ええ？ 知らないなあ」

「耳にしたことないわ」

「聖衣が奪われるなんてないだろ」

など、こんなことばかりなのである。

「聖衣だって結局は物同然なんだから奪われるに決まっとるやろ……」

「落ち着け、白虎」

いい加減村人の返答にイライラしてきた白虎を水鹿はなだめていた。

そして落ち着いてきた頃に白虎は額に手をあてて、ため息をついた。

(あーあ、真面目に協力してくれる人、おらんかなあ……)

白虎はキョロキョロと周りを見た。

この村の周辺の人々はどこかしら消極的だ。多分、このことの重大さがよく分かっていないのだろう。

そういえば、教皇から聞いたのだが、過去に射手座の聖衣が聖域の外に十数年ぐらい出ていたらしい。

それに比べたら、今回のことは大したことではないのかもしれないが……聖闘士の自分達からしたら相当重大なのである。

「はあ……」

白虎は溜息を吐いた。このまま聖衣が泥棒されたまま見つからなければ永遠に射手座の聖闘士だけ欠員という事態もあり得る。もし、この調子で天秤座の聖域も奪われたら——いや、それらのことだけは絶対防がなければ。

ふと、少年らしき声がちらに向かって話しかけていた。

「兄ちゃん達、何か探しているの?」

「えっ?」

目の前にいたのは自分より身長が低く幼めの11歳ぐらいの少年で、あつて精々145cmぐらいだろう。髪の毛は若干無造作で、肩まであるだろう薄い群青色で、目は緑色に光っていた。

「君は一体……?」

水鹿もその少年の存在に気付いのか、そちらに振り向く。

「うん、俺の名前はラズリっていうんだ。兄ちゃん達、何を探しているの?」

ラズリと名乗った少年は、水鹿と白虎をきよとん、と見つめていた。

白虎は「ええとな」とスツとしゃがみ込んで、ラズリの視線に合わせた。

「兄ちゃん達な、射手座の黄金聖衣を探しておるんよ」

「射手座の黄金聖衣……?」

「せやで、射手座の黄金聖衣や」

白虎はコクリと首を縦に振った。

「早く見つける必要はないかもしれんけど、見つからないと困るからな。一生懸命探しとるんよ」

「そうなんだ……」

ラズリはそれを聞いて、一瞬何か考えた後、白虎に言い出した。

「じゃあ、俺も一緒に探すよ！」

「あ、アンタがか!？」

「うん！」

思わず声を上げた白虎に、ラズリはニツコリ微笑んで頷いた。「で、でもなあ……」と白虎は困った様子でラズリを見た。

「あんま言いたくないけど、わいはアンタみたいな小さい子、巻き込みたくないんよ」

「大丈夫大丈夫！　俺も聖闘士——みたいに強くはないかもしれないけど、運動神経は周りの人より全然良いから！」

「そ、そうなん？　で、でも……」

無関係な村人を巻き込むわけにはいかない、と白虎が言おうとした時であった。水鹿がポン、と白虎の肩に手をおいて微笑んでいたのだ。

「水鹿……」

「ちゃんと事情を把握してくれているようだし——ここは一つ付き合わせてもらったらどうだ？」

「で、でも、水鹿……」

頑として意地を張る白虎に、水鹿はボソリと呟いた。

「それに、あの筋肉——只者ではなさそうだな」

「……………」

白虎はラズリの体をバツと見た。

身長や体格に反して、しつかりがっしりと鍛えてある身体つきをしており、この辺の子供たちと喧嘩して負けるようなものではなかった。

「どこの子かは分からんが、頼らないよりはマシかもしれないぞ」

「……水鹿がそう言うなら」

仕方ないな、と白虎は続けて、ラズリの手をギュツと握った。そして微笑んだ。

「——じゃあ、一緒に行くか、ラズリ」

「！…うん、ありがとう！ 兄ちゃん！」

ラズリは嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、ギュツと白虎の手を握り返した。

白虎達はラズリを仲間に加え、早速昨日射手座の聖衣を見つけた例の洞窟へと行ってみた。今度は滝を逆流させなくとも洞窟へ入れる入口が分かっているため、そこから入った。

ラズリは「へえ」と声を上げた。

「こんなところに洞窟なんてあったんだね……………」

「わいらも見つけた時はびっくりしたよな、水鹿」

「そうだな」

白虎と水鹿は昨日のことを思い出し、クスクスと笑い合っていた。

そして白虎は水鹿に確認する。

「で、あそこで射手座の聖衣見つけたんやったね」

「だな」

水鹿はこくん、と頷く。

白虎が指差したのは、洞窟の天上にぽっかりと空いた穴から光がキラキラと漏れている例の場所であった。

「凄い綺麗だね……」

瞳をキラキラと輝かせて、ラズリはそこを見た。

「ねえねえ、あそこにあつた射手座の聖衣も結構綺麗にキラキラしてた?」

「うん! 二元がキラキラしておるだけじゃなかったで!」

コクリと白虎は頷く。

思い返してみると、見つけた時の射手座の聖衣はとても綺麗に光っていた。言葉では言い表せないが、例えるとしたらオーロラのような綺麗さがあった。

白虎はあの時もっと見ておけば良かった、と今更ながら後悔していた。

「水鹿、何か手がかりは見つかりそうか?」

「……いや、全くだ」

水鹿は射手座の聖衣があつた場所の地面をさすさすとさすりながら言った。

「戻されたような形跡もなしか？」

「ああ……」

スツと水鹿は立ち上がった。

「一回出口まで戻って、そこからもう一度探さなければな」

「そうか……」

白虎はがつくりし、うな垂れながら息を吐いた。ラズリはそつと微笑んでそんな白虎を元気づけるように言った。

「大丈夫だって。ちゃんと見つかるよ」

「……だとなえけどな」

白虎はふう、と光が漏れている穴を見上げた。

「ん？」

（……聖闘士？）

それは白虎達が洞窟から出た時のことであつた。

そこから再び射手座の聖衣をどうやったら追えるかどうか話し合っていた。小宇宙

を辿るにしても、自分たちの実力では見つかる前に力尽きてしまう可能性が高い。じゃあ、どうするか、と悩んでいた時だったのだ。

白虎がふと、見上げた時であった。そこにはペガサスのような白い輝きをまとった聖衣を纏っている聖闘士の少年を見たのである。

(あの子も……射手座の聖衣探しとるんかな)

だったら、こっちに来て、仲間に入って良いのに、と白虎は思った。入りづらいのだからか。

白虎の様子が妙におかしいことに気付いた水鹿は、そつと話しかけた。

「白虎？ どうかしたか？」

「あつ、えつと……」

突然話しかけられた白虎は、一瞬びつくりしたのか肩を跳ね上げて、水鹿の方に振り向いた。

「白虎？」

「……ちよ、ちよつと待ってて！」

白虎は例の聖闘士の少年の元へと向かおうと立ち上がった。

「白虎オツ！」

「すぐ戻ってくるから！ 心配無用やでーっ！」

そして白虎は水鹿とラズリに向かって手を挙げながらタツと軽く走り出した。

「ねえ、君！」

白虎は聖闘士の少年に大声で呼び止めた。聖闘士の少年は白虎に呼び止められてその足をぴたつと止めた。

微笑みながら、白虎は少年に話しかける。

「君も、射手座の聖衣のこと調べとるん？」

「……」

「もしそうなら、わいらと一緒に探さへん？ 見たところ、君も聖闘士のようやし」

「……」

少年は黙ったまま、答ええない。白虎は「ええつと……」と、次の言葉を考えていた。

「お、お節介かもしれんけど、一人よりはみんなの方が——……」

「……くだらない」

少年は始めて白虎に対して声を出した。そして、今まで白虎に対して背を向けていた身体を、白虎の方に向けた。

赤みがかかった瞳が印象的な、綺麗な顔だった。白虎はこの顔に見覚えがあった。

(この顔、どこかで——……)

少年は白虎にそのことを思い出させる隙も与えたなかった。

「そうやって仲間ごっこしながら聖闘士を全うしている気になつていいのか。くだらないな」

「なっ……」

白虎は水鹿とラズリを悪く言われたような気がして、ドクン、と心臓が跳ね上がるようにこだました。

「聖闘士とは本来なら誰もが孤独な戦士だ。近年、仲間だの何だの言つて、仲良しごっこして敵を倒している輩が絶えないが」

「……」

「俺は、そのように他人と慣れ合つて——時間を共にしている暇も心もない」

少年はスッと一歩前に出た。

「誇り高き天馬星座の聖闘士として——」

その少年から溢れ出ている小宇宙に白虎は驚愕した。

(この小宇宙……！)

並大抵のものではなかった。

この少年——天馬星座の聖闘士と名乗つたか。確か天馬星座は階級そのものは青銅で、白虎と同じ聖闘士では最も最下層にいる。しかし、天馬星座は冥王ハーデスとの戦

いにおいて、唯一そのハーデスの身体に傷をつけたなど、実は黄金聖闘士よりも優秀な経歴を残している。

要は——天馬星座の聖闘士というのは代々優秀な者が引き継いでいる、ということだ。

もし、この少年もそのうちに入っていたら——。

「聖闘士同士の私闘は禁止されているが——……」

「……？」

「龍星座の聖闘士、俺はお前と戦わざるを得ない」

「！」

天馬星座がそう言い放った途端、一気にその場の雰囲気が変わった気がした。

「昨日、お前を一目見た時悟った。お前とは戦うことになる」と

「……あっ——！」

白虎はやっと昨日の少年のことを思い出した。

「射手座の聖衣奪ったん、アンタやったんか！」

そう、昨日、射手座の聖衣を奪った少年の正体は——目の前にいる天馬星座なのであ

る。

「で、わいと戦ってどうするんや？何が目的なん？」

白虎は目を細めて天馬星座を見た。天馬星座はふう、と一息ついて、白虎に言い放った。

「聖衣のこともそうだが——それ以上に俺には託された使命がある」

「使、命……？」

白虎はきよとん、とした。その使命に自分がかかっているのだろうか。

天馬星座は白虎をチラリと見て、「いや」と首を横に振った。

「——今のお前に話すようなことではない」

そう言うと、天馬星座は早速白虎のお腹に拳を入れた。

「ぐはっ！」

白虎はその勢いで若干後退し、その場でよろけた。

「あ、アンタ……」

キツと白虎は殴られた腹を腕で抑え、天馬星座を睨みつけた。

「聖闘士の放つ拳は空を裂き、蹴りは大地を割る——」

そう言いながら天馬星座は白虎に拳をくわえたり、蹴りをくわえた。白虎はなんとかそれらを避けきろうと必死になった。

「くっ……っ！」

（こいつ、とんでもなく早い……っ！）

白虎は避けながら思った。

なんとかその拳や蹴りを見極めることはできるものの、この天馬星座の聖闘士——他の聖闘士よりも敏捷性に長けており、一瞬でも見放すとすぐにやられるだろう。

しばらくすると、天馬星座はシユツと拳を止め、白虎の様子を見ていた。白虎も相手の様子を見た。

こちらがハアハアとすでに息を上げ、汗をかいているのに比べ、相手はその反対に涼しそうな顔をしていた。まるで、これはまだ全力ではない、と言うように。

(と……)

今度は白虎の反撃。拳と蹴りを天馬星座と同じように入れてみる。若干不恰好な部分もあるかもしれないが、ダメージを与えるためには天馬星座並の敏捷性も兼ね揃えなければ、この実力差は埋まらないだろう。

「やあっ!」

白虎はしばらく反撃したところで、思い切って天馬星座に拳をくわえた。天馬星座はそれを片手で掴んだ。白虎はそれでも拳に力をくわえながら、天馬星座の顔を見た。

(何が一体アンタの目をそないな風にしとんねん……!)

そう、天馬星座の瞳は淋しそうとも悲しそうとも取れる表情をしていた。

「っ!」

天馬星座は白虎の拳を跳ね除け、そのまま白虎の身体をズザツと後退させた。白虎はその際、あまり後退させないように、手を地につかせていた。

(天馬星座、アンタのことはよう分からん……でも)

そして白虎はそのまま助走をつけ、勢いで走り出し、天馬星座もそれに合わせるように走り出した。そしてお互い、その固く握った拳を激突させた。

(ずっと一人で戦ってきたのは、その目が語ってる……！)

きつと、誰にも頼れず、いや——頼ろうとせず、全て一人でやってきたのだろう。自分とあまり年の変わらない男の子が、そんなことになっているとは、にわかには信じ難いが。

(一匹狼ならぬ一匹馬……やな！)

白虎は上手いことを心の中で言ったつもりで、フツ笑って見せた。

天馬星座は突然フツと笑った白虎にびっくりして、拳への集中力が途切れたのか、白虎の拳を圧している拳が弱まった。

(今や！)

「うおおおおお——ツツ!!!」

その隙を逃さまいと、白虎の小宇宙が一気に高まった。

天馬星座はその小宇宙に若干驚いたかのように目を見開いて白虎を見た。

(この小宇宙……！)

驚くことに、白虎の拳と激突した天馬星座の拳が徐々に白虎の拳に圧され始めていた。そのことに気が付いた天馬星座も己の小宇宙高め、白虎に対抗しようとした。しかし、それでも白虎の小宇宙の高まりには追い付かず、どんどん圧されていた。

(こいつ……！)

一体どこからそんな小宇宙を放っているのだろうか。

そして、白虎の拳は、いつの間にか拳風を纏い始めていた。

「！」

(な、なんだ、これは！)

天馬星座が驚くのも束の間、いつの間にかその拳風は烈風へと変わっていき、一つの技となり、天馬星座に吹きかかる。

「猛虎烈風紫電拳——ツツツ!!!」

烈風という名の竜巻が猛虎の如く天馬星座を襲い込んだ。

「なっ……！！」

そのあまりの強さに天馬星座は手も足も出ないのか、そのまま立ち尽くし、烈風に身体を持っていかれ、宙に浮き上がった。

「よっしや！ 当たった！」

「うっ……!!　ぐっ……!!　あっ!」

天馬星座は拳風によりしばらく宙に浮いていたあと、そのまま顔から地面に落ちた。

白虎はそれを見届けると、その場でガクン、と膝を落とした。

(や、やった……倒した……?)

「え、へへ……えへへ……」

始めてちゃんとやった戦闘にしてはわりと上出来ではないだろうか。相手が自分と同じ聖闘士であることはともかく。

「とりあえず老師にほうこ——……!!」

白虎が元の場所に戻ろうと立ち上がった時、凄まじい闘気と小宇宙が白虎を襲った。

(な、なんや……!?)

急いでその闘気と小宇宙が放たれているであろう方向に振り向くと、そこには先程、白虎の猛虎烈風紫電拳によってやられたはずの天馬星座が、なんともなかったかのように立ち上がっていた。

白虎は目を見開き、脂汗を一滴垂らし、それを見ていた。

見る限り、天馬星座は先程真正面からあの技をくらい、やられたはずだ。

「な、どういふ……!」

「お前程度の技、この俺には通じない、ということだ」

そう言うと、天馬星座は両手を上げ、天馬星座の13の星の軌跡を描くように動かし始めた。

(な、そ、そんなことって……!)

白虎がそうこうして焦っている間に、天馬星座は白虎に攻撃をしかけた。

「ペガサス、流星拳——ッ!」

その拳は一秒間に何発だろうか。百発はとうに越し、音速の速さで放たれているのではないか。

(み、見えない……!?)

白虎にはその音速の拳の姿が見ることなできなかつた。

龍星座聖衣についている盾で防ごうにも、この拳は防ごうとする場所以外の足にも当たってくる。

要は、天馬星座が出す技は隙がない音速の拳なのである。

気付けば、白虎の身体はその拳によって身体はボロボロとなっていた。

「うっ……くっ……うっ……」

ヨロヨロと白虎はよろけ、そのまま地面に倒れ込んだ。

天馬星座はその白虎の姿を見て、ぎゅつと拳を握りしめた。

(お前に罪はないが……すまない、龍星座)

自分は自分に託された使命を果たしただけだ。それに代わりはない。

そう思つて、天馬星座がその場を去ろうとした時であつた。

「ま、待てい……」

どこかしら甲高い声が天馬星座の耳に入り、天馬星座はそちらを振り向いた。そこで白虎がうつ伏せで倒れたまま顔を上げ、天馬星座を見つめていた。

天馬星座は瞳の色に合わない冷たい目で白虎を見た。

「——何の用だ」

「名前……わいに教えてくれへんか……」

「……翔馬。俺は天馬星座の翔馬だ」

天馬星座——翔馬は白虎に近付くように数歩程度前に出て、サラツと名乗つた。

白虎もあつちが名乗つたのだから、こちらも名乗らなければ、という思いで、自分の名を名乗つた。

「わいは、龍星座の白虎——……翔馬、アンタの名前、覚えておくで」

「……フン」

翔馬は白虎に背を向けて、その場を歩いて去つた。白虎はそれを見送るようにつめれば、そのままフツと意識を飛ばした。

04：「双子座の聖衣」

白虎が次に目を覚ましたのはその日の夜、天秤宮に用意されていたベッドの上であった。

「うう……ん……」

目を開けると、そこには天秤宮の天井と、水鹿とラズリがこちらを覗き込んでるらしく、二人の顔が見えた。白虎の目が開いた途端、二人は心配そうに、しかしどこか安心したように白虎に話しかけた。

「白虎！ 起きたか！」

「兄ちゃん大丈夫!？」

「二人……とも……」

白虎はゆつくりと起き上がった。その時、全身に痛みが走った。

「——っ！」

その痛みで、白虎は起き上げた身体を再びベッドの上で横にした。

「ほら、まだ安静にしていなければ」

水鹿は先程まで白虎を覆っていた布団を綺麗にして白虎の上に掛け直し、ポンポン、

と白虎の額を髪の上から撫でた。

「水鹿……わい……」

「ああ。気が付いたらお前がボロボロになって倒れていたんだよ」

水鹿はスツと白虎の額を撫でていた手を引いた。

「でも何事も無くて良かった。この様子なら明日には回復しているだろうな」

「うん……」

白虎は相槌を打った。

白虎は翔馬という天馬星座の聖闘士のことが気掛かりであった。

あの赤みがかかった茶色とは裏腹の淋しそうな表情をしていた瞳。そして、白虎と戦わざるをえない、と言っていた。

(……天馬星座の、翔馬か)

あの淋しそうな瞳の奥では一体どのようなことを考えているのだろうか。そして、一体何のために自分と戦い、何のために聖衣を探し出そうとしているのか。

「……」

一方、ラズリはそれぞれ天秤宮から処女宮へ出る階段がある方向を見つめていた。

水鹿はそのことに気付いたのか、ラズリの頭の上に自分の手をポン、と置いて声をかけた。

「どうした、ラズリ。門限があるなら帰ってもいいぞ」

「……いや、そうじゃないんだけど……」

むー、とラズリは水鹿を見つめた。水鹿はクスクスと笑いながら、ラズリの頭を撫で回した。

「でも、そんなにそわそわされたら早く帰りたいのかなって気になってしまっただろう？」
「……で、でも」

ラズリはちらりと白虎の方を見た。どうやら、白虎の体調が心配らしい。水鹿は「ああ」と笑いながら言った。

「白虎のことは心配するだけ無駄だ。尚更帰ってもいいぞ？」

「誰が無駄——つてて！」

白虎は全身に痛みを走らせながら水鹿の発言に大声を上げて突っ込んだ。

「ほら見ろ。そんな大声出す気力があるんだから」

「うぬぬ……」

白虎は若干悔しそうに水鹿を見つめた。

ラズリは一瞬きよとん、としつつ、クスクスと笑って「そうだね」と頷き、立ち上がり、片手を挙げた。

「ありがとう。俺は帰るね！」

「ああ。また、明日か？」

「うん！　また明日二人に会いに行くよ！　じゃあね！」

ブンブン、とラズリは手を振った。白虎と水鹿もそれに返すかのように片手を上げて、軽く振った。

ラズリが天秤宮から出るのを確認した後、水鹿は『ふう』と一息吐いて、白虎の方に振り向き返った。

そして、神妙な面持ちで白虎に聞いた。

「で、白虎よ。何があつたんだ？」

「な、何って……？」

ビクツとしつつも、白虎はすつとぼけた。『あのなあ』と水鹿は呆れたように、白虎の額に人差し指をつん、とあてた。

「決まってるだろう。このボロボロ加減、大方誰かと戦つて負けたのだろう？」

「え、あ、あはは……」

「笑つて誤魔化すな」

水鹿は険しい表情でピシヤリと白虎に言い放った。

「さあ、全て正直に話して貰おうか？」

「いや……えつと……ご、ごめんなさい」

白虎はガクツと項垂れてから、翔馬との戦いのことを全て話した。

双児宮。ラズリは双児宮をうろつき回っていた。

(聖衣、聖衣……と、あった！)

そう、ラズリは双児宮に着て、双子座の聖衣を探していた。

別に翔馬と同じように聖衣を奪いにきたのではなく、単なる安否の確認である。

「良かった、君は無事だったんだね」

そつとラズリはしやがみこみ、双子座の聖衣に触れ、撫でる。聖衣のひんやりとした感触がラズリの体に伝わった。

「……」

(ごめんね、双子座の聖衣。俺がもつとしっかりしていれば、今頃は——)

『例の事件』が、ラズリの脳裏を過ぎった。

この『例の事件』は2年ぐらい前——もつという水鹿が聖闘士になる前のことで、ラズリにとつて——いや、黄金聖闘士どころか聖域全体にとつても大きな事件の一つであった。特にラズリはそれに一番関わっていた。他の誰でもない、ラズリが。

(……でも、今は気にしちやいけないよね)

ぐつ、とラズリの双子座の聖衣に触れる手の力が強くなる。そして、寄りかかるよう

に、聖衣に自分の額を寄せた。

「……今は、倒すべき相手を倒さなきゃね」

その目には決意という強い意志が込められていた。

「さて、俺はここで邪魔するよ。明日はあのお兄ちゃん……いや、白虎と水鹿に会いたいから」

すつとラズリは立ち上がった。その顔は少し名残惜しそうにしていた。

（久々に会えたのに、俺は君を纏えない。本当にごめんね）

ラズリがそう思った瞬間、一瞬聖衣の輝きが増した気がした。ラズリは少し嬉しそうに微笑んだ。

「……うん、そうだね。ありがとう」

そう、ボソリとラズリは双子座の聖衣に向かって眩き、そのまま背を向け、前進した。双子座の聖衣のためにも早くこの状況をどうにかしなければならぬ——ラズリはそう思った。

「で、その天馬星座の翔馬とやらはお前と戦う、と」

「……うん」

水鹿は『ふむふむ』と顎に手をあてて、白虎から聞いた話を整理していた。

白虎は翔馬のことをすべて水鹿に話した。水鹿は一つも疑おうとせず、バカにもせず、白虎の話を親身になって聞き、信じてくれた。

「聖闘士が聖闘士と戦わなければならぬ運命、ということか？」

「な、なんかわいだけの話みたいで……」

白虎はむう、と翔馬とのやり取りを思い出していた。

——お前を一目見た時悟った。

——お前とは戦うことになる。

——聖衣のこともそうだが——それ以上に俺には託された使命がある。

(……使命か)

翔馬の言い方式的に、その使命に自分が関わってきているのだろう。

水鹿は『なるほどな』と顔を上げて、手を顎から離した。

「とりあえず、その翔馬って奴が気がかりだな。白虎、明日にでも教皇に話そう」

「うん……」

白虎はコクン、と頷いた。

「聖闘士同士の私闘なのがちゃんと分かっている辺り、聖衣だけでなく、その使命とやらで本当にお前狙いの可能性も高いからな。用心は怠らぬように」

「うん、分かっている」

どうしても心配してしまう水鹿に、白虎は『大丈夫、大丈夫』と言いながら宥めた。
(にしても……わいが関わる使命、か)

その使命に忠実な辺り、白虎は翔馬のことが悪い人物には見えなかった。もし、分かり合えたら仲良くなれるのではないか。

(でも、そんな無理かなあ……)

白虎は『ハア』とため息を吐いた。相手は完全にこちらを敵視、というよりも目標に定めている上に、聖衣のこともあるため、現実的に難しいだろう。しかし、聖闘士同士のだから、分かり合えない、というのは無理ではないのかもしれない。

(分かり合えたら……ええなあ)

可能性は低いけど、そうなったら良いな、程度に考えて、白虎はゆっくりとベッドに自分の背をつけた。

(やっぱり……あの時のダメージが……)

翔馬は白虎の猛虎烈風紫電拳によって出来た右横腹辺りにある青痣にそつと触れる。ちよん、と触れただけでもそこに痛みが走った。

(あの龍星座……)

ギュッと右拳を握り締めた。

ただ単に小宇宙が馬鹿大きく燃やせるだけのなりたて聖闘士だと思っていたが、どうやらそうではなかったようだ。

その小宇宙に対応できるぐらいの素質なら十二分にあるようだ。

(その素質が開花する前になんとか……)

なんとか、使命を果たさなければならぬ。

そして、聖衣のことも――。

翔馬は目の前に輝いている射手座の黄金聖衣を見た。

(……ごめん、射手座の聖衣。でも、これも使命……)

翔馬は目を伏せた。目的のためとはいえ、聖域に保有権があるものを奪取するのは、

天馬星座の聖闘士として若干後ろめたい。

しかし、これもクォーツ――上から命令によるもの。翔馬はそれに逆らうことができない。

その上内容も内容だったのだ。

「黄金聖衣が全て集まれば……女神を助けられる……」

翔馬はボソリと呟いた。

そう、翔馬はクォーツからそう聞かされていた。

翔馬が天馬星座の聖闘士となったあの日、クォーツはそう言っただけで翔馬に近付いた。も

し、黄金聖衣をすべて集めることができたら、聖域の奥深くに眠っているであろう女神を助けられるかもしれない、と。

翔馬も最初は半信半疑だったが、クオーツの必死さを見て、それが本当であるだろう、と信じることにしたのだ。

「だから……」

（女神を助けるまで我慢だ……）

女神を助けることができれば、聖域も安泰だ。翔馬はそう思いながら、射手座の黄金聖衣を撫でた。

そして翌日。

白虎と水鹿は翔馬のことを話すために教皇の間へと赴いた。

「……って、いや、何で教皇の間に炬燵があるんですか」

水鹿の第一声はそれであった。

教皇の間の隅っこの方に炬燵がちよーんと用意されていた。ついでに畳もその下に三、四枚程度敷かれていた。そして、炬燵に入りながら白虎の師である教皇が、お茶を啜りながら、ほっこりしていた。

「最近冷え込むし……何より、こうした方が皆と話しやすいかと思ってな」

『いやいや』と水鹿は手をブンブンと横に振って突っ込んだ。

「欧米やヨーロッパ出身の方々にはびつくりするかと……ここは日本じゃないんですから」

『ああ』と教皇はひどく納得した様子であった。

「そういえば……スペイン出身のディアン辺りはこれを見た途端びつくりしてたな」
「でしよう?」

水鹿はハハッと苦笑いしながら教皇を見た。因みに教皇は日本出身である。

白虎もクスクスと笑いながら、水鹿に言った。

「ええやないの。別に何か損するわけでもないんやし」

「だがな、白虎。オレは思うぞ。ここまで教皇の間がゆるい空間であつて良いのかと……」

「二人とも。とりあえず座りなさい。話はそれからだ」

「……はい」

二人は教皇に言われていそいそと炬燵の中に入って座った。

教皇は二人が座ったことを確認すれば、二人に温かい緑茶と芋羊羹を差し出した。聞いた。

「用件はなんだ?」

「はい。実はとある天馬星座のせいんつ——ってあふいつ！ あふいつ！」

早速緑茶で舌を火傷したらしい白虎は用件を伝える途中で、突然騒ぎ出した。教皇は呆れながら、白虎に氷入りの水が入ったコップを差し出した。

「ほら、お前猫舌なんだからな。少し冷ましてから飲まない」と

「す、すみまへん……」

白虎は差し出された氷入りの水をコップを手にし、その中身を口に含み、飲み込んだ。

「で、天馬星座の聖闘士がどうした？」

「ああ、はい、実は——……」

水鹿は舌を火傷して話せる状態ではない白虎の代わりに、翔馬のことを話した。

翔馬が射手座の黄金聖衣を奪った犯人であること。白虎が昨日、その翔馬と戦って負けたこと。水鹿は白虎から聞いた話を思い出せる限り、教皇に話した。

教皇は一通り水鹿から話を聞いたあと、とても複雑そうな表情をしていた。

「そうか……現代の天馬星座は……」

そう呟いている教皇はどこかしら悲しげな瞳をしていた。舌の火傷が落ち着いたらしい白虎は、そんな教皇にそつと呼びかけた。

「………老師？」

「………えつ、あ、ああ……。心配するな。何でもないぞ」

「……そう、ですか」

白虎はいまいち腑に落ちないのか、ギョツと緑茶が入っている湯のみを両手で握り、その水面を見つめた。

その昔、教皇は白虎と同じ龍星座の聖闘士だった頃に天馬星座の聖闘士と親友だった、というのを聞いたことがある。いくつもの戦いの中でも信頼に置ける友人の一人だった、と。そして、その天馬星座は正義感に溢れ、勇敢で勇猛な聖闘士だったと。

そんな天馬星座の聖闘士を知っている教皇からしたら、翔馬のことは複雑に見えても仕方ないのだろう。

(だとしたら——あえて深入りせん方がええかもな……)

その気持ちは水鹿も同じだったようで、いまいち腑に落ちないような顔をしつつ、何かを堪えるように黙って芋羊羹を一口ずつ食べていた。

白虎はこの何となく気まずい雰囲気を変えようと、話題を転換させた。

「と、ところで老師！ 天秤座の聖衣の情報はまだ出てないんですか？」

「……それについてはまだだな」

教皇はズズツと緑茶を啜り、答えた。

「そのうち出てくるだろうか、今は射手座の聖衣に集中しなさい」

「……はい」

白虎は気まずい雰囲気を打破出来たように感じて、とりあえず一安心した。そして、白虎は炬燵から出て、立ち上がった。

「じゃあ、そろそろわいらはここで……」

「芋羊羹、天秤宮に持って行きなさい。緑茶に合うぞ」

「……了解」

白虎は若干苦笑いしながら教皇から芋羊羹が入っている袋を受け取った。

「はー、老師があんなお茶目な人だとは思わなかったわー」

白虎と水鹿は天秤宮に一旦戻った後、そのまま外に出た。無人宮の処女宮、獅子宮、巨蟹宮を抜けて、双児宮に差し掛かろうとしていた。

水鹿は白虎の言うことに「そうだな」と同調していた。

「やはり二百年も生きていると、お茶目な一面も出てきて柔らかくなるのだろうか」
「うーん、そんなもんなかなか……」

「元々融通は通じる人だからな、あの人」

水鹿はクスクスと笑って、教皇が今まで白虎達にやってくれたサプライズを思い出していた。

白虎が10歳の誕生日は自分まで呼ばれて、それに巻き込まれた記憶がある。水鹿は

それが楽しかった。白虎も呆れながらも楽しそうにしてくれた。教皇の方もそんな白虎を見て、嬉しそうに、そして楽しそうにしていた。

(弟子思いで、仲間思いだよな、あの人)

水鹿はいつか教皇みたいな人になりたい、と思っている。力の強さもそうかもしれないが、人格な面でも十二分に憧れる面もたくさんある。水鹿はそんな風に魅力的な人物になりたいのだ。

二人はそのまま談笑しながら、双児宮へと一步足を踏み入れた時であった。

「——っ！」

一気にその場の雰囲気が変わった。他の宮とは全く違う異様な雰囲気であった。

二人は会話をピタツと止めて、双児宮を見渡した。

「す、水鹿……」

「ああ……」

双児宮も普段は無人宮で、ここまで雰囲気が変わらないはずだ。

「………くん先、行ってみよか」

水鹿と白虎は聖衣のヒールを鳴らしながら進んだ。

丁度中盤に差し掛かる辺りで声が聞こえてきた。

『双子座の聖衣——渡してもらおうか』

『ダメだ！　これは大事なものだ！』

(——この声……！)

白虎と水鹿はこの二つの声にどこか聞き覚えがあった。

「この声……ラズリと……」

「……翔馬、や……！」

白虎は声を震わせながら言った。

そんな白虎を見て、水鹿は『これが……』と声がする方向を見た。

「とりあえず行ってみるか、白虎？」

コクン、と白虎は静かに頷いた。

白虎と水鹿が行ってみると、そこには双子座の聖衣の前に立っているラズリと、そこに対峙するかのようになっている翔馬の姿があった。

ラズリは翔馬を睨みながら、その小さな体で双子座の聖衣を守るかのように両手を広げていた。

「ラズリ！」

「翔馬！」

二人は水鹿と白虎に呼ばれて気が付いたのか、そちらの方にハッと振り向いた。

「兄ちゃん達っ!」

「ラズリ、大丈夫か!」

水鹿と白虎は即座にラズリの方へと駆け寄る。ラズリは「うん」と頷きながら翔馬の方を睨みつけた。

「あの天馬星座の聖闘士……」

「分かってる」

白虎はスツとラズリの一步目の前に出て、翔馬の前に立った。

翔馬は『ふう』と息を吐いて、白虎を見た。

「お前、まだ死んでいなかったのか」

「んなん、当たり前や。あんなことで死ぬ聖闘士がいると思うか?」

二人の間に火花がバチバチと鳴っているような雰囲気であった。

「で? わざわざ双児宮に来てまで何の用なん? さつき、双子座の聖衣っていうワ

ドが聞こえたんやけどなあ……」

「ここで黙ってもそのうちバレるから言ってしまうおう」

翔馬はスツと目を細め、双子座の聖衣を見た。

「俺はあそこにある双子座の聖衣を貰いにきた」

「……双子座の聖衣？」

「そうだ。どうしてもあそここのチビ……いや、双子座の聖闘士が嫌だと言うので、強硬手段を取ろうとした時にお前達がきた」

「……！」

（ラズリが双子座の聖闘士……？）

水鹿はラズリを見た。ラズリはそれが本当であるかのように、目を瞑って黙っていた。

白虎もそれを聞いて、一瞬びっくりしたようだが、それどころでないことは分かっていたため、すぐに戻った。

「強硬手段つちゅーこつたあ、要は強盗つてことやろ？」

「そういうことになる」

「……外道が」

白虎はボソリと言いつつ放った。

翔馬はそれを聞き取ったのか、目を瞑り、拳をぐつと握った。

「……外道でも構わん。それが俺の今、すべきこと……」

翔馬はそう良いながら、腕で天馬星座の13の星の軌跡を描き始めた。

「あれは……！」

（ペガサス流星拳か……！）

昨日、翔馬が自分に向かって放った技。あの技によって自分はあるまま倒れてしまった。

（でも……！）

白虎もそれに合わせて拳を握り、構えをとった。

（今日はまだ冷静でいられる……！）

白虎がその目をカッと見開いた瞬間、翔馬のマツハ拳がこちらに向かって放たれた。

「ペガサス、流星拳！」

そう、とうとう翔馬のペガサス流星拳が放たれたのだ。しかし、白虎はそれを荒れ狂う烈風で押し返す。

「猛虎烈風、紫電拳——ツ!!!」

「——ッ！」

翔馬は白虎が反撃することを予測していなかったのか、戸惑いながら、白虎の猛虎烈風紫電拳に対抗して、ペガサス流星拳を放ち続けた。

「……女のような顔立ちで、随分と荒れ狂うような攻撃をするんだな」

「よう言われるわ」

そして二人の技の力が強くなり、とうとう二人の間の中間時点で技の小宇宙がくすぶ

り始めた。

「こ、これは……！」

「青銅聖闘士の千日戦争……！」

千日戦争——膠着状態に陥るか、双方消滅するかのどちらかになると言われる。

ラズリと水鹿は白虎と翔馬の間に入る隙がなく、ひたすらその情景を見つめていた。

「青銅聖闘士同士の千日戦争なんて初めて見た……！ しかもこんな強力な……！」

ラズリはその力の大きさに驚いていた。二人の青銅聖闘士の中にこんな強力な力があつたのかと。

「千日戦争は実力が拮抗している黄金聖闘士だけのものと思っていたが……！」

ラズリは水鹿の言うことに「いや」と、否定し、言った。

「稀にあるんだよ……普通なら黄金聖闘士より下の白銀・青銅聖闘士は力にムラがあるから、こうして戦ってもこんなことにはなるケースがないだけで」

「そうだったのか……！」

水鹿は白虎と翔馬の力が衝突しているところをじっと見つめた。

お互いの力が同等ならば青銅、白銀構わず千日戦争に陥ることは十分にある。しかしながら、通常ならば、白銀・青銅聖闘士は力にムラがあり、千日戦争に陥ることはそもそもないに等しい。

だが、この白虎と翔馬の二人はそれをやってのけているのである。

「それにしたって、この二人……バカでかい小宇宙してるよね……」

「……ああ」

コクン、とラズリの言うことに水鹿は頷いた。

翔馬はともかく、白虎の中にこんな大きな小宇宙が秘められていたのか、と水鹿は驚いていた。

自分よりも下だから、と気にしていたあの白虎の中に、あんな大きな小宇宙が秘められていたと誰が思うだろうか。もしかしたら、白虎は自身を過小評価しすぎていたのかもしれない。

「青銅聖闘士で……までバカでかい小宇宙してる子ってそうそう居ないんじゃない？」

兄ちゃんも白銀聖闘士だけど、実際はそんなもんじゃないでしょ？」

「……周りからは黄金聖闘士並だとかは言われるけどな」

「やっぱりね」

ラズリは読みが当たったようで嬉しく思ったのか、少し微笑んだ。水鹿は黄金聖闘士並だとかそういう言い方が気に食わない様子であった。

そして水鹿は目をスツと目を凝らして、翔馬と白虎の千日戦争を見ていた。

よく見てみれば、翔馬の方はまだ余裕といった様子だが、白虎はどうやら翔馬の力に

合わせるのに必死になっているのか、険しい表情をしていた。

「……ラズリ」

「？」

「この戦い、千日戦争というには手厳しいものがあるぞ……」

「兄ちゃん……？」

水鹿はコクン、と頷いた。

その時、白虎の力がどんどん翔馬の力に押されていったのである。それだけでなく、白虎の体もそれに耐えきれない様子で徐々に後退していった。

「なっ……！」

「白虎！」

今まで千日戦争に釣り合っていたと思っていた力は、白虎が頑張つて全身の小宇宙を使っていたものだったのだ。

「兄ちゃんっ！」

「そうだな、オレは今すぐ白虎に加勢を……！」

水鹿は見ていられず、すぐさま白虎に加勢しようと二人の元へ走り出した瞬間であった。

白虎の小宇宙が一気に翔馬の小宇宙に押し戻され、そのまま白虎に直撃した。

「ああ——っ！！！！」

「白虎——ッッッ！！！！」

白虎はそのまま吹き飛ばされ、水鹿がそれを抱えるように受け止めた。

「白虎！ 白虎オツ！」

「ぐ、うっ……」

白虎は苦しそうな顔で目を開き、自分を受け止めてくれた水鹿の顔を見た。

「水……鹿……」

「白虎、大丈夫か？」

「うん……翔馬、は……」

「目の前にいるぞ」

白虎は翔馬がいると思わしき方向を振り向いた。そこには涼しそうな顔で悠然と立っている翔馬の姿があった。

「龍星座、お前はやはり小宇宙がでかいだけの素人聖闘士か……」

「……」

白虎は『素人聖闘士』という単語に悔しそうに翔馬を睨んだ。

一方の翔馬は残念そうに白虎を見た。

「昨日よりはやると思っただが……今回も俺の勝ちだ」

翔馬は白虎と水鹿の横を通り抜け、双子座の黄金聖衣の前に立った。

「そんなわけだ。双子座の聖衣はもらって行くぞ——双子座のラズリ——いや、ラピス」
「……………」

翔馬が双子座の聖衣に手を掛けようとした途端、ラズリは再び聖衣の前に立って、両手を広げた。

「この聖衣は聖域にとつても大事なものだ…………… お前に渡すわけにはいかないぞ！」
キツとラズリは翔馬を睨んだ。しかし、11歳程度の少年の睨みは少年には通じないのか、すぐに乱暴に払いのけた。

「うわっ！」

ラズリはそのまま地面に転倒した。

そしてその間に翔馬に双子座の聖衣に手を掛けさせることを許してしまった。

「しまっ……………」

ラズリが起き上がった時には既に時遅し、であった。

翔馬はすでに双子座の聖衣に手を置き、それをそつと拾い上げ、そこにあった聖衣箱に入れていた。

「じゃあな」

そして、翔馬はそのまま聖衣箱を抱え込み、去って行った。

「ま、待つ……」

ラズリが翔馬を追い掛けて走り出した瞬間、肩を誰かに引かれて、そのまま止まった。後ろを振り向くと、そこには教皇が冷静な井出立ちで立っていた。

「……ろ、老師!? というか教皇!」

ラズリは何故ここにいるんだと言わんばかりの表情で教皇を見た。教皇はラズリの表情からそれを読み取り、答えるように言った。

「双児宮から妙な小宇宙を感じたから来てみたのだが……ラピス——いや、今はラズリ。お前と翔馬とやらと……あの二人だったのだな」

教皇は後ろを振り向いて、水鹿と白虎を見た。その様子から、白虎がまた翔馬と戦いを繰り広げたことが伺えた。

ラズリは申し訳なさに、その場に教皇に跪いた。

「申し訳ありません! 俺……いや、私というものがありません……自分より下の青銅聖闘士にこんな……こんな苦勞を……! ただ見ていることしかできなかった自分が憎いです……!」

「そういうことを言うな。顔を上げろ」

教皇は跪いたラズリは教皇の言われるがままに顔を上げた。

「戦いというのは、互いの運命が引かれあつて織り成すものだ。白虎と翔馬はそれに

従っている」

「……」

「だから気にすることはないのでらう？　白虎」

教皇はその旨を確認しようとして、白虎の方を振り向いた。白虎は『はい』と微笑みながら頷いた。教皇もそれに微笑み返し、再びラズリの方へ顔の向きを戻した。

「結果、双子座の聖衣が奪われてしまったが……案ずるな。むしろ一緒に奪い返すぞ」

「は、はい……！」

ラズリは表情を明るくし、頷いた。

「それと——お前のことも話さなければならんな。今日の夕食は、白虎達と一緒に食べるか？」

「はい。予定はありませんので」

「なら決定だな」

教皇はポン、とラズリの両肩に自分の手を置いた。

「白虎も大丈夫か？」

「な、なんとか……」

「よし、今日の夜、例の食堂に集合だ」

「はい！」

ラズリ、水鹿と白虎はコクリと頷いた。白虎に至ってはまた教皇と夕食が食べられる、ということでも嬉しく思えた。

05：「ラズリの正体」

（ん。あの時の人や……）

夜、白虎は教皇に言われた待ち合わせ場所に向かい、皆より一足先に着いていた。そこで、一昨日の夜、ラーメンの早食い記録を更新していた青年が白虎の隣に座ったのである。

前回は30分の内にラーメン25杯という聖闘士の自分たちから見てもとんでもない記録を編み出した人物。今回はどんな記録を編み出してくれるのだろうか。少し期待していた。

「マスター、炒飯超大盛り」

「おうよ。用意しておいたぜ」

そこにドン、と置かれたのは——言葉では言い表せないぐらい大盛りな炒飯であった。だが、人間が食べ切れる量でないことは確かだ。

（す、す……って、もう食べとる!?!）

白虎がその量にびっくりしている間にも、青年はバクバクと炒飯をその胃に納めていった。

(す、すごいなあ、この兄ちゃん……食べるの凄いい早い上に、以外と一口大きい……)

青年はそのペースを落とさない。本当に胃がブラックホールなのだろう。顔もどこかしら涼しそうで、美味しそうに食べている。

しばらくすると、青年はふう、とひと息ついて、用意されていた水を一口飲み、白虎の方を見た。白虎は思わずビクツと肩を震わせた。

(な、なんやろか……)

自分が先ほどから青年の食べっぷりを凝視しすぎたのか。そして、それにイライラしているのか。しかし、その表情は深く帽子を被った顔では全く分からない。

ビクついている白虎に青年は話しかけた。

「……ねえ」

「は、はいっ!」

白虎は声を裏返しながらも、返事をした。

(ど、どないしょ……! あ、謝らなあかんかな……!)

ドキドキバクバク、と心臓が唸る。どんなことを言われるのか、どんなことで責められるのか。

しかし、青年の口から出たのは、白虎が全く予想だにしなかったものであった。

「君、龍星座の白虎?」

「は、はい……つて、え？ ええっ!？」

白虎は青年の口から出た言葉にびっくりして、思わず、座っていた椅子から転げ落ちそうになった。

「な、何でわいの名前……」

「やっぱりか。噂以上の女顔……」

青年は『ふう』、と息を吐いた。そして、帽子を取って、その顔を見せた。

(……わあ)

青年の顔も、また、端麗で美しかった。女性的な美しさと男性的な美しさも兼ね備えた——要するに中性的は美しさ。髪の毛は教皇と同じぐらいサラサラなストレートヘアーだが、この青年はそれを後頭部で一つにまとめていた。

(あんな大食いな人がこんな綺麗な兄ちゃんやったんか……)

白虎は思わず見惚れてしまった。

青年は少し照れ臭そうに目線を逸らした。

「こ、こういう場所ではあまり顔を晒さないから……」

「あ、ええつと……べ、別に帽子、被ってええよ!」

「う、うん、ごめん」

青年は即座に帽子の中に髪の毛を入れて、再び同じように帽子を深く被った。

「そ、それで、何でわいの名前を？」

「……じゃあ、私も名乗っておくよ」

ふう、と息を吐いて、青年は名乗った。

「私は黄金聖闘士、魚座のジエイド。君と同じ女神の聖闘士。だから君のこと知っててもおかしくないでしょ？」

「ご、黄金聖闘士……!?!」

「うん」

(さ、更に予想外なこと……)

白虎はぼりぼりと頬を搔いた。

この大食いの青年があんな綺麗な顔をしていて、かつ、自分と同じ女神の聖闘士——しかも聖闘士の中でも最高位につく黄金聖闘士。

(おったまげたなあ……)

白虎は『はあ』と息を吐いた。

「ついでに言っておくと、君のことは山羊座のディアンから聞いてただけ……災難だったね」

災難だった、というのは白虎が龍星座の聖衣を探す際のあの事件のことを指しているのだらう。

ジエイドは同情するかのようになり、ポン、と白虎の右肩に自分の手を置いた。その顔から察するに、ディアンは普段から、今回のようなことを起こしてはっからしい。

「あ、ああ……ありがとうございます」

白虎は何となく礼を言った。

「ディアンからはキツク言っておいたけど……また何しでかすか分からないから気を付けておいてね」

「は、はい……」

座っているのに、思わずぺこりとお辞儀してしまいそうになった。

(ジエイドさん、良い人やなあ……)

せめて大食いなところさえなければ、と白虎は一人苦笑した。

しばらく待つっていると、水鹿とラズリが食堂に入室してきた。

「あつ、二人とも！」

「待たせて悪いな」

「やつほーい、兄ちゃん！」

ラズリはブンブンと手を振り、水鹿はその横で小さく『よっ』と片手を挙げていた。

「老師は？」

ふとした疑問を投げかけた白虎の左隣に水鹿は着席しながら、それに答える。

「教皇はもう少ししたら来るって。で、良ければその間に何か食べても良いってさ」
「よっし、分かった！ あー、お腹ペコペコやでー！」

表には出さないが、先ほどからジェイドが食べている炒飯の匂いを嗅ぎ続けているせいで、白虎の空腹がどんどん増進されていた。このまま先に食べたかったぐらいだ。

「……そして、時に白虎よ」

「ん？」

「お前の右隣に座っている者は、確か一昨日……」

「ああ、ジェイドさんのこと？」

白虎は体を若干後ろにずらし、水鹿にジェイドの姿を見せた。水鹿はジェイドの名を耳にした途端、目を見開き、驚いた様子で白虎に迫った。

「ジェイドって……魚座の黄金聖闘士か!？」

「らしいで？」

「薔薇食べながら戦闘するとかいう噂が流れているらしいが……」

「んな噂流れとるんかい！」

（なんちゅー噂やねん！）

白虎はジェイドはそんなことしない、と思いつながら、チラリと自分の右隣を見た。ジェイドは水鹿に向かって言った。

「特にチョコと薔薇の組み合わせは絶妙だよ」

「やっぱり食べてるんだ……」

水鹿は噂の真偽が晴れてさっぱりしたのか、顔がどこかしら明るくなった。

(……な、なんて人)

一方の白虎は想定外すぎるジェイドの答えに内心ガクツときていた。そして、白虎の中のジェイド像が色々崩れた気がした。そして白虎は机の上に突っ伏し、項垂れた。

ラズリは『ジェイドが薔薇を食べるとか、いつものことだよ』と苦笑しつつ、水を一口、口の中に含んだ。

「遅れてすまな……つて、何だ、この状況は」

教皇が来た時には、白虎が項垂れ、水鹿がそれを宥めて、ラズリがジェイドと一緒に和気あいあいと話していた。教皇はちろつとジェイドを見て、言った。

「そして、ジェイド。お前は呼んでいないはずだが……何故当然のように白虎の隣に座っている？」

「まあまあ、そこは気にしなくて良いじゃないですか」

ジェイドはぐびぐびと勢いよく、頼んだオレンジジュースを喉に突っ込むように飲んだ。

その横で白虎が教皇に対して声を出した。

「老師……」

「ん？」

「ジェイドさん、薔薇食べるって……」

「……ゲテモノも食うぞ」

「……」

白虎は更にジェイドのイメージが書き崩されて、負の小宇宙を漂わせていた。

ジェイドは少し苦笑しながら、教皇に聞いた。

「で、何故食堂に皆集まってるんですか？ プチパーティーですか？」

「何がプチパーティーだ。それは教皇の間でやった方が良さだろう」

「そこじゃないですよ、突っ込みどころ」

「ああ。真面目に答えると、ラズリについて話そうとしようと思ってな」

水鹿に突っ込まれて、教皇は言い直した。ジェイドはラズリを見て、『ああ』と納得したように頷いた。

「確かに、これが双子座だって言われても『えっ？』ですもんね」

「年上を『これ』扱いするな、ジェイド」

ラズリはジェイドに『これ』扱いされ、不機嫌そうに頼んだラーメンを啜っていた。

「ごめんごめん、つい。何かその姿だとどうしても……」

「あー、もう！ 教皇！ さっさと話しましょう！」

「……そうだな……」

教皇はふう、と水を飲み干し、空になったコップを机の上にコトン、と置いた。

メンバーの間にドキン、と緊張が走った。机の上で項垂れていた白虎も起き上がり、話に集中した。

「まず、ラズリが聖闘士であり、双子座の聖闘士——ということは分かっているな」

「はい」

「左様で」

白虎と水鹿は昨日の翔馬とラズリのやり取りを思い出し、頷いた。

「ラズリは二年ぐらい前——といっても、水鹿。お前が聖闘士になる前だったかな」

「オ、オレが聖闘士になる前ですか……」

水鹿が自分のことを指差しながら言えば、教皇は『うむ』と頷いた。

「ラズリはその時に聖闘士としての力を失い、このような姿になったのだ。例の事件によつてな」

「例の事件……?」

「というと、アレですか」

キョトン、としている白虎の横で、水鹿は自分の知っている範囲で例の事件について説明した。

「かつて聖闘士だった力の強い男が黄金聖衣を狙って、聖域を襲撃。だが、その際聖衣は奪われなかった……ってやつですか」

「ああ、大体そんな感じのことだな」

こくり、と教皇は頷いた。

「で、そのこととラズリの力がどう関係あるんですか？ 失くすにしてもどうやったら

こんなことに……」

「そうだね……ちよつと信じられないかもしれないけど」

ラズリは水鹿の疑問に答えるように話し始めた。

——その頃はまだ、こんな姿ではなかったんだよ。そうだね、ここにいるジエイドよりも身長はでかかったんじゃないかな。それで、黄金聖闘士の中でも強力な聖闘士だった。こうして自負するのもおかしいけどね。

で、周りよりも年上なこともあって、青銅白銀聖闘士に留まらず、黄金聖闘士の指導にもあたってた。特にその頃は元々いなかった蟹座と射手座の聖闘士に加えて、乙女座の聖闘士と獅子座の聖闘士も失踪したから、余計に大変だったよ。あと、牡牛座の人も俺より年上で高齢だったけど、辞退してたかな。そんなこともあって、聖闘士の指導も

大変だった。

そんな明るる日、その日は突然やってきたんだ。

聖域に例の男がやってきた。どうやら、聖域に知り合いがいて、会いに来たんだって。最初は皆、ただの来訪者だと思つて聖域を案内していた。勿論、疑うとかそういうことはしなかつたわけ。ただ、俺だけは小宇宙で感じ取つたんだ。『ああ、こいつ、どこかおかしい』ってね。でも、それも気のせいだと思つて、皆に案内させてた。

——この時にもつと勘を巡らせていれば良かったって、今、後悔してる。

で、いつも通り黄金聖闘士の皆と鍛練していたのだけれど、十二宮の方から一人の雑兵の悲鳴が響いてきた。あまりにもその悲鳴が痛々しかつたもんだから、俺は鍛練を放つたらかしにしてすぐに十二宮へ向かつたんだ。勿論、鍛練は各個人に任せてね。で、向かつてみると、雑兵達が酷い怪我を負つて白羊宮へ向かう階段前で倒れていた。そして、まだ話せる状態だった一人の雑兵に、詳しい話を聞いた。どうやら、例の男がその姿を露わにし、周りの雑兵達を追い払い、十二宮へと突入していったらしい。

その話を聞いた俺は、当然その後を追うように十二宮へと突つ走つたよ。ついでに言つておくけど、その時の俺は聖衣を纏つてなかつた。

で、結局男に辿り着いたのは双児宮——自分の請け負つてる宮だった。その時の男の小宇宙は黄金聖闘士とタメを張れるぐらい大きくて、そして——黒い輝きを放つてた。

勿論、俺は捕まえようとして攻撃をしかけた。でも、その男は俺の攻撃を片手で防いだ。そのあまりにも衝撃なことに俺は思わず硬直してしまった。『こいつ……俺の攻撃を片手で防いだ……!?』ってね。

そしてその後は技を使わずに肉弾戦も仕掛けたんだけど、それでも男にダメージを与えられなかった。まるで俺の攻撃の仕方を知っているののように、男は全て避けきっていた。次に男のターンになると、逆にこちらが避け切れずに攻撃を受けた。黄金聖闘士の速度は光速っていう光の速さが基準になっているけど、あいつはそれに達してて、超えていた。あまりにも速かったもんで、避け切ることができなかつたんだ。

ある程度俺が男にやられた後——男は昨日の翔馬っていう天馬星座の聖闘士のように双子座の聖衣に手を掛けた。俺は止めにいった。

——ここで俺はこの姿になった。

まず、双子座の聖衣を守ろうと男に触れた瞬間、突然己の小宇宙が吸い取られていく感覚に陥った。すごい不思議な感覚だった。その時、男がニヤリと不気味な笑みを浮かべて、俺の手を掴んで、俺の小宇宙を吸収し始めたんだ。ある程度吸収されると、俺の体にも異変が起こり始めた。どんどんどんどん若返って、身長も低くなり始めたんだよね。

こりゃいかん、と思いつつも相手の力が強すぎて抵抗できなかつたから、結局この姿

になるまで小宇宙を吸収され続けた。

それで気付いた時には男はいなくなっていた。双子座の聖衣は無事だった。

「その後、男に関する調査が続いたけど、足取りが掴めずに、この状況になった。この姿になり、小宇宙が修行前まで落ちぶれた俺は聖衣をまとえず、名も偽って普通の少年を装ってるわけさ」

「……名を偽って……？」

「ああ、そうだよ。俺の本当の名前はラピスって言うんだ。ラズリは俺が幼い頃に死んだ双子の弟の名前。この際だから弟の名前も使って、周りに正体も隠そうかと思ったんだ」

ラズリ——いや、ラピスは水を一口飲んで、一息吐いた。

「で、もう少し聞きたいこととかない？」

白虎はブンブンと首を横に振った。

「い、いえ！　ここまで話してくれたらもう十分かと……」

「そっか」

ラピスはニコツと微笑んだ。

「それと。今まで通り接してくれて良いよ。そっちの方が俺もやりやすいから」

「はい……じゃなくて、うん……」

白虎はコクン、と頷いた。しかしながら、ここまでくるとどうしても敬語を使わなければならぬ気がしてならなかった。

「……」

一方の水鹿は顎に手をあてて、今の一連と話を翔馬と関連づけていた。

水鹿のその様子に気がついた白虎は、水鹿の顔を覗き込み、話しかけた。

「水鹿？ 何かあったん？」

「……いや」

水鹿は神妙な顔つきで、『あくまで憶測でしかないんだが』と、話し始めた。

「翔馬の狙いも双子座の聖衣——いや、射手座の聖衣も狙っていたから黄金聖衣かもしれないな」

「それがどないしたん？」

「いや——……」

水鹿は氷が溶け掛けている水を一口だけ口にして、飲み込んだ。

「もしかしたら、今回の話の男と翔馬が関係あるんじゃないかと思ったんだ」

「……どういうことや？」

「ああ。翔馬と今回の話の男。妙に目的も一致していて、何より二年ぐらいの空白もあるからな」

「……」

(言われてみればそうやな……)

白虎は翔馬のこととラピスが話した男について振り返ってみた。

ラピスが話した男の目的は双子座の黄金聖衣で、翔馬も昨日は双子座の黄金聖衣を狙っていた。

(いや、まさかな……)

今、ここにいるメンバー全員が思ったのである。

——翔馬はその男に良いようにされているのかもしれない、と。

「双子座の聖衣……よくやったな、翔馬」

「……はい」

「射手座の聖衣に続き双子座の聖衣まで——ここまで優秀なお前のことだ。次もやってくれるな?」

「……仰せのままに」

「——フツ、期待しているぞ」

翔馬が跪いている目の前で、ニヤリと怪しい笑みを浮かべている、黒い長髪の男。

この男が翔馬に黄金聖衣を聖域から奪わせている男——クオーツである。

「女神が復活するためにはお前の力が必要だからな、翔馬」

「……………はい」

翔馬はギユツと足に力を入れた。

これで良いんだ、と翔馬は自分自身に言い聞かせていた。

これは女神のためだと……………。

06：「差し伸べた手」

「次は獅子座の聖衣を持ってこい」

クオーツはそう良いながら、長い黒髪を揺らした。

「獅子座……」

「そうだ。お前の師匠の聖衣だ。お前ならばいけるだろう？」

クオーツはそつ、と翔馬の肩に触れた。翔馬はそれに答えるかのように、コクンと下に首を振り、そのまま俯きながら答えた。

「……はい」

「お前は強いからな。邪魔が入ってもきつとやってくれと思うているぞ」

「……ありがとうございます」

（しつかりと……やらなければ……）

クオーツの期待に答えて、女神を助けなければ。翔馬の頭の中はそのことはいっぱいであった。

その一方で、妙に白虎のことが気がかりだったのが事実であった。

（……龍星座）

今度も双子座の聖衣の時のようにまた邪魔してくるのだろうか。

だが、自分はクオーツの言うとおり、強いのだ。強いことから、気に留める必要も感じ取れない。また邪魔してきたら倒せば良い。

(……しかし)

しかし何故だろうか。どうしても、白虎の存在が気になって気になって仕方がないのである。

毎回毎回邪魔してくるから、だとか、自分の前に現れるから、だとか、ましてや自分の使命の対象範囲内というわけでもない。

(……)

翔馬は複雑な心境を抱きながら聖域へと向かい始めた。

双子座のラピスの話を聞いてから一週間が経った。

水鹿の言っていた、『翔馬と例の事件の男の目的が一致している』『もしかしたらその男に翔馬が利用されている』——この二つがここ一週間でも白虎の心の中で引っ掛かっていた。

(確かに……自分の意志でやってるとしても……わいと同一年や。余程の理由があるかもしれないけど……)

どうしてもその余程の理由というものが思い浮かばない。白虎ぐらいの年で黄金聖衣を奪つてまですることなど、実際は無いに等しい。

だとしたら、誰かに言われて集めているといった方が過言ではない気がするのだ。翔馬ぐらいの年頃ならば、この方が自然だと思われる。

(どちらにせよ、聖域から聖衣奪うつちゅーこつたあ、あかんことやし、放つておくことも出来ん……)

と、思うと同時に、白虎は翔馬をどうにかしたいと思い始めた。

確かに、誰かに言われて黄金聖衣を集めているのだろうかもしれないが、それはいけないことだと。誰かに言われていたとしても、素直にそれを聞いてはならないと。

(それに……)

白虎はここまで考えて一番の疑問が浮かんだのだ。

(もし、黄金聖衣を集めているとして、何がしたいんや……?)

天秤宮の前で白虎は目を細め、癖つ毛のある髪のを風に靡かせながら空を見上げた。

「と、すると、牡牛座、蟹座、獅子座、乙女座、射手座、水瓶座が事実上欠員、と……」

「……まあ、そうなるな」

教皇と水鹿は天秤宮でお茶を飲みながら聖域事情について話していた。

そこで分かったことなのだが、黄金聖闘士は事実上、半分以上が欠員となっていた。牡牛座は二年前にはすでに引退していることが、双子座のラピスの話から分かった。水瓶座も自分の師ということで把握していた。射手座は聖衣がなく、教皇みたく師から弟子へと受け継がれることも出来ず……。

残りの蟹座、獅子座、乙女座は随分前に姿を消して、今に至る。正当な弟子もおらず、また、候補者と言える者も出ない。聖衣だけが聖域にドン、と構えている状態であった。

「黄金聖闘士は時代によつては欠員があるとは聞きますが……」
「うむ。流石にここまで欠員だと、昔のことを思い出すな」

教皇はズゾ、とお茶を啜り、湯のみをコトリ、と置いた。

「どちらにせよ、黄金聖闘士の枠が全て埋まったところで、現状だとどうにもならんことは確かだ。大きな戦いの兆候も見られんからな」

「はあ……」

（随分あっさりしてるなあ……）

黄金聖闘士が半分もないのに、と水鹿はお茶を啜りながら思った。

教皇ならもう少しこのことについて焦っても良いのでは、と心の底から思う。しかし、教皇からしたら黄金聖闘士が全員いない時期も過ぎたこともあり、あまり焦って

はいないのかもしれない。

(まあ、確かに黄金聖闘士が出勤するような大きな戦いの前兆はないしなあ……)

自分が真面目すぎるだけか。水鹿は『ふう』とため息をついた。

すると、天秤宮の外に出ていた白虎がこちらに戻ってきた。

「おや、白虎。もう良いのか？」

「うん。ちよつと考え事しとっただけやし」

白虎は『よつこらせ』と水鹿の隣に座った。

「珍しいな、白虎が考え事なんて。やっぱり翔馬のことか？」

「……うん」

水鹿に言われて、白虎はこくん、と頷いた。

「最初の、アイツのことな、単なる聖衣泥棒だと思ってるん」

「うん」

「でもな……ただ単に泥棒やってるとは思えんなってきた」

「……」

「アイツの目を見た時な、分かってもうたんよ。今まで友達がいなくて、一匹狼だったんじゃないかって。それだけならここまで考えへんかった。そういう奴だつて割り切ってた」

「……………そこで先週のことか」

「うん……………」

白虎は目を伏せて、机の板を見ながら話した。

「わいな……………アイツのこと、何とかしてやりたいんよ。何れは対立するかもしれん。でもな……………でもな！」

バツと白虎は伏せていた目を顔ごと上げた。

「分かり合えないまま対立するよか、そうした方がマシだつて、わいは思うとる！ 対立するにしたつてな、わいは正々堂々と真つ向勝負したい！ ……自分勝手な意見で申し訳ないけどな」

白虎は再び目を伏せた。いきなり声を大きくして、少し気まずかったのだろう。

「……………老師」

「……………ああ」

「しかし、水鹿と教皇はそれを気にしておらず、むしろ目を合わせて、コクンと頷いた。よし、だったら、何とかするしかないな。正直オレも気掛かりだったからな」

「水鹿……………」

「ああ。これからは調査も兼ねて、お前のやり方で翔馬を何とかするんだ、白虎」

「老師まで……………！」

白虎は水鹿と教皇を交互に見た。二人は白虎に向かって、そつと優しく微笑んでいた。白虎の背中を押すように。

「……ありがとう……ありがとう！」

チャームポイントの八重歯を見せつけるような満面の笑みを白虎は浮かべた。

「では、早速翔馬の足取りを調べなければならんな」

教皇はサツと立ち上がり、服を整えた。

「翔馬の足取りに関して私は私ともう一人、情報通の者がいるからな。任せてくれ」

「老師……いつもすみません……」

「可愛い弟子とその友のためだ。それにこのことは今後の聖域に関わるからな」

教皇は柔らかに微笑んだ。白虎はその微笑みに何となく安心感を覚えた。

「では、私は教皇の間に戻って早速調べるとしよう。では二人とも、頑張ってくれ」

「はーいー！」

「本日はありがとうございました」

教皇が片手をヒラツと軽く挙げると、水鹿と白虎はぺこりと軽く会釈した。

「にしても聖域にんな情報通の奴おったかな……」

白虎と水鹿は例の翔馬も来ないので、特にこれといってやることなく、教皇が去っ

た後も天秤宮で待機していた。

そして、白虎は教皇が言っていた『情報通の者』について考えていた。何度も思い返してもどうしても思い当たるような聖闘士がいなかった。

「敵の足取りまで調べるって只者じゃないやろ……」

「うーん……あつ、そういえば」

水鹿は思い出したように声を上げた。

「何か知っておるん？水鹿」

「ああ、聞いたことがある。聖域随一の情報通の聖闘士をな」

教皇の間の入口付近、少し右に曲がってそこにあるドアを開くと、本棚が密集している部屋があった。そのまま奥に行くと、数台のパソコンがある。そこには、その数台のうちの一つを占領しているといっても過言でない聖闘士の姿らしきものがあった。

教皇はそこまで行くと、その姿にお茶を差し出して、話しかけた。

「海鳥。いつもすまないな」

「お任せ下さい！ 僕は好き好んでやっているの！」

その姿——海鳥と呼ばれた青年は大きな丸メガネをクイツと上げて、教皇に対してニコツと満面の笑みを浮かべ、答えた。

「さすが教皇補佐の星座、祭壇座だけある。頼もしいな」

「えへへ……」

教皇に褒められて海鳥は得意げにしつつも、照れたように頬を朱に染めた。

海鳥は『お座りになってください』と椅子を教皇に用意した。教皇は『ありがとう』と言いながら、ゆっくりと椅子に腰をかけた。

「確か今回は天馬星座の聖闘士の少年、翔馬さんについてでしたね」

海鳥はパソコンのUSBメモリーを取り出し、読み込ませていた。そのUSBメモリーの中に翔馬の情報が入っているのだろう。

教皇はその仕事の速さに大変びっくりした様子で海鳥に確認した。

「まさか、もう調べてあるのか?」

「はい。ちよつと前に姿を見かけて気になったので」

海鳥は『えーと』と、パソコンのマウスやキーボードを駆使してその情報を引き摺り出した。

「天馬星座の翔馬。年齢は13歳……といっても、生まれ年が白虎さんより一年早いで、同じぐらいといっても翔馬さんの方が年上ですね。生まれ星座は射手座です」

「良いぞ、続けてくれ」

「はい。師には獅子座のアンバー……って、アンバーさんのお弟子さん!」

「！」

二人は目を見開いて、画面に映るその名を目に映した。

獅子座といえば、現在行方不明で、事実上欠員状態である。

「そうか、あのアンバーの弟子か……どうりで強いわけだ」

教皇は酷く納得したように頷いた。

アンバーは黄金聖闘士としては優秀な逸材だった。翔馬はそのアンバーに育てられたのだ。

海鳥も酷くびつくりしたが、なんとか立て直して続けた。

「修行地はこのギリシャ聖域。天馬星座の聖闘士になった後、すぐに姿を消した……」

「と、いうと……」

「あ、はい。翔馬さんが11歳——例の事件の後ですね。比較的幼年で正式な聖闘士になってます」

「なるほどな……」

教皇は例の事件と翔馬を掛け合わせた。聖闘士になった後に例の事件の男に誘われていたとすれば、辻褄が合う。

「それ以上何か無いのか？」

「うーん……あ、そうだ！」

海鳥は思い出したように翔馬の情報をすぐに仕舞って、すぐにフォルダを探し出した。

「例の事件の男についても調べてみたのですが……」

海鳥はマウスでポチツと例の事件の男について調べたことが入っているフォルダを開き、ページを一個ずつ開いた。

「——ッ！」

教皇は思わずそこに映った文字と画像に目を開き驚いた。

「祭壇座の海鳥？」

「そうだ。白虎も聞いたことがあるだろう？」

「あー……うん！　せやな！　修行時代、老師関係でよう会っててん！」

白虎は『ああ！』と思いついたように、頷いた。

代々祭壇座とは、教皇補佐を務めることを仕事にしている白銀聖闘士で、裏でよく教皇の代わりに外部と交渉したりと教皇の代理としても活躍している。海鳥はその祭壇座なのだ。

教皇の代わりというからには、コミュニケーション能力の高さ、語学力の高さはもちろん、最近はいンターネットなど便利な物も出てきたが、そのインターネットを通して

の情報収集ができるかどうかにも重視されてきている。海鳥はそれをすべてクリアし、祭壇座に就いたのだ。

本人の性格については、優しく明るいものの、おちよこちよいでドジな部分があったりと、戦いにおいては不安な面が残るが——白銀聖闘士なので、そこはなんとかなるだろう。

「でも、海鳥さんがそこまで凄い人とは知らなかった！ そっかー！ ものっそい情報通なんやな！」

「ああ。もしかしたら、天秤座の聖衣も海鳥によつて見つかるかもしれないな」
「うん！ そうなつたらええな！」

白虎はニコツと笑いながら頷いた。

海鳥により天秤座の聖衣が見つかれば、それ以上のことはない。

「確か射手座の聖衣も海鳥が調べていたと聞いた。もう天秤座の聖衣の行方を探していたりしてな」

「あはは、海鳥さん、仕事だけは速い方やかな」

二人はそうして天秤宮で談笑していた。

このまま何事もなく談笑できれば良かったのだが、そうもいかなかった。

（——っ！）

二人はバツと顔を上げた。

気付けば獅子宮から感じる不吉な小宇宙が、天秤宮まで漂っていた。

「白虎……またこの展開らしいぞ」

「……んなこと、分かっとる」

白虎は水鹿の言うことに、こくん、と頷いた。

二人はその場を立ち上がり、天秤宮から下る階段に地を付け、走り始めた。

獅子宮に着いた時には二人の予想通り、真っ白い天馬星座の聖衣を纏った少年——翔馬の姿があった。

幸い獅子座の聖衣を探している最中なようだった。

「翔馬……！」

「……」

翔馬は自分の目の前に立つ白虎を黙って見つめた。白虎も翔馬を見つめた。

(相変わらず淋しそうな目エ、しよるな……)

相変わらず赤みがかかった瞳の色に似合わない目の淋しそうな雰囲気。白虎はそれが尚更淋しさを増していたように見えた。

翔馬はキツと白虎と水鹿を睨みつけて、ボソツと呟くように言った。

「何の用だ」

「それはこつちの台詞だ。オレらは天秤宮から十二宮を出る際にここを通っているだけなんだが」

その呟きに応答したのは水鹿であった。水鹿は『やれやれ』と溜め息を吐きながら翔馬をチラリと見ていた。

(なるほど、な……)

白虎が言っていた、『友達がいらない、一人ではないか』というのは確かに本当かもしれない。顔を見てすぐに分かった。翔馬の顔は最近笑ったような形跡もなく、常にこんな表情をしていると感じ取れる。

(せっかく良い顔を持つているのに……勿体ない)

そして、とんでもなく言うことを聞かなさそうな頑固な表情をしている。

水鹿はコツン、と聖衣のヒールを鳴らして、白虎の目の前に立った。

それにびつくりした白虎は思わず声を上げて水鹿の名を口にした。

「す、水鹿!?!」

「安心しろ。半分の力は出さん」

スツ、と翔馬の姿を見据える。

(……これで十分だ)

水鹿はザツと右拳を握り、小宇宙と凍気を溜め始めた。

翔馬は不審そうにその姿を見つめた。

「……何をするつもりだ」

「少し冷たいかもしれないが……我慢してもらおうぞ」

水鹿はスツと構え、ボソツと呟く。

「……ダイヤモンドダスト」

その瞬間、水鹿は小宇宙と凍気を溜めた右拳を翔馬に向かって放った。

「！」

（これは……！）

翔馬その拳から放たれているものを目にし、驚きを隠せなかった。

水鹿のその拳から放たれていたものは、キラキラと輝くような塵みたいな氷——いわ

ゆるダイヤモンドダストである。

（っ！）

気付けば翔馬の体はそのダイヤモンドダストによって足から見事に凍っていた。

白虎はそれを見て、何かを感じたのか、水鹿の肩を掴んだ。

「水鹿っ……！」

「お前は獅子座の聖衣の保護を頼む！」

「……………うんー」

白虎は水鹿に言われるがまま、獅子座の聖衣を探し出すために走り出した。

「待て、ドラゴ……………ぐっ!」

翔馬は白虎のことを呼び止めようとした瞬間、水鹿に腹を拳で殴られた。そのままよろけ、しゃがみ込もうにも、足が凍って、固定されているせいでそれもできず、腹をかかえて立っていた。

「き、さまっ……………」

キツと翔馬は水鹿を睨んだ。しかし水鹿は黙って翔馬の顎からアッパーカットをくらわせた。

「ぐはあっ!?!」

「……………んー、白虎よりは強いが、持ち前の敏捷性がなくなるとイマイチだな」

「な、なに、を……………」

翔馬はフルフルと肩を震わしながら、水鹿を見た。水鹿はフツと笑いながら言った。

「今のお前なら白虎でも倒せるんじゃないかと言っているんだ。敏捷性だけなら青銅トップクラスだろうが——あとは何も言うまい」

「……………っ!」

翔馬は凶星を付かれて、顔を顰めた。

「貴様、何者だ」

今のやりとりだけで分析しているなど並大抵の聖闘士ではないだろう。

水鹿は『やれやれ』と溜め息を吐きながら、翔馬に自分の名を名乗った。

「杯座の水鹿だ」

「なっ……杯座って……!」

（確か黄金聖闘士並の実力を持ちながら、勇は勿論、智にも優れ、仁にも優れているという……天才の白銀聖闘士!）

翔馬の心臓がドクン、と跳ね上がった。

翔馬の言うとおり、水鹿は黄金聖闘士並の実力を持ちながら、仁智勇に優れている、天才的な聖闘士である。しかし、水鹿はそれだけでなく、聖闘士になって早々、本来なら水瓶座のアレキ——つまり他界した水鹿の師匠が受けるはずだった任務を、水鹿が一人で受け、それをこなした。黄金聖闘士の一人分の仕事を水鹿はあっさりやり遂げるといって、白銀聖闘士にしては尋常じゃない力もある。

目の前にそんな優れた聖闘士が、立っているという真実に驚きを隠せなかった。

水鹿は翔馬の額を右手の人差し指で、つん、と突いた。

「『何でお前みたいな天才が青銅聖闘士の白虎と行動を共にしているのか』と聞きたげな顔をしているな」

「……当たり前だ。何故だ」

翔馬はグツと再び顔を顰める。

何が目的で白虎と一緒に行動をしているのか、本当に気になっていた。前の双児宮の時も二人は一緒にいたはずだ。

水鹿は『そんな当たり前のこと聞くなよ』と苦笑し呆れながらも、答えた。

「友——いや、真友だからだ」

明るかっただ水鹿の声が、一気に神妙で真剣なものになる。

「……は？」

（真、友——？）

翔馬は目をパチクリとさせて水鹿を見た。

水鹿はフツと微笑みながらそのあとを続けた。

「周りはオレが仁智勇を兼ね揃えた天才と言うけれどな、白虎がいなかったら——きつと、仁智勇の『仁』の部分は欠けていたと思うぞ」

「……どういふことだ」

翔馬は真剣に、水鹿が何を言っているのか分からなかった。水鹿は『そうだな』と、続けた。

「——お前も白虎に関わっていれば、何れは分かるさ」

水鹿は翔馬を突いた右手の人差し指から凍気を少しずつ出し始めた。

「そうそう、お前にもそういう真友と呼べる奴がいるのか？ 見たところ、いつも一人だが」

「……そんなもの、必要ない」

翔馬は目を伏せがちに、声のトーンを低くして言った。

（……こりゃあ、素直ではない天馬星座だな）

そこから水鹿は翔馬の本音をどこか垣間見たような気がした。

水鹿は更に凍気を強めて行った。

「……カリツォー」

ゴソツと水鹿がそうつぶやいた途端、その凍気は弧を描くように翔馬の周りにまとわりつき始めた。

翔馬の周りが一気に凍りついたような気がした——いや、気ではない。本当に凍りついた。

「……っ！」

（なっ……全身の自由が……！）

翔馬は何度も腕や肩を動かそうと試みたが、何をしても動かなかった。

「……しばらくそこでじっとして貰うぞ、翔馬」

「……………！」

翔馬の額に一筋の脂汗が流れた。

翔馬と水鹿がそうこうしているうちに、白虎は獅子座の聖衣を見事に探し出し、獅子宮から処女宮へと続く階段を走り続けていた。

(誰でも良いから……………この獅子座の聖衣を……………！)

青銅の自分が保護すると言うにも、やはり負担がかかりすぎる。黄金聖闘士の誰かに渡しておけば白虎も安心出来るのだが。

(この先の処女宮、天秤宮に黄金聖闘士はおらん……………とすれば……………)

天蠍宮。蠍座のサードが守護している宮がここからだが一番近い。

白虎はキツと処女宮へと続く階段を睨みつけるように見た。

(ちよつと遠いけど……………行くしかない！)

白虎は天蠍宮向かって猛ダツシユで走り出した。

やっと、処女宮を抜けたところで白虎は息切れを起こしていた。

猛ダツシユで走り過ぎたのだろう。青銅とはいえ、聖闘士がこれではこの先の任務に耐えられる気がしない。

(あとは天秤宮通るだけなはずなんやけど……)

処女宮から天秤宮にかけてに？がっている階段を見た。

いつもなら何となく上っている階段が、この時に限って自分に対する試練として、待ち構えているように見えた。

(……でも、上るしかない……)

しかし、白虎はどうしてもその先を上る気が起きなかった。

(どないしたらええんや……)

階段を見つめた。

テレポートが出来れば苦労しないのだが、この十二宮、女神の小宇宙がなんとかやらで出来ても出来ないという事実がある。

(つて、何をうだうだしとんねん、わいは！ さっさと行かな！)

白虎は疲れたからといってうだっている自分に対し、いかん！と思いつながらその足を進めた。

しばらく進むと、とある黄金聖闘士の姿を見つけた。

その姿はショートカットの金髪で、どことなく特徴的な切り目に、剃った眉の上から丸く描き直された引眉。聖衣は肩の上にならずしりと構えた角が特徴的な牡羊座のものだった。

白虎はすぐにピンと来たのか声を上げた。

「……アンタ——玄夢！ 牡羊座の玄夢か!？」

「おおっ！ その話し方と顔つき、やっぱり白虎かあっ！」

二人は久しぶりだ、と言った様子で笑い合った。

玄夢は昔はよく五老峰に来ており、白虎とよく話してくれた。黄金聖闘士になった途端、滅多に会えることはなくなってしまったが——今、こうして会えた。

「前に一度見かけたけど、立派な聖闘士になっちゃって！ このこのっ！」

「へっへーん、驚いたやろ？」

白虎が得意気にしていると、ふと、玄夢は白虎の側に置いてある獅子座の聖衣箱が気になった。

「ところで白虎。そこにある獅子座の聖衣箱は何だい？」

「あっ……えつと……実は……」

白虎は先ほど獅子宮で起こった出来事を話した。

聖衣泥棒（翔馬）がこの獅子座の聖衣を狙って聖域に来たこと、また、今現在、その聖衣泥棒の足取を水鹿が止めていること。その際に獅子座の聖衣の保護を任されたこと——話せることは全て話した。

玄夢は白虎の話を通り聞くと、『よし』と言って、獅子座の聖衣箱をひよい、と拾い

上げた。

「げ、玄夢？」

「俺は聖衣修復師だ。聖衣の保護なら任せておけ！」

「……………うん！　ありがとなー！」

白虎はニコツと笑いながら、『そういえばそうやったなあ…………』と思い出していた。

玄夢は聖域きつての聖衣修復師で、聖衣のことなら周りのことより広く、そして深く知っている。また、修復の腕もかなりのもので、信頼性は高い。

「使われていない黄金聖衣を回収したいと思っていたから、良い機会だ！　なんかあつたら宜しくなー！」

「こちらこそ！　おおきにーっ！」

（よ、良かった、あそこに玄夢がおつて…………）

玄夢の様子を察するに、多分天秤宮の先に向かう予定だったのだろう。

獅子座の聖衣が邪魔にならなければ良いが。

（あとは、持久力。わいはもうちよい付けなあかな…………）

今回の件でやつと持久力のなさが露呈した気がして、白虎は悔しかった。

「さて、と。帰らな帰らな……………」

（……………ん？）

白虎はふと、妙な小宇宙を感じ取った。

「……………」

(なんだ、この小宇宙は…………)

水鹿は獅子宮で翔馬が逃げないように見張っている中、突如として妙な小宇宙を感じ取った。

最初は気のせいであろう、とは思ったが、その小宇宙は徐々に大きさを増していき、気のせいでは済まされないほどになった。

「……………」

気のせいか翔馬の表情も妙なものになっていった。少しだけ怯えているような——そんな雰囲気。

そして、それは突然やってきた。

最初は誰かがどこかで技の練習をしているのかと思っていた。しかし、それか翔馬に向かつて放たれた時に一気に確信に変わった。

「翔馬アツ！」

「……………」

水鹿は技を受けた翔馬のところに駆け寄り、思わず手を貸した。

翔馬の体を支え、呼びかける。

「おいっ！ 大丈夫か！」

「……っ！」

翔馬はお前の手は借りないと言わんばかりの表情で、水鹿を自分から退けた。

「無理するな！ 強がつてんの丸見えだぞ！」

「だま、れ……！ 俺は強がつてなどいない……！ ……っ！」

ヨロヨロ、と翔馬は足をふらっつけながら立ち、技が放たれた方へと向かおうとしたその時であつた。

「行かせへんよ」

獅子宮に響いた聞き覚えのある訛り口調と甲高い声。

水鹿と翔馬は思わず声のした方向へと振り向いた。

「白虎っ！」

「龍星座……！」

そこには獅子座の聖衣を玄夢に預けた白虎が獅子宮に戻ってきていた。

二人がびつくりしている間にも、白虎は静かに一步一步、翔馬へと近付いていった。

「翔馬——こんなこと、もうやめよう？ 聖闘士が黄金聖衣奪うなんて馬鹿げたことだ

と思わへん？」

「……………」

翔馬も内心はそう思っていたらしく、凶星を突かれたような表情で白虎を見た。

白虎もぼそりと「やっぱりな」と呟いた。

(わいは、翔馬——アンタをどうにかしたい。だから……)

白虎はコクン、と頷いてスツと翔馬の前に手を差し出し、言葉を放った。

「こつちにおいで」

ただ、その一言だった。

たったの一言だが、翔馬には何故だかその一言がずっしり来ていた。

「こつちに来れば——そんなことせんで良くなるよ。だから、おいで」

さらなる言葉が翔馬に羅列された。

「……………」

翔馬は差し出された手と白虎の顔を交互に見つめた。白虎は優しく微笑み、翔馬を見つめていた。

その白虎が翔馬の目にどう映っているのかは分からなかった。しかし、何か女神を見るような目で見ていたのは確かであった。

スツと翔馬はその手に自分の手を伸ばしかけた。白虎は自分の手の上に翔馬の手がそこに置かれるのを待っていた。

翔馬の心臓がドクン、ドクン、と波打っていた——ところだった。

「翔馬よ、何をしている」

「っ！」

その声で一氣に現實に引き戻された。

白虎達はその声が聞こえた方向へと目をやった。

——男だった。目を引くような長い黒い髪の毛は教皇以上に長かった。そして、生まれてから一度も日に焼けてもいないような白い肌が、その黒さを強調させていた。

「く、クオーツ……」

翔馬はボソツとその名を呟いた。

クオーツと呼ばれた男は翔馬のところまで寄れば、翔馬の腕を掴んだ。

そして、カツと異次元への入り口みたいな空間をそこに作り、そこに飛び込んで行った。

その時翔馬が一瞬こちらへ手を差し伸べた気がした。白虎はそれを見逃さず、翔馬に手を伸ばしたが、もう届かなかった。

「翔馬——っ！」

その名を読んだ時にはすでに入り口は閉ざされていた。

（もう少し……もう少しだったのに……！）

もう少しで翔馬を助けることができたのかもれないのに。

もっと自分から力強く差し伸べせば、こんなことにならかったかもしれない。

「くそっ！」

白虎は床に穴が空くほど強いパンチを入れた。

白虎の中に強い後悔と悔しさが押し上げた。水鹿も歯ぎしりをして、ギョツと右手で拳を握り、何かを抑えるようにそれを左手で包み込んだ。

07：「休日風景」

白虎は聖域の図書館にあたる文献室の椅子に座っていた。水鹿はその横で机に寄りかかるように立っていた。自分達以外誰もいない部屋で、しんと、していた。

あれから、白虎は翔馬のことで胸を痛めていた。水鹿もそれは同じだったようで、こういう時は大体元氣付けようと、色々白虎に話しかけるのだが、黙ったままであった。

あの光景——クオーツという男に翔馬が強制連行されるところを見た白虎と水鹿の中では、最早ただの聖衣泥棒ではない。

「——なあ、水鹿」

「……」

白虎はとうとう声を出し、水鹿は目を瞑り、それを黙って聞いた。

「わい、翔馬に手を差し伸べることできたよ」

「……」

「翔馬もそれに応えようとしてくれたよな」

「……」

水鹿は黙って、白虎の言うことにコクン、と頷いた。

あの時白虎に手を伸ばした翔馬を水鹿もしつかりと見ていた。だから余計に胸が痛くなる。

「でも、わいはその手を取ることに、できかった……」

白虎はぎゅつとあの時差し出した手で拳を作り、それをもう片方の手でそつと、包み込んだ。

「もし、わいが何度も何度も手を差し伸べたとして、翔馬はそれを取ってくれるかな……」

ぎゅつと白虎は手を握った。

もし、またあのような状況になったとして、白虎が差し伸べてくれたら、翔馬はそれを取ってくれるだろうか。

水鹿は寄りかかっていた机から離れ、白虎の隣にある椅子に座った。

「……いずれは取るさ」

「……」

白虎は顔を上げて、水鹿を見た。

水鹿はコクン、と頷きながら、フツと微笑んだ。

「次、お前の手を振り払っても、一度はお前にあの手を伸ばしたんだ。きつと、取ってくれるさ」

「水鹿……」

白虎は水鹿をきよとり、とさせながら見てから、自分の手を見つめた。

無理矢理でもいい。白虎は何としてでも、この手で翔馬をこちらに引つ張りたかった。

その気持ちさえ変わらなければ、きつと翔馬はまた手を伸ばす。白虎のその思いさえ伝われば、きつと——……。

そう考えると、心なしか白虎の心が軽くなったような気がした。

白虎はぐつと拳を握り、水鹿の方へ顔を上げた。

「……うん、せやな。ありがとう、水鹿。わい、また翔馬に手を差し伸べようと思う」

「ああ。その時はオレも一緒だ」

水鹿はスツと自分の右手を出して、ヒラヒラと上げた。白虎は一瞬驚きつつも、コクンと頷いた。

「……うん」

白虎と水鹿は微笑み合った。

聖衣を探すのと同時に、翔馬をどうにかして助け出そうと二人は誓ったのだった。

「それで——獅子座の聖衣は取れなかったのか」

「……大変申し上げにくいですが……その通りです」

翔馬は跪き、地面を掴むようにギュツと手に力を入れた。そこには悔しさと、後悔と、自分に対する疑念が募っていた。

獅子座の聖衣が取れず、自分の未熟さに悔しがつている反面、自分はこのままクオーツに着いて行っても大丈夫なのだろうか、また、黄金聖衣を集めて本当に女神は助けられるのかさえ疑問に思えてきたのである。

翔馬はあの時の白虎の手に伸ばそうとした、自分の手を見た。

(……—龍星座の、白虎)

あの時、白虎に自分の手が届いていれば、今頃自分はどうなっていたのだろう。こんなところで変に悩むことはなかったのではないのだろうか。

——もしかしたら、聖闘士として、人として、楽になれたのかもしれない。

白虎の言うとおり、聖衣を聖域から奪うなどおかしな話だろう。しかも自分は天馬星座の聖闘士だ。代々女神のために誠意を尽くしたと評された、あの。そんな立派で、誇り高い聖闘士が何故こんなことをやっているのだろうか。翔馬は自分の馬鹿さ加減にだんだんと呆れ始めていた。

(でも、女神を助けられる、という真偽が分かったわけではない。やらなければ……やらなければ……!)

『女神のために——……。』

翔馬は無理矢理本心を『女神のために』、という単語だけで押し込んだ。嘘だとしても、自分の女神に対する忠義は絶対だ、と頭に強く打ちつけるように心に思った。

「……ふふ、いい表情をしているな。それでこそ翔馬だ」

クオーツは長い髪の毛を揺らしながら、跪き、顔を伏せがちにしている翔馬の顔を、そつと上げるように翔馬の顎を持つてやった。

「その顔なら、今度こそ、やってくれるな？」

翔馬はクオーツのその問いに、真っ直ぐ前を見て言った。

「はい。俺は貴方に仕えていますから。今度は失敗しません」

「そうか。期待しているぞ」

クオーツはそつと微笑み、翔馬の顎から自分の手を離れた。そこから一気に翔馬に多大なプレッシャーがかかる。

——クオーツから与えられたこの使命、今度こそ絶対に尽くさなければならぬと。そして、失敗をなくさなければならぬと。

一方でクオーツは、あの時、翔馬に手を差し伸べていた、龍星座の聖闘士の少年を思い出していた。

(……龍星座の白虎)

クオーツは目をスツと細め、チラリと翔馬を見た。

これから先、あの白虎とかいう龍星座の聖闘士が自分の部下（翔馬）にどんな影響を与えることだろうか。もし、影響が影響ならば、翔馬は自分の命令に背き、これから聖衣集めをしなくなるかもしれない。

（それだけは避けなければ……。そのためには……。龍星座……。あいつは邪魔だ、が……。）
いつかこの手で白虎を消し去らなければならぬが、その役目は翔馬がやってくれるだろうと、クオーツは信じていた。

翌日の朝。

白虎と水鹿は本日は師である教皇から貴重な休暇を貰った。どうやら、二人は機から見て、よく頑張っているらしい。が、最近は色々あり、息抜き出来る日が必要だとのことらしい。

——そんな教皇の気遣いも無視するかのようには、水鹿は祭壇座の海鳥と調べ物に専念したいからと、朝からいかなかった。

一方の白虎は鍛錬場で軽く屈伸やら腕を回し、軽くストレッチしたりと、準備体操を行っていた。

「さて、と……」

白虎は深呼吸をしながら、辺りをキョロキョロと見渡した。

(今日は水鹿もおらんし……聖域で鍛錬でもすつかなあ……)

最近では聖衣や翔馬のことですつかりご無沙汰だった鍛錬。

しばらくごちやごちやだった頭の中をさっぱりさせる良い機会だ。しかしながら、一人で鍛錬というのは少し寂しいものがある。

(ま、別にかまへんけどな……)

白虎は深呼吸を終えたら、トコトコとでかい岩の前へと歩いて行った。白虎の身長の高さの何倍の岩であろうか。

(物質というのは全て原子から出来ている……)

白虎はピトツ、と左手の人差し指と中指を岩にあてて、目を閉じ、小宇宙を高め始めた。

(つまり岩も原子から出来ている。物を破壊するというのはつまりその原子を砕くと言うこと……まずは、その原子を見極める……)

聖闘士として基礎的なことだが、まずはこれをクリアしなければ、小宇宙の扱いはなっていないと言えよう。

「はああああ……」

白虎の小宇宙がどんどん高まってゆく。白虎の癖つ毛のある髪の毛が、ゆらゆらと小

宇宙の勢いであらゆる方向へ揺れ始める。

岩の大元の原子の塊——白虎は手当たり次第に小宇宙で探り始めた。

しばらくすると、ピクツとくるものがあつた。岩の原子だ。

(……見つけた!)

白虎は目をカツと開き、そのまま右拳で岩にパンチを入れた。

「やあつ!」

その瞬間、全長が白虎の何倍もある巨大な岩がパラパラと小さな岩と粉になつて粉

砕された。

「……ふう」

(ま、こんなもんか……)

と、白虎が一息吐いていると、周りから歓声と拍手が巻き起こつた。

「なつ、何……」

白虎が振り向けば、そこには聖闘士候補生達が白虎の周りに集まり、パチパチと拍手

していた。

白虎は一瞬、きよとん、としながらも、しばらくしたら、照れ臭そうに「あ、あはは

……」と八重歯を見せて笑い始めた。

「ほう……早速人気者だな、白虎」

水鹿は文献室の窓から、ニヤニヤと笑いながら白虎の鍛錬の姿を覗いていた。

(聖闘士になる前から子どもには好かれる方だったが……)

水鹿は子どもと戯れるように遊んでいたかつての白虎の姿を思い出し、ぷつと思わず噴き出し、クスクスと笑った。

「水鹿さん？ 何笑っているんですか？」

海鳥は何故か笑っている水鹿の姿を、不思議そうな目で見ていた。その顔と目は、調べ物の最中に何か面白いものでも見つけたのか、と言わんばかりのものだ。

ビクツと肩を震わせてから、水鹿は『い、いや、何でもないぞ』と慌てて取り繕った。そして、ゲフンゲフンと大袈裟な咳でその場を誤魔化し、話題を逸らした。

「ところで、海鳥よ。何かよい参考文献は出たか？」

「いえ、まだです」

海鳥はふるふると首を横に振った。水鹿は『そうか……』と若干目を伏せた。

「文献室もパソコンが使えれば好都合なのだが……」

水鹿はキョロキョロと文献室の周りを見た。

「せめて、資料がある場所を調べられるような機械……そうだな……市民図書館によくあるあの機械を導入してほしいな」

水鹿は図書館内を検索できるパソコンのような機械を頭に思い浮かべながら言った。文献室で、しかも聖域というからには、古きを大事に、そして、厳粛な雰囲気にしたのは分からなくもないが、ここまでとなると機械を何一つ持たずに資料を探し出すのは厳しいものがあるだろう。

「……今度教皇に言つて、検討してみます」

海鳥はとも申し訳なさそうに水鹿に軽くぺこりと会釈をした。

「ああ、ありがとう、海鳥。そうして貰えると助かるよ」

「はい！ 聖闘士のためにやれることをするのが、教皇とその補佐の仕事ですから！」

海鳥は拳で軽くトントと胸を叩いた。本人は頼もしい聖闘士、というつもりであろうが、水鹿より年上に見えない背格好なためか、とても可愛らしく見えた。

「それで、水鹿さん。過去の聖闘士について調べるなんて急にどうしたのですか？」

「ああ、少しな……」

海鳥に言われて、水鹿は少し遠慮がちに目を伏せた。

そう、水鹿が、今、文献室にいるのは、過去の聖闘士について調べるためである。

翔馬が言っていたクオーツといった男……水鹿はどこかで聞いたことがあるのだ。

そして、そのクオーツを調べるために、過去の聖闘士の資料を漁り、その正体を突き止めようとしたわけである。

「水鹿さんも外ばつか見てないでちゃんと探してくださいな」

「あつ、はい！」

海鳥に言われて、自分が外ばかりに目が行っていることに気付いたのか、水鹿は思わず焦ってしまった。

自分からやりたいと言い出したことなのに、その自分がサボっていてどうするのだと。

水鹿は窓から離れ、文献があるかもしれない本棚を漁り始めた。

「僕だけではどうしようもありませんからねー」

「すまんすまん」

むくれている海鳥を、水鹿は宥めながら一つ一つの文献を丁寧に開き始めていった。

あれも違う、これも違う——いや、それも違う——。

そして、ふと、目についた文献があつた。

最初は、周りの本に埋れていて、あまり気にするようなものでもなかった。ただ、周りの文献をどかしていくうちに、それは異彩をどんどん放つていった。

今は先にやるべきことがある——しかし、水鹿はここでその文献を開かなきゃいけない何かを感じ取った。

(……ちよつとだけ中身を確認してみるか)

水鹿はそつ、とその文献を手に取り、一枚一枚丁寧にページを開いていった。

(これって……中国語か……?)

そう、中身は中国語で書かれていたものだった。水鹿は中国出身のため、中国語自体は読めることには読めるが、相当昔のものらしく、なかなか解読ができなかった。

しかし、分かったことは、これは記録であり、日記であること。そして、その日記の日付から察するに、四百年以上前のものであることが分かった。

(四百年前といえば、冥王ハーデスと女神アテナの戦いがあった時期か……?)

その頃の記録や日々を取っていたらしいのだが、なかなか読み取れず、悪戦苦闘しているうちに、その文献は最後のページに辿り着いた。そこにはその文献の持ち主だったであろう人物の名前が刻まれていた。

「天秤座……の……ん……ん……ん?」

どうやら、天秤座の黄金聖闘士がこの文献の持ち主であり、執筆者だったらしいのだが、その天秤座の聖闘士であろう名前の文字が掠れて読みにくい。

一つだけ分かることが、白虎と同じく、名前の最後に「虎」という字がつくことだ。その上には「里」という字があったが、掠れ具合からして、「里」という文字の上に、何かあったのだろう。

(四百年以上前の文献……しかも記録が残っているなんて、只事ではないぞ)

大抵の文献は古くなると新しく印刷し直されることが多く、元のまま残っていることは、まずはない。しかし、この文献は見つからないままひっそりとこの文献室を過ごしたのであろう、元のままだ。

水鹿はそのことに思わず胸が高鳴り、瞳をキラキラと輝かせて、普段の彼からはとても想像もできないような顔をした。

(なんとという奇跡だ！ 海鳥に後で持ち帰っても良いか聞いてみるか！)

基本、文献室から本を持ち帰るには、絶対に文献室に返すことを前提に海鳥の許可がいる。きつと、海鳥のことなので許可は降りるだろう。

(……さて、そろそろ本気で探すか)

またやらかしてしまった。先にやるべきことがあるだろう、自分よ。

水鹿はそう自分に言い聞かせながら、再び本棚に向かい直し、黄金聖闘士に関する文献を探し始めた。

「あー、そうじゃなくて、こうやで、こうー！」

「こ、こうですかー！」

「白虎さん、ここはどうしたら……」

「ああ、そこはな……」

白虎はあの後、十人程度の幼い聖闘士候補生達に懇願され、熱心に指導していた。

そのうちの一人の候補生は、周りの候補生が10歳程度の中、一番幼い8歳という少年で、初対面だというのに、よく白虎に懐いてくれた。

「白虎さん、白虎さん！ こんな感じですか？」

「うん、そんな感じやね！」

「えへへ、ありがとうございます！」

その少年はよく笑い、白虎に褒められるとやんちゃやそんな八重歯を口から見せた。

「なあ、坊主。アンタ、名前は？」

「えつ、えつと……琥珀って言います！」

少年・琥珀はニツコリと笑って答えた。

琥珀は名前の通り、瞳が綺麗な琥珀色に輝いており、髪の毛もそれに合わせたかのような綺麗な焦茶の髪色であった。

「そうか、琥珀な。覚えておくで！」

「！ はい！」

琥珀は白虎に頭を撫でられ、嬉しそうに笑った。白虎もそれに釣られてニツコリと微笑んだ。

「ところで、白虎さんは龍星座の聖闘士なんですよね？」

「うん。最近なつたばかりの新米やけどな」

「やはり聖闘士になるためには白虎さんみたく、あの大きな岩を一撃のパンチで打ち砕く力が必要なのですか？」

「うーん、まあ、大きいとはまではいかんけど……」

白虎はスツ、と頑丈そうだが、片手で持てる小さな岩を拾い上げて、それをぐつと、握った。するとその岩は一気に粉々に砕け、原型を留めていなかった。

琥珀は口を開き、びびくりし、白虎はパンパンと岩の破片を手で払った。

「せめて、修行始めて二、三ヶ月ぐらいにはこん程度の岩ぐらいは、どんな形でも片手で簡単に砕けるようにならへんと、話にはならんな」

「ふへー……」

琥珀は呆然し、白虎を見た。

『それと』と白虎は更に続けた。

「スピード重視なら一秒でどれだけ拳が撃てるか、動けるかが鍵になる。テクニク重視なら小手先だけで、どれだけ器用な真似ができるか。わいは力重視の技が多いから、どれにも当てはまらんけどな」

「そうなのですか……結構色んなタイプの技に分類されるのですね」

翔馬はペガサス流星拳や本人の敏捷性からしてスピード重視、水鹿は水気や凍気を操

る、という点からテクニク重視である。

「でも、一番重視なんは——小宇宙や」

「小宇宙？」

きよとん、としながら言った琥珀の横で、『せやで』と、微笑みながら白虎はコクンと頷いた。

「基本、勝負の勝敗は小宇宙の大きさと決まる。相手に対し、どれだけ己の中の小宇宙を燃やせるか、でな」

「……」

琥珀はひたすら黙って、真剣に白虎の話を聞いていた。候補生からしたら聖闘士のこういう話は貴重であり、ためになるのだろう。

白虎はその琥珀の様子を見て、もう少し話を続けた。

「だから、例え相手がどんなに物理的に強くても、小宇宙さえ燃やせば勝てるっちゅーことや。逆を言えば、相手が自分より小宇宙を燃やせば負ける。だから、小宇宙を高めるためにしっかりと修行せなアカンよ？」

白虎は爽やかに笑った。琥珀はコクコクと頷いた。

「……そうですね！ 自分、まだ一週間前に来たばかりですけど……」

「へえっ！ じゃあ、本当にまだまだこれからやないの！」

琥珀は『はい!』と頷いた。

「だから、白虎さん! これからも師事、お願いしますね!」

「うん! 任せとき! わいがアンタの師匠になったるよ!」

白虎はグツと親指を立てて、言葉の通り『任せろ!』といった様子であった。二人はすっかり弟子と師匠の気分であった。

水鹿と海鳥は文献室で項垂れながら、ひたすら文献を探し続けた。

さすがの水鹿と海鳥もここまで見つからないとイライラするようである。

「なあ……海鳥よ。今すぐここに文献室検索用機械を設置してくれないか……」

「……それが出来たら苦労しませんって」

「……一旦休むか」

水鹿と海鳥は『はあー』とお互いに溜息を吐いて、近くの椅子に座り込んだ。

海鳥は文献室にある時計をちらつと見て、水鹿に提案した。

「……そろそろ昼時ですし、白虎さんでも呼んで何か食べますか?」

「……そうだな。少し賑やかな奴がいないとイライラしっぱなしだな」

水鹿は、早速椅子から立ち上がり、文献室のドアの方へと向かおうとして、その足を止めた。

「水鹿さん？」

海鳥はそんな水鹿を不思議そうに見つめた。水鹿は海鳥の方を振り向いた。その顔はどこか悩ましげで真剣なものであった。

「ど、どうしたんですか!？」

「海鳥……」

「は、はい!？」

あまりに水鹿の様子が真摯だったためか、海鳥は思わず構えてしまった。

水鹿は一旦間を置いてから、海鳥に言った。

「……文献室で昼食を食べるのって……規則違反になるのではないか？」

水鹿の目の前にあった貼り紙には、『文献室内、食品持ち込み厳禁!』の文字が赤く書いてあった。

「んー、琥珀! そろそろお腹空いてへんか？」

白虎は自分の腹時計が反応していることに気付き、琥珀にもそうでないか確認した。

先ほど白虎に寄ってきた大半の候補生達は白虎からある程度アドバイスを貰ったあと、あとは自分たちで鍛錬を、と、それぞれ去って行った。各候補生達にもちゃんと師がいるのだろう。そう思うと白虎は少し微笑ましくなった。一方の琥珀は白虎と鍛錬

できることを嬉しく思っていたらしく、白虎のそばに留まり一緒に鍛錬をした。

琥珀は聞いてきた白虎に『そうですね』とお腹をさすりながら言った。

「言われてみたら、今日はいつもお腹が空いているの……かも……」

「じゃ、一緒に飯食べよ！ オススメの食堂屋さんがあるんやで！」

白虎はどこか得意気に言った。琥珀は瞳を輝かせて、『は、はい！』と頷いた。

「白虎……」

その時、後ろからどこかしら元気がない声が、白虎を呼んでいることに気付いた。白虎が振り向いてみると、そこには激しく疲れたらしい水鹿と海鳥の姿があった。

「水鹿に海鳥……どないしたんよ……」

「いや……調べ物をして、少し苦労しただけさ」

水鹿は遠い目をしながら、フツと微笑んだ。白虎は『はいはい、そうですか』と、ジト目でその水鹿の姿を見ていた。

海鳥は苦笑しつつも、人差し指を立てて、言った。

「それですね、白虎さんも誘って昼食を食べようって相談したのですよ。どうですか？ 良ければその候補生さんも一緒に！」

「えっ？ 自分ですか？」

当てられた琥珀はびっくりした様子で自分を指差し、海鳥達を見た。

「はい！ どうやら白虎さんに指導して貰っていたようですし、ぜひとも！」
「で、でも……」

琥珀はチラリと水鹿と白虎を見た。その目は『自分がいても良いのか』も言いたげなものだったが、水鹿と白虎はニツと笑い、大丈夫だと言っているようだった。

「候補生とか何とか気にするわいらではないで！ だから安心せいよ！」

「そうだ。こんな白虎のことを慕っているだからな。寧ろ遠慮なんて無くても良いぐらいだ」

「水鹿あつ！ こんなってどういう意味やーっ！」

「そーんなどころだっ！」

白虎と水鹿はドタバタと走り回り、追いかけてつこを始めた。その様子はどこかしら楽しそうなものだ。

しかし、海鳥は呆れたような顔で二人に声を掛けた。

「二人共ー！ 早くしないと行きますよー！」

すると、二人はピタツと追いかけてつこをやめた。水鹿はパタパタと海鳥の方へと駆け寄った。

「あつ、はいはい！ ほら、行くぞ！ 白虎！」

「むーっ！」

「で、二人は過去の聖闘士について調べておつたんな？」

「ああ、そうだ。しかし、良い参考文献が見つからず……案の定だ」

水鹿は水餃子を食べながら、海鳥と一緒にぐったり項垂れた。海鳥は餡掛け炒飯を食べながら、溜息を吐いた。

「でも、確かにクオーツさんが過去にいた聖闘士であつたことは確かなのです。教皇もクオーツの名を聞いた途端、どこか驚いておられましたし」

「……なるほどなあ」

白虎はズズツとラーメンを啜りながら、二人の話を聞いていた。

クオーツが過去にいた聖闘士——それが本当ならば、クオーツは本当に何が目的で聖衣を翔馬に集めさせているのだろうか。

琥珀は三人の会話を聞きながらも、麻婆豆腐を食べている手を止めていた。どうやら自分が場違いだと感じ取っていたらしいく、表情もどこか浮かなかつた。

そのことに気付いた白虎は、ちよんちよん、と琥珀の肩を突つき、話しかけた。

「な、な、琥珀。早く食べへんと麻婆豆腐冷めつて？」

「……あ、は、はい！」

琥珀は白虎に言われて気が付いたのか、さっさと麻婆豆腐を食べ始めた。

「……なんかごめんな。つまらんやろ?」

「い、いえ、そんなこと……!」

琥珀は申し訳なきように謝った白虎に、ブンブンと首を横に振った。

「むしろ聖闘士の皆さんとこうして食を共にできて……自分、感激してます」

「そ、そう?」

「はい。感激で、信じられないです」

ちよつとだけ頬を朱に染めて、琥珀は首を縦に振った。

水鹿は『ふむ』と顎に手をあてて、琥珀と白虎を見比べ、疑問に思ったことを率直に述べた。

「ところで琥珀よ。何で白虎に教わろうと思ったんだ?」

「えっ?」

琥珀はきよとん、としながら水鹿の方を見た。

「確かに白虎の力に圧倒されたのは分かるが……ここまでついて行こうとするなんて、別に理由があるのではないか?」

水鹿はフツと微笑んだ。

琥珀は『そ、そうですね』と一瞬だけ頭を回した後、頬をぽりぽりと搔いて、照れ臭そうに答えた。

「白虎さんのことは前から存じ上げておりました。あの教皇の弟子であると」
「ほう……」

「それで、姿も何回か見かけてたんですけど、教皇みたくどっしりした人だなんて……」
「ど、どっしり？」

白虎はいまいちピンとこなかったのか、琥珀に聞き返した。琥珀ははにかみながら、
コクリと頷いた。

「はい。性格とかよく分からなかったんですけど、想像通りの人で良かった」

「そ、そうか！ うん！」

白虎は『アツハツハ』と豪快に笑った。

「……想像通り、か……」

一方で水鹿はぼそりと呟いた。

白虎は中身はどっしりとしていそうな外見には見えない上（寧ろ可憐だと思うだろう）に、想像通り、ということとは、こういう豪快で若干ガサツなところも予想していたのだろうか。

水鹿は琥珀のことは信頼ができるが、そこから辺がどうも疑り深かった。

「……水鹿？」

突然表情が辛辣になった水鹿に、白虎はきよんとしながら、声をかけた。

水鹿は白虎に声をかけられ、思考を止め、ゲフンゲフンと軽くわざとらしい咳でその場を誤魔化した。

「何でもないぞ。さ、さっさと飯を食べてしまおう」

ニコツと軽く水鹿は白虎と琥珀に笑いかけた。

(……)

水鹿は残りの水餃子を食べながら、琥珀と白虎を交互に見た。

なんとも不思議な2人組であろう。本日が初対面なのだろうが、全くそうは見えず、むしろ昔からの兄弟であるかのように見える。

(きつと八重歯と髪色のせいだな……)

琥珀にも八重歯がある上に、髪の毛の色も白虎と同じような綺麗な焦げ茶である。

水鹿はこの時は、まだまだ気のせいだと思いつめた。

08：「天秤座の聖衣」

前日が休暇で、よく鍛錬できたり、ストレスが発散できたのか、本日は何となく気が軽かった。白虎は十二宮の前で、気持ち良さそうに腕をぐんつと伸ばした。

「うーん……」

（今日から任務再開やな……）

スツ、と白虎は遠くを見つめてから、目を閉じた。

（……最近は『コレ』してないんやったなあ）

聖闘士になる前は『コレ』が習慣的で日常的なものであったが、なった後はごちゃごちゃしており、全くやっていなかった。

白虎は『ふう』と軽く息を吐けば、足を肩幅まで広げ、両手を横に軽く置いた。

そして、口を少し開き、そつと声を吐き出した。

「ル……」

その声は三十秒程度続いた。その間にも偶然白虎の近くにいた聖域の聖闘士や聖闘士候補生達がふと、白虎の方を振り向いた。

白虎はその視線に構わず、気にしてない様子素振りを見せ、次に聖域全体に響き渡る

ぐらい大きな裏声を出した。

「Ah——ッ！」

思わず白虎の近くにいた人物は耳を抑えた。

(まだ……大きく出来る！)

周りからしたら、これ以上ないぐらいに大きいのだが、白虎はそれ以上に声を大きくした。

——というのも、実はこの声出し、『声に小宇宙を乗せる練習』という題目である。この驚くぐらい大きな声も、実際は白虎自身の小宇宙がそうさせているのであって、本人自身はここまで声を大きく出していない。しかし、白虎に近寄ってみると、大きなホルで響くぐらいには声を出しているのも事実である。

(もつと……もつとー)

その大きさは次第に増してゆく。

五老峰にいた頃は、木や岩といった自然が邪魔して、その大きさを確認できなかつたが、上に邪魔するものがない今、その大きさを確かめることができた。

(——ここぞ、フィンニツシャアッ！)

白虎が指揮者が奏者や歌手に対して合図する『止め』の姿勢を勢いよくし、声を出すのをやめた瞬間、ギョんツと白虎の周りに砂や埃が舞い上がった。『ハアハア』と息を整

えながら、白虎は自分の声の威力を確認した。

先程巻き起こった砂や埃は白虎の声によりひび割れた地面から出てきたものらしい。

(……人の鼓膜、壊せるな)

現に白虎の近くにいた人々も耳を塞ぎ、その場をなんとかやり過ごしたほどである。

当然、十二宮で一番最初の宮、白羊宮にも届いていた。

「ちよーつと、白虎！」

今の白虎の声出しを聞いて、すっかり目覚めて起きたばかりの白羊宮の守護者・玄夢がドタドタと白虎の方へ駆けてきた。白虎は何事もなかったかのように、玄夢に笑顔で挨拶した。

「あ、玄夢、おはよう！」

「『おはよう！』じゃないだろ！」

玄夢は寒いとも言えるような白虎のモノマネをし、ビシツと白虎を指差した。

「午前中から何やつているんだ！」

「んー、修業時代からの日課やけど？」

「にっ……か……!?!」

どこかしら玄夢の声が震えていた。どうやら、白虎が今やっていたことが日課とは思っていないかつたらしかった。

更に白虎は微笑みながら続けた。

「最近の色々あつて、すっかりご無沙汰やったけど……またやれて良かった!」

「『またやれて良かった!』、じゃないって! せめて人がいないところでやれよ!」

「だから人がいなさそうな午前中にやったんやろうが!」

「でも、お前の声、絶対聖域の外まで届いてるぞ!」

「……んー、ま、良いやろ!」

「良くねえっ!」

（相変わらず……こういうところは変わらん奴だ……）

玄夢はゲラゲラと豪快に笑っている白虎を見て、そう思った。

「……っ!」

（この声……）

その声は聖域付近にいた翔馬にまで届いていた。

その声に驚きつつ、キョロキョロと辺りを見渡しても、当然、白虎らしき姿はなかった。

（龍星座……アイツは……）

翔馬は思わず妙な危機感を覚えた。

白虎は小宇宙が馬鹿でかいだけの聖闘士だと思っていたが、この声を聞く限り、小宇宙はしっかり扱えるようになってきているのだろう。

そして何より、拳ではなく、声というところに不安を覚えた。

「……」

だが、所詮は声だ。声が拳に敵うほどの何かを持っているはずがない。

「……クオーツ……今度のアナザーデイメンションは……」

「ああ、今度は——中国だ」

翔馬の後ろについていたクオーツが、ニヤリと不気味な笑みを浮かべながら答えた。

「……」

(十二宮では……ないのか?)

場所が十二宮でもなく、聖域でもないところだということに翔馬は酷く驚いた。まさか、中国に黄金聖衣などあるはずがないが——しかし、クオーツは続けた。

「天秤座の聖衣が行方不明なのは知っているな?」

「……はい」

コクリと翔馬は頷いた。現時点で行方不明なのはもはや天秤座の黄金聖衣だけだ。もしかして、クオーツはその天秤座の黄金聖衣の在り処を探し出したというのか。

クオーツはアナザーデイメンションの準備をしながら、続けた。

「その天秤座の聖衣のかつての持ち主は中国出身だった。今までの聖衣もかつての持ち主の出身地で見つかっている。察しの良いお前のことだから分かるね？」

「……はい」

中国全域をもって探せば、いずれは見つかるとも思えない、ということだろう。

「しかし、クオーツよ……何故天秤座の聖衣を先に？」

どうせなら、現在持ち主が不在状態にある、牡牛座の聖衣、蟹座の聖衣、乙女座の聖衣、水瓶座の聖衣から狙っても良いのではないか。わざわざ遠回りなことをしても仕方がないだろう。

クオーツはフツと笑い、答えた。

「聖域に行ったところで、前回のように入らただけだから。それならば、邪魔が入らないうちに天秤座の聖衣を探そう、という魂胆だ」

「なるほど……さすがクオーツ」

「フツ……おっと、アナザーディメンションの準備が整ったぞ」

そう言ったクオーツの目の前には、アナザーディメンションによつて開かれた、宇宙と似て異なる異次元への入り口が開かれていた。

スツとクオーツは翔馬に手を差し伸べた。

「さあ、行くぞ、翔馬。移動中、決して私から離れるでないぞ」

「……仰せのままに」

翔馬は表情何一つ変えずに、クオーツの手を取った。

そして、教皇の間。

教皇は爽やかに笑みを浮かべながら、ソツと送られてきたFAXや何やらを白虎に見せつけた。内容は全て、先程白虎が声を出したことについてのことだ。

「白虎よ……先程からお前に対する苦情が殺到しているのだがね」

「……すみませんでした」

そう答えるしか白虎の道筋はなかった。

教皇はやれやれ、といった様子で、白虎にいった。

「今後、お前が聖域で声出し練習をするのを固く禁じる。これは教皇命令だ」

「……はい」

白虎はしゅん、と萎縮した。

その隣にいた水鹿は、その様子が面白おかしく感じられたのか、クスクスと静かに笑った。白虎はムツ、とむくれながら、水鹿を見た。

「水鹿……」

「ハハハ、すまんすまん。ところで、教皇よ。今回はどのようなご用件でしょうか？」

「ああ。今朝の白虎の件もそうだが、実はな……」

教皇の声が一気に重みを増した。白虎と水鹿は思わず息を飲んで、教皇の話聞き始めた。

「実は、天秤座の黄金聖衣が中国の四川省辺りにある、という噂が立っているのだ」
「！」

一気にその場の空気が変わった。

（天秤座の黄金聖衣が……）

（やはり中国に……）

水鹿と白虎はお互いアイコンタクトを取りながら、コクリと頷いた。

「最近、中国の任務にあたった聖闘士が四川省を通った際、それらしき小宇宙を感じたと
言っていました」

教皇の側にいた祭壇座の海鳥が、スツ、と前に出て、教皇の言葉に補足するかのよう
に、声を出した。

「もし、それが本当ならば……急いで探すべきだと僕たちで相談したんですよね」

「ああ」

教皇は海鳥の言うことにコクリと頷いた。

「だからお前達、行ってくれるか？」

「はい、了解しました。でも……」

白虎は少し目を伏せた。教皇は「？」と不思議そうな目で白虎を見た。

「白虎、何か不都合でもあるのかい？」

「いえ、その……えつとですね」

少々遠慮がちに白虎は教皇に言った。

「こういうのって、黄金聖闘士に任せただ方が良いと思うんですが……」

「……ああ、それはオレも思ったな」

水鹿は白虎の言うことに同調して、コクコクと首を縦に振った。

「射手座の聖衣の時はオレら以外にも声をかけてましたし、何よりお手伝い感覚で調べて、偶然見つけただけですが、こう、はつきり探し出して、と頼まれると白銀聖闘士や青銅聖闘士のオレらには圧力が大きいかと……」

「そうですよ、老師。今回ばかりは黄金聖闘士に任せべきではないかと……」

そう、射手座の聖衣の時と天秤座の聖衣の時ので、二人にかかるプレッシャーがどこかしら違っていた。

水鹿はともかく、白虎に関しては、射手座の聖衣を翔馬に奪われたこともあり、そのプレッシャーは尋常ではなかった。前回の獅子座の聖衣の保護も黄金聖闘士並の実力を持つ水鹿と、牡羊座の玄夢がいなければできなかつたかもしれない。

教皇はあまり気が乗らない二人に対して、こう言い放った。

「黄金聖闘士も二人ほどつける気ではいる。だが……だがな、基本はお前たちを信頼していることを忘れないで欲しい」

「……」

白虎と水鹿はバツと顔を上げて、教皇を見た。教皇はニツコリ微笑みながら立ち上がり、二人の元へ向かい頭を撫でた。

「私も、こういう風に聖衣をかけて戦ったことや探したことがあるのだ。あの時はパーツごとだったがね。だが、結果的には正しき心を持った者にその聖衣は味方したのだ」

「……老師」

「教皇……」

教皇はコクリと頷いて『安心しろ』と、二人の肩にポンツと手を置いた。

「私は信じているぞ。お前たち二人が、聖衣を味方にするような心の持ち主であると」
「うう……老師い……」

気付けば白虎の顔は涙やら鼻水やらでぐちゃぐちゃになっていた。水鹿も『教皇からそんな勿体無きお言葉……』などと言って、ぐつと目頭を押さえ何かを堪えていた。

教皇はクスクスと笑いながら二人を宥めた。

「……」。泣くのはもうちょっと後にしてくれ」

「はいく……すみません……」

白虎はごしごしと涙やら鼻水やらを拭いた。

(老師からこんな信頼されておるんや……頑張らないとな……)

教皇は任務の結果以上に、二人が正義の心を持った聖闘士であることを絶対的に信じていた。白虎と水鹿はその信頼に応えるためにも、これ以上失敗は出来ないと悟った。

「じゃつ、テレポートするけど……大丈夫だよな?」

「うん!」

「寧ろさつさとしてほしいぐらいだ」

「水鹿は随分せっかちなな」

あの後、白虎と水鹿は海鳥から説明を受け、教皇が言っていた黄金聖闘士二人——牡羊座の玄夢と蠍座のサードと共に中国へ天秤座の聖衣を探しに行くことになった。

牡羊座の玄夢は代々超能力が使える家系におり、特にテレポートが使えた。蠍座のサードはそんな玄夢の親友である。

この二人が理由なのは、牡羊座の玄夢は上記の通り、テレポートが使える故に移動手段として利用するのである。では、何故蠍座のサードなのかというと、まず、山羊座のデリアンだと白虎と喧嘩ばかりで任務に集中できない。ならば、喧嘩にならない魚座の

ジエイドを遣えば良いのでは、とは思いますが、ジエイドは、そもそも食べ物関係のことは本気を出さない。聖衣のことにも『そのうち見つかるんじゃないの』などと、思いの外随分無関心だ。

そして、結果的に消去法で蠍座のサードがもう一人に選ばれたのである。

「そんなわけで、龍星座の白虎と杯座の水鹿。二人とも、今回は宜しく頼むぞ！」

サードはニツと笑って、二人の頭をガシガシと撫でた。

玄夢はその様子に『はあ』と溜息を漏らして、呆れ顔で見ていた。

「サード！ほら、二人から離れろ！二人が迷惑そうにしてるぞ！」

「はいはい。玄夢は相変わらず真面目だな」

クスクスと笑いながら、サードは白虎と水鹿から離れた。

「ほら、行くぞ！」

玄夢がそう言うのと、小宇宙の光らしきものが四人を包んだ。そして、一瞬、強い圧力がかった。

（——な、ななっ!?!）

その圧力に思わずびっくりした白虎は、目を瞑ってテレポートが終わるのを待った。

白虎が次に目を開いた時には、見慣れた風景がそこにあった。

「……」

キョロキョロと辺りを見渡すと、自分がいつも着ている中華服と似ている服装をしている人物が、チラホラと歩いていった。

(着いた……んやな?)

しばらく見ていなかったこの風景に、白虎は思わず感動した。

——久々やな、この村も。

白虎は『んーっ』と腕を伸ばした。

ふと、気が付けば行き交う人々は、不思議な目でジロジロと白虎のことを見ていた。白虎は自分の姿を見返して、『あっ』と気が付いた。

(そら、こんな聖衣着てたら、ジロジロ見られて仕方ないな……)

白虎の井出立ちは村の人々からしたら奇妙なものだろう。しかし、今回は任務なので、いちいち他人の視線を気にしても仕方ない。

そして、白虎は気付いた。一緒にここにレポートしたはずの他の三人の姿がないことに。

「……あっ、あれ?あれっ!」

白虎はブンブンと辺りを見渡した。しかし、三人の姿はその視線に入らなかった。

「げ、玄夢? サード? 水鹿? どこ?」

「ハ、ハ、ハ、だ……白虎よ……」

「……ふ、ふにやつ!？」

白虎が視線を自分の下に移してみると、下から順に玄夢、サード、水鹿が白虎の下敷きとなつてそこに積もつていた。

一番下にいる玄夢が苦しそうに蠢きながら、白虎に言った。

「さつさと降りてくれないか……」

「ん、あ、ああ! ごめん! ごめん! どうりで地面が柔らかいと思つたんよ!」

白虎は『よっ』と三人の上から降りた。

三人が地に着いた時、水鹿はクスクスと微笑みながら、白虎に話しかけた。

「白虎。ただでさえこの格好は目立つのに、こんなことになつちやあ余計に目立つな?」

「うん、せやつたな。三人とも、ごめんな? アツハハハ!」

「白虎と水鹿、そんな笑いながら言うなよ……」

玄夢はハハツと乾いた笑みを浮かべながら、その様子を見ていた。

四人は村でもかなり外れにして、廬山五老峰に近い路地裏へと出た。

「で、海鳥情報によれば、その聖闘士はここらへんで天秤座の聖衣の気配を感じた?」

「らしいな。現にここ、周りとは全然小宇宙が違うしな」

水鹿と玄夢はキョロキョロとその路地裏を見渡した。

この路地裏、五老峰に近い位置にあるというだけあって、周りよりも全然草木が生えており、自然が多い。

その上——路地裏とは思えないほど広い。

「白虎。やはりここら辺にありそうだな。射手座の聖衣の時も大きな滝なのに、滝壺は広く浅かったからな」

「……ああ、せやな」

白虎は水鹿の言うことにこくん、と頷いた。

射手座の聖衣の時は、聖衣の影響か、地形や構造がどこかしら矛盾したものになっていた。この路地裏も粗方その一つであろう。

「つていうか、玄夢。本当にこんなところにあんの？ 射手座の聖衣のときよりも、随分

シヨボいところにあるじゃん」

「感じた奴がいるんだし、間違いないだろ。あと、シヨボいとか言うな」

「サード……黄金聖闘士が信じなくてどうする？」

サードと玄夢が話しているところに、水鹿も割り込み、白虎はぽつん、と一人取り残された。強い者は強い者達で話が合うのだから、白虎はあえてその様子を眺めていた。

すると、突然妙な小宇宙が白虎に襲いかかった。

——っ!?

バツと振り返り、辺りを見渡す。

ざわざわ、と周りの草木が不自然に漂っていた。

——白虎はこの感覚を知っていた。射手座の聖衣を探し出した時の感覚だ。

チラリと他の三人の様子を見た。どうやら、話し込んでこの小宇宙に気付いていないらしい。

(……よし！)

白虎は目をキリツと輝かせ、スツと前を見た。

ここは自分がこの小宇宙の正体を探り当てなければ。で、なければ誰も探し出そうとしないであろう。

(ごめんな、三人共。わいは先に行かせてもらおうよ)

白虎は小宇宙が放たれているであろう方向へと歩みを進め始めた。

辿り着いた先は、一本の大きな木であった。今は11月でもう冬になるというのだが

——不自然に、その木だけ未だに青が茂っていた。

白虎はそつとその木の幹に、平手を当ててみた。

(やっぱりな……)

白虎は木の幹から、それらしき小宇宙を感じ取ることができた。

予想通り、こちら辺に天秤座の聖衣は存在し、誰にも見つからぬように姿を隠しているのだろう。

しかし、他の聖衣とは違って何故、その姿を隠したがるのだろうか。

(……持ち主を待っておるんかな)

今の持ち主は教皇である我が師のため、もしかしたら教皇がここに来ればその姿を現すのではないのだろうか。

(……もし、そうならわいはアンタの持ち主であるわいの師をここに連れて来たるよ) いつになるかは分からない。

しかし、もし教皇を——自分の師を連れてきて出てきてくれるならば、都合がつく時に絶対に連れて来る。

「アンタは自分の持ち主であるわいの師、望んでおるんやろ？ 天秤座の聖衣——……」

白虎のその問いかけに『ああ、そうだ』と頷くようにどことなく小宇宙が変動した。一瞬白虎はそれにびっくりしてしまったが、すぐにニコツと笑い、『待つててな』と呟いた。「絶対に連れて来てやっからな」

白虎は最後にそう言うと、そつ、と木の幹から手を離した。そして、後ろを振り返つ

たその時であった。

「——っ……………!?!」

真つ白い青銅聖衣を纏い、今まで以上に鋭い眼光で睨みつける、赤みを帯びた茶眼をした瞳。

——天馬星座の翔馬である。

翔馬は白虎の目の前まで歩き、表情を何一つ変えずに、白虎の聖衣の下から見える胸元付近の衣類をガツと掴んだ。

「何でお前がここにいる?」

「……………そら、こっちの台詞やで、翔馬」

白虎もそれに返すように、翔馬の聖衣の下から見える首付近の衣類にガツと手をかけた。

お互い睨みつける中、白虎はソツと自分を掴んでいる翔馬の腕に片手をかけた。

「アンタ、わざわざこんなところにまで来て聖衣探ししよるん?」

「……………当たり前だ。上からの命令だからな」

「クオーツって奴のことか」

「……………」

白虎がクオーツの名を口にした途端、翔馬はそのままグツと黙り込んだ。

「何吹き込まれてるのは分からんけど……そいつの言うことに、耳を傾けたらあかん」
「……」

翔馬の白虎を掴む手が一気に緩んだ。白虎はそのまま翔馬の手を自分から離してやり、翔馬を掴んでいる自分の腕も離した。

白虎は翔馬の肩にぽん、と自分の手を置いた。

「本当は心の奥底で分かかっておるんやないか？　こんなことしても何にもならないかも、って」

「……！」

翔馬の表情が一気に変わった。

白虎は微笑み、そのまま言葉が続けた。

「天馬星座の聖闘士なら、分かるはずや。黄金聖衣集めたところで、何にもならんこと」
「……っ！」

本格的に凶星を突かれたらしく、翔馬は今にも泣き出しそうな顔になった。

「前にも言うたけど、こんなこと、もうやめよう？　もし、アンタがやることが例え正義だったとしても、教皇の相談も無しにやっている以上——殆ど、無意味や」

「……！」

（無意、味……！）

翔馬の心臓がドクン、と鳴り上がる。

自分の今までやってきたことは無意味だというのか。女神のためにとやってきたことが。

しかし、女神のためであれば、何故ここまで隠す必要があるのだろうか。どうして聖闘士同士で対立しなければならぬのか。

——全ての答えはそこにあつた。

「な？ だからやめよう？ 更に重い間違いを犯す前に」

「……」

（俺は……）

一体何のために白虎達聖闘士と対立していたのか。それは自分の使命を果たすだけだった。

しかし、使命というだけで他の聖闘士達と対立するのなら、それこそ女神の掟の『聖闘士同士の私闘は禁止』というものの裏に隠された意志に反するのではないか。

もしかしたら——今の自分は、クォーツのための生ける従順な人形なのではないのか。

「……今からでも遅うないよ」

白虎はそう言うのと、翔馬の肩から、自分の手を離した。

そして、前と同じように——翔馬に手を差し伸べた。

「こつちに、来て?」

二人の間に緊張が走った。

翔馬は白虎とその手を交互に見、戸惑いながらも、自分の心に正直になった。

「……いい、のか?」

「……うん!」

白虎は翔馬の質問につこりと笑みを浮かべて答えた。

翔馬はおどおどとしながら、白虎の差し伸べた手に、自分の手を置こうと伸ばし始めた。

その時、翔馬の背後にあの男がやってきた。

「——翔馬、何をしている?」

——クオーツである。

翔馬はハツと気付き、白虎に伸ばした手を引つ込めた。

「クオーツ……!」

クオーツは『ほう』と白虎の後ろにある木を見て、そこに天秤座の聖衣があるのだと確信を得た。

「——そうか、翔馬。天秤座の聖衣を見つけ出したのか。でかしたぞ」

「……はい」

翔馬は小さく返事をする。白虎はその様子がどうしてもいたたまれなくて、齒軋りをしながら、顔を伏せた。

そんな白虎の横を、クオーツは横切つて歩いた。向かつた先は当然、天秤座の聖衣が埋まっているであろう、大きな木である。

「こんなところにあつたのか、天秤座の聖衣よ——……」

クオーツが大きな木に触れたその時であつた。突然、木が拒否反応を示すようにオレンジ色に近い稲妻をその身に張り巡らした。

「なっ——……?!?」

「えっ!?!」

「……!?!」

突然のことではびつくりした三人は、黙つてそれを見た。その時、木に触れていたクオーツに至つては、その稲妻を直にその身に受けた。

「ぐあああああつっ!!!」

バリバリとクオーツの身に激しい電撃が走つた。

「クオーツ!」

翔馬は即座にクオーツに駆け寄つた。クオーツは木から手を離すと、よろよろと情け

なくその場で膝をついた。

「しつかりしてください！」

「…………う、う」

クオーツは翔馬の肩を借りながら、ゆっくりと立ち上がり、木を睨みつけた。

「…………な、何故だ！ 何故、私に対してこんな！」

何故クオーツに対してここまで拒否反応が出たのか、さっぱりであった。小宇宙の大きさを力の大きさであれば、白虎よりもクオーツの方が優れている。

——これは根本的な何かが、天秤座の聖衣を拒否反応までに至らせたのであろう。

「…………天秤座の聖衣」

白虎は先程のクオーツと同じように、木に触れた。しかし、何も起こらない。そのまま目を細め見上げて、木の上を見た。

季節外れともいえよう青々とし、茂った葉っぱ達ざわざわと揺れていた。

「…………」

(もし、わいが出てきて、って言ったら出てきて、くれる?)

白虎はそつと小宇宙で直接語りかけた。クオーツと翔馬は黙ってその様子を見ていた。

「出てきて…………」

白虎がそう、眩いた時であった。

突然、白虎の周りに幾多なる輝きが纏われ始めたのである。

「……………」

白虎は酷く驚いたが、それをそのまま受け入れた。

(わいの願いに、応えてくれるんやな……………?)

ニコリと白虎は微笑み、木の上の方に手を翳した。

そして、とうとう天秤座の聖衣がオレンジの光をその身に纏いながら、白虎の目の前に現れた。

「……………アレが」

「天秤座の聖衣……………」

翔馬とクオーツは天秤座の聖衣を見て、哑然としていた。

他の聖衣と違い、明らかに特徴的な武器がちゃんと聖衣のオブジェとしてそこに健在していて、そして、他の聖衣よりも圧倒的な悠然さがあった。前の天秤座の聖闘士は二百年以上生きてと言われているが、その悠然さが天秤座の聖衣にも表れているのだから。

白虎は圧倒されながらも、微笑み、そつと手を伸ばした。

「……………出てきてくれて、ありがとうな」

白虎がそうやって天秤座の聖衣に向かって呟いて、その腕に聖衣を包み込もうとした、その時であった。

突然、白虎の背後から圧倒的な黒い小宇宙が天秤座の聖衣に向かって放たれていた。気付けば、その黒い小宇宙は網となり、天秤座の聖衣を包み込んだ。

「……………なっ!?!」

白虎は背後に顔と体を振り返った。

——クオーツの仕業だ。

クオーツは『クククツ』と笑いながら、天秤座の聖衣をそちらへ引きずり込んだ。

「クオーツ！ アンタ……………!」

「なんと隙だらけの龍星座の聖闘士だ……………」

クオーツはそのまま天秤座の聖衣を手中に収めると、それを瞬間移動でどこかへやった。

「さて、これで天秤座の聖衣は我が手中だ。取り戻したければこちらの居場所を探し出すことだな」

「……………」

白虎は悔し気に歯軋りをし、クオーツを睨みつけた。翔馬も少しばかりか悔しそうにしていた。

クオーツは『くつくつく』と齒でわらい、その様子を見、そして言った。

「そして、翔馬。お前は聖域に行つて……そこで龍星座と賭けをしろ」

「!?」

「クオーツ……!?」

翔馬は白虎を見てから、クオーツを見た。その表情はどこかしら、状況が把握出来ないと言つた様子であつた。

「聖域にある、残りの黄金聖衣全てと……何かを賭けにな」

「!? うわっ……!」

クオーツはアナザーデイメンションで、聖域への道のりを作り、翔馬をそこへ引つ張り、放り投げた。

白虎は思わずその後を追い掛け、アナザーデイメンションの入り口の目の前まで、走つた。

「翔馬!」

「私もここで失礼させてもらおう。翔馬と良きバトルを……フッフ」

クオーツもそのままアナザーデイメンションで作つた次元の入り口へと入り、そのままどこか見知らぬところへ行つてしまった。

白虎はそれを見ながら、ガクツと膝をついた。

「……」

(何やねん、もう……！)

せつかく天秤座の聖衣は、持ち主の弟子である白虎を選んでくれたのに、拒否反応を示したクオーツの手に渡ってしまった。

その上、翔馬に聞しても、せつかく心を開こうと、自分に対して手を伸ばしたのだ。

(クオーツめ……！)

全ての元凶はクオーツである。クオーツがいなければ、きっと今頃平和に聖衣の搜索を進められていただろう。

どうしたら、クオーツに勝てるか。

どうしたら、クオーツから黄金聖衣を取り戻せるか。

白虎はどうしたら良いか考えた。今のままではクオーツの思うがツボだ。

そんな中、先程クオーツが翔馬に約束させたことがあったことを思い出した。

翔馬と自分が戦い、聖域にある黄金聖衣全てと何かを賭ける——。

(……いや、まだイライラして地団駄踏むのは早い)

す『そうだ』と、白虎は、凜と立ち上がり、自分を今頃探しているかもしれない水鹿達の元へと歩みを進めていた。

(——すべてはその戦いに賭ける……！)

09：「遊舞乱虎」

白虎達は任務の結果報告のため、聖域に戻ったら、即座に教皇の間へ向かった。当然、その結果報告は白虎達からしたら荷が重かった。教皇の聖衣になるであろう、天秤座の聖衣が、クオーツの手に渡ってしまったことを報告しなければならなかったのだから。

教皇の間に行く途中で、他の三人は『自分たちの怠惰のせいだから気にするな』と、白虎を責めないでいてくれた。特に黄金聖闘士二人は自分たちの無力さを痛感していた。こんな自分たちが黄金聖闘士で良いのか。黄金聖闘士ならば、青銅聖闘士・白銀聖闘士達の前を常に行き、自分たちが土俵に立つべきでないか、と。

そして、とうとう教皇の間に着き、白虎達は教皇に任務の結果報告をした。教皇は報告を表情を何一つ変えずに聞いてくれた。

「天秤座の聖衣まで奪われるとはな……」

「……（ぐ）めんなさい」

「謝るな。今の話を聞く限り——天秤座の聖衣は白虎を選んでくれたのだろうか？ 私はそれだけで嬉しいぞ」

「老師……」

一番自分達を責めても良いはずの教皇だが——いつものように微笑んで、白虎達の非を責めないでいてくれた。

しかし、叱るべきところはきちんと叱った。

「その黄金聖闘士二人。話し込んでないで任務に集中しないか？水鹿もな」

「うっ、すみません……」

教皇は口をへの字に曲げ、ピシヤリと三人に喝を入れた。今の教皇の言うことが尤もすぎて、三人は何も言い返せない。白虎はその様子を苦笑しながら見ていた。

そして、教皇はすぐに話題を転換した。

「しかし、翔馬と黄金聖衣を賭けてバトルか……。白虎も随分舐められたものだな」

「……ええ、全くですよ」

白虎は『ハア』と溜息をついた。

この賭け事、クオーツがどれだけ翔馬を信頼し、強いと思っっているかが分かったのと同時に、賭けの内容から、白虎も随分と舐められていたことが分かる。

水鹿も溜息を吐きながら、二人の会話に混ざった。

「確かに翔馬は優れてはいますが……青銅は青銅ですよ」

確かに翔馬は強い。少なくとも、そこらへんの青銅聖闘士では歯が立たないであろうが、青銅は青銅だ。その証拠に、獅子座の聖衣の時、白銀聖闘士の水鹿はしっかり足止

めができていた。

「白銀のオレからしたら、青銅の中で突飛して優れている、というわけでも無さそうです。敏捷性には長けておりますが……ただ、それだけです」

水鹿は自分のなりの翔馬の印象と分析を教皇に伝えた。教皇は興味深げに『なるほど』と感嘆していた。

白虎もとても感心したようで、今の話を聞いて、思い浮かんだ疑問を水鹿に投げ付けた。

「じゃあ、あの素早さをどうにかすりやええつてこと？」

「そういうことだな」

白虎の問いに、水鹿はコクリと頷いた。

「小宇宙の大きさより、まずはあの敏捷性を抑える方が手っ取り早いだろう。闇雲に小宇宙を大きくするだけでは——先に力尽きるだけだ」

「……尤もやな」

白虎は前に翔馬と小宇宙をぶつけ合った時のことを思い出し、脂汗を掻きながら、コクコクと頷いた。

「白虎よ、どうにかなりそうな技はないか？」

「そんなんあつたら既に使うてるわ！」

水鹿に問われ、白虎は『ハア』と溜息を吐いた。

(——まあ、あることにはあるんやけどな)

白虎は自分の手のひらをギュツと固く結んだ。

かつて、水鹿や教皇には一度見せた技があつた。たった一度つきりであつたので、二人は既に忘れていられるのかもしれない。

——猛虎烈風紫電拳より大きな嵐を起こし、廬山昇龍覇より鋭い拳を放つ、あの技を。

その技は威力の大きき通り、己の小宇宙を大きく消費し、周りに迷惑をかけるがゆえに、今まで出そうと思わなかつたものである。しかし、一撃必殺としてなら賭けても良いものであつた。

(……その時のわいの判断に委ねるしかないな)

出来ればあまり使いたくはない。しかし、出さなければならぬ時は出す——それが白虎の考えであつた。

(どちらにせよ、わいは全力で行かせてもらうで、翔馬。じゃなきや、この戦いの価値はないからな)

一方の翔馬は、聖域の外れの方でクオーツについて行くか、白虎達と共に戦うかで悩んでいた。

クオーツは自分の強さを初めて認めてくれて、こうして使命を与えてくれている。しかし、白虎は強さと同時に自分を一個人として認め、手を差し伸べてくれている。

(自分の幸せを取るか、他人を取るか……ということかもしれない)

今回の戦いは黄金聖衣と同時に、それがかかっているようにも感じ取れた。

ここで白虎に負けたら、クオーツは自分を捨てるかもしれないだろう。なぜなら、クオーツは翔馬の強さを買って出たのだから。しかし、白虎に勝つことが出来れば、クオーツにそのままついていくが出来る。そして、褒めてくれる。

可能性として高いのは、自分が無事に白虎に勝ち、聖域にある黄金聖衣全てを持っていくというシナリオであろう。

(……でも、自分の正義は……)

——そこにはなかった。

実は既に答えは出ていた。白虎に再び手を差し伸べられた、あの時から。自分の『この世界での』居場所はクオーツの元ではなく女神と聖域にある、と強く感じ取っていた。聖闘士ならばそれが当たり前だからである。

(……だが、だからと言って、この戦いを放棄するわけにもいかない)

先程も言った通り、黄金聖衣と同時に、クオーツを取るか、自分を取るかがかかっているのだ。そして、戦うと決まっている以上——逃げることは許されない。聖闘士とい

うのはそういうものである。

(女神よ……貴女は俺をどちらに導いてくれますか——……)

——翌日。

闘技場で、龍星座の聖闘士の少年と天馬星座の聖闘士の少年が、お互い睨みをきかせながら立っていた。白虎と翔馬である。

教皇は模擬戦という名目を立て、二人の戦いを見守ることにした(実際に模擬戦を行い、自分の実力を確かめる聖闘士もいる。ただし今回のように、教皇立会いのものである)。杯座の水鹿と祭壇座の海鳥もその横で、二人を見守っていた。

「模擬戦とはいえ……裏で大きなモノが賭けてられていると、すごい緊張感があるな……」

水鹿の言う大きなモノは、聖域にある黄金聖衣全てのことだ。

「模擬戦というのはあくまで便宜上ですからね。二人はお互い全力でぶつかり合うつもりかと思えます」

と、海鳥。

本来、模擬戦というものは緊張感は走るが、手合わせみたいな雰囲気、ここまでではない。しかし、白虎と翔馬に走っている雰囲気は全力かつ、本気のものであった。

三人が見守る中、翔馬は戦いの前にでも、というように口を開いた。

「——龍星座、お前は俺が黄金聖衣を賭けるように、お前は何を賭ける？」

「……」

白虎は睨みをきかせていた目を瞬時に止めた。

翔馬は目を閉じ、腕を組んだ。

「こちらの黄金聖衣か？」

白虎は間を少しだけ置いて、その問いに対し、コクリと頷いた。

「……せやね。それもそうだけど」

白虎は翔馬のことを右人差し指で、突くように指した。

「わいが勝ったら、翔馬。アンタを何が何でも、こっち側の人間にしたる」

翔馬は一瞬黙り込んだが、その後、予想通りと言わんばかりの微笑みを浮かべた。

「……ああ」

ジリツと後ろに足に重心をかけ、翔馬は攻撃体制に入った。

「俺も負けたら、そつちの人間になるつもりではいる」

「……そつか」

白虎は微笑んだ時、その時、戦いは始まった。

最初は翔馬の拳からである。持ち前の敏捷性を活かし、先制を仕掛けたのである。

(…………この硬さ……………っ!?)

しかし、拳を受けたのは白虎でなく、白虎の左腕についていた龍星座の盾であった。白虎は翔馬が先制攻撃を仕掛けるのを読み取っていたのか、自分の龍星座の聖衣についていた盾で、自分の身を守り、防御していたのだ。

「龍星座の盾……………」

「ああ。アンタのペガサス流星拳の前だと無力になってしまっただけだな」

「こういう連続攻撃でないものなら、白虎の実力でも防ぎきれ、ということらしい。翔馬は白虎から離れながら、龍星座の盾についての言い伝えを思い出し、呟いた。

「確か、龍星座の盾は青銅の中でも……………」

「せやで。五老峰の滝に何百年も何千年も打たれ——とうとう青銅聖衣随一の強度を誇るようになったんや」

白虎はそつと、龍星座の盾に触れながら、翔馬に簡単に解説した。

龍星座の聖衣は、飛流直下三千尺と言われる廬山の滝の大瀑布の水に打たれ続けたことにより、青銅聖衣の中でも随一の強度を誇る盾と右拳をその身に持っている。

しかし、白虎程度の聖闘士が青銅聖衣の中でも最強と謳われかねないものを扱うには、まだ厳しいものがある。

「だから、わいは修行と鍛錬を重ねているんや。この聖衣に恥じないような強さと、強い

心を手にするためにな！」

白虎はそのまま大きく跳ね上がり、右拳を翔馬に向かって放った——が、やはり翔馬の早さは白虎の攻撃は目でもないようだ。白虎の拳は闘技場の地面に大きな亀裂と、浅く大きな穴を開けたのみであった。

「ちっ！　ちよこまか逃げよるなあ！」

白虎は舌打ちをし、翔馬が逃げたと思わしきところへ視線を回した。

「龍星座の名に恥じない強さを手にする——その心意気は嫌いではない」

翔馬はスツと目を開き、天馬星座の13ある星の軌跡を、大きく腕を回し、描き始めた。

「だが、それでも俺には敵わない！」

ぐつと全身に小宇宙を纏い、翔馬はそのまま白虎に対して、天馬星座が翔けるような速さの高速拳を繰り出した。

「ペガサス、流星拳——ツ！」

「ぐっ！」

（やっぱり来たか！）

白虎程度では見えないこの高速拳。

聖闘士には一度見た技は通じない、という例えがあるが、このペガサス流星拳は一度

見ても再び当たりそうな高速拳だ。例え見極められても、向こうが放ち続けられればそのうち当たる。流星拳とはそういうものである。

「はあっ！」

「い、つつ！」

トドメにでもと最後に強いパンチの一撃。白虎はそのまま向こうの壁側まで飛ばされた。

「ぐ、うっ……」

白虎は立ち上がろうと、よろついた足にぐつと力を入れた。

「白虎！」

「白虎さん！」

「白虎……！」

その姿を見た時、傍観している三人は心配から思わず白虎の名を口に出した。

「大丈夫や……まだやれる！」

白虎はそう言いながら、『ハアハア』と息を荒げつつ、その場に立ち上がった。そして、翔馬と自分の拳を見比べた。

（やっぱりアイツ……強い！ 強いよ！）

白虎は改めて、自分と翔馬の力の差を比べ、愕然とした。

白虎がボロボロなのに対し、翔馬は余裕そうにそこに立っている。翔馬に対しここまです傷一つ付ける余裕がない。

気付けば、翔馬は自分の小宇宙を先程流星拳を撃った拳に貯め始めていた。

「な、何を……………」

「……………ペガサス流星拳よりも強い技を……………お前に浴びせるつもりで来た」

「……………」

そう、先程白虎が浴びたペガサス流星拳は、翔馬からしたら牽制に過ぎなかったのだ。ペガサス流星拳はこれから来る技の前座だったのだ。

（そん、な……………」

牽制でここまでやられて、その上それ以上の技に更にやられるというのか。

「勝利は貰った……………」

翔馬はそう言いながら、白虎に向けて拳を放った。

「ペガサス、彗星拳——っ！」

最初はペガサス流星拳と同じように技を放ったかと思えば、瞬時にペガサス流星拳の威力が一点に集中した。それはまるで彗星のような流れ弾であった。

白虎はまずいと思いつつながら、それに対抗するように技を放った。

「猛虎烈風紫電拳——っ！」

白虎の猛虎烈風紫電拳により、翔馬のペガサス彗星拳に向かつて大きな竜巻が放たれた。しかし、彗星拳はそれを一蹴するかのようになり、白虎の方へと向かった。

「なっ……！」

「無駄だ！ 俺の彗星拳の前では何も通じない！」

翔馬はそう言いながら、彗星拳に充てる小宇宙をどんどん大きくしていった。

「っ！」

白虎はそのまま何もできず、じつと立ったまま、彗星拳の餌食となった。

「白虎——っ！」

一番最初に白虎の名で叫んだのは水鹿であった。海鳥や教皇も思わず脂汗を一滴垂らしながら、その場を見届けていた。

翔馬は少しだけ息を荒げながら、彗星拳を放ち、煙が立っている方を見た。

(……彗星拳をまともに受けて無事なはずがない、な……)

ペガサス流星拳でポロポロにやられ、そして今の彗星拳を浴びるといふコンボ——無事ではないが、ないだろう。

(俺の勝ち、だ……)

翔馬は一息吐き、『やっと決着がついた』と、安心しながら、闘技場を去ろうと背を向けて歩き出した。

——しかし、それは一瞬の安堵に過ぎなかった。

突然、白虎の小宇宙が増大に膨れ上がり、それが闘技場を包んだ。その圧力は並のものではなかった。

翔馬は何事かと、白虎の方へと向き直した瞬間であった。

「うおおおおお—— ツツツ!!!」

白虎が大きな雄叫びを上げながら、全身に力を入れ、「ガチャンツ」と音を鳴らし、聖衣をその場で脱いだのである。

「白虎!」

「白虎さん!」

「……」

「ど、龍星座……! 貴様……!」

一同が驚くのも束の間、白虎はフンツと腕を曲げ、勢いよくそれを後ろへ揺らした。そして、いつものように八重歯を見せて、笑ったのだ。

「ギリギリだったけどな、アンタの彗星拳、わいの声で十分、防衛できたで!」

「声……!?!」

そういえば、と翔馬は思い返していた。

昨日の朝、白虎は聖域どころか、その近隣にある村まで聞こえるように、自分の小宇

宙に声を乗せていた。もしかして、その応用がここで効いたでも言うのか。

「普段は煩い煩い言われてな、こういうことできへんけど……ま、今回は物も賭かつてる真剣バトルや。わいの一番の武器の声も使わせて貰うで」

「……っ！」

(声が武器の聖闘士など……！)

聞いたことがなかった。

過去には声を技に取り入れていた聖闘士もいたかもしれない。しかし、己の声そのものが武器という聖闘士はなかなか存在しなかったものだ。

「と、本気の本気で全力で行かせてもらう前に、わいの背中見てみるか？」

「背中……っ？」

「よっ」と

白虎は翔馬に背を向け、それを見せつけた。翔馬は『一体何が？』と目を凝らした。その視線の先には――。

「……っ!？」

――白虎の刺青であった。

己の名前の通り、白虎の背中には、中国の四神の一匹である白虎がそこに刻まれているのである。

「んー。ひっさびさに、わいの背中の虎ちゃんを出したわー。最後に出したのいつだったっけなー」

白虎はニコニコ笑いながら、翔馬に話しかけた。

翔馬はその白虎のいつもと変わらぬ笑みが、突然怖く見え、ビクツと肩を震わせた。「ま、細かいことはええか。今はバトルバトル」

「……っ！」

(「いっ……一体……」)

背中の白虎の刺青を浮かべ、聖衣を突然脱ぎ捨てて、この目の前にいる龍星座のは一体何を考えているのだろうか。

特に、自分の身を守る聖衣を脱ぎ捨てるなど、普通の聖闘士ならやることではない。何故ならば、自分から死に行っているようなものだからだ。

「そんなわけで、次はわいの番やな」

白虎は両足を肩幅まで広げ、両手は体の横へ——一般的な歌う体勢になった。翔馬はグツと構え、気を落ち着かせた。

(恐れるな、翔馬……ただの声だ！)

そして相手は、その身に纏っていた聖衣を脱ぎ捨て、今や裸も同然だ。聖衣を纏っている自分に勝てるはずがない。

「……だあああああ—— ツッ!!!」

翔馬は歌う体勢に入り、そこから一步も動かない白虎に攻撃を仕掛けた。

最初は白虎の身にペガサス流星拳を再び叩き込もうとした。

しかし、その試みも白虎の声により、容易く打ち砕かれた。

「fermate (フェルマータ) ……!」

白虎がそう強く言い放った瞬間、突然翔馬の体が一気に重くなった気がした。

「うっ、ぐっ……!」

その場で翔馬の体が、崩れるように、膝をついた。

「……しばらく、そこでジツとしてな?」

白虎は翔馬にフツと微笑んでから、両腕を体の前で交差させた。

それから一秒もしないうちに、翔馬は白虎から更なる小宇宙を感じ取った。

(こ、これは……危ない……!)

しかし、翔馬は未だに動けずにいた——いや、動けなかった。白虎のfermate

(フェルマータ) が体にしがみ付き、離さないようだ。

白虎は目を閉じ、翔馬に話し始めた。

「あんまりな、この技出しとうないんよ。周りに迷惑かけてまうから」

「……な、何を……」

「でも、アンタはその技を出させる気にした。いや、出さざるを得ない」
「……………」

「受けてみ？ わいの大技、遊舞乱虎をな……………」

白虎は歌のリズムを踵で取りだした。

「abmarsch（アプマーシユ）……………」

その瞬間、闘技場に白虎の綺麗な歌声が流れ始めた。

翔馬と観客側の三人はただ、ひたすらそれを聞き続けるのみだった。

「寂しさを感わず、風に……………」

そこに入った瞬間、白虎は腕を動かし始め、日本舞踊でいう、『舞い』を踊り始めた。そのしなやかに翔馬は啞然としていた。

（男だからって、舞を踊らないっつーのは単なる偏見つてもんや……………」

白虎は舞を踊りながら、改めてそう思う。

白虎が舞に出会ったのは、親と共に日本に亡命中の頃だった。その頃の白虎はとても小さかったものの、偶然親と見に行った、巫女舞にとても魅了された。

洗練された動きとしなやかさ、そして、それら全てが合わさった美しさは、そこらのヒップホップダンスや若い子達が踊るような派手な踊りにはなかったものだ。

しかも、その踊り手が女装した若い男性であり、白虎は大層驚いたのである。

(だから、わいも踊りとうなつたんよ。歌と共に——……)

そして白虎は聖闘士を目指し始めても、歌は勿論、舞の練習も欠かさなかつた。どちらもほぼ独学で、趣味だつた。

しかし、どちらも戦闘に使えるように、白虎の師である教皇はしっかり仕向けてくれた。歌や舞が得意ならば、それを活かせば良い、と。

(そして出来たのが——今の技！)

丁度良いタイミングで曲のサビ部分に入り、白虎は舞の動きを一旦止め、攻撃体制に入った。

「attacca (アタツカ)！」

白虎がそう言い放つた、次の瞬間。翔馬に目掛けて、大嵐が襲つた。翔馬は避けようにも、白虎のフェルマータによって未だに動けなかつた。

「うっ、ぐうっ……！」

今まで傷が一つも付かなかつたといつても過言でない天馬星座の白い聖衣が、その大嵐によりヒビが入り始めた。

「foco (フォーコ)！」

白虎が一声上げるたびに、その嵐はどんどん大きくなり、激しくなつてゆく。

「allegro (アレグロ)！」

「…………ぐあつー！」

とうとう翔馬がその激しさを耐えきれずに、後ろに後退し始めた。

気づいた時には、既にその嵐は、白虎を中心に闘技場全体を包み込んでいた。教皇や水鹿や海鳥も、その中に引きずり込まれまいと必死に体に重心をかけていた。

「やつぱり、この技凄いですね…………！」

「ああ、相変わらずの強風だ…………！」

この技を以前に一回だけ見ていた水鹿と教皇は、そのことを思い出しながら、この大嵐に耐えていた。

「白虎さんはやつぱり…………！」

「そうだ…………廬山系の力技よりは——こういう技の方が性に合っているんだ」

教皇は大嵐に耐えながら、目を細めて白虎を見た。

白虎は性格からして、廬山昇龍覇みたく筋が通った拳よりも、猛虎烈風紫電拳や、今の遊舞乱虎といった大嵐や竜巻を起こすような拳の伸びが良かった。だから、歌や舞を取り入れた技も、一見優雅そうに見えて、実は拳単体そのものは荒っぽい。この大嵐は踊りの勢いと、歌のリズムに、猛虎烈風紫電拳の拳が合わさった結果のものだ。

白虎は右腕を大きく振り上げ、そこから強い拳風を巻き起こした。

「con forza（コン フォルツァ）！」

「——っ！」

その時、闘技場の壁や床が一気に崩れた。大嵐により、その破片達は大きく空中に舞い上がり、埃を立てていた。

闘技場が丸々一つ崩壊するのかもしれないというぐらいのものであり、それは尋常ではなかった。

「これ以上ここにいられないな……！　一旦外に退避するぞ！」

「はい！」

「了解！」

観客側にいた三人はすぐさま闘技場から出て、それを見守った。

外から出て、その技の威力を改めて確認した海鳥の第一声がこれである。

「これ、翔馬さん生きてるかな？！」

——この意見は最ものことであった。

闘技場から出たというのに、技の威力のせいで地面は激しく揺れ、軽く地割れも起こしていた。立っているのもやつとだろう。

こんな激しい技を直に受けている翔馬が、聖闘士とは言えど、無事でいられるはずがない。

「アイツのことだ。ちゃんと急所は外してるとは思うが……」

水鹿は目を細めた。

急所を外してくれてはいるかもしれないが、ここまでとなると、そんな呑気なことを言っているならなかった。

しばらくすると、揺れは収まり、闘技場からの強大な小宇宙も落ち着いていた。

「……終わった、のか？」

「……いや」

水鹿の声に、教皇は首を横に振った。

それから一秒もしないうちに、猛烈な爆風が闘技場の入り口を通って、こちらに襲いかかってきた。

「——っ！ 余波か！」

「何て凄まじい……！」

入り口という小さな穴から出てくる爆風は、並みのものではなかった。この小さな面積から出てくる爆風でも、人三人分は吹き飛ばすことは可能であろう。

「教皇……！」

「た、耐えろ……！ 今は耐えるしかない！」

余波が収まり、技を出し終えたところで、白虎は翔馬の姿を確認した。

「……あつ！」

翔馬は見事に吹き飛ばされ、壁に激突したらしく、壁の目の前でうつ伏せになって倒れていた。

白虎はかなり体力を消耗していたが、どうにかして翔馬の元へと駆け寄った。駆け寄れば、即座に翔馬の体を揺さぶり、意識を確認した。

「翔馬！ 翔馬っ！ しつかりせいよ！」

「……う、うう」

翔馬は声をかけられれば、小さいものの、若干呻きを交えた声を上げた。

「良かった……」

（生きてる……）

白虎が翔馬の意識を確認し、安心したのも束の間、白虎自身の意識もすぐに遠退いた。

——遊舞乱虎を放った反動である。

「——っ！」

歌と踊りと、激しい大嵐を巻き起こす技は、どう見ても白虎に負担がかかっていた。

どうにかして、一回は持ち堪えたものの、翔馬を担ぐ力はそこにはなかった。

（あ、あかん……このままじゃ……）

いけない、と思いながら、白虎はなんとか持ち堪えようとした。しかし、白虎の意識

はそこで途切れた。

次に白虎が気が付いたのは、聖域の保健室にあたるであろう、医務室であった。

ベッドからむくりと起き上がり、自分の姿を確認し、キョロキョロと辺りを見渡した。

(……あ、そっか)

遊舞乱虎を放ったことにより、小宇宙や体力を一気に消耗した反動で、今まで気絶していたのだ。

ここまで白虎を運んだのは大方、水鹿であろう。その証拠に杯座の聖衣箱が床に置かれていた。

(……って、あれ……翔馬は?)

一方の翔馬は自分の遊舞乱虎によって倒れ、一人では動けなかったはずだ。

「……」

(今回はどっちの勝ちやろうな……)

自分は翔馬を倒した。しかし、白虎が遊舞乱虎の反動により、数分で倒れてしまった。

(……確認しに行かなあかんあ……って、ん?)

白虎がハア、と溜息を吐きながら、ベッドから降りようとした、その時。丁度水鹿が翔馬を連れて、この医務室の中に入ってきたのである。

「白虎」

「……」

水鹿は微笑み、一方の翔馬は目を伏せて誰とも目を合わせようとしていなかった。

「水鹿……それに翔馬……」

白虎がほかんとしているのも束の間、水鹿は白虎の肩に手をポン、と置いて、コクリと頷いた。

「安心しろ。今回はお前の勝ちだ」

「……」

白虎はパツと翔馬を見た。

それに気付いた翔馬は、遠慮がちに白虎に歩み寄っていた。

「翔馬……」

「……杯座の言う通りだ。今回は俺の負けだ」

白虎は水鹿と翔馬を交互に見た。

「……ホンマに、わいの勝ちでええの？」

白虎が翔馬に問えば、翔馬はその問いにコクリと頷いた。

「先に倒れたのは俺だから……俺の負けで良い」

「……」

白虎が驚きつつも、もう一度水鹿の方を見ると、水鹿は微笑みながらコクリと頷いた。
 「後はクオーツの場所探しと、黄金聖衣を取り返すことのみだ」

「……うん！」

コクリと白虎は頷いた。

そうだ、自分は翔馬に勝ち、聖域にある黄金聖衣の引き渡しをせずに済んだのだ。あとはクオーツを倒すのみだ。

——そのためには。

「翔馬」

「……」

「わいらと……ついてってくれるな？ そういう約束やったもんな」

白虎は三度目の正直と言わんばかりに、前と同じように翔馬に手を差し伸べた。

これから先は、クオーツのことをよく知っている翔馬の力が、嫌でも必要になる。

しかし、翔馬は戸惑いながら、その手を見ていた。聖闘士として聖域側につくのは良かったが、本当に自分が白虎達についていても問題ないのか——それだけ心に引っかかっていた。

水鹿は『ふう』と溜息をつき、言い放った。

「翔馬。お前は複雑な心境かもしれないが……オレ達と共に戦ってくれないか？」

水鹿も白虎と同じように、自分の手を差し伸べた。

「水鹿……！」

「お前が今まで一人で戦ってきたのは分かった。でも、一人ではできないことも沢山あつたらう？ それに、一人よりも二人や三人の方が良いことも——お前も分かっているはずだ」

「……！」

「どうする？ オレらはお前のために手を差し伸べてはいるが——お前がそれを受け止めるかどうかは自由だぞ」

「うん。わいらは勝手にアンタに差し伸べてるだけに過ぎんよ。だから、ここから先はアンタの好きにしてもええよ」

「……」

二人の温かな小宇宙が翔馬を包み込むように、そつと輝いていた。

ちゃんと自分と対等に接してくれた龍星座の少年と、敵である自分を心配してくれた杯座の青年。

（俺は……）

あつちは何度も何度も差し伸べてきてくれた。

——でも、結局それを手にすることはできなかった。

これ以上迷っても仕方が無い。

それに、あつちが差し伸べてきてくれた時、自分は今までどう返していた？

——答えはもう既に見えていた。

「翔馬……！」

「これがお前の結論か」

白虎と水鹿はギョツと翔馬の手を、嬉しそうに握った。

翔馬は、白虎だけでなく、水鹿の手にも自分の手を置いたのだ。

「二人とも、今まですまなかつた。そして——ありがとう」

気が付けば、翔馬の目からは幾多となる涙が溢れ出ていた。

「ここが自分の居場所なのだ、と翔馬は自覚した。

クオーツのところでもない——この、場所が。」

10：「クオーツの目的」

その日の夜、翔馬はボロボロになった天馬星座の聖衣と一夜を明かしていた。翔馬はオブリエ形態の天馬星座の聖衣を撫でながら、話しかけるようにして呟いた。

「なあ、天馬星座……俺は本当にクオーツの所に戻らなくて良かったのか……？」

翔馬はどうしてもクオーツのことが気掛かりであった。

二人は長い間一緒にその時を過ごし、お互い信じ合っていた。だから、翔馬が白虎に負け、結果的に聖域側につくことになったことを、クオーツはどう思っているのか——気になって仕方がなかった。

「例えば、それが間違っていたとしても……俺は無理にでも……クオーツについて行くべきだったのかな……」

その時、天馬星座の聖衣が『いいや、これで良かったんだ』と言うように一瞬光を纏った。

翔馬は一瞬驚きつつも、『そうか、そうだな』と納得し、コクリと頷いてみせた。

「お前は俺と出会うまでに、何度も大きな敵と戦ってきた。何度も、何度も……」

天馬星座の聖衣の上に、一筋の水がポトリと滴り落ちた。

——翔馬の涙である。

「だからこそ、悔しい……………！ 他人に悟られてやつと気付いたこと……………！ 他人に惑わされる自分が一番バカだったことに気付いたことも……………！ 天馬星座の聖闘士として、女神の聖闘士として、してはならない失態をしてしたこと……………！ 全部……………全部……………！」

クオーツに言われて、それを全て信じ込み、他人に悟られるまで気付かなかったこと。自分が今までやってきたこととは一体何だったのだろうか。

「天馬星座……………俺は……………今からでも、やり直せる、かな……………。使命だからとはいえ、龍星座にも酷い目に合わせて……………」

今までに自分のしたことが、突然翔馬の胸の中の奥から込み上げてきた。

「俺……………聖闘士として、自分として……………やり直せるかな……………」

もし、そう決めたとして、聖域の皆は許してくれるだろうか。

今までしてきたことは、自分の中でも、聖域にとつても拭いきれない歴史として残るだろう。しかし、その分、どうにかして取り戻したかったのだ。本当の正義に生きることができなかつた、この、二年間を。

天馬星座の聖衣は、温かい小宇宙を放ち、そして、その小宇宙を翔馬を包み込んだ。

「……………天馬星座……………」

翔馬はハツとした。

天馬星座は自分を応援しているのだ。また、聖闘士として、自分として再び立ち上がろうとしている自分を。

「……そうだな。ありがとう、天馬星座」

翔馬はそう言つて、涙を拭き、外を見上げた。

(そうだ……天馬星座の聖衣が応援してくれている……その応援に応えるためにも……)

「全てに決着をつけて、終わらせよう。新しい仲間と共に——！」

翌朝。快晴と言うには十分な快晴であった。

そして、聖域の入口付近。白虎、翔馬、水鹿、ついでにラピスも加えた四人でそこに立っていた。

これから、クオーツの元へ翔馬が案内し、黄金聖衣を取り戻す。これが、今から四人がすることだ。

「翔馬……」

白虎は心配そうに翔馬を見つめていた。翔馬は『大丈夫だ』と白虎にアイコンタクトを交わし、コクリと首を縦に振った。そして、ラピスの方に視線を向けた。

「双子座……ついてきて良かったのか？」

「……うん」

翔馬の問いに、ラピスは軽く微笑み、コクリと頷いた。

「クォーツのことで一度確認したいことがあったからね。それに、双子座の黄金聖衣のこともあるし」

「……そうか」

ふ、と翔馬は複雑な顔になった。

双子座の聖衣は自分がラピスから横取りし、クォーツの元へとやった。改めて思い返すと、心に引っかかるものがある。

ラピスはそのような翔馬の心境を理解してか、『良いんだよ』と笑いかけた。

「今は善悪の判断がついて、反省してるんでしょ？　なら、別に良いじゃない」

「双子座……」

「大切なのは今だよ。今、自分がすべきことを見つめて、それを果たす。だから、過去のことをごちやごちや気にしたって仕方ないよ」

『でしよ？』とラピスは首を傾げた。翔馬は少し微笑んでから、『そうだな』と頷いた。

「双子座……すまない」

今は自分より幼い姿とはいえ、やはり、中身は自分より倍を生きた姿そのものだ。自

分など、比にならないぐらいに、その姿はとても落ち着いていた。

ラピスは『フフツ』と微笑みを浮かべながら、三人の前に出た。

「いや、良いんだよ。じゃあ、始めようか」

ラピスは白虎、水鹿、翔馬の三人を真摯に見つめた。三人はラピスのその真摯な見つめ方から、変なプレッシャーがかかり、思わず緊張してしまった。

ここにいる人物達が真剣になる中、ラピスはまずは翔馬を名指しし、命じた。

「まずは翔馬。クオーツとかつて住んでいた所を想像して」

「……えっと、こ、ここうか？」

翔馬はラピスに言われるがままに、クオーツと住んでいた場所をイメージした。

聖域の山の裏手——暗く、夜は真っ暗な——そして、こじんまりし、部屋は三つ程度に分かれている小さな小屋——そして、謎の扉——……。

思い出せる限りのことを思い出した。

ラピスは『よし』と、頷きながら、小さな体にある小宇宙を掻き集め始めた。
「そのままイメージを続けて」

「あ、ああ……」

翔馬は言われるがままにイメージを続けた。

そして、いつしか、ラピスは己の小宇宙を爆発させ、異次元への入口——アナザーデイ

メンションを発動させた。

「……………」

それに気付いた翔馬、白虎と水鹿は酷く驚いたような表情でそれを見ていた。

「クオーツと……………」

「同じ……………」

白虎と翔馬の心臓がドクン、と勢いよく波打った。水鹿もどこかしら、険しい表情で入口を見つめていた。

そう、アナザーデイメンションは、クオーツが移動の際によく利用していた技だ。何度も翔馬を引きずり込み、白虎の手に触れさせなかった——あの技。

「は、早く……………早く入って……………」

気付けば、ラピスは苦しそうな顔で、アナザーデイメンションの入口をどうにか保たせていた。

「ラピス……………」

「この体と小宇宙で作ったアナザーデイメンションは、長くは保たない……………！ だから早くっ！」

ラピスの腕からは、血管がピキピキと張り詰め、今にもそのまま血を出しそうな勢いであった。

白虎達はコクリと頷き、意を決して、アナザーディメンションの入口へと飛び込んだ。ラピスもすぐ、その後に続いて、飛び込んだ。

飛ばされ、辿り着いたのは、山の奥の方の、しかもかなり裏手にある場所であった。白虎はすつくと立ち上がり、辺りをキョロキョロと見渡した。

昼だというのに、そこは暗く、生き物もいるかどうか。しかも、今は11月で、草木の葉っぱは大方枯れて、それなりに太陽が差し込むはずなのだが、それでも暗かった。

そうして、白虎が辺りを観察していると、肩に人の手の感触を感じた。

「ふ、ふにやあああああ——ツツツ?!?!」

思わず奇声を発した。しかも、それに小宇宙を乗せていたため、周りの草木が折れたり、飛ばされたりなど、白虎の周りの草木は悲惨なことになっていた。

「な、ななななな、な、何やねん!?!」

白虎はガバツと振り向くと、そこには、耳を抑え、呆れた表情を浮かべていた杯座の聖闘士の姿・水鹿の姿があった。

水鹿はジロツとジト目で白虎を見つめた。

「白虎……」

「た、たはは……」

白虎はどういう反応をして良いのか分からず、思わずわざとらしく笑ってしまった。水鹿は溜息を一息吐き、白虎から手を離れた。

「で、ここはどこだ？ 見た所、山の中ではあるが」

「——俺とクォーツの住処だ」

水鹿の問いに答えるように、翔馬は二人の後ろから、ざつと足音をたてて出てきた。

「翔馬……」

「……で、ずっと俺たち二人は暮らしてきた。誰にも悟られずに……」

どことなく、翔馬の横顔は寂しそうであった。

やはり、二年間クォーツと共に過ごしてきた翔馬からしたら、どこかしら名残惜しいものがあるのであろう。

その翔馬の後ろから、ぴよこん、と可愛らしい足取りで出てきた少年の姿があった。

「良かった成功したんだ」

「ラピス……」

「良かった良かった」

ラピスはニコツと微笑み、頷いた。

「最初は失敗するかと思ってただけだね。この体だし……限界もあるから」

ラピスの今の体と小宇宙では、これが精一杯だと言わんばかりであった。

「あと　は、あの建物の中に入って、クオーツを倒す。異論はないね？」

「ああ」

「勿論や」

「……」

ラピスの意見に、三人は異口同音にコクリと頷いた。

そして、翔馬は一人、建物に近付くように一歩だけ足を前に出し、皆に言った。

「——ここからはお前達を捕虜としてクオーツの元へ連れて行く」

「えっ!？」

突然の翔馬の捕虜になれ発言に、白虎は目を見開いた。何となくだが、察した水鹿とラピスは特に驚く様子もなく、そのあとの翔馬の話を聞き続けた。

「そして、俺が隙を作る——そうしたら、そこをお前達が突け。チャンスは一度しかないぞ」

「……!」

翔馬はコクリと頷き、白虎達にアイコンタクトを交わした。

クオーツは長い髪の毛を床につけ、足を組み、椅子に座っていた。そのクオーツの目の前にやってきた天馬星座の少年——翔馬である。

翔馬は後ろに白虎、水鹿、ラピスの三人を引き連れ、クオーツの元へと歩いて行った。

「翔馬」

「……」

クオーツにその名を口にされた翔馬は、歩くのを止めて、その場で跪いた。

「無事に龍星座の白虎との戦いに勝ち、こうして捕虜として連れてきた所存でございませぬ」

「ほう、捕虜か。慈悲深いお前らしいな」

クオーツはククク、と音を立て、不気味に笑ってみせた。

「それで、黄金聖衣はどうした？」

「一度に持ち帰るのは厳しいものがございまして……」

「そうか。ならば、後で私自ら赴こう」

「……はい」

翔馬と三人の間にピリピリと緊張感が走る。

隙は一度しかない——……どうやってその隙を突くか——……。

（白虎）

（……水鹿？）

水鹿は、小宇宙を使い、直接白虎の脳内へと語りかけた。

(先ほどから、変な小宇宙を感じないか?)

(変な……小宇宙?)

白虎は水鹿に言われ、すつと周りの小宇宙を意識し始めた。

確かに、水鹿の言われた通り、どこから変な小宇宙を感じ取れた。それは自分達青銅聖闘士白銀、そしてラピスは勿論、クオーツのものでもなかった。

(一体どこから……)

白虎と水鹿は今すぐ家宅捜索をしたかったが、今は名目上、捕虜である自分達では迂闊な行動を取れない。

正体が暴露でなければ、外見は11歳のラピスに、純粹無垢な子どもを演じさせ、探りを入れることもできるのだが、相手はラピスをこんな姿にした張本人だ。それもできない。

翔馬はそんな三人の様子を察してか、クオーツに話を切り出した。

「ゆえにクオーツよ。先ほどから、このものではない小宇宙を感じ取れるのですが……」

「おお、そうだったな」

クオーツは翔馬のその一言で、すつと立ち上がり、四人に背を向けた。

「捕虜共も来い。案内をしてやろう」

「は……」

白虎と水鹿は翔馬に『グッジョブ！』だの『ナイス！』だの小宇宙で語りかけた。当の翔馬はそれに対して、『まるで緊張感が無い奴等だ』だと鬱陶しく思っていた。

クオーツは自分以外誰も入れたことがないという、地下室への扉を開き、自分先頭に四人を引き連れた。

地下室への階段は水滴や埃で汚れおり、白虎は時折その埃でげほげほと咳き込んでいた。

翔馬は心配になり、こつそり声を掛けた。

「龍星座……」

「わいな、昔から埃に弱いんよ。気にせんといて」

「……ああ」

そう言われると余計に気になってしまいが、本人が気にするなど言っているのなら、気にしない方が良いだろう。

クオーツは歩くのを止めた。

「……だ」

階段を下り終えると、すぐそこに大きな扉があった。

クオーツはおもむろに鍵を取り出し、その扉の施錠を開いた。ギイツと重たい扉が開かれる。

「……………」

四人の目に飛び込んだ情景は、信じ難いものであった。

暗闇で、明かりは上から漏れる電気という中で、人という人達が、透明の箱に入れられ、謎の機械によって小宇宙を吸い取られていたのだ。その中には小さな幼子の姿もあつた。

「い……………いつ……………や……………」

白虎は悲鳴を上げそうになつた声を、両手で抑えた。その時、顔面蒼白、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

「白虎……………大丈夫か？」

「う、うぐ……………」

シヨツクのあまりに倒れそうになつた白虎を水鹿はこつそり支えた。

白虎は昔、目の前で両親を殺され、こういうのを直視するのが一層苦手なのだろう。聖闘士である以上、こういう場面に出くわすのは当たり前のことだが——何もしていない一般市民のこういう姿は、白虎からすれば、とんでもない核爆弾だろう。

「……………極力目線を下に落として歩け」

「……………うん……………」

白虎はそう言われ、水鹿に支えられながら、目線を下にして再び歩き始めた。しばらく歩いて行くと、奪われた三つの黄金聖衣の姿もあった。

(……………ど、どういうこと?)

白虎が聞く前に、クオーツは答えた。

「(ト)は……………私の聖域だ」

「……………聖域、ですか?」

クオーツは翔馬の復唱に、コクリと頷いた。

「そうだ。この聖域さえあれば、私の若さも永遠のものとなる……………」

「……………えっ……………」

「フツ」

翔馬が驚き、クオーツがニヤリと笑うと、突然白虎が苦しそうに顔を歪めた。

「……………っ!?!」

あまりの苦しさに立っていられず、その場にしゃがみ込んでしまった。突然のことで水鹿も心配し、それに合わせてしゃがみこんだ。

「白虎……………!?!」

「ぐっ……………な、なに、これ……………」

(全身の力が……小宇宙が……だんだん……)

白虎の意識がどんどん遠退いてゆく。

「おい、白虎！　しつかりしろ！」

「すい、か……」

自分に必死になって話しかけてくれる水鹿の腕を、白虎はギュツと握った。

(……っ！)

水鹿は辺りを見渡した。クオーツのせいなのは間違いはないはずなのだが、こうなる原因が分からぬまま白虎が弱っていくことに耐え切れなかった。

気が付けば翔馬の顔も苦しそうに歪んでいた。

「翔馬！」

「……っ！」

翔馬はよろよろと、足をよぼつかせながら、キツとクオーツを睨みつけた。

「……ほう。二人の青銅聖闘士がやられてゆく中、その白銀聖闘士だけが無事とはな」

「……クオーツ……！」

「おっと、お前をこれで殺しはしないさ、翔馬。私が殺したいのは——その龍星座なのだからな」

「……っ！」

「……白虎を？」

水鹿はチラリと自分の腕の中で弱ってゆく白虎を見た。確かにこのままいくと、ぼつてり逝ってしまいそうではある。

クオーツは双子座の黄金聖衣を撫でながら、不気味な笑みを浮かべた。

「私はな、永遠の若さが欲しかったのだ。そのために聖闘士になつたと言つても過言ではないのだよ」

「……お、お前が聖闘士!?!」

真つ先に声を上げたのがラピスであつた。その顔は信じられない、と言つた様子であつた。水鹿はやはりか、と言つた様子で、クオーツの話聞き続けた。

クオーツは先程とは打つて変わつて優しくラピスに問い掛けた。

「ラピスよ——私を忘れたか？ 私はお前の師匠だ」

「……なつ……そんな……貴方が我が師、シリカ？」

ドクン、とラピスの心臓が大きく跳ね上がった。

シリカ——かつて、クオーツが名乗っていた名であろう。

「そうだ、ラピス。双子座のシリカ……忘れもしないだろう？」

「……っ！」

ラピスの脚が、あまりの精神的なショックでガクン、と下に下ろされた。

「何故、貴方が……こんな……。それに、貴方はこんな若くはなかったはずだ……！」
クオーツが双子座のシリカとして、ラピスに師事したのは、大体25〜15年ぐら
い前になるだろう。その時は、かなりヨボヨボのおじいさんだったはずだ。

ラピスが肩を震わせている中、クオーツは答えた。

「先程も言つたらう？ 永遠の若さが欲しいと」

クオーツはコツコツと靴の踵を鳴らし、この部屋の中核部といつても過言ではないで
あろう、大きな球体の目の前まで歩き、手を添えた。その球体はクオーツが触れると、電
気のように光り、火照った。

そして話を続けた。

「そのためには、色んな者達の小宇宙を吸い取る必要があった。ここにはそれが入って
いる……」

「俺の小宇宙も……？」

「ああ、入っている」

クオーツはコクリと頷き、話を続けた。

「私はラピスが双子座を継いだ後、様々な研究を重ね、とうとう、他人から小宇宙を奪い
取ることができた。その第一号がラピス——貴様だ」

「俺、が……?!」

衝撃の事実を一度に何度も聞いたラピスの脳内は流石にこんがらがっていた。

今、目の前に立っている黒ずくめの男が自分の師匠で、その師匠が若さのために自分の小宇宙を奪って——……。

「そして今度は黄金の輝きを放つ黄金聖衣の小宇宙を吸い取って、私は完全無敵となる……！」

「完全……無敵……」

「そうだ。それを果たすために、龍星座。貴様が邪魔なのだ……」

クオーツは視線を白虎に移した。その目は憎悪や怒りが込められたものであった。

「貴様さえいなければ——いや、その人格さえなければ、今頃翔馬が貴様を殺し、私は黄金聖衣を順調に回収していただろう」

「……」

「悪く思うな、龍星座。お前の小宇宙を吸い取り、私の若さの糧にするのだからな。寧ろ光栄に思え。ククツ……」

白虎の意識が遠退く中で、聞こえたクオーツの不気味な笑い声。それだけが妙に不快だった。

（今すぐ……ぶん殴りたい……）

動機はそれだけで十分だった。

白虎は水鹿の腕を掴む手にぐっ、と力を入れ、上半身を起き上がらせ、必死に足に重心をかけた。

「白虎……！」

「……っ！」

白虎は意識が遠退き、視界がどんどんぼやけて行く中、ギンツとクオーツを睨みつけた。

クオーツはそれに物怖じせず、白虎を嘲笑った。

「フツ、足掻いても無駄だぞ、龍星座。小宇宙を吸い取られている今のお前は、技を放つことすらままならんはずだ」

「んなこと……やってみな……分からん……！」

白虎はグツと拳に力を込めて、小宇宙を貯める。しかし、貯めれば貯めるほど、その分だけ小宇宙が吸い取られる。

「……くっ！」

「どうした？ 技を放つんじやなかったか？」

クオーツはそう言うのと、白虎の元まで近付き、白虎の腹を拳で殴った。

「ぐっ！ う……！」

小宇宙が体から抜け、全身に力が入らない白虎は、その一回の拳で力無く倒れた。

「龍星座よ、最後に言いたいことはあるか？」

「……」

クオーツが白虎に問いても、白虎は黙ったまま、力無くクオーツを見つめているだけであつた。

「ん？ 話す力もないか。そらっ！」

「んくっ……！」

クオーツは力が入らない白虎の背中をぐいっと踏みつけた。

「うっ、く……うっ……」

「こんなになつてしまつては、もう死ぬ以外に未来はない」

外部からの腹にかけての圧力と痛み。白虎はこれだけを感じ取つていた。

しかし、それはすぐに遮られた。

「……？」

最初に変化に気が付いたのはクオーツだった。

突然の冷気と、黄金聖闘士に匹敵する大きな小宇宙。その冷気はいつしか白虎を踏みつけているクオーツの足を纏い、氷点下の世界へと引きずり込んだ。

「——！」

（こんな力を持った聖闘士が、ここにいるはずが——っ!?)

——クオーツは、白銀聖闘士だから、と見くびっていた。その上、黄金聖闘士よりも強い自分の相手が務まる聖闘士は今、この場にはいないと思ひ込んでいたのだ。

「杯座か……!」

そう、この冷氣と小宇宙の正体は——水鹿であった。

「すい、かつ……!」

白鹿は顔を上げて、水鹿を見た。水鹿は微笑み、コクリと頷いた。

クオーツは凍ってゆく自分の足を見てから、水鹿を怖い形相で睨みつけた。

「貴様……! 白銀聖闘士の皮を被った黄金聖闘士だったのか……!」

「いや。オレはれっきとした白銀聖闘士だ。周りより強いと言われているだけのな」

水鹿はこちらを睨みつけてくるクオーツに表情一つ変えず、パチン、と指を鳴らした。

その途端、キラキラと輝く氷の欠片が、クオーツにまわりつくように出現した。

「な、なんだ……!?!」

「ダイヤモンド、チェーン……」

クオーツが驚いている間に、水鹿がそう呟くと、一瞬にしてクオーツにまわりついた氷の欠片が、氷の鎖に変化し、クオーツを一気に縛り付けた。

「なっ……!」

クオーツは目を見開き、酷く驚いた。

(だ、だが、こんな鎖……!)

すぐに壊れるだろうと、クオーツは全身という全身に力を込め、鎖を外そうと試みた。
——外れなかった。

(もしや、絶対零度で作られた氷の鎖なのか……!?)

絶対零度——空気に浮かぶ窒素が凍る、マイナス273度を指す。因みに黄金聖闘士はこの温度までなら氷点下でも耐えられる、と言われている。

クオーツは脂汗を流し、水鹿を見た。

水鹿はどこからどう見ても普通の白銀聖闘士だ。白虎や翔馬よりは年上で、先輩ではあるだろうが、それ以外は普通の青年に過ぎない。しかしながら、その周りには、通常の白銀聖闘士なら纏っているはずのない大きな小宇宙の姿があった。白銀聖闘士以下ならば、追いつまれて追い詰められて、やっと目覚めるであろうもの。

これぞまさしく、小宇宙の真髄——……。

「セブン、センシズ……」

クオーツがそう呟いた瞬間、一同は水鹿の方に視線を向けた。

翔馬はその言葉に、思わず声を上げて驚いた。

「杯座がセブンセンシズ……!?!」

「まさか……!」

「……！」

三人は酷く驚いた。

水鹿が黄金聖闘士並の強さとは言われているのは分かっていた。黄金聖闘士一人分の任務を難なくこなし、凍気や水気も操るのが上手く、仁智勇に優れ、まさしく黄金聖闘士と同じように聖闘士の鑑とも言えよう。しかし、本当にセブンセンスに目覚めていたとは思わなかったのだ。

そして、セブンセンスとは——聖闘士なら誰もがこの潜在能力を持ち、小宇宙の真髓といわれる。そして、人間の六感（視覚、味覚、聴覚、触覚、嗅覚、霊感・超能力）を超えた、第七感を指す。聖闘士でも最上位に君臨する黄金聖闘士は、常時このセブンセンスに目覚めており、一段階下の階級の白銀聖闘士との差もそこについている。逆に言えば、黄金聖闘士になるためには、セブンセンスに目覚め、常時安定して纏えるようになる必要がある。

そのセブンセンスに、水鹿が目覚めた——いや、あの表情なら、元から目覚めていたと言った方がしっくりくるであろう。

セブンセンスに驚く周りの人物達に、水鹿は冷静に言い放った。

「セブンセンスなど、前々から目覚めていた。だが——白銀聖闘士である以上、申告する必要もないのも確かだ」

「い、いっつ……」

クオーツは所詮は白銀聖闘士だと油断していた。ここまでの実力者が、白銀聖闘士に
いるとは思わなかったのだ。黄金聖闘士に匹敵し、対等に戦える白銀聖闘士など、二百
年に一度しかないだろう。

水鹿は溜息をつきながら、白虎に向けて言い放った。

「そんなことより、白虎。今ならそこから抜け出せるんじゃないか？」

「う……うん……」

白虎は小宇宙が抜けた体で、ぐつ、と力を込めた。しかし、力を込めたところで、
クオーツの力が強いことには変わりはない。寧ろ、先程よりも小宇宙が身体からだ
んだん抜けていた。

「あ、あかん……」

「やはり時間が増すごとに、小宇宙が削られているか……」

水鹿は軽く舌打ちをした。

白虎の小宇宙をどうやったら戻せるか突き止めなければならない。ラピスが小宇宙
を奪われて、あの状態だ。白虎がこれで小宇宙を失くすのは一時的なものではない。

肝心のクオーツは絶対に話してくれない——話す気はないだろう。

(どうしたら……わいは……)

意識が更に遠退く中で、白虎は必死に前を見ていた。

前方にあったのは、距離的には遠いものの、金色に輝きを放っていた天秤座の黄金聖衣——。

(……ああ、せやないか……)

天秤座の黄金聖衣だって、こんなところじゃなくて、もつとちゃんとした持ち主の自分の師のところになりたい筈だ。その他の黄金聖衣だって、聖域に戻り、自宮でそつと休みたいであろう。

黄金聖衣達が、何故、ここにいななければならないのか。そして、クオーツの若さの糧となる必要があるのか——……。

特に天秤座の聖衣は、しっかりとクオーツに拒否反応を示していたではないか。そんな天秤座の黄金聖衣。こんなところにいるのは、絶対に嫌であろう。

(でも——今のわいじゃ——……)

小宇宙を燃やすことも、立ち上がることもままならない——……。

(……めんな……)

白虎は心の中で、そうして謝るしかなかった。

今の自分では、ここから黄金聖衣達を助けることなどできない。今になって水鹿達に頼もうにも、そろそろ話すことさえ辛くなってきた、頼むことすらままならない。

(天秤座の聖衣——アンタだけわいの手で助けたかったよ……)

その時、フツ、と白虎の意識と小宇宙が途切れた。

黄金聖衣を助けることができず、クォーツの思うままになってしまった自分に対し、後悔を抱きながら……。

11：「決着」

水鹿は悔しそうに齒を軋め、翔馬も同じように悔しそうにクオーツを見、ラピスに至っては今にも飛び掛かりそうな形相をクオーツに向けていた。

クオーツは満足そうな笑みを浮かべながら、意識を失い死んだも同然な白虎を更に踏み付け、翔馬に話を振った。

「翔馬。お前からしたら、十分都合だろう？　ずっとこの龍星座を倒したがっていたではないか」

「……っ！」

「フツ」

翔馬は凶星を突かれて、言葉を失った。

確かに、出会った当初は自分の使命だの何だの理由をつけて、白虎を倒そうと必死になつていた。しかし、何度も何度も出会い、戦つて行く中で、白虎は本当に倒すべき相手なのか、何度も何度も考え直して。真剣勝負して、最終的に自分が負けて。そして、自分があるべき居場所を作ってくれたのは——白虎だ。

どんな時でも自分のことを知ってくれようと努力し、何度も何度も手を差し伸べてく

れた。

今なら水鹿があの時言っていたことが分かる。

——白虎は、それほどに、友情を大切に思い、無下にせず、受け入れることを。

(龍星座……)

——お前はずっと、俺に対して、真正面から立ち向かって、対等に何度も話してくれて。酷い仕打ちをした自分に対して、温かい言葉もかけてくれて。それに、お前だけでなく、真友だという杯座も、手を差し出してくれて。二人は俺に対して、ちゃんと自分を正しい道を選ばせてくれた……。で、なければ、今、俺はここにいないと思う。

——でも、俺はまだクオーツに聞かなければならないことがある。まだ、聞いてなかったあのことを。

翔馬は意を決して、クオーツに聞いた。

「……クオーツ。一つ聞きたいことがあります」

「むっ？」

「黄金聖衣を集めたら女神が復活するというのは——俺を利用するための嘘だったのですか？」

「……！」

水鹿とラピスは翔馬の方を見つめ、『そんなことを……?』といった表情だった。

「ああ」

クオーツはフツ、と鼻で笑い、その問いに答えた。

「当たり前だ。そうでもしなきゃ、お前は手伝ってくれないからな」

「——っ！」

翔馬は顔を伏せた。拳を握る手が、グツと強くなる。

女神の忠誠心だけは確かだった自分のその心を利用し、二年間も騙し続け——自分の愚かさもそうだが、クオーツに対しても尋常でない怒りも湧いてきた。

「で、どうするつもりだ？」

「……なら……」

翔馬は拳と腕を引き締め、力を込めた。そこには怒りの力が充満していた。

そして、顔を上げて、クオーツを睨みつけた。

「俺は貴方の敵です……！」

その頃、白虎は、また、あの時の光の空間にいた。

むくりと起き上がり、辺りを見渡す。

「……」

（わい、一体……どうなって……）

白虎は思い出していた。自分が今まで何をしてきたのか。

自分は翔馬に勝って、クオーツの元へ行き——それから、あの地下室へと降りて。そうしたら、突然、小宇宙が奪われてゆく感覚に襲われ、体に力が入らず、抵抗もできぬまま——。

「——っ！」

そうだ、自分はクオーツを倒すために、戦おうとしてやられたのだ。

(……悔しい)

小宇宙を奪われただけで、あそこまで弱り、何もできなかった自分が、ただただ憎かった。

一度でも良い。クオーツを一発ぶん殴って、スッキリしたい。このままクオーツに——撃も与えずに死んで行くのはお断りだ。

だが、そのためには小宇宙を高める必要があった。クオーツは自分より強い黄金聖闘士だった。小宇宙を高め、燃やせなければ、絶対に一撃を与えることは不可能だ。

そして、あそこにあつた黄金聖衣のことも気掛かりだ。水鹿達がなんとか取り返してくれば良いが、相手がクオーツだ。一筋縄ではいかぬだろう。

(……これって……絶望的って奴かなあ……)

白虎は深く溜息を吐いた。

(一体どないしたら……)

小宇宙を燃やそうにも、クオーツにその小宇宙を奪われるだけだろうし、一発ぶん殴ろうにもダメーヅなど与えられないだろう。水鹿みたいにセブンセンシズに目覚めていれば、苦勞はしないのだろうが。

白虎が悩んでいると、あの声が頭に響いてきた。

『力を貸してやろう』

「……………」

白虎はバツと顔を上げた。勿論、声の主はそこにいない——というよりは見えない、といった方が正しいだろう。

「アンタ……………」

『お前に力を貸してやろう。小宇宙が燃やせなくて困っているのだろうか?』

「……………うん」

白虎はコクリと頷き、顔を伏せた。

「小宇宙を燃やせなきや……………絶対にアイツ——クオーツには勝てない……………でも、燃やしたら小宇宙を奪われるばかりで……………燃やせなくて……………」

『なかなか辛い……………』

「わいな、奪われた黄金聖衣——特に天秤座の聖衣が一番気掛かりなんよ。アイツ、

クオーツのことめっちゃ嫌ってるっぽいしな」

『……………そうか』

声は若干嬉しそうなものだった。

白虎は一通り話した後、顔を上げて、確認をした。

「アンタ……………ホンマに……………力貸してくれるん？」

『ああ。男同士の約束に嘘はない』

「……………よう言うわ」

白虎は安心感からか、クスクスと微笑んだ。

『その前に——お前の目を覚まさなねばな』

その時、白虎の背中が燃え上がったように熱くなった。

「クツクツク……………お前が敵だと？」

「……………」

翔馬は黙ったまま、ペガサス流星拳を繰り出す体制となった。

クオーツはそれに対して、わざとらしく、『おっと』、と白虎の体を踏みつける力を更に強くした。

「私に攻撃したら……………この龍星座の亡骸が砕けるぞ」

「……………っ！」

「どうした？ 攻撃してみる、ほら」

「……………っ、う……………」

翔馬は戸惑いを隠せずにいた。クオーツにこの拳を一度でも良いから、与えたい。しかし、それを実行したら、白虎の遺体が碎け、悲惨なことになる。

そういう悩んでいるうちに、突然聞き覚えのある声が、翔馬の小宇宙へ語りかけた。

(翔馬、慌てるな)

(……………！ 杯座!?)

そう、水鹿だ。水鹿はコクリと頷き、凍気を貯め続けていた。

(アイツは鎖に縛られて、そんな大胆な行動には出られん。もし出たとしても……………その前に、オレがクオーツを凍らせる)

(……………！)

翔馬は聞いたことがある。絶対零度まで凍気を極めたものは、黄金聖闘士が数人がかりになっても碎けない氷の棺——フリージングゴフィンを作ることができる。

確かに水鹿の実力ならば、それは可能ではあるだろうが、更に冷静に考えると、リスクが高かった。

(龍星座は……………白虎のことは……………)

翔馬は白虎の遺体の安否を心配した。水鹿もそのことは考慮していたらしいが、この状況で、グダグダと悩む時間もなかった。

(……でも、それしか方法がないんだ)

(……)

(極力白虎は避けて凍らす気ではいる。翔馬……乗り気ではないかもしれないが……)

(……そうだな)

なら、やるしかない。

翔馬は再び姿勢を直し、ペガサス流星拳——いや、彗星拳を放つ体制となった。

クオーツはニヤリと笑い、余裕を見せた。

「さて、放ったところで、私に通用しないどころか、この遺体が碎けるかもしれないぞ」

それを聞いた翔馬と水鹿は、アイコンタクトを交わし、準備をした。

「……杯座」

「……ああ」

水鹿の方も準備は万端だ。

翔馬は全身の小宇宙を右拳に集中させて、クオーツに飛びかかった。

「ペガサス、すいせい——……」

その時だった。

「人を勝手に殺してんじゃねえーよっつ！」

聞き覚えのある甲高い声と、荒げた口調。そして、その声と共に、翔馬達は吹き飛ばされるような強風をその身に受けた。先程から三人の中に入り込めなかったラピスも、この時ばかりは水鹿にしがみついた。

クオーツに至つては、鎖に縛られていたのが悪かつたのか、情けなく向こうの壁まで吹き飛ばされた。

「ぐ、くう……！」

クオーツは、視線を自分が先程まで立っていた場所へと移した。

ボロボロになりながらも、決して崩れることはない端麗な顔立ち。周りより若干細身ながらも、引き締まった体格。

そして、深緑の龍星座の聖衣を纏った少年——白虎だ。

「はあッ！」

白虎は目覚め、起き上がるなり、聖衣を脱ぎ、背中に浮かび上がる白虎の刺青を見せつけた。

そして、イライラしつつ大声で暴言を四人にくらわせた。

「アンタらなあッ！ 勝手に人を殺して、死人扱いすんな！ 誰が遺体や！ だーれが、

亡骸や！ どう見ても生きとるやろが！ あ!? こっんの、アホどもめ！」

「い、いや、だって……」

「どうせ、見かけだけで判断したんやろ！ 全く！」

ここまでくると、自己弁護が出来なかった。水鹿と翔馬はこれ以上は無駄だと思い、口を紡いだ。

「と、ところで白虎……小宇宙が……」

「えっ、あつ……」

ラピスに指摘されて、白虎は気付いた。

(この小宇宙……！)

夢の中のあの空間で、感じている小宇宙と同じものだった。

(……もしかして……)

あの謎の声の主が、小宇宙となり、白虎に乗り移っているとでもいうのか。自分の小宇宙ではない感じがした。

きつと、力を貸すとは——こういうことだったのだ。

クオーツは白虎の復活に戸惑いながら、なんとか立ち上がり、鎖を外そうと試みていた。先程よりも強度が落ちたらしく、ピキピキとヒビが入っていった。

「フンツ！」

クオーツがそうやって力を入れた瞬間、ピキイン、と一気にヒビが入り、パラパラと

氷の鎖が砕けた。

水鹿は予期していたらしい表情で、それを見ていた。

「さて……お前ら四人掛かり——いや、三人掛かりで私を直接攻撃しても……倒されんぞ」

やはりクオーツから見ても、小学生並になつたらピスは戦力外らしい。

クオーツはその身に纏っている黒いコートをバツ、と剥いだ。聖闘士らしく、鍛え抜かれた身体が、そこに出る。

「来い」

白虎、水鹿、翔馬の三人の間に緊張感が走る。

しばらく、沈黙に包まれた後、最初にクオーツに攻撃をしかけたのは翔馬であった。

「だあつー！」

先程、放とうとして放てなかつた、彗星の拳——ペガサス彗星拳をクオーツに対して放つたのである。

「ふん、この拳程度で私を倒せると思うな」

しかし、クオーツは翔馬の彗星拳をあつさり受け止め、その威力を翔馬に返した。

「うわっ……！」

その威力は見事に翔馬に的中。翔馬はそのまま、向こう側の壁へと吹き飛ばされ、激

突した。

「翔馬ーっ！」

「翔馬！」

「う、ぐ……」

壁に張り付いたまま、翔馬は床にずり落ちた。

「天馬星座の聖闘士が情けないな、翔馬よ……」

「……っ！」

クオーツに言われ、翔馬は悔しそうにクオーツを睨んだ。

「廬山昇龍覇ーっ！」

その時、クオーツに向かって、放たれる昇龍のような拳があつた。

——白虎の拳だ。

「——フンッ」

そして、クオーツはその威力を片手で受け止めた。

「ぐっううっ……！」

しかしながら、白虎はクオーツに対して、どうしても一撃をくらわせない感情だけで、それを押し退けようと、小宇宙を高めていった。

クオーツは目を細め、その威力を白虎に跳ね返そうと力を込めた。

しばらくその状態が続いた時、氷の槍がクオーツの後ろから、放たれた。

「！」

(これは……)

クオーツは昇龍覇の威力を受け止めつつ、バツと後ろを後ろを振り向いた。

「氷槍百蓮華——ツツ!!」

クオーツに向かって、無数の氷の槍が放たれる。

「クツ、杯座か……！　白銀聖闘士のくせして、ちよこまかちよこまかと……！」

クオーツは水鹿の氷槍百蓮華を避けながら、昇龍覇の威力を白虎へと跳ね返した。

「——ツ！」

白虎は何とか押し堪えながらも、翔馬ほどでないが、やはり吹き飛ばされた。

「龍星座……」

「……」

翔馬と白虎はお互いにアイコンタクトを交わしながら、水鹿とクオーツの戦線の様子を見た。

黄金聖闘士並と言われている水鹿の実力は、やはりクオーツに対抗できるものだ。見
ていて隙がなかった。

「もう一発！　氷槍百蓮華！」

「くっ……！！」

水鹿の攻撃の押しようには、さすがのクオーツでも戸惑うものがあり、反撃が出来てなかった。

その様子を見て、翔馬と白虎の二人は思わず水鹿の名を声に上げた。

「水鹿——っ！」

「杯座——っ！」

「白虎！ 翔馬！ お前らはあの小宇宙のタンクを壊せ！ クオーツはオレが引き受ける！」

小宇宙のタンク——この部屋の中核部の球体を指しているのだろう。指名された白虎と翔馬はコクリと頷き、水鹿の頼みを引き受けた。

「分かった！ なんとか頑張ってみる！」

「ああ、任せてくれ！」

白虎と翔馬は即座に部屋の中核部に向かって、走り始めた。

クオーツはその二人を追いかけるように、技を放とうと試みた。

「触れさせるか！ ギャラクシア——……」

——が、それは水鹿のダイヤモンドダストによって、退けられた。

「クオーツよ！ お前の相手はこっちだ！」

「……………」

クオーツは齒をギリイッと軋ませ、水鹿を睨みつけた。水鹿もそれに対抗して、クオーツを睨みつける。

一方で白虎と翔馬は、部屋の中核部にある、小宇宙のタンクに辿り着いていた。

「これ、やね？ ラピスさんの小宇宙も入ってるっつーのは」

「ああ……」

この中にラピスを中心に、罪なき人々から奪った小宇宙が大量に詰まっていた。

翔馬と白虎は、そのことを確認し、大きな豆電球みたいに輝いている、タンクに触れようと手にかけた。

——すると、二人の身体に青い電撃が走った。

「うっ、ぐっ、あ……………」

「んぐ……………つつえ……………っ……………」

あまりのその電撃の強さに、タンクから手を離れた。

「大丈夫か、龍星座……………」

「うん、何とか……………！ これは一体……………」

その時、クオーツの高笑いが部屋中に響き渡った。

「ウワーツハツハツハ！！！！ 残念だったなあ？」

「！」

「……………」

二人は同時にクオーツの方に振り向いた。クオーツはしたり顔で、翔馬と白虎を嘲笑っていた。水鹿も突然の高笑いに、攻撃の手を止めていた。

「この小宇宙のタンクはどんな強い攻撃——黄金聖闘士の攻撃でさえ通さぬ強力な電撃と強度を誇るのだ」

「なっ……………」

「なにに……………」

「分かったら、諦めることだな。ククッ」

白虎達はその事実を聞き、呆然と立ち尽くしていた。

——折角ここまで来たのに、何も助けられないまま終わるといふのか。

クオーツはその隙に、水鹿の背中を一蹴りした。

「うっ！」

不意に隙を突かれ、『しまった』と思ったのも束の間、水鹿はそのまま地面へと突っ伏した。

「水鹿！」

「杯座！」

「兄ちゃん！」

白虎と翔馬とラピスは思わず水鹿の元へと駆け寄り、水鹿の上体を起こした。

その間にも、クオーツは小宇宙を溜め込み、四人に攻撃を仕掛けまいと構えていた。

「見るか、星々の砕ける様を……」

「っ！」

「……！」

「なっ！」

「まさか……！」

ラピスは非常に怯えた顔で、他の三人は何事かとクオーツを見た。そして、クオーツはニヤリと笑い、その拳を放った。

「ギヤラクシアン、エクスプロージョン」

その時、クオーツの言う通りに、部屋が星々が砕けるぐらいの衝撃に襲われた。床は剥がれ落ち、壁は崩れかけた。

技を一通り放ち終えた後、クオーツの周りは技によって巻き起こった煙や埃が充満していた。そのため、白虎達の姿を確認できなかつたが、技の威力からして、倒れただろうと思ひ込んでいた。

「ククッ……」

(所詮はこの様よ……)

これで自分の邪魔者はいない。

これから、堂々と聖域に乗り込み、計画の続きを実行するのだ、と思っていた矢先であつた。

(——っ!?)

煙が徐々に晴れてゆく中、人影を見たのだ。

クオーツは最初、煙の濃度が薄いところから見える、この部屋の風景だと思つていた。しかし、煙がどんどん晴れてゆき、それは違うものだと思つた。

「なっ……!」

煙が晴れ、クオーツの目に映つたもの——それは、見事に無傷であつた白虎達の姿と、白虎達を守るかのように、自分の前を阻む、天秤座の黄金聖衣の姿であつた。

白虎も、一瞬のことによく分からなかつたのか、目の前にある天秤座の聖衣を見て、大層驚いていた。

「天秤座の聖衣……!」

白虎は天秤座の聖衣の元まで少し歩いた。天秤座の聖衣も、白虎が近付けば、少し距離を縮めるように、白虎の手元まで近付いた。

それが何の合図だつたか、白虎は悟り、若干不安そうな顔になるが、すぐいつものよ

うな笑みを浮かべ、天秤座の聖衣に手を伸ばした。

「——ありがとうな」

白虎がぼそりとそう呟いた途端、天秤座の聖衣はオブジェ形態を解除し、バラバラとなった。

——そして、レッグ、ウエスト、アーム、の順に、それが装着されていた。

「な、なにい!？」

「白虎……!」

ここにいる全員が驚く中、白虎は悠然とその中に立ち、ニコリと微笑んだ。

一瞬、水鹿はその微笑みから、今までの白虎とは違う印象を受けた。何かを見据え、そして——いつもよりも、遅いもの。

「わいが天秤座の聖衣を纏った以上——クオーツ。もう、アンタの好きにはさせん」

白虎は聖衣のレッグ部分の背面に小型化してしまつてある、剣を一つ取り出して展開し、それをクオーツに向けながら言った。

クオーツは若干脂汗を流しながら、白虎に言った。

「……フツ、正義を司る聖衣とはよくいったものだ」

「……」

白虎はぐっと手にしている剣を構えた。

天秤座の聖衣が正義を司る——そう言われているのは、天秤座の聖闘士は、善悪を測り、正義を見極めることができなければならぬからだ。例えば、周りがあれが正しいと言っても、それが悪ならば、そう判断できる悠然さや意志も持たなければならぬ。

そして何よりも——それを踏まえた上での、聖衣の特殊性からだ。

天秤座の聖衣には、剣（ソード）、槍（スピア）、円盾（シールド）、二節棍（ツインロッド）、三節棍（トリプルロッド）、トンファー、これら六つの武器が二つずつ、合計十二個ある。その武器の使用許可を他の聖闘士に下すのは、女神と天秤座の聖衣の所有者——今の時代で言えば教皇だ。

つまり、武器の使用許可を下すためには、前述の通り、持ち主が善悪をしつかり見極めることが必要なのだ。

今回は天秤座の聖衣が、白虎に対して自ら赴いたので、例外のケースにあたるのだが、聖衣自ら力を貸す、というのは一番信頼性が高かった。

「白虎……」

「……分かつてる」

水鹿が不安そうな顔をしている中で、白虎はスツと目標を見据えた。

星をも砕く、天秤座の武器は黄金聖闘士が何人掛かりになっても壊せないという、フリージングコフィンの氷の棺を壊すほどの破壊力を持っている。

しつかり目標を見据えて、コントロールを維持しなければ、周りにとんでもない危害を加える事になる。

(大丈夫……聖衣を信じるんや、わい)

聖衣が自分を信じてくれて、こうして手を貸してくれたのだ。自分が聖衣を信じなくてどうするというのだ。

白虎は、一歩だけ前に出てから、剣を構え直し、クオーツに向かって走り出した。

「だああああ——ツツ!!!」

そして、剣を思い切って一振りした。

「フツ……」

クオーツはそれを難なく避け、白虎を嘲笑った。

「どうした、そんな闇雲に剣を振っても、私には当たらないぞー！」

「ん？ だって、アンタ目当てで振ったわけやないもん」

白虎はニツコリと笑みを浮かべ、答えた。

クオーツがハッと気が付いた時には、既に遅かった。後ろを振り向くと、今の剣風により、小宇宙のタンクにピキピキとヒビが入っていた。

「なっ……!」

「そうら、もう一振り！」

「やめろおおおおお—— ツツツ!!」

クオーツが白虎に対し、静止を仕掛けた時には、既に白虎が小宇宙のタンクに、天秤座の剣を突き刺していた。白虎は『フンッ!』と、小宇宙のタンクから、天秤座の剣を抜いた。その穴から、沢山の小宇宙が流れ出た。

「あ、ああ……」

へたり、とクオーツは、そこで絶望を感じながら、そこで膝をついた。そして、流れ出る小宇宙をひたすら見つめていた。

「……よしっ」

白虎はスツと剣を持ち直した。

そして、タンクから溢れ出た小宇宙の中には、クオーツの言ったとおり、ラピスのももあった。

「!」

その小宇宙はラピスの元へと戻るように、舞い降り、ラピスを包み込んだ。同時にその場にあった双子座の黄金も、それに反応し、ラピスの元へと向かう。

「……身体が……」

どんどん、大きくなり、戻ってゆく。髪の毛も後ろ髪が何かから解放されていくように長くなり、顔立ちも、大人びてゆく。

最後に、双子座の聖衣がオブジェ形態を解除し、その身をラピスの身体へと置いた。「これが……ラピス……さん……？」

白虎は目を見開き、ラピスの容姿を見て驚いた。

元の姿に戻ったラピスは、腕を伸ばし、腰まで伸びた髪の毛をスツと掻いた。

「んー、快適快適。やっぱりこっちの方が動きやすいなー」

そして、ラピスはスツとクオーツを睨みつけた。

「さて、これ以上はどう落とし前付けて頂こうか、クオーツ……」

「……くっ」

クオーツは後退りをした。

黄金聖闘士以上の力を持つクオーツと言えども、黄金聖闘士の並の強さの水鹿と本物の黄金聖闘士の双子座のラピスの前では、敵うまい。

「まずは俺の小宇宙を奪ったこと。それに重ねて、黄金聖衣を奪おうと、天馬星座の聖闘士を騙して、協力させて……まあ、裁判とかなら死刑が妥当じゃないかな」

ラピスは『ふう』と息を吐いて、ザツと体をクオーツの方に向けた。

「小宇宙のタンクも消えて、若さを保つことも出来なくなった。これから残された道筋は——死ぬ以外ないよ」

ラピスはスツとクオーツを見据えた。

かつての師匠であるクオーツ——しかし、ラピスの目は何かあればすぐにでもクオーツを殺さねかねないようなものだった。

「ククツ……ハハハハ……ハハハハハッ！」

クオーツは何もかもがおかしく感じ、狂い笑い始めた。

「な、何がおかしい……」

クオーツが突然笑い出し、ラピスがびっくりしている中、クオーツは目を見開き、四人を見て言った。

「私に残された道筋なんで、あのタンクが壊れた時点で無いようなものだ！ あのタンクこそが今の私の全てだったのだからな！」

そう言ったクオーツの皮膚が、突然老人のようにしわしわになり始めた。小宇宙のタンクを壊され、年齢相応の背格好になり始めたのだろう。

クオーツの小宇宙も黒く雄々しいものから、老化し、何とか感じ取れるかどうかの微妙なものに変わっていった。

「だから、私はお前達のこととは未来永劫許さぬだろう！ 私から若さを奪ったお前達をな——……」

そして、最後に綺麗な黒髪が、白髪に変わった時、クオーツは突然フツと目を閉じ、そのまま倒れていった。

ラピスは倒れたクオーツの元まで向かい、その手を取って脈を測った。
「……死んでるね」

他の三人の顔が一気に複雑なものになった。

ここまで来て、黄金聖衣の力まで借りて、小宇宙のタンクを壊して、それからあつさりとしてしまったクオーツ。ここまであつさりしていると、逆に虚しいものがあった。

ラピスは立ち上がり、周りの状況を見た。

小宇宙のタンクが破壊され、尚且つボロボロとなったこの部屋は、今にも崩れそうな気配があった。

そして、三人の方を振り向き、小宇宙を集中させ、異次元への入り口を作った。

「――よし、俺がアナザーディメンションで聖域まで送るよ。皆、離れないようにね」

「……射手座の聖衣は」

「あ、大丈夫。俺が手に持ってるから」

翔馬が心配そうに質問すると、ラピスはいつの間に手に取ったであろう、射手座の聖衣箱を三人に見せつけた。

「じゃあ、そろそろ危ないから、早くこの中に入ってたね」

「はい」

「了解した」

「……ああ」

そして、ラピスがアナザーデイメンションで作った入り口を入れてゆく中、翔馬はちらりとクオーツの方を見、心配していたようだった。

しかし、すぐに切り替え、心の中で、クオーツに対してこう呟いた。

(さようなら………)

——こうして、聖衣の搜索に白虎と翔馬の関係は一区切りがついた。

そして、クオーツは一体何のために、何がしたくて、若さを保とうとしたのか——オレには分からなかった。

そんな中、オレは昔、とある老人から聞かされたことがあったのを思い出した。

若さというのは一言で言い表せないぐらい素晴らしく、一瞬のもので儂いと。

そして、その儂さが狂ってしまったら、人間として——いや、生き物として崩れ終わってしまうと。

もし、その儂さを自分から狂わそう者がいたなら——その時は、生き物として終わる頃だと。

逆いうと、若さは永遠でないから輝き、美しく、素晴らしいものである——と。

オレは最初、この言葉の意味が分からなかった。

永遠の若さを手に入れることができれば、老衰で死ぬこともない。そして、今の健康を維持できる。何よりもずっと遊べるでないか。

そんなことばかり考えていた。

しかし——今回のクオーツを見て、それが良いことなのか、改めて考え直した。

——やはり、あの老人の言っていたことは正しかったのだ。

永遠の若さなど手に入れても——ただ、切ないだけ。

周りが老いてゆく中で、自分だけ若々しくあり続け、のうのうと生きることがどれだけ切ないことなのか。

クオーツは何を思つて、翔馬を自分の側に置かせたのだろうか。

そして、敵であること以外、一体どんな目でオレらを見、思っていたのだろうか。

その目から——クオーツの真実の姿が見えるのではないか。

——少なくとも、オレはそう思う。

12:「約束」

双子座のシリカ——過去に聖域中でも最も慕われ、教皇からしても一番信頼に置ける人物だった。

そのシリカがすっかり聖闘士としての役目を果たし、辞めたのが、彼が満40歳の時——今から、およそ60年前のことだ。

生きていれば、満100歳という、長寿であろう。

そして彼は生きていた——シリカという名前を変え、クオーツとして。

しかし、ラピスがクオーツに師事されたいた頃はまだシリカと名乗っていたらしく、クオーツという名前に鞍替えしたのはその後のことだと思われる。

彼——クオーツは、自分が老いてゆき、衰える中で何を考え、思ったのだろうか。

若さを保ちたい、永遠の若さが欲しい、と思い始めた。人々の小宇宙を集め、黄金聖衣の小宇宙さえも吸い取って、若さを、保つ。その野望は一回だけ果たされたように見えた。しかし、本当にそれはひと時の夢で、最終的には聖闘士達にその野望は砕かれ、クオーツは散っていった。

足の踏みどころを間違えた一人の双子座の聖闘士の話を残して……。

あれから一週間。

水鹿はクオーツ——いや、双子座のシリカのことを文献室で調べながら、『ふう』とため息を吐いた。

(……元々は良い人だったんだな)

椅子から立ち上がり、部屋を出て、外へと向かった。

クオーツも元とはいえ、聖闘士で、かつては自分達聖闘士と同じように地上の平和を望み、愛していた。しかし、今回、己の野望のために、黄金聖衣を奪おうとし、そしてそのために翔馬を使い——時の流れとは、人の考え方を悪い方向に感化させる、恐るべき道具だ。

(……でも、それに流されなきよう、しっかりと意志を持たないと)

水鹿は決意をした。どんなに時が流れようとも、他人を慈しみ、決して己の満足のために、他人を巻き込まないことを。その決意をいつまで覚えているか分からない。だが、今思わず、いつ思えば良いのだろうか。

「……今、だな」

水鹿がそう呟き、前を見た時、杖をついた黒のタキシード姿の老人が目の前に現れた。老人は黒の帽子を深く被り、口元以外はつきりと見えなかった。老人はしわしわにな

り、薄くなった唇を水鹿に向かって開いた。

「大きくなつたな、少年よ」

「……！」

（——この人は……！）

水鹿はこの老人を覚えていた。

昔——自分に対して若さの大切さと儂さを教えてくれた老人だ。

老人はニコリと微笑むと、革靴を鳴らして、水鹿の方へと近寄つた。

「私のことを覚えているかね？」

「はい、勿論。お久しぶりです」

水鹿はペこりとお辞儀をして、ニコリと微笑んだ。

老人はそれを見て、『ほう』と感嘆したように声を上げた。

「前に出会つたよりも、随分と明るい表情をしているね」

「そ、そうですか……？」

「ああ、そうだねえ。前は何もかもがつまらない、といった様子だったよ」

「……」

水鹿は老人のその一言で、少し押し黙り、過去の自分を思い返していた。

七歳ぐらいの頃、聖域に始めて来た頃、年齢には合わない自分の才能や素質が周りよ

りも突飛して高く、周りから孤立していた。それゆえに、心無い子ども達から仲間外れにされることも少なくはなかった。

そうして、水鹿は子どもながらにして、思ったのだ。『自分は周りとは違うから、仲良くななど無駄なのだ』と。その時から、世の中がつまらなくなつたように見えた。

それを見兼ねた水鹿の師である水瓶座のアレキが、修行場所を聖域から中国の一番北端と言われる北極村へと移し、時々、教皇がいる五老峰へも赴いた。

それでも水鹿の絶対零度のような冷えた心が解けることはなかった。

——しかし、それを変えたのが、白虎という存在であった。

水鹿が8〜9歳の頃、五老峰へ行った時、アレキから、教皇の弟子だと言われ、紹介されたのが白虎だった。

白虎は年相応に元気な少年で、水鹿をよく振り回した。水鹿は白虎のそのあまりの元気に、戸惑いながらも、関わっていった。

そして、次第に思つていくのだ。

ほぼ同年代で同性の子どもと関わるのがこんなにも楽しいことなのだ、と。

それから水鹿は五老峰に行く度、白虎とよく遊び、白虎の鍛錬にも付き合い、白虎とどんどん親交を深めていった。

そうして、聖闘士になる二年前——水鹿が10〜11歳頃に、聖域に再び戻った頃に

は、そこには以前のような冷たい水鹿はいなかった。

そこにいたのは、仁智勇を兼ね揃えた、杯座の聖闘士の一人の候補者だった。

「……君には今のような明るい表情が似合うよ」

水鹿は老人の声でハッと意識を現実に戻し、顔を上げた。

老人は目を細め、微笑みながら、水鹿の頭をポンポン、と軽く叩くように撫でた。

「なあに、今の君には、掛け替えの無い友達がいるのだろうか？」

「……はい」

水鹿は白虎と翔馬のことを脳裏に浮かべて、クスクスと笑った。

「なら、良いんだよ、それで。昔の君に足りなかったものは、その友達なのだからね」

コクリと老人は頷き、安堵したように微笑みを浮かべた。

「では、私はここで失礼するよ。また近いうちに会うかもしれないが、その時は宜しく頼

むよ」

「あ、あの……」

水鹿はこの場を去ろうとする老人に静止をかけた。老人は去ろうとした足をピタリと止めて、きよとん、と水鹿を見た。

「貴方の名前……教えて欲しいのですが……」

「……そうだね。私の名前は……コーラルだよ」

老人・コーラルはそう名乗り、ニコリと微笑んだ。

白虎と翔馬は、教皇と共に鍛錬場で談笑を交わしていた。

これまでに聖域でこんなバカバカしいことがあったのだの、五老峰では白虎が予想以上に緩い出で立ちで過ごしているなど——引つ張り出せるだけ引つ張り出して、たくさん話していたのである。

「龍星座と教皇と……それから杯座はとても仲が良いのだな」

「うん！ 昔からの付き合いやもんな！ ね、老師！」

「ああ。翔馬、お前も一週間白虎と水鹿と行動を共にしてて、分かっただろう？」

「はい……」

翔馬はクスクスと笑みを浮かべて、コクリと頷いた。

クオーツを倒して一週間。

あれから翔馬は、白虎と水鹿と共に鍛錬や任務を共にし、過ごしていた。勿論、白虎と水鹿の意向である。

（クオーツの件といい、今回のことといい、俺は二人にとっても良くして貰った。そのうち俺も何か返さねばならないな）

二人がお返しなど望んでいるはずもないのは分かっていた。だからこそ、翔馬はさり

気ない形で、何か返したいと思った。例え、どんなに小さなことでも。

教皇はおもむろに立ち上がり、二人に告げた。

「では、私はこの辺で失礼しよう。しつかり鍛錬するのだぞ」

「はいー」

「了解しました」

教皇は二人に軽く手を上げながら、その場を立ち去った。

二人になった鍛錬場で、白虎は口を開く。

「……なあ、翔馬」

白虎はニコリと微笑みながら、翔馬に話しかけた。

「わいのこと、名前で呼んでくれたってええんよ？」

「名前で……」

「うん。龍星座とか堅苦しいんじゃないやなくて。アンタは慣れてないかもしれないけどな」

「……」

そういえば、自分には名前呼びするような友達がおらず、聖闘士になった後も、聖闘士達を星座で呼んでいたような気がした。

この際だから、名前で呼べるような同世代の友達もいても良いのかもしれない——。翔馬はぐつと手に力を込めて、白虎の名前を口にした。

「……………」

「ん？」

「……白虎……」

「……はいっ」

白虎はクスクスと微笑みながら、その呼びかけに答えた。翔馬は少し照れ臭そうに、頬を掻いた。

そして、二人の頭上から降りてくる、青年の声。

「翔馬、オレの名前は呼んでくれないのか？」

「水鹿！」

「杯座……」

二人が見上げた先にあつたのは、水鹿の顔だった。水鹿はニコリと微笑めば、二人の間にいるように座つた。

そして、若干不機嫌そうに、翔馬の頬を突ついた。

「白虎だけ名前で呼んで、俺を名前で呼ばないのは少々不公平だろう？」

「……いや……杯座は杯座呼びの方が落ち着くというか……」

翔馬は自分の頬を突ついてくる水鹿の指を、自分の手で払い除けながら言った。

水鹿は『あ、そう？』などと言いつつ、翔馬の頬を突つくのをやめた。

「ま、なら仕方ないか。でも、遠慮はいらないからな？」

「……ああ」

翔馬はこうコクリと頷いたものの、水鹿は白銀聖闘士な上に、黄金聖闘士並の力を持った、すごい人物だ。遠慮するな、という方が難しいのではないか。そのうち慣れるのかもしれないが。

白虎はクスクスとそのやりとりを見ながら、二人の手を握った。

「なあ、二人とも。約束しよ」

「約束？」

「……？」

白虎はコクリと頷いて、二人に言った。

「どんなことがあっても、わいら三人で乗り越えていこ？引き裂かれようが、何だろが
——わいらの心は一つや」

「……ああ」

「……だな」

どんなことがあっても、三人で乗り越える。

そして、どんなに引き裂かれようが、自分たちの心は一つ。

三人の青少年の、何気無いようで、大切な、『約束』——……。

この約束が、何れ、大きな戦いの重要な鍵になることを、三人はまだ知らない。

冥王復活編

13：「遭逢の夜」

雪がしんしんと降り積もる冬真つ只中、白虎達聖闘士三人は任務で大きな露天風呂があるという日本の旅館に泊まっていた。今回の任務はちよつとばかり特殊なもので、遠征無しに解決は出来ないものらしい。

その任務についている聖闘士の一人・杯座の白銀聖闘士の水鹿は服を脱ぎながら、今回の任務について、思いを致していた。

（旅館の予約まで用意するなんてなあ……。教皇はこれを慰安旅行的な何かと知っているのだろうか……）

そう。実は旅館の手配も何もかも全て白虎の師でもある教皇がやってしまったのである。しかもご丁寧にも三人分の料金や食事代も前払いして。

教皇は『何事もやり過ぎなのが丁度リラックスできるんだ』と笑いながら謎の迷言を言っていたが、ここまで用意されるとリラックスするより前に、教皇にここまでさせた罪悪感だの何だのが優先して、あまりリラックスできず、寧ろストレスが溜まっていく一方なのだ。

(——まあ……)

そんなことを一切感じず、有難くこの旅館を楽しんでいる人物がこのドアの先に、一人だけいるわけなのだが。

水鹿がタオルを腰に巻き、ドアを開いた、その次の瞬間。

「だーはっはっはっは！　ええなあ、ええなあ！　温泉はやっぱええなあ！　はっはっはっは！」

と、なんともまあ、年齢よりも老けているような豪快な高笑い、年齢よりも幼い意味での甲高い声が鳴り響いた。この二つが掛け合わせって、成り立っている人物など、この世に一人しかいない。

龍星座の青銅聖闘士——白虎だ。

白虎は見た目は少女とも取れる顔立ちと声質であるが、水鹿と同じ風呂に入っているということに分かるように、れっきとした『男』である。

ついでに言うと、先程、白虎が男風呂に入ろうとして、旅館の女将に『あの、女子更衣室にお入りください』と見事に呼び止められた。だが、白虎はその場で豪快にバツと脱ぎ、『ちゃんと性別確認してから呼び止めてな』などと女将さんに言い放ち、女将に見事に土下座させた。女将の顔が赤くなっていたのは言うまでもない。

男である証拠に脱ぐのは別に良いことであるとは思うのだが、異性の前、しかも自分

より年上で成人済みの女性の前だ。もう少し恥じらいを持った方が良いのではないかと、水鹿は思い出しながら思った。

「恥じらいなんて知らん。男なら堂々しろって死んだ父さん言ってたもん」

と、白虎は水鹿の内心を読み取ったのかのように水鹿に対してそう言い放った。水鹿はそれに対し、怪訝な顔をした。

「いや、でもなあ……」

「ま、細けえこたあ気にするなってことよ！ あっはっはっはは！」

「……」

(全く……)

水鹿は呆れたように『はー』と長く浅いため息を吐いた。

白虎は昔から風呂場や温泉ではこういうような感じでテンションが高い。いつも高笑いし、普段ガサツで豪快なのもつとその上をいくのだ。昔から一緒にこういう付き合いをしている水鹿からすれば、迷惑この上ない話だ。

「……」

そして、水鹿の隣にいた翔馬は、白虎のその姿を見て、頭を悩ませていたのか、額を押さえていた。翔馬もどちらかというと、水鹿と同じように静かにいたい方なので、頭を悩ますのも無理はないだろう。

白虎はたたんだタオルを頭の上に起き、はふう、と息を吐いて、水鹿に向かって言い放った。

「んでき、水鹿。今回の任務って冥王ハーデスが復活したのなんだのだけ？」

「ああ、そうだな。突然のことなのでオレ達は緊急的に出勤したに過ぎないが」

「……俺も今回の任務を聞いて『いきなりすぎるだろ』とは思った」

翔馬は水鹿の軽い説明を聞いて『はあ』と息を吐いて、面倒そうな内心を顔に表した。

そう、今回の任務は翔馬の言うとおり『いきなりすぎる』。

実は——冥王ハーデスがこの時代に復活した、という兆しが見えたらしく、現在聖闘士一同が世界中に飛び立ったのである。しかしながら、教皇は前に『大きな戦いの兆候も見えない』と言っており、今回は本当に突然のことだった。そもそも冥王ハーデスは二百年以上前にその肉体を滅ぼされ、しばらくは復活できぬだろう、ということが囁かれていたのだが——一体全体どういふことなのだろうか。

「で、ハーデス見つけたらぶっ飛ばしておけばええんやな？ どうせ魂だけやし、大したことないんやろ？」

と、白虎は右手でグッ拳を作って、二の腕の筋肉部分を左手でおさえた。水鹿は『あのなあ』と呆れたため息混じりに白虎に言い放った。

「ハーデスはそんな簡単に倒せるもんじゃない。魂だけでも小宇宙は神級。そしてかつ

ては地上を支配しようとしたんだぞ。そんな奴にオレ達の攻撃なんて通じるはずなからうが」

「大丈夫大丈夫！ 小宇宙燃やせばなんとかなる！ それに、こつちには黄金聖闘士並の力を持つ水鹿もおるしな！」

「冥王ハーデスは黄金聖闘士ですらどうこうできる相手じゃない。何たって神なんだから」

「なんとかなるつたらなるもーん！」

「……」

頑として『なんとかなる！』と言い張ってる白虎の相手をするのも疲れたのか、水鹿は翔馬に助け舟を求めた。

「……翔馬、お前からも何か言ってくれないか」

「……」

翔馬は水鹿に話題を振られて、しんと黙り込んだ。どうやらどうするか考えているらしい。水鹿はその沈黙に何となく嫌な予感を覚えた。水鹿が『まさかなあ』と思つたところで、翔馬が口を開いた。

「確かに白虎の言うことは一理あるかもしれないな。勝負の勝敗は小宇宙の大きさで決まるし……」

「な！　せやろーっ!?」

「……」

（翔馬アアアア——ツツ!!!）

水鹿はガクツと項垂れた。翔馬も自分と同じように、白虎の意見に対して難色を示すものだと思っていたのだが、全くそんなことはなく、むしろ肯定していた。

翔馬は目を輝かせて、ギユツと拳を作った。

「もし冥王ハーデスに出会ったら……どうやって倒すんだ?」

「んー、せやねえ……」

白虎と翔馬の会話が弾みに弾みに、この場が一気に明るくなる。そんな二人を見て水鹿は『やれやれ』とひたいに手を当てた。

出会った頃は仲良くなれるかどうかすら怪しかった立場同士だったのに、今ではこんなに打ち解けて——今では最初の出会いが嘘のようになり、掻き消されている。とはいえ、翔馬が白虎の足止め係になることはなさそうだ、とも思った。

水鹿は『ふう』と息を吐いて、湯に浸かろうと立ち上がった時、外から異様な気配を感じ取った。

（……?）

まさかとは思いますが、覗きではなからうか。だとすると、もう少し小宇宙も隠す上であ

ろう。小宇宙から察するに自分たちと同じ聖闘士なのだから、そのぐらいできるはずだ。それでも隠さないということは、きつと、自分達と同じように任務でこの近くにいらただけかもしれない。何事も考えすぎはよくない、ということか。どちらにせよ、男の風呂を覗くなど、覗きも暇だな、と思う。

水鹿は湯に浸かり、その温かみを味わう。束の間の休息。騒ぐ白虎と翔馬の姿をスツと眺めた。こうして見ている分には結構微笑ましいのだが——巻き込まれたら面倒なこの上ないことは確かだ。

(はーっ、こういう日々が続けばいいんだけどなあ……)

少なくとも翔馬はそう考えているだろう。この任務の前に行く前に、『プライベートなら、とても楽しいのだろうな』と苦笑しながら水鹿に呟いていた。白虎は——いつもあんな感じの楽天家で呑気だ。そこが白虎の良いところなのかもしれないが。

(……)

水鹿は目を瞑り、口元まで湯に浸けた。

——緑が生い茂り、雪がパラパラと降る中で、少年はただ、ひたすらそこに立っていた。翔馬よりも短くも明るい茶色の短髪を風に揺らし、明るめの茶瞳で遠くを見据えていた。

その体には聖闘士なのだろう、焦げ茶色の聖衣が纏われていた。

少年は静かに小宇宙を燃やし、辺りの雰囲気を感じ取っていた。どこにどういう植物があつて、どこにどういう建物があるのか……。……。

(……)

ふと、何かに気が付いたのか、少年は静かに顔を見上げた。

(この小宇宙……)

近くに聖闘士がいる……。……。

それが分かった少年は、すぐにその聖闘士がいると思しき方へと足を向けた。

その胸には『仲間がいた』という安心感でなく、『まさか』という戸惑いと困惑が激しく入り混じったものがあつた。

一通り湯に浸かり、良い気分になったところで、三人は風呂から上がった。その顔は恍惚ともいえるような、うつとりした表情で、満足そうな微笑みを浮かべていた。

白虎に至つては一番長く入ったせいも、全身が完全に赤色に火照つており、りんご病にかかったみたい頬も赤くなっていた。

「ふう〜、ほつかほかやあ〜」

まさしく『ほわほわ』というべきであろう表情。顔の筋肉も緩み、明らかに温泉によ

り癒されたものである。

「白虎ー。先に着替えるのを忘れるんじゃないぞー」

「分かってる分かってるー」

相変わらず水鹿はそういうところはしっかりとっている。白虎は水鹿本人に見えないようにクスクス笑いながら、温泉と旅館を繋ぐドアを開こうとした、その瞬間だった。

「……………っ！」

(な、何……………？ この小宇宙……………)

白虎は一瞬にしてバツと温泉の後ろにある草木の方に、視線と顔を向けた。

(誰か……………おるの?)

ゴクン、と生唾を飲む。白虎は『しゃーない』と一言呟いて、足に力を込めた。

「だああああ——ツツ!!!」

白虎の力強い掛け声が鳴り響く。

自分がタオル一丁なのを分かってるのか分かってないか——いや、そもそもそんなことを考える性ではない。白虎はその姿のまま、草木の方へと勢いよく助走をつけて、飛び込んだ。

その際に、それを見た水鹿の『服着なさい!』も鳴り響いたのは言うまでもない。

白虎はタオル一丁のまま、温泉より向こうの草木へと出て、走っていた。真冬真つ盛りで雪も降っているというのに、白虎はそんなことを全く気にしていなかった。

そもそも白虎は昔から五老峰の滝に打たれ続け、しかも師匠の言うことを押し退けてそれを実行していた。それに比べたら、こんな雪、白虎からしたら大したことはないのだろう。気にする時間が勿体無いぐらいだ。

一通りの距離を走ったところで、白虎は足を止めて、周りを見渡した。

(……誰も、おらんのか?)

まさかの無駄足だったというのか。だが、温泉で感じたあの気配は、気のせいだとは言い難い。

白虎はスツと右腕を広げて、スウツと息を吸った。そして吐き出すように声を出す。

「Ah————ツツ!!!」

辺りに白虎の裏声が大きく鳴り響く。その破壊力は周りにある草木や地面に影響するもので、白虎の周りにあるものはすべて吹っ飛び、破壊された。

声によって、風を巻き起こし、周りをすつきりさせる——これが白虎の狙いだ。

(この野郎! 出て来んかい!)

そう思う毎に、白虎の声がどんどん大きくなっていく。

この場にいれば嫌でもすぐに姿を現すだろうし、遠くにいればこの声が気になって駆

け付けるであろう。白虎はそう思って声を出し続けた。

しばらくすると、一人の少年の声が鳴り響いた。

「つるっせー！ 近所迷惑だ！」

「……ふにやつ！」

白虎は少年の声を聞くと、ピタッと大声を出すのをやめて、そちらを振り向いた。

「声を扱う聖闘士……女の子だつて言うから期待してたのに……結局外見が女つてだけの男なのかよ！」

そこに出てきた姿は——白虎とはあまり年端もない少年だった。髪の毛は短髪で翔馬や自分よりは薄い茶髪に、少年らしい顔付き。何よりその身には、聖闘士の証であろうとも言える聖衣。何の星座かは分からないが、雰囲気的には青銅聖衣であろう。

「……」

白虎は呆然とその姿を見つめ、一方の少年はザクザクと白虎の方に歩み寄った。一定の距離まで近付くと、足音を止めて、少年はジツと白虎を見つめた。白虎も少年に合わせジツと見つめ返した。

その二人の間には火花がバチバチと散っていたことは過言ではない。

「……やるか？」

少年はニヤツと笑い、グツと右拳を握る。その顔と言い方は白虎を完全に舐め切った

もので、それは白虎の中にある何かを突つくようなものだった。

その少年の態度に若干不快感を覚えた白虎は口元の八重歯を見せて、同じように笑った。

「……つたりめーよ。売られた喧嘩は買ったるわ」

少年は予想外の白虎の回答に驚いたのか、目を一瞬見開いた。だが、すぐに戻って、『そうかよ』と返して、続けた。

「じゃ、まずは聖衣用意しろよ」

「……」

「お前聖闘士なんだし、聖衣着て戦うのは当然だろう？」

そう、少年は先ほどから白虎がタオル一丁であることを気にしていた。このまま戦うにしても、聖闘士としてのハンデともいうものがあるだろう。

だが、白虎はこんなことを言い出した。

「ハッ！ どーせ男同士や！ 見せても恥ずかしいもんは何もない！」

——と、腰に巻いていたタオルをバツと豪快に取ったのである。

少年は口角筋を引きつらせて白虎の完全たる全裸を目にした。それは女子のような可憐顔立ちや白い肌には似合わぬもので、がっしりとしていて、かつ、すらつとした筋肉は、白虎の今までの努力を見せつけるようなものだった。そして——隙がない。

だが、やはり聖闘士だな、といった様子で少年の顔からは驚きか消え、フツと鼻で笑った。

「見せつけてくれるじゃねーか。ま、筋肉だけなら相手にとって不足はなしだろうな」

「……あつはつは、そうかもね」

白虎はザツと足を開き、クスツと微笑んだ。

「女みたいな顔してるからつて舐めてもらつちや困るで。中身はそこらの男よりも拳で語るかもしれへんよ？」

「……分かつてら。このやり取りでお前の性格は大体把握できたぜ」

「なら、ええんよ」

白虎はニツと年相応の笑みを浮かべて、スツと拳を構えた。

「わいは手を抜くのも抜かれるのも大嫌いだな？ ま、全力でいかせて貰うで？」

「……臨むところだぜ」

二人の小宇宙がその場でゴオツと炎が燃えるように揺らめき始めた。

「じゃ、行くぞ！」

「わいも行くで！」

その瞬間、ガチン、と音を立てて二人の拳が衝突し、空を切るような風が吹いた。そのままの勢いで双方譲らぬように小宇宙を燃やし合った。

「せ、聖衣着てねえくせに……やるじゃねえかよ……」

「そ、そつちこそ……一瞬でも隙を許したら飛ばされそうや……」

ぐつと双方の拳に力が入る。

少年は白虎に負けないように小宇宙を拳に集中させるので精一杯で、白虎もそれは同じだった。

少年はフツと嫌味っぽく笑ってみせた。

「女まんまな顔のくせに……生意気だな」

「さつきも言うたやろ？ 舐めてもらっちゃ困るってな」

白虎はへへッと爽やかに笑ってみせた。

「それにね、わい、女みたいな顔とかで判断されるの、あんまり好きじゃないんよ。それにプラスして油断されるのもっと好きじゃない。ううん、嫌い」

「……ふうん」

「だからこうしてぶつかってきてくれるの、嬉しいんよ？」

目を瞑り、大きく開いていた足をスツと肩幅までにその間を狭めた。

「こちらとら、遠慮なくいけるってもんや……」

突然、白虎の拳からスウツとその身を引くように小宇宙が感じ取れなくなった。その代わり、少年の拳の威力が白虎の拳を圧倒した。

何を考えているんだ、と少年は思った。拳から小宇宙を引いたら、やられるというのに。

——だが、あくまで白虎は、小宇宙を拳から引いただけ、であった。

少年には策略という言葉は頭の中に浮かんでいなかった。何故ならば、そういう『面倒なこと』は嫌いだからだ。戦いの最中はただひたすら避けて攻撃に専念するという、言わばごり押しの方が少年には好ましかった。それに、白虎は自分と同じように拳と拳でぶつかり合う人物で、また、自分と同じように策略だのなんだの面倒そうにしている、と勝手に思い込んでいた。

——しかし、白虎は少しばかりの簡単な策略なら、戦いの中に放り込むタイプだ。あくまで、組み込むのではなく、放り込むのだ。

そう、その放り込んだ策略というのが、白虎の拳から小宇宙が引いた理由だった。

白虎は口を開き、その声の本性を露わにした。

「fermata!」

「ん、ぐおっ!?!」

少年の体自身が鉛になったかのように一気に重くなり、自然とその拳も下がる。体も動かそうとすると、何者かに阻まれるように体の移動が止まり、立ち上がることもすままならなかった。

少年が突然のことに戸惑っていると、白虎はその少年が動けないのを確認し、視線を合わせるようにしやがみ込んだ。

「……なあ」

「ん、んだよ……」

「ここまでやっておいて難だけど、聖闘士同士の私闘って禁じられてるよね？」

「……あ……」

そういえば、と白虎に言われて少年は思い出した。

聖闘士の戦いというのはあくまでも、「己のため」でなく「正義とアテナのため」であり、聖闘士同士の私闘は基本禁じられている。

二人はそのことを忘れてすっかり戦いに興じてしまっていたが——本来ならば許されることはないだろう。

「言うておくけど、戦い持ち掛けたんはそつちやからな。わいは単に声を出してアンタを引き摺り出しただけにすぎん」

「う、ぐ……」

白虎の冷静な指摘に、少年の顔が苦しげに歪む。白虎はふう、と息を吐いて、先ほどから聞きたかったことを少年に聞いた。

「で、アンタ、何でここにおるん？ 見たところ任務とかそういう用事ではないようやけ

ど」

「……お前に言っても仕方ねえだろ」

「でも気になるもん。知りたいよ」

「……」

少年は押し黙った。

隠す理由はない。だが、いずれにせよ、初対面の相手にペラペラ話すのは如何なものかと少年は思った。白虎は初対面など関係なく、少年がここにいる理由を明かしてほしいのだろうが——それをする理由もなかった。

少年は動けることを確認すると、瞬発的に白虎の顎に拳を入れた。白虎は突然のことに目を見開き戸惑っていた。そのままの勢いで白虎は背中から地面に打ち付けられるように倒れた。

「……ぐっ……あ、アンタ……」

白虎は顔を少年の方に向けてギリツと睨みつける。

少年はそんな白虎の顔を横目で見ながら、スツと立ち上がった。

「お前が本物の女の子だったら話してやったんだけどな」

「……」

白虎は上半身に力を入れて、起き上がった。

フツと笑いながら、少年は白虎の方をしつかり見た。

「ま、嫌でもそのうちまた会うだろうよ。近いうちに、な」

「な、何言うてるんよ……」

「そのままの意味さ、そのままの意味」

ニツと少年は歯を見せ、年相応だと思わしき笑みを浮かべた。白虎は『ちつ』と軽く舌打ちをして、目を軽く伏せた。

「なんか、凄いイラつくわ、アンタ」

「ああ、それ、前にも言われたことあるわ。確か——……」

その時、一筋の閃光が少年に向かって走ってきた。少年はそれに気付いていた、とでも言うように、それを難なく優雅に避けて、閃光が放たれた方をスツと見据えた。

「……——噂をすればなんとやら、だぜ」

ザツとその姿は現した。焦げ茶色の髪の毛に、周りよりも特徴的な髪型、そして——冷たい赤い瞳。

少年はその人物を見るなり、その姿の名を口にした。

「天馬星座の翔馬」

その姿——翔馬はお風呂上がりゆえか、旅館に置いてあったのだろう浴衣を着ていた。しかも拳を携え、今にも少年に襲い掛かりそうなものだった。

白虎は少年と翔馬を交互に見つめて、『知り合い……?』と密かに疑問を浮かべた。一方の翔馬は少年をギンツと睨みつけて、ザクザクと歩み寄った。

「……けい、ゆう……大熊座の圭熊。貴様、白虎に何をした」

「び、白虎って……ん、あ? お二人さんは知り合いどころか……お友達だったの?」

少年——圭熊は意外そうな瞳で翔馬と白虎を見比べた。翔馬は歯を軋めて、圭熊の胸ぐらをガシツと強く掴んだ。

「何をした、と言っているんだ!」

「……ん? いや、向こうから全裸になっただけでオレは」

「そんなこと分かっている! 俺はお前が白虎と戦ったのかと聞いているんだ!」

声を荒げる翔馬に対して、圭熊は自分の胸ぐらを掴んでくる翔馬の腕を掴みながら、いつもの調子で言っただけだ。

「まあまあ、そう荒ぶりなさんな。いつものお前らしくねーぜ?」

「……っ」

翔馬は圭熊に自分の乱れようを指摘されて、思わず顔をしかめた。圭熊に色々ぶつつけて発散したいのを堪えながら、翔馬は圭熊の胸ぐらからその手を離して、目を伏せた。

『よしよし』と圭熊は掴まれた胸ぐらの部分を直して、翔馬を見つめた。

「ところで翔馬くんや。お前、確か友達とか作る気ないんじゃないか?」友達と

かバカバカしいとか言つてなかつた？」

「……前まではそうだった。だが……」

翔馬はフツと微笑んで、圭熊を真つ直ぐ見つめた。

「こいつが……白虎がそれを覚えてくれた。だから、今はバカバカしいなどはちつとも思わない」

「……へえ、おもんねえわ」

圭熊は特に意外そうな顔をするわけでもなく、『ふう』と息を吐いて、翔馬と白虎をスツと交互に見据えた。

「ま、良いんだけどさ。お前らが仲良くしてようが、こつちは知つたこつちやねーし」

「……」

「ただ、オレにもお前達のように仲良しの奴がいる。またオレと会う時があれば——その時に会うだろうよ」

圭熊はそれを言うつとザツ、と後ろを振り向き、スタスタと歩き始めた。翔馬は『ま、待て！』と声を上げて圭熊を呼び止めた。だが、圭熊は片手をヒラヒラと挙げるのみで、それに応じようとはしなかつた。

圭熊が去つた後は辺りかガラン、と物静かになり、台風や強風が去つた後——言わば、嵐が去つたあつたようだった。

白虎はふと、疑問に思ったことを翔馬に口にした。

「……水鹿はどないしとるん？」

「ああ、部屋で待機してもらってる」

「……そっか……くしゅんっ」

白虎は今まで己が全裸であったことを忘れていたのか、自分がくしやみをしたことに對して若干驚いていた。翔馬はプツと嘖き出して、『ほら』と、白虎の分の浴衣をどこからか差し出した。

「雪もそろそろ本降りになり始めた。早く旅館に戻るぞ」

「……うん」

白虎は浴衣をその身に纏いながらコクリと頷き、翔馬とこの場を後にした。

圭熊は欠伸をしながら、近くにあった小屋のドアをカタン、と開いた。そこには圭熊と同じぐらいの無表情の少年がいた。

少年は圭熊の姿を見るなり、タオルをそつと差し出して、圭熊に渡した。

「……圭熊、おかえりなさい」

「ああ、ただいま。タオルありがとう、凜猫」

少年——凜猫はコクリと頷き、圭熊は受け取ったタオルでわっしやわっしやと髪の毛

を乱暴に拭いた。凜猫はそれに何か言いたげな顔をしていたが、突っ込むのも野暮かと思ひ、圭熊の好きにさせておいた。

圭熊は一通り吹き終えると、辺りをキョロキョロと目くじらを立てながら見渡して、凜猫に聞いた。

「なあ、凜猫。あの人は？」

「……あの人、何だかんだで一人の方が気軽だと……」

「んー、そつか……」

圭熊はハア、と溜息を吐いた。

「多分、そのうち戻ってくると思う。いつもそうだから」

「……ま、それもそつか」

『確かにいちいち気にしちゃいらんねーな』と圭熊は改めて思う。

因みに二人の言う『あの人』とは、水鹿と同じぐらいの年齢の白銀聖闘士で、その実力も黄金聖闘士に匹敵するとまで言われている。そして凜猫が言う通り、大体単独行動ばかりしており、二人に会うのは大抵長い道のりを歩く時だったり、乗り物に乗る時だけだ。こういう場では滅多に姿を現さない。

『それにしても』と、凜猫は圭熊に聞いた。

「……何か、手掛かりは掴めた？」

「ん、ああ……」

いつもふざけているであろう圭熊の顔付きが一気に神妙で真剣なものになった。

「今日も何も収穫はなし、だな。そう簡単に見つかるもんじゃねーって」

「……そっか」

凜猫は思わずしよんぼりした。何か掴めれば良かったのに、と。圭熊はそんな凜猫を見て、どうやってフォローしようか、話題を切り出そうか考えいた。そして、思い出した。

「ああ、でも……」

「……？」

きよとん、としている凜猫の横で、圭熊はニツと歯を見せて笑った。

「面白い聖闘士がいたぞ」

「……面白い聖闘士？」

「そーそー。聖衣着ないで寧ろ全裸で戦うような奴」

無論、白虎のことである。圭熊は白虎のことを凜猫に話しながら、今後のことを思った。

この白虎が自分達の仲間だったならば、どれだけ楽しかったことだろうか。この先、自分達と白虎は嫌でも対立しなければならない。

勿論、翔馬のこともそうだ。基本は自分とは仲は悪い方だが、いざ対立するとなるとちよつと抵抗するものがある。それはどこからきて、どこからこみ上げてくるものかは分からない。ただ、ただ、翔馬と対立するような真似が気持ち悪い。ただそれだけだった。

圭熊は早くも白虎達に感化されてしまったことをこの時点ではまだ気付いていなかった。この白虎との出会いが自分の運命を揺るがし、また、自分を大きく変えること。白虎の方も、圭熊とのこの出会いが運命の導きとは知らなかった。

更に、翔馬が圭熊と再会したことも——全て、運命の導きによるものだということ。そして——水鹿にも近いうちに、新たなる再会が訪れようとしていた。水鹿はそれに何となく気が付いていた。

様々な出会いと再会と運命が交錯し、混ざって行く中で、新たなる目覚めもそこに現れようとしていた。

14：「琴の旋律」

圭熊と出会ってから一週間あまり。特にこれといった変化もなく、白虎、翔馬、水鹿の三人は聖域に戻ってきていた。

三人が戻ってきた聖域はいつも通りのもので、逆に冥王ハーデスが復活する兆しなどないだろう、というぐらいだった。現在は調査段階だが、もう少し緊張感持ってくれ、というぐらいのものだ。

任務結果の報告のため、教皇の間まで向かう途中の金牛宮で、三人はいつもとは何かが違う小宇宙を感じ取っていた。金牛宮を守護する牡牛座の聖闘士は現時点ではないはずなのだが、何故か人の小宇宙が感じられるのだ。三人はこの時ばかり気のせいだと思ひ、あえて口にはしなかった。

ただ、一人——水鹿はこの小宇宙に感じ覚えがあった。まさかとは思ったが、何となく可能性を拭いきれなかった。

そして、金牛宮の次の宮である双児宮へと、足を踏み入れた。双児宮は今まで閑古鳥状態だったが、現在は——……。

「三人とも、やつほ——」

——と、双子座の黄金聖闘士・ラピスがこうして出迎えてくれる。

ラピスはこの間までクォーツの手によって白虎達より幼い少年の姿にされていたが、今ではこうして元に戻り、そして白虎達よりも身長が高くなり、黄金聖闘士としての風格も出ている。

笑顔で手をヒラヒラと挙げているラピスに、三人は軽く会釈をして、『こんにちは！』と口を揃えた。

ラピスは『うむ』と三人の頭を両手を使って順番にくしゃくしゃと撫でた。

「三人ともこんな小さくなって！ あははっ！」

「ふいやあー……ラピスさんが大きいだけですってばー……」

「うん、まあ、君達はまだ若いから伸びる伸びる！」

ラピスはパツと三人の頭を撫でるのをやめて、あっはっは、と豪快に笑ってみせた。水鹿と翔馬はその豪快な笑みにどこか既視感を抱いたが、あえて触れないでおいた。

『んで』と一つ間を置き、ラピスは話を切り替えた。

「三人はこれから教皇の間？」

「ああ、そうだ。任務を無事遂行したからその報告を」

「ふーん、そっかそっか……」

ラピスはジツと三人を見つめた。

「その任務って確か冥王ハーデス関係だっけ？」

「ええ……って、ラピスさん、興味があるんですか？」

どことなく食いついてきたラピスに、白虎はきよとんと質問した。

「いや、さ……」

ラピスは苦笑しながら、三人に話した。

「俺の正体を話したとき、昔死んだ双子の弟がいたって話したよね」

「……えっ？ そうなのか？」

翔馬は何も知らない素振りです、水鹿と白虎を見た。翔馬の視線を浴びた二人はコクリと頷いた。

「翔馬、その頃クオーツの元におったから、知らんくて無理ないよ」

「……そ、そっか……」

ラピスに双子の弟がいた、という事実になんとなく驚きを隠せないのか、翔馬はどこか腑に落ちない様子だった。何となくだが、疎外感を感じているのだろう。

ラピスは話を続けた。

「それでさ、実は……死んだっていうには微妙なんだよ」

「……ど、どういうこと？」

「うん……俺の弟・ラズリは冥界軍に魂を買われたんだ」

「……………」

水鹿、翔馬、白虎の三人はバツと勢いよく顔を見合わせた。そしてラピスの話を聞き続ける。

「ラズリは元々、聖闘士としての能力や成長も俺より早くてね。そこに早くも復活した冥界軍の一人に目を付けられて、強制的に買われたってわけ」

「強制的について……………それってほとんど誘拐じゃないですか！」

「……………まあ、一般的に言えばそうかもね……………」

白虎の思わぬ指摘にラピスはハハツと笑って頭をぼりぼりを掻いた。

「でも、向こうでは弟の魂を買ったことになってるんだ。そして、弟は向こうでは実質死んだことにはなっていない」

「……………」

「だから運良ければ会えるんじゃないかなって思うんだけどね。弟とね」

「……………ラピスさん……………」

「さー、さー！ 教皇の間まで行くんでしょ！ 俺のアナザーデイメンションで送ってあげるよー！」

ラピスは切り替えが早かった。静かで真剣な雰囲気から、一気に明るく晴れたものとなった。

白虎達は思わず言葉を詰まらせたが、折角ラピスが切り替えてくれたのだから、自分達が変にしんみりしていたら失礼だろう。

三人はいつものような元気な声で、こう言った。

「はい！ 宜しくお願ひします！」

聖域のどこかで、青年の琴が鳴り響いていた。その琴はとても綺麗な音色で、とてもじゃないが、普通の者では出せぬぐらいのものであった。

青年はまだまだ成人しておらず、しかも水鹿と同じ白銀聖闘士で15歳である。それにも関わらず、青年は当然とでも言うように、その琴を鳴り響かせていた。

途中、その琴に聞き入った人物が、その青年の近くに止まる。青年はそれに気が付くと、琴を弾くのを止めて、そのまま立ち去ってしまう。

何故ならば、青年の琴は他人に聞かせるためのものではなく、青年だけのために存在しているのだから。

(……さて、どこか別の場所を探さなくては)

白虎達は結局、圭熊と出会ったことは教皇に話していない。話そうとしても、翔馬のように一体何が目的なのかはつきりしていないゆえ、今の時点で話しても、『聖闘士同士

の勝手な私闘』として後処理されてしまうであろう。

実のところ、圭熊と戦った本人の白虎は絶対何かある、と思い、教皇に話そうとしていたが、その行動が軽率だと思った水鹿に止められたのである。白虎本人は納得していなかったようだが、水鹿に上手く言いくるめられて、結局言うとおりの話さなかった。

水鹿と翔馬と共に鍛練場で鍛練していた白虎は、ぐちぐちと水鹿にその不満を垂らしていた。

「その圭熊が何か企んでたらどうするんや！　それが分かった時には既に手遅れかもしれないんやで!」

「で、何も企んでいなかった場合はどうするんだ?」

「あー!　もう!　それでも言うておくべきやろー!　だーっ!」

白虎は頭を豪快にわしゃわしゃと掻いた。水鹿はそれを見て、『相変わらずその外見と豪快な中身が合わない奴だな』と溜息を吐きながら思う。

一方の翔馬は二人のやり取りを見ながら、一人黙り込んで考えていた。それに気が付いた白虎は、翔馬に話題を振った。

「なー、翔馬。アンタ、圭熊と知り合いなんやろ?」

「えっ、あつ……う、うん……」

突然話を振られた翔馬は言葉を詰まらせながら、白虎にコクンと首を振った。

昨日の圭熊と翔馬のやりとり。圭熊はどうやら、白虎と出会う前の翔馬のことを知っていたような口ぶりだった。翔馬もまた、珍しく向こうを星座呼びでなく、名前呼びで呼び、圭熊を知っているように伺える。

翔馬は水鹿と白虎につらつらと圭熊とのことを話し始めた。

「……圭熊と出会ったのは俺が天馬星座の聖闘士になった直後だった。一度組手で戦ったことがあったんだけど、それで負けたんだ」

「……え……」

あんなに強い翔馬が、負けた——？

白虎は信じられなかった。出会った頃は自分をあんなに圧倒していた翔馬が他人に負けるなど、信じられない。だが、翔馬の目線や口調は嘘を言っているものではなかった。

「向こうもなりたてだったけど——結局力差で負けてしまった。その後、俺はクオーツに引き連れられていって、アイツに出会うことはなかった」

「そ、そうだったんか……」

「……正直、今の実力でアイツに勝てる気はしない」

「で、でも……」

「先日の白虎との戦いは本気で戦っていないようだから、白虎が優勢に立って当然だ。」

アイツもわざわざ青銅聖闘士如きに本気は出さない」

「……」

白虎は思わず黙り込んだ。

翔馬がここまで言うのだから、圭熊からしたら自分如きでは相手にはならないだろう。

「でも、お前と戦ったということは何かしら興味があるのだろうか」

「き、興味？」

「例えばだが、外見と性格が反比例してるところとか」

「……翔馬ーっ！」

白虎が翔馬の冗談に掴みかかった。翔馬はそれをサツと避けた。そうして二人の追いかけてっことが始まった。

「全く……転ぶなよー」

「分かっているよ。つと、こつちだぞー」

「わーっけるよ！ おいこら待てー！」

二人の追いかけてっことを見つめる中、水鹿は『二人もまだまだ子どもだな』と思う。

そうして水鹿が二人の追いかけてっことを見守っていると、ふと、耳に綺麗な旋律をした音楽が聞こえてきた。

(……たて、どどど?)

豎琴の音色だった。

しかし、聖域にこんな綺麗な音色の豎琴を弾く人物など思い当たらない。

いや——水鹿は何となくこの豎琴の音色に聞き覚えがあった。そして、その豎琴の奏者にも。

(……行ってみるか)

二人は追いかけてここに夢中で、こつちのことは知ったこつちやないだろう。無言でここから離れてもどうってことはないはずだ。

水鹿はよつと立ち上がり、そのまま豎琴の音色が聞こえる方へと向かっていった。

一歩一歩歩くごとに、その音色は水鹿の耳に鮮明に入ってきた。

(……まさかなあ……)

水鹿はこの豎琴の奏者に見覚えがあるといつても、その豎琴の奏者は随分前に行方不明になり、それ以降水鹿は目にしていなければ、会ってもいない。だから、これは過信だと水鹿自身は思った。だが、現段階ではどうしても、その人物しか当てはまらないのも事実だ。

そうして水鹿が辿り着いたのは、聖域の鍛錬場から少し離れたところにある、小さな

広場だった。

そののほぼ中央に位置している人一人分が座れるであろう大きさの岩。

その岩の上に、その人物はいた。

その人物は水鹿とほぼ年齢が変わらない青年で、髪の毛が長く、その色も透き通るようなものだった。

「ばい、ろう……？」

青年はハツとし、水鹿がいる方へと視線を向けた。その瞳は水鹿や翔馬よりも厳しい目付き。だが、水鹿はそれにびくともせず、青年の名を上げた。

「琴座の唄狼！」

その時、二人の間にサラツとし、しかし冬らしく冷たい風が吹いた。

青年、唄狼も聖闘士なのだろう。その身に纏った聖衣を光らせ、水鹿の元へと踵を鳴らして歩み寄った。

水鹿の方もタタツと小走りで唄狼の元へと近寄った。

「ははっ……随分と久しぶりじゃないか……！ 元気にしてたか？」

「……お前に言われるまでもない」

「そうかそうか！ なら問題ないな」

「……」

琴座の唄狼——琴座の白銀聖闘士であり、水鹿と同じように黄金聖闘士を凌ぐと言われる実力を持つている青年である。名前については『狼』という名前のおとり、一匹狼でいることを好み、かつ、他人には全く興味を示さない。誰とでも話せたり何事にも興味を持つ水鹿とは真逆の性格をしている。

そして、そんな彼の唯一興味があることといえば、琴座という守護星座の通り、『音楽』である。

「いやあ、にしても唄狼。お前、いつ聖域に戻ってたんだ？」

「……お前には関係ないだろう」

「おいおい、別に関係なくはないだろう。オレはお前と一緒に修行してたんだからさ」

「それはお前が私の良い練習相手だったからだ。深い意味はない」

「ああ、そう……」

（とか言いつつ、ちゃっかりオレについてきてるし……）

そういうところも相変わらずだな、と水鹿は思う。

「でも、お前が聖域に戻ってきたのは心強いな。白銀聖闘士の中でも一番強いじゃん、お前」

「……」

唄狼はその水鹿の言葉に黙り込んで、答えなかった。水鹿なりに褒めたつもりだった

のだが、唄狼の中では何かがいけなかったのだろう。

水鹿は『そのー……』と言葉を続けた。

「黄金聖闘士や教皇ですらお前の琴に聞き惚れるんだ。それで一番強くないとかおかしいだろ？」

「……」

とうとう唄狼の水鹿についていく足がピタリと止まる。水鹿もちよつと進んだ先でその足を止め、唄狼の方へと視線を向けた。

唄狼は水鹿がこちらを振り向いたことを確認すると、すつと水鹿を見据えた。先ほどよりも強く当たる風が吹いた。

「……本当に私が一番だと思うのか、水鹿」

「え？ いや、だって……」

「修行時代から私よりも水鹿の方が優れ、聖闘士になるのも水鹿の方が早かった。これで私が白銀聖闘士の中で一番だと？ 笑わせるな……！」

ギョツと唄狼の竖琴を持つ手が強くなる。

「お、おい、唄狼……」

気が付けば、唄狼からは黄金聖闘士が発しているともとれるような巨大な小宇宙が放たれていた。

「ここに居なかつた数ヶ月、私はお前を越せるよう頑張り、努力をした。今ならお前に勝てる自信はある」

「ちよ、ちよつと待て！ 聖闘士同士の私闘は——……」

「この際女神の作つた規則など関係ない！ 奏でよ、襲撃の音色！」

「唄狼！」

「ストリンガー・ノクターン！」

唄狼がそう叫び、琴を奏で始めた瞬間、キィ——ン、と水鹿の耳に耳鳴りが襲つた。

「……これは……」

「……」

唄狼は黙つたまま、豎琴の弦をポロンポロンと弾き続けた。

「……う、ぐ……」

聞き続けるうちに、次第に水鹿の体が重くなり、視界と足がぐらついた。

「……どうした、水鹿。もうこの程度でダウンするのか」

「……くっ……！」

（向こうは本気らしいが……オレにはその気はない……！）

水鹿は唄狼に対してそこまで非情にはなれなかつた。もし白虎が今の水鹿の立場にいたら、それこそ正々堂々も唄狼に立ち向かつて、遠慮なく攻撃していくのだろうが、水

鹿にはその気が全くなかった。

だが、唄狼は本気で水鹿と戦うつもりなのか、その身に纏う小宇宙を更に増幅させていた。

「さすがのお前でも音には勝てないか？」

「……っ！」

唄狼の声はどこか嬉しげだった。水鹿にどんだんだメージを与えることができ、若干良い気分なのであろう。

水鹿の方はこれ以上唄狼の思うがままにさせたくないと思っている一方で、唄狼と戦いたくないという本音があった。甘えなどと言われるかもしれないが、水鹿には友一人を攻撃できるほどの非情さを持ち合わせていない。

とうとう水鹿の膝が、ガクンと勢いよく地についた。

「はーっはーっ……」

(……)

ぐつと唄狼の方へと視線を向けて、見据えた。

この唄狼の出している琴の音色は、聞いている者の小宇宙の燃焼を抑えるように仕組まれてあるらしく、水鹿は小宇宙を燃やすことができない。それどころかどンドン奪われていく気がした。

(それだけ本気ってことか……)

唄狼がこの技を使って自分を攻撃するほどなのだから、その内情の中にある友を見る目ではないことは確かであろう。それに気が付いてすぐに非情になれるほど、水鹿も鬼畜ではない。

ともかく、この唄狼のストリンガー・ノクターンをどうやって脱出するか、それが先だ。このままでは水鹿が一気に衰弱し、ダウンすること間違いなしだ。

「さあ、これが最後の一節だ。ありがたく聞き入れろ」

「——っ！」

このままでは——本当にやられる。この場を切り抜けるにも、動くことができない。

水鹿は考えるだけ無駄だと目を瞑り、その時を待——つその瞬間。

「廬山、流音波——ツツ!!!」

その瞬間、ギーンツと重くも高い声が辺り一面に広まった。その声とともに、唄狼のストリンガー・ノクターンの音色が一気に掻き消された。唄狼は目を丸くし、声が聞こえてきた方へと視線を向けた。

そこには、キツとこちらを見つめてくる少女の姿、いや、一見すると少女のように見える少年・白虎の姿があった。そしてその横には翔馬の姿もあった。

「——白虎！ それに翔馬！」

「水鹿、お前、何やられとんねん。水鹿らしくないよ?」
「……」

水鹿らしくない——その一言が静かに水鹿の心の中に何か突き刺さった。

確かにこんなところでやられているのは自分らしくないのかもしれない。水鹿はぎゅつと拳を握った。

「で、水鹿をここまでにしたのはアンタ?」

白虎は視線を水鹿から唄狼へと移した。唄狼は相も変わらず表情を変えずにじつと三人を見据えていた。

「……なら、どうする?」

「……どうするも何も……仇は打たせてもらおうか」

スツと白虎は拳を構えた。

唄狼はフツと鼻を鳴らし、琴を地面に置いた。白虎は『ふにやつ?』と驚いたように声を上げ、そして少しばかりだが、唄狼を見据えた。

「——己の武器を捨てるなんて、ちよつと油断しすぎやない?」

「……女に本気で攻撃するほど私も鬼畜ではない」

「……」

「……うん」

「……そ、そうだな」

思わず、三人の間に沈黙が走った。唄狼はその三人の雰囲気先ほどとは打って変わっていたことに気が付いたのか、『ん?』と顔を上げた。

「何か間違つたことを言つたか?」

「……いえ」

当の白虎は一番気まずそうにブンブンと首を横に振つた。

まさかこの場面で性別を間違われると思つてもいなかつたので、軽く拍子抜けをしていた。勿論水鹿と翔馬も顔を引きつらせて、唄狼に合わせていた。

唄狼はそんな三人の様子を不思議そうに見ながらも、こう呟いた。

「……まあ、良い」

(良いんだ……)

(良いのか……)

(良いんかい……)

このままでは後から色々起こりうる気がするのだが——気にしない方が懸命だろう。

「……ま、どちらにせよ、私はお前と戦う気はないが」

そう唄狼は白虎に一言言い放つてから、地面に置いた琴を拾い上げ、スタスタと歩き、水鹿をキツと鋭い視線で見つめた。水鹿もスツと唄狼を見据えた。

「水鹿」

「……」

「私が戦う気があるのは水鹿——お前だけだ。断じてその青銅聖闘士共とは戦う気はない」

「……ああ、勿論だ」

水鹿はコクリと頷き、続けた。

「白虎達に手を出そうものなら、この杯座の水鹿、かつての友であるお前でさえ、討つつもりでいる」

「……」

その瞬間、唄狼は水鹿の背後から、強大な小宇宙を感じ取ることができた。その大きさは黄金聖闘士が纏う小宇宙そのものだ。

（水鹿……）

何故その大きな小宇宙を今出すというのだ。そんな大きな小宇宙を出せるのならば、自分が先ほど攻撃している間に、早いうちから反撃し返すこともできただろうに。

唄狼は何気なく自分が相手にされていけないように見えて、思わず舌を打った。

水鹿を倒せるのは黄金聖闘士以外にも自分だけであると思わずと思わず、信じてきた。だが、ここにきて確信した。

杯座の水鹿は自分のことは見ていない、と。

唄狼はここから立ち去ろうとして、水鹿を通り過ぎようとした、その時だった。

「……なあ、アンタ、唄狼さん言うたっけ」

自分から見て少女である白虎が、自分に話しかけてきたのである。

唄狼はキツと厳しい目つきで白虎を見つめるものの、この白虎もその程度では全く怯まなかった。

「唄狼さん、アンタ、何でそんな水鹿を目の敵にしとるん？」

「……それは……」

「水鹿に対するイライラを、その水鹿にぶつけてるようになしか見えんよ」

「……」

「どうやら白虎の言ったことが凶星だったのか、唄狼は黙り込んでしまった。更に白虎は続けた。

「それに、水鹿と戦うなら豎琴なんて使わんでも、拳一つで十分だと思わへん？ 聖闘士

としての実力も大体同じなんやろ？」

「……そんな野蛮なこと……」

「野蛮？ 男同士で野蛮なこと云々言うとするアンタの方が野蛮で男として恥ずかしいわ」

「……」

「……白虎……」

「……」

水鹿と翔馬は二人のやり取りを見つめながら、少しだけハラハラしていた。唄狼に失礼なことを言うんじゃないか、逆鱗に触れてしまうのではないかと。

だが、白虎はそんなことを恐れる性分ではない。

「確かに拳で語るのには目に良くない。でも、その拳の一つ一つにその人の美学が詰まっている」

「……」

唄狼は思わず右手で拳を握り、それを見つめた。

白虎はその唄狼の姿を確認して、続けた。

「その美学同士をぶつける、と思うと拳で語るのもええもんやろ？ 少なくともわいはそう思うてるよ」

「……」

（美学、か……）

そういえば、白虎と同じぐらいの自分の知り合いもそんなことを言っていた気がする。

唄狼はその知り合いと白虎を重ねて見ると、雰囲気あまりにも似ていることがおかしすぎて、思わずフツと微笑んだ。

「……青銅聖闘士のくせに、白銀聖闘士に説教を垂れるとはな」

白虎は唄狼のその言葉に『ははっ』と笑ってみせて、そしてこう返した。

「確かにわいはそういうの言える立場にはおらんかもしれへんけど——……聖闘士において拳の一つ一つがどれだけ貴重で、大切なかは分かっているつもりなんや。今はもう琴に慣れてしまったアンタも、修行し始めの頃には感じてたはずやで」

「……それも、どうだかな」

「ま、今度水鹿と戦う時は琴は一回捨ててもええんやないかな。アンタにその気さえあればやけど」

「……ふん」

唄狼は一通り白虎の話聞き終わると、スタスタと素早く歩き、その場から立ち去った。

唄狼が立ち去るのを確認すると、白虎は『はーっ』と体を膝から落とした。どうやら腰の力が抜けたらしい。水鹿は白虎の元へと歩み寄り、その体を支えた。

「白虎……大丈夫か？」

「……うん……でも言いたいこと言えて、すつきりしたで」

白虎は顔を水鹿の方に上げて、齒をニツと見せて爽やかに笑って見せた。水鹿はそれに対して、『全く』と困ったように笑ってみせ、スツと手を差し出した。

「お前は怖いもの知らずだな」

「えへへ……」

差し出された水鹿の手に、白虎の手が重なった。水鹿は『よっ』と腕に力を入れて、その勢いで白虎の足を地に立たせた。

「杯座……」

今まで黙って見ていた翔馬が、口を開いた。水鹿は黙って翔馬の方を振り向いた。

「あいつは確か……」

「ああ、オレのかつての友である、琴座の唄狼だ」

「……琴座……」

「何か知っているのか？」

「……俺が聖域に来た頃に出会ったことがある」

翔馬はザツザツと地面を鳴らして、唄狼が去って行った方をスウツと流れるように見据えた。

「その時はただ、琴を弾いているだけの一人の聖闘士候補生だった。だが、あの琴座の琴はその時から十分に研ぎ澄まされていたものだ」

「……そうか……」

「きつと、白虎が歌を好きなように、あいつも琴が好きなんだろう」

翔馬はタンツとリズム良く二人の方を振り向き、フツと微笑んだ。

「白虎」

「え？ わい？」

突然話の矛先を向けられた白虎は、思わず自分を指差して、翔馬に確認した。翔馬は

『そうだ、お前だ』と頷いた。

「もしかしたら、お前と琴座は気が合うかもしれないな」

「ど、どこがあ!？」

今回のことだけで唄狼のことを察せるのはかなり気難しく、頑固で、誰とも仲良くしないということ。そんな人物、さすがの白虎でも仲良くできるかどうか分からない。しかもそれに加えて向こうは水鹿以外に目を向けないと言った様子だった。

だが、翔馬はぼん、と横から白虎の片肩に自分の片手を置いて『大丈夫だ』と頷いた。

「使う道具は違えど、お前と琴座は音楽が好きという共通点もある。それに、あの琴座と同じような性格をしていた俺にお前は仲良くしようと努力してくれたじゃないか」

「いや、でも……翔馬は今の翔馬の方が素やか……」

「仲良くしようと試みるだけの価値はあると思う。向こうの素がどうか関係ない。杯

座もそう思うだろ？」

「ま、まあ……」

水鹿は翔馬の超理論から白虎に通ずる何かを感じ取ることができた。似たもの同士というのはいかようなことなのだろう。

翔馬は今度は白虎の真正面に立ち、ガシツとその両肩を掴んだ。

「白虎。杯座もああ言っている。無理にとは言わないが——できるだけ、あの琴座と仲良くしてみないか？」

「……わ、分かったよ……」

ここまで押されると、白虎も了承しざるを得ない。翔馬は白虎のその答えに満足そうに『うん』と頷いて、微笑んだ。

水鹿は何を思ったのか、『ちよつと待て』と翔馬の片肩にぼんと自分の片手を置いて、言つてやった。

「というか、これはオレと唄狼の問題だぞ？ わざわざ白虎が介入しなくても……」
翔馬は『はあ』と溜息をついて、水鹿にはボソツと言った。

「……今の状況を見る限り、杯座は余程のことがないと、琴座に本気を出さないだろ……？」

「……」

水鹿は『うぐっ』と顔を引きつらせて、その反応を示した。翔馬は呆れたように『やれやれ』と頭をぼりぼりと掻いた。

どこかの国にある、大きな城——ここはハーデス城と呼ばれ、地上に置ける冥界軍の本城にして、基地にあたる。二百年前に冥界が壊されて以降、冥界軍はハーデス城をひっそりと作り、その日を待っていた。それは何百年——いや、何千年先になるかは分からないが。

そのハーデス城で、ハーデスの闘士・冥闘士の一部が聖域への襲撃や突撃を企んでいた。

「我々が女神アテナを倒せば——この地上はハーデス様のものになる——……」
——と。

15：「冥軍侵攻」

その日の聖域は朝から騒然としていた。白虎は何があつたのかと、教皇の元まで向かい、焦りと緊張を露わにしながら、教皇に問い詰めた。

「老師！ 何があつたんですか!？」

「……白虎」

教皇のその顔は今までに見たことがないものだった。何か申告な——いや、申告どころではないもつと何か——。

——白虎はその教皇の表情だけで全てを把握した。

白虎は『嘘だ……』と、黒い何かに覆われた表情になり、その場にへたりとしゃがみ込んだ。

とうとうその日が来たというのか。しばらくは起こらぬだろうと言われていた戦い——冥王ハーデス軍と自分達アテナ軍との戦いが。

「老師……」

「……」

「わいら聖闘士はどうしたら良いのですか……」

「白虎……」

「いつもいつも『どうにかなる』って言ってますけど……実際に目の前にすると、不安と心配しかないですよ……」

白虎の声がいつもとは違い、元気な面よりも、弱気な面が強く出ており、その内心を教皇に対して露わにしていた。何せ、白虎は水鹿や翔馬の前では普段から弱気な部分は見せず、元気な面しか見せていない。水鹿達を信頼していないわけではないが、だからこそ、こういう内心は水鹿達には吐露できない、と思うのだ。

教皇は弱気な白虎に対して、黙って歩み寄り、ポンポン、とその頭を撫でてやった。白虎は教皇から撫で受けながら、視線をスツと見上げた。

「……老師……」

「お前がそんなんでは、私も元気が出ないな。参った」

「老師い……」

「うむ。安心しなさい。前回の聖戦より、今回の勢力は圧倒的に衰えている。聖闘士皆で本気を出せば、勝算は十分にある」

教皇は白虎の頭から自分の手を離し、両手でスツと腕を組んだ。そして白虎に微笑んだ。

「だから、お前は普段通りでいなさい。それが一番だ」

「普段通り……」

「そうだ。お前の元気がないと、この聖域は一気に暗くなるぞ」

「やだ、老師……すごい大袈裟……」

教皇の誇張の仕方がおかしくて、白虎は思わずくすくすと笑い出した。

だが、教皇の言う通り、普段通りでいることが今の白虎には必要なことであろう。何が起こつても動じず、いつも通りの自分であること。白虎はそれに納得したのかココリと頷いて、スツと立ち上がった。

「老師、ありがとうございます！ 何だか元気が出ちやいましたー」

「うむ、それでよい」

教皇は白虎の元気な様子に、嬉しそうにココココと頷いてみせた。弟子の元気は師の元気。白虎が元気であると、教皇もそれにつられて元気が出るといふものだ。

白虎はいつも通り、元気のある笑みを浮かべて、ぺこりとお辞儀した。

「では、ありがとうございますー！」

そうして白虎が戻ろうとして、体をコーナーンさせると、ふと、こちらに向かつてくる人の気配がした。

「……？？」

（黄金聖闘士……？）

小宇宙に僅かながらの衰えを感じる事ができるが、その輝きは正しく黄金聖闘士のもの。白虎はひよこひよここと歩きながら、その姿をこの目で見ようと少しばかりその場で待ってみた。

しばらくすると、その姿はやってきた。その右手にはC字型の黒い杖を持ち、服はそれに合わせた黒いタキシード服、そしてその帽子も黒いシルクハットであった。

そして、更にその人物の特徴といえは何よりも――。

(老、人……?)

そう、その人物は聖域ではあまり見ないような老人であった。

老人は白虎の姿に気がつき、その姿を見るなり、『なるほどねえ』と納得したように微笑んだ。白虎は突然自分にそのよつに微笑んだ老人に心当たりはなく、頭の上に『?』とハテナマークを浮かべていた。

「そうか。君がああ杯座の少年の親友だね」

「ふつ、ふにやあつ!？」

(こ、この人、何で水鹿のこと知つとるん!?)

自分と仲の良い杯座の少年――現状では水鹿以外を指しているとは考えにくい。

老人はあんぐりし、驚いている白虎を見るなり、『おや、これは失敬』、と苦笑いをした。

「確か、君とはこれが初対面だったね。杯座の少年とは何度も会っているから少し感覚が鈍ったのだろうね」

「は、はあ……」

「私はコーラル……元・牡牛座の黄金聖闘士のコーラルだよ」

「……も、元・黄金聖闘士……!?!」

その言葉を聞いて、更に白虎の心の中がざわついた。この老人が元・牡牛座の黄金聖闘士。そして、水鹿はそんな老人と知り合いである——よくよく考えたらすごいことだ。

老人・コーラルは微笑みを絶やさなのまま、白虎をスツと見つめた。

「君は確か龍星座の白虎だったかい？」

「は、はい……」

「男の子に使うのも難かもしれないけれども、噂通りのべつぴんちゃんだね。将来が楽しみだよ」

「ふ、ふにやあ……」

「こ、この人……何だろ……見た目だけじゃなくて中身も紳士やなあ……」

自分が女子であれば、こういう紳士的な男性に憧れるものなのだろうが。

コーラルはクスクスと笑いながら、カツカツと履いている革靴を鳴らして、教皇の目

の前まで歩いていった。そして教皇の目の前までくると、コーラルはスツと片膝を地につけて、その場に跪いた。

「お久しゆうございます、教皇——いえ、天秤座の教皇様」

「……コーラル、そんなに畏まらなくとも良いんだぞ？」

「フフ、そうでございますね」

教皇に言われてコーラルは跪くのをやめて、スツと立ち上がった。教皇はそれを確認し、いつまでもそこに立っている白虎に対して視線を向けて、こう言い放った。

「白虎。お前は戻って良いぞ。鍛錬の時間が無くなってしまう」

「あ……そ、そうですね。これは失礼しました」

教皇に言われ、いつまでここにいる気だ、と白虎は自分に対してそうやって突っ込み、教皇の間から去って行った。

十二宮から鍛錬場へと向かっている間にその出会いは起こる。

白虎が白羊宮を出て、そこから鍛錬場へ走ろうと足を伸ばしていると、見たことがない、そして、白虎とはそう年齢が違わない、少年の姿がこちらをジツと見つめていることに気がついた。その少年は無表情で、また、特徴的な髪型をしていた。髪の毛の両サイドがびよん、と跳ねており、色も金髪に近い茶髪であった。

(……何やろう。聖闘士かな?)

というより、小宇宙の雰囲気的には多分聖闘士であろう、多分。

白虎はこのまま一人の少年の視線を浴びるのも釈だったので、思い切って話しかけてみることにした。

「あのー……」

白虎がそうして少年に歩み寄った時であった。

少年は若干白虎を怯えたような目で見てから、タンツと背を向けて、そのまま走り去ってしまった。

「んなっ!?!」

突然怯えられて、逃げられた白虎は何が起こったのかさっぱりだったが、すぐに氣を取り戻して、全速力で少年を追い掛けた。

「待てえ————いッッッッ!!!!」

初対面にして、ここまで怯えられるなど、白虎からしたら初めてのことだった。

大抵ならば言い寄ってくるか、どこかへ連れて行こうとする者が大半で、白虎はそれを鬱陶しいと思っていた。だが、ここまではつきりと怯えられると逆に氣になつて氣になつて仕方がない。

初対面だというのに、自分が一体何をしたというのか、そもそも自分は向こうと今ま

でに一度会ったことがあり、その時にあった出来事を自分は忘れてるんじゃないか——様々な可能性が白虎の頭の中にめぐり回る。だが、相手はどう考えても初対面だ。もし一度でも会っていれば白虎は忘れないはずである。

白虎は必死になって少年を追いかけるも、少年もかなり素早く、一度でも気を抜いたら、目を離したら、絶対に見失う。

「くっそお！ なんつー速さやつ！」

こんな速く走れるということは、少なくとも聖闘士ではあるだろう。白虎はたった今、そう確信した。

（でも………！）

「だあつ！」

白虎は走りながら足と体に重心に力を入れ、そして、そこから大きく前へと飛ぶように走った。そのことに気が付き、振り向いた少年は、あまりの白虎の斬新な追いかけ方にギョツと目を見開き、再び前を向いて走り出した。

だが、こうなった白虎に勝るものは、多分、なかなかいない。多分。

「ひっさああああつっ!! 廬山龍飛翔的な走り方——ツツ!!」

——そうして白虎はかなり強引に少年に追い付いたのである。そう、かなり強引に。きつと、水鹿がその場にいたら、『何をしているんだお前は』と呆れるだろうし、また、

翔馬がいたら『相変わらずだな……』と苦笑するだろう。

「だーっはっはっは!!! 捕まえたぜ、少年よーっ!!!」

この、白虎の高笑いと同時に。

『残念美人』というのは、まさしく白虎の言うことを指すのであろう。白虎は男だから、何か別の表現になるのであろうが。

少年が地面の上できっちり正座で座っているのに対して、白虎はドンツと腕を組み、地面の上に堂々と胡座をかいていた。そこからは白虎の豪快さが溢れるがごとく滲み出していた。

「んー、で、わいら初対面よな？」

「……はい」

その白虎の雰囲気は少年にとって、プレッシャーを感じざる得ないものだったのか、年がそう変わらないであろう白虎相手に思わず敬語を使ってしまう。だが、白虎はそんなことに気にせず、話を続けた。

「んで、アンタ、何で逃げたん？」

「……」

「……わい、アンタに何かしたん？」

「……」

少年は顔を下に俯けたままで、答えようとはしなかった。

それに対して白虎は『んー』と、困ったようにポリポリと頭を手で掻いた。正直なところ、理由が分からないまま怯えられ、逃げられたままではいまいちすつきりしないのだが。

白虎は言い方を変えた。

「じゃあ、わいのこと怖い？」

「……」

これには少年もコクコクと首を縦に頷かせた。白虎は『えーっ!?!』と更に困ったような素振りを見せて、少年を見た。

初対面で『怖い』だの『逃げよう』などと思われるのは白虎的にはいただけなかった。

「主にどの辺が怖いんよ」

「……あの……その……」

「？」

きよとん、と白虎は少年を見つめた。

少年は更に縮こまるも、それに負けないように声を出した。

「女の子が苦手というか……怖いだけなんだ……」

少年がそう言い放った瞬間、白虎の中で非常に長い沈黙が流れた。少年は突然何も言わなくなった白虎を不思議そうに見つめていた。

「……………あの……………」

「……………」

白虎は思わず黙り込んだ。

余程のことがない限り、初対面では性別を間違われているとはいえ、言動で分からないのか、と心の中で白虎は思う。言動がアレにせよ、白虎は外見のイメージが先につきやすいゆえ、なかなかそういうのは難しいのだが。

白虎は『はー』とため息を吐きながら、少年に告げた。

「あんなあ、少年。わいは『男』やから」

「……………!?!」

少年は目を見開き、酷く驚いた顔をして、白虎を二度見した。どう見ても女の子にしか見えない白虎の外見——それこそまさしく可憐という言葉が似合うぐらいだが、これが見つけとした『男』。少年は信じられないと言った様子で、白虎をまじまじと見つめた。

白虎は苦笑しながら、少年を見ていた。まさかそんなところで怯えられているとは思わなかった。白虎は自分を指差して言う。

「びっくりしたやろうけど、わいはれっきとした『男』やで」

「……」

「……ま、信じてもらわんでもええけどな」

信じたところでどうにでもなるわけでもない、と白虎は思ったのかそんなことを言う。そしてスツと立ち上がり、白虎はパンパン、と尻についた土や砂を払った。

「それで、アンタ、名前は？」

「……えっ？」

「名前よ、名前。一応聞いておかないと」

「……」

少年はチラチラと白虎を見つつ、自分の名を名乗った。

「りん、びよう……」

「ん？」

「山猫星座・リンクスの凜猫……」

太ももの上に置かれた拳が、ギユツと強く握られた。

白虎は胡座を掻いた足の上に『ふうん』と鼻で声を出しながら、肘を置いて、その手の上に頬を置いた。

「凜猫ねえ……」

「……」

「うん、良い名前やないの。響きもいいし」

「……あ、ありがとう」

少年・山猫星座の凜猫はその白虎の言葉に照れたように、顔を俯けた。白虎はニツと歯を見せて笑い、こちらもこちらで、と名を名乗った。

「わいは白虎。龍星座の白虎。ま、同じ聖闘士同士、宜しく頼むで！」

白虎はスツと凜猫に手を差し出した。

「……う、うん……」

凜猫は差し出された白虎の手に、恐る恐る自分の手を重ねた。白虎は重ねられた途端、ギュツと強く凜猫の手を握って、スツと少しだけ上に上げた。凜猫はそれに少しびっくりしたように白虎を見たが、白虎はさっきのように自分に笑いかけていた。その笑みに釣られて、思わず自分の口元も若干ながら緩んだ。

白虎はしばらくすると、凜猫の手を離して、スツと立ち上がった。

「白虎……?」

「ん? 鍛錬場に行こうと思うてな」

「……」

「凜猫、アンタも行く?」

「……いや、僕は……」

凜猫は遠慮がちに白虎から目を逸らした。その目の逸らし方が普通に自分から目を逸らしているようなものではなく、別の何かから目を逸らしているように白虎は感じ取った。だが、白虎はそれがどうしても分からず、「まあ、良いじゃん」と凜猫の手を再び取った。

「アンタも聖闘士なんやろ?」

「……」

こくり、と、静かに、凜猫は首を縦に振った。「やっぱり」と、白虎はニツコリ笑ってみせた。そして、いつまで経っても立ち上がろうとしない凜猫を持ち前の腕力でグイッと上に持ち上げ、立ち上がらせた。凜猫はそれに思わず驚いてしまったのか、目を見開いた。

凜猫が立ち上がったのを確認すると白虎は凜猫の手を掴んだまま、体を前に向けた。凜猫は「あの……」と戸惑いながら白虎に聞いた。

「どこへ……」

「さつきも言うたやろー。鍛錬場や、鍛錬場」

「え……」

焦ったように凜猫は白虎を見た。だが、白虎はニツと笑ったまま、凜猫の手から自分

の手を離そうとはしなかった。

「アンタも聖闘士やる？　なーに、そんなに遠慮しとるんよ？」

「だ、だけど……」

「見たところ、アンタ、何もやらかしてないし……そんなに怯える必要もないよ」

「……」

「ほら、行こ！　わいの友達紹介してあげる！」

「あつ……」

白虎はグイッと凜猫を引っ張り、そのままタツと軽快な足取りで走り始めた。凜猫もそれに釣られて走ろうとする、が——この時は白虎の方がとんでもない速さで走っており、凜猫はそれに追いつくだけでも精一杯であった。

気が付けば、凜猫の息が上がっていた。さつきまでは自分の方が速く走っていたはずだったのだが。

白虎はあんなに速く走っていたのにも関わらず、涼しげな表情——いや、爽やかな表情と言った方が正しいだろう。周りから見ても羨ましくなる程度のその爽やかさは、まさしく理想だった。

「ん……あれ……？」

そして、白虎はキョロキョロと辺りを見渡して、鍛錬場の、いや、聖域全体の異変に気が付き始めていた。

「……何かあった？」

「……ん、いや……」

(なんや……この小宇宙……)

ピシピシと打ち付けるように、その小宇宙は白虎の体を服越しに攻撃しているように感じ取れる。それは今までに感じ取ったことがないものだった。当たり前のように、この小宇宙は聖闘士のものではない、何か異様に漆黒に染まったようなものだった。

「そこのお嬢ちゃん」

「……」

——お嬢ちゃん。大方自分のことであろう、と白虎は声のした方を振り向いた。そこにいたのは、聖闘士のものではない、紫寄り、だが、漆黒に染まった鎧を纏っていた男だった。

男はこちらを振り返った白虎の顔を見て、『お?』と鼻の下を伸ばした。

「なんだあ。すごい俺好みの顔してるじゃねえか? お?」

じりじり、とゆっくり男は白虎に歩み寄る。白虎はニコツと笑いながら、いつもよりも高く、そしていかにも『可愛い』、悪い言い方をすれば『ぶりっ子』というような口調

で男に話しかけた。

「わあい、褒められちゃったあ！　白虎超嬉しいー！　お兄さんも十分、イケてますよおー！」

白虎からはいかにも女の子の子な小宇宙が出ており、白虎を知っている凜猫は思わず苦笑いをして、それを見ていた。だが、白虎を知らない男は更に鼻の下を伸ばして、白虎に近付いた。

「そ、そうかい？　じゃあ今度……」

と、男が白虎に触れようとした瞬間、突然白虎の声のトーンがいつものものになり、そしてこう言い放った。

「——とでも言うかと思ったか、このロリコン野郎」

その瞬間、男そのものの体が向こうの壁まで吹き飛ばされた——いや、蹴り飛ばされた。白虎の足が男の方へと突き出しているのがその証拠だった。

パラパラ、と体や顔に土や砂がついたのを男は手で払いながら、ゆっくり立ち上がった。

白虎はまたころつと表情を変えて、男が飛ばされたところまでスタスタと歩いた。男は先ほどとは打って変わってギンツと鋭い視線で白虎を睨み付けた。白虎はまた先ほどと同じ声と態度で男に接した。

「やだ、ごめんなさあい！ つい本音が出ちゃったあ！」

「な……」

「失敗失敗。もっとお淑やかにしなきゃー！」

などと言いつつ、白虎は立ち上がろうとする男の腹に蹴りを二、三発食らわせた。その度に男は「うっ、うっ」と変な声を出しながら、白虎を睨み付けていた。

白虎は「いけないいけない」と呟きながら、男から離れた。そして、声の高さを保つたまま、ニヤツと怪しく笑ってみせた。

「んー、お兄さんここの人じゃないみたいで、ちよつと警戒しちやつたというかー。あ、私、こう見えても聖闘士なんですけどねー」

「……ほ、ほう……お嬢ちゃんが……」

「——で、アンタは何者？ 少なくとも聖闘士関係者じゃあらへんよなあ？」

白虎の声のトーンがスツと一気に元に戻る。

「ああ、そうそう。さつきからお嬢ちゃんお嬢ちゃん言うてわいを可愛がってくれてるけど……」

その瞬間、白虎はバツと上半身を纏っている白い中華服を宙へ舞わせた。それを見ていた男と凜猫はぎよつとしてそれを見ていた。

そこに現れたのは、そこにいる男よりも断然鍛え上げられた『れつきとした男子』の

白い上半身だった。男はピクピクと口を動かしながら、ガクガクと足を震わせ、後ろへと後退した。

「……ふん、自分より強そうと思ったらそうやって態度変えるんかい。つまらんなあ」

「……あ……あ」

ザクザク、と砂音と足音を鳴らしながら、白虎は男に近付いた。そして、男が手を付けているところの数ミリ横で足をガツと踏み込み、そこだけ大きく凹ませた。男はガクガクと震えて、怯えた様子でそれを見ていた。

「なあ、アンタ何者？ どこからやってきた？」

「あ、ぐ……」

「ビクビクしてないで答えような？」

パラパラと砂を落としながらスツと足をどけて、白虎は言った。

男はガクガクと声を震わしながら、白虎に言った。

「お、お、おお、俺は……め、冥王ハーデス様につつ、つつつ仕える、す、すす冥闘士だ……」

「……！」

（冥闘士……！）

白虎の心の中と心臓がざわついた。

冥王ハーデスに仕える冥闘士がここにいるということとは、冥王軍側はすでに地上への侵攻を企み、その計画を進めていたと言うのか。今日、教皇から聖戦開始の合図があったとは聞いていたが、まさか早速向こうから出迎えてくれるとは思ってもみなかった。前まではこちらから出て何の音沙汰もなかったというのに——何ということだ。

男は「あ、あの……」と震え声で白虎に話しかけた。
「い、命だけはご勘弁を……」

「どうやら、ここで死にたくはないらしい。それはそうだ。聖戦開始早々死んだら恥と
言うもの。」

——だが、白虎は無情になれた。

「……………めんなさい」

白虎はその拳に小宇宙を貯めて、男に当たるようになり下から拳を入れた。

「廬山昇龍覇ア——ッ!!」

男の体が、白虎の拳から放たれた白い龍と共に青天へと持ち上げられた。冥闘士の男は天高く宙に飛びながら、空を見て思う。

——空というものは、こんなにも綺麗だったのか、と。

そのまま目を閉じて、後ろから来る風を感じ取った。

——ああ、とても心地良い、と。

気が付けば、男は頭から落下していた。打ち付けられたシヨックで、頭には大きな傷口ができ、そこから血が大量に出ていた。冥闘士が纏う冥衣も白虎の昇龍覇によつてポロポロに砕けていた。そして、自然に暎がすつと落ちた。

白虎は「ふー」と息を吐いて、男がもう起き上がつてこないことを確認した。

（冥闘士と言うからには遠慮はできん……だから、許してな……）

向こうが命乞いしようが何だろうが、聖闘士として、冥闘士は討たなければならない。どんなことがあるうとも、そのことを頭の中から離してはならない。

凜猫は白虎が男に対して昇龍覇を放つたのを見て、「どうしてこの聖闘士はあつさり人を傷付けるだろう」と思っていた。いや、それだけではない。白虎の脱いだ上半身の上にある幾つかの痣。大体は薄くなっているが、それでも白虎の白い肌からすればとても目立って見える。それは同時に「何故この聖闘士はここまで傷付いているのだろう」と思わせるものだった。

白虎は周りに目配せながら、凜猫を庇うようにそつと後ろに下がった。

「凜猫……」

「……？」

白虎がニツと笑つてみせた途端、二人の周りを囲うように、先程の男と同じような鎧を着た冥闘士の雑兵らしき者達がザツと足音を立ててそこに出現した。

凜猫は思わずさつと白虎の背後にその身を退いた。

その正反対に、白虎はこの状況が楽しく思えるのか、全く余裕だという笑みを浮かべて、うなじが僅かに見えている後ろ髪と、肩の下まである横髪を靡かせながら、そこに立った。

「……凜猫。聖闘士ならこの程度の雑兵、片付けられるよなあ？」

「……び、白虎……」

何かを躊躇っているように見える凜猫を背後に、白虎はスツと拳を握った。

「受けよ、荒れる猛虎の怒り！ 猛虎烈風紫電拳！」

その瞬間、今度は一匹の猛虎が激しい烈風と共に白虎の拳から飛び出してきた。とある雑兵はその虎に啞えられ、別の雑兵はその虎に乗せられて向こう側まで飛ばされた。それを瞬きしながら凜猫は見ていた。

こちらをじつと見てくる凜猫に、白虎は僅かながら荒れた口調で、勢いよくこう言った。

「凜猫！ ちったあ動かんか！」

「あ、う、うん!？」

「再三再四言うけど、アンタも聖闘士や！ 相手は雑魚とも言えど冥闘士！ ぼーつとしてたらアカン！」

「……………」

白虎に言われて、凜猫はハツとなった。確かにここで躊躇ってしまつては、聖闘士としては失格なのではないか。自分達の倒すべき相手は今、目の前にいる雑兵達だ。

しかしながら、と凜猫は目を伏せた。

「僕は……………」

「……………」

「戦いは好きじゃないんだ……………」

凜猫はスツと白虎にその心の内を呟いた。白虎はこちらに攻撃してくる雑兵を吹き飛ばしながら、黙ってそれを聞き続けた。

「人を傷付けるのが恐ろしいことに思えてね……………」

「……………」

「だから、僕にはたった一人の雑兵さえ……………」

「凜猫、危ないっ!」

気が付けば、白虎が凜猫の目の前で、雑兵の攻撃のその身に受けていた。雑兵の攻撃は白虎の腕に当たっており、白虎は勢いで、その腕を振り、雑兵の突き飛ばしてやった。

「大丈夫!?!」

「……………う、うん……………」

「良かった」

白虎はフツと微笑んだ。

——その背後には一人の雑兵が、隙を狙ってジリジリと白虎に近寄っていた。

そのことに早速気が付いたのは凜猫だった。

「白虎、後ろ……!」

「……っ!」

白虎が凜猫に言われて気がついた時には、既にこちらに攻撃をしかけてきていた。しかも避けきろうにも避けきれない程度の距離で、向こうはこちらに近付いていた。

「危ないっ……!」

「……っ!」

白虎は条件反射的に、自分の顔を腕で覆い、その場で低い態勢を取った。このままでは危ない、と。

だが、その危険もすぐ安心に変わった。

向こうの攻撃が、白虎に当たる頃である時に、白虎を覆っていた冥闘士の姿がなくなっていたのである。

(……?)

白虎はそっ、とゆっくり目を開き、腕を顔からどけて、視界を開いた。

「……………」

先程の冥闘士の代わりにいたのは、焦げ茶色で特徴的な髪型をし、白い聖衣を纏った少年と、肩まである青みがかかった黒髪を下ろし、若干薄い紫みがかかった聖衣を纏っている青年の姿。

——天馬星座の翔馬と、杯座の水鹿の姿だった。

「翔馬っ！ 水鹿っ……………」

この二人が、この二人が白虎を冥闘士の攻撃から守ってくれたのだ。

白虎は二人の姿を見て、思わず嬉しそうに声を上げた。

水鹿は白虎の姿を見るなり、「はーっ」と長い溜息を吐いて、呆れたような目つきで白虎を見た。

「何でお前は半裸なんだ。半裸の方が本気出るか？」

「ああ、これは……………」

「杯座。白虎は脱いだからが本気だ」

「……………ああ、そうだったな」

「おい！ ちよつと!?!」

本人を差し置いてそんな結論を出すのはいただけないものがある。白虎は頭をわしゃわしゃと掻きながら、「何やねん」とぼそつと呟いていた。

翔馬はクスクスと笑いながら、白虎に一つの聖衣箱を差し出した。

「と、いうのは冗談だ。ほら」

「……！」

差し出されたのは——龍星座の聖衣箱だ。

「ちゃんと修復済みだぞ」

「……うん」

白虎はコクリと頷いて、聖衣箱を開き、聖衣のその姿を露わにさせた。その途端、聖衣が分解して、白虎の胸や腕、そして足を包んだ。

聖衣装着が完了した白虎は、よし、と拳に気合いを入れて、目の前を見た。

——これから、聖戦が始まる。

16 : 「聖戦開始」

「うりやーっ！」

「ふんっ！」

「はあっ！」

白虎、水鹿、翔馬の三人は絶え間無く出てくる冥闘士の雑兵を次々と倒していった。同じくその場にいた凜猫はひたすらそれを見つめていた。

——自分の出る幕が一切ない。

そう思っても過言ではなかった。自分がいなくても、聖闘士達による雑兵の掃除大会は成り立っていた。

次々と雑兵らが片付けられていく中で、凜猫はただ、ひたすら自分はどうしたら良いか迷っていた。自分が攻撃しようとする、三人のうちの誰かが先に雑兵に攻撃をする。要はこの三人に隙はなかった。

白虎は息を少しだけ切らしながら、ボソツと呟いた。

「……全く片付かへんな……」

もつと簡潔に言えば、キリがない。この雑兵達、倒しても倒してもすぐにまたどこか

らか湧いて出てきて、白虎達を襲ってくるのだ。

(しゃーないな……)

白虎は周りを見渡し、雑兵達がそこにいることを確認した。

「なあ、水鹿、翔馬、凜猫。耳、塞いでくれないかな?」

「……白虎……」

「……」

白虎は不安そうに見つめる水鹿と翔馬にコクリと首を縦に振った。もうこうなったら、やるしかない。白虎はザンツと左足を肩幅まで地面に滑らせ、ゴオツと風を吹き起こしながら、小宇宙をその身に湧き上がらせた。これから何が起こるのか分からない凜猫は、白虎の言われた通りに耳を手で塞いでいた。

雑兵達は白虎が突然攻撃するのをやめたので、一体何事かと警戒し始めた。雑兵達から見れば、白虎はこの大量にいる雑兵を目の前にして、ただ、その真ん中に優然と立っているだけだった。だが、白虎の方はしっかりと攻撃態勢へと入っていた。小宇宙を燃やし、雑兵達のいる場所をしっかりと把握する。その証拠に、数秒ぐらいたした後、雑兵達が突然ギョツと顔を怪訝に歪ませて、白虎を見つめ始めていたのである。

小宇宙が溜まってきたところで、白虎はスツとゆっくり口を小さく開き、息を軽く吸って、また閉じた。そして、口を閉じたまま、小さな唸り声のようなものを上げ始め

た。

「hum……」

——ハミングである。

白虎はハミングをしながら、自分の声の調子や喉の調子を確認していた。その一方で、そのハミングに僅かな攻撃的な小宇宙を乗せて、雑兵達に牽制や威嚇もしていた。雑兵達はそのハミングを聞く度、じりじり、とゆつくり、そして僅かながらも、後ろへと後退していた。

その雑兵達の後退するところがなくなつたところで、白虎のその小宇宙は一気に爆発し——放たれる。

「Ah——！」

白虎の周りから止め処なく凄まじい爆風が吹き荒れる。予期していなかつた雑兵達はただ、ただ、それに吹き飛ばされるのみで、攻撃すらままならなかつた。水鹿達は耳の穴を手のひらや指で塞ぎながら、白虎のその咆哮に耐えた。

その白虎の咆哮は今まで通り凄まじいもので、地面という地面が声の大きさによつて起こる振動により、わずかながらも揺れ、また、その地面は揺れながら亀裂がピキピキと鋭い音を立てながら入る。

「ちいつ、聖闘士にこんな奴が……うわあつ！」

無論、少しでも力を抜くと、こんな風にあつという間に向こうまで飛ばされる。だが、正直に言うとうと、力を入れた方が吹き飛ばれにくい、というだけで、力を入れても吹き飛ばされる者は吹き飛ばされる。白虎の声によつて起こる爆風はそれほど凄まじいのである。

雑兵達が白虎達の周りから吹き飛ばされたところで、白虎の声にプレスがかかる。

「——しゃあツツ！」

そうして、白虎は指揮者が楽器や合唱者の音や歌を止めるあの式をして、自分の攻撃の止めに入った。その時の爆風は白虎が声で出している間の時の爆風よりも何倍にもなるほどで、砂煙や小さな石、そして草木さえもがそこに舞い上がり、その爆風の巻き込まれる。その爆風により、今まで吹き飛ばされなかつたそこにいた雑兵達が完全に吹き飛ばされる。

「うわあつ！」

「ぐあつ！」

「つあつ！」

雑兵達は悲鳴を上げながら、宙に舞い、そこからゴツツと頭から下に突き落とされた。

白虎はあはあ、と息を立てながら、辺りを見渡して、雑兵達がその場から吹き飛ばされ、消えたことを確認した。

「…………ふー…………」

そして、終わってから出てくる緊張感の緩みから、深く息を吐いた。

(これが冥王軍側の雑兵、か……)

雑兵ゆえか分からないが、正直なところ、白虎的には物足りないと思えた。もし、こうして吹き飛ばされる冥闘士ばかりであれば、苦勞はしないだろう。

白虎は水鹿達のが気になり、パツと振り向いた。自分の声により吹き飛ばされたかどうか心配になったのだ。

「なあ、みんな……!?」

——だが、それを許してくれない小宇宙が一つ。

どこからか現れたのかは分からないが——確かにその冥闘士はそこにいた。女性的な印象を持ち合わせた顔つきとサラツと透き通った長い髪の毛。冥衣の形状もその顔付きに合っているもので、肩のパーツは手首までくるもので、背中に生えた大きな丸みを帯びた羽が非常に特徴的であった。そして、小宇宙も並大抵のものではなかった。今までに感じたことがない——黒みがかかった、小宇宙。勿論、翔馬と水鹿、そして凜猫もそれに気が付かないはずがなかった。

その冥闘士は冥衣の足部分の踵を鳴らしながら、白虎一点を目掛けて歩いてきた。

「…………龍星座の聖闘士か…………」

その顔には似合わない、非常に低く、渋みを持った声。白虎は足を引かせて、思わず身構えてしまった。冥闘士はフツと笑って見せて、スツと白虎の頬に触れた。

「龍星座の聖闘士は男だと聞いていたのだが……私の聞き間違いか？なんて可憐な少女だ……」

「……気持ち悪い！ 触れるなっ！」

白虎はその手をバンツと冥衣を叩いた音が出るほど押し払い、冥闘士から一步離れた。

「……ほう……私に触れた女性は皆、私の虜になるはずだが……」

「つるっせー！ わいは男やつ！」

「……」

一瞬、冥闘士の表情に曇りが見えた。どうやら心の底から白虎のことを本当の少女だと思っていたらしく、その白虎本人から男だと知らされた瞬間、どう反応して良いのか分からなかったらしい。とりあえず白虎が男だと分かったからには、冥闘士もザツと離れて、その距離を取った。

冥闘士は「ははっ」と寒いくらいに爽やかに笑って、首を横に振った。

「フツ、私としたことが……男と女の見分けもつかなくなつたとは……」

「……」

(こいつ……無理やわ……)

白虎はこの冥闘士と数分數秒話して関わっただけで、そう悟った。何となくだが、生理的に受け付けないし、苛立ってくるのである。

「翔馬……」

「……うん……」

無論、水鹿と翔馬のこのやり取りだけでも、あの冥闘士が気に入らない、というのが分かる。きつと、男の本能的に「こいつは男の敵だ」という感覚が芽生えてくるのだろう。

だが、凜猫は一切そんなことを感じさせない目つきで、その冥闘士を見ていた。その瞳にはその冥闘士に対して、白虎達と同じようにちよつと引き気味なところもあるのだが、それよりも、驚きの色の方が強かったのである。何故、この冥闘士がここにいるのだ、と。そんな凜猫の冥闘士に対する視線に、冥闘士は何となくだが気付いているらしく、スツ、と凜猫とアイコンタクトを取るようにして一瞬だけチラツツと見た。そして、こちらも少しだけ驚いた様子で目を見開いた。だが、すぐに先程のように寒い爽やかな笑みを浮かべて、白虎達にその視線を戻した。そして、白虎のことを残念そうに見つめて、言った。

「フツ……つまり、ここにいるのは全員男、ということか」

「当たり前エよ！ 女の子求めてるんなら別のところ行けや！」

その言葉に一番真っ先に応答したのは白虎である。白虎は一度だけ「こいつ無理」だと思いはじめた途端に、いちいちこの冥闘士の言動が鼻について、目障りだと思いはじめていた。美青年なのだから、ナルシストなのだからは知らないが、ひたすら不快感を感じていた。一言で、現代風に言えば「ウザい」。

「やれやれ」と冥闘士は呆れたようにそんな白虎を見据えた。

「私はこんな下品でガサツな男を少女と見間違えていたのか……」

「あ？ 少なくともアンタよりは上品に女の子選ぶっつーの。女の子をひたすらタラッタラしてる方が下品やわ」

白虎はペツと地面に唾を吐いた。水鹿と翔馬は白虎のその言葉を聞いて、「ガサツなのは否定しないのか……」と額や頬に脂汗を一滴垂らしていた。確かに白虎がガサツなのは真実なのだが、本人がそだけ反論しないのはなかなか複雑に思えることがある。

「で、アンタに触れた女の子は皆アンタの虜になるとか言うてたけど、それで何人の女の子食ったんよ」

「……さあ、何人かな」

冥闘士はニヤツと笑った。

その笑みが白虎の頭に來たらしく、白虎は冥闘士に対して渾身のパンチを放った。一

度そのパンチをぶつけ、倒せた、と思つたのだが、冥闘士はそれ全く物怖じしないどころか——そのパンチのダメージを無効化していた。

「……なっ!?!」

「君達みたいな顔立ちだけがそこそこ良くて女の子に無縁なような男には、一生分からぬことだ」

そう言うと、冥闘士は白虎のパンチしてきた手の手首を掴み、そのまま白虎を上へと持ち上げ、後ろへと投げた。そのまま白虎は背中からドンツと音を立てながら、勢いよく地面に落ち、顔を歪ませた。そして、わずかながら顔を冥闘士の方へと向けた。

「ホント、苛立つことしか言わんな、アンタ……」

「……」

白虎は己の体が動けることを確認すると、腕に力を入れ、上半身を起き上がらせて、次に足に力を入れて、ガニ股になりながらも、そこに立ち上がった。そして、冥闘士を指差した。

「その玉と棒をもぎ取って、一生女を食えない体にしてやるで……」

「……イコール、死ぬ、と」

ふむ、と冥闘士は白虎を見た。白虎の目付きは本気でこちらを敵として見ている目で、少しでも煽ったらすぐにこちらに襲い掛かりそうだった。だが、白虎は誰がどこか

らどう見ても青銅聖闘士。自分一人を倒すような力を持つているようには見えなかった。それゆえか、このやり取り自体が下らなく思えてきた。青銅聖闘士ごときが自分と対等に渡り合おうなど、立場と身分と力差を弁えろ、と。

冥闘士はふん、と鼻先で白虎を見下しながら、後ろを振り向いて、パチン、と指を鳴らした。その途端、再び雑兵達がどこから沸いてきたのである。しかも先程よりも倍の数であった。

「それではご機嫌よう、底辺聖闘士諸君。もう会うことはないだろうがね」

そこには嫌味が混ざっていた。

「くっくっ！ 待ちやがれ！ この、女つたらしめが！」

白虎の怒りはとうとう有頂天に達したらしく、その冥闘士を追い掛けるようにダツと猛スピードで走り出した。だが、すぐに近くにいた雑兵数人がその白虎に襲いかかったのである。

「っ！」

（くそ、避けきれないっ——！）

四方八方、頭上の上からも下からも、その雑兵達は白虎の元に現れた。これではいくらなんでも避けようにも、絶対に避けきれない。白虎はどうにかして逃げ道を探そうにも、ここまで囲まれてはその道すら探し出せない、というものだ。

だが、ある聖闘士がそんな白虎を雑兵から救い出した。

「……………」

薄く輝く綺麗なブラウン色の聖衣に、フワリとした動物の毛並みのような癖つ毛がある短い髪の毛。白虎はそれを見た途端、即座にその人物の名を上げた。

「圭熊……………」

そこにいたのは——大熊星座の青銅聖闘士、圭熊であった。

圭熊は白虎に襲いかかった冥闘士の雑兵達を次々と蹴り飛ばし、殴り飛ばし、しまいには投げ上げた。雑兵から解放された白虎は目を丸くしながら、圭熊を見据えた。圭熊はフンツと腕を曲げて後ろに引き、白虎を見、「あっ！」と声を上げた。

「お前、あの時の全裸聖闘士か！」

「せやで！ 全裸聖闘士やで！」

「んだよー！ 超絶きやんわいい女の子かと思つたらお前かよ！ ははっ！」

「それは悪かつたなあ！ あっはっはっはっは！」

二人は表面上は笑い合っていたが、一週間前のあのことを忘れていたわけではない——いや、二人のことだ。すっかり忘れているのである。勿論、白虎はすっかり忘れている訳でもなかったが、圭熊の今の行動で、圭熊のことを疑っていた自分がアホらしく思えてきたらしい。

「んで、龍星座の聖衣ってそれか。カッコいいじゃん」

「えへへ……」

と、二人が談笑を交わしていると、翔馬が静かに白虎の元へと駆け寄り、圭熊の方をキツと睨み付けた。圭熊は翔馬を見ながら、ぼりぼりと頭を掻いて、「あー、そっかそっか」と呟き、一歩だけ前に進んだ。

「お前もいるんだったな、天馬星座の翔馬」

「……」

翔馬はいかにも、といった様子で圭熊に対して威嚇の小宇宙を醸し出した。

「……大熊星座の圭熊。俺にはお前がどうも信じられない」

「……」

「白虎を助けたことは感謝する。だが、それ以上に——お前に対する疑いも晴れない」

「……ふーん。で、どうするってんだ？」

いかにも余裕そうな圭熊に対して、翔馬は非常に真剣な様子で圭熊のことをスツと見つめて、「勿論」と切り出した。

「お前をここで負かす。そしてお前に対する疑いを晴らす」

圭熊は辺りを見渡して、「はーっ」と深いため息をついた。

「……おいおい、沢山雑兵がいるだろ。そっちはどうすんだよ」

「そんなもの、戦いながらもどうにでもなるだろう?」

「……あー、それもそうだな!」

どうやら圭熊は普通に納得したらしく、ついでに白虎も「翔馬は頭ええな」と感心していた。水鹿はそんな三人を見ながら、完全に呆れ切った様子で、脂汗を額に一滴流した。

(お前ら、優先順位を……)

「少しは考えろ」、と心の中で突っ込みを入れる前だった。無数の細い糸が水鹿の側にいた雑兵達に向かって襲い掛かった。雑兵達はその糸に体を締め付けられ、身動きが取れなかった。水鹿は突然現れて雑兵達に襲い掛かった糸に酷く驚きながら、締め付けられている雑兵達に近付き、その糸を確認した。

糸は随分と細く、特徴的で——何かの楽器の弦のように見えた。

水鹿はその糸から、とてつもない小宇宙を感じ取る事ができた。誰か、大きな力を持った者がこの雑兵達をこの弦で縛り付けたのだろう。

そうして水鹿が糸の先を追って行くと、その先に、こちらに向かってくる聖闘士の姿が一人。ザツザツ、とその足音が聞こえてくる。その聖闘士は聖衣を着、竖琴を片手に持って、こちらに視線を向けていた。そして、透き通るような腰の辺りまである長い髪の毛。

——琴座の白銀聖闘士、唄狼であった。

「唄狼！」

聖闘士——唄狼は水鹿を睨みつけながら、ゆっくりとこちらに歩み寄り、水鹿に言った。

「先日のこと、忘れたわけではあるまいな」

「……当然だ……」

水鹿はコクリと頷き、「忘れているがはずがない」と付け足した。

先日のこと——水鹿と唄狼が再会し、唄狼が一方的に水鹿に襲い掛かったことを指すのだろう。あの時の水鹿はどうしても甘えが捨て切れず、唄狼に一度も反撃も攻撃もできなかった。結果自体は途中で白虎が来て、お預けという形になってしまったが——その結果を出す時は今なのだろう。

唄狼は雑兵達から弦を弾いて、ポロン、と豎琴を弾き始めた。

「デストリップセラナーデ……」

唄狼がそうぼつりと呟いた瞬間、豎琴の綺麗な音色が、鍛錬場に響き渡った。

水鹿がしばらくそのままその音色を聞き続けていると、周りの雑兵達が一気にバタバタと倒れ始めたのである。向こう側にいる白虎達まではこの音色は届いてはいないよ、雑兵達みたく倒れてはいなかった。そして、力の強さを調整しているのか否か、近

くにいた水鹿にもデストリップセレナーデは効かなかった。

一通り弾き終えたのか、ピタッと豎琴の弦から手を離して、再び水鹿を見つめた。

「これで戦えるぞ、水鹿」

「……唄狼……本当にやるつもりか？」

「当然だ。私は今すぐにも決着をつけたいのだから」

「……そうか」

水鹿は「はーっ」と、今まで唄狼に対して色々溜め込んでいたものを吐き出すように、ため息を吐いた。水鹿は本当にこの場に及んでまで唄狼とは戦いたくはない、というより、何を優先したら良いかを考えれば、こんなことをしている場合ではないのだ。だが、唄狼がああなってしまったら、他人の言うことを聞かないことは水鹿がよく知っていた。

再三再四、しつこいほど言うが、そもそも聖闘士同士で戦う、私闘などあつてはならぬことだ。しかも唄狼は真剣に自分とそれをやろうとしていた。

水鹿がそんなことを考えている間にも、唄狼は名前にある「狼」の字の通り、狼の怒りの咆哮を見せつけるように小宇宙を手にかけている豎琴に込め始めた。

「お前のやる気かないのなら……こちらからかかせてもらうぞ、水鹿！」

「……あーっ、もう！ 分かったよ！ やればいいんだろ、やれば！」

最早唄狼には「水鹿と戦うことをやめる」という選択肢はなかったようだ。水鹿は「もう、どうにでもなれ」といった様子で、唄狼の宣戦布告に応じた。

そうして水鹿と唄狼、圭熊と翔馬の二組が戦い始めようとしている中、お互いに戦う気は一切ない、といった様子で白虎と凜猫はお互いを見つめていた。

(……)

白虎は凜猫を見つめながら、先程、凜猫が自分に「戦うことは好きでない」と言ったことを思い出していた。勿論、白虎もこの流れに身を任せて凜猫と戦う気は一切なかった。だが、こうして凜猫を見つめていると、白虎は妙な胸騒ぎがしてならなかった。

(何やろうな、この感覚……)

白虎は、今、こうして戦うことを避けたとしても、どこかで凜猫と戦う運命にある気がしてならないのだ。白虎は手で胸を抑えて、顔を下に向けた。

この時ばかりはこれから来る戦いに覚悟しなければと——白虎はそう思ったのである。

一体、白虎の中の何がそうさせているのか分からなかった。凜猫は仲間であると思う一方で、我ら聖闘士の敵になってしまふのではないかという不安——これら二つの感情が白虎の頭の中で複雑に交差していた。

——ハーデス城。

とうとう聖域への侵攻を開始した冥王軍はいつ女神軍がこちらへ侵攻しても良いように、城の周りの警備の強化に努めていた。大量の雑兵達がわらわらと城の周りを囲い、守りを固めていた。

その様子を城の窓から見ていたのは、冥闘士の一人であろうか。周りよりも一回り小さな小柄な体格で、表情や顔付きもそれ相応のものであった。無論、声や口調も大人の男性とは思えないぐらい高く、幼かった。

「ねえねえ、ディーくん」

「なんだ、アトモス」

この男性に「ディーくん」と呼ばれた男性はいかにも不機嫌そうな顔で、目の前にいる人物をスツと睨みつけた。このディーくんにあトモスと呼ばれた方の男性は「うん」と頷いて、窓から外を眺めながら言った。

「フィーちゃん、聖域に行つたって本当？」

「……ああ。フィーロは女を探しに聖域に行つたよ」

フィーロ。

又の名を、天貴星グリフォンのフィーロ。

このフィーロは冥闘士の中ではトップクラスの強さを誇り、また、一番年上でもあり、

そして、男であるが、冥闘士一番の美しさを持ち、本人はそのことに異様な自信を誇っている。

「……あのタラシは我ら冥界三巨頭の恥だ。寧ろ聖闘士達がぶちのめしてくれると有難いが」

デイクン——もとい、デイーネはかけていた眼鏡をカチャツと音を立てながら取り、近くにあつた机の上に置いた。

——そのデイーネの口から出てきた冥界三巨頭という単語。

冥界三巨頭とは、冥闘士でもトップスリーを誇る力を持つ三人の者の総称である。その三人とは、今、デイーネが言ったように、一人は天貴星グリフォンのフィーロ。そしてそのもう二人は今、ここにいる天雄星ガルダのデイーネと天猛星ワイバーンのアトモスである。

その中でもフィーロは先程聖域で白虎と出会った人物であり、また、その接し方とデイーネの言うとおり、女癖が非常に悪く、女タラシである。それゆえか、デイーネを筆頭に一部の冥闘士からはよく思われていないが、何だかんだいって自分達よりも強いということ、なかなか逆らえないどころか、頭も上がらない。

アトモスは「あははっ」と陽気に笑って、デイーネの背中をバンバン叩いた。

「仲間にそんな」と言っちゃダメだって！ 遠慮ないなあ、デイクンは！」

「……嫌いなものに対して消滅願望を持って何が悪い？」

「いやいやー、今は女神軍が敵でしょー！　フィーちゃんは味方じゃん！」

「……それを思い出しただけでも、悪寒がするわ」

ディーネはアレルギー症状のごとくぶるつと鳥肌を立てて、フィーロに対する拒否反応を見せた。アトモスは「フィーちゃん嫌われすぎて大変だなー」と、呑気に呟いていた。

「で、それで？　聖域に行ったのはフィーロとその雑兵達だけか？」

「いやや？　違うよ。あと三人何か強い奴が聖域に侵攻してた」

「何か強い奴……随分アバウトだな」

「いや、だって、ボクら三巨頭以外に強い奴ってそう言い表すしかないじゃない？」

「……確かにな」

そういえば、自分達以外に強い者を言い表す言葉はなかった。最も、自分達が突飛して強いということなので、必要がないだけなのだが。

「まー、どのみちボクらも聖域侵攻は考えないとね」

「……ああ」

二人は窓から外の様子を眺めながら、外から来る風をその身に受けた。風はまるで冷たく、まるで氷のようだった。

そして、聖域付近では、アトモスの言っていた「何か強い奴」の三人が体をボロ布で覆って、そこに立っていた。

無論、冥闘士なので、黒いボロ布の下には、その冥衣を纏っている。しかし、その冥衣は周りとは完全に別物で、違うもの——いかにも聖闘士が纏う聖衣を他の冥衣のように黒く染め上げたようなものだった。

その三人の中心にいたのは、濃い青緑色の髪の毛を持ち、そして眼鏡をかけている男性だった。瞳は僅かながらも釣り上がっている印象があり、少し厳し目な印象を与える。その人物はそつと他の二人に対して口を開いた。

「……お前ら、これが久しぶりの聖域だ」

男性はザツと砂の音を立てて、足を動かした。

——久しぶりの聖域。

そして、「お前ら」ということは、この三人は昔は聖域にいた聖闘士なのであろう。

その眼鏡の男性の隣にいた、いかにも真面目そうで、かつ、優秀そうな印象の顔付きをした男性が聖域の向こう側——つまり、十二宮の方向を見ながら、ボソリと呟いた。

「私の実験試薬は撤去されてしまったのだろうか……」

「……お前の中ではそっちが重要なのか、おい」

それを言った時の表情が、あまりにも真剣そのもので、その男性の中ではきつと冥闘士として聖域に侵攻するより、その実験試薬の方が重要なのであろう。

そして、二人以外のもう一人の男性がすかさずフォローらしきものに回った。

「まあまあ。アレキは昔から実験実験で、それ以外あまり興味ないのは今に始まったことじゃない。ただ、戦力としては十分だろ？」

「……まあ、そうだな」

眼鏡の男性はカチャツと音を立てながら、右手の中指で眼鏡の位置をそつと揃えた。そして、アレキと呼ばれた方の男性を見ながら、こう言った。

「そして、お前には実験試薬以外に弟子もいたな」

「……」

ピクツとアレキの肩が反応した。

「まあ、感動の再会とまではいかないかもしれないが——……」

「……分かつているさ」

アレキは二人のいる位置よりも少しだけ前に出て、聖域を先程よりもとつと、ジツと見据えた。他の二人は何も言わず、アレキがただ、聖域を見つめているのを見守っているだけであった。

ふと、眼鏡の男性もアレキのように聖域を見据えた。

「……」

(ラピス……いや、兄さん……)

——そう、この眼鏡の男性こそが、ラピスが先日言っていた双子の弟、ラズリである。ラズリはグツと空を力強く見上げて、思いに更けた。

(少しだけ……少しだけで良いんです)

そして、目をスツと瞑り、その身に受ける冷たく、鉄のような風を感じながら、思う。(少しの間、冥闘士として貴方の前に出ることを……お許し下さい)

——この聖戦は全て、再会から始まるといっても過言ではない。

圭熊と翔馬、水鹿と唄狼——そして、これから再会を果たすであろうラズリとラピスと、アレキとその弟子。

暇を持て余した神々の遊びか、それとも運命か。

現実には、無情にも、お互いを幸せに再会させることさえ許してくれない。

そして——既にこの聖戦の歯車は動き出していた。

17:「十二宮侵攻」

白虎達が鍛錬場で雑兵達を片付けている中、十二宮には冥王軍側の幾多なる雑兵達が、目の前にある白羊宮を突破しようと試みていた。そして、偶然にも眼鏡をかけている青年——祭壇座の海鳥は聖衣をその身に纏い、その場に居合わせていた。

最初、海鳥は何事かと思っていたが、その雑兵達の小宇宙から色々察して、自分が今、置かれている状況に気が付いたのである。

(は……僕は何というタイミングで外にいるんだらうか……)

海鳥は白虎達の前では見せないような溜息を思い切り吐いてみせた。

このままでは、教皇の間まで行くことは愚か、十二宮に入ることすらままならない。一体どうしたものか。

とりあえず、こうなってしまう以上は、自分と教皇、そして黄金聖闘士のみが知っている教皇の間への抜け道を通るしかないであろう。海鳥は十二宮に背中を向けて、そのままその抜け道とやらに向かおうとした——ところであつた。

「おい、聖闘士がいるぞー！」

「早速お出迎えってことかー！」

自分を見つけた雑兵達が、ざわざわと騒ぎ始めたのである。次々と雑兵達がこちらへ向かい、海鳥はどうとう雑兵達に囲まれてしまった。

そして、海鳥を囲った雑兵達は海鳥の眼鏡と身長の低さ、そして童顔といった、外見や見なりから判断して、それほど腕の立つた聖闘士ではないと思つたらしく、見事な嘲笑いを浮かべた。

「お前みたいな奴が聖闘士になれるとは、聖域側も随分人材不足と見受ける」

「おいおい、それ言っちゃ失礼だろ」

「おう、そうだったな」

雑兵達はワツハツハツハと大声で盛大に爆笑してみせた。海鳥はそんな雑兵達を特に言い返そうとせず、ジツと辺りを見据えたまま、囲まれた中の中心に立っていた。

ふと、思い立った雑兵の一人が、海鳥の目の前まで近付き、向き合う形でそこに立った。一方の海鳥はそれに対して特にリアクションを持たなかったが、先程よりも少しばかり雑兵達を睨みつけるように見ていた。雑兵は海鳥の顔を凝視するなり、「フツ」と鼻で笑つて、拳を構えた。

「ちよーつとばかり痛いかもしれねえが、我慢しろよ!」

その時、海鳥の目の前でマツハを超える何かが空を裂いた——が、それは最後まで伸びなかった。

「……な……」

雑兵は何が起こったか分からなかった。そしてパチパチと目を閉じ開けしながら、目の前の状況を見つめた。

自分より弱いと思われていた海鳥が——自分の拳を何てことない顔をしながら、素手で受け止めていたのである。

「——な、なにいつ!?!」

「よつとー!」

雑兵が驚いている間にも、海鳥は雑兵の腕を掴み、そのまま上へと投げてやった。その高さ、約十メートル程度。

「うわあああああ——ツツ!!!」

投げられた雑兵はいきなりすることに焦りながら地面に激突した。

それら一部始終を見ていた他の雑兵達は、先程とは違う意味でざわざわと騒ぎ立てていた。

海鳥はザツと足と地面を摩擦させ、普段の彼からは想像もつかない立ち方——仁王立ちでそこに立っていた。そして、眼鏡をキラリと反射させながら、クイツとその眼鏡を右手の中指で上げた。

「んー、やはり雑兵は雑兵ですね……」

「な、何を……」

「普段の僕は人前だと、如何にも戦力外、という性格と態度ですが——……これでも教皇補佐。分かりやすく言うのと側近。なので、一応それなりの武術や芸、そして小宇宙は身に付けてますよ」

「なっ……！　ということは……！　貴様、祭壇座……!?!」

海鳥はようやく雑兵が正しく察してくれたことに満足したのか否かは分からないが、ニコニコと微笑みながら、かけていた眼鏡を取り、聖衣のどこかへと仕舞った。

「言っておきますが、杯座の水鹿さんみたく黄金聖闘士と拮抗する程度の力は僕にはありません。ですが、貴方達雑兵を一人で一瞬で片付ける程度の力ならあります」

「ハッ、自信家なんだな。そんなこと出来るわけねえよ」

「……じゃあ、本当に出来ないかどうか見せてあげましょうか」

「はっ……」

途端に、雑兵達は海鳥の小宇宙がかつてないほどに燃えていることが、ひしひしと火傷するかのよう実感することができた。

海鳥は拳を握り締め、上半身を45度程度回転し、そして、風を切るように拳を横に振った。

「な、なにっ……」

「フラッシュビート！」

その瞬間、眩いばかりの光の輝きの玉がマツハ、いや、マツハを超えた光の速さで次々と雑兵達を襲った。

「うわっ！」

「うぐおっ！」

「ぐはあっ！」

しかもその攻撃はかなり広範囲ゆえか、海鳥の周りにいる雑兵の半分が一気に倒れて行った。海鳥は攻撃を終えると、拳を一旦引き、まだ片付いていないもう半分の雑兵達の方へと体を向けた。

「次は貴方達ですか？」

「……………く、くそ……………」

と、雑兵が歯軋りをした瞬間。

「——いや、待て」

冥衣のヒールをカツカツと鳴らし、その場にやってきた成人男性一人の姿があった

「十二宮に冥王軍が侵攻する——！ 聖闘士総員十二宮へ回れ——！」

鍛錬場では、十二宮に冥王軍が侵攻であるであろうことが、聖域側の雑兵達によって

知らされていた。それらを聞いた圭熊達はそれぞれバトルしていた拳を止めて、十二宮の方へ視線を向けた。

「うっわ、いつの間に!?! どうするよ? 唄狼さんに凜猫!」

「…………ふん」

唄狼は冥王軍など正に興味がない、といった様子で、十二宮に背を向けた。そして、一歩だけ前進し、一同の方に視線と顔を向けて言った。

「私には関係ないことだ。行きたければ勝手に行くが良い」

そして、唄狼は顔と視線の位置を元に戻して、そのままこの場から去って行った。その歩く姿はまさしく一匹狼であった。

圭熊はそんな唄狼を見送りながら苦い顔をして、凜猫の方に顔を向けた。

「凜猫。どうする?」

「…………付いてきても良いなら付いていくけど…………」

「ん、じゃあ、決まりだな。で、おめーら美男美女三人衆はどうするよ」

「び、美男美女って…………いや、まあ、言われんでもわいは行くけど」

『美女』という部分は白虎に当てがわれているところだろう。白虎は反応に困ったのか、ひたすら引きつった笑みを浮かべて、圭熊を見た。一方の美男に当たるであろう水鹿と翔馬は圭熊に聞かれて、「勿論」と首を縦に頷かせた。

「お前何ぞに言われてなくても行くに決まっているだろ」

「そうだな。聖域の危機に動かないのはらしくないな」

「……っし、決まりだな！」

圭熊はガツポーズを決めて、ニツと歯を見せて笑った。そして、コロツと顔付きを変えつつ、翔馬の方を振り向き、言った。

「このバトル、しばらくお預けだな、翔馬」

翔馬は「そうだな」と若干柔らかい笑みを浮かべながら言った。

「……ま、この用事が済んだら相手をしてやるよ」

「戦わないという選択肢はねーのかよ……別に良いけどさ……」

圭熊はガツクリと肩を落としつつも、どこか呆れたようにその笑みを浮かべていたようだった。白虎はそんな二人の様子を見ながら、翔馬と自分が出会った時のことを思い出して、「あの時から戦いのことしか考えなかったなあ」と思わず笑みを零した。

「ところで、圭熊が前に言ってた友達って、凜猫のこと？」

「うん、そーそー。何か知らねえけど先に会っちゃってたようだな」

白虎達は十二宮へ雑談を交わしつつも走っていた。白虎は凜猫と圭熊が仲良しばかりだったのが何となく気になっていたのか、圭熊にそのことを聞いたところ、どうやら凜

猫と圭熊は友達だったようだ。そして水鹿ももう一つ気になったことを、白虎に続いて聞いた。

「圭熊。お前は唄狼とも仲が良いのか？」

「えっ、あつ、うーん……」

圭熊はこればかりはさすがに言葉を詰まらせてしまった。

先程、圭熊はわりと気軽に唄狼のことを呼び、話しかけていたように見えたのだが、気のせいだったのだろうか。

「そーだなー……」と、圭熊は頬をほりほりと掻きながら話し始めた。

「仲良いっちゃあ、仲良いのかなー、とは思うけど……」

「けど？」

「あの人、一人でいる方が生き生きしてるから、どうにもこうにも一緒に行動しづれえのよ」

「……ああ……」

「確かにな」、と水鹿は納得した。唄狼は修行時代から人見知りゆえかは分からないが、とりあえず一人でいることを好み、本人も一人でいた方がどこか表情が晴れやかに見えた。音楽を扱う以上、一人でいることを好むのは何となく分かるのだが、それにしただって変わっている、とは思う。

圭熊は「それでな」と続けた。

「別に唄狼さんは俺らと一緒にいることは嫌がつてはないんだよな。だから尚更よく分かんねえ」

「……まあ、そういう奴だからな、あいつは」

水鹿は「相変わらずだ」とクスクスと笑みを浮かべた。一緒にいることを嫌がつていない、ということは唄狼は圭熊に心から許している立派な証拠だ。普通ならば唄狼は他人といふことを嫌がる。

圭熊はそんな笑みを浮かべている水鹿を見て、ふとした疑問が頭に沸いたのか、それをキヤツチボールするかのようにつけてみた。

「なあ、杯座の兄ちゃん唄狼さんの友達なの？」

「ん、まあ……そうだな。今はあんなんだがな」

「……やっぱりかー」

予想通り、といった様子で圭熊はそう声を上げた。

そうこうしているうちに一同は十二宮の前に着いていた。

十二宮の目の前では、下を見ると、幾多なる雑兵が重なるように倒れていた。そして、視線の先を目の前に変えると、誰かと誰かが戦っていた。その戦い方は小宇宙からして尋常でなかった。遠目からでも、その感じる小宇宙は双方譲らぬものであると分かる。

ふと、白虎達は目を凝らした。

そこにいたのは見慣れた姿と、もう一つ、漆黒に染まったその冥衣を見せつけるようにその姿を暴れている人物。

「……海鳥さん!？」

見慣れた姿は皆がよく知っている通りの人物・祭壇座の海鳥だった。だが、海鳥はいつもと違って、特徴的である大きめな丸眼鏡を取っていた。海鳥は白虎達の姿を見ると、相手にしている冥闘士を振り払うように地面に投げつけた。

「はーっ……はーっ……」

そして、立ち上がり、顔に浮かんでいる大量の汗を拭う。

白虎は海鳥と冥闘士の戦いが落ち着いたところで、そつと近寄って海鳥を見ていた。

「海、鳥さん……」

「……」

白虎は海鳥の今まで見たことがない姿と、その小宇宙の大きさに驚きを隠せずにした。勿論、翔馬や圭熊、凜猫も驚いていた。

だが、水鹿はただ一人、冷静にその姿を見ていた。そして、白虎の側まで近付き、その肩にほん、と手を置いた。

「水鹿……」

「……」

水鹿は首を横に振り、「今は突っ込んでやるな」と白虎の耳元で呟いた。白虎はどこか腑に落ちないまま、会長に視線を向けた。

今まで海鳥が戦ってきたところを見たことがなく、そっち方面のことは一切不得手、というよりは好きではないではないかと白虎は思い込んでいた。だが、目の前にいる海鳥は、それさえ覆すようなものであった。

白虎はボソリと呟いた。

「……わい、水鹿が仁智勇に優れているのなら、海鳥さんは仁智優とと思ってたのですが……」

「……白虎さん?」

海鳥はきよとん、といつもと変わらぬ表情で白虎を見つめた。白虎はニコツと微笑み、海鳥に手を差し伸べた。

「ううん、独り言です。とりあえず、今は立ちましよう。こんなこと話してる暇はないんですよね」

「えっ、ああ……あつ!」

海鳥は自分が座り込んでいることに気が付かなかったのか、ついつい戸惑ってしまつた。海鳥は白虎の手を取り、「よっ」と力を入れて立ち上がった。

そして申し訳さなそうに白虎を見た。

「すみません、色々……」

「いえいえ」

白虎はにつこりと微笑み、「良いんですよ」と返した。そしてすぐに表情を神妙なものに変えて、頭の中を切り替えた。そして海鳥に聞いた。

「それで……海鳥さん。十二宮に冥王軍が侵攻したのは……」

「……はい。雑兵達は倒し切ったのですが……」

海鳥は若干惜しげな表情で白羊宮の方を見た。

「その隙に一部の冥闘士がこの十二宮に入った可能性が拭い切れません」

「そんな……」

だとすると、雑兵達はオトリだったというのだろうか。海鳥は目を伏せた。その表情はいつにも増して凜々しく、そして悔しげなものだった。

「ぐ、う……」

ふと、海鳥にやられていたはずの冥闘士の一人が声を上げて二人の会話に割って入ろうとしていた。そして、ボソリボソリと、小さな声ながら海鳥らに言った。

「そうだ、俺らはオトリとして……冥王軍側に貢献しているんだ……」

「……！」

「因みにさつき、他の冥闘士三人があの中に入って行った……………」

「三人……………!？」

海鳥は非常に驚いていた。そんなにも冥闘士が入って行って自分が気付かないなど、そんなことはないはずだ。だが、オトリだという冥闘士はククツと笑いながら海鳥らに言った。

「その三人はただの冥闘士じゃねえ……………力も冥界三巨頭に匹敵……………げえっ……………か……………」

冥闘士は口から噴水のように血を吐き、そのまま倒れてしまった。海鳥と白虎は互いの顔を見合わせてから、目の前にある白羊宮の入り口を見た。

確かにうつすらとだが、誰かが入ったような形跡と小宇宙がそこに残っていた。

水鹿は白虎と海鳥、そして冥闘士の話が終わったタイミングを見計らい、白虎と海鳥に話しかけた。

「白虎……………海鳥……………今の話……………」

「……………うん。本当みたいやで」

白虎は目を細め、十二宮を見据えた。

黄金聖闘士がいるとはいえ、やはりそれでも人数は少なく、戦力的にも厳しいものがあつた。白虎はどうしても心配になつてしまふ。

海鳥は不安そうな白虎を見て、一つ提案してみた。

「……もし良ければ、十二宮に入りますか？」

「……！」

白虎は目を見開きながら海鳥のことを見つめた。海鳥はそんな白虎に対してコクリと首を縦に振った。

「僕は教皇の間に緊急に行かなくてはならないので、十二宮は通つてられないのですが……」

それを聞いた白虎はもしかして、と自分を指差して海鳥に聞いた。

「……わいらが、黄金聖闘士の助太刀へ？」

「はい」

海鳥はニコツと微笑んだ。

「僕ら青銅聖闘士・白銀聖闘士が今できることは、それしかありませんから」

「……」

「ただ、これは推奨つてだけで、僕は無理強いはしません。正直なところ、冥王軍が迫ってきた今、貴方達のやりたいように奴らを追っ払つてくれるのが一番ですから」

「海鳥さん……」

海鳥はにこにここと五人に微笑んだまま、表情を崩さなかった。五人はお互いの顔を見合わせた。

——自分達がやれることならやらなければ……。

海鳥は無理強いはしないと云った。だが、五人にとつて、海鳥に言われたことは今の五人のやりたいことと一致していた。白虎は他の四人のその心情が何となく読みとると、微笑みながら、確認を入れた。

「……ええか？ 四人とも」

「……ああ」

「勿論」

「異論はないぜー！」

「うん」

「……よし」

白虎は確認を入れると、海鳥の方を振り向いて、宣言した。

「わいらは今から黄金聖闘士の補助に入るため、十二宮に入ります！」

「……その際にはお気を付けて！」

「はいー！」

白虎達はニツと笑みを浮かべて、海鳥の言葉に頷いた。

18：「氷の師師弟再会」

最初、白虎達が入って行ったのは白羊宮だった。白羊宮の入り口では冥王軍側の者と思わしき黒い布を纏った三人組がそこに立っていた。そのうちの一人は身につけている眼鏡を反射で光らせていた。

そんな三人の視線の先には一人の黄金聖闘士がそこに立っていた。その人物は牡羊座の黄金聖闘士にして、白羊宮を守護している人物・玄夢である。玄夢はニツと微笑んだまま、そこから動こうとはしなかった。いや、動くことすら無駄だと言っているようだった。

(玄夢……)

白虎はそんな玄夢の姿を不安そうに見つめていた。黄金聖闘士といえども、今回は訳が違うすぎる。普通の冥闘士ならまだしも、今、自分達の目の前にいるのは冥闘士の中でも特に強い三人組・強い冥界三巨頭に匹敵するほどの実力を持つと言われている者らではないか。

白羊宮へ向かう途中で翔馬が言っていたが、冥界三巨頭に匹敵するほどの実力を持つということは、黄金聖闘士でなければ、いや、もしかしたら黄金聖闘士でも歯が立たな

いほどの実力がある、ということ。基本、冥闘士は自分達聖闘士のように階級が定められておらず、強さの程度が分からないが、この三巨頭だけは特別なのである。もしかしたら、この冥界三巨頭に匹敵するであろう冥闘士三人組が今後の冥闘士の強さの度合いや目安になる手掛かりになるかもしれない。そのためにもその三人の戦い方をしっかりと見て、その強さの度合いを把握すべきだ、と。

しばらく三人組と玄夢はが見つめ合った後、玄夢は仁王立ちのまま、ふと口を開いた。「なあ、アンタら三人組。どこかで俺と会ったことがあるか？」

「……」

三人組の小宇宙が一瞬たじろいだ。

「さっきからさ、俺の知ってる小宇宙がちよくちよく揺らめいてるのが感じるんだよ」玄夢は柔らかに微笑みながら、目の前にいる黒布三人組を見つめた。その目はかつての仲間を、いや、先人達を懐かしむものだった。それに対して三人のうちの一人が、「気のせいではないか？」と玄夢に言った。

「我らは冥王ハーデス様に仕える冥闘士。聖闘士と対面など、そんな馬鹿なこと、あるまい」

「……んー、そっか……」

玄夢はどこか惜しそうに三人組を見つめた。そして「絶対会ったことあるんだよ

なあ」と小さくぼやいた。

「牡羊座の玄夢」

そこで翔馬がザツと一歩足を踏みしめた。翔馬はスツと玄夢を見据えて、何かを言っているように見えた。玄夢もそれを察したのか、ニツと口元を強く引き締めて、コクリと頷いた。そして、手のひらに小宇宙を貯め始めた。

「まあ、懐かしいだのなんだの言っても今は敵同士だもんな。そんなん言つてられないよな」

玄夢はそう言いながら、小宇宙を貯めた手のひらを前に差し出して、カツと光らせた。その輝きは一瞬で終わり、白虎は最初、それが何の意味を成すか分かっていなかった。

「……………じゃ、攻撃して、どうぞ」

「……………元よりそのつもりだ」

三人組のうちの一人が、玄夢に向かって氷のような冷たい拳を突き出した。その瞬間、水鹿はその拳から絶対零度を超えるような凍気を感じ取ることが出来た。そして、顔から妙な汗をかいていた。

——まさか——いや——そんなことあるはずもない。

「水鹿……………」

そんな水鹿の異変に気が付いた白虎が、水鹿の肩に自分の手をトン、と優しく置き、水

鹿にそつと話しかけた。水鹿はハツとして、白虎の方を振り向いた。

白虎は少し不安そうに、だが優しく微笑んで水鹿を見た。

「水鹿……何か——あつた？」

「……いいや、何でもない」

「……そつか」

白虎はどうしても腑に落ちないのか、その後も水鹿をチラリと見つめていた。

水鹿は首をブンブンと勢い良く、激しく振り、頭の中に浮かんできた可能性を取り払った。

（いや、そんなはずはない……）

水鹿はどうにもこうにも戸惑っていた。あの冥闘士が拳から出した絶対零度を超えるような凍気——……。水鹿は、そんな凍気を出せる人物を一人だけ知っている。だが、水鹿が知る限りでは、その人物は既にこの世におらず、死んでいるはずだった。

そんな、どうしても拭え切れない可能性を胸に抱きながら、水鹿は玄夢と冥闘士の戦いを見続けた。

絶対零度をも超えるあの凍気を浴びて、生き残れる聖闘士などそうそういないはずだ。すべての聖衣の中で耐久性もずば抜けている黄金聖衣も、絶対零度を超える刺激を受ければその身が凍りつくというのだから。

——だが、実際に凍っていたのは玄夢ではなかった。

「——っ！」

絶対零度の拳を放った張本人の冥闘士は玄夢の姿を見つめて酷く驚いたのか、目を見開いていた。

玄夢はその身を凍らせず、そこに悠然と立っていた。目の前に——氷の盾を一つ立てて。

「玄夢！ あんな凍気を浴びて……！！？」

「おう、白虎！ 俺は無傷で平気だぜ！ それにダメージも受けてねえし！」

玄夢はニツと口元を軽く緩めて、白虎に言つてやった。白虎は「ええ？」と声を上げながら、玄夢の姿を目を凝らして見た。よくよく見ると、玄夢の目の前にはキラキラとガラスのように光る何かがそこにそびえ立っていた。

——玄夢のクリスタルウォールだ。

「くっ！ 仕方ない！」

クリスタルウォールの存在に気がついた冥闘士の一人が、ザツと足を退かせた。そして、スツと拳を構え、体全体に重心を置いた。

「はあっ！」

ドンツ、と低い音が鳴り響いた。冥闘士の拳が玄夢のクリスタルウォールを破ろうと

試みていたのである。

だが、すぐにその拳は壁による風圧で跳ね返され、拳を放った冥闘士はその勢いからか数メートル先まで吹き飛ばされた。

「……っ！」

すぐに勢い良くバツと玄夢の方に振り返った。

玄夢はこのクリスタルウォールさえあれば、何者からの攻撃も受けることなく、そこに立っていることができる。そして、このクリスタルウォールはどんな技でも吸収し、跳ね返すことが可能。

——打つ術が、ない。

「……ここは任せろ」

眼鏡をキラリと光らせ、そこに男性が一人立った。男性は足元にあった一つの石ころを手にして、ポンポン、と一つのボールのように上にドルブルする要領で投げていた。

玄夢はそれを見て、意外に思ったように「ほう」と声を上げた。

「その石ころ一つでこの壁をどうしようってんだ？」

「——こうするのさ……」

男性はピンツと軽く石ころをクリスタルウォールの一点へ投げつけた。玄夢はそれを若干嘲笑うかのように笑みを浮かべた。

「……石ころ一つで壁を壊せるとでも——つて、ええっ!？」

だが、その笑みもすぐに驚愕に染まり上げられたものへと変わっていった。

玄夢はギョツと目を見開いて、自分の目の前で起きている状況を見つめていた。

——石ころを当てられたクリスタルウォールが、ピシピシと音を立てて今にでも壊れそうではないか。

あまりにも想定外のことと、自分の技に信頼を寄せていた玄夢はあたふたとその顔を汗を浮かべて、戸惑いを隠せずにいた。それを見ていた白虎達も驚きを隠せずにいた。

「あ、アンタ、何したん!？」

「……驚くも何も……クリスタルウォールの弱いところを突いたまでだ」

冥闘士がそう言った途端、ガラスの割れた鋭い音がその場にいた一同の耳の中で鳴り響いた。その破片はパラパラと落ち、スウツと吸い込まれるように空気と同化した。

玄夢は信じられない、といった様子で、冥闘士達を見ていた。

石を投げた冥闘士は一步前へ出て、スツと玄夢を見据えながら言った。

「今時の黄金聖闘士は甘いのだな。隙がありすぎる」

「……!」

「物というものは、弱い一点さえ突くことができれば、すぐに壊れるほど脆いものだ。お前のクリスタルウォールはその一点を突かれ、このようにして砕け散った。ただ、それ

ただだ」

「……………くそつ……………」

玄夢はギツと歯を軋めて、冥闘士をキリツと鋭い眼光で睨み付けた。睨み付けられた冥闘士は「フン」と鼻で笑って、ザツと構えを取った。

「！」

「なっ……………」

「あの構えは……………」

白虎達にはその構えに見覚えがあり、非常に驚いていた。

——クオーツの『あの技』と同じ態勢だ。

もし、本当にクオーツの『あの技』ならば、白羊宮はとんでもないことになる。そこそクリスタルウォールを張らなければならぬに。だが、玄夢はその技の威力を知らないらしく、小宇宙を貯め、技を放とうとしていた。

「玄夢——ッ！」

また、白虎のその呼び掛けも耳に入っていないぐらいに、玄夢は集中していた。

「くっ、アイツ、本気で技を出そうとしとる！」

「まずいな……………！ あの技の威力は絶対だと言うのに……………」

「まさか、張り合うつもりか……………！ あの牡羊座は……………」

「……………」

さすがの圭熊と凜猫も三人の会話の内容で全てを察したのか、表情が一気に苦みと厳しさを持つものになった。

玄夢と冥闘士の小宇宙がだんだんと炎の如く燃え上がる。

「……………まさか、お前、張り合うつもりか？」

「どうせ、クリスタルウォールも効かないんだろう？　ならこうしてぶつかつた方が有意義だ」

「その言葉——後悔しても知らんぞ」

「ふん」

その瞬間、カツと激しく眩いばかりの輝きが二人の間を取り持った。そして1秒もしないうちに荒れ狂うような爆風と、大きな爆発音が白羊宮の中を裂いた。

戦っていない一同はその爆風に吹き飛ばされないように、足や体に体重を入れて、その様子を見ていた。

「なんとこの威力だ……………」

「あの冥闘士が並大抵の冥闘士でないのは本当らしいな……………」

「玄夢……………」

しばらくして、ある程度爆風が収まり、体に体重を入れなくても立てるようになった。

また、それと同時に今の爆発によって舞い上がった砂煙や埃がじわじわと晴れていった。

白虎達は爆風により開くことが出来なかつた目を開け、スツと目の前を見た。

「……」

その先にあつたのは、悠然と立っている冥闘士の姿と、若干ながらも傷付き、キツと冥闘士の姿を睨みつけている玄夢の姿だつた。

冥闘士はびつくりしたような声で言つた。

「……あの技に耐えられるというのか」

「伊達に黄金聖闘士をやつてるわけじゃないのでね……技の一つや二つで簡単にやられるわけがないだろう」

「フツ、それもそうか」

確かにそうだ、と冥闘士は笑つた。

「だが、俺たちは先を急いでいるんだ。通してくれないか」
「無理」

「……」

玄夢のその即答ぶりに、冥闘士達は思わずその額に一滴汗を流した。

やはりただで通すわけにはいかない、ということだろう。

「……………ここは私に任せろ」

その時、ザツと他の冥闘士の一步前に出たのが、先ほど玄夢のクリスタルウォールに凍気を当てた人物であつた。

「だが……………」

「君達二人だけでも先に行つてくれ。私達の目的のためにも」

冥闘士は更に一步前に足を踏み出して、自分の身を纏っている黒い布をバツと風を立てて脱ぎ払つた。

その姿を見て、水鹿は驚愕していた。

「あな、たは……………我が師アレキ ——……………」

水鹿の声や体といった全身が震えた。

その姿を知つていた白虎も、目を大きく開いて口に手を当てて、今にも出そうな大きな驚愕を抑えていた。

「白虎……………？ 杯座……………？」

「……………っ！」

「……………」

翔馬はその二人の様子の変容がどうも見捨てられなかつたのか、不安になつて、とんとん、と二人の肩を叩いた。だが、反応したのは白虎のみで、水鹿はずつとアレキの姿

を見つめたまま、震えていた。

白虎は額に一滴冷や汗を垂らし、翔馬の方を振り向いた。翔馬は振り向いた白虎に対して、「何かあったのか」と、呟いた。

「先程、杯座が『我が師』といっていたが……」

「フ……そうだ……」

やっとここで水鹿が反応した。水鹿のその表情や仕草から、絶望感と悲壮感が漂っていた。

水鹿はアレキの方に顔を向き直して、翔馬に言った。

「あの方は、まさしくオレの師——水瓶座のアレキだ」

ヒュウ、と白羊宮に冷たくも痺れるような風が吹いた。

水鹿はそんな風に打たれながら、もう何もかもが信じられない様子で、冥衣を纏っているアレキを見た。冥衣のデザイン自体は水瓶座を少し角ばらせたものだった。

「……水鹿……」

「……」

アレキは険しい目つきで水鹿をただ、見つめていた。そこには、悔しさや悲しさが詰まっているようにも伺える。

「……久しぶりに出会い、随分と変わったのだな……」

「……アレキ……」

「風の噂で聞いたところによれば、優秀な聖闘士として名高いそうだが……」

「……」

「……まだ、その小宇宙は未熟だ」

「なっ……!!?」

気が付けば、水鹿の足が氷によってみると侵されていた。

「私に気を取られ、足元まで注意が行かなかったようだな。水鹿よ」

「……う……」

「良いか、水鹿。聖闘士とは素早さと注意が命だ。他に気を取られ、それを疎かにしているようでは——君はまだまだ未熟といえよう」

アレキはスツと目を細めて、水鹿を見た。その視線から、妙なプレッシャーを感じ取り、キュツと身が引き締まるような思いをした。

その間にも、他の冥闘士の二人が隙を見るように、スツと白羊宮の出口へと向かっていた。

「待っ……!」

そのことに気が付いた玄夢はすぐに追いかかけようとして、更なる気配を感じ取っていた。

——冥闘士の雑兵達の気配だ。

「くそつ、こんな時に！」

玄夢は軽く舌打ちをして、一気に入り口付近に大きなクリスタルウォールを張った。そして、白虎達に言い放った。

「白虎！ そいつら引き連れてさっきの冥闘士を追ってくれないか！」

「えつ、で、でも……」

「俺はここから離れることはできない！ 頼んだぞ！」

「……う、うん……」

白虎は遠慮がちに頷きながら、水鹿の方を見た。このまま水鹿を連れて行っても良いものか——白虎は少し不安そうにしていた。

水鹿はそんな白虎の視線を感じて、腕を組みながら目を瞑り、足に小宇宙と力を込め、足にまとわりつく氷を一気に破壊した。パラパラと、氷の欠片が地面に落ちて、溶けていった。

「水鹿……」

「——行け、白虎。オレに構うな」

「で、でも……」

「……ここは、オレが戦わねばならん」

水鹿はアレキの顔を見ながら、そう言った。師弟として、そして、同じ凍気使いとして——様々な縁を抱えながら、水鹿はそれを運命だと受け取っていたのだ。

——そして、自分達二人はここで戦うべき、「運命」なのだ。

それがどんな形であれ、神による引き合わせであることは確かであった。きつと、このまま白虎と共に他の冥闘士を追いかけたとしても、アレキと自分は何れ戦うことになるであろう、と。

白虎は水鹿の顔からそれらのことを察したのか、胸に拳を当てて、「うん」とコクリと首を縦に振って、水鹿に背を向けた。翔馬は水鹿と白虎を交互に見ながら、「良いのか？」と白虎の耳元で呟いた。

「杯座を放っておいて……」

「……うん、ええの」

白虎は翔馬の問いに、にこりと微笑んで、歩みを進めた。

「水鹿にはわいらが分からないような、通るべき道っていうものがあるからな」

「……そうか」

「なら仕方ないな」と、翔馬も微笑み、水鹿に言い放った。

「杯座！ 絶対に死ぬなよ！」

「……ああ、分かっているさ」

水鹿もにこりと微笑み、翔馬に返した。

白虎はそのやりとりを耳で聞き送れば、圭熊と凜猫に対して、手をちよいちよい、と動かしした。

「ほら、アンタらも。行くよ」

「…………お、おう」

「…………うん…………」

凜猫と圭熊の二人は白虎の従うがままに、翔馬と白虎について行つた。

青銅聖闘士四人が去つたと同時に、水鹿とアレキの小宇宙と凍気が青い輝きを放ちながら、火花を蒔き散らした。

水鹿はザツと拳をグツと握つて、そこに小宇宙を込め始めた。

「オレは貴方と戦いたくない。だが…………この先のため、オレは今、ここで、貴方を負かします」

これが、自分の運命に対する水鹿の決意だつた。

本音を言えば、己の師と戦うなど、そんな末恐ろしいことはできないし、したくはなかつた。だが、ここではアレキと自分は冥闘士と聖闘士。師と弟子であると同時に、敵同士でもあつた。そして——この先の聖域のためにも、その冥闘士と戦わなければならぬ。どんな結果になろうが、それが今の自分にできることだ。

アレキは「うむ」と一言だけ頷いて、水鹿と同じように拳を構えた。

「それでこそ我が弟子だ、杯座の水鹿」

だんだんと二人の間で小宇宙と凍えるような寒気が溜まって行く。玄夢はそれにぶるっと震えながらもクリスタルウォールを張り、二人の戦いを小宇宙で感じ取っていた。

寒気が極限にまで高まったところで、二人の小宇宙が衝突した。

「ダイヤモンド………!!」

「ダアアアストオオオオ——ツツツツツ!!!」

二人の間で、綺麗に輝く冷たい細かな氷が刃^{!!}をその凍てつかせるほどに激しく衝突し合っていた。

「ぐっ、うっ………!!」

「っ………!!」

アレキはまさかここで水鹿と拮抗するとは思っていなかったらしく、苦戦を強いられていたようだった。水鹿の方も、また、ここで拮抗するとは思わず、ただ、ひたすら額に汗を浮かべていた。

「水鹿……まさかお前の力がここまでものとはな………!!」

「オレも正直驚いてます………! 下手したら、千日戦争になりかねませんよ………!!」

——千日戦争。

互いの実力が同等である時に起こる現象。一度この状態に陥ると、長時間の膠着状態に陥るか、双方が消滅するかのどちらかになる、と言われている。

「弟子とはいええ、白銀聖闘士と千日戦争……！ これはなかなか面白い！」
「……っ！」

とはいえ、水鹿の方は黄金聖闘士並の力を持つているなどとは言われても、あくまでも白銀聖闘士だ。こうしてぶつかつてみると、小宇宙の扱い方や配分、そして小宇宙の質自体は黄金聖闘士より僅かながらも劣る。そして、何より相手が自分の師匠である以上、超えることができぬ壁というものがあつた。

だが、水鹿は全身の小宇宙を掻き集めるように、アレキの凍気に対して全力でぶつかった。ここでしつかりぶつからねば、後々これからの自分の師匠に対する態度に影響が出てしまう。

アレキはそんな水鹿のことはしつかり分かっているゆえで、水鹿に対する攻撃を、最初は気付かれぬように、ちよつとずつ強めていった。水鹿がどれだけ自分の小宇宙に耐えられるか、試してみたかったのだ。

「ぐ、ううっ……！」

そして、それが水鹿の目から見ても分かるぐらいになると、水鹿の踏ん張りをきかせ

ている足がズザツと音を立てながら、土と摩擦し始めた。

アレキは顔を苦しそうにしかめている水鹿に構わず、更にその力を強めていった。水鹿も対抗して力を強めようとするのだが、予めアレキが強くしていた威力には到底敵わなかった。

「やはり私には勝てぬようだな、水鹿。この先、通してもらおうぞ」

「…………ぐ、うつ…………させ、るか…………！」

自分の師匠とはいえ、相手は冥闘士——水鹿は聖闘士として、その冥闘士を通すわけにはいかなかった。

「はあああああ——ツツツツ!!!!」

水鹿の小宇宙と凍気が一気に爆発した。

「な、なにいつ!!」

(この冷たさ…………絶対零度!)

その爆発により、アレキの身体が瞬時に後退し始めたと同時に、水鹿の凍気から絶対零度が放たれていた。

水鹿はニツと子供のような笑みを浮かべて、「どうだ」とでも言いたげなものだった。

アレキは水鹿に対して、大人としての微笑みを交わすと同時に、その威力の大きさに負けぬよう、自分の放っている技の威力を強め、瞬時に絶対零度を極めた。

「ぐつ、う、うおおおおおツツツツツ!!!」

「だあああああツツツツツ!!!」

先程から二人の凍気によって凍てついていた白羊宮内部の一部の温度が、ゼロ以上の氷点下——いや、絶対零度まで、その冷たさを増していた。

——そして、バチン、と火花が散った。

その瞬間を白虎達は金牛宮の入り口から感じ取っていた。

「水鹿っ……………」

「杯座……………」

白虎と翔馬は不安から、思わず互いの目と顔を向かい合わせた。

二人は水鹿ほどの聖闘士が、かつて黄金聖闘士だったほどの冥闘士にすら、そう簡単に負けるとは思えなかった。過去に見ていたクォーツとのバトル——あの時のことを思い出すと、尚更であった。

「…………大丈夫、だよな。水鹿…………」

「…………ああ、きつとだ…………」

と、口々にしつつも、どうしても心の底にある不安を拭いきれなかった。

二人のその湿ったような雰囲気の流れた時、圭熊が大きな声を出した。

「ほら、お前ら！ 金牛宮着いたぜ！」

「圭熊……」

「……」

「おう！」

圭熊は歯を見せて、ニツと笑った。どうやら、圭熊は二人の湿った雰囲気嫌だったらしい。

翔馬は目をぱちくりとさせた後、手に口を当てて、クスクスと笑った。

「バカはバカなりに考えているな」

「お、おう!? 褒められてるのか、それ!？」

翔馬は笑いを抑えた後、圭熊の肩をとんと叩いた。

「ほら、早く行け。お前の師匠の守護宮だろ?」

「……う、うん、まあ、守護宮ってのは昔のことだけだな」

「……えっ?」

(圭熊の、師匠——……?)

白虎は翔馬の言った中の「師匠の守護宮」といったところが、妙に引つかかった。まさかとは思いつつも、白虎は恐る恐る圭熊に直接聞いた。

「圭熊?」

「おう、何だ」

「圭熊の師匠って……コーラルさん？」

「……ああ！」

圭熊は力強くコクン、と頷いて、白虎の問いに答えた。

「俺の師匠はかつての牡牛座の黄金聖闘士、コーラルだぜ！」

自分を指差して、圭熊はふふん、と得意げに鼻で笑ってみせた。

「……ほ、本当に？」

白虎はそんな圭熊を、目を丸くしながら見つめて、指差した。圭熊は「おうよ！」と綺麗に肯定した。

「っていうか、白虎！ おめー、じいちゃんのこと知ってんだな！ そつちにビックリだぜ！」

「え、いや、だって……一回会ったことあるもの……」

「へえー！ まあ、じいちゃんって結構放浪癖あるしなー！ そつかー、じいちゃんと知り合いなのか！」

圭熊は少し嬉しそうな目線で白虎を見つめた。白虎はそれに対して、苦笑しながらも、「うんうん」と頷いた。

翔馬はそんな雑談を交わしている二人の肩の上に、トン、と自分の手を置いて、目の

前を見た。

「…………し、翔馬？」

「ど、どうしたんよ…………」

「…………前を見る」

不思議そうな目線で見てくる二人に対して、翔馬はしかと目の前を見つめた。白虎と圭熊も翔馬の言われたとおり、目の前を見つめた。

三人の目線の先にいたのは、二つの人影の姿——先程の冥闘士の中の二人のものだ。
「…………見つかってしまったか」

ザツ、と白虎達の目の前に冥闘士が立ちはだかった。冥闘士はちろちろと目の前にいる青銅聖闘士達を見つめて、「フツ」と鼻からその笑みを漏らした。白虎はそれを不審そうに見つめて、言った。

「な、何笑つとんのや…………」

「いや、唯一の主戦力の杯座のあの白銀聖闘士を連れてこないで、どうやってここを乗り切るのかと思つてな」

「なっ……………！」

白虎の中の熱いものが、頭に登り上がり、顔が真っ赤になる。だが、白虎はそのまま拳を向こうに投げつけたいのを、飲み込み、抑えた。相手の挑発に乗ってしまつては、向

この思うツボだ。

——その思うツボに便乗したのが、この少年だった。

「青銅聖闘士だからって舐めてんじやねえよツツ!!」

無論——大熊星座の圭熊である。

圭熊はザカザカと大腿に足を開きながら歩いて、冥闘士二人のところまで寄った。そして、ギンツと睨みつけた。

「確かに一人じゃ無理かもしれないけどな……凜猫!」

「う、うん!」

突然名を呼ばれた凜猫はビクツと肩を跳ね上げて、恐る恐る圭熊の方を見た。圭熊の顔とそこにある瞳と小宇宙は、明らかに戦う意思を見せ付けているようだった。

圭熊はこちらを見てきた凜猫に対してコクリと首を縦に振って、こう言い放った。

「やんぞ! 今、ここに!」

「えっ、えっ……」

明らかに凜猫は焦っていた。まさかこんなところで自分が呼ばれるとは思っていないかったからだ。

圭熊はそんな凜猫にお構いなしに、更にとんでもないことを言い放った。

「ただ、お前ら二人のうち、一人だけこつちに残れ! もう一人はこの先の双児宮に行つ

ても良い！」

「け、圭熊！ ちょっと待て！」

圭熊のそのとんでもない提案に翔馬はさすがに呆れた様子で、声を掛けた。

「お前、何を考えているんだ！ バカか！」

「うるせえ！ 鈍感馬は黙ってる！」

「は!？」

翔馬は肩をぶるぶると震わしている中、圭熊はそんな翔馬にこつそり耳打ちした。

「まだ、俺には分からねえのよ。あいつらが本当に俺たちを裏切ったのかどうか」

「……!?! どういうことだ……?！」

翔馬は目を見開き圭熊の言うことな驚いていた。圭熊は翔馬から離れて、フツと優しく微笑んだ。そして、翔馬の肩にポンと自分の手を優しく置いた。

「だから、お前と白虎はもう一人の冥闘士を追え。ここは俺と凜猫に任せろ」

「……分かったよ。死ぬんじゃないぞ」

「おうよー！」

二人は互いにニツと笑みを浮かべて、お互いの拳をコツン、と当てた。そして翔馬は白虎の方に振り返った。どうやら白虎も白虎で一連の会話を聞いていたらしく、翔馬にコクン、と頷いていた。

「行く、翔馬」

「……うん」

二人はお互い、確認のために、首を縦に頷かせた。

19 : 「積尸気」

冥闘士の一人が圭熊の前に立ち、布の下からその目をぎらつかせた。圭熊はそのぎらつき方に、僅かながらも不審さを覚え、ジリツと小さく足を一步後ろへ置いた。冥闘士は圭熊のそれを見て、「なるほど」と、呟いて、他の冥闘士一人にこう言った。

「なあ、俺がここに残っても構わないか？」

「……ああ、構わんが……良いのか？」

「ああ。どちらせよ、負ける気はないからな」

「……分かった……」

冥闘士はコクリと頷くと、金牛宮の出口の方を振り向いて、そのまま足音を立てて走り始めた。

「白虎！」

「うん！」

白虎と翔馬は互いの合図のために、コクリと首を縦に頷かせて、その後ろ姿を追いかけるが如く、走り始めた。

三人の足音が聞こえなくなったところで、圭熊と冥闘士はキツと鋭い眼光でお互いの

視線を合わせた。そして、先に言葉を発したのは圭熊だった。

「なあ、その黒いボロ布、剥いたらどうだ？」

「……………ふん」

圭熊に言われて、冥闘士は黒い布を豪快に剥ぎ捨て、その姿を現した。その冥衣は蟹座の黄金聖衣を冥衣の色に染め上げたもので、一部のパーツも刺々しいものになっていた。

それを見た圭熊は「やっぱりな」と呟いて、ふう、と息を吐いた。凜猫は圭熊のその呟きに反応したのか、「？」と頭の上に疑問符を浮かべながら、首を傾げていた。

「圭熊……………？『やっぱり』って……………？」

「ああ。さっきの杯座の兄ちゃん見てて思ったんだよ」

圭熊は丸めがちな瞳をすつと細めて、冥闘士を見た。

「お前ら三人全員、過去に黄金聖闘士だったんだろ？」

「……………圭熊……………！」

「なあ、どうなんだ？ 答えろよ」

冥闘士は圭熊の問いに「ふっ」と鼻で笑いながら、サラツと答えた。

「ああ、そうだ。俺は蟹座のメノウ。お前言う通り、過去に黄金聖闘士だった」

「蟹座……………」

「だが、今もうハーデス様に忠誠を誓う冥闘士の一人だ。お前達の仲間ではない」
「ああ、そのぐらい分かっているよ」

圭熊はコツン、と手のひらに拳を当てて、目の前にいる冥闘士・メノウをスツと見据えた。

「ま、少なくとも、俺は元からお前らを仲間とは思っちゃいねーよ。聖闘士だったお前に会ったことねーしな」

「言わせておけば……」

「でも、蟹座というからには俺らを積尸気に連れて行ってくれるんだろうな？ 前までは冥界はないとされていたが、今はこうして冥闘士がいるわけだ。裏で復興みたいなのが進んでるんだろ？」

「お前を連れて行くような積尸気はない」

「……」

はつきりと断られた圭熊の額には一筋の汗が浮かんでいた。凜猫はそんな圭熊を見て、どうしたら良いのか悩んでいた。

メノウは「はあ」と溜息を吐いて、圭熊を見た。そして言った。

「お前、積尸気に行つてどうしたいんだ？ 今の冥界は何もかも中途半端で面白くないぞっ。」

「んー……どうもしないけど……」

圭熊はニツと歯を光らせて、メノウに言った。

「そつちの方が戦場としては面白えだろ？　こんなチンケな地上で戦うよりは」

圭熊のその瞳は、闘志に燃えており、かつ、これからの戦いと死闘に楽しみと期待を寄せているものであった。聖闘士としての実力がある圭熊にとつては、地上での戦いはとてもつまらないもので、もっと別の場所で自分の戦いを繰り広げたいと思っていた。それこそまさしく、今話題にしている積尸気のような場所だ。

メノウは圭熊のその瞳と台詞から、何かを色々と感じ取ったのか、「仕方ない」と肩をすくめた。そして、人差し指を立てて、そこに小宇宙を集めた。

「今から積尸気への扉を開く」

「おお！　やった！」

「は、はあ……」

騒がしい圭熊の横で、なかなか乗り気でない凜猫が、苦笑いしながら、メノウの姿を見つめていた。

「ただし」、とメノウは立てている人差し指を動かして、圭熊に言い放った。

「あくまで俺らが行くのは冥界の入り口だ。要は一步間違えたら二度とここには帰ってこない」

「……」

「そして、俺はこの技を使う以上、全力でお前らを冥界の淵に叩き落とすつもりでいる。でなければ、この技の意味はないからな」

「……」

「どうだ？ 少しは怖じけついたらか？ 今からでも遅くはない。拒否しても良いぞ」

「……圭熊……」

凜猫は圭熊の肩にとん、と自分の手を置いて、不安そうにその姿を見つめていた。どうやら凜猫はこの話で怖じけついたらしい。

しばらく沈黙が続いた後、圭熊はぶるぶると肩を震わせて、金牛宮中に響き渡るであろう大声を鳴り響かせた。

「うおおおおお」

「ツツツツ」

「なんっ—スリル満載なっ！」

「戦場っ！ す

「んげー燃えてきたぜっ！」

「!!!!!!」

圭熊は右手で力強くグツとグーを作って、足も力強く踏み締めた。

「いいぜいいぜ！— そこまで言うからには俺らも全力全開の本気で行かなきゃな、凜猫！」

「えっ、あつ、う、うん……」

圭熊の元気の良さについていけないのか、凜猫はつまりつまりにコクコクと同意して

いた。メノウは「何だこいつ……」とでも言いたげな顔で、圭熊を見つめていた。その間にも積尸気への扉は開き始めていた。

金牛宮の次の宮は双児宮だった。白虎と翔馬は双児宮に駆け上がったところで、ラピスの小宇宙を感じて、僅かながらも安心していた。今の双児宮に、ラピスはしっかりとそこにいるのだと。

自分達より先に行っていた冥闘士は既に双児宮の中に入って行ったらしく、その姿が見当たらなかった。

「……翔馬」

「……ああ」

二人はお互いの意思を確認して、双児宮の中に足を踏み出し、走り始めた。

そして双児宮の中を走ってる最中、二人は金牛宮の方から異様な小宇宙を感じ取った。二人は思わず金牛宮があると思わしき方角へとバツと勢いよく顔を向けて、その異変を感じ取っていた。

「圭熊と……」

「凜猫の……」

「小宇宙が、消えた……！」

二人は見事に綺麗に声を合わせて、放心していた。

まさかとは思うが、ここまできて早速倒されてしまったというのだろうか。いや、あの圭熊と凜猫に限って、そんなことあるはずあるまい。特に圭熊は翔馬以上の実力はあるとはつきりされているのだから、こんなにぼつくり行くなど到底思えないのだが——まさか、相手が悪かったのか。今回の冥闘士は黄金聖闘士並の実力を持つていると言われている。確かに青銅聖闘士の実力と黄金聖闘士の実力の差は大きい。しかし、圭熊はそんなものに振り回されるような性分ではない。

翔馬は色々と叫びたいのを堪えて、拳をぎゅつと握っていた。

「……翔馬……」

「……」

白虎が心配そうにこちらを見つめる中で、翔馬は「くつ」と歯で声を出し、一步踏み出した。

「きつと、大丈夫だ……あいつなら……」

圭熊が目覚ますと、そこは地獄を描いたような場所だった。

「……」

圭熊はむくりと起き上がり、辺りを見つめた。

辺りはごつごつとした固い岩で覆われた地面や崖があり、空は夕焼けよりも赤く、黒く、不気味なものだ。

「圭熊……」

「……凜猫」

どうやら凜猫は圭熊よりも一足先に目覚めていたようで、圭熊の隣でずっと座っていたようだった。圭熊は頭をぽりぽりと掻きながら、ふう、と息を吐いた。

「凜猫、ここはどこだ？」

「えつと……」

「——冥界の入り口だ」

凜猫がはつきりと言う前に聞こえてきた、男性の声。圭熊と凜猫はそれに聞き覚えがあり、そちらをバツと振り向いた。

——メノウだ。

メノウはわずかに辺りに睨みを利かせながら、二人に更に解説を加えた。

「あそこにあるのは、かつては黄泉比良坂だったものだ。あそこは黄泉への入り口、つまり、これから死ぬであろう者たちが通る道でもある」

「へえ……」

「そして、あっちにあるのは、冥界の淵——あそこに入った者は二度と生きては帰ってこ

れん」

「ふんふん……」

「……どうだ、冥界の淵以外、大したものはないだろ？」

「いや、冥界の淵があるだけでも、スリル感は違うな」

圭熊は立ち上がり、足を鳴らすなめか、爪先で地面をトントン、と叩いた。

「そこに落とされたら死ぬとか、身が締まりそうだよ」

「……ふっ、そうか」

メノウは若干ながらも微笑んで、ザツと足を肩幅まで広げた。

「さて、お前たち青銅聖闘士の実力がどんなものか、試させてもらおうぞ」

「おう！ 上等だ！」

「お手柔らかに……」

圭熊が元気良く返事する横で、凜猫がペコリとお辞儀をした。

「じゃ、まずは俺から行かせてもらおうぜ！」

まず、最初に攻撃に入ったのは圭熊だった。圭熊は勢いよくジャンプすると、拳を頂点にして、流れ星のようにメノウのところへと落ちて行った。

「だあっ！」

「——ふん」

メノウは鼻で笑い、

「……………っ！」

圭熊のその勢いを、指一本で食い止めた。圭熊の拳に、重くのしかかるような鋭い鉄の感覚が襲いかかる。

「く、そ……………！」

メノウに自分の拳が効かないことが分かると、圭熊はバツとその身を翻して、地面に足を付けた。そして、今度は足の裏をメノウに向けた。

「これでどうだっ！」

圭熊は、メノウの体のどこかに蹴りを入れようとしたのだ。だが、それもすぐに防がれた。

「っ！」

メノウは圭熊の蹴りなど、どうつてことない、といった表情で、圭熊の足に対して、自分の人差し指を立てていた。その人差し指は硬い棒みたいな、更に極端に例えれば鉄柱ぐらいの硬さがあった。

「ぐ、う……………！」

（んだ、これ……………！ 鉄かよ……………！）

圭熊はそのあまりの硬さに驚いていた。人差し指一本がこんなに自分を圧倒するも

のなのか、と。そのまま推し進めて、蹴りを入れようにも、この硬さでは入れることもままならない。

圭熊は一旦その身を引いて、メノウの人差し指を見つめた。

(まさかアレが黄金聖闘士と青銅聖闘士の差とか言わねえよなあ……!?)

人差し指一本と、自分の蹴りと拳。

その人差し指一本が鉄の防御壁となり、自分の蹴りと拳を防ぐ。

——もしや、青銅聖闘士は、黄金聖闘士の指一本の力にも劣るのいうのか。

圭熊はそう思うと、途端に悔しくなって仕方がなかった。

メノウを倒すためには、あの人差し指という名の鉄の防御壁をどうにかしなければならぬ。だが、その防御壁を崩すためには、その防御壁以上の小宇宙を込めなければならぬのも事実だ。

そもそも、黄金聖闘士と従来の白銀聖闘士の間の力差ですらかなり大きいものだと言われているのに、青銅聖闘士の自分とこんなに差を開かれては拉致があかない。まずは一時的にでもその実力差を埋めなければ。

圭熊は拳をグツと力強く握り、それを見つめた。

(……よし)

まず、普通の蹴りや拳では向こうに効かないのだから、技で勝負しなければ。

圭熊は己の脚がガニ股になるほど、両脚を大袈裟に開いて、メノウを見つめた。メノウは圭熊のその姿を見、「ほう」と声を上げた。

「その構え——俺に技をかけるつもりか」

「おうよ」

圭熊はメノウの言葉に頷きながら、ゴウツと自分の周りから小宇宙による旋風を巻き起こした。

「ただの攻撃で効かないんじゃ、もうこれしかねーだろ」

圭熊はキツと鋭い眼光でメノウを見据えた。

（大丈夫——絶対に、効く！）

圭熊は自分の実力と技を信じて、メノウに立ち向かった。

「無尽、熊拳——ツツ!!!」

圭熊の拳から無数の熊の手が出て、メノウに襲いかかる。メノウは手のひらを目の前に出して、熊の手達の攻撃を受けまいと威力をその手のひらで抑えようとした。

「……」

（なるほど……）

圭熊の無尽熊拳をその手に受けながら、メノウはその圭熊の中にある実力と小宇宙を再確認していた。この圭熊、黄金聖闘士、ましてや白銀聖闘士までとはいかないが、青

銅聖闘士としてはかなり上の実力と小宇宙にある。その実力の上に、更に、伸び代もあった。

——少しばかり、かけてみても良いかもしれない。

圭熊の攻撃が収まった後、メノウも手のひらを下げた。その顔があまりにも涼しいものだったので、圭熊は悔しそうに唇を噛み締めていた。やはり、自分の実力ではメノウを苦しめることすらままならぬのか、と。

一方のメノウはフツと口元を緩めて、圭熊の方に人差し指を向けた。圭熊は向けられた人差し指に「な、なんだよ」と、不思議そうなのと不審そうなのがごちゃ混ぜになった視線を向けた。メノウは人差し指に小宇宙を重点的に置き、言う。

「別に面白ければ、五感の一つや二つ、奪っても良いだろうか？」

「な、なに、を——……っ!？」

その途端、圭熊の全身が痺れると同時に、聴覚の感覚がなくなった。

「う、っ……」

口がパクパクと痺れ、喋ることすらままならない。次第にその痺れは圭熊の臉にも襲いかかり始めた。

「……はあっ」

気が付けば、圭熊の視界は真つ暗に染まっていた。そして、自分がどこにいるのか、ま

た、どういう状態でここにいるのかすら分からない。ただ、痺れの強さがだんだんと増しているのが分かるだけだ。

圭熊は——気付かぬうちに、その場で倒れていた。

「……………」

教皇の間にいたコーラルはその圭熊の小宇宙の変化を受け取っていた。圭熊の小宇宙はかなりぐらつき、何か一つ風を起こせば、すぐに消えてしまいそうなものだった。だが、コーラルにはどこでそれが起こっているのか分からない。

「コーラル……………」

その場に一緒にいた教皇が、そのコーラルの様子の変化に気が付いたのか、心配そうにコーラルの名を呼んだ。

「……………教皇……………」

「何かあったか……………」

「……………いえ……………」

コーラルは教皇に圭熊のことを話したいことを堪え、首を横に振った。今、圭熊のことを口にしたら、自分の中の何かが止まらなくなる気がするのだ。教皇はコーラルの心中を察したのかどうかは判然とはしないが、「そうか」とだけ呟いて、それ以上、コーラ

ルに追求することは避けた。

圭熊が無事ならば、良いのだが——コーラルは圭熊の安否を心の底から心配していた。

「ふん……」

(やはりこの程度か……)

いくら好戦的で、戦いが好きとはいえ、青銅聖闘士は青銅聖闘士でしないのだ。その証拠に五感を二つ奪われた程度でこんなすぐに倒れている。

そうして圭熊が倒れ、便宜上は一人となった凜猫は、すぐに圭熊の側まで駆け付け、その体をそつと起こした。

「圭熊……圭熊……」

凜猫が何度も何度も呼びかけても、圭熊からの応答は特になかった。脈や心臓に耳を近づける限りでは、死んでいるわけではなさそうなのだが。そんな感じに圭熊の状態を一通り把握したところで、凜猫は圭熊の体をそつと優しく地面に置いて、ゆっくり立ち上がった。サラツと髪の毛が風に揺れた。

メノウは凜猫の姿を見て、何か気付いたことがあるのか、目を細めて、その姿を見つめた。凜猫はその視線にビクツと肩を震わせながら、メノウに聞いた。

「あの……な、何かあります?」

「……いや……」

凜猫に問われ、メノウは目を細めるのをやめて、いつも通りの表情と顔付きに戻った。
(……気のせい、か……)

何となく凜猫から感じ取った小宇宙が、聖闘士のもと、何か妙なものだっただけゆえ、思わず凜猫を凝視してしまった。

凜猫はぐっとできる限りの視線でメノウを睨みつけた。だが、メノウからすればあまり怖くなく、むしろ愉快なもの程度だった。

「さて、お前はどうかやって俺を楽しませてくれるんだ?」

「……」

(……あんまり、戦いたくはないんだけど)

ここまでできたら、圭熊の意思を継いでやるしかあるまい。凜猫は息を整えて、拳を携え、小宇宙を貯め始めた。

「はあっ!」

その瞬間、太くも鋭い猫の尾が、メノウを襲った。

「……むっ」

メノウは片手で抑えようとして、手を差し出した——が。

「な——なんだと!？」

その猫の尾は、メノウの差し出した手を伝い、メノウの体を縛り付けるように、囲っていた。メノウは軽く力を込めるが、それだけでは、この猫の尾を外すことができないようだった。

「ライジングテール……!」

凜猫はそう技名を言うと、技を出したことよって荒れた姿勢を、ザツと整えた。

メノウは猫の尾——ライジングテールを見ながら、フツ、と微笑み、「なるほど」と呟いて、その尾を手で掴んだ。その途端に、尾が見る見るうちに空気と同化していった。メノウは尾を掴んでいた手を見つめて、ボソツと呟いた。

「……技の効力のわりには脆いな」

「……はい。所詮は拳によって起こる風が猫の尾の形になっただけのもの、ですから」

凜猫のその解説を聞いて、メノウは感心したのか、「最近の青銅聖闘士はこういうのが多いな」と凜猫に聞こえない程度にボソツと呟いた。

「なら、使い方によってはかなり強力な技になるな」

「……」

「今のままでは、俺さえ愚か、白銀聖闘士にすら対抗するのは無謀というもの。普通に青銅聖闘士の技だ」

「……………」

「今度はそのライジングテール、この人差し指一つで抑えてみせよう」

メノウはそう言つて、再び人差し指をピンツと立てた。凜猫はグツと目を細めて、その人差し指を見ていた。

（さつきは片手で出して、それなりに効いた。だから、そんなに焦る必要はない）

強靱ともとれる、鉄のようなあの人差し指。だが、さすがにその人差し指でもこのライジングテールを切り抜けることすらままならないだろう。先ほど、メノウの体をライジングテールは捉えたのだから。

——凜猫はそう思つて、拳に小宇宙を込めた。

（——よし！）

凜猫はグツと拳を強く握り締め、メノウに向かって飛ばした。

「ライジングテールツツ！」

先ほどと同じように、猫の尾がメノウの襲つた。

——大丈夫、きつと、大丈夫だ。

だが、凜猫のそんな思いも虚しく、その威力は止められた。

「……………っ！」

人差し指、一本で。

メノウの人差し指は、凜猫のライジングテールの先端部分に対して垂直に立ち、その威力を軽々と抑えていた。

「そ、んな……！」

凜猫は愕然としていた。こんな人差し指一本如きに自分の技が封じられるなど、信じられなかった。メノウはライジングテールの先端をちよい、とつまんだ。すると、ライジングテールは先程のように空気と同化し、形がなくなった。

メノウはライジングテールが消えたことを確認すると、凜猫に言った。

「聖闘士というものは、一度見た技は通じぬものだ」

「……たった一度で僕の技を見極めた、と？」

「そういうことだ」

「そんな……」

凜猫は愕然に愕然を何度重ねれば良いのかわからなかった。確かに、聖闘士に同じ技は二度も通用しない、とは聞いたことがあるが、まさかこんなにあつさりしたものだとは思ひもしなかった。

「……」

一方のメノウは、ちらりと圭熊の方を見ていた。言わなくとも、そこに倒れている圭熊のことは気になっていたようだった。

メノウはスタスタと凧猫の横を通って、倒れている圭熊の元へと向かった。

「……蟹座……?」

「……フツ」

メノウは口元を少し緩め、手で手刀を作った。凧猫はそのメノウと、そのメノウの目の前いる圭熊を見、まさかと思いい声を上げた。

「け、圭熊に何をすするつもりだ!」

「まあ、見ている」

メノウはそう言うと、手刀を垂直にピン、と掲げてから、圭熊を見据えた。そして、圭熊の上はその手刀をかざし、どこに落とすか調整しているようだった。

凧猫は全てを悟った瞬間、ドクン、とその心臓が強く波打った気がした。

「ま、待て……」

凧猫はメノウに対して制止をかけた。だが、メノウは緩めた口元を正さぬまま、圭熊を見据えながら、再びその手刀を掲げた。

「こうするのさ」

「やめろ——ツツ!!!」

凧猫が大声で声を上げたのとメノウの手刀が落ちるのはほぼ同時だった。メノウの手刀は圭熊の腹を目掛けて、綺麗な並行を保って落ちていった。

「……………」

先程から繰り広げられている圭熊達の戦いは、双児宮にいた白虎達にも伝わっているようだった。だが、白虎達はこの戦いがどこで繰り広げられているのか皆目見当がつかなかった。それもそうだろう。圭熊達は冥界の入り口で戦っているのだから。

「翔馬……………」

「……………」

翔馬はただ、ひたすら黙って圭熊達の戦いをその小宇宙で感じ取っていた。

(……………大丈夫だと、良いんだけど)

翔馬は表面ではいつも通りを装っていても、内心はかなり不安だった。何故だろうか、前まではこんなに圭熊に対して心配などしなかったものだが。

白虎はそんな翔馬の内心を知ってか知らずか、ニコツと微笑み、こう言った。

「大丈夫大丈夫。圭熊達のこと、信じてあげよう?」

「白虎……………」

白虎はニコツと微笑み、コクン、と首を縦に振った。

「アンタが強いって言った奴だし、わいは信じてるよ。きつとやってくれるって、思ってる」

「……びやつ、こ……」

「な？ だからわいらは今、目の前にあるものだけ見よ？」

「……うん」

翔馬は口元を少し緩めてコクリと頷いた。白虎はニコツと笑ってそんな翔馬を見ていた。

と、ふと、白虎はとあることに気が付いていた。

「……なあ、翔馬」

「……？」

「わいら、さつきから同じところぐるぐる回ってへん？」

「……ああ……」

翔馬も、今、白虎に言われて気が付いたらしく、キョロキョロと辺りを見渡していた。

「どうりでこんなに走っても、出口すら見えないはずだ。もうかれこれ十分ぐらいは走っている気がするが」

「……うん」

「……まさか、双子座なりの侵入者避けだろうか……」

「うん……十分有り得るね」

そういうえば、ラピスは時々こういう感じに宮内をループさせるような仕掛けを作って

は自分達を困らせている記憶があった。その時はラピスも暇で仕方ないのか、ちよつとした遊び、みたいな感じで、数分で出口に辿り着くのだが。

だが、今回は宮内の小宇宙の構えからして、それとは何もかも違つた。絶対にこの先へは誰にも行かせぬ、と言っているようだった。

「……俺ら、出口は愚か、双子座の元まで辿り着けないんじゃないや……」

「そ、そんな恐ろしいこと言わんといてよ！」

自分も考えていた恐ろしい可能性の一つを翔馬に言われ、白虎は額に汗を垂らしながら反応した。

二人がそうこうしている一方で、ラピスは宮の奥で待つていた。一人の冥闘士が、ラピスが宮にかけた仕掛けを潜り抜け、こちらまでやってくるのを。その時は、刻々と迫っていた。

気が付けば、メノウの手刀はとある一つの少年の手によって掴まれていた。メノウはその手を辿り、その手の主を見た。

——倒れていた、圭熊だった。

「圭熊！」

凜猫は安心したのと、更なる心配が混ざつたような声と表情で、圭熊を見て、その名

を上げた。

圭熊は麻痺でブルブルと震えている腕と手に力を込めて、メノウの手刀から、その身を守っていた。自分の体の感覚が上手く掴めない。気付かぬうちに離してしまいそうだ。

「なるほど。そうやって抵抗する元気だけならあるらしいな」

メノウはパツと圭熊の手を払って、とんとん、と片手で掴まれた腕の叩きながら、その様子を見た。麻痺しているわりには、随分と強い力で掴んでいたような気がしたが。

圭熊は体全体に鞭を打ちながら、足に力を込めて、そこに立ち上がった。麻痺が酷く、息をするのすら苦しい。

「ふん、どうやらそこに立つことすらやつとみたいだな」

メノウは圭熊を見ながら、その姿を鼻で笑っていた。自分が一つ攻撃をくらわせれば、すぐに倒れそうだと。

「今にでも楽にしてあげよう」

そう言つて、メノウがスツと構えた時だった。

(ツ!! な、なんだ!?)

——この、小宇宙は。

メノウは辺りをキョロキョロと見渡し、その小宇宙の根源を探した。大きな小宇宙を

持った何者かが、この積尸気に侵入したというのか。だが、それらしきものは全く見当たらない。

だとすると、どこから——。

答えは、すぐそこにあつた。

「まさかっ!」

そう。メノウは気が付いたのである。

この小宇宙の根源は今、自分の目の前にいる少年・圭熊であることに。

「いつの間に……!」

あんなボロボロな体のどこから、こんな莫大とも取れる小宇宙を燃やすことができる元気があるというのだ。

(しかも……!)

それはただの小宇宙ではない。通常の青銅聖闘士の小宇宙の燃え方とは別格のものだった。

圭熊は麻痺でその顔に力は無いものの、笑みを浮かべて、メノウに言った。

「青銅聖闘士でも、小宇宙を燃やしまくれれば、こんなの、どうつてことないんだろ? じいちゃんが言つてたぜ?」

(寧ろ——……)

——『こうして感覚を失う程のダメージを受けてからが、小宇宙の本番』。

圭熊の小宇宙のその煌めき方は、黄金聖闘士が常に纏っているもので、そしてそれは小宇宙の真髄とも言われているものだった。

——つまり——。

(セブセンシズか——……！)

圭熊の小宇宙が、その場で瞬く間に燃え盛った。

20：「青銅の底力」

白羊宮では、自分の師匠・水瓶座のアレキと相打ちとなつて倒れていた水鹿が、目を覚ましていた。

「……」

目の前に映つた光景を見て、自分たち二人がいかに白羊宮に迷惑をかけ、かつ、とんでもない凍気をお互いにかけていたのか、心で痛く感じていた。なお、当の白羊宮の守護者の玄夢は何も言わず、白羊宮の入り口で冥闘士を追い払い続けていた。

（すまん、玄夢……）

水鹿は心の中で玄夢に謝つた。しっかりと言葉で謝るのはこの戦いが終わった後になるだろう。

そして、視線を自分の頭の頂点の先で倒れているであろうアレキの方へと向けた。よく耳を澄ますと、寝息が聞こえる。

——どうやら、ぐっすり眠っているようだった。

こういふところは相変わらずだ、と水鹿は安心したと同時に、一気に切なくなつていった。

本来ならば、アレキは自分が聖闘士になった直後、つまり二年前に既に死んでおり、その死体も聖域のどこかに埋まっているはずだ。水鹿はそのアレキの墓を訪れる度に、いつも思っていた。

——アレキが死ぬ前に、自分の全力の凍気、つまり絶対零度を見せたかった、と。

アレキは生前、水鹿が聖闘士になるまで、何度も何度も絶対零度を出せるように指導してくれた。お前ならばできる、お前は候補生の中でも突飛して優れているのだから、と。水鹿を信じて指導してくれた。黄金聖闘士にはならないであろう候補生に絶対零度を教える、という光景は、確かに周りから見れば不思議なものだったが、アレキの指導し、教えたことを、一秒で全て吸収してしまう水鹿に教えることは、最早、絶対零度のことしかなかった。だが、当時、この絶対零度だけは水鹿にとって越えることができない壁であった。

そしてその壁を越えた瞬間に、アレキは命を落としてしまったのだ。

水鹿が絶対零度を放つ姿を一番見たかったのは誰でもない、アレキのはずだ。水鹿はその姿を見せる前に死んでしまったアレキに対して、どうしても遣る瀬無い気持ちでいた。

(でも、奇跡って、どんな形であれ、起こるものだな……)

水鹿は残った体力でむくりと起き上がり、その勢いで立ち上がって、アレキの目の前

まで歩き、近寄った。

そして、アレキの右腕を取り、それを自分の肩に回して、そのままズルズルと歩き始めた。どうやら、体重も生前と同じようで、アレキの体は黄金聖闘士らしく、がっしりとした重さがあった。

水鹿はアレキを背負い、次の宮である金牛宮に向かって、一歩ずつ前進していた。

積尸気、冥界の入り口。

圭熊はセブセンシズに目覚め、かつては蟹座の黄金聖闘士だった冥闘士・メノウと対峙していた。

メノウは驚きを隠せぬ様子で圭熊の小宇宙を燃やしている様を見つめていた。

（青銅聖闘士がセブセンシズに……い）

想定外だった。圭熊がもつと小宇宙を燃やせるであろうとは思ってはいたものの、セブセンシズに目覚めるのはさすがに想像していなかった。

圭熊はその黄金聖闘士のように輝く小宇宙を身に纏いながら、メノウをキツと睨みつけた。メノウはそれに対して「フツ」と笑みを浮かべて、圭熊に言い放った。

「青銅聖闘士でセブセンシズに目覚めたのは流石と言っておこう」

「……」

「だが、一時的にセブンセンスズに目覚めたところで、俺たち黄金聖闘士との差は埋まらぬ」

「なら、確かめてやろうか……!」

圭熊はグツと拳を脇に力強く据えて、メノウに向かって勢い良く走り出した。

「だあっ!」

そして、メノウの顔を目掛けて勢い良く拳を入れた。メノウはその拳を先程と同じように人差し指で抑えようとした。

「——っ!」

抑えることはできた。できたのだが——圭熊の拳から受ける振動が未だかつてないものだった。さっきは何とも感じなかったのだが——まさか圭熊はこの短時間の間で、とんでもない早さで成長していると言うのか。それとも、圭熊のセブンセンスズがそうしているのか。

(いや……)

どっちでもいい。

今は圭熊と凜猫に勝ち、早く地上に戻らなければ。

不思議と、メノウからは先程の余裕が嘘のようになくなっており、寧ろ焦りが全身に広まっていた。

「……っ！」

そして、気が付けば、メノウの人差し指と圭熊の拳の間で、圭熊の拳の方が優勢に立ち始めていた。その証拠にメノウの体が、圭熊の拳の圧力でどんどん後退していつているのだ。メノウの焦りは一気に広まっていく。

——このままでは、負ける！

メノウは圭熊の拳を抑えている人差し指に小宇宙を重点的に置いた。その途端、メノウの人差し指からは大きな風が舞い上がった。

「っ！」

圭熊はその風によって容易く吹き飛ばされ、そのまま勢い良く向こう側にある岩まで飛ばされ、背中をぶつけた。

「いつでえーっ！」

緊張感のない圭熊の悲鳴。圭熊は背中をさすりながら、メノウの方を見た。メノウは腕を下ろして、「ふう」と息を吐いた。その額には一筋の汗が浮かんでいた。

(……思わず、自棄になってしまった……)

黄金聖闘士たるものが、青銅聖闘士如きに自棄になるなど、あつてはならないことだ。だが、メノウの中で焦りが増していたのは確かだった。

メノウは息をゆっくり吐いてから、圭熊を見つめた。圭熊の体はやはりおぼつかない

様子だったが、先程倒れた時よりは幾分か動けるようになっていた。これもセブセンシズによるものなのだろうか。

圭熊は地面に足をつけて、「よし」と拳と拳を合わせた。

「二度でもセブセンシズに目覚めたからには、がつり攻めて行くぜ」

「……ふん」

メノウはまさしく「やれるものならやってみる」と言った様子だった。圭熊はそれに対して「やってやるさ」と言った様子で、全身を構えた。

「行くぜ！ 無尽熊拳——ツツ!!!」

再びメノウに向かって幾多なる熊の爪が放たれた。メノウはやはり先ほどと同じように手を出して、熊の爪の威力を抑えようとした。

だが、熊の爪の放たれる速度は先程よりも断然速くなっていた。

「！」

そして威力も強くなっているのか、メノウの纏っている冥衣の手の部分がピキピキとヒビを入れ始めていた。

「へー！ 冥衣って強度自体はそこまで対したことねーのな！」

「……！」

圭熊に冥衣の痛いところを突かれ、メノウの顔が一気に訝しげになった。

冥衣は黒い宝石のような美しさを持ち、一部では材料は冥界の宝石から出来ている、とも言われているが、その強度自体は黄金聖衣よりも数段劣り、強い衝撃が加えられるとすぐにヒビが入る。現に、圭熊から受けている攻撃ですら、こうして耐え切ることにすらままならない。

「このまま攻撃続ければ、お前丸裸になるんじゃないか？」

「……余計なことを」

折角良いところなのに、相変わらず緊張感のないことを言う。だが、メノウは不思議と不快には思っていないかった。

徐々に熊の爪が引き消えていき、メノウにかかってくる技の威力もだんだんとなくなっていく。そして、技の威力が完全消滅し、メノウの手も引いた頃には、メノウは息を荒げ、肩で息をしていた。

「こいつ……全体的にパワーが大きくなっている。やはりセブセンシズに覚醒したのが大きいのか……」

元々のパワーや小宇宙が大きいのは分かっていたが、黄金聖闘士にダメージを与えられるほどの小宇宙を手にしたことで、さらにそれを維持できるようになったのか。

だとしたら——この圭熊、将来は……。

「……もう少し、戦ってやっても良いかもしれない……」

メノウは、圭熊がこのバトルでどこまで成長できるのか、確かめたくなかった。それは聖闘士としてか、それとも冥闘士として向こうを面白がっているのか、はつきりとした。ただ、黄金聖闘士をここまでにさせる青銅聖闘士などなかなかいない。そして、メノウはそれを面白がっていることは確かと言えよう。

メノウはふと冥界の淵を見つめた。あそこに落ちたら、二度と地上には戻れない。

(……)

何を思ったのか、メノウは圭熊の元まで歩み寄り、腕を掴んだ。

「はっ?」

突然腕を掴まれ、圭熊は戸惑いを隠せない表情だったが、その瞬間、圭熊は宙に浮いた。

「はっ、ちよっ、なっ……ぐあああああっ!」

そして、「ドシヤアアア!」と勢い良く圭熊は地面にその身を摩擦させながら、その地に降り立った。

どうやら、メノウに投げ飛ばされたらしい。

圭熊は「くっつそお」と呟きながら、ダンツとひっくり返るように起き上がった。

「いきなり何すんだよ!」

「後ろを見てみる」

「はっ!? うし——ろ……?」

メノウの言われるがままに後ろを振り向いた、その瞬間。圭熊の顔から一気に血の気が引いた。

圭熊のすぐ後ろは冥界の大きな穴、つまり冥界の淵だった。

メノウは真つ青な圭熊に向かって、冷静に言い放った。

「冥界に入る前にも言ったな。俺はお前らを冥界の淵に叩き落すつもりでいる、と」

「……」

「最初はただの青銅聖闘士だと思い、難だったら見逃してやろうとも思ったが……大熊星座。お前の小宇宙をこの戦いの中で感じて、気は変わった」

「なっ……」

「今、ここで、お前を冥界の淵に落としてやる」

メノウはそう言う圭熊の腹を蹴り、圭熊の体を後退させようとした。だが、圭熊はその痛みに唸りながらも、何とかその蹴りに耐え切った。

「さて、次はどうだ?」

「——っ!」

圭熊は思わず目を瞑って、メノウの蹴りに備えた、が。

(……?)

メノウの足が、何者かに捉えられたかのように動かない。まさか、と思い、メノウは辺りをキョロキョロと見渡した。

「……！」

凧猫が、手に力を入れていた。その指の先には——見えない細かい音がピン、と張っているようにも見えた。

「マリオネット、テール……！」

凧猫はぐいつ、と力いっばいにその糸を引つ張り、メノウの足を圭熊の側から退けようとしたのだ。

「それ以上、圭熊に手出しはさせない……！」

「……小癩な」

しかし、メノウはそんなものは効かないと言わんばかりに、足を大きく振って、凧猫ごと糸を引つ張った。

「ぐっ！」

凧猫はその勢いで大きく地面に摩擦し、派手に滑り込み。糸は切られ、メノウに対してこれ以上妨害はできなくなった。

「凧猫っ！」

圭熊は思わず凧猫の名を大きく上げた。

(くそっ……!)

圭熊はメノウに対してふつつつと怒りが込み上げてきた。メノウに何かしら攻撃したかった。だが、怒りという感情だけで動いたとして、それで勝てるはずもなく、むしろ負けるに違いなかった。

「……落ちろ」

そんなことをグダグダ考えているうちに、メノウが圭熊の体を蹴り、その勢いで圭熊の体が後ろにある大きな穴に向かい、落ちようとしていた。

「っ!」

「……ほう」

メノウは圭熊に対する感心から、声を上げた。

自分が冥界の淵に落ちそうになったことに気が付いた圭熊は、落ちる瞬間、すぐに穴の入り口付近を掴み、何とか落ちずに済んだ。だが、この掴む手もいつまで持つかどうか。圭熊はそのことだけがどうも引つかかっていた。

「圭熊!」

凜猫はすぐに圭熊の元まで駆け寄り、圭熊に対して手を伸ばした。

「り、凜猫……!」

圭熊は掴んでいない方の手を伸ばし、凜猫の手を掴もうとした。そして、もう少し、と

いうところで凜猫のその手がなくなつた。

「!？」

圭熊は何事かと出来る範囲で顔を見上げた。

「余計なことをするな」

「……………っ！」

どうやら、凜猫はメノウに引つ張られて、向こう側まで投げ飛ばされたいらしい。

メノウは凜猫とのやり取りを終えると、すぐに圭熊の元まで歩み寄り、圭熊を上から見下げた。そして、圭熊の掴んでいる手を強く踏みつけた。

「うっ、ぐっ……………！」

その瞬間、圭熊の顔が痛みの苦しきから崩れ歪んだ。メノウはぐりぐりといったぶる様子で、圭熊の足を踏み続けた。

「ぐ、うう……………！」

「ほら、落ちろ。落ちるんだ」

「ぜっ、たいに……………いや、だ……………！」

落ちろ、と言ってくるメノウと、それを断固拒否する圭熊。凜猫はその様子を見ながら、ハラハラとしていた。圭熊を助けようにも、また先程のようにメノウに邪魔扱いされるだけだ。凜猫は我慢していた。

一方の圭熊は掴んでいる手に来る痛みには耐えながら、ここからどうやって逆転出来るのか考えていた。このままでは下手したら、メノウの思い通りに自分が冥界の淵へと落ちてしまう。

「ちっ、往生際が悪いな」

「……………」

メノウは圭熊の手を踏みつけながら、圭熊の顔を睨みつけた。また、圭熊もメノウの顔を睨みつけながら、思った。

——隙があれば。一瞬でも隙があれば！

そう、どこか隙さえ突けば、この戦い、圭熊が有利になるといつても過言ではなかった。

だが、相手は黄金聖闘士。隙などあるはずがなかった。探せば探そうとするほど、隙は見つからない。作ろうにも、こんな状況で作れるもはずもなかった。

(何か良い方法は……………！)

その間にもメノウは自分の手に対して刻々とダメージを与え続けている。そろそろ手を覆っている聖衣がポロポロに砕け去っている頃だろう。

メノウは圭熊の様子を見ながら、こう言った。

「そろそろ限界じゃないのか？ 手が震えてきてるぞ」

「うっ……!」

メノウに突かれて、圭熊の心臓がドキリと大きく鳴った。圭熊は痛みで、穴の淵から離れそうな手を、何とかして力を入れて、離さまいとしていた。だが、それもそろそろ限界が近付いてきていた。もう一度、この手にダメージを与えられれば、あとはこの身をこの穴に預けるのみだ。

「これで、終わりだ」

「ぐっ……!」

そして、メノウの足がもう一度、圭熊の手に踏み込もうとした、その瞬間。

メノウの足が、突然動かなくなった。

「な、なにっ……!?!」

メノウは視線を下に向け、何が起こったのか確認した。

自分の足首を掴んでくる、二つの手——凜猫の手だった。凜猫は離さまいとメノウの足首を掴み、圭熊に声を向けた。

「圭熊!」

「凜猫、お前っ……!」

「早く! 今のうちに!」

「……っ!」

(ごめん、そして……)

「ありがとうよ！ 凜猫！」

圭熊は全身の力をその手に込めて、飛ぶように穴の淵から地へと降り立った。

「くっ！」

メノウはしまった、といった様子で圭熊を見てから、凜猫を睨み付けた。凜猫は圭熊が地に降り立つと、すぐにメノウの足から自分の身を引いて、メノウの後ろに立った。

「メノウッ！ 俺の全力の小宇宙を受け取れーっ！」

そう言った圭熊の小宇宙が、炎の烈火のように一瞬にして巻き上がった。メノウはギイツと歯を軋めながら、手を目の前に出して、防御態勢を取った。

一方で圭熊は再び無尽熊拳のあの構えをとった。メノウは一瞬だけ馬鹿にしたように笑みを浮かべたが、先程のパンチを思い出す限りでは、油断はできない。すぐに顔を引き締めて、防御に使う手のひらに、小宇宙を集中させ始めた。

「いっけえええええええ—— ツツツツ！！！」

その瞬間、圭熊の中にある炎が炸裂した。

「一矢熊拳—— ツツツツ！！！」

圭熊の拳から、鋭い熊の爪の一矢が放たれた。その矢は今までの圭熊の拳よりも速いであろう速度で、メノウに向かっていった。メノウはその一矢を手のひらで受けようと、

小宇宙を貯めた手のひらを自分の目の前に出した。

「——ツツ！」

しかし、一矢熊拳は今までのように上手く防衛できなかつた。防衛しているメノウの体が早速後退し、かつ、ヒビが入った冥衣に更なるダメージを加えていた。

そして、冥衣のヒビが完全になくなり、砕け散った時、一矢熊拳が爆発したように、威力を増した。

「……っ！」

メノウは覆っていた冥衣を失った手で、その一矢熊拳の威力を受けていた。だが、時間か経つにつれて、だんだんと耐えきれなくなり、しまいには手のひらのしわから血が出始めていた。

(青銅聖闘士にこんな力が……！)

——自分は少し、青銅聖闘士というものを侮っていたのかもしれない。そういえば、前聖戦で生き残った教皇やその仲間達も青銅聖闘士であつた。もしかしたら、この圭熊とその仲間達も……。

(ふっ、今後が楽しみだな……)

メノウがそう思ったその時、圭熊の一矢の威力が砕け散つた。メノウはその瞬間、圭熊と凜猫に地上に戻るように仕向けた。そして、自分はここでこれからを過ぎすこと

か、教皇に徹底的に問いただしてもらおうつもりです」

「ああ……そうか……」

「あなた程の人が冥王軍側へ寝返るほどの何か……是非とも聞きたいので、聞かせてくださいよ」

「……」

アレキは視線を下へ逸らした。そして、「水鹿、お前はそういう奴だったよな」と、アレキは生前のことを思い出しながら思っていた。

どんなことがあっても、どんなに辛い現実が構えていようと、水鹿はいつもこうして冷静だった。涙も見せず、また、感情的に苦しい表情は絶対に見せない。時々冷静すぎて、アレキからしたら少し怖いぐらいだった。だが、それが水鹿の長所である、とも思っていた。

そして、その当の水鹿はただ、黙々と金牛宮への階段を登り続けていた。教皇の元へ、そして、仲間達の元へと。

圭熊と凜猫は一矢熊拳の威力が炸裂した途端、自分たちの体が一気に浮き上がり、途轍もないプレッシャーに襲われた。

——そして、気が付けば、圭熊と凜猫は積戸気から、金牛宮へと戻っていた。

二人は酷く驚いていた。何故戻れたのか、一体が何があつてここに戻つてこれたのか。

そして、メノウは。メノウの姿はどこへ消えてしまったのだろうか。

二人は辺りをキョロキョロと見渡して、その姿を見つげようと試みていた。あれが圭熊の全力とはいえ、黄金聖闘士がああ攻撃でのうのうとやられるはずはなかった。

まさかとは思うが、あの積尸気に取り残されたのではなからうか。だとしても、本人は冥界を歩き来できる蟹座の黄金聖闘士ゆえ、その可能性は低いだろうが。

「圭熊……」

「……」

もし、それが本人の意思で冥界に残つていたとしたら——圭熊は、拳をぐつと握らざる得ない。

「……圭熊」

「……っ」

圭熊の肩がふるふると震え、そのまま途轍もない焦燥感と喪失感に襲われた。

(メノウ……アンタ、どこにいんだよ……)

その瞬間、圭熊の目の前にきた一つの小さな光の玉がその全てを語っていた。

「……!」

圭熊はその落ちてくる小さな光を手のひらで受け止めて、それ見つめ、感じていた。この小さな光の玉が、メノウの小宇宙の一つである、と。

「……」

(メノウ……)

何と儚くも、小さな便りであろう。

圭熊はぎゅつとその光を拳で握って、目を閉じながら顔を下に向けた。そして、歯を食いしばり、瞳から水滴が出そうになるのを必死に堪えていた。

そして、圭熊はこの戦いの中で感じていたことが一つあった。

——「メノウは完全に冥王軍側に堕ちているわけではない」——と。

同じように冥闘士になっていたアレキも、それはきつと同じであろう。一度は聖域に、女神に忠誠を誓った聖闘士が、完全に冥王側に堕ちるなど、まず、できるはずもないのだから。

圭熊は拳を開き、それを見た。小さな光は消え去り、ただ、握っていた拳の温もりだけが残っていた。

(……色々、ごめん……)

自分のわがままのために、わざわざ積尸気で戦ってくれたこと、そして、こうして自分と凜猫の二人だけ地上に返したこと。圭熊は感謝と申し訳なさの気持ちで、心と頭が

いっぱいいっぱいになっていった。

その時、金牛宮に忍び込んできた、黄金聖闘士二人分——いや、片方は黄金聖闘士ではなかった。黄金聖闘士のような小宇宙ではあるが、圭熊はこの小宇宙が黄金聖闘士のもでないことを知っていた。圭熊は「もしや」と顔を上げてバツと入り口の方を振り返った。

「……杯座の兄ちゃんとその師匠か！」

そう、水鹿とアレキだった。水鹿はニコツと優しく笑い、圭熊に声を発した。

「圭熊、凜猫。無事だったか？ 結構ポロポロみたいだが」

「おうよ、平気平気！」

「……」迷惑、おかけいたします」

圭熊は元気に返事をして、凜猫は敬意を払ったのか、丁寧にお辞儀をした。

一方、アレキは水鹿に肩を貸されながら歩いてきたが、圭熊の姿を見ると、すぐに水鹿から離れた。水鹿はそれを心配そうに見つめていたが、アレキは心配はない、といった様子で辺りをキョロキョロと見渡していた。

「……あいつの……メノウの小宇宙を感じるが……いない、のか？」

「……」

圭熊は一気に押し黙った。ここでメノウのことを言っても良いものなのか、そうでな

いのか。アレキは押し黙っている圭熊の様子を見て、全てを察したのか、腕を組み、黙って目を閉じて、そこに佇んでいた。

アレキはそれからしばらくして、目を開き圭熊達の方へ視線を向けて、質問を向けた。「君たち、ここから先へ行くつもりか？」

「勿論！ 白虎と翔馬の加勢に入らねえと！」

アレキの質問に即答したのは圭熊だった。圭熊は視線を強く保ち、ぐつと拳を握って、その意思を示していた。

圭熊はそれぐらいに、どうしても白虎と翔馬のことが気掛かりだった。双児宮には黄金聖闘士のラピスがいるとはいえ、冥闘士は黄金聖闘士並みの力を持つ人物。もしかしたら、ラピスが駆けつける前に、二人はやられている可能性だってある。そうでなくとも、苦戦している可能性もあり得る。そのためにも、圭熊は早く二人に加勢したかったのだ。

アレキは「そうか……」と呟いた。その表情はどこか難しそうなものだった。水鹿はそのアレキの表情を見、思わず「あの……」と、アレキに向かって声を上げた。

「何か……あつたんですか？」

「……」

アレキは顔を上げて、ゆっくりと口を開いた。

「……ラピスには、弟がいたのを知っているか？」

「はい。前に本人から聞きました」

水鹿はコクリと縦に首を振った。

ラピスの弟——ラズリのことであろう。ラズリは死んだわけではなく、冥王軍側に誘拐されて聖域から去った、という話だったが、水鹿はまさか、とは思った。

「もし、かして……」

水鹿は絶句にほぼ近い状態で声を出した。アレキは目を閉じ、全てを察した水鹿に、コクリと頷いた。

ラズリのことを何も知らない圭熊と凜猫は一体どういうことなんだ、とアレキと水鹿を交互に見ていた。

アレキは、全てを口から言い放った。

「そうだ。もう一人の冥闘士、双児宮に向かっているだろう冥闘士は——かつてのラピスの弟・ラズリだ」

もう一人の冥闘士・ラズリは自分を覆っていた黒い布をそこらへんに脱ぎ捨てて、その背恰好と冥衣を露わにし、双児宮の中を堂々と歩いていた。

「……」

(この迷宮の道、僕には分かる……)

だから、わざわざ走る必要もなく、焦る必要もない。何故ならば、敵は既に目の前にいるのだから。

ラズリはカツン、と冥衣の踵を鳴らして、そこに立った。

目の前には自分とは髪型や髪色、そして眼鏡の有無が異なるものの、ほぼ自分と同じ容姿の人物がいた。

「……ラピス……いや、兄さん」

——双子座の、ラピス。双子座の黄金聖闘士にして、ラズリの双子の兄。

二人はお互いの顔を睨み付けるように見つめた。

双児宮内に、二つのただならぬ量の小宇宙が充満し、且つ、それは外から見ても分かるぐらいだった。それはお互い対立し、敵対していた。

それは、未だにラピスの元へと辿り着けない青銅聖闘士二人の指標にもなった。

「……翔馬」

「……ああ」

きつと、この小宇宙を手掛かりに迷宮を辿れば、ラピスの元へと辿り着くかもしれない。い。

そして二人は小宇宙を辿るように走り出した。ゴールは最早目の前にある。

21:「双子座再会」

教皇の間の奥から出てきた女性の姿があつた。服装は白く、長い丈のワンピース、髪の毛は腰まである透き通つた茶髪を、軽く結び上げ、そしてその顔つきは上品そうで、かつ、凛々しいものだった。

女性はコツコツとヒールの踵を鳴らしながら、教皇の間にいた教皇とコーラルの目の前に現れた。教皇はその女性の姿を見るなりほほ笑み、そしてコーラルは帽子を取つて、ぺこり、と会釈をした。女性はニコツと笑みを浮かべて、スカート裾を地面に近づけぬように上げて、それから、跪くように会釈をした。そして顔を上げた。

「——そろそろ、私の出番でございますね」

「ええ。とても大変かもしれませんが」

「いいえ、よいのです。冥王ハーデスの復活の兆候が見られたからには、私にも活躍させていただけかないと」

「……それもそうですね」

確かに女性の言う通り、とても言うかのように教皇はクスツと笑みをこぼした。女性もそれに釣られてクスリと優しく笑みをこぼしていた。

教皇はスツと女性に対して道を開き、ペこりと会釈をした。

「では、少し早いかもかもしれませんが、ご武運をお祈り致します。『女神アテナ』——……」

二人は双児宮の中で対峙し、そして、お互いの運命に向き合っていた。

かつてはお互いの全てを知り尽くし、そして、それと同時にお互い一番の好敵手であった、双子・ラピスとラズリ。兄・ラピスはその実力に囚われることがない人格で、一方の弟・ラズリは朗らかな兄とは対象的に、非常に勤勉で真面目であった。それぞれ正反対の性格と人格であったが、お互いのないところは全て補える、という非常に理想的な双子でもあった。

そして、その双子は今、悲しいことに、お互い敵同士として——再会していた。

ラピスとラズリはお互い顔を見合わせ、目の前にいる相手を凝視していた。今のお互いの状況を見て、何を感じ、何を思うか。それはお互い自分にしか分からない。

ラズリは冥界の宝石のように輝く黒い冥衣を煌めかせながら、ラピスに向かって言い放った。

「お久しぶりです、兄さん」

「……」

ラズリにそう言われた瞬間、いつも明るく、緩やかな表情をしているラピスの顔付き

が一気に厳しいものへと変わっていった。ラズリの額に汗が一筋だけ流れた。

「やはり——冥闘士に兄呼ばわりされるのは嫌ですか？」

「……いや」

ラピスはラズリの言うことに軽くながらも首を横に振り、それを否定した。そして、悲しげな顔付きになってから、ラピスは目を閉じて言った。

「ただね、ラズリ。俺、悲しいよ」

「は？」

ラズリは思わず声を上げた。今の自分のどこに悲しむべきところがあるというのか。ラピスはその理由を続けた。

「俺はね、お前がこの二十年程度で冥闘士に落ちる奴だとは思ってなかったよ。女神の聖闘士は死んでも女神アテナに忠誠を誓うもの。そうじゃなかった？」

「……」

確かにそうだ。聖闘士は女神アテナとは、死んでも死に切れないぐらいの忠誠を誓うもの。自分のような裏切りなど、論外であろう。

だが、ラピスは目を見開き、ラズリを見据えて言った。

「まあ、別にいいけどね。お前が誰に忠誠を誓おうがなんだろうが、俺には関係ないし」
「……っ」

そここのところに関してだけは、よく言えば『無関心』といったところか。ラズリは思わぬところで、自分とラピスの差を感じてしまった。今の自分とラピスの立場が逆なら、こんな風に『関係ない』とは言えぬだろう。

ラピスは「そろそろいいかな」と、呟いて、己の纏っている黄金聖闘士を輝かしく煌めかせながら、中にある力の炎を燃やし始めた。

「ラズリ」

「……」

「お前が俺の弟だろうが何だろうが、今は敵同士だ。敵である以上、俺は本気でお前を倒しにいく」

「ええ、勿論。僕もそれを覚悟で双児宮に来ました」

「……うん、そっか」

ラピスはふと、微笑んで、そして、両腕を掲げてからそれをクロスさせた。ラズリはごくり、と息と唾を同時に飲み込みながら、ラピスに対抗するかのようになり、同じように両腕をクロスさせた。

その瞬間、ラピスとラズリの小宇宙がぶつかる。

「ギャクシアン——……」

「よっしやあああああ——」

——ツツツ

!!!!!!

——はずだったのだが。

「なっ……はっ……」

突然この場に鳴り響いた緊張感のない少年二人の声に、ラズリはひたすら驚いているだけだった。ラピスも「あれまー」と緊張感のない声を出して、その声の主の少年二人を見た。

「白虎と翔馬、俺の仕掛け突破しちゃったのかー」

そう、この少年二人は、先ほどまで双児宮の迷宮の仕掛けに迷っていた白虎と翔馬であつた。白虎は息を切らしながら、ラピスに乱暴に言い放つた。

「ら、ラピッさん！ あ、あんた、わいらのこといじめ抜きたいんか！ ここに辿り着くまでどれだけの時間要したと思つとんねん！ これ、侵入対策やのうて、体力消耗させて戦意喪失させる仕掛けやないの!？」

その横で翔馬も非常に疲れている様子で立っていた。白虎の言うとおり、走っているうちに体力をかなり消耗しているのだろう。ただ、戦意喪失はしていないようで、目はかなりギラついているが。

文句を言ってくる白虎に対して、ラピスは爽やかに笑みを浮かべながら、「ごめんごめん」と言い放つた。

「まさか君ら二人がここにくるとは思つてなくて……」

「……まあ、辿り着いたからいいんですけど……」

と、白虎は視線をラピスからラズリに移した。翔馬も白虎に釣られるようにラズリの方へと視線を追いやった。

白虎はラズリを見た瞬間、一瞬驚いたようにラピスとラズリを見比べたが、すぐに冷静を取り戻して、再びラズリ一点に焦点を定めた。そして、ぽつり、と呟いた。

「……双子？」

髪の色、目の色、眼鏡の有無、この三つさえ除けば、見分けはほとんどつかないであろう。雰囲気はまったくの正反対ではあるが。

ラズリは白虎の言葉にこくり、と首を縦に振って、「そうだ」と静かに言い放った。

「僕とラピスがかつては双子だったんだ」

「……！　じ、じゃあ……！」

「こいつがラピスが言っていたラズリか……！」

ラズリは驚く二人を凝視していた。

そして翔馬は目の前にいる人物がラピスの双子の弟であることが分かった途端、こみ上げてくる憤りを胸に押さえつけながら、ラズリを睨みつけて言った。

「貴様……かつては聖闘士候補生だった身で、冥闘士に成り下がったというのか……？」

「……」

ラズリはその黙り込みで翔馬に答えた。翔馬はラズリの何も言わない様子から何かを察したのか、「そうか……」と拳を震わせながら強く握った。

「ふざけるな……お前の女神への忠誠はその程度だったというのか……」

「貴様には関係無い」

関係無い——そのラズリの一言が翔馬の何かを搔き立てた。

「——っ！ くそっ！」

翔馬は耐え切れなくなつて、その耐えきれぬ怒りをラズリにぶつけようと、その拳を前面に出した。

「翔馬！」

白虎はいけない、と思つて止めに入ろうとしたが、翔馬の敏捷性は他の青銅聖闘士が追いつけるようなものではない。気がつけば、翔馬の拳はラズリに入っていた。

「……………」

だが、拳はラズリの方へめり込んでいなかった。まさか自分の拳はラズリにとっては紙ほどの、いや、それ以下の威力だということのか。

翔馬は踏ん張りを込めて、ラズリにそのまま自分の拳をぶつけ続けた。翔馬の小宇宙がラズリの胸元へこもっていく。

「……………たかが青銅聖闘士如きが……」

ラズリはそうポツンと呟いて、翔馬をスツと見据えた。そして、翔馬の腹に一つ、大きな圧力を加えた。

「ぐっ、あっ!?!」

その瞬間、ラズリにぶつけられていた拳がパタリ、と止まって、だらしなく開き、圧力が加えられたことを抑えていた。

「……………ぐっ……………」

翔馬はよろよろと足を運びながら、腹に加えられたダメージによつて焦点が合わない目で、キツとラズリを睨みつけた。ラズリは何食わぬ顔で翔馬を見た。

白虎はよろよついている翔馬の体を支えるように、翔馬の体をその腕で包んだ。

「翔馬、大丈夫?」

「……………っ……………」

白虎はチラツとラズリを見た。

かつてはラピスと共に聖闘士を目指し、かつ、アテナに忠誠を誓っていた、いわゆる白虎たちの仲間だった者。そして、実力はラピス曰く、ラピスよりも能力の成長は速く「優秀」だったという。どうしてそれほどほどの人物が、冥闘士へと堕ち、こうして自分達と対立しているのか。白虎はどうしても読めなかつた。

だが、それを読むためには、話すだけでは絶対無理だ。先ほどのラズリの黙り込んだ

様子が、それを全て語っていた。

なら、もう仕方ない。

白虎は翔馬を地面にゆっくりと座らせ、「しばらく休んでな」と優しく言い放った。そしてラズリの方へと向かって、その場に立った。

「……あんた、ラズリさん言うたっけな？」

「……」

「何か事情があるのは分かっけど、あんたの行為は好まれたもんじゃない。それは分かっているよな？」

「……どうしようというんだ？」

「……『どうしよう？』？」

白虎はピクツと肩を動かしながら、そこだけ復唱して、フツと不敵に笑みを浮かべてみせた。ラズリは白虎のその様子に変な不審感を覚えた。

そして白虎は拳を前に突き出して、強く言い放った。

「語るんよ。この、拳で」

双児宮内に風のようなものが吹き込んできた気がした。白虎の瞳は何事にもぶれない固いもので覆われ、また、その表情も揺るぎない強い意志が凝固してきた。

ラズリはその白虎の話を聞いて、目をぼかんと見開いたが、すぐに元に戻って、白虎

を見下すように笑みを浮かべた。

「青銅聖闘士で、しかもどう見ても女にしか見えぬ顔でよく言う——……」

その瞬間、地面が一気に隆起し、大きな鈍い音を鳴らしていた。

「……！」

音の発信源を見ると、そこには拳を地面にぶつけ、大きな穴を開けている白虎の姿があった。白虎は「ふう」と息をはき、地面から拳を離して、パンパンと手についた砂を払った。

そして白虎はラズリに対して笑みを浮かべながら見つめ、言った。

「自分で言うのも難やけど、わいはあんたが思ってるほどか弱くはないよ」

「……そうか。つまり遠慮するな、と」

「うん、そういうことかな」

白虎はニコツと微笑んだ。

ラズリは白虎の言っていることを聞き、一旦息をついてから、両足を肩幅まで広げ、腕を組み、その場で構えた。どうやら、「来い」と言っているようだった。白虎はそれをラズリから読み取り、こくん、と頷くと足にどっしりと体重をかけ、拳を脇に携えた。

「だあっ！」

白虎は拳を前面に出しながら、ラズリにぶつかって行くように一直線に走って行っ

た。そして、ドンツとラズリの腹に白虎の拳が打ち込まれる。

「——っ！」

だが、先ほどの翔馬の時と同じように、白虎の拳はラズリを前にして、紙以下の威力だった。

「ぐっ、ううっ……！」

その勢いでそのままラズリに拳をめり込ませようとすると、金属よりも頑丈な硬い何かに拳をぶつけているようでそれができない。これが先ほど翔馬が拳をラズリに打ち込めなかった理由か。

白虎はラズリに直接拳を入れることが無理だと悟ると、すぐにラズリから離れた。

「どうした？ 拳で語るんじゃないのか？」

「……！」

ラズリは何もダメージを受けず、そこに悠然と立っている。それどころか余裕そうに笑みを浮かべて、白虎を見ている。

「やはり青銅聖闘士は青銅聖闘士だな。そして聖闘士としての歴もかなり浅いのではないか」

「……っ……確かにそうだけど……」

白虎は再び拳を携えた。今度は小宇宙もそこに込めていた。

「そんなの測れるほど、わいは単純やないで！」

その瞬間、白虎の拳が下から上へと天へ昇る。

「廬山、昇龍覇—— ツツツ!!!」

一匹の白い龍が、白虎からラズリの元へと一直線へ駆け抜けた。

(これでどうだ！)

ただの拳がダメならば、技でいくのみであろう。白虎は師から譲り受けたこの技に、絶対的な信用を寄せていた。

「……………ふん」

だが、ラズリは白虎の龍を片手で、しかも素手で受け止めて、軽々とその威力を跳ね返した。

「ああっ！」

白虎はそれにより向こうまで、飛ばされ、壁にぶち当たり、ずるずると力なく床に座り込んだ。

ラズリはコツコツと冥衣の踵を鳴らしながら、白虎の元まで歩き、白虎を見下すように見つめた。白虎はギンツと普段から凛々しい垂れ目を更に凛々しくさせ、ラズリを睨んだ。

ラピスはどうしても白虎のことが心配になったのか、タツと小走りで白虎とラズリの

元へと向かっていた。

「白虎！」

「待て！ 待ってやってくれ！」

と、同時に翔馬の声がラピスの耳の中に鳴り響いたのである。ラピスは翔馬の方へと顔を向けて、翔馬を見た。翔馬は壁を伝いながらもゆっくりと立ち上がり、ラピスの方へとその顔を向けた。

「翔馬……」

「ラピス……せめて、せめて、待ってやってくれないか……」

翔馬は息をハアハア切らせながらも、ラピスに対して言った。

「あいつ……あいつは……白虎は、一人で……一人でラズリと対等に向き合おうとしている」

「……！」

「いつだってそうだ。あいつは向き合う時は常に一対一で、対等に……関わろうとする。だから、お前の手など……いや、周りの手なんかいらなんだ」

「で、でも！」

ラピスは声を張り上げた。

「あいつと対等に向き合うなんて、青銅聖闘士の白虎には無理だろ！ さつきも見ただ

ろう、あの實力差を！」

「いや」

ラピスのその意見に対して、翔馬は否定から入った。

「白虎はその實力差とか、青銅聖闘士とか、そういうものに縛られない男だ。いや、嫌っているだろうな。あいつは『わいはわいの道を行く。だからあんたはあんたの道を行け』とか言ってる奴だし」

「……」

「そして、黄金聖闘士のアンタが助け舟を出したら、白虎の道理を邪魔することになる。白虎のなりの意地とプライドに傷をつげかねない」

「……」

「多分、白虎はアンタのことも引ってくるめて、あのラズリと対等に立とうとしている。だから、あまり白虎に手を貸さないでやってくれ。頼む」

「……分かった」

ラピスはコクリ、と頷いて翔馬の頼みを受け入れた。そこまで言われたら受け入れるしかない。翔馬は「ありがとう」と申し訳なきが混じってる微笑みを浮かべて言った。

「ああ、でも、いいかい？」

「……？」

翔馬はきよとん、とラピスを見つめた。ラピスは屈託のない微笑みを浮かべて言った。

「白虎が本当に危なくなったら、こんなこと言っていないで助けるよ。いいね？」

「……ああ。俺もそのつもりだ」

翔馬はコクリと頷き、ラピスも「うん」と頷いた。そして、白虎の様子を見た。

白虎は壁を手で伝いながら、全身に力を入れてその場で立っていた。ラズリによる小宇宙と視線の圧力が白虎を襲っていたが、白虎はそんなことお構いなしに、ラズリを睨みつけたままだ。ラズリは白虎の顎を持ち、「ふん」と鼻で笑った。

「見れば見るほど、男とは到底思えん顔立ちだ」

「……」

「だが……」

その瞬間、白虎の右頬に金槌が打たれたような圧力と威力が入り、白虎はそのまま左へと勢いよく倒れていった。

「……っ！」

「僕は男相手なら遠慮なく殴る。そう、お前みたいな女顔でも、だ」

「……はっ！ 上等や！」

白虎は今の威力で流れ出た鼻血と口から出ている血を、地面に垂れ流しながら、尚、爽

やかに笑って言った。

「わいは確かに女顔や。でも、だからといって変なこだわりはねえもん」

「……」

「まあ、母さんから貰った大事な顔で、わいは誇りに思ってる。でも、だからこそ顔に付いた傷つつーのは大事にせなあかんのよ」

「……どういうことだ？」

「顔の一つや二つを誇りにするなら、そこについているものも誇りにするっー簡単なお話よ」

「なるほど、な……」

普通ならコンプレックスにすることを白虎は誇りにしてしまう、ということか。なかなか面白い。

白虎は腕と足に力を入れて立ち上がったから、顔から出ている血という血を聖衣で拭った。翡翠色に輝く聖衣に、赤い色はとも映えた。

そして、目の前いる人物を見つめて、白虎は拳を握った。

圭熊と水鹿は白虎が戦っている間にも、金牛宮から双児宮へと向かっていた。

アレキが言っていた『ラズリがラピスの双子の弟で、現在は冥闘士に堕ちている』と

いうことが本当ならば、さすがのラピスも少しばかりは複雑な思いをしているだろう。そして、ラピスより優秀であったということは、白虎たちにとつてかなりの強敵になるはずだ。

圭熊と水鹿はそんなことを思いながら、階段を駆け上がっていった。

「なあ、ところで兄ちゃん」

「ん、何だ、圭熊」

その途中、圭熊は走りながら水鹿に対して質問した。

「アレキって人、兄ちゃんのお師匠さんなんだろう？ 凜猫にあずけて金牛宮に置いてきてよかったのか？」

「……ああ」

水鹿は別に構わない、といった様子でコクリと首を縦に振った。

「今はオレとの戦いで小宇宙を消費して迂闊な行動はできないだろうし、それに、あの人のことだろうから、勝手に双児宮にくるだろう」

「……そっか」

圭熊はほほ笑んで、「じゃあいいや」と水鹿に呟いた。そして心の中では、「よく師匠を理解してるなあ」とも思っていた。

そして金牛宮では、アレキのことを凜猫が介抱している形となっていた。アレキの額には凜猫が予め持っていたハンカチがタオル代わりとなり、アレキの頭を冷やしていた。もちろん、ハンカチをどう冷やしたのはアレキが水と凍気を操れることを利用していることだが。

凜猫はアレキの様子を見ながら、申し訳なさそうな顔をしていた。

「……あの、こうされて迷惑ではありませんか？」

「構わん」

アレキは申し訳なさそうな凜猫に対して、あつきりとした顔できっぱり言い放ち、続けた。

「丁度休みたいと思っていたところだ。三十路の体に鞭を打っているようなものだったからな」

「……そう、ですか」

だが、凜猫の顔が晴れることがなかった。やはり不安なのであろう。こんなことをしてもよいのか、そもそも冥闘士が聖闘士に介抱され、後から上の方にお叱りを受けるのではないか、とか。

アレキは「ふう」とため息をついた。

「水鹿に背負われてここにやってきた時点で察してくれ。余計な心配はご無用だ」

「……はこ」

ここで凜猫の顔が何となくだが察したようなものになり、不安な様子は消えた気がする。アレキは「よし」と僅かに首を縦に振った。

(……にしても)

アレキはこつそりとばれてしまわないように凜猫のことをジツと見据えていた。

この凜猫からは普通の人間ならば感じる事ができる小宇宙が、全く感じられない。しかも、それだけではなく、何か人工物なような、作り物で作られたような小宇宙の雰囲気や漂わせていた。誰かの手によって、中に小宇宙が込められた、といつても過言ではないぐらいのものだ。だとしたら、何故凜猫は小宇宙を燃やすことができるのであろうか。

それに関しては、凜猫の首と聖衣の隙間から見えたものが、全てを悟っていた。

「……っー」

それが見えた瞬間、アレキの心臓が酷く高鳴り、荒ぶった。

凜猫の首にぶら下がっていたものは、キラリと銀に輝く星型と一つの線でできた、高価なネックレスだった。そして、アレキはこのネックレスが意味することを知っていたのである。

(そんな……まさか……！……！)

アレキの頭の中で、嫌な予感がぐるぐると駆け巡る。今すぐ聖域全体、いや、教皇や女神だけでも伝えたいことであつたが、自分は今の立場上、それを許されることはない。誰か、自分以外に気付いてくれる者はいないのだろうか。もしいたのならば、女神か教皇にでも伝えてほしかった。

——『冥王、ここにあり』——と——。

「ぐっ、はあっ！」

白虎は先ほどからラズリに拳を入れようとして、ラズリにそれを全て跳ね返されていった。白虎がラズリに拳を入れようとすると、ラズリはそれを受け止めて、そのまま吹き飛ばしてしまうのだ。しかも、それだけでなく、白虎の技も効かないのである。白虎がラズリに技を放つと、ラズリはそれを片手で防ぎ、その威力を白虎に打ち返していた。

まさしく、なす術がない、といったところだ。

だが、白虎はそれでもしつこいぐらいにラズリに対して攻撃を繰り返していた。自分の身や聖衣がボロボロになろうがなんだろうが、それに構わず、ラズリにぶつかつていつていた。今の自分にできることといえば、それしかないのだから。

ラズリは何という根性としつこさであろうと思いつながら、そんな白虎の相手をしていく。普通ならばこんなボロボロになれば、すぐに諦めがつくというものだ。だが、白

虎は決して挫折もせず、諦めることもない。ただ、中にあるであろう心意気だけで、ここまでしつこくラズリの手をわずらわせていた。

——青銅聖闘士に、こんな根性があるとは——……。

確かに白虎は根性だけならば、言っていたとおり、青銅聖闘士という枠に囚われないのかもしれない。ラズリはそのことを少々面白がっていた。

だが、その根性もいつまで続くかどうか。

ラズリはそろそろ受け身になるだけでなく、自ら行動を起こそうかとも思い始めていた。で、なければ、この戦いの決着がつかず、白虎が楽になれぬというものだ。これはラズリなりの慈悲である。

白虎の方は、いい加減疲れてきていたのか、はあはあ、と激しく肩を上下させて息を切らしていた。ラズリはそんな白虎を見て、「丁度よいタイミングだ」とボソリと呟いて、右手の人差し指を一本立てた。白虎はそれが不審に見えたのか、「んっ」と声を上げて、訝しげにそれを見つめていた。

「アンタ、何するつもりなんや……」

「……フッ」

白虎が問い、ラズリがそれに対して鼻からの笑みで答え途端、ラズリの人差し指は白虎の方に向かい、そこから鋭い糸のような小宇宙を放っていた。

「な……なに……っ！」

白虎はハッと目を見開き、自分に起こった異変に気がついていた。

——耳が、音が断絶されたような世界のように何も聞こえないのである。

「——っ！」

白虎は非常に焦った。歌い手にとっては耳とは非常に重要で、自分の音や周りの音、そして音程を正しく聞き取るための役割を果たすのだ。このままでは、白虎の一番の武器であろう大声が出せない。

そして、周りの臭いが全くわからなくなっていた。先ほどまで双児宮の埃立った臭いを感じ取れていたのに、今は全く感じ取れないのである。

「……い！」

白虎は何かを感じ取れなくなっただけで、世界が恐ろしいものになるとは思っていなかった。白虎はその場で力なく、その場にしゃがみ込んだ。

「……白虎？」

遠目ながらも白虎のその異変に気が付いた翔馬は、白虎の名前を声に上げて心配そうな顔をしていた。

一方の白虎は手をつき、地面を見ながら、目を見開いて、絶望というものを味わい感じていた。見えるものが全て恐ろしく思えてくるのだ。特にそれは、嗅覚の力がなく

なったことよりも、聴覚の力が失ったことによるものだった。

(……………)

——聴覚の力が失ったぐらいで、何を怯えているのだろうか、自分は。自分はこのことでは挫けないぐらいの根性を持っているはずだ。

白虎は心の中で自分にそう言い聞かせながら、ゆっくりと立ち上がった。音が聞こえなくなったぐらいで何だ。かつての音楽の巨匠であるルートヴィヒ・ヴァン・ベートヴェンは難聴の中で作曲した、というではないか。

——だから、打ちひしがれるのはまだ早い。

白虎は前を見て、今、自分の目の前にいる敵を見つめた。再びラズリは立ち上がってきた白虎を見て、こう言い放った。

「折角五感のうちの二つを剥奪したというのに……まだ倒れないと言うのか」

「……」

「ああ。今のお前には僕の声が聞こえるはずもなかったか。すまないな」

「……………」

ラズリの言うとおり、今の白虎にはラズリの声すら聞こえてこない。だが、表情から、自分はバカにされているのだろう、と感じ取ると余計に苛立ってくるのである。

ラズリは白虎の元まで歩み寄ると、再び人差し指を立てて、白虎の額へとそれを突き

立てた。

「こうなったら、五感全てを剥奪させるぞ」

「……」

白虎は腕を組み、両足を肩幅まで広げて、ゆっくりと目を閉じた。まるで、自分これから降り注ぐ運命を受け入れる態勢とも取れるものだった。

「ふっ、五感を奪われたぐらいでは動じないと言っているようだが……実際はどうかかな？」

「……」

「——残り三感、剥奪！」

その時、白虎の体からすべての感覚が途切れた。

22 : 「双子決着」

白羊宮では、豎琴の切なく儂い、だがどこか凜々しい音色が流れていた。その音色に冥闘士の雑兵たちは次々と倒れ、眠っていき、最終的にはここにいる雑兵たち全員がその場で眠っているという結果になった。

無論、この豎琴の奏者は琴座の唄狼であった。

「……お前は……」

玄夢はその唄狼の姿を見て、思わず声を上げた。だが、唄狼は玄夢など知らぬ、といった様子で、そのまま白羊宮を通り過ぎようとしていた。しかし、玄夢はそんな唄狼を引きとめようと、呼び止めていた。

「ま、待ってー！」

玄夢に呼び止められて、ピタツと唄狼の足が止まった。唄狼はくるつと体と顔を玄夢の方へと向けて、玄夢をその切れ目で見つめた。そして、ボソリと呟いた。

「……何の用だ」

玄夢は唄狼に問われて、「いや、その……」と言葉を詰まらせ、何故自分は唄狼を引き留めたのだろうか悩んでいた。唄狼は言葉を詰まらせている玄夢に対して、軽く息をは

いて、再び向こう側を振り返り、そのままスタスタと素早く去って行ってしまった。

「……」

(いや、まあ……)

やはり、気にしても仕方がないか。

玄夢はまだまだこれから来るかもしれない冥闘士の雑兵たちに備えて、再び白羊宮の入り口まで戻って行った。

「白虎オオオオ—— ツツツツ!!!」

翔馬は白虎の名前を強く打ち放ちながら、白虎の元まで走って行き、白虎のその体をゆっくりと起こした。そして揺さぶった。

「白虎！ 白虎ッ！ しっかりしろっ！」

だが、白虎はその翔馬の呼びかけと揺さぶりにも答えなかった。

翔馬は何しても白虎が応答しないことが分かると、唇を噛みながら白虎を壁際にゆっくりと置いて、寝かせてやった。そして、視線をラズリの方へと向けて、ラズリに向かって歩いていった。

「貴様……白虎に何をした」

「……」

「あの人差し指一本で、何をしたと聞いているんだ！」

翔馬は頭一個分は違うであろうラズリの胸ぐらを激しく、乱暴につかんだ。

ラズリはスツと翔馬を見据えて、言い放った。

「五感を剥奪した」

「……っ！」

「そう。五感を剥奪された者は生ける屍となるのみ。何もできないのだからな」

ラズリはそう言うと、自分の胸ぐらをつかんでいる翔馬の腕をつかみ離し、そのまま翔馬を遠く、後ろの方へと強く投げつけた。

「ぐあっ！」

そのまま翔馬は勢いよく壁に衝突し、ずるずるとだらしなく床に落ちていった。

ラズリは床に落ちた翔馬の元まで歩き、翔馬の体を強く踏みつけた。

「うっ……！」

「友人が倒され、焦る気持ちも分からなくもない。だが、冷静さに欠けてしまうのもよくない」

「あつ、うっ……！」

ラズリはぐりぐり、と地面にめり込ませるぐらいの強さで翔馬を踏みつけていた。翔馬はその痛みに悶絶し、声にならない声を悲鳴として上げていた。

「ここまでになるなど、そんなに大切な友人か？」

「つぐう……う……そ、そうさ……！」

翔馬は踏みつけられる痛みにも耐えながら、必死に答えた。

「他人に騙されたバカな俺の道を切り開いてくれたっ……っ……大切なっ、友人だっ……！」

翔馬はあの時の白虎の差し伸べてくれた手を思い出しながら、ラズリにそう答えた。

あの時、白虎が自分に手を差し伸べてくれなければ、自分はあるままクオーツに従うまま、ここにはいなかった。再三再四、何度も言うが、翔馬は白虎に対して感謝の念で心がいっぱいだった。

ラズリは何を思ったのか、目を見開き、翔馬を見たが、すぐにいつもの厳しい顔つきに戻り、翔馬の体を強く踏み続けた。

「……バカバカしい。そんなに大事な友人なら、何故先ほど助けようとしなかったんだ」
「……しんっ、じてる……から……」

「むっ？」

ラズリは翔馬の小宇宙がなんとなくだが、膨張し始めていることに気付いた。その膨張が大きくなっていくにつれて、自分の足がどんどん上へと上がっていつていく。どうやら、翔馬の体がだんだんと起き上がっているらしい。

そして、翔馬は一言一文、強く言い放った。

「信じてるから！ 白虎を！」

その途端、膨張していた翔馬の小宇宙が、一気に爆発して、ラズリを振り払うかのような勢いでその場に立ち上がった。

ラズリは少しばかり足をぐらつかせ、揺らしながらも、何とか地面に踏み込み、態勢を整えた。その間にも、翔馬は拳を携えて、小宇宙を燃やし続けながら、先ほどの言葉の続きを言い放った。

「助けることだけが友人にすることじゃない！ 俺は、本当に信頼しているのなら、相手の道理を信じて、見守ることもできると思っている！」

「ふっ、馬鹿げたことを！ 本当に大切に思っているなら、助けに行くものだろう！」
その言葉を聞いた瞬間、翔馬の声が一気に重く、冷たいものになった。

「だからといって——助けるのは相手を認めていない、ということになるのではないか？」

「……………」

「少なくともあいつはそう言うさ。助けに行くのは相手の力に不安を覚え、信用していない証拠だって。違うか？」

「……………」

「あ、そうそう。ついでに。あいつは、生きてるぞ」
「なっ……」

ラズリが声を上げた束の間、後方から一気に燃え上がる小宇宙を感じ取ることができず。ラズリはバツと後ろを振り返り、その小宇宙の根源を突き止め、絶句した。

——白虎が、そこに、立っていた。

五感を失い、なお、そこに足を踏みしめて、立ち上がっていた。息は途切れ途切れで、ほとんど肩で息をしているようなものだった。

「お前……そんなボロボロになっても、尚……」

「……」

白虎はニコツとほほ笑み、小宇宙でラズリと翔馬に語りかけた。

（こんなになつたわいを信じてくれるバカが、この場におるんや。どんな状態だろうがなんだろうが、立ち上がらずにはいられへん）

「白虎……」

（それにな、老師から聞いたんよ。五感を失った時には極限まで小宇宙を高めれば——
どうしてもなくなるってな）

その瞬間、ラズリは白虎の小宇宙がいつもとは違い、何か特別な煌めきを持っていることに気が付いた。それは黄金聖闘士が常時しているといわれている小宇宙の、真髄。

「まさか——!」

「セブンセンスズ……!」

そう、白虎は五感を失ったことにより、小宇宙の真髄、セブンセンスズに目覚めたのだ。こうしてボロボロになっても立ち上がれることができたのは、小宇宙を極限まで高め、そのセブンセンスズに目覚めたおかげであろう。

白虎はほほ笑みながら、ラズリの目の前まで歩いていき、そして、静かに、ラズリと対峙した。

「……僕は少しばかり、お前のことを見誤っていたらしいな」

「……」

「五感を失えば黙るだろうとは思っていたが——そういうわけにもいかなかった」

「——いや」

セブンセンスズによって感覚が戻っているのか、白虎は直接声にして、それを出した。「もし、わいが根性無しだったら、あのまま黙っていたかもしれん。こうしてセブンセンスズに目覚めることもなかった」

「なるほど……つまり、挫折を知らないのか、お前は」

「ふふっ……ははっ……あはははっ!」

白虎は突然大声で叫ぶように笑い始めた。ラズリは不審そうにその不自然な白虎の

様子を見つめていた。そして白虎は声音を一気に変えて、続けた。

「挫折なんて、とつくの昔に一生分を終えとる！ 親目の前で殺されて、それだけでもう一生分の挫折を費やした！ だから、例え今挫折しても、もう挫折した気にならん！」

「……ほう」

なかなか面白いものだ、とラズリは声を上げた。

白虎は挫折を知らないのではなく、本物の挫折を知っているからこそ、簡単に挫折などしないのだ。だからこうしてここに立っていられる。

その心意気もどこまで続くのか、ラズリは何となく興味があつたが、このままだと白虎の心意気は戦いの最後まで貫かれるだろう。

例え、どんな結果であろうとも。

(最近の青銅聖闘士は変わっているな……)

普通の青銅聖闘士ならば、白虎の言うとおり、ここまで来る前に不可能を悟り、諦めているだろう。黄金聖闘士と青銅聖闘士の実力では、差が大きすぎることをその身を持って知るからだ。

しかし、白虎はまるつきりその正反対だった。

青銅聖闘士という枠に囚われずに、自分に立ち向かっていく、勇猛果敢な姿。

(……まるで、怖いもの知らずだった過去の自分みたいだ)

なんとなくだが、聖闘士を目指していた頃の自分と重ねてしまう。何事にも恐れず、挑戦し、立ち向かう姿。

——だが、今はそんなことを思っている暇はない。

ラズリは手を交差させながら、上に掲げて、その上に自分の小宇宙と自分の小宇宙を集中させ、貯めはじめた。

「あれは……！」

「……！」

「っ！」

白虎と翔馬にとっては、もう何度も見てる技、ラピスに至っては自分の技である。

ラズリはスツと三人の方を見据えた。黄金聖闘士かつ、この技を使えるラピスはともかく、翔馬と白虎はこの一撃で倒れるであろう。この技は、双子座の技の中でも、最強と謳われているほどのものだから。

「見よ——銀河の星々が砕ける様を——……！」

威力は星が砕けるほどの威力と言われる。

その技の名は——……。

「ギャラクシアン、エクスペロージョン」

その瞬間、双児宮内が技の威力による凄まじい閃光に包まれた。

閃光は双児宮内のありとあらゆるものを包みこみ、壊していった。地面は揺れ、隆起し、そして、天井すら撃ち抜いていた。

その技の威力は双児宮の外にいた聖闘士たちにもわかるほど、すさまじいものであった。双児宮の周りは技の威力に巻き込まれているのか、地面が揺れていた。

無論、双児宮を目前とした水鹿と圭熊、そして金牛宮にいた凜猫とアレキ、更には白羊宮を出た唄狼と、その白羊宮内にいる玄夢——最低でもこの範囲にいた者は、このギヤラクシアンエクスプロージョンの威力をその身で感じていた。

特に水鹿と圭熊は双児宮の目の前にいたゆえ、その威力を感じ取っていた。

同時に、白虎たちの小宇宙が、この技と同時になくなったことも。

圭熊はそれを感じ取った途端、すぐに水鹿の方を振り向き、いても立つてもいられない形相で、水鹿に話しかけた。

「……っ！ 兄ちゃん！」

「……！」

水鹿はまさか、と思いながら、目の前にある双児宮を見上げた。

あの二人に限って、そんなことはありえない。ありえない、と思いたいのだが——どうしても拭いきれぬ何かの水鹿の中を襲った。

圭熊はその水鹿の様子を見てから、足に力を込め、一步目の前に出て、言った。

「兄ちゃん。とりあえず、双児宮の中に入ろうぜ。実際に中がどうなってるかは外から見えねーし、白虎たちがいたらいたらで加勢に入らなきゃならねーし」

「圭熊……」

「なっ！ 行こうぜ！」

圭熊はいつものような、年相応の明るい少年そのものの笑みをその顔に浮かべた。

そして、水鹿はそんな圭熊を目の前にして、思っていた。圭熊のことは普通にただの少年聖闘士だと思っていた。しかし、ここにきて、その冷静さと性格の安定っぷりに妙な安心感を覚えていた。同時に、自分の方が年上なのに、情けない、とも。

水鹿は「ふう」と息をはき、双児宮の入り口を見つめた。

「そうだな。どちらにせよ、あいつらのためにも行つてやらんとな」

「おうよー！」

その通りだ、と圭熊はニツと歯を見せて笑みを浮かべ、水鹿もそれに釣られて口元を軽くながらも緩めていた。

そうして二人は双児宮内に足を踏み入れた。

ぱらぱら、と軽い音を立てながら、天井の欠片や壁の欠片が上から下に落下していた。

ラズリの周りは技によって起こった砂煙で薄茶色に染まり、何も見えぬ状態だった。だが、ラズリは分かっていた。

ここは黄金聖闘士のラピスだけが生き残り、白虎と翔馬といった二人の青銅聖闘士はここで倒れ、命を落とした、と。だから、ラズリは焦る必要はなかった。あの青銅聖闘士二人がいなくなれば、あとはラピスの相手をし、前へ進むだけなのだから。

そうして、ラズリを包んで砂煙がだんだんとその場から薄くなり、消えていく。

——残念だったな、青銅聖闘士。少し寂しいが、ここでお別れだ。

ラズリがそう思っている間にも、ぽっかりと空いた天井から、風が吹き抜け、砂煙をもっていった。

そんな砂煙が晴れた視界で、ラズリが見たものは、自分と思っていることとは全く違うものだった。

「なっ……」

ラズリの目に映っていたものは、ボロボロになりながらも、このギャラクシアンエクスプロージョンに耐え抜き、青銅聖闘士二人を庇うように立っていたラピスだった。

「——ラピスさんっ!」

「双子座っ!」

「はーっ、はーっ……」

ラピスは心配してくる白虎と翔馬を背に、息を荒げ、ボロボロながらも、至つて平然とした様子で息を整えながら、まっすぐ起立し直した。

ラズリは目を細めてラピスのその姿を見ていた。

「兄さん……何故……」

なぜ、その二人を庇つたのだ。わざわざ自分の命を削るような真似をしてまで、守りたいと思えるのだろうか。

ラピスはその問いに答えるようにラズリに言った。

「まさか、俺がこの二人を放つておいて、一人だけのうのうとじつとしてるとでも思った？」

「……………」

「ラズリはいつもそこらへん甘いんだよね。目の前ばかり見て、周りのことには目を向けない。言わば隙だらけてやつ」

「……………」

「確かに実力や素質だけならラズリの方が上だった。でも、いつもそこらへん甘かった。周りをまったく見てなかった。目の前だけ見つめてた」

ラピスはそう言いながら、己の両腕を掲げ、先ほどのラズリのようにそれを交差させた。

「二十数年経ってそれも変わっていると少し楽しみにしてたけど、そんなことはなかったね」

その瞬間、双児宮全体にラピスの小宇宙が充満し始めた。その充満の仕方はいつものラピスの小宇宙とはわけが違った。ラピスは自分の背中にいる白虎と翔馬にこう言った。

「二人とも。俺にくつついててくれないかな」

「えっ……」

「二人とも軽いし、離れてたら吹き飛ばされると思うから」

ラピスはきよとん、としている二人に対して、微笑みながらそう答えた。向けられた二人は、少し顔を見合わせてから、そっとラピスの腰にひつついた。ラピスはニコツと微笑み、「うん」と頷いて、ラズリの方を見た。

ラズリは、ラピスの小宇宙の充満の仕方が、通常の黄金聖闘士とは、桁外れなことを感じ取っていた。

——このままでは、いけない。やられてしまう。

だが、小宇宙に圧倒され、圧力がかかっているのか、ラズリの体は思うように動かなかった。

「……………っ！」

自分の体が動かないのを確認すると、ラズリは目の前にいる自分の兄に視線を移した。

暖かくも、強く輝く小宇宙がラピスを包んでいた。

「見せてあげるよ。星々が砕け散るだけでなく——銀河そのものが砕け散る様を……」

「……なっ……」

ラズリが戸惑っている間にも、ラピスの怒声とも取れる叫びが、双児宮内に鳴り響いた。

「ギャラクシアンツツ、エクスプロージョンツツ!!」

その瞬間、すさまじい破壊音と共に双児宮内が輝かしいまでに光り、地面が一気に揺れ動き、隆起した。それは先ほどのラズリの放ったギャラクシアンエクスプロージョンなど、比にならぬぐらいだ。

そして、その威力によって生み出された爆風が双児宮内で鳴り吹いた。ラピスに言われた通りしがみついている二人は足を踏ん張らせ、ラピスにしがみつくだけでも精一杯だった。ここでラピスから離れたら一気に吹き飛ばされてしまう。

更はその目の前で、ラズリはその技を直に受けていた。

「ぐあああああ——ツツツツ!!」

ラピスが平気だったのに対し、ラズリの方は次々と冥衣が崩れ、すぐにボロボロにな

り、更には全身を打つほどの強い打撃を受けた。

「あつ、ぐうつ……！」

（何故……何故だ……！）

なぜ、自分と兄とでここまで技の威力が違い、傷の負い方が違うのだ。向こうは黄金聖衣だからか。いや、そうではない。

——小宇宙と、気持ちの大きさの問題だ。

ラズリには守りたいもの、守らなければならぬものがあつた。だから、自分の技をあそこまで平気でいられたのだ。

そして、自分の技の威力——ラピスと同じであろうと思つていたものが、まったく違つていた。まだまだ、自分は兄には到底及ばなかつた。

確かに昔から自分の方が優秀だったが、それ以上に——ラピスは落ち着いていて、こういう場面に強かつた。それに対して自分はこういう場面には弱かつた。いつも敵ばかりに目を向けて、周りを見ようとせず。

そうしていつも勝ちを掴んでいたのは兄のラピスだった。

ラピスは常に周りに目を向け、例えばどんなに小さい花だろうが、それを避けて戦つていた。だが、比べて自分はどうか。周りに目をもくれないで、ただ、がむしやりに前へ突き進んでいただけじゃないか。独りよがりな、道を、ひたすら。

今回の戦いは、それらが前面に出た結果だろう。優しさは人を強くするというが、ラピスを見る限り、本当なのだろう。

そして——白虎という青銅聖闘士。あの白虎の小宇宙、どことなくラピスに似ている。

それは優しく、暖かな小宇宙。

(なるほどな……)

それが分かった瞬間、ラズリの苦痛に染まっていた顔が一瞬だけ柔らかくなり、すべてを納得した様子だった。

ラズリが倒れていく一方で、ラピスは攻撃を止めて、「はあはあ」と息を立てて、自分に抱きついている二人の頭をぼん、と撫でた。

「二人とも。大丈夫だよ。ピークは過ぎたから」

そう言われて二人は目をそっと開いて、目の前を見た。

砂煙がだんだんと晴れ、そこにはラズリが一人でうつ伏せになって倒れていた。

ラピスは歩こうとしているのを察すると、翔馬と白虎はラピスから離れ、動ける状態にした。ラピスは聖衣のヒール部分を鳴らして歩き、ラズリの元へ膝を落とすとした。

「ラピスさん……」

「……」

ラピスは無表情で、うつ伏せのラズリの体をそつ、と起こし、それからラズリの膝部分も持ち、力一杯にゆつくりと、仰向けにさせた。

ラズリの顔は戦いに汚れながらも綺麗なものだった。白虎と翔馬はラズリの顔を見つつ、ラピスも見た。

「ラピスさん……」

「……ああ……ごめんね、二人とも」

ラピスは申し訳なさげに二人に微笑み、ラズリの両手をその腹に置いた。

「双子同士の戦いに、二人を巻き込ませちゃって」

「いえ……特にわいは自分から向かってたし……。むしろ謝らんといかんのはわいの方で……」

「ううん、いいんだよ。翔馬もそんな辛気臭い顔しなくてもいいよ」

「……」

翔馬は、はつとなつて、目を見開くも、再び思いつめた表情になり、顔を下に向けた。ラピスは眉を下げながら少しほほ笑み、話を続けた。

「本当はさ、少し躊躇ってたんだよ」

「……」

「双子の弟としてのラズリと冥闘士としてのラズリ、これら二つは切り離して考えな

「きやって思ってる中で、どうしても躊躇ってた」

「……ラピスさん……」

「でも、君たちを見ながら何か吹っ切れたんだと思う。自分のすべきこと、優先すべきこととはどっちかな、ってね」

「……」

「だから、ありがとうね、二人とも。二人が来なかつたら、グダグダしたままラズリと戦ってたかもしれない」

ラピスはそう言いながら、すつ、とラズリの体を両手で持ち上げて、その場に立った。そして、スタスタと金牛宮に繋がる階段の方へと足を進めた。

白虎は思わず腕を伸ばして引き止めた。

「あの、ラピスさん！」

「ん？ 何だい？」

「その……ラズリさんの……」

「ああ……とりあえず聖域にある安置所に置こうかと思うよ」

「安置所？」

そんなところがあつたのか、と白虎は目を丸くした。ラピスは「ははっ」と爽やかに笑みを浮かべながら、説明をした。

「あそこは外部からの侵入者には分からないところにあるからね。だから、遺体を保存する分には問題ないと思うんだ」

「……そう、ですか……」

白虎は二人を見てて、どうしても悲しくなってきた。こんな形で再会など、望まれたことではないだろうに。しかも、こんなあつさりとした終わり方——本当にこれで良いのだろうか。

白虎はどうしても耐えきれなくなつて、ラピスに向かって発した。

「あのっ！ ラピスさん！」

「！」

ラピスはいきなり大きな声を出した白虎の方へと顔を向けた。白虎の目からは数滴の涙がポロポロと滴り落ちていた。それに驚いたラピスは、心配と何事なのだ、という感情に満ちた声で白虎に返した。

「白虎！ どっ、どうしたの！ ど、どこか痛むのかい!？」

いきなり目の前で少年が泣き出すと、それはラピスですら戸惑うだろう。白虎は「そうじゃなくて！」と返して、言った。

「その……ラピスさんは悲しくないんですか!？」

「なっ、えっ……」

戸惑いを隠せないラピスを尻目にするかのように、白虎は続けた。

「わい、悲しいです！ 二人とも、特に仲が悪いわけでもなかったし、本当は喜ぶべき再会がこんな形であるなんて……！」

「白虎……！」

「本当は話したいこと、言いたいこと、たくさんあったんじゃないかって！ ラピスさんもラズリさんも、久々に出会って、お互いを見て、いろいろ言いたこと、あったはずだつて！」

「……！」

「わいは嫌です！ こんな……こんな……！」

「……白虎」

ラピスは軽く口元を緩めながら、白虎の元へと歩いて行った。ラピスはニコツとほほ笑みながら、白虎に返した。

「心配させちゃってごめんね。俺は大丈夫だから、泣かないで」

「うう……」

白虎はぐすぐす言いながら、流れてくる涙や鼻水を腕で拭いた。ラピスは申し訳なさげにほほ笑みながら、アナザーデイメンションの道を自分の目の前に作った。

「俺は行くよ。二人は……そうだね、この先、連続して無人宮しかないから、白羊宮にで

も戻つて玄夢の手伝いしてて。何かあつたら俺もすぐ動くから」

「はい……」

「じゃ、行つてくるね。道中、気をつけて」

「はい……」

ラピスは手を振る代わりに、二人に向かつて会釈をすると、アナザーデイメンションの中へ飛び込んでいった。

二人はそれを見送ると、お互いの顔を見合わせて、アイコンタクトをした。そして、金牛宮へと続く階段の方へと足を進めた。

——その瞬間。

「白虎ーッ！ 翔馬ーッ！」

前方からやってくる二つの影。

——圭熊と水鹿だった。

「圭熊に水鹿！」

白虎は嬉々とした声で二人の名前を声に上げて、駆け足で二人の元へいった。

圭熊と水鹿はかなり安心した表情で白虎と翔馬の様子を見た。双方それなりに戦つた形跡はあるものの、実際は無事そのものだ。

圭熊は胸を撫で下ろして二人に言った。

「ここに向かう途中で、突然お前らの小宇宙が消えたから何事かと思ったけど、無事なんだな！」

「うん、ばりばり！」

「最初はどうなることかと思ったけど……」

双児宮の中でわいわい、と談笑が始まる。束の間の休息だった。

「二人引き分け、二人死亡、ねえ……」

アトモスはハーデス城から聖域の様子を映像で見ながらぼそりと呟いた。そして非常にながかりした様子で、椅子に寄りかかってこう呟いた。

「あーあ。だらしないな。でも他の奴らは役に立たないしな」

現在の冥王軍における、黄金聖闘士並みに強い者といえば、自分たに三巨頭ぐらいしかない。ハーデスが完全復活さえすれば、さらにこちら側のバリエーションも増えるであろうが。

アトモスがぶつくさ言っていると、その後ろに一つの人影の姿が立っていた。アトモスはきよとん、としながら後ろを振り向くと、そこには天貴星・グリフォンのフィードの姿があった。

「あつ、フィーちゃん。戻ってきてたんだ」

「ああ。ただいま」

フィーロはアトモスを自分の弟であるかのように、その頭を撫でていた。アトモスは「あー」と声を伸ばしながら、フィーロの手をどけた。

「ボク、もう十四とか十五だし、そんな年じゃないって」

「ん、そうか。それは失礼したな」

フィーロはクスクス笑みを浮かべながら、アトモスの頭から手を引いた。アトモスは頬を膨らまして、呆れたように溜息をついた。そしてフィーロに聞いた。

「で、フィーちゃん。聖域にいい女の子はいたの？」

「…………いや」

フィーロは首を横に振って、部屋の窓に手を当てながら外を見つめた。

「女の子はいなかった、が…………」

「…………？」

アトモスはフィーロのその言い方が妙に引っかけかき、思わずフィーロの方に視線を向けた。フィーロはニヤリと口元を怪しく光らせ、それを窓に映しながら、こう続けた。

「威勢のいい、下品な猛虎は見つけた」

23 : 「女神始動」

「あつ、凜猫と……アレキさん？」

白虎は金牛宮に着き、初めて発した声がそれだった。目の前にはアレキを介抱している凜猫の姿があった。

凜猫は白虎の姿を見るなり、アレキを介抱したまま、ペこり、とお辞儀をし、会釈を交わした。

アレキは凜猫の会釈が終わり、白虎たちの姿を見ると、ゆっくりと凜猫の元から起き上がり、そのまま立ち上がった。凜猫はそれを見るなり、手を伸ばしてアレキを引き止めた。

「あ、その……あまり無理しない方が……」

「……もう具合は大分ましにはなった。余計は心配はいらない」

「は、はあ……」

凜猫は腑に落ちない様子で、平気だと言っているアレキを見つめていた。確かに平気そうだが、あの短時間でそこまで良くなるものだろうか。それとも黄金聖闘士となれば話は違うのか。何がともあれ、凜猫がアレキを心配していたのは確かだった。

アレキは白虎たち四人の前に立ち、すつと目を細め、聞いた。

「君たち、これから白羊宮へ戻るのかい？」

「ええ、まあ……」

「じゃなかつたらどうすんだよ」

「だな……」

アレキはふう、と息をつき、四人に背を向けた。そして、ちらりと凜猫の方を見つめた。

——ここは言うべきか、言わないべきか。

遅かれ早かれ分かることだろうから、今のうちに言っても良さそうなものだが、どうやらこの五人、聖域の中ではわりと仲は良い方に見受けられる。今でこそ大事な時だというのに、このことを言つて下手に刺激してしまつたら……。

アレキは目を閉じて、コクリと頷き、決意した。

(ここですべきことではない)

——と。

先ほども言つたとおり、遅かれ早かれ気付くことであり、分かること。ならば、今、わざわざ言わなくとも良いではないか。

それに。

（人間ではない、というような小宇宙を発している……）

見た目は全くもってただの少年にしか見えないが、実際はそうでない、といったものだった。一体この少年、その胸に何を隠し、何を秘密にしているのか。

アレキは俄然気になったが、聞いたところで、どうにも答えてくれそうにない。なら、これから正体を探っていけばよい。

（まあ、今は良い、か……）

逆にこのメンバーなら、言ったところでハーデスを倒すことに決意を揺らがせるだけでなく、無理矢理にでも冥王軍に突進し、突撃しそうだ。なら、言わない方が得策だろう。

そうこうアレキが考えているのを、白虎たちは頭にクエスチョンマークを浮かべて、「どうしたんだ」と、見つめていた。

同時期に、教皇の間に祭壇座の海鳥が急いで走り込んできていた。

「はーっ、はーっ……」

その顔には汗を垂らし、息の仕方は相当上がっており、ほとんど肩で息をしているようなものだった。海鳥はしまっていた眼鏡を取り出すと、教皇の間にあつた机にそれを置いて、キョロキョロと辺りを見渡した。すると、向こうの方から黒い法衣を着た人物・

教皇が海鳥の気配を察したのか、パタパタとこちらに駆け寄ってきたのである。

海鳥は息を整えながら、こちらに駆け寄ってくる教皇の元へとその足を進めた。そして教皇は海鳥の体を支えるように、その肩を後ろから両手で持った。

「海鳥、大丈夫か？」

「……ええ、何とか……久々の戦闘で戸惑ってしまっただけ……」

「そうか……」

教皇はホツとしたようにその顔に笑みを浮かべて、海鳥をそこにあつた椅子に座らせた。

海鳥は椅子に座ると、背もたれに寄りかかり、一旦力を抜いているようだった。教皇はその横で海鳥に話しかけていた。

「海鳥。お前が戦闘に出るほどだったのか、冥闘士は」

「ええ……強さはそれほどではありませんが、雑兵の数が尋常じゃないです」

「なるほど、数の問題か……」

教皇は顎に手をあてて、ふむ、と頷いた。

「しばらくは全聖闘士たちに前線に出てもらわないと、間に合わないかもしれませんね。もちろん、僕も出ないと……」

海鳥は目を細め、遠い目で天井を見上げた。教皇はその海鳥の言葉と様子に、思わず

声を上げた。

「……海鳥よ」

「はい？」

「お節介なのは分かっているが……これを機に裏方だけでなく、白虎たちのように表で活動してもいいのではないか？」

「……」

その教皇の言葉を聞いた途端、海鳥の肩がぴくつと跳ね上がった。

海鳥は「教皇補佐」という役割な以上、普段は表立った仕事や任務をこなしているわけではない。あつたとしても、よほど人手が足りない時。海鳥はそのことに特に不満を持っているわけでもないのだが。

教皇は更に続けた。

「きつと、その方が元のお前にも合っているだろう。そもそも、裏方につく祭壇座になる予定だって元はなかったのだからな」

「……でも……」

「本来なら、今の獅子座の黄金聖闘士——お前のはずだぞ、海鳥」

「……っ」

海鳥の心臓がドキリ、と跳ね上がった。そして、茶色に透き通る前髪を少しだけつま

んで、それを見上げるように凝視した。

——本来なら、僕が獅子座……か……。

そういえば、昔は獅子座の黄金聖闘士になりたい一心で鍛錬を重ねていた記憶がある。それは祭壇座の聖闘士になっても、相変わらずだった。だが、今はこの祭壇座という役職が身に染みている。だから、今更黄金聖闘士がどうだとか、獅子座がどうだとか言われてもピンとこなかった。

「元々アンバーもお前になら、と言っていたではないか」

「……」

海鳥は目を伏せた。

確かに、数年ほど前にアンバーと手合わせした時に、そのようなことを言われた覚えがあった。「実力と拳の筋そのものは申し分ない。だから、獅子座を誕生日に持つお前が私の後を継いでくれないか」と。もちろん、海鳥も「その時が来れば」と思つて承諾していた。

だが、今はこうして祭壇座の役割を務めている。ゆえに、裏方というその姿勢を崩すわけにもいかぬだろう。

海鳥は立ち上がった、十二宮がある方角へと歩みを進めた。

「海鳥？」

「……死ぬまで祭壇座を務めなければ、金髪だった髪の毛をこうして染めた意味がありませんから」

「そうか……」

なら仕方ない、と教皇は申し訳なさげにほほ笑んだ。海鳥の方も何か心につつかえて、それが取れなかった。

(これで、いいんだ……)

海鳥がそのまま、前を進もうとし、足を一步踏み出した時だった。

「お待ちください」

海鳥を呼び止める、一筋の凜とした女性の声。海鳥はまさか、とは思ったが、そちらを振り向き、声の主を確認した。

——女神アテナだった。

「ア、アテナ……!?!」

驚く海鳥に対し、アテナはにっこりとほほ笑んでみせた。そして、海鳥の近くまで歩み寄り、言った。

「祭壇座の海鳥。是非ともあなたの力を貸してほしいのですが——よろしいですか?」

「………僕の?」

海鳥は「なんで?」といった様子で、恐る恐る自分を指差して、アテナに聞き返した。

アテナは自分を指差した海鳥に向かって、「はい」と首を縦に頷かせた。

「戦うだけならば、あなたをここに待機させていたのですが——今回はそういうわけにもいかないのです」

「ど、どういう……」

「……私についてきてくだされば、それは分かります」

そういうと、アテナは海鳥と自分の周りに小宇宙の光を集わせた。きつと、アテナのものであろう。とても心地がよく、暖かいものだった。

——と、言っている場合ではなく。

海鳥は事態がなかなか読み取れないのか、あからさまな引きつり笑みをその顔に浮かべてアテナを見ていた。

「あ、あの……アテナ……」

「大丈夫です。黙って私についてくれば良いのです」

その瞬間、海鳥は己の身が押し潰されそうな感覚に襲われた。

白虎は考え込んでいるアレキ対して、妙な不審感を抱かずにはいられなかった。

——このアレキ、何か隠しているんじゃないか。自分たちに言えないような何かを、と。

自分の親友の師匠ゆえ、あまり疑いたくはないのだが、その師匠に対して、白虎の心の中の何かが薄っすらと怪しい怪しい、と連呼しているようだった。

白虎はどうしてもいてもたってもいられなくなり、足を一個踏み込み、アレキに話しかけようとした。

「あの………」

と、その時だった。

金牛宮内が突如として、大きな爆風に飲まれたのである。

「なっ、なにっ!？」

そこにいた人物全員が、爆風の要因があるであろう方向を振り向いた。

その視線の先にいたのは一人の青年と——一人の成人女性だった。

(海鳥さんと……女の……人……?)

一人の青年はみんなもよく知っている白銀聖闘士・祭壇座の海鳥だった。だが、その傍らにいた女性について——白虎はおろか、他の青銅聖闘士たちも、その女性の姿を見たことがなかった。だが、女性は目の前にいる聖闘士たちを知っているように——特に白虎については、そのように見つめてきたのだ。

もちろん、白虎たちからすれば、その女性とは初対面で、一体何者なのか分からなかった。

だが、この、何もかも包み込むような温かい小宇宙——いるだけでも居心地がよかった。

その一方で水鹿はその女性の目の前まで歩き、すつ、と片膝をつき、そこに跪いた。
「水鹿!?!」

白虎がそれを見て驚くのも束の間、水鹿ははつきりこう言い放った。

「——お久しゆうございます、女神アテナよ」

その瞬間、この場にいた青銅聖闘士たちの空気が一気に変わったのである。翔馬はゆっくりと女性に確認した。

「あなたが……アテナ……なのですか?」

「はい」

アテナと呼ばれた女性にはっこりと笑みを浮かべて、この場にいる聖闘士たちに会釈をした。そして白虎の方を振り向き、そちらへ歩み寄った。

「えっ、あつ……」

白虎は非常に慌てふためいた。もしかして、自分は気付かぬうちにアテナに対して何かをしたのだろうか。特に失礼なことを。それとも、自分の身なりや態度が気に入らなかったのだろうか。

心臓をドクンドクンと激しく揺らしながら、白虎はこちらに歩み寄るアテナから目を

そらした。

アテナは白虎の目の前まで歩み寄ると、軽い赤みを帯びた白虎の頬にそつと手をあて、そのままゆつくりと撫でた。

「え、あの……」

何か言われるのではないかと、思っていたのだが、全くそんなことはなかった。白虎は構えていたのだが、特に何もなかったという安心感からか、妙な脱力感を心に迎えていた。

アテナは白虎の顔を見ているうちに、途端に切なげな顔になっていき、その上品な笑みにもどこか哀愁が漂っていた。

「見れば見るほど——そっくりね……」

「えっ……?」

白虎は思わぬアテナの言葉に思わず声と顔を同時に上げた。アテナは自分の親を見つけた時の少女のような口調と表情で、白虎に言った。

「私が大好きだったあの女の子の生き写しみたい……」

「……アテナ……?」

「……——あつ……」

アテナはハツとなつて、白虎の頬から自分の手を離して、引つ込めた。そして、申し

訳なさげにほほ笑み、白虎に言った。

「申し訳ございません。私の知っている人物によく似ていたもので」

「……わいが？」

「ええ。前にあなたを見かけた時は顔立ちや性格が随分と似ていて、本人がまたやってきたのかと思つてしまいました」

「は、はあ……」

さすがアテナ。やはり聖域にいる聖闘士は逐一把握してくれているのだろう。

そして、白虎は妙に引つかかった。

——自分と何もかも似ている、人物。

(いや……まさかなあ……)

確かに白虎はとある女性によく似ている、と昔から親戚中から言われているが——もし、仮にそうだとしても、アテナと面識があるという点ではなかなか厳しいものがある。教皇である自分の師であれば、何か知っているのかもしれないが、聞くのがなんとなく怖い。

白虎があれこれ考えているうちに、アテナは白虎の元から離れ、ここにいる聖闘士達の前に立った。

「では、改めまして——初めまして、聖闘士たちよ。私はこの時代の女神アテナのラティ

エルと申します」

「ラティ、エルさん……?」

「はい。『ラティさん』でも結構ですよ。そちらの方が語呂も響きも良いでしょうし」

「それは遠慮しておきます」

アテナ・ラティエルにそう言われて、白虎は苦笑しつつ、思わず即答してしまった。

普通の女性ならまだしも、相手は黄金聖闘士ですらひれ伏すぐらいの存在を持つ女神だ。そんな目上の人物に対して名前を略すことなどできるはずがない。さすがの白虎も、そういうことぐらいはしっかり弁える方だ。

ラティエルは「そうですか」と白虎の否定にそう答えて、話を続けた。

「本日は冥王ハーデスの復活により、数々の冥闘士が目覚め、そして聖域に侵攻してきました。と、いうことですが……」

「ですが?」

ラティエルは目を閉じ、額に汗を流し、その後を伝えた。

「今回のハーデスの復活は、実際は有り得ないことなのです」

「えっ!?!」

有り得ないこと——白虎たちはそのラティエルの言葉に反応せざるを得なかった。

「冥王ハーデスは二百年ほど前にその身を滅ぼされたはず。そして、長い眠りにつ

いた。今のタイミングで復活するなど到底ありえません」

「で、でも、依り代さえあれば……」

「いえ、ハーデスにとつての依り代というのは、自分の実体を使わないためのもの。つまり、地上における自分の肉体、ということですよ」

「じ、じゃあ……その実体が滅ぼされて……」

「はい。依り代を探す気力さえ無くなっているはずですよ。よもや地上を支配するなど、もう少し時間を要します。何百年、いえ、何千年も、最悪、気が遠くなるほど先になるでしょう」

「そ、そんなに……」

そういえば、と白虎は思い出した。教皇から聞いたことがあるのだが、海界を支配する海王ポセイドンもその実体を失い、海の底でその魂を潜めているらしい。その期間は気が遠くなるほど昔かららしいのだ。もしハーデスもそうであれば、二百年程度で復活するなどあり得ぬことか。

だが……。

「何か目覚めるきっかけさえあれば、復活することは可能ではあるんですね？」

「水鹿……」

「そうなのでしよう?」

「…………ええ」

ラティエルはこくん、と首を縦に振った。

「ただ、ハーデスの地上における依代など、現代に存在するはずはなく、復活しようにも復活しきれないのです。しかも、魂だけでは小宇宙を燃やすことはできても、支配することはなかなか難しいと思われまます」

「じゃあなんで…………」

「…………誰かが、ハーデス以外の誰かが、冥王軍を統率している可能性が非常に高いです」

「……………」

(な、なんてこつたい…………)

女神から聞かされた新事実。

今回はハーデスが意図的に行っているのではなく、ハーデス以外の誰かが冥王軍を統率し、利用しているということ。白虎はすっかり、魂だけになってしまったハーデスが冥王軍を送り込んだと思っていたが、全くそうではなかったのである。

だが、そういうことならば、冥王軍の弱体化も領けた。ハーデスが統率していれば冥闘士ももつと強いはずだ。それこそ、こちらを全滅させるぐらいには。

かつての冥王軍はこちらをほぼ全滅させた記録があり、今から四百〜五百年ほど前の聖戦ですら、二人の黄金聖闘士を除いて女神軍を全滅させたとされるほどだ。

だからこそ、今回の弱体化は度が過ぎると思ったが、そういうことならば納得できる。ラティエルの言うとおり、ハーデスが統率しているわけではなく、他の誰かが冥王軍を統率していることで間違いはないだろう。

「本当にそうであれば、私が出る幕ではないのですが……仮にハーデスの魂が復活していれば、私も出ざるを得ない……」

「つまり、その兆候が見られたから、このようにアテナ自ら出動したと？」

「そうなります。そして、そのハーデスの魂を封印するために、貴方たち聖闘士の力が欲しいのです」

「……」

「協力してくれますね？」

ラティエルは真つ直ぐな真摯な瞳で白虎たちに向けた。白虎たちは互いに顔を見合わせ、こくり、と首を縦に振り、意思を確認した。

そして、白虎が皆の前に出て、ラティエルの前で跪き、言う。

「もちろんです。アテナと地上のために力を尽くすのが聖闘士というもの。そのお頼み、わいら、いや、私たちが良ければお任せください。アテナと地上のためならば、見事完遂させていただく所存です」

「……白虎、ありがとう。他の皆さんもよろしいのですかね？」

ラティエルは念のため、白虎以外の聖闘士たちにも意思の確認を取った。圭熊たちもこくん、と縦に首を振って、その意思を表した。ラティエルはそれを見て、安心したのと、先ほどよりも心強くなったことを表情に表していた。

そして、アレキの方を見つめて、問いた。

「貴方はハーデスのいる場所へ、案内してくれますね？」

「……はい」

アレキもこくり、と首を縦に頷かせ、その意思を白虎たちと同じように表していた。

「では、参りましょう。敵の本拠地へ」

24：「ハーデス城」

ハーデスのいる本拠地。地上のどこかにあるハーデス城であろうが、アレキが教えてくれた場所が本当ならば、歩きでは到底間に合わぬであろう。そして、事態は一刻を争う。こんなことで時間を失うわけにもいかないのだ。

そんな聖闘士たちの不安をよそに、ラティエルはほほ笑みながらこう言った。

「大丈夫です。私は女神アテナ。ここからハーデス城に移動するなど容易いこと」

ラティエルはそう言うと、自分の周りに小宇宙を集め始めた。

それを見た白虎は「まさか」と思って、ラティエルに恐る恐る聞いた。

「えっ、あの……もしかして……ここからハーデス城に……テレポート……」

「ええ、当然です。この足で向かうとなると時間がかかりますから」

「い、いやあ、でも……」

「大丈夫です。私を信じてください」

ラティエルはにっこりとほほ笑みつつ、小宇宙を周りに掻き立てていた。その小宇宙はやはり、というべきだろうか。

白虎たち聖闘士とは全く違い、聖なる力そのものだった。それに近いものには追いつ

けたとしても、そのものには絶対に追いつけない、無二の力。そう、神だけの——かつ、アテナだけの小宇宙であり、力。

アテナがそうこうしている間にも、一人の聖闘士がこちらへ歩み寄っていた。その存在に気が付いたアテナは小宇宙を集めながらも、そちらを振り向いた。

その視線の先にあつたのは、豎琴を片手に持った、一人の白銀聖闘士の姿。その姿を見て、真つ先に反応したのは水鹿だった。

「唄狼……！」

そう、その姿は琴座の白銀聖闘士・唄狼のものだった。

唄狼は腰まで伸びている髪の毛をかきあげながら、水鹿の元まで歩み寄った。水鹿と、その目の前までできた唄狼の間に、バチバチと、静かな閃光が揺れた。

「唄狼……お前、何しに来た？」

その水鹿の表情は、「なんでここにきた」といった様子だった。

「アテナの手伝いであれば喜んで歓迎するが、実際は違うのだろうか？」

「無論だ」

即答だった。

唄狼は水鹿の言ったアテナを少しチラ見するもいなや、「ふん」と鼻で笑い、再び水鹿の方へとその顔を向けた。

「こんな女を女神だと祀り、へこへこするほど、お前は軟弱だったのか」
「なっ……」

水鹿は唄狼のその言い方に対して、肩を震わせて、何かを堪えているようだった。唄狼はそんな水鹿の心中を知ってか知らずか、さらに続けた。

「情けないと思わないのか？ 一人の女ごときにへこへこしなければならぬ、ということ」

「唄狼、お前……」

水鹿が「アテナに対して無礼だぞ！」と言い切る途中だった。

「……………えっ!？」

水鹿は思わず目を丸く見開いて、声を上げた。どうやら、水鹿が言い切る前に、唄狼の頬に一筋の拳が入ったらしく。唄狼は足をよろつかせながら、拳が出てきた一点を見つめた。

——そこにあつたのは、天馬星座の青銅聖闘士・翔馬の姿だった。

「翔馬っ!」

翔馬はふう、と唄狼にあてた拳に息を吹きかけ、唄狼をギンツと睨みつけた。唄狼の方も、それに怖気付くこともなく、翔馬をキツと睨み返した。

翔馬は唄狼に対して、叩きつけるように、だが、静かに言った。

「琴座。貴様、アテナを愚弄したな？」

「……それが何だ」

『何だ』とはなんだ、『何だ』とは！

翔馬は唄狼の言うことがいちいち鼻につくのか、無性にいきり立っていた。そして、壁に打ち付けるように強く言い放った。

「聖闘士である以上、女神に従い、仕え、そして敬うのは当然のことだ！ お前もそのこととは分かっているだろう！」

「……分かっているから何だ、というのだ」

唄狼は呆れたようにはあ、と息をついた。

「言っておくが、私は聖闘士ではあるが、アテナの戦士として忠誠を誓ったことは一度もない」

「なっ………！」

「天馬星座。聖闘士になったと同時にアテナに忠誠を誓ったも同然、と言うのではなからうな？」

「………っ」

「やはりな」

唄狼は凶星を突かれ、何も言えない翔馬を尻目にしながら、水鹿の方へと再び目を向

けた。

「水鹿よ。私はお前のように友達をたくさん作って、仲間だのなんだのと行動するつもりはない。例えいたとしても……私は自分の行動は自分で決める」

唄狼が途中で一瞬黙り込んだのは、後ろにいる圭熊と凜猫をちらりと見るためである。

水鹿は唄狼の言うことに、大して関心を持たないのか「そうか」と軽く返事をした。

「まあ、お前がどんな行動を取ろうが取らまいが、オレは知ったごっちゃない」

「……」

「ただ、今、アテナを愚弄した、ということは聖域にいる聖闘士全員を敵に回したも同然だ。それだけは覚えておけ」

「ふん……」

唄狼は大したことではない、といった様子で目を閉じて、水鹿の元から離れていった。そして、この場にいる聖闘士たちから若干離れたところに姿を置いた。

そして、水鹿しか見ていなくて、気が付いていないこともあつたらしく、この場には海鳥を驚いたらしく、思わず声を上げた。

「祭壇座の海鳥……何故お前が……？」

「……」

海鳥は一言も声を発せず、黙って唄狼の元まで歩み寄った。その間、金牛宮内は尋常でないほどの沈黙に包まれ、せいぜい聞こえる音は、海鳥が唄狼に近寄る際の足音のみだった。唄狼はこちらに歩み寄ってきた海鳥を黙って見ていた。

そして海鳥の足音が止まり、二人は先ほどの水鹿と同じようにお互い睨み合っていた。二人の間には、しずかに黄色い火花がバチバチと揺れていた。

それからしばらくすると、唄狼の方から口を開いた。

「……お前、もう表に出て戦うことはなかったんじゃないか？」

「……」

「その決意を表明するために、髪の毛を染めたのではなかったのか？」

「……」

二人の間に、更なる沈黙が流れた。事情を知らない青銅聖闘士たちは、額に汗を一滴垂らしながら、二人の様子を黙って見、一方で何か知っていそうな水鹿は冷静な表情で二人のやりとりを見ていた。

海鳥は「ふう」と息をついて、唄狼の耳元まで口を近付け、こう呟いた。

「——あまり出すぎた行動はするな」

海鳥はそれだけ言うと、唄狼の元から離れ、そのまま背を向けて、アテナの元へと戻っていった。唄狼はくだらなそうに、「ふん」と鼻を鳴らしていた。

二人のやりとりが終わると、白虎は水鹿の肩を突いた。水鹿は「ん？」と白虎の方を振り向いた。

「どうかしたか？」

「うん……」

白虎はちらりと海鳥と唄狼を交互に見てから、そつと水鹿に聞いた。

「あの二人、前に何かあったん？」

「……何か、とは？」

「うん……今の二人のやりとり見てて、あんまり仲よろしくないなって思ってた……」

「……」

水鹿は顔を俯かせ、顎に手をあてて、そのまま黙り込んだ。どうやら、水鹿は二人について本当に色々知っているようだった。白虎はどうしても気になる様子で、水鹿の次の言葉を待った。

水鹿は「ふう」と息を吐き、言葉を発した。

「まあ、お前が知るようなことではないさ。だから余計な心配もいらぬ」

「でも……」

「さ、アテナが待つてるぞ」

水鹿はとん、と軽くながらも、白虎の肩を押した。白虎は水鹿に言われて、ラティエ

ルの方へと視線を向けた。

アテナは準備万端といった様子で、白虎たち聖闘士の方を見つめていた。

「……話は、終わりましたか？」

ラティエルはニコツとほほ笑みながら、白虎たちに聞いた。白虎たちはコクリと頷き、「はい」と異口同音にその意思を示した——唄狼以外は。

唄狼はラティエルとその周りを囲む聖闘士たちを見て、何を思ったのか、スタスタとそちらへと歩み寄った。

「唄狼？」

「……」

そして、唄狼は水鹿の隣に立ち、腕を組んで、その時を待っているようだった。どうやら、白虎たちについていくつもりらしい。もつとも、目的は水鹿なのだろうが。

水鹿はフツとほほ笑みながらも、それはどこか呆れていたようだった。もちろん、いい意味で。

ラティエルは唄狼のその様子を見、ニコリと口を緩ませながら、手に持っているニケの杖をかざし、金牛宮の中全体を自らの小宇宙で覆った。

「では、少し強い圧力がかかりますが、一瞬で終わります。準備はよろしいですね？」

「はいー！」

ラティエルは杖を大きく掲げ、その頂点を真っ白に輝かせた。

気が付けば、白虎たちは大きな、いや、巨大な城を目の前にしていた。その城は、周りに白虎たちの小宇宙とは違う色の小宇宙を放っており、異様な雰囲気を出していた。

——ハーデス城である。

「白虎……」

「水鹿……」

白虎と水鹿はハーデス城の周りの様子をじっと見つめた。

数多くの雑兵が城の周りを囲うように集まっており、簡単に入れそうではない。しかもアテナもいるとなると、そのアテナの首を取ろうとする雑兵がわんさか出てくるはずだ。

だが、アテナ——ラティエルはそれにも関わらず、白虎たちの前へと一歩ずつハーデス城へと歩み寄った。

「……やはり、今回はハーデスの結界はないようですね……」

ラティエルはそう呟き、ニケの杖を軽く掲げて、テレポートをする前のようにその頂点を輝かせた。その瞬間、数々の雑兵たちが圧倒されたように、足を後ろに後退させ始

めた。

「アテナ……」

「安心してください。今回は聖闘士の障害となるハーデスの結界はないようです」

ラティエルはその確認のため、と言わんばかりにニケの杖に己の小宇宙を集め、放っていた。

そして、ハーデスの結界というのは、ハーデス城の周りに貼られているハーデスによる結界であり、この結界に入った者は冥闘士でない限り、その小宇宙が何ランクも下がると言われている。それは、聖闘士最高位に立つであろう黄金聖闘士の小宇宙が幼児レベルの小宇宙まで落ちると言われているほどである。

だが、ラティエルの言うとおり、今回はそのハーデスの結界がないらしく、白虎たちはいつものように小宇宙を燃やすことができていた。

「つまり、力いっぱい戦える、ということですか？」

「……ええ、そういうことです。これで戦力はハーデス軍と同等のはず」

ラティエルは白虎の言うことに、こくりと首を縦に振り、肯定の意を示した。

「では、行きましょう。ハーデスの元へ」

アテナとその聖闘士たちの気配を察知した、フィード、アトモス、ディーネの冥界三

巨頭の三人は、お互い顔を見合わせてから、窓の方を見つめた。そして、そこから外の見、雰囲気を感じ取っていた。

アテナが通るたび雑兵たちはどんどん引いていき、向こうに手出しすらできていなかった。いや、その度胸がないだけとも伺える。

「う、ひゃあ……本物か……」

アトモスは「嘘だろ」と言いたげな表情でそれを見ていた。まさか、わざわざ向こうから自殺行為——いわゆる、ハーデス城に乗り込むなどということは思わないだろう。今回の冥王軍は随分と舐められたものだ。確かに戦力は前回よりも相当下回っていることは事実なのだが。

しかし——。

「アテナについてきている聖闘士は青銅聖闘士と白銀聖闘士ばかりではないか」

と、ディーネが眼鏡をくいっと人差し指で持ち上げて言う。

そう、アテナが連れてきている聖闘士は、皆、青銅聖闘士と白銀聖闘士ばかりであった。人数は、七人ぐらいだろうか。聖闘士としてはそこそこいる人数なのだろうが、冥闘士にとっては少ない人数に違いはない。

もちろん、この冥界三巨頭の前では。

そして、その聖闘士の中に混じってる一つの姿があった。

「……あいつ、冥闘士か」

ふ、とフィードロが目を細めてその姿を確認した。

どうやら、聖域に乗り込んだ冥闘士のうちの一人の誰かが、アテナ側につき、裏切ったと見える。しかも、その冥闘士は「元・聖闘士」であり、冥闘士からしたらなかなか信頼に置けない人物だった。

もしやとは思ったが、まさか最終的にアテナ側につくとは——……やはり聖闘士上がりの冥闘士は信頼できないものだ。

「ねえ、ディーくん。やっぱり監視はつけておくべきだったんじゃないかなあ……」

「そうだな……過去に聖闘士上がりの冥闘士が裏切らないかどうか監視してた、という話もあったからな」

アトモスに言われて、ディーネは後悔している様子で額に手を当てた。

実はディーネは監視をつけるべきだ、と意見をしたのだが、フィードロが「それは面白くない」と言って却下したのである。無論、ディーネも反論しようとしたが、フィードロは三巨頭の中でも絶対的な存在で、逆らうことは絶対にできなかった。ゆえに、フィードロの意見を聞かざる得なかったのだ。

当のフィードロは、今の冥闘士の姿を見、「ふっ」と口元で笑った。

「なに、私はこうなることを予測して監視を出さなかったのだ」

「は……」

どういうことだ、と言わんばかりの視線で、ディーネはフィードロのことを見つめた。そして、フィードロは側にあつたワインを少しだけグラスに淹れ、景気付けと言わんばかりに、それを一気に喉に押し込んだ。

それから、フィードロは不気味な笑みを浮かべて、続けた。

「聖闘士上がりの冥闘士など、監視をつけても後にボロが出るといふもの。そんなものに監視などして何の意味がある？」

「……」

フィードロの言う通りだった。確かに監視をつけたとして、何の意味があると言うのだろうか。

そして、フィードロは更に続けた。

「ハーデス城に侵入した最初の方には私の部下がいる。奴にはそこで処罰を下してやる」

その時、フィードロの使ったワイングラスが鋭い音を立てて割れた。フィードロはそれを踏みつけ、ぐり、と圧力を加えた。

白虎たちがハーデス城に入ると、まずは巨大なエントランスがそこに立ち向かえてい

た。豪華そうな赤い絨毯が、道を指し示すようにそこに敷かれていた。

その先にある大きな一つの階段。その左右の分かれ道の間に、大きなテーブルと、幾多なる真っ白に染まった紙、そして羽ペンがテーブルの上に立っていた。

「……これは……」

一体どういふことなのだ、と白虎たちが辺りに視線を向けた瞬間、その人物は現れた。

「——貴方たちが、ファイロ様の言っていた聖闘士たちですか」

その人物は眼鏡をかけ、腰まである銀髪ブロンドに輝く髪の毛を頭の高い位置で一つに結び、黒い法衣を着て、その場に立っていた。そして、分厚い難しそうな本が、その人物の手柄を表すかのようにその片手に納められていた。

そして、白虎だけ何となくだが察した。

(この人——女の人……?)

見た目は男性とも女性ともとれるものだが、声だけは女性特有の柔らかく丸みを帯びた声だった。

白虎以外は向こうを完全に男だと思込んでいたが、アテナはもちろん、楽器について詳しく、音についても触れている唄娘もそのことに何となく気付いていたのか、白虎の方を見つめ、アイコンタクトを求めていた。白虎はこくり、と頷き、向こうを再び見つめ直した。

白虎の隣にいた圭熊は、向こうをビシツと指差して、言った。

「おめー、何モンだ！ 冥闘士の仲間か!？」

凜猫はその横で、「圭熊、失礼だよ……」と、相手を指差して尋ねた圭熊の人差し指を下ろしてやった。

向こうは、そんなこと気にせずにはさきとテーブルの方まで歩き、そこに用意してある大きな椅子に座った。そして、その場に通る声で己の名を自ら名乗り上げた。

「私は、天英星・バルロンのティース。天貴星・グリフォンのファイアの直属の部下にして、この裁きの間の副管を務めています」

ティースと名乗った人物は、手に持っていた分厚い本をテーブルの上に置き、しばらくとページを開いた。そして、ピンときたページを開くと、そのまま開きつ放しにした。

そして、海鳥と翔馬の方へとその視線を向けた。視線を向けられた二人は、「？」と頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、お互い見合わせていた。

ティースは「ダンツ！」と強く手元にあつた木槌を打ち付け、聖闘士たちの注意をこちらに向けた。

「天馬星座の翔馬と祭壇座の海鳥。これから、貴方方二人の裁判を始めます」

「なっ——……」

「……!」

いきなり裁判を始める、と言われた二人はただ、戸惑うだけだった。しかも向こうは初対面だ。裁判をされるような筋合いなどない。

だが、ティースの目は、まるで二人のことをすべてを知っているようなものだった。自分には知らないことなど、ない。自分はすべてを知っているのだ、と、皆に言い聞かせているようだった。

その目に威圧されたか定かではないが、引き下がったのは確かであろう。ティースに当てられた二人は、何か言いたげな口を引っ込めて、押し黙ったのである。

その二人を見て、白虎は何を思ったのか、二人の一步前に出た。そして、自分の親指を己の胸に向け、こう言った。

「どうせなら、わいを裁判せんかい！」

「白虎……！」

「白虎さん！」

翔馬と海鳥はひどく驚いた様子で、目の前に出た白虎の背中を見つめた。ティースはスツと厳しく目を細めて、白虎を見た。白虎は更に続ける。

「確か、アンタ、過去の悪行とか引つ張り出して、地獄に落とすの得意とか言うんだっ
な」

「……それがどうかしました？」

ティースは眼鏡の端をくいっ、と上げて、相当冷淡な声で白虎に返した。対して白虎は「ハッ」と口で笑つてから、言つた。

「何なら、わいの過去を漁つた方が面白いんじゃないか？ 祖父母に目の前で両親殺されてカンワイソーな僕ちゃんを見てくださいなー」

あからさまな挑発だつた。そして、これは白虎なりに、ティースの視線を翔馬と海鳥から外させようとしているのだろう。

だが、それではティースを挑発させることはできなかつたようで、ティースは冷めた目つきで白虎を見て、言つた。

「関係者以外はお引き取りを。私は貴方みたいな下衆の過去には興味ありません」

「はあ？ 地上乗っ取ろうとしてる輩の一味のやつから、んな『下衆』とか言われくないなあ？」

冷めた様子のティースに対して、明るい口調で言い返す白虎。ティースは呆れたと言わんばかりのため息をつき、そして白虎を睨みつける。

「なら、我ら冥闘士が下衆とでも……？」

「そう聞こえちゃいましたかあ？ まあ、実際そうなんですけどねえ。地上を支配するなんて、下衆じゃなきゃ考えつかないことですよお」

白虎は「あははは」と笑いながら、それなりに妙な口調で、ティースを更に挑発し続

けた。自分たちが愚弄されたと感じたのか、ティースの白虎を見つめる視線と目つきが、一層厳しく、冷たくなった。

ティースは木槌を再び強く打ち、その音を一面に響き渡らせた。

「関係者以外は、お引き取りを……」

「他人の事実に触れる役目につくくせして、自分らのやっていることと、その事実から目を背けるつもりですかあ？ 裁判官様」

「……」

白虎は最後の「裁判官様」だけは、本人が気持ち悪くなるほどに可愛らしく言った。そして、その反動からか、白虎は頭をほりほりと掻いた。

一方のティースは、ぶるぶると肩を震わせて、「ぐっ」と片手で拳を作り、何かに耐えているようだった。白虎はそのティースに対して、追い打ちをかけた。

「前から聖戦のこと聞いてて思ったけど、ハーデスって冥界の神やろ？ 何でそんな地上にこだわるん？」

「……っ！」

「冥王は冥王らしく冥界だけ守護してればいいし、地上のことはアテナに任せておけばええと思うのになあ。地上を支配したって、自分の守る領域が広まるだけで、大変になるし、面倒なだけだと思うけど」

「……っ！ ……っっ！！！」

言われてみればそうだった。地上の人物はハーデスを悪者扱いし、そして、我ら冥闘士はハーデスの言うことは絶対であると、そこまで深く考えていなかった。

「あと、これは関係ないけどさ、わいはね、前の聖戦で冥界が滅んだのは間違いだつたと思うてるよ。確か冥界つて、悪行を加えた死者を裁くためにあるんやろ？ なら、ないと困るよね？ 悪行やからした輩が極楽浄土に行けるなんてたまつたもんやないしね？」

「……」

確かに冥界があるからこそ、死後の世界の秩序は保たれていたようなものだった。冥界がなくなつたあの後、極楽浄土が阿鼻叫喚の渦にさらされたことは聞いたことがあるが、あれは冥界がなくなつたことによるものだったであろう。

そして、テイスは白虎を更に不審な目で見つめた。

聖闘士のくせに、冥界は必要だのなんだの——……一体何が言いたいのだ。

白虎はニツコリと笑みを浮かべた。そしてテイスの心の中の疑問に答えるように言った。

「そんな重要な冥界よりも、地上に目を向けるなんて、自殺行為もいってところだ、つてこと」

その瞬間、ティースと白虎の間に、冷たい沈黙した空気が流れた。

白虎はその空気をぶち破らない程度に声を低めて、ティースに向けた。

「確かに地上は重要だし、支配したくなるのも分かるけど……やっぱりさ、自分の守護している世界の方が大事やない？ アテナなんて地上守護してるだけで、アンタらに迷惑かけるつもりはさらさらないしな」

白虎は「な？」とアテナ・ラティエルにアイコンタクトを向けた。ラティエルはそのアイコンタクトに対して、「ええ」と首を縦に振って、白虎にその意を示した。

「私は白虎の言うとおり、私は私の守る世界を守っているだけ。他の神々もそうなれば、と思っております」

「……」

「私は無駄な争いは望みません。ただ、それぞれの神が守護する世界が平和なら、私は満足なのです」

「……」

だが、ティースはここまで言われても、気に食わぬ様子だった。

自分たちのやっていることが無駄に感じたということ、そして、何よりも、我らが冥王・ハーデスがこんな聖闘士ごときにバカにされたように感じ取れたのだ。

確かに白虎の言うことは正論だったかもしれない。だが、だからこそ——頭にくるも

のがある、というもの。

そして、白虎は更に発した。

「で、ハーデスは人間のこと愚かだと言い、見下してるとかなんとか聞いたけど、確かにハーデスの言う通りや。確かに人間は愚かで、特にその中でも特化して愚かな奴ばかり生き延びて——納得いかへんところもある。でも、そういうのは自然の摂理。そういう愚かな奴ばかり生き延びるのは、自分がどうしたら切り抜かれるかどうか、自分のことしか考えてないからこそ」

「……」

「反面、他人のことを考えられる奴が生き延びれない、早死になのも嫌だけど——でも、人に対して人格とか性格とか与えたのは神やんか。体だって、体の仕組みだって、全部。わいは神に与えられたものを使って生きてる。ただ、神の人形として行きてるだけに過ぎんのよ」

「……なら、何故、こうして神に対して冒瀆を？」

テイースの顔は明らかに色々溜め込み続けているようなものだった。白虎はそんなことも恐れず、ニツと笑みを浮かべて、己を指差して言った。

「わいの正義や生き方の道理は、その神にはないからに決まっとるやろ。わいの道理はわいの中だけにある。それだけや」

「……っ！」

ティースは今まで机の上に置いていた本をすつ、と片手に、そして羽ペンをもう片方の手の中に入れた。その表情は今までのように静かな、ティースらしいものだった。だが、その瞳はそれを全く表しておらず、憎悪と怒りに燃え、そして、吐瀉物を見つめるようなものだった。どうやら、今ので白虎たちを「吐瀉物以下」と捉えたようだった。

そしてティースはその背後に怒りの炎という名の小宇宙を滾らせ、それを白虎たちに向ける準備をしていた。白虎はそれに更に言う。

「言うておくけど、ハーデスの言い分は間違ってる。ただ、その辿り着いた結果がわいの道理に適ってない。それだけよこと。まあ、それはアテナ軍勢全員に当てはまることだと思っけど」

「……どうやら、貴方はここで全て無駄にされたいようですね」

「元からそのつもりやったくせに、今更何言うとんねん」

白虎の鋭い指摘に、ティースは更にその怒りを露わにした。

「言わせておけばっ……っ！」

ティースは白虎に向かつて木槌を投げつけた。そのスピードはただの投げでなく、野球選手の投球以上だった。

白虎は向こうからの不意打ちの反撃に、思わず驚いて動けずにいたのか、ただそれを

見つめていただけだった。

しかし、その木槌は白虎に直撃しなかったのである。

「……………翔馬！」

そう、翔馬がその木槌を受け取り、白虎に直撃しないようにしていたのである。

翔馬は手に持つている木槌を、ティースのテーブルへと投げた。木槌はテーブルの上を数回回転し、その位置を取ったのだった。そして、ティースに向けて言い放った。

「自分の思い通りの言葉こないと、こんなにも顕著に怒りを表し、暴力に出る。まったく、嫌われる女そのものだ」

「……………！」

「翔馬……………！」

「ああ、こいつは女だ。今のやりとりで確信した」

何故ティースが女だと分かったのだ、と言いたげな白虎に対して、翔馬はふつと微笑みながら答えた。そして、再びティースに視線を向けた。

「俺らは確かに女に手出しをするつもりはない。もちろん、こんな風にヒステリーを起こす女は例外だがな」

「……………！」

「天英星・バルロンのティース。貴様の相手はこの俺、天馬星座・ペガサスの翔馬がしよ

う」

翔馬はすつと構えた。ティースは齒を軋めて、堪えるようにその姿を見つめていた。翔馬は自分以外の聖闘士たちに対して、こう言った。

「お前らは先に行け」

「翔馬……！」

「この人数なら別れることもできるだろうから、それぞれこの先の左右にある階段に足を運べ」

白虎たちは翔馬の言った目の前にある左右に別れている階段を見つめた。

「白虎」

「……」

「圭熊、凜猫……」

圭熊と凜猫は白虎を見つめて、自分たちと一緒に行ってくれ、と頼んでいるようだった。ちらりとラティエルの方を見つめると、ラティエルも白虎と一緒に行きたげだった。

白虎はこくりと頷き、一步だけ前に出てから、くいつと、手首を動かした。圭熊と凜猫、ラティエルは口元を緩ませ、白虎へとついていった。白虎はそれを確認すると、左の階段へと足を運んだ。

白虎たちが去っていくのを見送ったあと、海鳥は翔馬を心配そうに見つめていた。ティースに向けられたのは翔馬だけでなく、自分もだというのに、翔馬に任せっぱなしでいいのだろうか。

だが、翔馬は「構わない」といった様子で、海鳥に対して微笑んだ。海鳥はぐつと拳を握りしめ、それに対してこくり、と頷いた。

「……水鹿さん、唄狼さん、僕らも行きますよ」

「……海鳥……」

「ふん」

唄狼は相変わらず他人と行動しながらなかったが、今回ばかりは致し方がないと、海鳥についていった。

一人残った翔馬は、ティースと睨み合っていた。

25：「別れと裏切り」

ティースは纏っていた法衣を大胆にも翻しながら剥ぎ、その下に着衣していた天英星の冥衣の姿を表した。どこにしまっていたのだろう悪魔のような羽と、手に持っている鞭が印象的なものだった。ティースは手に持っている鞭の縄部分をピン、も張りながら、翔馬の元へと歩いて行った。

翔馬はその鞭を見ながら、こう呟いた。

「……俺のようなガキと、どんなハードなバトルをする気だ？」

そんな趣味はないぞ、と言っているような表情だった。自分は女に鞭打たれて喜ぶような質ではない。ティースは「ふっ」と口元を鋭く釣り上げ、「そうですね」と呟いた。「その四肢をバラバラに分解して差し上げるぐらいのバトルを所望します」

「……ほう」

やはり戦い方も見た目と性格通り、といったところか。

翔馬は口の端を軽く釣り上げて、右拳と左の手のひらをぶつけて、相手を見、言った。

「いいだろう。受けて立つ」

「本気ですか？」

「どうせ勝つのは俺だろうからな」

「……左様ですか」

と、ティースはちらりと翔馬の後ろの方を見た。

そこには聖闘士上がりの冥闘士の一人・水瓶座のアレキの姿があった。どうやら、白虎たちにも海鳥たちにもついて行かず、自らこの場に居残ったらしい。

ティースはニツと怪しげな笑みを浮かべて、鞭を地面に振り落としたり。

「まず、天馬星座より、その後ろにいる冥闘士に地獄に落ちて頂きましょうか」

「……」

翔馬はティースに言われて、バツと後ろを振り向くと、そこには確かに水瓶座のアレキの姿があった。アレキは腕を組み、足を肩幅までどっしり広げて、ただ、黙ってそこに立っていた。

ティースは階段を降り、翔馬を素通りしてアレキの元へと向かった。アレキは、こちらに向かってきているティースのことを、ぐつ、と力強く睨みつけていた。ティースは睨みつけられ、ギンツと目を釣り上げて睨み返した。

数秒その状況が続いたあと、アレキは口を開き、言い放った。

「君は私を地獄に落とす、と言ったな」

「ええ、そうですね」

テイスはアレキの問いに対して肯定した。アレキはその答えを聞くと、「なら、迷いはない」と呟き、背中に纏っていたポロポロになったマントを、大きく翻して、地面へと投げ捨てた。

「寧ろ、地獄に落とされるのは君の方ではないかい？ 天英星よ」

「さすが、元黄金聖闘士。なかなか舐めた口をきいてくれますね。ですが——……」

テイスは鞭を地面に強く打ってから、言い放った。

「私も天貴星・グリフォンのフィーロ様の部下にして、この裁きの間の副官。黄金聖闘士など、私の敵ではありません」

「……」

「水瓶座……」

翔馬は心配そうにアレキを見つめた。黄金聖闘士といえども、実際は生身の人間。本当の黄金聖衣を纏わなければ、僅かながらも負ける確率は上がることになる。

何より、アレキは水鹿とのバトルで体力も激しく消耗しているはずだ。自分があの小宇宙から感じ取る限り、セブンセンスすら凌駕し、互いの小宇宙を限界突破した凍気をぶつけ合っていたに違いない。

だというのに、アレキはこれからテイスとも戦うつもりでいるというのか。翔馬は

どうしてもアレキだけに任せ切ることなどできなかつた。

しかし、アレキはそんな翔馬の心配をよそに、右の手のひらに小宇宙と凍気を貯め始めた。そして、翔馬に冷淡な声で言い放った。

「天馬星座よ、安心しろ。あやつの狙いは私だ」

「……」

翔馬は「なおさら安心できない！」と発しそうな口を押さえた。そしてアレキは左の人差し指をテイスの方に向けた。

「裁きに指名された祭壇座が先に行つても特に反応しなかつたのも、その証拠の一つであるとも言える。そして、君の小宇宙は私にのみ圧力を加えていた」

「……ふふ」

テイスはいかにも、といった様子で笑みを浮かべた。

だが、こんなことを当てたところで何にもならないことは事実で、何より翔馬の中の心配と不安が増して行くだけだった。

アレキはそんな翔馬の心情を悟つたのか、こう言い放った。

「……元から私は死んでいたんだ。今更地獄に落ちることなど、怖くはないさ」

「でも……」

「水鹿のことならば、心配はいらないよ。あの子は元から一人でも行きていけるような

子なのだから」

「……」

だが、翔馬はどうしても腑に落ちぬ様子で、顔を下に向けた。アレキは本当にそれでいいのか、別れの言葉を言わなくともいいのか。

アレキは「ふう」と息をついて、翔馬の背中をとんと叩いた。

「そんなに不安ならば……私の代わりに言ってくれないか？」

「……？」

「水瓶座のアレキが『水鹿のことをよろしく頼んだ』、と……」

「……水瓶座……！」

翔馬は顔をバツと上げて、目の前にいるアレキを見つめた。

アレキはコクリと首を縦に振って、その意を見せた。翔馬は胸に拳を置いて、アレキの頷きに、自分も頷きで返した。そして、軽く会釈をし、

「水瓶座のアレキ。先を失礼する」

そう言ってテーブルの先にある右の階段へと足を向け、そのまま去って行った。

本当はティースの相手は自分がしたかった。だが、アレキの瞳に迷いはなく、真っ直ぐなものだった。

(俺の出る幕はない……)

翔馬はぐつと下唇を噛み締めた。

翔馬がそうして去って行ったのを確認すれば、ティースは鞭をぐんつと伸ばして、それをアレキに向けた。

「覚悟はよろしいですか？」

「……ふんっ」

問われるまでもない、と伝えるかのように、アレキは右手に貯めていた強い凍気の塊をティースに投げつけた。

ティースはある程度、そのことを予測できていたのか、その塊をボールを打つかのようには鞭で打った。その途端、塊は一瞬にして形を崩し、すぐに消え去った。

アレキはそれを見ると、特に驚く様子もなく、今度は手を重ねて、そこに小宇宙と凍気を貯め始めた。

「なるほど、鞭使いか……」

「ええ」

ぼそりと呟いたアレキの前で、ティースはこくりと静かに頷いた。

「バルロンの鞭は、どんな鞭にも負けない、とフィーロ様からお聞きしたことがあります」

ティースは手元に持っているピン、と鞭を伸ばした。確かに、見る限りでは今まで見

てきた鞭よりも、頑丈そうで、打たれたら大ダメージを受けそうだ。

だが、アレキは「フツ」とそれをあざ笑うかのように鼻で笑みを浮かべた。ティースはそんなアレキの態度が気に障ったのか、軽く睨みつけて口調を強めた。

「何がおかしいのですか?」

「……………いや……………」

だが、アレキはその不愉快な笑みを止めるはずがない。アレキは小宇宙と凍気を込めた重ねた手をぐつと握り、強く前に出しつつも、まだ小宇宙を貯めていた。

そして、その小宇宙を貯めながら、アレキはティースに向かって言い放ったのである。

「君は他人の評価をそのまま受け入れるようだね」

「フイー口様の言うことは絶対ですから、当然のこと」

「なるほど……………上司に忠実でよろしいな」

アレキは一瞬だけ優しく微笑んだ。

「だが」

しかし、すぐに元の厳しく冷たい表情に戻った。アレキの両手の中に込もってきている小宇宙が、そろそろ裁きの間全体を包み込むように冷え始めていた。ティースはその小宇宙の莫大さに、思わずキョロキョロと辺りに目配せしていた。

アレキは更に小宇宙を両手に集中させながら、ティースに言い放った。

「その鞭も私の凍気の前では無用の長物だ」

「何を……!」

「冥衣の強度は白銀聖衣や青銅聖衣と同等と見受ける。故に、絶対零度を極めた私の小宇宙に勝てるはずがない」

アレキは自分の纏っている冥衣を少しばかり見つめた。正規の黄金聖衣ならば、ここまでポロポロにならず、むしろ無傷でここまで来れたであろう。

そろそろ小宇宙が十分に貯まってきたところで、アレキは本格的に構え始めた。そして、軽く笑みを浮かべた。

「さあ、天英星よ。私とともに地獄に落ちてもらうぞ」

「なっ……! 貴方は……!」

「どちらせよ、私のこの身はもう長くは保たん。いつそのこと、ここで道連れになるのもいいというもの」

アレキがそう言った途端、小宇宙によって起こる爆風が、上から巻き上がり、二人の髪の毛を中へと掻き上げられた。

「それに、ここに一面を凍らせておけば、迂闊に人は入らぬはずだ……」

「なっ……!」

(まさか、あいつは己の凍気でこの裁きの間一帯を凍らすつもりなのですか……!)

ティースはひどく驚きながら、アレキに込もつていく小宇宙と凍気をひたすら見ている。

この辺り一面を凍らすために、ここまで凍気を貯める——そんな無茶をする者など、今まで見たことがない——……！

「……………っ！」

気が付けば、寒さによるものが、それとも小宇宙の圧力によるものか分からないが、尋常でないプレッシャーに襲われ、ティースは体を動かさずにいた。

ティースは悔しげに顔を見上げた。

これが——黄金聖闘士の本来の力だというのか。下手をすれば、冥界三巨頭に勝ると言えるもの。もちろん、自分の上司である天貴星・グリフォンのフィードでさえ敵わぬだろう。

——だからこそ、咄嗟にこの言葉が出た。

「水瓶座！ 本当によいのですか!? 貴方のその力さえあれば、この戦い、止められるはず……………！」

そう、今回の戦い、冥王軍側が不利な立場にいるのだ。黄金聖闘士の全力がこれならば、すぐにこの戦い、終わるはずだ。

だが、アレキは「いや」と、首を横に振って、こう言った。

「……アテナとハーデス、神同士の戦いに、我ら人間は不要というものだ」

どんなに今回の冥王軍側が弱体化してあろうが、なんだろうが、その大元は神同士の争い。自分たち人間がわざわざ介入してまで、やることではない。

そろそろか、というところで、アレキの体中の血管から血がピツと飛び出してきていた。これだけの小宇宙を貯めて、放とうとしているのだ、体に負荷が掛からない方がおかしい。だが、ここでやらなければ。

「いけっ！ 水瓶座、最大奥義！」

その瞬間、莫大の小宇宙が爆発した。

「オーロラ、エクスキューションツツ!!!」

アレキの重なり合った両手から、絶対零度にもなる凍気が放たれた。

その凍気は一瞬にして裁きの間を零下の北極へと変貌を遂げ、周りのものというものは、それによって白く変貌していた。その際に、ティースも裁きの間と一緒に凍りつき、最早死んでも同然になっていた。

技を放っている張本人のアレキはだんだんと凍りついていく周りを見つめながら、思っていた。

（水鹿——……）

——お前に、私の全て託す。

その瞬間、アレキの小宇宙が一気に散った。

「……………っ！」

その際のアレキの小宇宙の散り様を、水鹿は誰よりも早く感じ取っていた。

（我が師……………！）

水鹿は拳をぐぐつと握り、肩をぶるぶると小刻みに震わせて、いろいろと出そうなもの何か耐え切っていた。

「水鹿さん……………」

その水鹿の隣にいた海鳥は、水鹿の様子がおかしくなったことにいち早く気がつき、その肩をそつと支えるように触れた。

「泣くのは戦いが終わった後でいいんです。だから、今は目の前を見つめましょう？」

「……………ああ……………」

海鳥にそう言われ、水鹿はそう頷くしかなかった。

水鹿はぐつと目の前を見つめた。

——そうだ、今は一刻も早くこの戦いを起こした人物に出会い、戦いを収束させなければならぬ。いろいろ吐き出したり、泣いたりするのはその後で十分だ。

海鳥は、何とか元気（？）を出した水鹿を見て、安心したのか、ニコツと微笑んでい

た。

それを遠巻きながらに見ていた唄狼は、「ふん」と鼻を鳴らして、その様子を下らないといった感じで見ながら、二人の先を歩いていった。

それから、水鹿たちはそのまま前に進んでいった。このまま前に進めば、ハーデスの居場所も分かるかもしれない。

その途中で、水鹿はふと、海鳥に聞いた。

「……海鳥、オレたちについてきてよかったのか？」

「……うん」

海鳥はいつもの敬語ではない、元の口調で答えた。

「教皇からもこの戦いを機に戻ってもいいんじゃないかって、言われたし。今回は腕試しぐらいにはなるんじゃないかな」

「なるほどな……」

水鹿は「ふっ」と笑みを浮かべた。

だとすると、海鳥が表舞台に復帰するのはそう遠くはない未来、ということだろう。水鹿は何となく分かっていったことだが、かつての戦友がこちら側へ戻ってくるのは何となく嬉しいものがある。

しかしながら、唄狼はあまりよく思っていないようで、海鳥に言い打った。

「貴様が祭壇座の聖闘士になったのは、教皇の手助けをしたいからだろ。おとなしく裏舞台にいろ。足手まといになるだけだ」

「唄狼……お前……」

この場に及んで、まだそんなことを言うのか。水鹿はひどく呆れていた。

言われた海鳥は額に汗を垂らしながら、口元をピクピクと引きつらせていた。水鹿と同じように呆れているのと、心の底から湧き上がる何かがそうさせているのだろう。

これを水鹿が言えば、「のんびり決めていけばいい」という意味になるのかもしれないが、唄狼の場合は完全に嫌味と、他者を蹴落としたい気持ちからきている。つまり、「自分以外に強い者はいない」ということだ。

昔は口先は悪かったものの、こんな奴ではなかった、と水鹿と海鳥は思っていた。

自分たちと唄狼が出会った頃は、「イヤミなクールな奴」程度の印象だった。だが、今は「トップに立つことしか考えていない一匹狼」までにランクが変わっている。

聖域にいなかった間に唄狼の中で何が変わったのだろうか。

アテナに対するあの言葉だって、昔の唄狼のままだったら絶対に言わないし、思わない。昔の唄狼は良かれ悪かれ、自分とアテナの関係性や立場はしっかり分かっているはずなのだ。

なのに、何故、今になってこうして周りや聖闘士たち、そしてアテナに対してさえ、ど

こか否定的で距離を置こうとしているのか。

確かに、唄狼が一匹狼だったのは昔からだだったが、ここまでひどくはなかった。人見知りもひどい方であったが、今よりは人当たりもよく、海鳥との言い合いにしろ、もうちよつと面白いものがあつた。

男ならば昔のことは振り返るな、と言われるかもしれないが、こういう場合、昔の方が良かった、と思ひ出さざるをえない。

「……何があつたかは分からないけど、このままでもよくはない、よね」
「……だな」

水鹿は海鳥の意見に概ね同意だった。

このままアテナに忠誠を誓わないとなれば、聖闘士としては大問題であろう。確かに時々アテナのためではなく、自分のため、という聖闘士もいるであろうが、唄狼はそれを行き過ぎている感じが拭えない。

何となくだが、水鹿は嫌な予感がしていた。妙な胸騒ぎが先ほどから止まる気配がないのである。

(……)

水鹿はぐつと強く押さえつけるように胸を抑えた。

いや、まさか、唄狼に限ってそんなこと、あり得るはずがない。

「……」

だが、唄狼の纏う小宇宙は、水鹿のその胸騒ぎを抑えてくれようとはしなかった。な
んでだか、先に進むにつれて、唄狼の小宇宙が、聖闘士のものであるはずが、そうでな
いもののように感じてしまうのだ。

水鹿自身、友を疑うような真似はしたくはなかった。しかし、自分の目が目の前にあ
る現実と小宇宙を誤魔化せないのも事実だった。

水鹿が不安に襲われる中、唄狼はピタリと歩くのを止めて、その場に立ち尽くした。
その数歩後ろを歩いていた水鹿と海鳥も、その足を止めて、唄狼を見た。

不安そうに、また、不思議そうに水鹿は唄狼を見つめて、話しかけた。

「……唄狼？」

だが、唄狼は黙ったまま、何も言おうとはしなかった。

数秒の沈黙ののち、唄狼はその小宇宙を敵対心と攻撃心に変えて、水鹿に向けた。

「……」

それを全身で感じ取った水鹿はまさか、とは思ったが、言わざるを得なかった。

「お前……まさか、冥王にその魂を売ったか！」

「……」

それを聞いた海鳥も額に汗を浮かべて、唄狼の方へと視線を向けた。

唄狼は「フツ」とやらしく笑みを浮かべて、水鹿の方へとその視線を向けた。

「言っただろう？ 私の行動は自分で決める、と」

その瞬間、室内だというのに、冷たい風が吹いた気がした。

「……この小宇宙！」

「……！」

「そんな……！」

「……っ」

遠く離れていた白虎たちにも、なんとなくだが、唄狼のその小宇宙の変化を感じ取ることができた。

「アテナ……」

「……」

ラティエルは予想外だ、と言わんばかりの表情で、顔を俯けた。

現存しておらず、故人になった聖闘士が冥闘士になるだけではなく、こうして現存し、生きている聖闘士さえも手中に収めるとは予測がつかなかった。やはりこの戦いに關しては、聖闘士内での裏切りや仲間割れが絶えないのは仕方ないことなのだろう。前聖戦に關しても、一人の白銀聖闘士が冥王の側にいたと聞く。やはや、こういうことを未然

に防ぐのは不可能なのだろう。

ラティエルがそう悟った時、圭熊が口を開いた。

「なあ、白虎、凜猫、アテナの姉ちゃん」

「…………どうしたん？」

「…………？」

「…………」

三人の視線が圭熊の方へと向けられた。圭熊は三人の視線を感じながら、その口から言葉を発し続けた。

「俺、ずっと唄狼さんのこと、仲間だって信じてたんだけどさ…………」

「圭熊…………」

「だって、あんな綺麗な琴弾く人が悪い人だなんて、ありえないだろ？ 確かにあの人は兄ちゃんに——杯座の水鹿を敵視してたけど、それ以外気にしてなかった。普通にいい人になって思ってたのに、まさかこんな形で裏切るなんて思ってたよ」

圭熊の声と表情はどこか悲しげなものだった。いつもの少年らしい明るさが前面に出た表情や声は、どこか遠くへ行ってしまったようだ。

「アテナに無礼をはたらいたのだって、唄狼さんなりのやり方なんだって、思ってたけど、これのフラグかよ…………」

唄狼に対する呆れとも、怒りとも取れる圭熊の言い方。白虎は何を思ったのか、圭熊の元へと歩み寄って、そつと話しかけた。

「なあ、圭熊」

「白虎……」

圭熊は白虎に話しかけられて、顔を上げた。白虎はこくり、と首を軽くながらも縦に振り、続けた。

「そのー、な……こういうのって何て声をかけたらいいのか分からへんよ」

「……んだ、そりゃ」

圭熊は思わずプツと吹き出してしまった。突然話しかけてきたかと思えば、それか。

その次の瞬間、白虎の力強い声が鳴り響いた。

「でもなー！」

白虎はぎゅつ、と圭熊の右手を自分の両手で強く握り、それを自分たちの胸元の高さまで掲げた。

「大丈夫やから！ とりあえず、大丈夫やからな！ 圭熊は圭熊の信じられるものを信

じればええから！」

「……！」

「アンタが唄狼さんのこと信じようが信じまいが、わいらには関係ないもの！ 確かに

唄狼さんに対して色々感情が湧き上がるのも分かる！ でも、圭熊はまだ信じたいんやろ？」

「白虎……お前……」

「だから——アンタはアンタなりに、信じるもんを信じて。唄狼さん、特に大したことしてないんやし、まだまだ信じる余地はあるんやからな！」

圭熊は肩をぶるぶる、と震わしながら、ぐんつと上に力を込めた。

「……つたくー！」

そして、圭熊は頬を少しばかり赤く染めて、左手でぼりぼりと頬をかいた。

突然話しかけてきて、何を言っているかわからない、と言いながら、しつかり言ってくるではないか。圭熊はそれがないとなくおかしくて、クスツと笑みを浮かべた。

そして、白虎の方に声を向けた。

「……元よりそのつもりだったよ」

「……ん、そっか」

目をそらして照れ臭そうにしている圭熊の右手から、白虎はほほ笑みながら自分の両手をぱつと離れた。圭熊はその右手をすぐに引つ込めて、「つたく……もう……」と、ぼそりと呟いた。

だが、いつもの元気な少年らしい圭熊はこの場に戻ってきた。今の白虎の言葉が、圭

熊にとって何かのクスリとなったのだろう。

ラティエルは杖を地につけて、青銅聖闘士たちに向かって言い放った。

「では、白虎、圭熊、そして凜猫。私たちは先に参りましょうか」

そうして、ラティエルはにこりと、その顔にほほ笑みを浮かべながら、青銅聖闘士三人の一步前を歩き始めていた。三人、特に白虎と圭熊はその後を追うように、小走り気味に歩き始めた。

「……唄狼、どうして……」

水鹿は何もかも信じられない様子で、唄狼を見つめていた。ただでさえ、師匠のアレキが本格的にこの世からいなくなったあとに、この裏切り。機から見れば、ただの追い討ちにしか見えない。無論、海鳥の目からしても、このことは追い討ちにしか見えていなかった。

唄狼はすべてをあざ笑うかのように、「ハッ」と鼻で笑みを浮かべた。

「確かに、聖闘士がこうして冥闘士に側に堕ちるのは誰もが疑問に持つことよな、水鹿」

「唄狼……」

「私は力が欲しいのだよ、水鹿。お前を倒し、一番になるだけの力をな」

そう言うのと、唄狼は琴を構え、すっと目を細めて、その視線を海鳥へと向き直した。

「だが、ここで海鳥。貴様が戦線復帰するとは思わなかった」

「……」

海鳥の肩がびくん、と動いた。確かに自分は常に裏方に立ち、教皇の元でその補佐をしていたのだ。唄狼の言うとおおり、以前の通り戦線に来るなど、本来ならばあり得ぬことだ。

唄狼は非常に疑り深い顔で、海鳥の顔を見つめた。そして、若干声のトーンを低めて、海鳥に聞いた。

「何が目的だ？ 戦線復帰するつもりはなかっただろうか？」

「……僕は……」

海鳥は拳を握りつけ、唄狼を睨みつけるように、じつと見つめた。唄狼はその海鳥の睨みに対して、返すように睨み、見つめた。

数秒その状態が続いたのち、海鳥は口を開いて、唄狼にこう言った。

「僕は聖域のため、地上のため、アテナのために戦うだけ。自分の力を己の為に使うようなお前には分からないだろうが」

唄狼は海鳥のその言葉を聞いて、「相変わらずだ」といった様子で笑みを浮かべた。

「……ふっ、さすが私よりも年上といったところか。言い方が少々生意気だな」

「……」

唄狼は聖衣の足のかかと部分を鳴らして、コツコツと音を立てた。こちらに寄つてくる唄狼に、海鳥は思わず厳しい目で見つめた。

唄狼は「ふっ」と笑い、海鳥に言った。

「お前もここで倒しておきたいところだが、私の目的はあくまでも水鹿だからな。今回は見逃してやろう」

「何を偉そうに……」

海鳥の握る拳の強さが一気に強くなる。そのとき、ぽん、と海鳥の肩を軽くながらも叩く音が鳴った。海鳥がそれに気付いて、後ろを振り返ると、そこには水鹿がじつと海鳥を見つめていた。

「水鹿……」

「……」

水鹿はこくん、と頷いて、海鳥の一步目の前に出た。水鹿はそのまま唄狼を睨みつけるように見つめた。唄狼はやつと出てきた水鹿に対して、フツと笑いかけてやった。水鹿はその笑みから、なんとなく不快感を感じたが、どうにかして抑えた。

そして、言葉を海鳥の方へと投げつけた。

「海鳥。お前は先に行つて、この戦いの根源の手がかりを掴んでこい」

「えっ……」

水鹿はふつと微笑み、「安心しろ」と呟いた。

「絶対そっち行くから」

「で、でも……」

「それにな、海鳥」

水鹿は再び目の前にいる人物へと視線を向けた。そして、目を細めてその姿を見つめた。

今、自分の目の前にいる人物は、自分と戦い、頂点に立つことを望んでいる。

ならば——……。

水鹿はぎゅつ、と手を丸めて、唄狼の方を見つめたまま海鳥へと声を向けた。

「この戦い、オレと唄狼の戦いだ。お前がいても、邪魔になるだけかもしれない」

「……水鹿……」

「だから、ここはオレに任せて行ってこい」

「……分かった」

海鳥は水鹿の後ろ一歩手前に足を引くと、そのまま水鹿の横まで移動して、そこから前へと走り始めた。と、ふと、言い残したことがあるのか、水鹿の方に顔を向けて、こんなことを言った。

「絶対の絶対、こつちに来てッッ!!!」

水鹿は思わず目を見開いて驚いたが、すぐに元に戻って、「ああ」とほほ笑みながら頷いた。

「分かってる！ オレは約束は破らん！」

「……うん！」

海鳥はどこか安心したのか、こくりと力強く頷いた。水鹿もその海鳥の様子を見て何となくリラックスできたのか、肩の力を抜いた。

そして、海鳥の走る音がだんだんと遠ざかり、聞こえなくなった途端、水鹿と唄狼の間に重い沈黙が流れた。

26 : 「豎琴と氷槍」

ラピスがラズリの死体を一旦安置所に置き、そこから歩きで外へと出ようとしていたところだった。安置所の入り口付近に、魚座のジェイドが、入り口付近に立っている一本の白い柱に体を寄りかからせ、そこに静かに佇んでいたのである。まるで、安置所を守っているようだった。もちろん、そのジェイドの目の前には幾多なる薔薇がそこに並んでいた。安置所で眠っている魂を見送るように。

ふと、ジェイドはラピスの存在に気が付いたのか、柱から離れて、てくてくとラピスの方へと歩いていった。ラピスはこちらに歩み寄ってくるジェイドに対して軽くほほ笑んだ。

「ジェイド。こんな所にいたんだね」

「……」

ジェイドは黙ったまま、ラピスの言ったことに対して、こくん、と頷いた。

大方、安置所に何者かが侵入しないように、と誰かに頼まれて見張っているであろう。十二宮もよほどのことがなければ、ジェイドが守護している双魚宮まで辿り着くことはないゆえ、丁度いい感じの暇潰しになるのかもしれない。ただし、何かあった時は

すぐに双魚宮に飛べるようにしてやるようではあったが。

ラピスは安置所の入り口から、聖域の様子を眺めていた。ここが非常に分かりづらいたところにあるとは言われているのは、聖域のかなり外れの方にあるのと、双魚宮と同じぐらいの高い場所にあるからなのだが、一回分かってしまえばあとは行きやすい。

ジェイドは「ふう」と一息ついて、ラピスの隣に並び、同じように聖域の様子を眺めた。

「今回はアテナ側無双かな……」

「まあ、今のところ特別に強い奴はいないしね……」

特別に強い奴はいたことにはいたのだが、自分たち聖闘士が倒してしまったことはあえて黙っておいた。というよりも、ジェイドなら察してくれるだろう。現に今も「ああ……」と声を上げて、何か察したようだった。ラピスがここにきたのもそんな感じであつたのだろうから。

ジェイドはしばらくすると、どこか懐かしむような口ぶりですら、こんなことを言い出した。

「そういえばさ、関係ないけど、私たちが出会ったのもここだったよね」

「……ああ、ああ、そうだったね……」

ラピスは突然過去の話題を振られて、びっくりしてしまったのか、思わず戸惑って言

葉を詰まらせてしまったが、すぐに元に戻って、こくりと頷いた。

そういえば、あの時はジェイドが聖闘士の存在を知らず、というより知ったばかりな上に、かなり弱虫な少年で、こんな風に会話できるようになるとは思ひもしなかった。そんなジェイドが黄金聖闘士を目指した理由は「何となく」だったゆえに、マイペースなのは昔からだったようだが。

ラピスとジェイドはそんなことを思いながら、戦火に包まれている聖域を見つめ続けた。

ハーデス城では白銀聖闘士二人の小宇宙や力がぶつかり合っていた。片方の白銀聖闘士は竖琴の音色で攻撃し、もう片方の白銀聖闘士はそれに対して凍気で対抗していた。

——この二人は、言うまでもなく、琴座の唄狼と杯座の水鹿だった。

「うっ！」

「っ！」

二人の力がその中心でバチン、と弾ける。前に戦った時は水鹿にその気がなかったゆえに、唄狼の方が有利だったが、こうして真剣に戦ってみると、互いに差がないことが分かる。とはいえども、どちらかが小宇宙を極限まで高めれば、黄金聖闘士みたく最後

まで拮抗することは恐らくないのかもしれない。強いとはいえども、お互い、白銀聖闘士なのだから。

唄狼はそのことが分かっていたのか、水鹿に攻撃する毎に小宇宙を高めていた。自分が無理しない程度にどこまで燃やすことができるのか、試しているのだろう。

一方で水鹿はどこで一気に攻撃をしかければいいのか、考え悩んでいた。唄狼のようにちよくちよく攻撃したところで、向こうには無駄なことがわかつている。何故ならば、唄狼の本体は、あの豎琴にあるといつても過言でないからである。あの豎琴さえどうにかすれば——水鹿の勝機はほぼ確定のようなものだ。

だが、唄狼は常に琴を片手に持ち、その分琴に何もされぬように守りも相当固い。修行時代に一度琴を奪おうと戦ってみたか、なかなか奪えずじまいだった。

唄狼は琴を弾きながら、水鹿にさらなる鉄槌を加え続けていた。

「ストリンガーノクターン！」

「——っ！」

豎琴の攻撃的な音色が水鹿の耳や体を襲う。頭が痛く、体がどことなく痺れ、何も考えられない。音色はびしびし、と電撃のように水鹿の体の中に入っていた。水鹿はこの豎琴の音色を聞いてはいけけない、と耳を咄嗟に指で塞いだものの、唄狼の攻撃的な音色は指一本で防げるほど簡単で単純なものではない。たとえ聴力を失っても、脳の中に

直接入ってくるものなのだ。水鹿の体は唄狼の豎琴の音楽が終わり近づくとだんだんと力が入らなくなっていく。水鹿は耳を指で押さえながら、その場に膝をついた。

唄狼は水鹿が何もできなくなっているのを喜ばしく思っているのか、その口元がわずかながらゆるみを帯びていた。水鹿はそれが見えたとき、心の奥底から唄狼に対する怒りや悲しみが、わき上がってきたのである。

(く、そ……！)

白虎ならば、この音色、自分の声で吹き飛ばすぐらいのことはしそうだが、あいにく自分は音楽や歌に対してはあまり器用ではないゆえ、そういう真似はできない。唄狼の豎琴の前では、さすがの水鹿とも言えども、赤子同然となるのだ。

唄狼はまさに「いい気味だ」といった様子で豎琴の弦を弾き続けた。

「どうだ、水鹿、私の豎琴の音色は」

「……っ！」

「そうか、気持ちよいか。お前のために練習したが、その甲斐もあつたようだな」

唄狼はそう言うのと、豎琴の弦を弾くのを止めて、しゃがみ込んでいる水鹿の前に歩み寄った。水鹿はこちらに歩み寄ってきた唄狼の顔を上目遣いながらも、ギンツと鋭く眼光を放って睨みつけた。唄狼はそんなことは全く気にしない様子で、水鹿の髪の毛を上

からがつしりと掴み、そのまま水鹿の体を宙へと持ち上げた。そして、水鹿にぼそりと聞いた。

「白羊宮のあれは……お前と水瓶座のアレキのものだろうか？」

「……い」

水鹿の心臓がピクツと跳ね上がった。どうして唄狼がそのことを知っているのか。唄狼は非常に納得した様子で呟いた。

「……その様子、やはりそうか」

唄狼はそう言うと、水鹿の髪の毛から、自分の手を離した。水鹿は再び、がくんと膝をつき、その場にしゃがみ込んだ。水鹿の息は荒く、今にも途切れそうであった。

だが、水鹿はそこから立ち上がろうと、全身に力を入れた。

「……っ、はぁ……」

よろつき、筋肉が緩くなつていそうな足は、不安定で、今にもそこから倒れそうであった。だが、水鹿は足を前と後ろにずらして、安定感を試みていた。唄狼はその水鹿の様子を見て、「ふん」と鼻を鳴らした。

「お前が本気ならば、こんな容易くやられていない気がするのだがな」

唄狼は、白羊宮で見たあの零下まで下がっている空間——あれを脳裏に浮かべながら言った。

実は、唄狼はあの空間を見た瞬間、しばらくの間絶句していた。この空間で水鹿が誰かと戦ってぶつかっていたのは知っていたが、それにしても異常なぐらいいだった。例えば凍気同士をぶつけたとしても、あんな風に常温から零下まで下がるぐらいの凍気などなかなかありえないものだ。それこそ黄金聖闘士レベルの力を持つてなければ。唄狼はその時ばかり、水鹿の力を恐れていたといっても過言ではなかった。

しかし、こうして戦ってみると、水鹿は自分に対して手も足も出ない状態まで陥っている。唄狼は何となく舐められているように感じたがたがない上に気に食わない。

一方の水鹿は、唄狼を攻撃しても意味がないことは分かっていた。先ほども言ったとおり、先にあの豎琴をどうにかしなければ話にならない。しかしながら、全く攻撃できず、唄狼にやられゆくままになっていた。

（くっ、仕方ない……！）

唄狼を攻撃しない、という手立ては自分にとつては足手まとい以上の何ものでもなくなった。水鹿は耐え切れなくなつて、とうとう唄狼に対して攻撃に出た。

「はあっ！」

水鹿は助走をつけて、大きく宙に跳び、そのまま足を唄狼に向けた。

「……………ふん」

唄狼はその足が自分に当たる前に、手のひらで見事に受け止めてみせた。唄狼は水鹿

の方をちらつと見て、ふっ、と鼻で笑ってみせた。

「……っ！」

水鹿は。パツ、と唄狼から離れ、その場で一回転してから地面に足を着けた。

「お前の力はこの程度か」

「……」

水鹿はぐつと手を丸める力を強めた。唄狼は肉弾戦は他よりはできないが、以前よりも断然強くなっていた。聖域からいなくなっている間に相当修行したのであろう。

(よし……)

今度は拳の中に小宇宙を込めた。こめなければ、どちらにせよ唄狼にダメージなど与えられぬ。

「はっ！」

今度は唄狼に向かって拳を放った。唄狼はそれを難なく避けた。

「だあっ！」

水鹿は再び拳を入れ、それから双方攻防一戦の戦いが始まった。水鹿が攻撃を仕掛ければ、唄狼はそれを軽々しく避けて、また唄狼も攻撃をしかければ、水鹿は腕や足でそれを受け止めるか、軽々しく避けていった。お互いに隙を許さぬものだった。黄金聖闘士でいう「千日戦争」に近い状態に二人はおちいついたのである。

この二人の攻防一戦の戦いは、時間が経つにつれて、その激しさと速度が増していった。それはただ速い拳から高速拳へ、その高速拳からほぼ光の速さと等しい光速拳へと、激しく変貌を遂げていったのである。機から見れば、二人の戦いは最早何も見えなにも同然。それほどまでに二人の力は周りを圧倒するぐらいのものだったのである。しかしながら、その攻防一戦の戦いも、唄狼の琴の弦により終わりを告げることになる。

「っ、うっ！」

水鹿の腕と脚に、豎琴の弦が鋭い光を放ちながらまとわりついたのである。水鹿は何事かと弦を視線で辿り、その源を見た。その先には唄狼の豎琴が、長い弦を放ち、自分の体にまとわりついていった。

「ストリンガー、フイーネ……」

唄狼がそう呟いた途端、水鹿を縛る弦の強さが増し、まとっている杯座の聖衣がそこからピシピシと音を立てながら、ヒビを入れていった。

「ぐっ、ううっ……！」

「……はあっ！」

そして、水鹿の皮膚にもその弦の侵食が始まったところで、水鹿の体が宙に持ち上がった。

「つ、ああつー！」

そのまま水鹿の体は唄狼の頭上を通り、そして、唄狼の後ろの床に落下し、強く打ち付けられ、体の中に一気に電撃を浴びたような痺れが走った。

そうして水鹿の体が地面に落下したところで、豎琴の弦が水鹿から離れていき、唄狼の元へと戻っていった。

「……水鹿、そんな状態ではすでに戦う気力もなくしているだろう」

唄狼は後ろを振り返し、その視線の先で倒れている水鹿を見据えていた。

水鹿は今の唄狼のストリンガーフィーネにより体や聖衣にひどく傷がついていた。弦が皮膚に対する侵食を始めていたところは、基本細く血がしたたつていたが、先ほど宙に浮かんで、その際に傷が広がったり、皮膚が引つ張られたり、更に深く食い込んだりしたのか、一部比較的に出血がひどいところもあった。

唯一、首が縛られなかったのは、唄狼のせめてもの慈悲というものか。もしあのまま首も弦に縛られていれば、こうして生きてはいられなかっただろう。

(生きてるだけ……幸せだな……)

「……つ……はあつ……」

水鹿はそんなひどく傷付いた自分の体に鞭を打ちながら、その場に立ち上がった。脚や力から、ぼたぼたと血がしたたり落ちる。だが、そんな水鹿の顔はどこか堂々として

いた。ここまで傷付いても、引き下がるつもりはない、と言っているようだった。

唄狼はその水鹿を黙ったままじつ、と見つめて、再び豎琴を構えた。

「まだ、戦うというのか……？ そんな体で……」

「……ははっ……上等だ」

水鹿は顔を俯け、ぼたぼたと血を脚と腕から床に落としながら、ゆっくり歩いて、唄狼に近付いた。

「こちらとら、まだ技も出していないんだぞ……。少しぐらい見ていけ……な？」

「……っ！」

その瞬間、唄狼の背筋がぞくりと震え上がった。一体何によるものか分からなかった、いや、分かりたくなかった。

水鹿はゆっくりと、顔を上げて、唄狼に対してにつこりと笑みを浮かべていた。唄狼はその水鹿の笑みだけで、足がビクツと一瞬だけ震え上がった。

「な、なんだ……」

「（この小宇宙は……！）」

水鹿がセブンセンスズに目覚めていたのは、もはや常識のように知ってはいたのだが、まさかここまで高まるものとは思っていなかった。下手をしたら黄金聖闘士が放っている小宇宙と同等か、それ以上のものだ。まだ、そんな小宇宙を燃やせる気力が残っ

ているのか。唄狼はさすがの水鹿でもその気をなくしているだろうと、つつきり思っていた。

水鹿はあくまでもその笑みを崩さないで、両手を上に掲げて、そこに小宇宙と凍気を集中させた。

唄狼はその構えを見た途端、はっと顔を上げて、何かに気が付いたように目を見開いた。

「水鹿……！ お前は……！」

「殴る・蹴るなど最早無駄だ。最初からこうしておけば良かったんだ……」

水鹿は唄狼をスツと見据えて、視線をそこ一点に集中させた。

（唄狼——ここからがオレの本番だ）

今までは唄狼にやられてばかりであったが、これからは自分が唄狼に対して、攻撃していくのだ。今までの唄狼の言うとおり、全力ではなかった。だからこそ、ここまで傷付いてしまったのだと、自分で思う。

しかし、これからは唄狼の望む「水鹿の全力」を味わわせるのだ。唄狼からすれば随分と魅力的であろう。

「さあ、受けろ、唄狼。オレの攻撃を」

「……っ！」

唄狼は足がすくんでいた。水鹿の小宇宙の大きさと、その圧力に耐え切れなくなっていたからだ。水鹿はそんな唄狼の様子を知ってか知らずか、鋭い無数の槍を一気に放った。

「氷槍百蓮華—— ツツツ!!!」

連なる氷の槍、氷槍が唄狼の体を一気に襲い立てた。唄狼は即座に避けようとしたのか、体を翻していたが、水鹿の氷槍は体を翻す程度で避けられる簡単なものではない。

「すべてを貫く氷の槍が、お前の足や腕程度で逃げられると思ったら大間違いだー」

そう言った水鹿は、更に氷槍を追加させ、唄狼に無数なる氷の鉄槌を食らわせた。

逃げ惑う唄狼の足元に水鹿の放った槍が突き刺さる。まるで、それは唄狼を狙った獲物のように逃がさまいとしているようだった。

唄狼は仕方まい、と思いつつ、逃げるのを止めて、豎琴を構え、そこから弦を一気に引き出した。

「ストリンガーフィーネー！」

豎琴から、長くなった弦が出てきて、水鹿の氷槍を一気に掴んでいった。しかしながら、それだけでは対処できるはずもなかった。

「……………っ！」

水鹿の氷槍というのは、その名の通りの、百にもなる槍が襲ってくるものだ。しかし、

聖闘士の中では、技名の中に入っている百というのは、あくまで例えだ。実際は、一秒間に何個飛んできているのか——誰にも分からないのだ。ストリンガーフィーネで対応していく一方で、唄狼の元へととんでいく水鹿の氷槍がだんだんとその量を増していった。このままでは拉致があかない。

「だあ——ツツ!!」

しかし、水鹿はそんな唄狼を知ってか知らずか、更にその量を上乗せし、唄狼に襲いかかった。今の水鹿はまさに、唄狼に対して遠慮がないといった様子だった。

そうこうしているうちに、唄狼の頬に何かが掠り、通り去って行っていた。その掠ったところから、少量ながら、血がタラツと唄狼の顔の曲線をつたい、落ちてきた。唄狼がそのことに気付いたのも束の間、水鹿の氷槍が一気に唄狼の足や身体を掠めるように直撃し始めたのである。

「ぐっ……っ！」

（しまった……っ！）

自分には自分の体を気にしている暇はないというのに、思わず驚き、気にしてしまった。そして、それを境に、更に唄狼の元へと氷槍が直撃する。

「……っ！」

このままでは対応しきれないものが更に対応できなくなる。どうにかしなければ、と

は思うものの、水鹿の氷槍はそんな隙を与えぬぐらいの短時間で唄狼を襲っていた。

こうなれば、その威力を手で受け止めてしまう他ない。唄狼は右腕を真つ直ぐ目の前に出して、手を広げた。そして、その手で水鹿の氷槍を食い止めようとした。

「ぐっ、ううっ……！」

だが、なんということだろうか。水鹿の氷槍の威力に、唄狼の手が追いつけていないのである。言うなれば、唄狼の手だけで防げるような威力ではない、ということだった。氷槍は数を増すにつれて、唄狼の体を徐々に後退させていった。

「——ふんっ！」

「っ！」

水鹿が最後に、と言わんばかりに、唄狼に一気に力をかけた。その瞬間、氷槍は唄狼の体を突き破るような勢いで、その体を圧迫していった。さらに、唄狼は氷槍たちに全身を押しされ、後ろにあつた壁に衝突した。

「っ……」

ぱらぱら、と壁の表面の残骸らしき欠片が、自分の頭上に落ちてくる。

唄狼は全身を震わせ、痛みが走ってくる片腕をもう片方の腕で押さえつつ、背中でポロポロに砕けた壁をつたって、その場に立ち上がるうとした。しかし、その立ち上がるうとした瞬間に、水鹿が自分の目の前に立ちはだかった。

「……」

無言の、圧力。

黙り込んだまま、何も言っていない水鹿の表情は、唄狼に対してすべてをもの語っているようにも見えた。なぜ、今更こうして本気で技を出して、がむしやらに戦っているのかを。

しかしながら、唄狼はそんな水鹿に対して、ギツと鈍い光を目から放って水鹿を睨みつけていた。唄狼の中で、先ほどのような威勢はどこかいつてしまったようだったが、水鹿とはまだ戦う意思はあったようだ。でなければ、こうして立ち上がることにすらないだろうが。

そして、水鹿は唄狼から少し離れると、ゆっくりと目を瞑り、空気を味わうかのようにな、微量ながらも冷たい小宇宙が入り混じっていた。

唄狼はどこか拍子抜けしたように「フツ」と笑みを浮かべて、水鹿に言い放った。

「水鹿……お前は何を考えているんだ？ 私にもう一度氷槍百蓮華とは……聖闘士に同じ技は二度と通じないことを忘れたか？」

「……まさか、オレが氷槍百蓮華をそのまま打つとも思ったか？」

「な、なにっ……!？」

氷槍百蓮華以外にも水鹿の得意技というものがあるというのか。

気が付くと、水鹿はフツと笑みを浮かべて、己の小宇宙と周りの凍気を手のひらの上で同化させていた。

そういうえば、言われてみれば、その小宇宙の燃やし方も普段のものとはまったく違うものであった。まるで、氷槍百蓮華の分散した威力を、一点に集中させているような――まさか。

「まだ人に対しては一度も撃つたことはない……そう、『人に対しては』な」

「くっ……!」

さすがの唄狼もここまでくると、悠長にすることは無理だと感じ取り、その場からその身を引こうとした。しかし、そう思ったのも束の間、足が何かに拘束されたかのように動かず、その場から引くことができなかった。唄狼はおそろおそろ足元を見つめた。

「氷の……鎖……?」

地面から無色透明の透き通った鎖が、零下の煙を放ちながら、唄狼の足元に巻き付いていた。どうやら、水鹿が唄狼を逃がさないように放ったものらしい。

「受ける、唄狼。この杯座の水鹿の最大奥義を」

「っ! くそっ!」

唄狼はこのままでは水鹿の思うがままだ、と思い、豎琴を構えた。幸い、腕は氷の鎖

に縛られていないようだった。唄狼は琴の弦を指にあてて、それを揺らした。

「水鹿よ、この美しい琴の音色で眠りつくのだ！ デストリップセレナーデ！」

その瞬間、唄狼の竖琴から、美しく透き通った音色が、充満した。切なく優く、だが、どこか軽やかで、聞いてて居心地がいい音色。

（このデストリップセレナーデの音色は神ですら眠りにつかせるといふ、琴座の最大奥義だ……さすがの水鹿でもこれには敵うまい……）

と、唄狼がちらりと水鹿の方へと視線を向けた。きつと、水鹿の小宇宙この音色の陰で収まっているはずだ、自分の勝機も確定だ——そう信じていた。

しかし、水鹿に限って、そんなことはあり得なかった。

「——な、何だとっ!？」

その瞬間、竖琴を演奏する唄狼の腕や手がピタツと止まった。それも無理はない。何故ならば、水鹿は音色に引き込まれず、まだ、その小宇宙を燃やしていたからだ。その顔は先ほどと同じもので、デストリップセレナーデが効くどころか無効になっていたぐらいだった。唄狼はひどく目を見開き、驚いていた。何故、水鹿に自分のデストリップセレナーデが効かないのか。

水鹿は唄狼の疑問に応えるように、言葉を放った。

「唄狼……デストリップセレナーデは風流な耳が無ければ効かないことを忘れたか？」

「……………」

「オレはそのお前の豎琴の音色を何回も聴き、その風流どころか、むしろ『当たり前』になっ
てているんだ。そんなオレに、お前のデストリップセレナーデが効くはずもないだろ
う？」

「……………っ！」

つまり、これ以上どう悪あがきしても無駄だ、ということの水鹿は言っているのだろ
う。所詮は豎琴の音色。水鹿がひれ伏すはずもなかった。

水鹿はふ、と顔を上げて、態勢を整え始めた。

「さあ、唄狼。準備は全て整ったぞ。受けるがいい。オレの、全力を」

「水鹿ッ……………」

「一本の槍も、集まれば大きく鋭い刃となる……………」

その瞬間、水鹿の凍気が唄狼を切り刻むように大きく放たれた。

「水槍、砲刃……………ッツツツ!!!」

それは水槍百蓮華の威力が一点に集まり、一つの大きな刃となったものだった。氷の
鎖で繋がれた唄狼は逃げ惑うことも許されず、そのまま水鹿の砲刃を受けることとなっ
た。

そして、その威力は今まで唄狼が見てきたものより、ひどく、かつ、その技一つだけ

で惨劇ができるといっても過言ではなかった。唄狼の周りの壁や地面はすべて崩れ去り、また、今回のハーデス城は様々な部屋や階段が縦に列となつて並んでいるのだが、それさえ突き抜けて、唄狼は吹き飛ばされたのである。

常人なら、まず、生きてはいられない。

「……………う、ぐ……………」

気が付けば、唄狼は水鹿よりもひどく傷付いていた。起き上がるのすらやつと、といったところだ。そして、道の向こう側で、水鹿は冷たい目で唄狼を見つめていた。

「く、そ……………水鹿……………」

(この悪魔が……………覚えていろ……………)

この屈辱、いつか晴らさせてもらおう。

唄狼はそう思いながら、水鹿に冷たい目で見つめられつつ、意識を落とした。その片手には、原型すら残っていない竖琴の残骸らしきものがあつた。

その二人の戦いは、向こう側にいた白虎たちまで届いていた。水鹿の強大な小宇宙は、ハーデス城全体を突き抜けるほどだった。

圭熊はその水鹿の小宇宙と同時に消えた唄狼の小宇宙を感じ取り、ボソリと呟いた。

「唄狼さんの小宇宙、盛大に消えたけど大丈夫かな……………」

その圭熊の呟きに反応した白虎と凜猫が、便乗してボソボソと呟いた。

「……盛大どころか、ビックバンの如く消えた気がするんやけど……」

「僕は派手に消えたなーって思った」

感じ方は人それぞれだが、唄狼の小宇宙の消え方はそのぐらい大胆かつ、明瞭なものだったであろう。

一方で水鹿の小宇宙のこともふと、思い出すと、三人は身の毛がよだっていた。あそこまで小宇宙を高めることができるのは、水鹿の特権でもあろうが、その水鹿の特権を使われたら、三人もただでは済まないはずだ。白虎は「ま、まあ」と笑みを浮かべながら、圭熊と凜猫に言った。

「よ、よほどのことがなけりや、水鹿だつてあそこまでにならないって！　大丈夫大丈夫！」

「……そ、そうだけどさ……」

「……」

当事者ではないものの、ここまで実力をはつきりさせられると、どうしても怖がらずにはいられなかった。そして、何となくだが、水鹿にやられてしまった唄狼に同情しざるえなかった。敵に同情を向けるとはありえぬことだが、今回ばかりはどうしても、だった。

ラティエルは色々と話している青銅聖闘士たちに、にこつとほほ笑みながら、歩み寄り、話しかけた。

「大丈夫です。そんなに不安にならなくともいいですよ」

「で、でも……」

「感受性が豊かなのはいいことです。ですが、目の前にある目標もお忘れなく、お願いします」

「……目標……」

そういえば、自分たちはこの聖戦が起きた根源を探すために、ハーデス城に乗り込んだのだった。確かに水鹿が本気を出したから、唄狼の小宇宙が消えたからどうか、関係ないはずだ。

白虎はラティエルの言うことにコクリと頷いた。

「そうですね、アテナ。わいらはその目標のためにハーデス城に乗り込んだのですからね」

「はい」

白虎とラティエルはお互い笑みを交わしながら、目の前を見た。

27:「甘い匂い」

翔馬は水鹿たちのいる方向とは逆の方向へと向かっていった。ハーデスのことを掴むには水鹿たちの後を追っても仕方ない、ということと、翔馬の向かっている方向から、大きな小宇宙の変化を感じ取ったのである。それが聖闘士によるものか、冥闘士によるものか、翔馬には感じ取れなかったが、ゆえに行ってみるしか他がなかったのだ。もし、自分以外の聖闘士がやられていたら、それこそ助けに行かねばならない。

(……水瓶座の、アレキ……)

ぐつ、と胸の上で拳を握った。あのあとの小宇宙の爆発ようから察するに、その身を呈してあの裁きの間を凍らせてしまったのである。アレキといい、水鹿といい、なんて恐ろしい師弟だろうか。確かに唄狼が必死になるのも分からないでもない。

そして、アレキに託された『水鹿のことをよろしく頼む』——……。

水鹿にこのことを言ったらどんな反応するであろうか。いつものように微笑んで、『そうか』と受け流してしまうであろうか。それとも唇を噛み締めて何かを耐え抜こうとしてしまうだろうか。

(まあ——杯座のことだから、受け流し濃厚、かな……)

翔馬は「ふう」と息をつきながら、その場を歩き進めた。弟子の反応としてそれでいいのか、とは思うものの、水鹿は人前で他人の死を引きずっているような素振りは見せぬであろう。そういう意味でなら水鹿らしいといえれば水鹿らしいのかもれないが。

そのまま歩き進めていると、ふと、何かの残骸であろう小さな石が翔馬の足にコツン、とあたったのである。

「……………」

(なんだ……………?)

翔馬はそれを、ひよいと拾い上げて、キョロキョロと辺りを見渡した。この石がこちらにきたのは、普通に目の前からだ。翔馬は一体何事があったのかと、おそろおそろ足を踏み出した。

五歩程度進んだところで、翔馬はとんでもないものを見たのである。

「……………」これは一体……………」

その惨状のすさまじさに、翔馬は思わず声を上げてしまった。

翔馬の目の前に映った光景は、壁に大きな穴が空いており、人が五人程度横に並べるぐらいの大きさだった。その上、このフロアの壁だけでなく、向こうの壁までそれは同じように穴を空けていたのだった。廊下の横幅は三メートル程度あるはずなのだが、それを向こうから一個分突き抜けていたのである。しかもこの壁はそこまで脆くはなく、

むしろ戦場になるのだから、そこそこ頑丈で、少し衝撃を加えられた程度では崩れない。そんなものを何枚も突き抜けるなど——一体誰がそんなことをしたというのか。

その答えは、すぐ翔馬の目へ飛び込んできた。

「……………」

翔馬が後ろに視線を動かすと、そこには琴座の唄狼が壁が崩れたことよってできた瓦礫の中で、その目を閉じて意識を失っていたのである。翔馬は思わず唄狼の元へと駆け寄り、その体を揺さぶった。

「お、おい……………琴座？　大丈夫か？」

「……………」

翔馬が唄狼の体を揺さぶると、唄狼の顔がピクツと動いた。どうやらまだ死んではないようだった。翔馬はそのことだけ確認すると、唄狼の体の上にある壁の残骸をどかし払いながら、唄狼の体を拾い上げた。唄狼の体は琴の奏者といえども、やはり聖闘士らしくそれなりにがっしりしたもので、それなりの重さはあった。

(……………にしても、俺はこいつを助けて良かったのだろうか)

とりあえず同じ聖闘士の「よしみ」として助けてやったものの、唄狼自体はアテナに無礼をはたらいた人物だ。翔馬はここまでやっておいて難だとは思ったが、「放置しておけばそのうち燃え尽きるのだから、こうして助けられない方が良かった」と心から思った

のである。言い合った時は完全に自分の方が敵意むき出しだったのだから、こんなところで助けるのは色々とおかしいような気もしないでもないが——……。

(助けてしまったものは助けてしまったし……まあ、いいか)

どちらにせよ、助けなければ死体としてハーデス城の下に埋まるだけだ。聖闘士として、ハーデス城が自分の墓になるなどさすがに勘弁していただきたいところだろう。唄狼がそう思っているかどうかは分からないが、自分なら絶対にお断りだ。

「つしよ……」

翔馬は唄狼の片腕をこちらの肩に回して、そのまま己の足を前進させていった。

唄狼が自分に対してどんな感情を抱いているのか分からないが、さつきも言ったとおり、あくまでも同じ聖闘士の「よしみ」。自分はそれ以上の感情などは持ち合わせていない。

(それに、悔しいが、俺よりも階級も上で強いし……戦力程度にはなってくれないとな)
自分よりも上——その事実だけは、どうやっても塗り替えることができないものだった。

そうして歩き続けていると、翔馬の鼻に甘い匂いが襲いかかってきたのである。

(……?)

思わず顔を上げて、くんくん、とその匂いを嗅いだ。この匂い、どうやらチョコレー

トやそういった甘いものの匂いで、子どもや女性にとっては非常に心地よい匂いだった。

ただ——甘いものが苦手な翔馬にとっては、ただの地獄だった。

翔馬は鼻をつまみながら、力一杯足を踏み込んだ。この匂い、進んでいくにつれて、だんだんと強くなっていく気がするのである。

(……誰かが、お菓子を食べているのか?)

と、たどり着いたのは、とある一角にある部屋だった。そこからはチョコレート以外にもチーズや生クリーム、そして牛乳やイチゴ等の果物——とりあえず、様々な甘味や果物が混ざった、吐き気がするぐらいの甘ったるい匂いとその部屋から匂ってきているのである。

翔馬は息を飲み、何か意を決したのかのようにそつ、とその部屋に足を踏み入れてみた。そして部屋の中を見てみると、牛乳や生クリームやが床に散らばり飛散しており、とてもではないが、足の踏み場がなかった。翔馬が「せめて、掃除ぐらいしておけ……」と思いながら、視線を床から数メートル先へと移すと、白い帽子を被ったコックらしき誰かが、そこに立っていたのである。そして、そのコックが腕を動かしているのはその背中からでも伝わっていた。

(しかし、何故こんなところにコックが……?)

大方、ハーデス城で食事を作っている者なのかもしれないが、それにしても戦いが始まってに逃げないのも不自然だ。翔馬は少しばかり気になって、ソロツと相手の方へと近寄ってみたのである。普通に後ろから見ると、白い衣服を纏った姿はコックそのものであり、大して怪しい様子はなかった。しかしながら、やはりどこか引つかかる。こんなところまで食作りに励むなど、余裕を見せすぎであろう。

「……ん」

コックは翔馬の気配にやつと気が付いたのか、料理をしているその腕を止めて、ことんと持っていたものを机の上へと置いた。そして、翔馬の方へ振り向き、ジツと見据えていた。長髪な部類ではあるものの、その前髪はコックらしくオールバックをして、帽子を被りやすくしてあるようだった。

「お前たち、何をしている？ ここはお前たちのような子どもがくるころじゃない」
「……」

翔馬はちらつと自分が肩に抱えている唄狼を見てから、再びコックを見つめた。
(この小宇宙……冥闘士の臭いがする……)

先ほどはコックのことをあまり意識して見なかったが、今、こうしてしつかり対面して互いを見ると、その小宇宙をはつきり感じ取ることができる。

コックは「ふん」と鼻を鳴らしながら、泡立て器を持った。

「まあ、子どもとはいえ、聖闘士か。確かにそう簡単に去るはずもないか」

「貴様……！」

「クリームウエーブ！」

その瞬間、翔馬が何も言えないうちに、生クリームの甘ったるい大洪水が翔馬たちを襲った。その生クリームは泡立て器についていた生クリームの量を小宇宙を増していたようで、いくらでも増えるようだった。

「うっぐっ……！」

クリームが水のようにこちらを圧迫して、前を見ることはもちろん、動くことすらままならない。このクリームの波、本当の波のような威力はあるらしかった。

コックはクリームウエーブを放ちながら、自らその名を名乗った。

「私は天哭星ハーピーのビター。普段はこうしてハーデス城の料理長を勤めている」

コック・天哭星ハーピーのビターはクリームウエーブの波の強さをだんだんと強めた。時間が経つにつれて、そのクリームは、翔馬の足や体がその場でもつていかれそうなくらいのものになっていった。

「クリームが泡立つためには卵がなければ……レイジングエッグ」

ビターがそう言うのと、卵の形をしたものが、クリームの中へ入っていき、さらにクリームの渦をふわっと柔らかくしつ、翔馬の体を圧迫する力を強めた。

——この場をどうにかして切り抜けなければ。ただでさえ人をこうして抱えているに、そのまま戦うなど無茶な話だ。

「……………ふんっ……………」

翔馬はクリームの圧力に飲まれつつも、腕を伸ばして、前へへと向けた。クリームが重くのしかかり、この態勢では数分も持たない。すぐに腕を曲げて腰の辺りまで引つ込め、視点と狙いを一点に定めた。

（大丈夫だ……………できる……………）

翔馬は一旦目を閉じ、周りの雰囲気や空気を感じ取った。クリームだらけになった翔馬の周りは、確かにクリームしかない。だが、その外のものはずかながらも小宇宙で大抵のものは察せるはずだ。

数々の調理器具、食器棚、その中に大量の食器、大型の冷蔵庫に、このクリームの根源である泡立て器と、その持ち主であるハーピーのビター——翔馬はそれらがどこにあるのか、そして、誰がどこにいるのか、感じ取れるだけ感じ取った。

（——いけるか）

翔馬はこの部屋のすべてを大体把握することができたのか、クリームに埋れながらもスツと腕をしつかり曲げて、足を前後に踏み入れて、構えを取った。

「——はあっ！」

そして、拳を前に力強く出し、クリームの波を引き裂いた。

「ペガサス、流、星、拳——ツツツ!!!」

流星となり、何もかも破壊するような数々の星が、クリームの中を風のように通り過ぎていった。その時のクリームの残骸は、どうやら幻覚だったのか、空となつて一緒に消えていつてしまった。翔馬はそれだけ確認すると、わずかに息を上げながら、ビターの方へと視線を向けた。するも、ビターの手の中にある泡立て器が、クリームがすべて散つた後にその身をピキピキと鳴り響かせ、その場で鋭い音を立てながら割つてみせた。どうやら、タイムラグで今頃流星拳によるダメージが出てきたらしい。

ビターは泡立て器がすべて碎け、散つていくのを確認すると、両手をパンパンと払い叩き、泡立て器の残骸を床に落とした。

「お前、小宇宙的に青銅聖闘士か。最近の青銅聖闘士は。パワフルだと聞いていたが、お前も例外ではないらしいな。名は？」

「……ああ……俺の名前は天馬星座の翔馬。お前の言う通り青銅聖闘士だ」

翔馬は今まで肩に抱えていた唄狼の体を、そつと、しかし乱暴気味に部屋の入り口側に落とした。体が軽くなり、自由に動けるようになったのか、肩や腕を軽くながらも、回してみた。ビターはそれを見ながら、フツと笑みを浮かべた。

「そうか、天馬星座か。数ある聖戦の中で唯一ハーデス様に傷を付けた人間の星座か

……

「……」

「ふふ、いいぞ、面白い。そんな誇り高い天馬星座になれるなど、よほど強いに違いない」
ビターはそう言うと、白いコック衣装を大袈裟に脱ぎ払った。そして、天哭星の冥衣であろうものが、そのコック衣装の下から出てきていた。冥闘士らしい、刺々しいデザインのその冥衣は、青銅聖闘士や白銀聖闘士の聖衣のように体の部分部分だけ纏うものではなく、ビターの体全体を纏っていた。

「……冥衣は脆いわりに体を覆う面積だけは立派なんだな」

「逆に考えろ。脆いからこそ体を覆う面積だけは広いのだと」

「ああ……なるほどな」

そういえば、雑兵の冥衣でさえも全身を纏っていたような気がしなくてもなかった。その上、ビターのように頭に覆うものはマスクではなく、ヘルメット状になっていた記憶もある。聖闘士のように全身を覆うような冥衣は、冥界三巨頭などの他上級冥闘士ぐらいのものかと思っていたが、どうやら違っていたようだ。天哭星という位置がどれだけ上なのかは知らないが、とりあえず、料理長というだけで、冥闘士の中での位置はそこまで高くないだろう。天英星バルロンのティースみたく、上から絶対的な信頼を寄せられているような雰囲気も、ビターからは流れていない。

そして、それらから、翔馬は何となくながらに「いける」と思った。確かに自分は青銅聖闘士で、その力は一部の冥闘士に及ばないし、見下されるかもしれない。だが、過去にあったクオーツとの戦いのことを思えば、まだまだ楽だと思えるのだ。クオーツの時は自分と白虎、青銅聖闘士二人がかりでも敵わず、白銀聖闘士の中でも特に優秀な水鹿が一人でクオーツと戦ってやっと追い詰めることができたぐらいだ。クオーツの時はそこにいるだけでも十分な存在感と小宇宙による圧力を味わうことはできたが、今回のピターはいかにも冥闘士らしい小宇宙で、また、黄金聖闘士のような強い小宇宙は感じ取れないゆえ、まだクオーツよりは楽であろう。しかし、実際に本当にそうであろうかどうかは、戦ってみなければ分からないのだが。

だが、勝算があるのも事実といえば事実。戦って勝てるのならば——それが一番いい。

「ふー……」

翔馬はグツと拳を力強く握った。向こうも俄然やる気になっているみたいだし、自分もそれに恥じぬようにやってみようではないか。天馬星座という、立派な星座に恥じぬような、そんな戦いを。

思えば、こうして自分一人で聖闘士以外を敵ににして戦いをするのもしかしたら初めてかもしれない。今までは白虎と戦ったり一緒にいたり、また、相手が黄金聖闘士レ

ベルだったりして、自分の手には負えないというのが要因だが。

こうして一人で戦えるということは、つまり、自分の実力を思い切つて發揮することができるいい機会という意味でもある。

「……ふん」

翔馬は思わずその顔に笑みを零した。体の奥底や心の奥底から、自然とやる気とその気合いが満ち溢れてくるのである。

——こうなつたら、思う存分、暴れてやろうではないか。

翔馬は足を肩幅まで広げ、ビターをその目で捉えた。ビターは何事にも怖じないといった様子で、黙つて腕を組み、不審そうな顔で翔馬の様子を見ていた。確かにこれから戦う相手が、これからというときに、突然笑みを浮かべたら不審がるのも不思議ではないが。翔馬はそんなビターの様子に構わず、スツと腕を上げて、その態勢に入った。

「……さあ、受けよ。天翔る天馬の流星を」

翔馬はそう言うと、上半身を使つて、腕で天馬星座の十三の星の軌跡を描き始めた。ビターはスツと何かを見透かしているように目を細めた。

その次の瞬間、翔馬の拳がマツハの流星を描いた。

「ペガサス、流星拳——ツツ!!!」

ビターの体にその流星は次々と直撃していった。ビターの腹回り、胸や心臓付近、そ

して腕といった場所が流星によって支配されていく。しかし、ダメージを受けているはずのビターの表情は至って冷静で、いつも通りのものだった。まるで、翔馬の流星拳がまったく効いていないよつにうかがえた。

「はあああああ……!!」

翔馬はそれに対して少しばかり悔しく思えたのか、更にペガサス流星拳の威力を強めようと、拳を更に固く握り締め、繰り出すスピードもマツハを超えるようなものにしてみた。しかし、それでもビターの表情は変わることはなかった。

「……—つくー!」

翔馬はこのままではダメだ、とペガサス流星拳をビターに繰り出し、あてるのをピタツと止めてしまった。まさか、ビターは翔馬の技を無効にしてしまうぐらいの耐久性を兼ね備えているというのか。だとしたら、このまま闇雲に技を繰り出してもビターに技は効かない。どうにかして、ビターの急所を見極めて、そこを狙うしかない。

いくらその冥衣の体の覆う面積が広いとはいえ、どこか隙はあるに違いない。一番簡単なところではいえば——マスクで覆われていない、頭、後頭部である。

翔馬はザツと足を踏み込み、ビターを見つめた。ビターの後頭部に当てるまで、どのくらいの小宇宙や時間を要するか、それも重要であった。遅すぎると、翔馬の体力の方が先に限界点を突破しかねないだろう。何より、先ほどのクリームウェーブのような技

をこちらにあてられたら、それだけでこちらの体力は消費し、たまったものではない。先ほどはペガサス流星拳を放つて、クリームウエーブの効果を切らしたが、それを繰り返してしまえば、やはりこちらの体力が切れ切れになる。

翔馬的にはさつさと攻撃して、さつさと終わらせてしまいたいところだ。

(……っし、いくぞ！)

翔馬は力強く足を踏み込んでから、一気に宙へとその身を跳躍させた。

「——はあっ！」

そのまま身体を回転させ、ビターの後頭部に足による拳をくわえようと試みた。場合によっては大地をも砕け散る威力を持つ聖闘士の蹴りだ。人の後頭部を割ることなど容易くできるものであろう——が。

「っ！」

ガクン、と翔馬の身体が一気に重くなり、床へ叩き落とされた。その際、落ちていた調理器具などがガシャンと大きな音を立てて、どこかへと飛んでいってしまった。

「これは……はち、みつ？」

翔馬は床に落とされた自分の様子を見ながら、そう呟いた。翔馬の腹や聖衣の上には、黄色とオレンジ色に輝く、強く固い粘り気がある液体、言わば蜂蜜がかかっていたのである。

ビターはコツコツとヒールを鳴らしながら、翔馬の目の前まで寄り、堂々と出で立った。そして、目を細めて口からその声を発した。

「ハニートラップだ。お前がこうして接近して攻撃する前に、蜂蜜を事前に用意しておいていたのだ。まさか、こんな簡単に成功するとは思ってはいなかった、が……」

「……っ！」

「そして、その蜂蜜にはかけられた者に対して、必要以上の圧力がかかるように仕掛けられている」

「っ、ぐっ！」

翔馬はそんなはずはない、とその場で立ち上がろうとしたものの、ビターの言う通り、蜂蜜がかかっている部分、とくに腹に圧力がかかり、思うように立ち上がることができない。なら、蜂蜜をどかせばいい、と蜂蜜に手で触れてみるものの、蜂蜜は液状。指の隙間からドロドロ滴り落ちて、下手をすれば翔馬の身体を覆う蜂蜜の面積を増やしかなない。

「……っ！」

まさしく、絶体絶命、といったところか。翔馬はビターを睨みつけて、緊張感と同時に己に対する危機感をその身で受け止めていた。

水鹿は唄狼を倒した後、その先に進んでいた。その最中で、自分が唄狼にしたことや、また、その時のことを思い出していた。

あの時の自分は、やられっぱなしという立場が嫌で、唄狼に対して反撃をし返していた。勿論、唄狼に受けた分を返すつもりで、それ以上は深くも考えてはいないし、唄狼を殺そうとする気さえなかった。しかしながら、あの壁を数枚突き抜け、唄狼に致命傷レベルの技を受けさせたこと——あの時は気が立っていて、何にも感じていなかったのだが、今になって冷静になると、あんなこと、よほどの聖闘士でない限りできるわけがない。通常の白銀聖闘士でさえ、壁に穴が空くレベルの拳で精一杯だというのに、自分は一体どこまで気が立っていたのか。いや、それだけではなく、自分の小宇宙がどこまで高まっていたのか、その時ばかりは客観視できていなかった。

(……きつと、小宇宙燃やすだけ燃やし、ぶつけたら身の回りのもの、すべて破壊しかねないのではないか？ それこそ白虎のあの声以上に……)

水鹿は自分の中にある力や能力を、完全に見誤っていたのかもしれない。確かに自分が普通の白銀聖闘士よりも強いことは薄々と分かつてはいた。だからこそ、普段は白虎たちのサポートに回って、支える役目をしてきた。しかしながら、そうやって自覚をし、行動は選んできたものの、自分の力がここまで巨大なものであるとは知らなかった。もし、今回のことがなければ、こうして自分の力を省みることはできなかったであろう。

それと同時に、そんな巨大な威力の自分の技を受けた唄狼に対して、申し訳なく思えてきた。昔はよく一緒に修行してくれた友に対する仕打ち——水鹿は後悔せざるを得なかった。その反面、もし唄狼があれで生きていけば、金輪際、自分に対して突つかかることはないと言われたかった。唄狼と自分——聖闘士同士の無駄な争いは望んでない。平和脳と言われればそれまでかもしれないが、水鹿の本音はそこにあった。

「……まあ、いつまでも引きずっていたら、今後の戦いに身が入らないな」

水鹿は一通り考え、思ったのだからこれでいいだろう、といった様子で顔を上げて、目の前をじつと見据えた。

——この聖戦、自分たちの力を合わせれば終わらせることは分かっている。だから、自分たちは前に進んでいる。

水鹿はそう思いながら、前へとその足を踏み入れ続けた。この先を進めば、再び白虎たちと合流できるかもしれない。それまでは、ちゃんと自分の身を守らねば。

「——ふんっ！」

そうして、水鹿は自分の後ろにいた、冥闘士を蹴り飛ばした。水鹿が蹴り飛ばした冥闘士は天井まで上がり、見事に天井に大きな凹みを見せた。そして、冥闘士は「ああ……」と小さく情けない声を発しながら、天井から床へと大胆に落ちて行つた。

「はあ……」

(……こいつ、バレていないでも思ったのか?)

水鹿は、冥闘士が落ちていったのを確認すると、「ふう」と息をついて、再び歩き始めた。聖闘士に「バレないから大丈夫」というのは大抵通じない。そのくらい、もはや常識である。何もかも小宇宙の雰囲気を感じ取る聖闘士にとって、その場の雰囲気や人の気配は、例え死角だろうが何だろうが、感じ取れるものだ。

(——そのことを、胸によく刻んでおくんだな)

そんなことも分らないこんな冥闘士が聖闘士を襲うなど、まったく馬鹿げている。水鹿は再び前へと歩み始めた。

翔馬は、時間が経つにつれ、自分に襲いかかる甘い匂いをした鉛を目の前にして、何もできなくなっていた。肉眼だと、ただの蜂蜜にしか見えないというのに、だんだんと、その蜂蜜に自分の体重を奪われていた。

ビターは動けない翔馬に対して、更なる追加攻撃を下した。

「ホワイトホイップ」

翔馬に先ほどとは違う白いクリームが、降りかかった。避けることができない翔馬は悔しながらにそれを自分の身で受け入れる他なかった。甘い匂いが、翔馬の鼻を襲う。

「ぐ、う……」

翔馬は本当に甘いものの匂いそのものがダメなのか、顔を真っ青にしてクリームを見ていた。ケーキに乗っけてあるものならば、翔馬も大して気にはしないのだが、こうして単体で攻められると、どうしてもダメになる。

ビターは顔が真っ青な翔馬の内心を知ってか知らずか、その上に粉をさらにまぶした。

「……スイートパウダー」

その粉はキラキラと輝きを放ち、翔馬の上から降りかかった。翔馬は、その粉を浴びた瞬間、体がビリビリと痺れる感覚におちいった。動けない上の更に動けなくするというのか、このビターは。しかし、翔馬に降りかかった痺れはそんな甘いものではない。全神経がその痺れに染まり、あまつさえ、感覚だけでなく、味覚や嗅覚、その他の感覚を奪い取ろうとしていた。その証拠に、クリームの匂いが翔馬の中でだんだんと消え失せていっているのだ。そのクリームは目の前にあり、しかもかけられているというのに。

「く、そ……」

翔馬はほとんどの感覚が麻痺している状態で、ビターの方をキッと睨みつけて、苦しなながらに、顔を上げた。

「俺を……お菓子のように味付けして……どうするつもりだ」

そう、翔馬は先ほどから気になっていた。自分がビターに見つかってから、妙に物理的に攻撃してこないことを。攻撃してきたとしても、こうして、クリームや蜂蜜をかけるもので、ビターの拳を使われたことは一切ない。

ビターはふん、と鼻を鳴らして、パチン、と指を鳴らした。その指を鳴らした先から、もやもやと、何か犬らしき生き物——ハーピーがその姿を現したのである。その数は大体十匹程度。ビターはそのハーピーたちを撫でながら、言った。

「『こいつら』も、人をそのまま食らうつもりはないからな」

「……なっ！」

今のビターの言葉——翔馬に相当引つかかるものがあつた。だが、翔馬に問い直す時間や猶予を与えるまでもなく、ハーピーたちは翔馬に思いきり襲いかかった。

「スウィートシヨコラーテ！」

その瞬間、ハーピーたちが翔馬の精気や小宇宙、そしてその他諸々に食らいついた。

「ぐあああああ——ツツ!!!」

翔馬の悲鳴が、その場に鳴り響いた。

28:「前進せよ」

「ぐあああああ——ツツツ!!!」

翔馬の精気や小宇宙がどんどんハーピーたちに吸い取られていく。それは、翔馬の体から様々な感覚がどんどん奪われ、かつ、鈍っていくほどだった。翔馬は自分の視界が狭まる中、ビターとハーピーを交互に見た。ビターはただ、ニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべながら、ハーピーたちとそれらに食われていく翔馬をただ、見つめているだけだった。翔馬はそれがどうしても気に食わなくて仕方ないのか、思わず口に出してしまった。

「……………く……………つそ……………」

だが、こうして悔しさを口に出したところで、自分が何もできないことには変わりない。ビターは同じようにこちらを見つめてくるだけ。翔馬はその悔しさをバネにし、いつそのことここで技を放とうか、と思いつつ、拳をぐつと握ろうとした。しかし、ハーピーたちによってその力すら奪われているようで、拳を握ることすらままならなかった。

ふと、ビターは何かに気が付いたように、声を上げた。

「ほう、ハーピーたちがこんなに美味しそうに食べている……普通の人間や聖闘士相手

ならば、こんなに長くは保たないはずだ。もしかして、お前は天馬星座という特別な星座以外に、何か隠しているのではないか？」

「……………っ！」

それを聞いた翔馬の心臓が、ひどく瞬発的に高鳴った。まさかこんなところで、白虎や水鹿でさえも耳にしていけない自分のことについて、まさか冥闘士相手に踏み入れられるとは思ひもしなかった。このことが外部に漏れてしまふことになる、ビターだけでなく、情報を知っている者を本格的に全員、抹殺という名の始末をしなければならぬ。

ビターはひどく動揺している翔馬を見ながら、ふう、と息をついてから、軽く口元を緩め、「まあ、いい」とハーピーを一匹こちらに寄せた。

「すべてはこの子らに聞けば分かること。お前に聞くまでもない」

「……………っ！」

翔馬は今すぐにでも、ビターとハーピーに対して制止をかけたいくらいであった。しかし、ハーピーたちにその力さえ吸われている翔馬にとつては、それをすることすらままならなかった。ビターは翔馬がそうこうしている間にも、ハーピーの口元を自分の右耳に寄せて、その話を聞いているようだった。ビターはハーピーの話に対して、こくこくと首を頷かせながら、その表情から血の気を引かせていた。

「……………っ！　　そうか……………なるほど……………」

そして、ビターの目が完全に見開いたとき、ハーピーは己の持ち場に戻り、翔馬の精気や小宇宙を再び吸い始めていた。翔馬は吸い取られていく己の中の小宇宙を感じながら、ビターの様子を薄目ながらに見つめていた。そろそろ、目を開くことすら限界にきていたのである。そして、ビターは翔馬を何かおぞましいものを見ているような瞳で見つめていた。

「つちよ、マジかよ!？」 翔馬の小宇宙消えるかけてるってどうか、消えたんじゃないか、これって!」

翔馬の小宇宙の異変に真っ先に気が付いたのは白虎と共に行動していた大熊星座の圭熊だった。圭熊は「うわー……」と声を上ずるようにして発しながら、呆然としていた。まさか、こんなところで翔馬がやられ、倒れるとは思ひもしなかったのだろう。無論、それは白虎も同じ思いだった。

(……翔馬)

白虎は眉を垂れ下げながら、翔馬がいるであろう方向を見つめていた。まさか、翔馬ほどの聖闘士がこんなところでやられるはずがないと思いたいのだが、こうしてみると、やはり不安というものは拭えないものだった。

(……大丈夫、よな?)

ハーピーの食事から解放された翔馬からは、ほとんど精気が残っておらず、小宇宙を燃やすことなどできるはずもない状態まで落ちていた。その上、五感の一部の感覚も吸い取られたのか、周りの甘い匂いや唾液の感覚や味が感じ取ることができなかつた。

「……………」

もはや目を開くことすら精一杯であつた。翔馬はぐらぐらとぐにやぐにやと揺れる天井に、気持ち悪さを覚えていた。小宇宙や精気がこうして取られるだけでも、ここまですべきなものだと言うのか。そういえば、前に白虎がクオーツに小宇宙を抜き取られていたときも、こうして白虎は意識をだんだん遠のけていき、最終的には生死をさまよっていたといつても過言ではないぐらいのものだつた。自分も、その時の白虎と同じ道を辿っているのであらう。

ビターはこちらに對し、悪鬼的な視線を送つていた。その視線は、そのまま死ぬ、と言つているようだ。

「——っはあ……………」

だが、ここで死ぬ気はない。翔馬は息を強く吐き捨ててから、ぐつ、と腕に力を入れた。白虎のときは小宇宙だけ抜き取られていて、五感を失うということはなかつたが、自分は小宇宙を失いかげ、五感の一部を失つている。小宇宙だけ失うとなれば、その燃

やしどころは今の自分たちでは分からないかもしれないが、五感の一部も失ってれば、失いかけている小宇宙でも、その燃やしどころは分かるはずだ。

——その燃やした小宇宙に、すべてを賭ける。

上半身を起こそうと、片方の腕で肘をつき、もう片方の腕の手を床につけて、ぐぐつ、とその身を上げた。力は少ししか入らないが、今の翔馬にとってはその微量に残った力でさえも有り難いものであった。ビターは、まさか翔馬がここまできて立ち上がるうとしているとは思わなかったのか、目を見開き、ひたすらその様子を見つめていた。

「っ……」

翔馬が立ち上がったときには、その足はよろつき、立つことすらやつと、というところであろう。何か小さな衝撃でもくらわせてしまえば、その場であつさり倒れてしまいうのだ。だが、翔馬は開きにくい目をぐつと凝らして、ビターの方を強く睨みつけた。

ビターは「ハッ」と鼻でそんな翔馬をあざ笑った。

「そんな体で何ができるといふのだ？ ハーピーに何もかも吸い取られたお前に残っているものは何もないであろう？」

「——いや……」

翔馬はざつと足を一步だけ前に出して、スツとビターを見つめた。ビターは「む」と小さく声を上げて、翔馬を訝しげに見た。翔馬は苦し紛れに笑みを浮かべながら、さら

に続けた。

「確かに俺には何も残ってはいないかもしれない……だが……」

——小宇宙が、燃えている。

ビターがそう悟ったのは、翔馬が腕を上げて、天馬星座の13の星を描き始めようと腕をわずかに上げたときだった。翔馬はわずかながらに残っている小宇宙を極限まで燃やそうと試みていた。それは小宇宙の真髄——セブセンシズに目覚めるためかのように。

「ハーピーよ。聖闘士から五感の一部を奪ったのが裏目に出たな。聖闘士は五感の一部を奪われると、場合よっては更にその小宇宙が高まると、聞いたことがあるだろうか？」

「……っ！」

そういえば、とビターは思い出していた。かつて、黄金聖闘士には、五感のうちの一つを断つために、目を瞑っているという人物がいた。その人物は小宇宙を高めるために、あえてそうしていたというではないか。そして、その目を見開く時には、どんな聖闘士ですら超えることができない力を放出される。

まさか——翔馬はそれと同じようなことをしようと、小宇宙を高めているのか。五感のうちの二つを断ち切られ、その人物とはほぼ同じ条件下で小宇宙を高めることができる、ということを知っていたというのか。

翔馬は、思い出し驚愕しているビターの内心を読み取ったかのように言った。

「なるほど。知っていたことには知っていたようだが……まさか他の聖闘士が応用するとは思ってはいなかったようだな？」

「舐めた真似を……!」

「舐めた真似をしたのはどっちだ？ 五感の一部を奪えば降参する聖闘士など、ここまでする奴にはいないだろう？」

「……っ!」

翔馬の言う通り、確かにここまでくる聖闘士に、諦めが悪い者などそうそういないであろう。あの天英星・バルロンのテイスから逃げ切った聖闘士など、よほど往生際が悪いに違いない。ならば、ここで無理矢理にでも小宇宙を高めるのも不思議ではないかもしれない。

「だが、セブンセンスズに目覚めたところで、私に勝てるとも思っているのか？」
「……当たり前だ。見たところ、お前はあの三巨頭よりは弱いみたいだからな」

翔馬はスツと腕を上げて、天馬星座の13の星の軌跡をなめらかに描き始めた。

「さあ、流星の如く天翔る天馬の咆哮を聞け……!」

「……くっ!」

ビターはその威力を受け止めようと、手を前に差し出した。その瞬間、幾多なるペガ

サスの咆哮が流星の如くビターに襲いかかった。

「ペガサス、流星拳——ツツ!!!」

その流星拳は明らかに今までのものとは違っていた。ビターが先ほど見た時は、高速で拳が撃たれており、ビターの肉眼でも普通に追えていたのだが、今の流星拳は——肉眼では追いきれない。

「……っ!」

この速度、明らかに肉眼では限界があつた。高速でマツハどころか、それすら超えて、翔馬の拳が一筋の繋がっている光の軌跡にしか見えない。

——これが、小宇宙の真髄・セブンセンシズの力だというのか。

「どうだ、ハーピーよ! これでもまだ舐めた口をきけるか!」

「——ぐうっ!」

気が付けば、ハーピーの冥衣が徐々にひび割れ、崩れていつていた。このままでは、本当にやられてしまう。だが、ビターもここで引き下がれない。

「ハニ—リフレクター!」

ビターはそう言うと、自分の目の前に蜂蜜で出来た黄色く透けた壁を作った。柔らかいゆえか、ペガサス流星拳の威力がどんどん吸収されていく。だが、それも長くは保たないのか、だんだんと壁が薄くなつていくのが分かる。やはり液状で作った即興の壁に

は限界があるのだ。すぐに蜂蜜の壁はペガサス流星拳の威力に負けて、元の蜂蜜に戻った。——もう、なす術はない。

「ぐ、ああ……!」

自分の冥衣が、体が、傷付けられていく。ここまでくれば、再起不能だ。翔馬は声に力を込めて、力を振り絞った。

「いつけえええええええ——ツツ!!!」

——その瞬間、ビターの体が窓を突き抜けて、外に吹き飛ばされた。

翔馬はビターが外に吹き飛ばされたことを確認すると、「っはあ……」と、息を上げて、その場にしゃがみ込んだ。まさか、こんなところでセブセンシズに目覚めてしまうと、は思っただけでなかった。しかも、黄金聖闘士よりも下の実力の者相手に。だが、目覚めていなかったら、その下の実力相手に負けていたのも確かだった。翔馬はビター相手に手こずり、ましてやセブセンシズに目覚めてしまったのが、どこか悔しく思えてしまった。自分の実力不足と、努力不足を実感してしまう。

（——もっと、鍛錬と修行を重ねなければ……）

でなければ、この先、こんな風に戦ってしまうと後々苦勞してしまうだろう。どんな相手もあっさり倒し、そして、どんな実力者相手にもすぐに勝負をつけられる実力を——せめて、黄金聖闘士のような実力が欲しい。翔馬は心からそう思った——矢先だっ

た。

「あーあ。ビターちゃんがやられちゃったら、誰がボクのお菓子作るのー？」

突然、翔馬の耳に入ってきた、幼い少年の声。翔馬は思わず後ろを振り返り、その主を見た。声の主は大体翔馬たちと同じ年程度の少年で、翔馬よりも少しばかり身長が低い程度だった。

ふと、少年は翔馬の存在に気が付いたのか、翔馬と目を合わせるかのように顔を見た。そして、少年はスタスタと翔馬の元に歩み寄り、更にじつと翔馬を見つめた。特に睨みつける様子もなく、聖闘士だからというわけでもなく、ただ、純粹に翔馬のことを見つめていたようだった。翔馬は思わず体をのけぞらせながら、相手を見つめた。

(……俺とほぼ同い年だとは思うが……小宇宙が、ひしひしと感じられる……。しかも、聖闘士でいえば黄金聖闘士並みの大きさ……！)

翔馬はまさか、とは思ったものの、あえて口には出さなかった。少年は翔馬をただひたすら見つめながら、「へえ」と面白いといった様子で声を上げた。そして、翔馬から一歩から三步程度、距離を引いてニコツと笑みを浮かべた。

「ねえねえ、もしかして……キミがビターちゃん倒しちゃった感じ？」

「……あ、ああ。倒しちゃった感じだ」

翔馬はこくこくと頷いて、少年の問いに対して肯定の意を示した。少年は「やっぱり

かー」と納得と、すつきりしたようにぼん、と手を叩いた。翔馬は少年の顔を訝しげに見つめた。

(……………いつ、本当一体……………?)

もし、これで本当に冥闘士であれば、この少年、とても人当たりがいいし、ずいぶんと柔らかい印象を抱くことができる。下手をすれば、そこらへんにいる聖闘士よりは人格だけはとてもいいかもしれない。きつと、少年ながら、のものかもしれないが。それに、冥闘士にしては、小宇宙が綺麗すぎる、というのもあったが。

少年はこちらを訝しげに見つめてくる翔馬の腕を、ぎゅつと掴み、タンツと気持ちいい足音を立てながら、走り始めた。

「えっ、あつ、ちよっ……………」

「おっとー、忘れてたー」

翔馬が驚いている中で、少年は足に急ブレーキをかけて、勢いよく止まった。翔馬はその際に前に転びかけたが、何とかして転げないように足に踏ん張りを入れた。一体何事なのだと、翔馬は少年の方を見た。少年は部屋の入り口に置いてあった、というより捨て去られたような唄狼の肩をゆさゆさと揺らして、話しかけていた。

「おい、スパイ、起きろ。この戦い止めたいんだろー」

「……………う、ぐ……………」

「おいスパイ……」

翔馬は呆然としながら、その二人の様子を見つめていた。

水鹿は通る道の中で出会う雑兵たちを受け流しながら、着々と進んでいつていた。どこから湧き上がってくるのか、この雑兵たちは、と睨みをきかせながら。と、こうしているともた、どこからとなく、雑兵が水鹿を襲ってくるのである。

「——ふんっ！」

水鹿は思いつきり脚を振り上げ、自分に襲ってくる雑兵を蹴り上げようとした——のだが、どういふことか、振り上げたまま、足が動かないのである。

「っ!？」

それに対して、さすがの水鹿も驚いているようで、目を見開いたまま、振り上げた足を見つめた。どうやら、誰かの手にこの足が掴まれているようで、このまま下ろすことができないらしい。そして、相手の顔を見ると、今までの雑兵たちとは違い、堅実な雰囲気その身に纏っている男性で、眼鏡をかけていることで、更にそれが強調されていた。

水鹿は相手の顔を見て、ぽかん、と口を開いて拍子抜けしていた。雑兵にもこういう者がいたのか、と。しかし、この男性から感じ取ることができる小宇宙は、ただの雑兵

のものでも、ましてや、普通の冥闘士のものでもない。下手をすれば、黄金聖闘士と拮抗はできるのであろうものだった。

男性はスツと厳しいその目で水鹿を見据えた。水鹿はその目に睨みつけられた、と感じ取ったのか、「うつ」と喉と声を詰まらせた。

「な、何か……」

「……」

男性は何も言わないまま、パツと水鹿の足から自分の足を離した。水鹿はその反動からか、勢いよく床に尻について、「つてて……」と、痛みで軽く悶絶した。男性は「フウ」と息をついて、眼鏡をくいっと左の中指で上げた。

「お前、見た聖闘士か？」

「え、あ、ああ……」

口を開いた男性の言葉に対して、こくこくと肯定する水鹿。男性は「やはりな」と水鹿を見つめた。そして、水鹿はほかーん、と頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら、男性を見つめた。

（な、何者なんだ……？）

と、水鹿が戸惑っているうちに、男性は水鹿の腕をいきなり掴み、強引に引きずり始めた。

「なっ、あつ、ちよっ!？」

水鹿がそれに驚くのも束の間、男性は水鹿をそのまま引きずったまま、尋常ではない速さで、どこかへと走り始めた。

「う、うわあああああ——ツツ!!!」

(な、なんなんだあああああツツ!!!)

さすがの水鹿でも、こんな速さで引きずり回されたら、目が回るといふものだ。この男性、一体何が目的で水鹿をこうして引きずっているのだろうか。水鹿は引きずり回されている最中で、何度も何度も助けを求めた。当然、誰も助けようとはしなかった。

「……」

(今、水鹿の叫び声が聞こえてきたような……)

どうやら、水鹿の悲鳴は白虎には届いていたらしい。何かあつたのだろうか、小宇宙を感じ取る限りでは、命に関わるようなことでないらしく、きつと、大丈夫であろう。多分。というより、水鹿は戦いながらこんな悲鳴を上げるタイプではないと白虎は思っている。

そうして、白虎は圭熊と凜猫で、アテナ・ラティエルを守るように、それぞれ前衛と後衛をしていた。後衛はこの中でも特に実力があるであろう圭熊が一人で担っており、

前衛は白虎と凜猫が担っていた。

そして、白虎は心配になってラティエルに話しかけていた。

「アテナ……歩き回って疲れたとか、ありませんか?」

「いいえ、大丈夫ですよ。そこまで心配しなくとも、私もアテナとして、聖闘士と共に修行に励んでおりましたから」

「……えっ、ええっ!?!」

ラティエルから放たれた衝撃的な発言に、聖闘士たちの間で電撃が走った。白虎は戸惑いながらも、ラティエルに言った。

「そ、そんな……! あなたはアテナ、そして女神ですよ!?! 聖闘士たちに守られる身で

もある! わざわざ聖闘士たちと修行しなくとも……!」

「いえ、守られる身だからこそ、そして、女神だからこそ、なのです」

ラティエルは優しく笑みを浮かべながらも、ぴしやり、と言い放った。白虎ははつきりと言いつ放たれて、戸惑っていた口調や表情や気持ちが一気に落ち着いていった。ラティエルは続けた。

「私にとって、『女神だから守られるべき存在』というのには腑に落ちないものなのです。特にアテナは『戦女神』。その戦女神が守られる存在では、聖闘士たちに示しがつきません」

「……」

「そして、修行しなければ、せつかくの女神の力も無用の長物になってしまおうでしょう？
だから、神だからといって、何もしない、というわけでもないのですよ？」

ラティエルは苦い顔をしながら、白虎の口元に、ピン、と指を立てて差し出した。白虎がそれから感じる限りでは、「この話を聞いたのだから、これ以上の問いは無用だ」ということ。白虎は思わずプツと吹き出して、クスクスと笑みを浮かべた。

ラティエルはきよとん、として、そんな白虎を見つめていた。白虎は「いや」とクスクスと笑みを浮かべながら、ラティエルに言った。

「あなたも何だかんだで、地上の人として生まれた方なんですよね。考え方が地上の人と同じだなんて思ってた……」

「……そうですね。地上を守るのであれば、思考を人間側にもシフトしなければ、意見もまともに聞くことはできませんから」

「それもそうですね……人の意見は人にしか理解できないものってありますから」
「ええ、まったくです」

ラティエルはコクコクと頷きながら、互いにクスクスと笑い始めた。圭熊と凜猫は何となくながらに、疎外感を感じていた。

何というか、この白虎とラティエル、機から見れば、姉妹のように見える（といって

も、片方は男だが。だから、自分たちが入る隙はないというか。そして、それ以上に、ラティエルは白虎のことを一目置いているような、そんな感じがしていた。だが、それは白虎自身に向けられたものでもあると同時に、その背後にいる人物に、いや、別の人物か、とりあえず、そのような感じの置き方だった。

それから、もうしばらく歩き続けていると、とある扉の目の前で行き止まったのである。最初は道を間違えたか、それとも、何かの罠か、とは思ったものの、どうやら、自分たちが目指していたところの扉らしかったのである。

「アテナ……」

「……はい」

ラティエルは白虎たち聖闘士の一步前に出て、じつ、とその扉を凝視した——そのときだった。

「ハッハー！ アテナ自らお出ましとあ、俺らの手間も省けるってもんだ！」

「——なっ……」

白虎たちは、唐突にどこからとなく聞こえてきた男の声に、思わずその顔を上げた。ラティエルも扉から自分の身の回りに視線を移した。

——どこから、どこから聞こえているんだ、この声。白虎たちはキョロキョロと辺りを見渡し、注視した。

その瞬間、斧みたいな風圧が、白虎の後ろから襲いかかってきたのである。

「……っ！」

白虎は即座に自分の左腕についている龍星座の盾を、その風圧に向かって差し出した。

——カラン、カラン。

その瞬間的に、白虎の耳にその音が入った。白虎は風圧に耐えきれず、思わず目を閉じていた瞳をそつと開いて、目の前を見た。

「……盾が……」

真つ二つに割られ、床に落ちていた。

聖衣の中でも、最高の強度を誇っているという龍星座の盾。そんな盾がこんなあっさり、綺麗に二つに割れるほどの風圧。一体誰がそんなものを放っているというのだ。白虎は風圧が放たれた方向を見つめた。

「……っ！」

その先には、三人の冥闘士の姿があった。その前衛に立っているであろう冥闘士はニヤニヤといやらしく、そして、怪しく笑みを浮かべながら白虎たち聖闘士を見つめていた。

白虎と圭熊と凜猫はお互い見合わせて、コクリ、と何かを決したように頷けば、スタ

スタと三人の冥闘士の方へと歩み寄った。そして、白虎は冥闘士の首領らしき人物を強く見つめて、言った。

「そっち三人、こつちも三人……まあ、戦う分には丁度いいやろ。不公平でもないし」

「ははっ、聖闘士の方から積極的に挑むとはな……拍子抜けしちまうぜ」

「……アテナを守るのが聖闘士の役目つてもんや。そのためなら、どんな戦いにも果敢に挑まなあかんのよ。アンタら、アテナの首を貫いて来たんやろ？」

「おう、そんなところだな。ハーデス様のためよ。そして、お前は使命感に燃えているのか。悪くねえな」

「……」

二人の間に、冷たく重い空気が流れる。互いに睨み合い、凝視し、そこから一ミリすら動かない。

そして、白虎が一瞬だけ、まばたきをしたとき、首領が白虎に向けて拳を向け、襲いかかった。白虎はそれをパシン、と片手で受け止めた。

「……なかなか、やるようだな」

「……」

白虎は相手の腕を握り直し、そのまま、足をぐんつ、と伸ばして相手の腹へと落とし

「ぐっ……あつ……!!」

更に白虎は相手の顔に、鉄の一拳を加えた。相手はその勢いで一気に向こう側まで吹き飛ばされ、壁へ激突。そのままズルズルと床に落ちていった。

白虎は「あらー」と、目をぱちくりさせながら、その様子を見ていた。

「わりとあつさり逝つちやうもんやねえ……」

「……き、貴様アアアツツ!!」

首領の配下についていたであろう冥闘士の一人が、白虎に飛び乗りながら、襲いかかった。しかし、白虎はすぐに避けて、冥闘士の背後についた。

「な、なにいつ……!!」

「青銅聖闘士はマツハで動けることが前提! もはやお前の速さでは、わいどころか、聖闘士の相手になんぞならん!」

その瞬く間に、冥闘士が天井へとめり込んだ。どうやら、白虎のアッパーカットがマツハの速度で冥闘士の腹を潰したらしく、その腹には拳によつてできた凹みがボコツと空いていた。その冥闘士は声を上げて悶絶する様子もなく、天井から剥がれ落ちた。

白虎はそれを見送ることなく、すぐに一人だけ残った冥闘士へと顔と視線を向けた。その冥闘士も元々白虎しか見ていなかっただけで、キュツと不気味に口を釣り上げてみせた。

白虎はふう、と息をついて、圭熊と凜猫に言った。

「——そんなわけや。ごめんな、二人とも。どうやら、わい一人でも済むらしいで？」
「なっ……」

「だから、アンタ二人はアテナの護衛について、その扉の向こうに進め！ この戦いに、部外者はいらん！」

目の前にいる冥闘士は白虎以外の聖闘士はごめん被るような目つきで、圭熊と凜猫を見つめていた。アテナのことも大して重要そうに見つめていなかった。白虎はさらに続けた。

「それに、圭熊と凜猫——アンタらの実力なら、二人だけでもアテナのこと、守ってやれるやろ？」

「……白虎」
「……」

白虎はコクン、と頷いて、圭熊と凜猫にその目を向けた。圭熊と凜猫もその視線に対して、フツと笑みを浮かべて、首を縦に振った。そして、アテナの方に視線を向けた。

「アテナ——行きましようか」

「圭熊……」

「大丈夫つすよ。俺は冥王側に魂は売ってませんから。信じてください」

「……本当によろしいのですか？」

どうやら、ラティエルは圭熊たちのことを心配しているようだった。白虎が抜けたことで、一気にチームワークが崩れてしまうのではないのかと。

しかし、圭熊は力強くこう答えた。

「ええ、もちろん。俺も聖闘士として、アテナをお守りすると誓った一人ですから。そう簡単に崩れません。な、凜猫」

「……うん」

圭熊がパチつとウインクを凜猫に向けると、凜猫はそれに対して、否定することなく頷いた。

ラティエルはホツとした様子で、扉のドアノブに手をかけた。

「では、行きましょう。白虎の武運も祈りつつ——……」

29 : 「戦場へ」

翔馬が少年に案内されて着いたのは、ハーデス城の片隅にある医務室だった。部屋の中に入れば、病院の匂い——いわば、医薬品の鋭い匂いがつん、と鼻に響いた。とても雰囲気があり、まさしく医務室だ、という場所。

——なのだが。

「いてててて！ もっと優しくやれよ！ 聖闘士相手だからか！ 聖闘士相手だからか、畜生！」

「ええい、黙ってる！ 消毒液は傷口に染みるのだから、痛いのは当たり前だ！ 大人のくせに耐えられないなど笑止だ！」

「うるせーよ！ ってかオレは外見が大きいだけの、次の二月でとうとう十五歳になるガキなんだよ！ 大人じゃないでてて！」

——と、緊張感のない声が、部屋の中に鳴り響いていた。

翔馬と少年が呆れ半分で、ひよっこりその様子を覗いてみると、そこには杯座の白銀聖闘士の水鹿と、その水鹿にできている傷口を手当てしている一人の男性の姿があった。

水鹿はその二人に気が付いたのか、二人の方を見て、「よ、よう」と手を挙げた。翔馬は無言のまま、キリツと目を正して、手を挙げ返した。水鹿は「はは……」と苦い笑みを浮かべながら、腕を下ろした。やはり、こういう場面を年下に見られたのは少しばかり気まずいらしい。

そうして少しばかりの沈黙が流れたあと、少年が口を開いた。

「デイーちゃん……考えることは一緒なんだね……」

「……」

デイーちゃんと呼ばれた男性は、無言のまま水鹿の傷口に絆創膏や、包帯を巻いていた。水鹿から見た男性の顔は、少しだけ赤らんでおり、水鹿は「ああ」と思わず笑みを浮かべてしまった。だが、水鹿はこの場はあえて大人しくしておいた。

この少年と男性、どうやら知り合いらしく、この戦いの裏の真相も知っていそうな顔ぶりだった。この場にいる以上、冥闘士の仲間であることは確かであろうが、もしかしたら、自分たち聖闘士が警戒しなくともいい相手なのかもしれない。でなければ、こんなところにまで来て、傷の手当てなどしてくれないだろう。

男性は水鹿の手当てが終わったのか、道具一式を、この場にいた医師に預けておいた。医師はにこやかに笑みを浮かべながら、それを受け取り、室内にある戸棚の中へとしまった。

水鹿は男性をチラチラと繰り返し見ながら、ぼそつと呟くように言った。

「……そ、その……わ、悪いな。わざわざ手当てまでしてもらって……」

「……ああ、話したいことがあってここに来たからな」

男性は水鹿に対して、「構わない」と言った様子で、ギイツと椅子を鳴らして、そこに腰をかけた。そして、少年と翔馬に、そのの椅子に座るように指差し合図して、座らせた。

腰をかけて、座った瞬間、翔馬はずつと聞きたかったことを口に出した。

「……なあ、お前たち、何者だ？ 冥闘士ではあるのだろうか……少し気になった」

「そうだな、オレも同じ気持ちだ」

水鹿もその質問に同調した。冥闘士にしても、一体何者なのであろうか。悪い人物ではない、ということとは確かなのだが。

少年と男性はお互いの顔を見合わせて、コクンと首を縦に慣らしてから、再び水鹿と翔馬の方に顔を向けた。そして、座りながらも、ペこり、と軽く頭を下げたから、その名を名乗った。

「ボクは天猛星ワイバーンのアトモス。で、こっちが……」

「天雄星ガルーダのディーネだ」

二人は名乗り終えると、再び頭を下げた。

一方で、翔馬と水鹿は顔を見合わせていた。

「ワイバーンと……」

「ガルードって……」

——冥界三巨頭のうちの、二人。

今まで聖戦に直接立ち会ったことがない聖闘士たちでも、冥界三巨頭のことはある程度知っていた。

冥界三巨頭はその名の通り、冥闘士の中でもトップスリーの実力を持つ者に与えられる称号である。大抵は天猛星ワイバーン、天雄星ガルード、そして天貴星グリフォンの冥闘士たちが名乗っている。

しかし、何故そんな三巨頭のうちの二人が自分たち聖闘士をこうしてここに連れてきて、助けてくれたのだろうか。見たところは、二人は騙すつもりもなさげで、翔馬と水鹿は尚更わけが分からなかった。

アトモスは「言ってもいいよね」とデイーネにアイコンタクトをしてから、翔馬と水鹿に話しかけた。

「あのさ、二人とも」

「……?」

「……その……えと……」

アトモスは自分がどこか緊張しているのが分かったのか、ふー、と深く息を吐き、気を落ち着かせてから、翔馬と水鹿に言った。

「この戦い、冥界三巨頭のうちの一人である、天貴星グリフォンのファイロが仕掛けたものなんだ」

白虎と一人の冥闘士が対峙していた。白虎は足を肩幅まで広げて相手を見、また、相手も白虎のことを不気味な笑みを浮かべたまま見つめていた。

白虎は向こうに名乗ろうと思って、自分の名を名乗っていた。

「わいは龍星座の白虎。アンタの名は？」

「俺は天牢星ミノタウロスのフェルノだ」

冥闘士の方——フェルノも白虎に便乗するかのように名乗っていた。

白虎は「フェルノね」と相手の名前を口に出した。それから、白虎はすつとしゃがみ込んで、拾い上げたものがある。——真つ二つに割れた、龍星座の盾である。白虎は立ち上がって、その真つ二つに割れた盾をフェルノの方に差し出して、言った。

「これ、アンタがやったんやろ？」

白虎が先ほど瞬殺した冥闘士二人から、このようなことができる小宇宙を感じることはできなかつた。だが、今、自分の目の前にいる冥闘士・フェルノはこのようなことを

余裕でやってのけそうな雰囲気と小宇宙を、この場で漂わせていた。

フェルノは口角を釣り上げて、白虎の質問に答えた。

「なら、どうするとかいうのか？」

「……やっぱりな」

白虎は「それだけが知れたかった」という瞳で、真つ二つに割れた盾をほいっと床に投げ捨てた。

「よく、あんな遠距離からこんな威力の技を放つことができたよなあ。アンタ、冥闘士の中でもなかなかのやり手なんやな？」

「舐めてもらっては困る。俺は冥闘士三巨頭を超えるつもりで、冥闘士としてここにいらんだ。お前らのような弱っちい聖闘士共とは違う」

「——なら、確かめてみよっか」

白虎はニコツと笑みを浮かべて、右手を固く握った。その瞬間、白虎の拳から、暴風が吹き荒れた。

「猛虎烈風紫電拳——ツツ!!!」

フェルノに向かって、猛虎のように荒れた拳風が遅いかかった。フェルノは目を開けていられないのか、わずかばかり目を細めて、白虎の方を見つめていた。その際、フェルノの冥衣には、小さくひびが入っていた。

「どうや！ これでも弱っちいって思えつか？ 言えつか!？」

「フツ、なかなかやるな……だが……」

すぐにその暴風は、先ほどの龍星座の盾のように真つ二つになった。斧のような風圧が、再び白虎に襲いかかってきたのである。

「——っ！」

白虎は一旦拳を引つ込めて、即座にその場から自分の身をどかした。その風圧は、白虎の右頬と肩の右パーツをかすめてから、壁にぶち当たった。当たった壁はそれこそ二つには割れなかったものの、向こう側が見えそうなくらいにガラガラと凹み、崩れていった。

(あ、あつぶなあ……！)

先ほども思ったが、この斧のような風圧、あの龍星座の盾でさえも真つ二つに割れるほどのだから、人間に当たったら更に大変なことになることは、間違いないだろう。

フェルノはフツ、と手に息を吹きかけて、色々なものを吹き飛ばしているようだった。どうやら、あの手で今のような風圧を繰り返しているようだった。

(な、なんておっかなさ……でも……)

白虎はかすった頬から出ているごく少量の血を、指で拭い取り、それをぺろつと舌で舐め取った。

(このぐらいおつかなくないと、わいも楽しめないからな……)

天貴星グリフォンのフィーロ。

三巨頭の中でも最年長かつ、冥闘士の中でも一番の美しさを保っている。そして、その実力も申し分なく、下手をすれば黄金聖闘士以上のものであると噂されている。人格には少々難はあるものの、冥闘士の中でも一番上の存在ということからか、冥闘士で逆らえる者はいない。

そんなフィーロだが、近年は妙な行動が増えており、特に数年前などは見ず知らずの少年を連れてきて、その少年を『現代のハーデスの依代である』と謳歌。周りには不自然だと思いつつも、信じ切っており、疑う者は誰もいない。もちろん、アトモスやディーネもフィーロの言うことならば、と完全に信じ切っていた。

「——でも、ボクらは今日の戦いまで、ハーデス様に会ったことはないんだ。いつもフィーちゃんを介して物事伝えてくる。今回の戦いだって、ハーデス様から直接言われたんじゃないかって、代わりにフィーちゃんが指揮していたようなものだし」

「で、そこから不自然だと何となくながらに感じ取っていたオレらは、お前たちが他の冥闘士との激闘を繰り返している中、色々調べていたんだ。そうしたら——……」

ディーネはすつ、と数枚の紙を水鹿と翔馬に差し出した。水鹿が受け取り、パラパラ

とめくると、翔馬もその横からその中身を確認していた。どうやら、A4用紙数枚に及ぶ、調査結果だった。

その中に、現代におけるハーデスの項がそこに書かれていた。水鹿と翔馬は、見つかるなり、即座にそれに目を通し、声に出して読んでいた。

「2198年におけるハーデス……」

「2198年12月冬現在、ハーデスらしき強大な小宇宙はどこからも……感じることはできない」

——ハーデスの魂は未だにどこにあるか検討付かずであり、また、厳密に言えば、今回の聖戦は「存在しえないもの」となっている。

ハーデスが前回の聖戦から復活するには、二百年どころか、数千年単位の時間を要し、現代に復活するのはほぼ不可能である。海王ポセイドンが予期せぬ復活するように、冥王ハーデスにもその機会はあるかもしれない。しかし、今回に限ってはその様子は確認できない。

したがって、今回の聖戦は「正式なものではない」と、判断が可能である。——
「……アテナが言っていたのは……」

「ああ、本当なんだろうな。この戦いは、ハーデスによって起こったものではない」

これで、今回の戦いについてはハーデスが黒幕ではないことがほぼ明らかになった。

今回のことは、聖闘士と冥闘士のただの反乱として片付けられるであろう。

しかし、この真相が分かり、新たな疑問が湧いた。

「ハーデスの依代とされた少年は、一体何者なんだ……？」

そう、現代にハーデスが蘇らないのならば、その依代の存在だって、本来ならば存在しえないものはずだ。ハーデスが愛おしく思っていた守りたい肉体がなくなっただけではなく、その必要性は尚更薄れているようにも伺える。しかし、フィードはハーデスの依代だと言い張って、その少年をこちらに引張ってきたというのか。——あまりにも、無茶苦茶だ。

だから、その少年のことがどうしても気になって仕方がないのである。存在しえないものの依代だと言われ、ここまで引張ってこられた気分はいかなものだろうか。そして、できればその少年を聖域の方で保護できればしたい、とも考えていた。

デイーネは言うべきか、言わないべきか、アトモスに少しアイコンタクトを送っていた。アトモスはそのアイコンタクトに対して、こくん、と首を頷かせて、デイーネに答えた。デイーネは「そうだな」と小さく呟き、こくん、と頷いた。

デイーネは顔を上げて、その疑問に答えた。

「……その少年は、今はその小宇宙をアンドロイドに移して、聖闘士として存在している」

「……アンドロイド……!?!」

アンドロイド——いわゆる、機械の体、言わばロボット。

そのアンドロイドが、現在聖闘士として活躍しているというのか。そして、連れて来られた少年はまさか聖闘士だというのか。だとすると、その少年、意外と自分たちの身近にいるのかもしれない。

デイーネは、依代の少年の状態が仲間だと知った聖闘士二人の目の色が変わったことに気が付いたのか、この先を続けた。

「その少年の名は——……」

白虎はフェルノと爆風戦を続けていた。白虎が猛虎烈風紫電拳で爆風を繰り広げれば、フェルノがそれを手刀による斧のような風圧でそれを斬る。だが、白虎は負けじとそれに対して何度も何度も猛虎烈風紫電拳を繰り出した。

それを見かねたフェルノは白虎に対してこうして大きく呟いた。

「何度も何度も同じ技を出したところで、俺には勝てないのにな!」

「……っ!」

白虎の拳を繰り出す手がブレーキのごとく止まる。そのことは十分承知だったが、そうして実際に口に出されると、どうしてもそこで止まってしまう自分がいた。

確かに闇雲に技を繰り出したところで、あの鋭く大きい風圧を防ぐことは不可能な上に、勝機も見える気がしない。一体これ以上どうしろというのか。

フェルノは爆風が止まったのを機にするかのように、本格的に小宇宙をその手に込め始めていた。そして、目の下を黒くして、白虎の方を見つめて、言う。

「今まで切り裂くような風圧を俺は繰り出していた。しかし、今度は何もかもを砕く技をお前に繰り出してやろう」

「……なっ——！」

「さあ受け取れ、俺の必殺奥義を！ グランドアクスクラッシャー——」

床が、砕け散った。

これ以上穴が空くのかというぐらいに、大きく凹み、その中で足の踏み場を作ることすら許されないものだった。

破片はパラパラと宙へ浮かび、その数は技の威力を表しているようだった。

——しかし、

「——くうっ！」

ズザザザッ、と激しく足と手を床に摩擦させ、白虎はそこから数メートル離れた先にいた。どうやら、技を直接くらわずに済んだらしい。

だが、床の破片があまりにも多すぎたせいも、それに因っては避けきることは不可能

だったようである。その証拠に、白虎の体全体に破片がかすれたことによりできた傷が、無数にできていた。

「……………」

白虎は口元にできていたかすり傷から出ている血を舌で舐め取り、床に叩きつけるようにペツと唇を尖らせて吐き出した。

「なるほど、これがアンタの本当の力なんやな。三巨頭を越すために修行してるつつーのは、嘘ではないんね」

白虎はスツと立ち上がりながら言って、フェルノの方を見た。

「でも、わいも強くなれるように頑張ってるんよ。それこそ黄金聖闘士を目標にしてな」
白虎は足をスツと肩幅まで広げて、自分の胸に手をあて、目を瞑った。

「まあ、アンタが必殺奥義という本気を見せてくれたんだから、わいも見せなきゃ不公平ってもんよな」

「……………何をするつもりだ?」

フェルノは拳を繰り出す姿勢ではない白虎の構え方に、不審感を抱いた。何かを繰り出すにしても、あの構え方では何も出せないだろうに、一体何を考えているのか。

——そんな風になっている間にも、自分は次の攻撃をするための準備をしているというのに——……………。

甘い奴だ、とフェルノは構えながら思った。

しかし、その考えも、数秒後にすべて吹っ飛ぶことになることを、フェルノは知らなかった。

「急ぐぞ、翔馬！」

「ああ！」

二人はアトモスとディーネから、事のすべてを聞き、急いで敵の本拠地へと向かっていった。

まさか、あの人物がアンドロイドであり、冥王ハーデスの依代と謳われていたとは、信じられなかった。だが、確かに冥王ハーデスの依代としては申し分ない人格者であるようにも伺える。戦いを嫌う心は、まさしく冥王ハーデスの依代として十分な素質だ。

因みに、アトモスとディーネは雑兵達や他の冥闘士たちに先ほどのレポートを印刷して配り、フィードをどうにかして冥闘士側で相応の処分をすると言い、あとを自分たちに任せてくれた。

もし、これで、冥闘士側の勢力が落ちるのなら——あとは全力でフィードを止めるだけだ。

翔馬と水鹿は、それだけを胸にして、前へへと走り続けた。

（大丈夫、いける——……）

白虎は目の前いる敵を見ながら、その目標を定めていた。

白虎の一番の大技である遊舞乱虎。何故白虎自身に、その技の負担がかかるのかという、歌と踊りと、激しい拳を一気に繰り広げるため。だが、小宇宙を高めて相手に高下をするだけならば——踊りはいらぬ。

（そう、歌と拳だけで、いい）

もともと、自分にとって踊りはそんなに重要なものではない。一番重要なのは自分の声なのだから。

そうしていつまで経っても攻撃してこない白虎に対して、フェルノはいい加減限界がきていた。いつになったらこちらに技を繰り出してくるのか、そもそも本当に自分に攻撃してくるのか、いささか疑問だった。

しかしながら、こちらに攻撃してこない、ということとは、フェルノにとっては好都合なことでもあった。いつ攻撃してもいい、ということにもなるからだ。

フェルノは勢いよく助走をつけて、白虎に飛びかかった。

「ははっ、これでお前も終わりだな！」

——そして、あの世で静かに眠るのだ。

と、フェルノが腕を白虎に振りかざした時であった。

「……………っ!？」

白虎の姿が——ない。

どこだ、どこにいるのだと、フェルノは辺りを見渡した。その瞬間、とある歌がフェルノの耳の中へと侵入していた。

——寂しさを感わす風に何を問えばいい? ——

「な、なに……………」

その歌は壮大なものかつ、フェルノの中の何かを貫くようなものだった。フェルノはキョロキョロと辺りを見渡しながら、その歌を味わっていた。

——今を問うか それとも過去を問うか ——

「う、ぐ……………」

——そして自分自身に何を問おうか? ——

「ま、まさか……………」

——自分を問うか それとも他人を問うか ——

「これはっ……………」

東の間、フェルノの腹に、重い鉛が素早く衝突した。フェルノはその勢いで向こう側まで吹っ飛び、壁で背中を強く打った。その間、その壁が大きく凹み、ヒビ割れていた。

「ぐ、は……」

フェルノははずると壁を伝うようにずり落ちた。

「く、くそ……」

どこからこの歌が聞こえているというのだ。この歌さえなければ、気を取られず、今の衝突は避けられたものを。

フェルノはキョロキョロと辺りを見渡して、声の主を探し始めた。

（どこで誰が歌ってやがる……！）

この歌さえ、この歌さえどうにかすれば、自分の勝機は確定する——……。

だが、歌はそのことを許さざんと言わんばかりに、その大きさを増していく。

——もう既に覚悟はできているんだ

この身を捧げるぐらいのことならば——

「……！」

——さあ 女神—アテナ—の戦士よ

今こそ忠誠を誓え——

その時の、強く白い龍の煌めき。その煌めきを受けた者はどんな鳥よりも高く舞い上がり、そして、どんな雲もよりも高く宙へと舞っていく。

「ぐあああああ——！」

フェルノは天井を突き抜けて、高く舞い上がった。しかし、歌がそれで止むことはない。

——何も恐れることはない

誓ったのならば その誓いを胸にして——

天井を突き抜けたフェルノの体は、数秒程度間を置いて、尋常でない速度で元いた場所へと落下し、落ちていく。

だが、そこで待ち受けていたものは、遠慮ない一突きであった。

——何も怖がらなくともいい

さあ 飛び立とう空へと——

「ぐつ、はあつ！」

フェルノの体は、床に落下する前に、腹からもう一度宙へと舞い上がった。もちろん、天井よりも上に舞い上がることはない。だが、それでも天井すれすれまで舞い上がったのである。それから、フェルノは今度こそ、床に落下したのである。

——明日を照らし出せ もう恐れない

未来へと……——

そうして歌が終わった時には、フェルノの体はボロボロで、その体を覆っている冥衣さえも、悲惨なことに、ところどころが欠けていた。

フェルノの意識が朦朧としていく中で、フェルノの目の前に立った聖闘士——白虎。白虎はフェルノをじっと見据えたまま、何も言わなかった。いや、もはや何も言う言葉すら思いつかぬだろう。負けた戦士に対して、どうこう言うのは、まさしく野暮というものだ。

しかしながら、フェルノは瞼を下げようとしている目で、白虎の顔をギンツと鋭く厳しい眼光で睨みつけた。だが、白虎はそれに物怖じすることもなく、ただ、そんなフェルノを見つめているだけであつた。

フェルノは白虎を睨みつけたまま、口から放つた。

「今のは貴様の歌と拳か……」

「……」

「だとしたら、悪魔だ……貴様は悪魔の末裔だ……！」

「……」

「あんなに遠慮なく連続で拳をくらったのも初めてだし、そんな慈悲もない哀れな目で見られるのも初めてだ……！」

「……別に……」

白虎はそこまで言われて、やっと口を開いた。

「別にアンタが全力を出したから、わいも全力を出した。それだけで」

「貴……様っ……!」

「……」

だが、白虎はフェルノの次の言葉を聞こうともせず、後ろを振り返り、圭熊たちの後をついて行くように、その道を歩いて行つた。

フェルノは、その後ろ姿を見ながら、こう叫んだ。

「——っんの、悪魔が!」

水鹿と翔馬は、戦つていた白虎の歌が聞こえてきた方向へと、足を進めていた。多分、近くで白虎が冥闘士の誰かと戦い進んでいるのだろう。

「……やられた感じはないし、多分無事なんだろうな」

「だろうな」

白虎に歌を歌われたら、それに敵う者はほとんどいないであろう。翔馬ですら、前に白虎を歌を歌われた時には勝てずに負けたというのだから。ある意味、歌を歌つた白虎というのが、本気の白虎ということなのだから。

二人がそのまましばらく足を進めていると、一人の冥闘士が床にもたれ掛かり、倒れているのが二人の目に入った。

「……!」

二人はすぐにそちらへと駆け寄り、冥闘士の様子を確認した。水鹿はその冥闘士の腕を取り、脈を確認し、そしてその体に胸に耳を近づけて、鳴っているであろう鼓動を確認した。——どうやら、生きていないようだった。

「……白虎は本当に無事なようだな」

「……ああ」

どうやら、この冥闘士が白虎の歌にやられた被害者らしかった。水鹿と翔馬は互いの顔を見合わせて、苦笑しながら、白虎の小宇宙を辿り始めた。

と、そこへ。

「待つてください、二人とも」

二人の目の前に立った人物が一つあった。

「……アంతは……！」

翔馬は思わず声を上げた。その人物は先ほど、医務室に入った時にいた、医師ではないか。

医師はにっこりと微笑み、その白衣をその場で払い翻した。

「先ほどの会話ばつちり聞かせていただきましたよ。変装をした甲斐がありました」

その翻した白衣の下から現れたのは、シルバーに輝く祭壇座の聖衣をかつちり着ていた祭壇座の海鳥だった。

「……あ、か、か、海鳥!？」

「お、おい!? お前、祭壇座だったのか!？」

二人が激しく驚いている中で、海鳥は二人の前をスタスタと歩いた。

「か、海鳥……」

「……大丈夫です。行きましょう」

白虎は圭熊たちが入っていった扉の目の前に立ち、深く深呼吸をしていた。

——これから、本当の戦場へと入って行くのだ。

そう思うと、少しばかり胸の鼓動が激しくその波を打っていた。正直なところ、白虎はこうして敵の本拠地へと真っ正面から、戦士として立ち向かっていくのは初めてだった。クオーツの時は翔馬に色々手助けしてもらい、本拠地へと侵入することができたが。

白虎は波打つ心臓の中で、ずっと扉についているドアノブへと手を伸ばした。そして、手をかけ、ガチャリと音を鳴らした時であった。

「白虎——!」

「白虎!」

「白虎さ——んっ!」

自分の名前を呼ぶ、三人の少年青年の声。白虎は思わず後ろを素早く振り返り、その姿を確認した。

その先には、水鹿、翔馬、会長の姿があった。

「水鹿、翔馬！ それに海鳥さん！」

白虎は笑顔で手を振って、三人に向かつてこっちだ、とアピールをした。三人は互いにコクリと首を縦に振って、白虎の元へと駆け寄った。

そして、白虎の元へと辿り着いた水鹿が白虎の後ろにある扉を見ながら、言った。

「白虎、この先か！」

「うん！ 多分、この先に本当の敵はおる！ 圭熊たちもこの中にいるよ！」

水鹿と白虎がそうして情報交換をしている間にも、海鳥と翔馬も白虎の元へと辿り着いていた。そして、扉の方へと視線を向けて、白虎は再び、扉のドアノブに手をかけた。

「……いくよ、三人とも」

「ああ」

「うん」

「ええ」

——ガチャリ、と本当の戦場への道が開かれた。

30 : 「真実」

「な、何も見えへん！　何も見えへんやんか！」

扉を開けた白虎の第一声はそれであつた。

扉の向こうは真つ暗闇に覆われており、少なくとも肉眼では何にも見えなかつた。その後ろから中の様子を覗いていた水鹿と翔馬も「うわあ……」と声を上げて、ひどく驚いていた。一方で、海鳥は何かを考えているように、顎に手をあてていた。どうやら、この暗闇をどうにかする方法のようなものはあるらしい。

海鳥のその様子に気が付いたらしい翔馬は、海鳥に対して声をかけた。

「祭壇座。先ほどから何か考えているように見受けるのだが……何か考えでもあるのか？」

「う、うーん……」

海鳥は微妙だな、という感じの声音で、翔馬に答えるように唸らせた。今、海鳥が考えているのは成功するかどうか微妙なものなのだろう。しかし、翔馬は海鳥に対してがつついた。

「せ、せめて、教えてくれないか!?　このままでは、きつと黒幕どころか、圭熊たちにも

追いつけない！」

翔馬は白虎と水鹿の気持ちも代弁しているかのように言った。もちろんのこと、白虎と水鹿も「せめて教えてほしい」といった様子で海鳥のことを見つめていた。海鳥は「その……」と言葉を一旦詰まらせながら、翔馬の方を見ていた。翔馬は海鳥の視線に対して、自分を指差して確認した。海鳥はそれに対して、「はい」と頷いた。

「天翔る光の天馬星座・翔馬さんに是非とも力を貸していただきたい所存なのですが……」

「あ、ああ！ な、何でもするぞー！」

翔馬は海鳥の「天翔る光の天馬星座」というところに何かピンときたのか、前のめりになって、元気に答えた。水鹿はそれを呆れながら見て、白虎に関しては「わいもそういうの欲しい……」という瞳で見ていた。

海鳥は二人のそんな視線を浴びながら、「ではでは」と翔馬に言った。

「翔馬さんのペガサス流星拳を攻撃するためのものではなく、この暗闇を照らすための道しるべとなっていたいただきます」

「道しるべ……っ？」

「はっ」

翔馬の問いに、海鳥はニッコリと微笑んで答える。

「まず、ペガサス流星拳を放つための小宇宙を貯めてみてください」
「………うか………」

翔馬は海鳥に言われた通り、ぽうつと己の小宇宙をペガサス流星拳を放つ際の貯め方で、貯めてみた。海鳥はそうです、そうです、と頷いた。

「そうしたら、ペガサス流星拳の威力を手のひらの上に乗せてください」

「……難しそうだな」

しかし、海鳥が言うのだからやってみるしかない。翔馬は、海鳥の言うことに従うことにしてみた。

まず、手のひらに先ほど貯めた小宇宙を集中させた。そして、ペガサス流星拳を放つ時と同じ度量と気持ちと、力の入れ方で、小宇宙の周りにペガサス流星拳の威力をまとめた。これが失敗したら、周りにペガサス流星拳の威力が飛散し、とんでもないことになる。翔馬は極力、少しずつ手のひらに威力を集中させてみた。

すると、威力を手のひらに置くごとに、それがだんだんと光照らしていた。

「——！」

翔馬はその光照らす小宇宙に思わずびっくりした。その光は青く淡くも、とても眩しく、そして、強くその光を放っていた。まるで、翔馬の性格を表すかのように。自分のペガサス流星拳の使い方次第で、こんな綺麗なものができるのか、そして、こんなに光

り輝いていたのか、と、翔馬はその光を見ながら思った。

白虎と水鹿はぼかーんとしながら、しかし、その光に見惚れており、提案した当の海鳥は「よしよし」と満足したように頷いた。

「これで、辺りが見えるはずですよー」

「あ……」

翔馬は言われて気が付いた。この光が、眩しいほどに黒いこの空間を照らす、白き光になっっていることに。海鳥はニツコリと微笑みながら、「行きましよう」と三人の前を歩いた。

扉を開いたすぐ先は、特に何も障害がない真っ平らな廊下だった。廊下はハーデス城と大体同じもので、床に赤い絨毯が敷かれていることがわかる。どうやら、ここは廊下の一角らしい。しかし、こうして扉がついている、ということとは黒幕が潜んでいる以外に、何かあるに違いない。でなければ、こんな風にはしないであろう。とりあえず、雑兵も出てくる様子もないゆえ、このまま順調にいけばしつかりと黒幕の元へと辿り着くはずだ。

一方で、白虎は圭熊と凜猫のこと、そして、それ以上にラティエルのが気掛かりで、心配だった。

(アテナ……)

別に圭熊たちのことを信頼していないわけではなく、むしろその逆だ。圭熊たちの実力であれば心配ないと、アテナにこちらに向かわせたのも白虎の判断からでもある。しかし白虎とて、決して心配してはいはずもなく、むしろ不安であった。聖闘士たちがついているとはいえ、相手は黄金聖闘士と同党の実力を持った冥闘士。青銅聖闘士が何人東になったところで、敵わない。

(圭熊たち……やられてなけりやええけどな……)

とはいえ、「大丈夫だ」と圭熊たちをこちらへ送り出した自分に責任があるのは間違いない。まあ、どちらせによ、圭熊たちを責め立てるつもりはさらさらないのである。

(……?)

と、歩き続けていると、白虎の爪先に何か柔らかいものが当たったのである。ちよんちよん、とそれを爪先に優しく当て続けると、何か硬いものも感じ取った。

「……!」

まさか、と思つて、白虎はしやがみ込み、今度はそれに手で触れた。翔馬はその正体を探るように光を白虎の下のと向けた。

——そこには、見覚えのある人物が、傷付き倒れているではないか。

「——圭熊っ!」

そう、大熊星座の圭熊だった。白虎はその体をゆさゆさと揺さぶった。

すると、圭熊は単純に傷付いてるだけで、命には別状はなさそうであった。その証拠に、白虎に名前を挙げられ、その身を揺らされた途端、閉じた目をピクピクと動かしていた。そして、目をすつと開き、四人の姿を確認していた。

「……………つ、白虎、か……………？ ……と、海鳥さんに、兄ちゃん、翔馬……………」

「圭熊、大丈夫？」

「……………つつ……………」

圭熊は白虎に支えられながらも、その上半身を起こした。その様子は少しばかり辛そうなものではあったが、さすが圭熊といったところか、次に立ち上がる時には涼しげな顔だった。白虎もそれに合わせて立ち上がり、圭熊を見た。

圭熊は立ち上がると、キョロキョロと辺りを見渡しながら呟いた。

「……………白虎、悪いな。アテナのこと、守れなくて」

「……………」

「……………お前、俺のこと、信頼して出してくれたのにな。このザマだ」

圭熊は目を伏せながら白虎に告げた。圭熊もやはりアテナを守る戦士だ。さっぱりとした心の中で、その責任を感じ取っていた。白虎から託されたこと、そして、聖闘士としてアテナの側について守ること。それが果たせずに、何が聖闘士だ、と。

圭熊は自分を責め立ててもいい、といった様子だった。いや、責め立てられても仕方ない、と割り切っていたのだ。だが、白虎は圭熊の背中をぼん、と軽く押し、微笑んでいた。

「圭熊。わいはアンタを責めるつもりはさらさらない」

「……」

「責め立てたところで状況変わるなら、わいはアンタを責め立てる。でも、そんなこと、無いんよ」

「……白虎……」

「それに、アンタ相手には口よりも拳で語った方が早いのは知ってる。だから、どっちにしろ責め立てるだけ無駄」

白虎は圭熊の背中から自分の手を離して、圭熊の前に数歩出た。

「あとね、今回のことはわいにも責任はあるから。今回の敵は神ではないとはいえ、黄金聖闘士と同等かそれ以上の実力がある。だから、ちよつと、わいの考え方も甘かったかもしれないへんな」

「……」

「ま、つまりはさー！ 前進あるのみ！ ってことー！」

白虎は圭熊の方を振り返り、ピシッと圭熊の胸を指差した。圭熊は己の方に指を差さ

れ、思わず体をそらしてのぞけた。白虎はニツと八重歯がある真つ白な歯を見せつけるように笑みを浮かべて、圭熊に言った。

「こんなところでグダグダ話してる暇はないで！」

「……………おうよー！」

圭熊は一瞬ぱちくりしてから、白虎に釣られるようにニツと笑みを浮かべた。

そして歩き始めた。

その中で、水鹿は、何か気がかりなことでもあるのか、キョロキョロと辺りを見渡し、確認していた。翔馬も「やはりか」といった様子で、水鹿とともに辺りを見渡していた。

「……………二人とも？」

二人のその行動に何かモヤモヤしたものを抱いたのか、白虎は二人に対して話しかけた。話しかけられた水鹿と翔馬は、白虎の方を振り向いて、そして、互いの顔を見合わせた。

二人が何をしているのか、白虎にとっては全く意味が分からなかった。そして、白虎の目からは、二人か何か、大切なことを、その中に隠しているようにも伺えた。白虎はそのことを不審に思っ、二人に向かって聞いてみた。

「……………なあ、水鹿、翔馬。アンタら、何か隠しとるんやないか？」

「……………っ！」

二人の顔がビクツと強張った。圭熊や海鳥も、どこかしら真剣な様子だった。そして、その次の瞬間に開いたのは、圭熊の口だ。

「お前ら、まさか気付いたのか? 『ハーデスの依代』にさ」

「……!」

(圭熊……!?)

何も知らなさそうな圭熊の口から、その言葉が吐き出され、白虎は思わず圭熊の方を振り返った。圭熊はそれから何も言わず、じつと水鹿と翔馬を見つめていた。だが、二人はそんな圭熊の視線を浴びながらも、何も答えようとも、言おうともしなかった。

圭熊は「ふう」と息を吐いて、黙って口を開いた。

「――最初さ、俺、お前たちについていうか、白虎と戦っただろ?」

「ああ……うん。せやったね」

そういえば、と白虎は思い出していた。実際はかなり気が合うゆえに、こうして一緒に行動しているのだが、かなり最初の方は双方とも信じられず、対立していた。次に出会ったときには、そんなことも忘れるぐらい仲良くなつたものだが。

その最初にあつたことが、ハーデスの依代とどう関係があるというのか。

その全てが、圭熊の口から語られた。

「あれはな、聖域側に悟られたらマズイって思つてのことだよ。バレたらいけない事情

がこっちにはあった」

「マズイ……? つて、圭熊、何かマズイことやらかしたん?」

「……やらかした、とは少し違うけど……まあ、そんなところかな」

「そうなんだ……」

にしてたつて、圭熊の人格でやらかすようなことは、なかなかないと思うが。確かに年相応のやんちゃさやお茶目さは圭熊にはある。だが、聖域側に警戒するほどマズイことをやらかしていたとは到底思えない。

圭熊は半信半疑な白虎をチラ見しながら、続けた。

「それで、その事情っていうのは、山猫座の凜猫の正体のことだ」

「凜猫の……?」

白虎はきよとん、としながら、そして、水鹿と翔馬と海鳥は「どうとうきたか……」といった表情で、圭熊の話聞き入っていた。

「俺はそのためにも、最初はお前らと敵対してたわけだけど……でも、お前らなら——いや、お前らだけになら、教えてもいいかもしれないって思った。まあ、俺が言う前に兄ちゃんや翔馬の耳に入っちゃったのは想定外だったけどな」

「……」

「……すまん」

二人は圭熊には指摘を入れられて、思わず押し黙った。圭熊はハハツと笑みを浮かべながら、「いや、いいって」と、手を振った。

「遅かれ早かれ、二人の耳にも入るもんだった。謝るもんでもないさ」

圭熊はそう言うと、笑みを浮かべたものから、すぐに真剣な面持ちになる。白虎たちも、それに釣られて反射的に顔を引き締めた。

「それで、ハーデスの依代の正体は——……」

と、圭熊が言いかけたその時であつた。

真つ暗闇だつたこの空間に突然明かりが点灯されたのである。しかもそれだけでなく、壁がどんどん床へと沈んでいくではないか。五人は何事かと辺りをバツと見渡した。一体何がこの空間に起こつたというのだ。

そうやって五人が戸惑っているのをからかうかのように、人一人分の拍手が鳴り響き、同時に男性らしき声も鳴り響いた。

「冥闘士たちをなぎ倒して、ここまできたことは褒めてあげよう」

「……！」

(この声……！)

この、ねつとりとして、かつ、低くも渋い、不快な、聞き覚えのある声。白虎はその声の主を確認するために、聞こえてきた方向を振り向いた。

「——ほう、あの時の下品な虎がいるとはな。だが、私は縁を持つならば、女の子の方がよいな」

そこにいたのも、やはり見覚えがあるものだった。中性的かつ、女性的な顔立ちに、長く伸びた髪の毛は、本人の着ている冥衣にはとても映える。そして、何よりも男性諸君を不快にさせるようなねつとりと笑みも、その本人の特徴ともいえよう。

白虎が聖域で出会った、あの、見るからに女好きの冥闘士だ。

「アンタ、あん時の……!」

「ふふ、覚えてもらっていただけ嬉しいよ。だが、名前も覚えていたきたいものだ」

冥闘士はフワツと髪の毛を揺らしながら、言った。その姿はまさに「優雅」そのものであり、ただの女好きでないことが、悔しながらも、白虎の目からはっきりと分かった。そして、冥闘士は名乗った。

「私は天貴星グリフォンのフィーロ。フィーロだ。至つて簡単な名前だろうか?」

「フィーロ……!」

事情を聞いていた水鹿と翔馬と会長の色が、その名前を聞いた途端変わった。まさか、あの時白虎と対峙していた冥闘士が三巨頭の一人にして、この戦いの黒幕だったとは——思つてもみなかった。

「そして——大熊星座の聖闘士よ」

フィーロは圭熊をちらりと見た。圭熊はぐつと足を構えて、相手を見る。フィーロは「そんなに構えなくともよい」と、苦笑しながら、首を左右に振った。

「山猫座の凜猫——いや、私の弟子をここまで連れてきて感謝する」

「……なっ!?!」

圭熊の目がひどく見開く。まさか、凜猫の師匠が冥闘士だとは思ってはいなかったのだろう。普通ならば、聖闘士の師匠は聖闘士か、その関係者と思うのが普通なのだが——凜猫はこの冥闘士から様々なことを教わったというのか。圭熊以外の聖闘士たちも、同じ思いでフィーロを凝視していた。

フィーロは「ふう」と呆れたような息をつき、スタスタと向こうの方へと歩みを進めた。そして、パチン、と手を鳴らすと、今も暗かった一部分に一気に光が灯された。その灯されたところは数々の機械がランプをチカチカと点灯させながら作動しており、ゴウゴウと音を立てていた。

その奥には、筒状のガラスがあり、その中には人が一人——凜猫が、入って、目を閉じていた。

「凜猫っ……!」

それを見て、激しく動揺する白虎をよそに、フィーロはもう一人の姿を抱えて、床に置いた。

「……………えっ!？」

白虎の動揺が、さらに激しくうごめいた。白虎の目の前に置かれた人の姿は、今、あのガラスの中に入っている人物と同じ髪の色、髪型。つまり、同じ背格好をしている、ということだった。無論、身に纏われているものは全く違うものだが。

さすがの白虎もこればかりは、怖気つきながらも、フィードロの方を見つめて、聞いた。「い、これって……………まさか……………」

「……………ふふ」

フィードロは気持ち悪いぐらいにニツコリと口角を緩めて、答えた。

「もちろん、君らの知っている通りの山猫座の凜猫——まあ、もつとも、君らが関わっていたのは、向こうの偽物——ロボットなのだがね」

そう言ってフィードロが指したのは、ガラス張りに包まれた凜猫だった。白虎はそのロボットの凜猫と本物の人間であるであろう凜猫を見比べながら、声を震わせた。

「ろ、ロボットって……………そ、そんな……………」

だとしたら、自分たちが知っている凜猫は、今の今までロボットの方の凜猫だったというのか。白虎はあまりの衝撃と、次々と明かされる真実に、驚愕の表情を隠せずいた。

だが、フィードロはそんな白虎に更に追い打ちをかけるように、新事実を告げた。

「そして、この凜猫が、現代のハーデスの依代とされる人間だ。私はそれを悟られないために、本人によく似たロボットを利用したのだ」

「な……………なっ……………！」

もはや、白虎の中では整理しきれなかった。

今までの凜猫はロボットで、しかも、冥王ハーデスの依代——もはや何がなんなのか分からなかったのである。何が真実で、何が嘘なのか。いや、白虎はすべて嘘だと言ってほしかった。凜猫が冥王ハーデスの依代なもの、ロボットであることも全部。

そんな白虎がひどく動揺している中で、後ろから囁かれた女神の声。

「白虎」

白虎はゆっくりと後ろを振り返り、真っ青になり、汗をひどくかいた顔を後ろへと見せた。その見開いた目に映し出されたものは、聖闘士にとっては絶対の存在である女性であった。

「……………アテ、ナ……………」

アテナ・ラティエルは微笑みながら、白虎の背中を、自分の手で優しくゆっくりさすった。白虎の気持ちが悪く落ちていくように、また、ゆっくり冷静さを取り戻すように、促しているようだ。白虎はラティエルの手の動きに合わせてるように、最初は浅く、そしてだんだん深く深呼吸していった。

白虎は「はー、はー」と息を整理しながら、ラティエルを見つめ直した。

「……アテナ……」

「白虎。大丈夫です。今、私たちがやるべきことを見つめてください」

「……」

(わいらが、今、やるべき、こと……)

白虎は目の前を見た。目の前には、ニヤニヤしながらこちらを見てくるファイロがいる。白虎はこの顔を見ると、殴ってしまいたいほどに心の中から何かが湧いてくる。だが、白虎はそのさらに目の前にある本物の凜猫と、そして、その視線を遠くに移した先にある、ガラス張りに覆われたロボットの方の凜猫。凜猫がこうなってしまったのは、ファイロの仕向けたことであり、ファイロのせいだ。

そして、これを見る限り、このファイロがこの戦いのすべての根源といっても過言でもないのかもしれない。水鹿や翔馬たちの様子も、そのようなものであったうえに、こんな場所にこんな仕掛けなど、黒幕でなければできないであろう。

そして、白虎は強く思うのだ。——ファイロを。すべての元凶を、倒してみせる、と。ファイロはフツと笑みを浮かべて、白虎の元まで歩み寄り、その顎をそつと支えた。ラティエルは白虎が落ち着いたところで、数歩後ろの方でその様子を見守っていた。ファイロは白虎に向かって放った。

「君が女の子じゃないのが、本当に残念だ。君が女の子であれば、何もかも聞き受ける気でもいるが……」

「……相変わらず、気持ち悪いくそタラシやなあ」

「しかし、こう見えて、私もちゃんと選りすぐりはしているぞ。可愛くない、美しくないものは、しつかり払いのけている。もちろん、アテナもね」

「……」

どんなに容姿が優れている聖闘士や女聖闘士でも、アテナの美しさには絶対に敵わないものだ。アテナの美しさは、外見もそうだが、凛とした美しさ、そして、地上や人間を愛し、それらを受け入れる母性もとても大きいのである。しかし、そんなアテナでも、フィーロは受け入れられないらしい。もっとも、フィーロは冥闘士だ。ハーデスに忠誠を誓うような者が、どんなに美しがろうがなんだろうが、アテナを受け入れるはずはない。

もちろん、それは当たり前のことなのかもしれないが、白虎はフィーロの『払いのけている』という中にアテナが入っていることに多少なりの反感を覚えた。

（こいつは女の子ならば、絶対に自分に寄り付いてくると思ってたのか……）

気に入らない。本当に何もかもが気に入らない。

凜猫のことも、この戦いのこともそうだが、まずは白虎個人としてぶつ放したいところだ。そんなことしているうちに、時間が経っているので、この場ではやるつもりはな

いが。

白虎の自分に対する瞳に、不快感を覚えたフィーロは、白虎の顎から自分の手を離して、そのまま白虎の腹を自分の足で吹き飛ばした。

「ぐっ、ふあっ!？」

突然やってきた腹への圧力に、びっくりしたのと、痛いので、白虎は妙な声を発しながら、後ろへと吹き飛ばされた。その際、後ろにいたラティエルが、その飛ばされてきた体を受け止めた。

「アテナー！」

「……」

ラティエルは白虎の体を腕の中に抱えたまま、フィーロをすつと見つめていた。フィーロはくだらん、といった様子で、ラティエルの腕の中で抱えられている白虎を強く引つ張った。ラティエルは何とかして白虎をフィーロの方へとやらまいとした。しかしながら、白虎は自らアテナの支えを拒否したような素振りで、フィーロの元へと引つ張られたのである。

「白虎……!？」

「ふん、やはりアテナの腕力など、大したことはないのだな。こうやって一人一人を引つ張るには問題な——……っ!？」

フィーロがすべてを言い終える前に、顎が貫かれた。いや正しくは、何か硬いものが、フィーロの顎を殴った、といった方がよい。

「っ……っ！」

あまりの不意打ちぶりに、さすがのフィーロも、足をよろめかせかねなかった。フィーロは足にぐつと、力を入れて、目の前いる人物、龍星座の白虎を強く睨みつけた。白虎は拳にふつ、と息をかけていた。

「アンタ、三巨頭を名乗るわりには、ずいぶんと隙があり放題やねえ。ま、そんなんだから、ハーデスの名前でも出さなきゃ誰もついて行かないのだと思うけど」

「……舐めてもらっては困るぞ、聖闘士」

フィーロは「愉快だ」と呟きながら、ククツと歯で笑ってみせた。そして、手の指をわきわきといやらしく動かしていた。白虎はそれが何かの前兆なことが、何となくながらに察しがついたのか、白虎も手で拳を作り、防御態勢を整えていた。

「私は確かに隙はあるかもしれないが、腐つても三巨頭のうちの一人かつ、冥闘士でもトップに立つ男だ。今のアッパーカットなど、屁にも及ばん」

そう言うと、フィーロはくいっ、と右手の人差し指を動かした。

「!?!」

白虎は何事かと、それを見ていたが、突然、体がフィーロの方へと引つ張られたので

ある。そして、フィーロは白虎の顔をこちらに寄せて、それを凝視した。

「は、離れる！ 気持ち悪っ……ぐうっ!？」

白虎はフィーロに対して抵抗している中で、突然襲ってきた息苦しさに悲鳴を上げた。首が見えない何か、いや、見えないのではなく、見えづらい何かに締め付けられている。その証拠に、白虎は手でその存在を確認することができた。

(細い、糸……!?)

とても細く、確かに肉眼で確認するには限界があった。目をいくら細めて、目の中にある筋肉を使ってみせようが、キラツとした何かが見えるぐらいで、糸そのものは見えない。

フィーロはニツと笑みを浮かべてみせた。

「私のコズミックマリオネーションは何もかも操るのだ。そう、お前の体など、操るにたらんぞ」

「……………」

この糸、もしや、フィーロが繰り出しているというのか。そういえば、よくよく相手の手を見てみると、指先で何かをくねくねと操っているのが見うかがえる。

「さあ、まずはその生意気な首上をぼとりと落としてみせようか。ぼとりと、な」

途端に、白虎が俯き、今まで騒がしかった口先が黙っていく。フィーロはそれを怖じ

気ついたものだと思って、フツと白虎のことを嘲笑した。やはり聖闘士など、この程度でびびってしまふ、容易い生き物である、と。

(やはり口先だけか……)

と、ファイロがぐんつと、糸の引きを強めたその時であった。

「だから、離れろつってんだろ！ 気持ち悪いんだよ！」

ファイロが聞いたことがない、この場が張り裂けそうなぐらいの大声が、鳴り響いたのである。ファイロは思わず耳をその指で塞ぎ、辺りを見渡した。束の間、白虎の方へと視線を向けると、白虎が糸を両手で掴み、そこに己の血を這わせながら、引っ張っていた。

「しまっ……！」

声に気を取られて、力を緩めてしまっていた。だが、すでに時遅し。

「——ふんっ！」

白虎は糸に伝う自分の血を辺りに撒き散らせながら、その糸を見事に千切ったのである。そして、ファイロの腹を肘で飛ばして、ファイロの元から離れた。

「ぐうっ……！」

ファイロは、まさかこんなところで形勢逆転を狙われるとは思っていなかったのか、すっかり油断していた。こんな奴が青銅聖闘士とは、と思いながら、ファイロはわずか

に足をぐらつかせて、白虎を見つめていた。

白虎はこちらを見つめてきたフイーロに向かつて、にっこりと笑みを浮かべた。そして、しゃごみこみ、小宇宙を溜めて、言った。

「やあつと……離れることができたなあ——ツツ!」

白虎は最後の方を強調させて、発した瞬間、己の聖衣と、その下に着ている白いタンクトップを、筋肉に力を入れて脱ぎ捨てた。その背中には、中国の四神の一つである、白虎の刺青が浮かんでいた。

「三巨頭だかなんだか知らんけど、アンタに、わいの小宇宙の叫び、聞いてもらおうかアツツ!」

31：「終わりの絶唱」

「三巨頭だかなんだか知らんけど、アンタに、わいの小宇宙の叫び、聞いてもらおうかアツツ!」

白虎は、手のひらからぼたぼたと血を床に垂らしながら、フィーロに向かって宣言した。フィーロは呆れたような口ぶりで、しかし、面白い、といった様子で言った。

「小宇宙の叫び、か……なかなか面白いことを言うな。だが、それで私を倒せるかといったら、大間違いだ」

フィーロはその身に黒い小宇宙を纏って、白虎を見つめた。この黒い小宇宙は、冥闘士のものとも、かといって聖闘士のものとも違う——しいて言えば、クオーツのものと同じものだ。やはり、このフィーロがこの戦いの黒幕と見て間違いはないだろう。だからこそ、簡単に倒せるとは思っていない。先ほどはフィーロ側が油断したからこそ、色々とあたったわけではあるが、フィーロとて、そこまでされてしまえば、白虎相手に「青銅聖闘士」ときか」と、油断するはずもない。

そして、凜猫のことも同時にどうにかしなければ、と白虎は凜猫とそのロボットを見つめた。自分がフィーロと戦いながらの凜猫を助け出すのは無理がある。せめて、誰か

の手を借りなければならぬ。白虎は圭熊たちの方をチラリと見つめてから、正面を向き直した。

（——頼むしか、ないな）

極力、この場にいる聖闘士たちは逃がしておきたかったのだが、やむを得まい。

白虎は圭熊たちに対して背を向けたまま、言い放った。

「圭熊！ アンタは凜猫や他の皆引き連れてここから避難してくれへんか！」

「なっ……はっ!?!」

圭熊は何を言っているんだ、と言いたげな瞳で白虎の背中を凝視した。白虎だけ置いて逃げるなんて、そんなことできない。だが、白虎は圭熊の方を振り返ることはなく、フイー口のこと一点だけをただ、見つめていた。白虎の背中に浮かんでいる虎は、生半可な気持ちで出てきているわけでないことが、圭熊の目から見てもはっきり読み取れた。

圭熊は最初は白虎だけに任せることに抵抗があった。それは翔馬たちも同じようで、白虎のことを心配そうに見つめていた。しかし、白虎の決意や覚悟は、固いものだった。ならば、その白虎の決意と覚悟を自分たちは流すのではなく、受け止める必要がある。

圭熊はスタスタと歩み、床に転がっている凜猫の元までやってきた。そして、その体をゆさゆさと揺らした。

「おい、大丈夫か？」

「……………ん……………」

どうやら意識はあるようで、圭熊の呼びかけに対してはしつかり反応していた。圭熊はホツと息をつき、しかし、安心して一秒一秒が勿体ない、と凜猫の体を起こして、「立てるか？」などと確認しながら、凜猫の腕を自分の肩に回した。そして、翔馬たちに向かつて、言い放った。

「行くぞ。翔馬」

「圭熊……………」

「白虎が俺を信頼してるんだ。だから、俺も白虎を信じる」

不安げな翔馬に対して、圭熊はにっこりとほほ笑んで答えた。翔馬の不安がこれで晴れるわけではないが、しかし、圭熊のこの言葉で、自分も白虎のことを信頼しているのを思い出し、コクン、と頷いた。

「アテナも僕たちと行きましょう。ハーデスが黒幕ではない以上、貴方がこの城にいる意味はありません」

と、圭熊たちの横で海鳥がラティエルに手を差し伸べた。ラティエルは白虎の方を目にしつつも、海鳥の言うことにコクン、と頷き、海鳥の手の上に自分の手を乗せた。

そうして、一同がこの場から去っていき、白虎とフィーロが二人になる。そして、互

いに睨み合い、互いへの敵意を剥き出しにしていた。フィーロは白虎のことを睨みつけながらも、フツと口元を緩めた。

「いいのか？ 仲間を逃がして。お前一人では、私に傷一つ負わせることは無理だろうに」

「アンタこそ、このまま逃がしてもええんか？ 色々不都合があるんちゃう？」

「そんなものはない。私の目的は聖闘士を倒すことよりも、冥界を指揮し、ハーデスに成り代わることが目的なのだからな。無論、依り代と偽つてきた凜猫も、所詮その駒にか過ぎない。アテナごときにやられる神ならば、私が代わりに指揮したいものだ」

「……アンタがハーデスとか、反吐が出るわ」

また、なんともおかしい目的の奴が出てきたものだ、と白虎は思った。クオーツのことといい、このフィーロのことといい、自分の周りの黒幕には神になりたいだの、不老不死になるだの、何故人間を捨てるような者ばかりなのか。白虎には到底理解しえないものだった。しかし、そんなことを思うのは、力があるからこそかもしれない、と実際は分からなくともなかったのも確かだった。だからといって、そういうことは、神やアテナが許すわけではないのだが。

白虎は「ふー」と息を吐いて、腕にぐんつと力を入れて、そこから構えた。フィーロもそれに合わせて指をくねくねとうねらせた。

白虎は目を閉じて、周りの様子を感じ取り、そして想像するのである。

(「ここが——今から、わいのステージや!」)

白虎は左手を胸に、そして、右腕をマントなどの布を翻すかのごとく広げた。

「聞け! 虎の気高き咆哮を! 見よ! 龍の華麗なる飛翔を! 『龍飛虎咆!』」

龍飛虎咆——どうやって体力を失わせないで、廬山の技を放てるか思案して、結果、編み出されたものだ。白虎が歌いながらフェルノに繰り出したものがあるが、それがこの技である。

フィーロは「はっ!」と鼻で笑って、手を出して、そこから糸を吐き出した。

「小宇宙の叫びとはそういうことか! コズミックマリオネーション!」

「さあ、歌をかなーでよう、龍の名のもーとに!……!」

コズミックマリオネーションが繰り出されたのと、白虎が歌い始めのは同時であった。白虎はコズミックマリオネーションの糸をその手で掴み、ぐんつと引つ張った。

「我が歌は響きあーう、虎の叫びと共に——ツツ!!」

そのまま、糸をさらに引つ張り、フィーロの体を宙に浮かせた。だが、フィーロはそのまま綺麗に宙を回転して、白虎の目の前に着地した。

「その虎は烈風となり、宙を舞ーつ——て——ツツ!!!」

フィーロが着地した瞬間、白虎の拳から繰り出されたものは、吹き荒れた猛虎による

烈風——猛虎烈風紫電拳であった。だが、フィーロはその烈風を目の前にして、なんとか持ち堪えようと足を踏み込んだ。だが、白虎の拳それで終わりではない。

「龍はその風に、身をまーかせた——ッ！」

猛虎烈風紫電拳の目ともいえよう空洞のところから出てきた、一匹の白い、龍。

「なっ……！」

「思いを貫く我が心、虎のようにこーだましてくッ！」

いや、龍だけではない。白い虎もその空洞の中から、一点を貫くように龍と共に現れたのである。

「我が命を、照らすカンツウオーネよ——ッッッ!!!」

白虎が声に小宇宙を乗せると、周りのものを破壊するという特性を生かした、絶唱。その絶唱に地や空気が反応したのか、この空間一つが大きな振動を起こし、また、床は見事な隆起を起こし、派手に部屋の機械と機械を破壊してみせた。

「ああっ！」

フィーロは耳を抑えながら、壊れゆく機械の様子を見ていた。しかし、その間にも、一つとなった白き龍虎はフィーロの体を飲み込んだ。

「思いを一矢に——貫いてゆけると——！」

「くっ、はあっ！」

「その声に込めたのは——ッ！——意志の形と——ッッ！」
「くそっ！　ぐっ！」

自分にまとわりついてくる龍虎を払ってみせようにも、白虎の歌が龍虎の攻撃力やその力を増幅させているのか、なかなか思うようにはいかなかった。

「我が歌は龍虎とともに、狂い咲く——……！」

曲がそこで一区切りつき、落ち着いたところで、ファイロは白き龍虎に吹き飛ばされた。その威力は言葉では表せぬぐらいのものであり、かつ、ご覧の通り、この空間一帯をこの技によって壊すことは可能であろう。

白虎は「はー、はー」と肩を上下に揺らしながら息を整理して、顔にひつつく汗を拭いながら、吹き飛ばされたファイロを見据えた。

ファイロは吹き飛ばされたあと、そのまま壁に衝突する前に、足を壁につけて、その勢いで、トンツと、ゆっくりと、平を保っていない崩れた床に足をついた。その時のファイロの口元は引き締まっていた。先ほどのような不快な笑みをしていたファイロはいなかった。

白虎はファイロを倒し切れなかった事実には驚愕するよりも先に、ファイロが本気になったことを悟っていた。白虎の今放った龍飛虎咆など、その序章にしか過ぎない。

ファイロは手に小宇宙を集中させて、白虎をすつと睨みつけた。その威圧は先ほどと

打って変わって、非常に重くくるものだ。だが、白虎はそれにひるまず、そして怯えず、腕を組んで、ただ、その様子を見つめていた。

「龍星座の白虎。貴様にコズミックマリオネーションの本来の怖さを思い知らせてやるう……」

ファイロはそう言うと、視線を白虎一点に集中させた。白虎は目を閉じて、ぐつ、と顔を強張らせた。だが、その刹那の一瞬にも、白虎の体はコズミックマリオネーションに襲われていた。

「……っ！」

まず、白虎が態勢を整え直すために、体を動かそうとした瞬間、何かに引つ張られているかのようにギチギチ、と腕が鳴って、好きに動かすことができなかつた。白虎はこればかりは目を見開き、自分の体を確認した。確認できるのは、自分の体に何かが反射して、白く光っているものがある程度。いや、それが確認できただけでも十分だろう。

そして、ファイロの方へと視線を向けた。ファイロは手のひらを上、指を上向きに曲げていた。ふと、ファイロがくいつ、と指を動かすと、白虎の腕が望みもしないのに、ぐんつと引つ張られた。

「っ！」

自分が目を瞑り、腕を組んでいる間にファイロは自分の糸を白虎に仕込んでいたので

ある。

「……さあ、コズミックマリオネーションの真髄……受けてみるがいい！」

フィーロはさらにくねつと指をくねらせた。今度は白虎の拳が、作られ、その拳が、白虎の顔に向かって放たれたのである。

「——っ！」

白虎はその勢いで、足をよろつかせたが、フィーロの糸はそれを許してはくれない。すぐにいつもの堂々とした出で立ちに戻ってしまい、倒れることすらままならなかった。フィーロが最初にコズミックマリオネーションを放つ時に言ったとおり、「何もかも操ることができる」というのは本当なのだ。だからこうして、白虎の体もその糸で操り、自分の思うがままにしているのだろう。だとしたら、このままでは白虎はフィーロに対して攻撃どころか、糸を引きちぎって立ち向かうことすらままならない。「こんなただの糸」と、白虎は心の奥底で思っていたが、実際は予想以上に手強く、ぬかりがない。三巨頭の名を名乗るのには、まさしく相応しい技である。

そして、自分の意のままに操る、という点でも神の代わりに頂点に立つためのフィーロの心意気が、どこか見え透いていた。確かに神の代わりになるためには、フィーロ自身が、世界を自分の意のままに動かせるための権力を必要とするであろう。

だが、白虎はそんなのはまっぴら御免被るのであった。無論、それは他の聖闘士たち

も同じなのだ。だからこそ、ここまでやってきて、戦っているのだ。白虎以外の聖闘士は白虎が逃がしてしまっただが、外では女神アテナを守るという聖闘士としての役目をしっかり果たし、務めているであろう。白虎はそう信じている。

そうこうしているうちにも、白虎の体はだんだんとファイロのコズミックマリオネーションに蝕まれていく。次にファイロがぐいと指を動かした瞬間、白虎の指が、あり得ない方向へと曲がろうとしていた。

「ぐっ……！」

そんな方向に曲がるはずはない、と白虎は力を振り絞って、ファイロの攻撃に必死になって、指に力を入れて抵抗していた。だが、ファイロはそんな白虎に対して非情で、そのまま白虎を上回る力をあっさりと出して、その指を手の甲側へと折ったのである。

「ああっ……！」

白虎はその痛みの激しさから、端麗な顔を思いつきり歪ませた。折れた指はプラプラと宙ぶらりんとなり、自分の思うように動けなくなっていた。きつと、拳を握ることすらままならないであろう。だが、ファイロの狙いはそこにあるのだ。ファイロは更に指をくねくねと動かして、次々と白虎の体を支配した。

「ぐあつ、ああつ……！」

びきびき、とファイロの糸が白虎の体に食い込んでいく。それは何もかも、砕く勢い

だった。だが、白虎の闘志は糸が食い込むほどに、燃え上がっていたのだ。この糸をどうにかしてしまえば、もはや勝機はこちらにあるといっても過言ではないからだ。

食い込んだ肉の部分からは、血がポタポタと糸を伝ってから流れ出ていた。このままでは、本格的に糸によって四肢がバラバラになつてしまう。だが、どうしたら、ここから脱出できるというのだ。拳も使えない、ましてや蹴りも使えない、強いて使えろと言え、己の声程度か。

(あ……………)

自分の最大の武器といえば、自分の声ではないか。そして、その声を利用した歌は自分にとって一番の技でもあるではないか。

(せやなあ、せやで、せやつたなあ……………)

体の自由がきかず、戸惑いを隠せずにいたのが、改めて冷静になつて、そんなもの、自分にとってはまったく問題がないことに気が付いた。全く、どうして今までそのことに気が付かなかつたのか、自分はうろたえすぎである、と白虎は心の奥底から自分をバカにしていた。

「くくっ……………ははっ……………あはははははっ！」

白虎はあまりにもくだらなすぎたのと同時に、脱出の突破口が見えたことに対する嬉しさから、思わず大きく笑い声を立てた。ああ、バカだ。こんなうろたえる必要など

なかつただろうに、と。

フィーロは突然笑い声を上げた白虎に対して、不審げな視線を向けた。自分と戦っている相手が突然大きく笑い声を上げたら、そういう視線になるのもおかしくはない。

白虎は「はー、おかしー」と笑みを落ち着かせてから、フィーロに向かってニツと八重歯を見せながら笑みを浮かべた。

「はーあ……アンタ、これでわいの全てを封じたと思つたら大間違いやで？」

「な、何を……」

「わいの武器は、体よりも、喉に宿ってるってこと」

フィーロは一瞬わけが分からなかつたが、すぐにそのことに気がついて、「しまったー」と言いたげに白虎のことを見つめていた。しかし、自分の糸ではその武器に向かって攻撃することに対して、かなりの限界があつた。

「やつぱりアンタ詰めが甘いねえ。こんなだから隙あり放題のやられ放題なんやろ？ 三巨頭としての実力は申し分ないけど、やるならもつと徹底的にやった方がいいと思ふけどね」

「……舐めた口をきくな。たかが青銅聖闘士ごときに、私の実力を語られてたまるか」

「気に入らない、けど事実には、指摘されればそうやって凶星になりながら、イライラする。アンタの部下そっくりやねえ」

そう言っている白虎の脳裏に浮かんだのは、フィードの部下を名乗っていた、天英星・バルロンのティースであった。ティースの方も、フィードとは度合いは違えど、事実を指摘されるとすぐに、凶星になりながら、こうしてイライラしていた。自分に都合の悪いことから目を背けてしまうのは確かに人間の性だが、大の大人が都合の悪い事実を指摘された程度で、すぐにイライラつきを表に出すのはどうなのかと、白虎は思っている。

フィードはふん、と鼻を鳴らして、糸をぐつと引いた。だが、勝機が見えた白虎はその程度では怖気つくはずがない。すぐに小宇宙を全身に込めて、そして、声を放った。

「わいの小宇宙は、わいの絶唱のすべて！ さあ、見るがいい！ 龍の舞を！ 猛虎の叫びのすべてをー！」

白虎の小宇宙が、みるみるうちに溜まっていく。もう、ここまできたら、誰も白虎のことを止められない。

「遊舞乱虎————ツツツ!!!」

その瞬間、白虎の体にまとわりついていた糸が、白虎の血をまといながら、勢いよく切れたのである。フィードはその自体に驚いたのか、目を見開き、その様子を見ていた。その間にも、白虎の歌声が部屋の中に鳴り響いた。

「寂しさを惑わす風は何を問えばいい………」

そして、その歌声と同時に舞も始まる。龍飛虎咆とは違い、最初に歌を歌い小宇宙を

貯める遊舞乱虎。その間にも、風が吹き荒れており、その風が壁となり、誰も寄せ付けない状態となっている。前回翔馬に向かって打ったものは、最初から風は吹いていなかったが、それは翔馬の動きを止めていたから。今回は動きを止めることができなかつたゆえ、だ。

「くそっ、……っ！」

フイーロはその暴風の中にいる白虎に向かってコズミックマリオネーションを放とうにも、すぐに糸は千切れてしまい、まともに攻撃すらできなかつた。

「今を問うか、それとも過去を問うか、アッ！」

白虎の方は、コズミックマリオネーションによつて傷付いた体に対して、早くも影響が出てきたらしく、足をダンツと踏み込んで、踊っていた。歌に関してもこうして歌っているだけでも決死な思いなようだ。

「そして自分自身に何を問おうかッ！」

しかし、白虎の歌はそこで途切れることはない。自分の力の全てと、自分の絶唱のすべてを、フイーロにすべてぶつけるのだ。

が、しかし——……。

「自分を問うか、それとも他人を問う……ガアッ！」

白虎はそろそろ盛り上がる前の静かな余興に入るところで、口から血を出したのであ

る。大量ではなく、ごく少量だが、今の白虎にとっては大きいものだった。

前回は白虎は遊舞乱虎を放った後、すぐに気絶してしまった。それは、白虎の体に対する負担が他の技と比にならないからである。無論、今回の吐血に關しても、実は少し昔に遊舞乱虎を初めて放った時に、体がその負担についていかず、やつてしまったことがある。聖闘士になった今ではそういうこともなくなったと思っていたが、まさかこんなところで出てくるとは。

(でも——わいの歌は——小宇宙は——……吐血ぐらいで、引き下がらない！)

白虎は口元の端から血をポタポタと垂らしながら、態勢を整えて、笑みを浮かべた。ここで遊舞乱虎を放つことができなければ、フィーロに虎の一牙を食らわすこともできない。もう、自分の限界など、知ったことではない。フィーロに自分の全力をぶつけるのだ。

「もう既に覚悟はできているんだ！ この身を捧げるぐらいのことならばッ！」

再び歌唱を開始した。この部分は、今の自分に鞭を打つように、そして、自分の心に言い聞かせるように強く歌った。

「さあ、アテナの戦士よ！ 今こそ忠誠を誓え——……っ!？」

そろそろ歌も佳境にはいるその時であった。白虎は歌うのを思わずやめて、目を丸くして、呆然と目の前を見つめていた。何故ならば、白虎のその視線の先には——黄金の

輝きを放っている聖衣、天秤座の聖衣がオブジェ状態でそこに浮いていたからだ。

「な、なにいつ!？」

フィードは怪訝とした表情で白虎と天秤座の聖衣を見比べた。まさか、青銅聖闘士ごときに黄金聖衣がこうして手助けに入るなど、普通ならばありえないことだった。あつたとしても、それは相当昔のことで、今となっては都市伝説であろう、とフィードは思っていたのである。

白虎は天秤座の聖衣をじつと見つめて、コクリと頷いた。そのあとの一瞬の間にも、天秤座の聖衣はそのオブジェ状態を解除して、白虎の体をまとう鎧となった。

「な、な……」

フィードは自分の目先で何が起こっていたのか、分からなかった。いや、頭が追いついていけないのだ。だが、白虎にとつては、天秤座の聖衣をこうしてまとうのは二回目だ。もう、戸惑うことは何もない。

(老師——貴方のお氣遣いに、甘えさせていただきます！)

そうして白虎が天秤座の黄金聖衣に手を伸ばし、それをまとう。青銅聖闘士よりも表面積が多い黄金聖衣だが、今の白虎ならば、まとえる。フィードはその姿を、ただ、ただ、呆然と見つめていた。

天秤座の聖衣をまとったあとの白虎の体は先ほどのような辛さもなく、ただ、ただ、軽

かった。白虎はスツと柔らかくほほ笑んでから、いつものような凜々しい笑みを浮かべて、歌の佳境にへと入っていった。

「何も恐れることはな—い！ 誓ったのならばツ！ その誓いを胸にして——ツ！」

暴風の勢いが、さらに強まった。もう先ほどのように、すぐに体力がなくなったりなどしない。いつものような余裕と、そして、力強い歌声が、部屋の中に鳴り響いていた。

「ぐっ！ 私としたことが！」

状況を読み込むことができたフィーロは、すぐに防御体制に入ったものの、時すでに遅し。白虎が黄金聖衣をまとった以上、もはや、フィーロが勝つ術など、どこにもない。

「何も怖がらなくともいい——！ さあ飛び立とう空へと——ツ！」

「ぐっ、ああっ……………」

その上、黄金聖衣をまとった白虎に勝るものは、もうこの場には誰もいない。もちろん、フィーロもそのうちの一人だ。フィーロは最後に暴風の中をぬって、白虎に近寄ろうとしていたものの、すぐに吹き飛ばされた。三巨頭のためであるであろう豪華な冥衣もその暴風に耐えられないのか、一気にひび割れていった。

「明日を照らし出せ、もう恐れない——ツ！」

そして、次の瞬間、

「未来へと……………」

この終わりの節を唱えた後に、白虎の周りのものが何もかも吹き飛んだ。フイーロが多額の金をかけて用意していた機械や、凜猫のロボットと、そのガラス張りの入れ物、そして、床や扉や壁や天井、部屋のすべてが崩れていった。フイーロもその暴風を浴びながら、冥衣をすべて粉碎され、その体も何もかもが崩れ去っていった。

(うそ、だ……！)

まさか、こんなところで、こんな奴に、こんな男に自分の計画が邪魔されるなど、自分の何かが許さなかった。しかし、フイーロには冥衣も、何もかも残っていない。残っているのは、ただの人間の一人であるフイーロ、それだけだった。

そして、そのあとの余波に関しては、もはや何も言うまい。

その余波はすべてを突き抜け、部屋の天井や壁を突き抜けて、隣にある部屋や、その隣の部屋まで、何もかもを破壊していった。

そんな激しい暴風の中で、白虎は胸に手を当てて、目を閉じて思った。

(老師——わいを、私を守ってくれてありがとうごさいます……)

このままあの技を放っていれば、自分の命はなかったかもしれない。しかし、こうして天秤座の聖衣が自分の元へ飛んできてくれたことで、こうして生き延びることができた。

そうして、一通り思うことを思えば、白虎は辺りを見渡して、脱出口を探した。そし

て、唯一暴風が薄いところを見つけた。そこには、一つの窓が申し訳なさげ程度にかすかに開いていた。

「——だあつ！」

白虎はタンツと、助走をつけて、勢い良くそこから外へと飛び出した。

そして、白虎が降り立ったのは、何かの上だった。気が付けば、地面はふにふにと柔らかく、指で押すと、弾力性があった。

(…………?)

白虎は一体何が起こっているのか分からなかったのか、そつ、と顔を見上げて、何かあるか確認した。

そこには——自分の知っている後頭部の姿があった。

「け、けけけ、圭熊！ 圭くんっ！」

バツと白虎は急いで圭熊の上からその身をどかして、圭熊の体をゆさゆさと揺さぶつた。

「だだだだだ、大丈夫!? ごめんな、ごめんね！」

「ぐ…………」

圭熊は両手地面につき、ぐつと腕を伸ばして、体を起こし、立ち上がった。そして、

頭をぼりぼりと掻きながら、白虎の方を見つめた。

「つたく……しゃーねえな！ ほら、皆が待つてんぞ！」

圭熊はニツと歯を見せて、笑みを浮かべて、しゃがみこんだままの白虎に対して、スツと手を差し出した。白虎は微笑みながらコクリと頷き、その手を取った。

「つと……」

圭熊は白虎の黄金聖衣をまとった姿に驚きながらも、特に突っ込みを入れるつもりはないようだった。人間だと思っていた凜猫がロボットだったという、衝撃的な事実を聞いたのだから、もう何があっても驚かないのであろう。白虎はその圭熊の反応に少し寂しさを覚えた。

それから、白虎はひよこつと、圭熊の耳の横から自分の顔を覗かせて、圭熊の後ろを見つめた。その覗かせた視線の先には、水鹿や翔馬と凜猫と海鳥、そしてラティエルが微笑んでそこに立っていた。白虎は「おーい！」と手を振りながら、圭熊を横切つて、こちらの方へと駆け寄つた。そうして、白虎が真っ先に駆け寄つた先は、アテナ・ラティエルであつた。

「アテナー！」

「白虎……よく頑張りましたね」

ラティエルは白虎の姿に一瞬驚きつつも、すぐにいつものような温厚な優しい笑みを

浮かべて、白虎の頭をぼんぼん、と撫でた。本当に白虎が無事でいてくれてよかった、という安堵が、その撫でる手の中に込められていた。

白虎も笑みを浮かべながら、コクコクと領いた。

——そうして、2198年における、冥王ハーデスとの戦い、実質、聖闘士と冥闘士の乱は幕を閉じたのである。

白虎は顔を見上げて、空を仰いだ。

32:「聖なる日」

あの戦いが終わったあととはといえば、ディーネとアトモスは事情聴取され、唄狼は反省の意を込めてスニオン岬の牢屋へ（しかし本人はまったく反省していない模様）、そして、事の元凶のフィーロに至っては消息不明となっていた。因みにディーネは事情聴取で「どうして聖闘士たちに味方したのか」と聞かれたのき、「フィーロを倒せれば誰でも良かった」と言っていたらしい。それを隣で聞いていたアトモスは苦笑し、そうした事情聴取していた聖闘士の一人である、望遠鏡座の白銀聖闘士・ロークも苦笑しながらメモをしていた。

凜猫に関しても事情聴取を受けていた。どうやら、ロボットとしての凜猫の記憶は、しっかりと受け継いでいるらしく、圭熊たちのこともしっかりと覚えていたようだった。

そして……。

「いやー、すっかり忘れてたわ。そういえば今日はクリスマスやったなあ」

と、白虎はすっかりクリスマスモードな聖域を目に通しながら、そうぼそりと呟いた。そう、12月25日は、皆しみクリスマスなのだ。

因みに白虎は、人間とは思えない治癒力と脱皮力でフィーロとの戦いで負っていた傷

を見事に完治させた。脱皮力に關してはもはや何も言うことはない。

白虎の横に立っていたアテナ・ラティエルはニコニコと微笑みながら、目の前に広がる聖域の様子を見ていた。相変わらずこの白虎とラティエルが並ぶと、親子というか姉妹というか。

ふと、白虎は氣になったことがあつたのか、口を開いた。

「ところで、アテナ。わいに似ている女の子って誰なんですか？」

「……ええ」

実はラティエルもそのことについて話したかつたのだ、と言わんばかりの様子で、とある一枚の写真をどこからとなく取り出した。そして、その写真を白虎に差し出して、見せた。白虎はその写真をそつと受け取つて、じつと見つめた。

(小さいアテナと……わい?)

そこに写つていたのは、幼き日のラティエルと、白虎——いや、実際にはラティエルの言う女の子が写つていたのである。白虎が自分でも見間違えるぐらいに、その女の子は白虎そのまんまだった。大きな違いと言えば、髪の毛の長さ、癖つ毛の有無だ。だが、その女の子は白虎の髪型をほぼストレートに伸ばした姿まんまだったのだ。

ラティエルは懐かしむ様子で、白虎に向かつてぽつりと呟いた。

「ふふ、似ているでしょう? かつては彼女も私の侍女として、聖域のために戦っていた

の。でもね、私がある程度大きくなってしまつたら、彼女は実家の方へと戻つてしまつた。私のもつと彼女に側にいてほしかった。彼女は今、どこで何をしているのか……わからないの……。また会いたいのにね……」

ラティエルのその声はどこか震えていた。

一方の白虎は聞いたら双方の何かが爆破して崩れるかもしれない、だが、聞かなければ分からない。そして、もし自分の予想が当たつていれば、事実を伝えなければならぬ。

白虎はおそろおそろ、ラティエルに聞いた。

「その女の子の名前つて、『虎鈴』つて名前だったり、しま、すか……？」

「……」

ラティエルはバツと顔を上げて、貴方は知つているのか、といった様子で白虎を見つめていた。白虎はそのラティエルを見、やっぱりだ、といった顔をした。そして、事実を話した。

「この女の子、私の母親なんです。母親として、常に幼い自分を守つてくれていた。でも、もう、この世には……」

白虎の声はラティエルの声以上に震えていた。神様はなんていう巡り合わせをし、意地悪をしてくれたのだ。白虎は写真の上にはばたと目から出てきた水滴を垂らしな

がら、そつ、と呟いた。

「お母さん……お母さんっ……！」

それから、白虎はラティエルの前だということに関わず、思い切り喚いた。

自分の幼さと力のなさに嘆いたあの日——白虎はもうあんなことはないようにしたい、と思つた。そして、その思いを胸に聖闘士になり、ラティエルの隣を、こうして自分の足で踏み入っている。それは決して生半可な気持ちでなかつた。何か自分に守れるものがあれば、と、白虎はここに立っているのだ。

——そう、在りし日の母親のように。

海王編

33：「始まりのパーティ」

— さあ、眠りましょう。

— 私の腕の中で。

— さあ、眠りましょう。

— 夢を見るために。

— 目覚めた時の輝く日差し。

— 小さなあなたは。

— 何を考えているの？

— その小さな体に。

— 何を抱くの？

赤子の頃に母親から聞いていた子守唄を、小さき少年は決して忘れてはいない。だから、こうして、今でも口ずさんでいるのである。この子守唄を聞くと、母親が自分の元へと戻ってきてくれていているような気がするのだ。もちろん、実際は母親はこの場にはいないのだが。

少年の年は数えて八つ、そして明日にはとうとう九つとなる。少年は、そんな大切な日に何が起こるか、知る由もなかった。

その会場の更衣室から出てきた人物は、とても可憐な少女だった。白と淡い桃色を基調とした綺麗なドレスが非常に似合っていた。そして、体のすべてを覆うような長袖長スカート。周りがそれなりに露出が高いドレスな中、浮いてしまうかもしれないが、それでも、少女の可憐な顔がすべてを帳消しにしていた。それほどまでに、少女の顔立ち是非常に綺麗なものであったのである。

そして、その少女の横には、スツと鼻が通り、スツとした目つきをした、これまた美系ともとれる青年の姿と、もう一人、いかにも少年らしく、二人に比べれば見劣りするものの、非常に年頃の男子らしく愛らしい少年の姿があった。

二人の青年少年は、ずっと少女の手を片方ずつ手にとつて、少女にこりとほほ笑んだ。少女もそれに対してにこりと微笑んで、二人の手を握り、そのまま二人に対して、蹴りを入れた。

「ぐはあっ！」

「っ……………」

青年の方はなんとか当たる寸前で避けることができたが、少年の方は華麗に直撃。その場にしゃがみ込み、縮こまり、腹を抱えて、その痛みを悶絶していた。

そして少女は鳥肌を立てながら、言い放った。

「ねえ、何なん!? 何なの、これ! 明らかにここだけ別世界化してて、すっごい気持ち悪いんやけど! つていうか、何でわいだけドレスなの!?!」

少女、いや、少年・白虎はあはあ、と息を立てながら、二人の青年少年、水鹿と圭熊の目の前に立った。圭熊は腹への痛みが治まったのか、「よっ」と立ち上がって、「仕方ねえだろ」と、言った。

「白虎に合うサイズのタキシードスーツがなかったんだから。まあ、任務は支障はないし、気にすることねえよ。な? 馬……じゃなくて、翔馬」

三人のやりとりを横から見ていた馬のかぶり物、もとい、翔馬はこくこくと頷き、「仕方ない」と圭熊に同調していた。なぜ、翔馬が馬のかぶり物をかぶっているのかは、周りは突っ込みを入れる気はないらしいが、多分ノリであろう。

翔馬は白虎のことを親指で差して、圭熊に言った。

「どつちにしろ、白虎の性別は『白虎』なんだから、男か女かなんて大した問題ではない」「大きな問題だよ! アンタ、前に露天風呂で一緒に風呂入ったやろ! 新しい謎の性別区分作るな!」

「あー、それもそうだったなー」

「アンタに至ってはわいの全裸見たやろ！　そして納得すんなー！」

白虎の息はすでにぜいぜいと上がっていた。圭熊と翔馬がこうして一緒にふざけると、こんなにも突っ込みが面倒になるのか。白虎はいつも自分たちのおふざけに対して突っ込みをいれている水鹿を、改めて尊敬した。

「白虎……」

「水鹿……」

水鹿は真剣な様子で、そして申し訳なさそうな瞳で見ている。白虎も思わず真剣な様子で水鹿を見つめた。きつと、水鹿は自分に対して同情の視線を向けているのである。白虎はフツと微笑んだ。

「ええんよ、水鹿。同情なんて」

「いや、そうじゃない」

水鹿は白虎の言うことにふるふると首を横に振った。白虎は「は？」と小さく声を上げて、どういうことなんだ、と水鹿を怪訝そうに見つめた。水鹿は心配そうにほほ笑みながら、白虎の肩に、ぽん、自分の手を置いて、言った。

「お前、また全裸で外に飛び出すんじゃないかと心配で」

「むしろどうやって全裸で飛び出す状況になんねん」

そうして更衣室で散々ふざけてから、四人は会場へと向かった。さすがに更衣室から出る際はスイッチの切り替えができており、凛々しい顔つきとなっていた。しかしながら、いざ、会場に入ると、少しばかり騒がしくなるのは年頃ゆえだろう。白虎や圭熊や翔馬は、その広さや豪華さに感動して、声を上げていた。

「おーおー！ すげー！ シャンデリアだぜー！」

「美味しそうな食べ物がたくさんある……！」

「わっほーい！ あんなどころにピアノもあるでー！」

「お前ら、他人に迷惑かけんようにな」

水鹿はそんな三人の姿を、呆れながらも、微笑ましそうに見つめ、見守るのであった。

今回の任務はソロ家主催のパーティーに潜入しながら、そのご子息にあたる、リヴァージュ・ソロの護衛である。肝心のそのリヴァージュ・ソロはまだパーティーに出るための準備をしているそうで、白虎たちは会場での待機を命じられたのである。任務とは思えぬほどに、水鹿以外の三人は気を抜いてパーティーを素直に楽しんでいるようだ。まあ、それも三人らしい。任務前の余暇として楽しむのも、また、よいであろう。水鹿は、ワイングラスにオレンジジュースを入れて、それを口に含み、喉に通した。そして、辺りをキョロキョロと見渡しながら、何かを感じ取っていた。

(……なんか、視線を感じるな……)

主に女性から、だ。その女性たちは一体何が目的でこちらを見つめてくるのか、さっぱりである。しかしながら、敵意のある視線ではないゆえ、無視するのが妥当であろう。いちいち相手にしていたらキリがない。と、顔を上げて、ステージの方を見つめた。

ステージには、先ほど白虎が言ったとおり、ピアノが一つ置いてあり、その斜め横にはマイクもあつた。パーティーの本格的な開始は、どうやら、まだなようだ。

パーティー開催関係者の待機室で、白いタキシードを着た男性が、白銀に輝くフルートを憂いのある瞳で見つめながら、椅子の上で座っていた。透き通るような紫がかつた色素の薄い髪の毛は、窓から入ってくる風にさらさらと揺れ、その切なさを一層醸し出していた。そして、タキシードのワイシャツの下につけているネックレスをおもむろに取り出し、それを見つめていた。ネックレスの飾りは蓋があり、それを開くと、一人の女性の写真が姿を見せた。

(……エリー……)

どうやら、この男性の恋人のエリーという女性のものらしく、そして、男性の様子からして、そのエリーはこの世からいらないのである。男性はぎゅつ、と飾りものの写真を握り、祈るように目を瞑った。

「ヴィオラ」

と、そこへ、男性の耳に幼い少年の声が入った。男性は己の名である「ヴィオラ」という言葉を聞いて、瞑っていた目を開き、顔を上げて目の前を見た。その視線の先にいたのは、自分もよく知っている少年の姿だった。

「リヴァージュ様……」

ヴィオラは少し余韻に浸っているように、目の前にいる少年・リヴァージュを見つめた。リヴァージュは何か考えごとをしているヴィオラのネックレスの飾りを強く握りしめた手を見た。リヴァージュも子どもながらにヴィオラの事情は分かっていたようで、特に問い詰めたりはしなかった。

そして、リヴァージュは小さい手をヴィオラの握りしめた手の上に重ねて、ヴィオラに対して微笑んだ。

「今日はあなたのフルートが聞けることを、うれしく思っています、ヴィオラ。あなたが吹くフルートの音色、ぼくは大好きです」

「……リヴァージュ様……」

「そろそろパーティーが開始してしまうので、ぼくは行きますが……あなたのフルート、とても楽しみにしています」

そういうと、リヴァージュはヴィオラの手から自分の手を離れた。そして、軽く会釈をした後、リヴァージュは会場へ向かうために扉から部屋を出ていった。

ヴィオラはリヴァージュが手を置いた、自分の拳を開いて、再び女性の写真の姿を露わにした。ヴィオラは「ふう」と息をついて、飾り物の蓋を閉じて、ワイシャツの中へとしまった。

その頃、一方では白虎が女子トイレと男子トイレの目の前でうろろし、悩んでいた。
(うろーん……男子トイレに入るべきか、女子トイレに入るべきか……)

後で支障が起きないのは女子トイレであろうが、自分が男である以上は本物の女性に對するセクシユアル・ハラスメントになるだろうし、正体がバレたらまず大變だ。女性というのは、男性が思っているよりデリケートなものであるゆえ、白虎自身は女子トイレに入ることに對して、あまり気が進まなかつた。かといって、男子トイレに入ろうにも、この格好では少々躊躇うものがある。この格好のままが入ってしまうば、明らかに驚かれることは間違いなしであろうし、しかもこの格好で入ってしまうば、男と分かつていても、「そういう趣味」があるのかと、あらぬ誤解を受けかねない。

やはり、男子トイレより女子トイレに入った方が、あらぬ方面で効率的か。

「ぐう……」

(ど、龍星座の白虎！　これから男を捨てる！)

こうなればヤケクソだ。思い切つて女子トイレに入つてしまえ。

そう思って、白虎が女子トイレへと一歩足を踏み出した時だった。

「……………」

くいっ、と、軽くながらもドレスの裾を引つ張られた気がしたのである。引つ張られた位置的には、相手は子どもなのだろうか。くるつと白虎が振り返ってみると、白虎の視線には誰もいなかった。そして、下の方へ顔を俯けて、視線を向けた。そこには一人の少年がニコツツと笑みを浮かべながら、白虎の顔を見つめていた。

白虎は少年の手を掴んで、ドレスの裾から優しく離して、ぽんぽん、とそれを少年の体の横に戻した。それから、白虎は少年の視線には合わせるため、腰を曲げて中腰になった。

「……………迷子、なのかな？」

にしても、随分と余裕そうな笑みを浮かべている気がしないでもないのだが。自分をこうして引つ張った以上は、迷子か何かに近いのかもしれない。

だが、少年はニコニコと笑みを浮かべながら、向こうの方を指差して、白虎に言った。「あちらに、男女兼用トイレがありますよ」

「……………ふにやつ？」

白虎は変な声を上げて、この会場の中を説明した少年を見た。少年はニコニコと笑みを浮かべながら、きよとん、として白虎を見ている。

「あ、あのー……君って……」

白虎は少年に向かって何かを言おうとした瞬間、白虎の頭の中へ何か信号が下され、それと同時に尋常でない排出欲が白虎の下半身へと急激に降りていった。

「えっ、えーつと!?! 男女兼用トイレがあっち?!」

「はい」

「あ、ありがとうなーっ!」

白虎は少年から教えられると、すぐに教えられた男女兼用トイレへと向かった。少年はぱちくりと目を開くと、すぐにクスツと笑みを浮かべて、その後ろ姿を見つめていた。

「ふはー……」

(良かったー……間に合ったー……)

白虎はどうやら間一髪で間に合ったようで、安心して手を洗っていた。もしあのまま女子トイレに入っていれば、自分は外見だけでなくあらゆる方向で男を捨てかねなかつただろう。危ない。そして、このことは圭熊たちには黙っておかないと、絶対大爆笑されてしまうに違いない。さすがの白虎といえども、これ以上ネタにされてしまうのは勘弁してもらいたいところだ。

手を洗い終え、懐に入っていたハンカチを取り出し、そのハンカチで手についた水滴

を拭き取りながらトイレから出ていく。そして、入り口から出た先で、小さな少年の姿を一人見た。

「あつ……」

先ほど、白虎に男女兼用トイレの存在を教えてくれた少年だった。どうやら、白虎のことが気になったようで、付いてきたようだ。少年はこちらの存在を気が付いたのか、ニコツと笑みを浮かべて、すたすたと白虎の方へと歩み寄った。

白虎はハンカチをドレスの適当な場所へ仕舞い、少年に対して、視線がほぼ同じになるように中腰になった。そして、口元を緩め、微笑んだ。

「さつきはありがとうな。君の名前、教えてもらっても大丈夫？」

「——はい」

少年は白虎に言われると、コクンと頷いてから、ペこりとお辞儀をして、そして顔を上げて言った。

「ぼくはリヴァージュ・ソロと申します。以後、お見知りおきを」

白虎はその名を聞いた途端、咄嗟に声を上げた。

「——あつ、ああーっ！ アンタが例の……子息さんやったんかあつ！」

「えっ？」

いきなり声を上げた白虎に、少年・リヴァージュは思わず驚いていた。一体何がどう

なっているのかわからないのだ。リヴァージュがそうして戸惑っている間にも、白虎はドレスの裾をたくし上げながらリヴァージュの元に跪き、手のひらを胸にあてて、リヴァージュに言った。

「えーつと……私は、本日、貴方の護衛にあたることになっている聖闘士の一人・龍星座の白虎でございます。先ほどは、ご無礼と痴態を晒し、不快にさせて申し訳ございません」

「あ、あの……ぼ、ぼくはそんな……と、とりあえず顔を上げて立ち上がってください」

「……はい」

リヴァージュは明らかに戸惑っているようだった。とりあえず白虎は言われた通りに顔を上げ、その場に立ち上がった。リヴァージュは己の顔を見上げて、白虎の顔を見、それからぺこりとお辞儀をして、につこりと顔を綻ばせた。

「白虎さん、本日はよろしくおねがいます。たしか男性四人と聞いていたのですが……あなたも？」

「あ、はい……そうです。私も一応男です……」

リヴァージュにそこを突っ込まれた白虎は、苦い笑みを浮かべながらそう答えた。やはり一目では女装しているとは分かりづらいのだろう。これがいいことなのか、それとも悪いことなのか、白虎本人にはさっぱりなのだが。一方のリヴァージュは「へえ……」

と物珍しそうな瞳で白虎のその姿を見ていた。10歳にも満たぬ少年には、男性がどうして女装しているのか、いささか疑問で、不思議なものなのだろう。

白虎はそんな視線を浴びながらも、口元を緩め、リヴァージュに笑いかけ、そのまま相手の手を取った。リヴァージュはきよとんととして、白虎の顔と取られた自分の手を交互に見つめていた。白虎はリヴァージュに視線を合わせるように、腰を低めて、優しく言った。

「パーティー会場までお連れいたしましょう。そろそろ時間ですから」

「あつ……そうですね。では、お願いします」

リヴァージュは、白虎に言われて、そういえば、と気が付いた。白虎はぎゅつとりヴァージュの手を握り、また、リヴァージュも手を握り、そのまま会場へと向かった。

「さあ——眠りましょう……」

白虎は会場に向かうまで、そうして歌を口ずさんだ。リヴァージュはその歌を聞きながら、少し懐かしそうにしていた。

「——とても、心地よい」

「えっ?」

不思議そうにリヴァージュに視線を向ける白虎。リヴァージュはニコツと微笑みながら、ぽつぽつと話し始めた。

「じつは今あなたが口ずさんだ歌、母との大切な思い出なのです」
「……」

「少しばかりむかしに亡くした母親との、大切な歌なのです」
「……そ、そうでしたか。何か……ごめんなさい」

白虎はリヴァージュの話を聞いた途端、目を伏せながら謝った。リヴァージュは「いいえ」と首を振った。

「ふと思いついただけです。さあ、行きましょう、会場へ」
「……そうですね」

会場の入口付近に着けば、そこで見張っていたらしき圭熊と翔馬が手を振って出迎えてくれた。白虎はそんな二人の姿を見るなり、手を振り返して、二人の方へ歩み寄った。

「圭くん、翔くん！ ごめんなー」
「いいんだよ。……と、そちらさんは？」

圭熊はちらりと白虎が連れている幼い少年の方へと視線を向けた。白虎は「ああ、こちらさんはな」と、少年について話した。

「わいらがこれから護衛することになる、ソロ家のご息子さんやで」
「リヴァージュ・ソロです。本日はよろしくおねがいします」

リヴァージュは自己紹介をしてから、ペこり、とお辞儀した。圭熊は感心するようにリヴァージュを見てから、白虎を見て、ぷつと吹き出した。白虎は突然吹き出した圭熊に対して、「んっ」と睨みをきかせながら、言った。

「な、なんやねん……おかしいところでもある？」

「いや、だって……こんな子どもがしつかりしてんのに、お前ときたら……」

「は、はあ!? 別にええやろ! この子はそういう家の元で育ったんやから、比較にすらならへんって!」

圭熊と白虎がそうして駄弁っているのをリヴァージュは苦笑しながら見ていた。ふと、そんな中で白虎は気がついたことがあった。

「……なあ、水鹿は?」

「さーな。トイレか何かじゃね?」

「……ふうん」

まあ、深く考える必要はないか、と白虎が思っていると、突然会場が真つ暗になった。何事かと白虎たちは顔を上げて、キョロキョロと辺りを見渡した。束の間、カツとライトが会場にあるステージの方へと向けられ、人の姿が映し出された。

「皆様、長らくお待ち致しました。これより我がご子息であるリヴァージュ・ソ口様の誕生日パーティーを行います」

その声と姿が現れた途端、白虎たち三人は驚愕の声をその場で響かせた。

「――す、水鹿アツ!?!」

「おお、兄ちゃんまじで!?!」

「杯座……あいつは何を……」

三人が目を見開き、驚いている間にも、会場全体に拍手が沸き起こる。リヴァージュは白虎の服をちよいちよい、と引つ張り、白虎に合図を送った。白虎はそれに気が付き、ハツと我に返ってから、リヴァージュの方へと顔を向けた。リヴァージュはステージの方を指差して、そわそわしていた。どうやら、そろそろステージの方へと向かわなければならぬらしく、ここから離れなければならないようだった。

白虎はとん、とリヴァージュの肩を軽く叩き、後押しした。リヴァージュはどこか安心したように笑みを浮かべて、こくん、と首を縦に振ってから、ステージに向かうためにその場を離れた。

白虎はステージに向かうリヴァージュの後ろ姿を見送ると、「はあ」と盛大に息を吐いて、近くにあつた椅子に腰掛けた。

(水鹿……あいつ……何でこのパーティーの司会やつとんねん……)

まさか、水鹿が司会を頼まれたから自分たちはおまけ程度にリヴァージュの護衛を頼まれたのではなからうか。いや、そうに違いない。

それからしばらく椅子の上で白虎が気を抜いていると、耳に綺麗な音色が降りかかり、入ってきた。白虎はその音色に反応したのか、ぐったりしていた体制をすぐに引き締めて、ガタツと椅子の脚を鳴らし、立ち上がった。その近くにいた人物は思わず白虎の方に視線を向けるものの、白虎はそれを気しなうと言った様子で、その音色に耳を傾けていた。

（す、すごい綺麗な音色……。フルートかな？ 誰が奏でてるんやろ……）

白虎はすつと顔を上げて、その楽器の姿と奏者の姿を確認した。

そこにいたのは、一人の男性の姿だった。

男性は白いタキシードを着て、目を閉じ、フルートを手にし、口にして、吹いていた。そこから奏で出るハーモニーは誰もを魅了するような、切なく美しいメロディ。無論、白虎もそのメロディに魅了された人物の一人に過ぎなかった。

（確か……ヴィオラさん言うたな、あの人）

白虎は名前だけは聞いたことがあった。音楽関連の番組やニュースで度々見かける。白虎自身、彼がフルート奏者であることは知っていたが、その音色自体は聞いたことがなかった。白虎は、ヴィオラのフルートを聴くことができ、とても光栄に思っている。

「……Hum——……Hum……Hum——」

気がつけば、白虎はその音楽に合わせてハミングを始めていた。歌い手として、相手

のフルートの音色は心地よく、また、リズムにずれが生じることもなく、気持ちよかつたのだ。

一方で、フルートの奏者である男性・ヴィオラは、フルートを聞きながら、何かタイミングを見計らっていた。閉じていた目を薄目で開きながら、会場全体を見渡し、再び目を閉じる。無論、そんなヴィオラの様子に誰も気付くことはない。会場にいる客たちにとつて、ヴィオラはステージを盛り上げるフルート奏者でしかなかったのである。

そしてヴィオラが再び目を薄目で開き、ちらりと横を見ると、一人の小さな少年の姿・リヴァージュの姿があった。リヴァージュはキラキラと目を輝かせながら、ヴィオラの奏でるフルートの音色に聞き入っていた。その姿を見たヴィオラは一瞬、何か決意が揺らいだように瞳を揺らがせたが、すぐに目を閉じて、その揺らみを断ち切った。

(ここは僕がやらねば……でなければ……誰がやるというのだ……)

そうして音色が奏でる音楽はだんだんと終わりに近づいていく。それは誰もが感じ取っていた。

音楽が終わった——次の瞬間。

「きやあつ!?!」

「なんだあつ!?!」

「わあつ!」

部屋の窓が全て割れ、ガラスが中へと散乱。その割れた窓から、怪しい謎の鎧を着た人物たち、いわば雑兵と思わしき者たちが無限に会場内へと入って行く。そして、その客たちを囲うように、周りをその雑兵で巡らせる。静かにフルートの音色が鳴り渡る霧囲気から一転して、一気に客の阿鼻叫喚の渦中へと変貌を遂げた。

司会に回っていた水鹿は白虎たちの元へと駆け寄り、合流。すぐさま戦闘態勢に入った。

「水鹿っ……!」

「白虎、お前はご子息さんのところへ迎え! 子どものお守りはお前が一番得意なはずだ!」

「……了解っ!」

白虎は水鹿に言われると即座にご子息であるリヴァージュを求め探しに行った。

だが、それを雑兵たちが許すはずもなかった。

「させるかあっ!」

雑兵たちはリヴァージュの元へと向かう白虎に飛びかかった。

「はっ——……アンタらなんか、わいにかかれば、一網打尽よ!」

だが、白虎はそれに物怖じせず、スカートを翻して、雑兵たちの顔や腹に飛び蹴りをくらわせた。白虎たちに飛びかかった雑兵たちは、白虎の言うとおりに一網打尽にやら

れ、死屍累々に倒れていった。次々と雑兵たちが白虎に遅いかかり、自滅して行く中で、翔馬たちの方も雑兵たちの片付けに精を出していた。後に白虎に襲いかかる雑兵が少なくなったのもそのためだろう。白虎は雑兵退治をしている翔馬たちに向かって、心の中で言った。

（——恩に着る！）

そして、白虎が走り、辿り着いた先は、先ほどからステージでただ、冷静に立っている男性の姿、ヴィオラの姿だ。ヴィオラは聖闘士たちと雑兵たちが戦っているのを、その目で見つめて、何も言わなかった。

だが、そんなヴィオラも放つて置けぬのも白虎の性というもの。白虎はヴィオラに走り寄り、ヴィオラの腕を引っ張った。

「ヴィオラさん！ アンタもはよう逃げんと……！」

「……逃げる？」

ヴィオラは「ふん」と鼻を鳴らして、掴んでくる白虎の手を振り払った。白虎は予想外の相手の反応に驚き、目を見開いた。ヴィオラは白虎を横目で見据え、言った。

「君は、大切な人が目の前で殺された時、どう思う？」

「どうって……っ！」

ふと、白虎の脳裏に、祖父母によって両親を殺されたあの出来事が過った。あの時の

自分は、まだまだ幼く、そんなどう思う、など言われても思いつくものは何も無い。だが、一つ言えるとしたら——……。

「……憎い……ただ、その人を殺した相手が憎いっ！」

白虎は強く言葉を打ち付けた。

「その人だけじゃない……！ 何もかも、世界が、憎くなるっ！」

発声練習を重ねた白虎の声は、パーティー会場内に鳴り渡るほどの大きさだった。当然、その声量ゆえ、圭熊や翔馬や水鹿の耳にもそれは届いていた。三人の顔は途端に複雑そうな表情に、だが、白虎に全てを委ねた。

ヴィオラはこちらを強く見てくる白虎を、感心したような瞳で見つめて、手に持っていたフルートをぐつと強く握った。

「そうか……それは僕も同じ思いだよ。もし、その憎さで世界を変えることができれば、粛清できるなら、その方がいいよね？」

「……不本意ながら、そう思う」

そうだ。あの時の自分は幼いながらも、全世界を敵に回した気分だった。祖父母に対する憎しみが恨みが、この理不尽な世界へと矛先を変えていったのだ。だが、それはもう過ぎたこと。今はアテナの聖闘士として、この世界を守ることが第一信条。今頃、憎しみのなんだの蒸し返して何になるというのだ。

ヴィオラはそんな白虎の心の中までは読めなかったようで、言葉通りに受け取っていた。そして、ぼつりぼつりと話し始めた。

「僕はこの世で最も大事な女性を、この世界が殺し、僕は失った。とても悔しかったよ。人前で大事な人が殺されるなど、全くもって予想していなかったのだからね」

「……」

「その時、僕は殺した相手だけでなく、この世界の何もかもが憎くなった。同時に、この世界を変えようと決起した」

「……随分とおめでたい脳をしているんやな」

白虎からすれば、そんなことは馬鹿げていた。もし、それだけで世界が変えられるのであれば、苦勞はしない。だが、ヴィオラは冷静に言い放った。

「本当にそうだと思うかい？　僕はこの望みを叶えてくれる人を、一人だけ知っている」
「なっ……」

白虎は目を見開き、驚いていた。まさか、この男、自分の憎しみのためにその望みを叶えようと申すのか。しかも、その望みを叶えられる人物の元についてまで。

「アテナに跪いても、ハーデスに跪いたとしても、この世界はやり直すことなどできない。そう、この世界を肅清するためには、全てを帳消しにしなければならぬ」

「な、何を——」

気が付けば、ヴィオラの目の前にはオレンジ色に輝くオブジェがあった。それは聖衣でなければ、ましてや冥衣でもない。白虎が見つめている間にも、そのオブジェは分解し、ヴィオラの身をまとう鎧となった。

「な、何やてっ……!?!」

（オブジェが、ヴィオラの身を纏った——……!?!）

白虎や他の聖闘士たちは、その姿を目に映し出しながら、驚愕を隠せずにいた。客に至っては何が起こっているのかわけが分からないのか、ただ、呆然とヴィオラの方を見つめていた。

ヴィオラはフツと笑みを浮かべて、驚きを隠せない白虎を見てから、マイクが置いてある方へと歩みを進め、それを手に取った。そして、ヴィオラは会場の客の方へと視線や身体を向けた。そして、マイクを口元まで持つていき、高らかに声を上げた。

「改めて名乗ろう！ 僕は海魔女・セイレーンのヴィオラ！ 僕らは——我らは、ポセイDONの元を集う闘士、海闘士だ！」

34 : 「海闘士」

「おいおい、海闘士って……!」

「ああ……ポセイドンについている戦士たちの総称だ」

圭熊が驚きながら声を上げる中で、冷静にその後続く翔馬。水鹿に至っては、フルート奏者から海闘士へと変貌を遂げたヴィオラの姿を、黙り込み、眉をしかめて見つめていた。

ヴィオラは引き締めた笑みを浮かべながら、ステージの上から会場を見渡し、白虎はただ、それを呆然としたまま視線の中に入れていた。海闘士については、白虎も己の師匠から何度か聞いたことがある。

海闘士——海皇・ポセイドンの元に集う戦士の総称。聖闘士たちが聖衣をまとっているように、この海闘士も鱗衣という防具をまとっている。そして、海闘士たちは、あくまでも海の闘士であり、こうして闘士として地上に現れることは滅多にないものといえよう。もし現れるとしたら、それは地上の支配を決起した時ぐらいだ。

まさか——……。

「アンタら、地上を支配するためにこんなことしてると言うんか……?」

本当に馬鹿げている。世界を変えるため、肅清するために、わざわざこんなテロリストの真似事をしているというのか。しかし、何故、少し豪華な子ども誕生日パーティーという、小さな場面でこんなことをするんだ。何か意図があるとでもいうのか。ヴィオラは白虎の問いに対して、「ふん」と鼻で答えてから、マイクを再び口元に近づけた。

「そして、差し当たっては、ソロ家のご子息である、リヴァージュ・ソロの身柄を引き渡していただきたい所存だ」

会場が一気に騒ついた。翔馬たちもこれには戸惑った。一体何が目的でこのパーティーでこんなことをやらかしたのか、なおさら皆目見当がつかない。

「アンタ……子どもを人質にするんか？」

「人質？ 違うな。リヴァージュ様を引き取ると言っているんだ」

「引き……取る!？」

全くもって阿呆らしいとしか言いようがない。と、いうよりかは、白虎ですら、この話の真相と狙いが全く見えないのである。そもそも子どもを海闘士が引き取ったところはどうしようと言うのだ。海闘士として育て上げるつもりか。

白虎はリヴァージュの方へと視線を向けた。リヴァージュは、ただ、口をあぐりと開いてヴィオラの方を見つめていた。無理もない。年端の行かない少年にとって、こう

いう事件はインパクトや衝撃が強すぎる。

白虎はどうとう色々なものを抑えきれなくなってきたのか、体の横でぐつと拳を握つた。そして、肘を引き、前に体重を置いて構える。ヴィオラは白虎の方に体を向けて、フルートを構えた。

「綺麗なドレスが汚れてしまうぞ」

「……はっ」

白虎は息で笑つてから、己の着ているドレスに手をかけた。

「汚れてしまうなら……脱ぐ、のみっ！」

そう言った瞬間、白虎はドレスを翻し、聖闘士らしい鍛え抜かれた白い身体を曝け出した。水鹿たちはいつものことだ、と思いつつも、その表情には「やってしまったな……」という呆れが現れていた。ヴィオラは白虎のまさかの脱衣に、驚きを隠せずにしたのか、呆然としてそこに立っていた。

白虎は手を腰に置き、足を肩幅まで広げて、堂々としたいで立ちで、そこに立った。それからピアノの上に置いてあつたマイクを手に取り、口元に近づけ、言う。

「ここにいる会場の者に告げる！ 私は……私たちは、アテナの元に集う闘士、聖闘士！

聖闘士と海闘士以外の者は、今すぐここから撤退し、安全な場所への避難を要求する

！」

白虎がそう言った途端、ステージ壇上へ上がっていない水鹿たち聖闘士が、会場にいる者たちへの逃げ道を作った。海闘士の雑兵たちはすでに水鹿たちによつて駆逐されており、誘導に関しては心配がないようだった。そうして水鹿たちが客たちを誘導している間にも、ヴィオラと白虎の掛け合いが始まる。

ヴィオラは残念そうに白虎を見つめた。

「聖闘士か……僕と同じ考え方をし、こちらの仲間になつてくれると思つていたのに……世界を保守する側についていたとはね」

「誰が、いつ、アンタの考え方に同調したよ。たしかにわいは『憎しみで世界が変えられるなら変えたい』とは言った。でも、わいの根本は世界を粛清することじゃなく、人を守りたいということにある。勝手にそちらの仲間扱いしないでいただきたい」

「それは非常に残念だ。もし考え方を改めてくれるならば、こちらに来て欲しいが——君はとても頑固そうだ」

ヴィオラはすつ、とフルートを構えた。

「そして、敵と分かれば、あとは戦うのみだ。君も聖闘士だ。そのことには気付いていただろう？」

「ああ……」

白虎はヴィオラに言われて、ニツと歯を見せた。

「体調は万全、体力も万全の万全。いつでもかかってこい！」

白虎は仁王立ちをしながら、胸をぐん、と逸らした。ヴィオラもそれに合わせて、フルートの吹き口に自分の口を添える。

「後悔しても知らないぞ！」

「舐めるな！ 音ならば、わいにも対抗できる！」

二人の小宇宙が会場全体を包んだ。瞬間、ヴィオラは指を動かし、音を操作し始めた。

「デッド・エンド・シンフォニー！」

「龍飛虎砲ーッ！」

その時、フルートの音色と白虎の歌が、会場内に張り上がった。

「さあ、歌を奏でよう、龍の名のもとに——！」

白虎の歌声は、力強く、ヴィオラのフルートの音色を跳ね返す勢いで、声を張り上げていた。だが、ヴィオラのフルートも、そんな白虎の歌声を押し勢いで、音色を奏でていた。

「我が歌は響き合う、虎の叫びと共に——！」

（こんな綺麗なフルートの音色なのに……どうして武器なんや……！）

白虎は歌いながら心の中で思っていた。こんな綺麗な音色を奏でながら、どうして武器として利用することができるのだろうか。本人にその自覚はなくとも、白虎は少しば

かり悲しく思えてきたのである。そして、ヴィオラの音色は、聞けば聞くほどに純粋なものだったのだ。

この純粋な音色を武器にするほど、ヴィオラの恨みや憎しみは強いというのか。それにしては、音色が純粋な綺麗なものすぎる気がしないでもないが。

(だが! だからとて、遠慮するわけにはいかない!)

「我が命を照らす、カンツウオーネよ——ツツ!」

ヴィオラに向かって、一匹の白い龍が白虎の拳から放たれる。ヴィオラは白い龍を睨みつけながら、フルートの音色の勢いを増大させた。その音色によってできた振動が、ヴィオラの身を守る盾となり、白い龍からの衝突を防ぐ。

「なっ……!」

白虎は目を見開き、その様子を見つめていた。まさか、龍飛虎咆による廬山昇龍覇が意図もたやすく防がれるなど思いもしなかったのだ。

「歌による小宇宙上昇か。なかなかやるな。だが、僕のフルートの前では全てが無効……!」

「くっ! わいの声の真髄は、まだこんなものではないっ!」

そう言った白虎の表情は、汗を酷く流し、かつ、非常に険しく厳しいものになっていた。

（あのフルートの音色……こつちの五感を殺しにかかつてる。自分の歌でどうにか防げていたとはいえ、こちらから向こうにダメージを与えることができなければ、時間の問題……！）

相手の放っているフルートの音色、デッド・エンド・シンフォニーは、相手の小宇宙や五感を奪うぐらいのダメージをくらわせるものだ。白虎はどうにかして、相手の音色に対して自分の声を対抗させていたものの、向こうの音色によるダメージはしつかり蓄積されている。五感を完全に失う前に、相手にどうにかしてダメージを与えなければ、白虎の思った通り、やられるのも時間の問題。

（それに……）

白虎はちらつと後ろの方を見つめた。そこには、突然の出来事に、逃げるタイミングを見失ったらしいリヴァージュが、ただ、ただ、呆然と立ち、こちらを見つめていた。

リヴァージュがこちらの後ろにいる以上、迂闊な行動には出られない。体調が完全万全とはいえども、ここで遊舞乱虎を放つてしまえば、それこそリヴァージュまで巻き添えになり、ただ事では済まなくなる。小さな子どもなら、なおさらだ。

白虎としては、このままリヴァージュごとここから連れ去って、他の聖闘士たちの元まで預けに置きたいものだが、ヴィオラがいる以上、それも難しいだろう。

（何より、海闘士には黄金聖闘士並みか、それ以上の者もいると言われている。多分、こ

いつもそのうちの一人。わいのような青銅聖闘士ごときなど、相手じゃなさそうな顔しとる）

それが非常に白虎の鼻に来る。確かに、自分はまだまだまだひよつ子の青銅聖闘士で、相手に敵わぬことは事実だろう。前回の聖闘士冥闘士の乱でフィードを倒せたのは、もはや奇跡に近いものといえよう。その前に、セブンセンスに目覚めていたのが大きかったのかもしれないが。

だが、あの時はあの時、今は今。こんなところで奇跡など起こそうものならば、何もかも帳消しになる。

（とりあえず、御子息さんを先にここから避難させておきたいところや。このままでは、御子息さんまで巻き込まれてしまう……！）

白虎は徐々に奪われていく体の感覚の中で、リヴァージュのことを心配していた。まさか、思い出の誕生日パーティーでこんなことになるとは思ひもしなかっただろう。

（御子息さんの祖父母さん、台無しにして、ごめんなさい）

前情報では、リヴァージュは自分のように両親を三歳の頃に亡くし、それから今の祖父母の家庭で育てられたという。リヴァージュを見る限り、祖父母はとてもいい人そうで、自分のところのように常軌を逸する祖父母ではなさそうなのが幸いといえよう。そして、この誕生日お祝いパーティーは、その祖父母が企画したらしい。自分の孫をどこ

まで大切にしているのか、痛いほど白虎の心の中へと入り込んでくる。

白虎は、もし、できれば、今のソロ家を守ってやりたい。海闘士にリヴァージュを渡すことなど、白虎が絶対に許さない。

(――よし)

白虎は、ぐつと拳を握りしめて、決意を固めた。こうなったら、やるしかあるまい。

まず、白虎は、リヴァージュの元まで歩み寄った。それから、リヴァージュの身を、ぎゅつ、と抱きしめ、そのまま持ち上げた。リヴァージュは少し落ち着いてきたところだったらしく、「?」と白虎の顔を不思議そうに見つめていた。白虎は遠慮がちに微笑み、リヴァージュの頭をぼんぼん、と優しく撫でた。

「何をするつもりだ?」

ヴィオラは、白虎のしていることに驚きを隠せないのか、吹いていたフルートの演奏を止めて、白虎のことをじつと見据えた。

白虎はぎゅつ、とリヴァージュを抱き締めた。それから、ヴィオラの方へとその体へ向けた。そして、言い放つ。

「わいはまだガキんちよだから、こういう手荒な真似でしか、幼子を守ることしかできない。でも、やるしかない」

「なっ、まさか――」

ヴィオラが気付き、驚いている間にも、白虎はヴィオラの方に背を向けて、自分から一番近いところにある窓へと、走り向かった。

「はあっ！」

そして、白虎の捨て身と言えようタツクルは、見事に窓へと命中し、ガラスもその一撃で、「パリーン！」と大きな音を立てながら割れた。そのまま、リヴァージュを抱き締めた白虎の体は外へと放り出された。

一人会場に取り残されたヴィオラは、白虎が身を投げ出した窓へと向かい、驚きを隠せない声を出した。

「ば、バカなことを！……ここは3階だぞ！ 死ぬ気か！」

白虎もそのことは分かっているからこそ、ほんの少しだけ躊躇っていたのだろう。しかし、リヴァージュを守るのならば、自分の命など安いのか——ヴィオラはそう思えばそう思うほど、白虎のことを憎らしく思えてくる。

一方の白虎は、リヴァージュのことを抱きしめながら、自分に近づいて来る地面を見つめていた。

（全裸で発見される遺体、か。ま、それも趣があつていいかもしれへんな……）

もし、水鹿たちにそのことが知れたら、呆れと自分が死んだことによる悲しみ、どちらが先だろうか。まあ、水鹿たちのことだ。きつと、前者の方が先にくるかもしれない。

(でも)

白虎は自分の目の前を見つめた。その視線の先にあったのは、翡翠色に輝きを放つ、龍の、オブジェ。

「アンタは、まだ、そのことを許してくれへんようやな！ 龍星座の聖衣！」

白虎が八重歯を見せて、笑みを浮かべながらそう言った途端、龍のオブジェは激しい輝きを放ちながら分解され、白虎をまとう鎧となる。その間、リヴァージュはその龍の変化を、目を見開いて見ていた。白虎が聖衣をまとう姿は、まるで龍そのものだ。

気が付けば、白虎とリヴァージュは無事に地面へとたどり着いていた。白虎はリヴァージュを地面に降ろすと、相手の身長に合わせて膝と腰を曲げ、その身だしなみを整えてやった。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「は、はい……」

「よかった」

白虎はリヴァージュの無事が確認できると、ほつ、と胸を撫で下ろした。そして、立ち上がり、再びリヴァージュのことを抱きかかえた。

「安全なところに、移動してもええかな？」

「はい、お願いします」

リヴァージュは白虎の問いに、こくん、と快く頷いた。白虎の方もその頷きに、力強い笑みで答えた。それから、白虎はリヴァージュを抱えたまま、その「安全なところ」に移動しようと走り出した。

しかし、また、どこからとなく海闘士の雑兵が現れたのである。それは茂みの中から、木の上から、はたまた、建物の中から。

白虎は「ちっ！」と舌打ちをしてから、足を地面に摩擦させ、走るのを止めた。

「さつき会場にいたので全部じゃないんかい！ くっそ！」

(面倒くさいな、畜生！)

白虎のリヴァージュを抱きしめる力が一層強まった。リヴァージュをこうして抱えている以上、無駄に相手を攻撃することもできない。

リヴァージュも現れた雑兵たちに怯えているのか、その肩が震えていた。白虎は肩を震わせているリヴァージュの背中をぼんぼん、と撫でて、力強く抱き締めた。

「大丈夫、大丈夫やで。お兄ちゃんがついてるからな」

気休めでしかないが、こうしてなだめることしかできない。しかし、リヴァージュは白虎に信頼を寄せたらしく、肩の震えが徐々に収まっていった。だが、白虎の方はそれを感じる余裕すらない。ただ、リヴァージュを抱きかかえたまま、海闘士がこちらに攻撃するのを後ずさりしながら待つしかないのだから。

かと言つて、何も考えない白虎ではない。白虎はじり、と後ずさりしながら、海闘士と海闘士の間の隙間を見て、逃げられるかどうか考え始めた。

(この子を抱き締めたまま、こいつら吹き飛ばすこと、できるっちゃあできるよな)

自分の師匠が言っていた。「前を向き、己を龍と思ひながら、真つ直ぐに走りなさい」と。だが、白虎自身、その技を放つたことがなければ、試みたこともない。あるのは、自分の師匠のアドバイスのみ。それだけだ。

(よし！ 老師がくれたアドバイスで、この道を絶対に開いてみせる！)

白虎は小宇宙をじわじわと燃やし始め、すつ、と姿勢を低くした。海闘士たちは、白虎のその姿を身を低くして、小宇宙で防御しようとしている、と読んだ。

「おお、とうとう怖くなったんだな」

「聖闘士なんて所詮こんなもんだよな」

「そうそう、はははっ……」

白虎のみならず、聖闘士全体をバカにした会話と下卑た笑みが白虎の耳に入る。だが、白虎はそれに構わず、小宇宙を燃やし続けた。ただ、師匠の言葉を信じて。

(——いける！)

小宇宙が必要に高まったときに、それは発動する。

白虎は地面を後ろに蹴り上げるように、走り出した。貯めていた小宇宙をその身にま

といながら、海闘士たちの方へとその足を進めた。いずれ、その小宇宙は龍となり、海闘士たちへと牙を向く。

「廬山、龍、飛、翔オオオ——ッ!!」

白虎はリヴァージュを抱きかかえながら、白い龍をまとい、海闘士たちにぶつかっていった。白虎にぶつかつた海闘士たちは、勢いよく宙へと浮かび、地面や近くにあつた壁や木に激突。海闘士たちはそのまま目覚めることはなかつた。

足を地面にしつかりつけば、白虎は、はあはあ、と息を整えながら、辺りの様子を見渡した。白虎に群がついていた海闘士たちは、この場からいなくなつていた。

「よっし、移動続行せんとな……」

白虎は態勢を整えてから、再び走り始めた。先ほどから五感を失いかけたり、歌を歌つたり、あわよくばこうして走つたり——せつかくのパーティーに、休む暇すら与えてくれないというのか、神は。

白虎が辿り着いた先は、パーティー会場の建物である屋敷の庭らしく、パーティー会場にいた客や人々で溢れかえつていた。辺りは手入れされているのが分かるぐらい、草木が綺麗に映えており、誰に見せても恥ずかしくない状態だった。だが、そんな庭を眺める様子もなく、白虎は辺りをキョロキョロと辺りを見渡し、誰かを探していた。その

探している人物は、翔馬や圭熊でもなければ、水鹿でもない。

——リヴァージュの祖父母だ。

(この主人たちはどこにいらつしやりますかなー)

とりあえず、リヴァージュだけでも二人の元へと届けたい。その一心で、ここまできて、探していた。白虎はひたすら辺りを歩き回る。

そうしてしばらく辺りを歩き回っていると、白虎の目に飛び込んできたものがあつた。それは、上品そうで優しげな老夫婦が、困っているような表情を浮かべて、うろろと辺りをうろついていた。まさか、と思つた矢先に、老夫婦がこちらを向いた。リヴァージュは嬉しそうな笑みを浮かべながら、その老夫婦を見ていた。

「おじいさま、おばあさまー！」

「リヴァージュー！」

リヴァージュに呼ばれた老夫婦は、こちらの方へ駆け寄り、また、白虎もリヴァージュを抱えながら老夫婦の方まで駆け寄つた。老夫婦の元まで辿り着けば、白虎はリヴァージュの足を地面へと置き、老夫婦に向かつて、ニコツと笑みを浮かべて、ペこりと会釈。それから、リヴァージュは小さな足で、とて、と老夫婦の方へと駆け寄る。老夫婦はこちらへ駆け寄つてきたリヴァージュのことをぎゅつと抱きしめ、震えた声で言つた。

「リヴァージュ……！ 無事でよかつた……！」

「おじいさま……！ おばあさま……！」

——微笑ましい、祖父母と孫。

自分の祖父母が自分の祖父母ゆえか、白虎にはその様子がとても羨ましく思えた。だが、妬ましくもなんとも思わなかった。まず、リヴァージュが祖父母の元に辿り着いたことが、一番喜ばしいのだから。

(本当によかった。わいも早く水鹿たちの元へと戻らんな)

白虎はリヴァージュたちに背を向けて、ここから去ろうとした。ここに客たちが集まっている、ということは水鹿たちもこの辺にいるはずだ、と思いながら。しかし、その足は老夫婦たちによって止まった。

「ちよつとお待ちになって」

その声は明らかに白虎に向けられたものと、リヴァージュの祖母のものだった。白虎は後ろを振り返り、リヴァージュたちの方へ視線を向けた。リヴァージュの祖父母は、穏やかな笑みを浮かべながら、ぺこつ、と会釈をした。

「聖闘士さん、ありがとうございます。大切な孫息子を傷一つなしに連れてくるなんて。感謝の気持ちでいっぱい입니다」

「い、いやあ……そんな大げさな……」

「いえいえ、大げさではありません。私たちは、リヴァージュの父親である息子を失い、

リヴァージュの存在だけが、支えだったのです。この子まで失ったらどうしようかと……」

「……」

「でも、よかった。本当にありがとうございました」

老夫婦はぺこり、とお辞儀した。白虎も機械的にぺこり、とお辞儀し返した。それから、白虎は仲良しな老夫婦とリヴァージュの姿を見つめながら、ぼーっ、と立ち尽くしていた。

（わいのところは……祖父母自ら自分の子どもを殺したつけ……）

今回は、自分の家に関する事で思い出すことがいっぱいだった。

白虎の実家も、俗に言う「貴族」みたいなもので、特殊な家系ではあったものの、自由自体は何もなかった。しかし、白虎の祖父母はその特殊な家系を貫こうとし、常軌を逸する行動ばかりしていた。両親が、赤児だった自分がそれに巻き込まれないように、駆け落ちのような形で逃げた時だってそうだった。見つかればすぐに自ら銃で白虎の親を殺し、探していたのはそのためだったのか、と今だからこそ思う。

その現場を見ていたからこそなのかは分からないが、白虎は誰よりも守れるものは守り通したいと心から強く思うのである。その守りたいもののためならば、自分は世界を敵にも、あわよくば、神さえ敵に回すこともできるだろう。

(……正義のために、悪を、貫く)

その一言が、白虎の信念を支えているといつても過言ではない。それがどんなに正しいことだとしても、やっていることは悪と同等かもしれない。だからこそ、悪に徹しなければならぬ。人を守るということは、どんな敵も倒さなければならぬことにも繋がっているのだから。

純粹な正義など、この世にはない。

(母ちゃんたちも、わいを守るために悪を貫いたんよな)

白虎の親がやっていることは、親として当然のことかもしれない。けれども、その行動は傍目から見れば、悪と受け取られるのも当然だろう。赤児連れて駆け落ち。最悪な烙印を押されたも同然だ。

(ま、その子どものわいは普通に幸せに過ごしとったけどね)

実際はそんなものだ。何も知らなかった子どもは普通に幸せに成長するに決まっている。

白虎がそう結論付いた時、白虎の目の中に飛び込んできたものがあつた。耳の部分の羽が特徴的な白い聖衣と、全体的にブラウン色に輝く聖衣、そして、他の聖闘士たちより少しばかり立派な薄い紫色の聖衣。水鹿たちだ。

「水鹿ーっ！ 圭くん、翔くーん！」

白虎はその姿を見れば、手を振りながら、すぐにそちらに駆け寄った。手を振られた三人は、微笑みながら手を振り返した。三人の元まで来れば、白虎は途端に申し訳なさそうな表情になり、ぱん、と顔の目の前で手を合わせた。

「ごめんな、三人に任せつきりで！」

「案ずるな。人を守るのも聖闘士の役目だ。お前が謝ることじゃない」

申し訳なさそうに白虎を前にして、翔馬はふつ、と微笑みながらそう言い放った。白虎はそれに対して、妙に遠慮がちに、「ならええけど……」と呟いた。他に任せてその聖闘士の役目を果たすことができなかつたのは白虎の心の中の何かに反するのだろうか。何にせよ、こうして怪我人を出さなかつたのは誇つてもいいかもしれない。

「しかし、こうして海闘士が地上に現れたのは……」

「ああ、多分、ポセイドンが復活したのだろう」

水鹿が顎に手を当てて呟くと、翔馬がそれに応えるように声を出した。

「ポセイドンは大昔にその体を失くし、魂を封印され、完全復活はハーデスと同じく相当後とされている。しかし、ハーデスとは違い、封印場所が明らかにされているポセイドンはしばしばその封印を解かれることがある。現に二百年前の聖戦が起きる前に、ポセイドンの封印が解かれたこともあるんだ」

「……」

「誰かが封印を解いた、ということだ」

「……」

「だが、問題は今回の依り代はどうなるのか……代々どこかの貴族の体を借りているらしいが……」

と、翔馬は目を細めた。復活したポセイドンを打ちのめすには、その依り代を打ちのめすことが第一で、もし、それができればあとはポセイドンの魂を封印するのみとなっている。だから、ポセイドンの依り代さえ分かれば、それでいいのだが。

海の底にある海底神殿では、パーティーで起こった出来事の全てが、暗い部屋の中にある水晶の中が映し出していた。そして、その水晶に映し出しているのも、当然海闘士の一人だった。

海闘士は、腰掛けていた椅子をギイ、と鳴らしながら、目を細めた。水晶に映し出されているのは、龍星座の聖衣をまとった少年、白虎だった。

（この聖闘士……早く処理しなければ、私たちの目的を全てもぎ取って行くかもしれぬ）
海闘士は、白虎のことを注視していた。

それから、海闘士は部屋の外へと出て行き、神殿の様子を眺めた。神殿には空の代わりに海が漂っており、地上からの光もその海を介してここまで届いている。今は夜のた

め、わずかに月の光が差し込んでいる状態だった。

(今日は邪魔が入ってしまったようだが、ポセイドンの依り代となる者、いずれこちらに導かれてくるはず。ポセイドンよ、我ら海闘士のために、そのお姿を現しになりたまえ……)

ポセイドン率いる海闘士とアテナ率いる聖闘士たちの戦いは、目前にあった。

35 : 「決意を秘めて」

その日は大雨が降っていた。こんな大雨では鍛錬もままならない、ということから、寮や村の建物の中で己の教養を深めたり、室内トレーニングをしている者も多くいた。無論、白虎たち一同もその中に含まれていた。

白虎たちは寮の中にある圭熊の部屋で、普段は任務や鍛錬でできぬ勉強や、その息抜きと言わんばかりのトランプゲームなどをしながら、この大雨の中を過ごしていた。で、今は勉強を再開したところであり、圭熊の部屋の中はシャーペンや鉛筆が紙に摩擦している音しか聞こえてこなかった。

「お前らさ、案外頭いいんだな？」

と、その沈黙を最初に打ち破ったのは圭熊だった。圭熊はちらりと白虎や翔馬の問題集のページ数と、自分の問題集のページ数を見比べて、自分の方が断然に進みが遅いことから、妙な差を感じていた。

白虎と翔馬はお互いを見合いながら、ふう、とため息をつき、二人同時にちよいちよい、と親指で圭熊の隣にいる人物を指差した。圭熊は二人に差されて、ちらりと自分の右隣の方を見ると、そこには外国語で書かれた難しい数式の問題をさらさらと難なく読

いている水鹿の姿があつた。

(えっ……まじで?)

圭熊は引きつった笑みを浮かべながら、自分の課題に取り掛かつた。自分たち青銅聖闘士と、水鹿だけでも、やることにどれだけ差があるというのか。

「はーあ。水鹿は顔もいいし、頭もいいし、強いし、身長も高いし、羨ましい限りやねー」
水鹿の幼なじみである白虎がため息をついてからそう言つた。この中でも水鹿とは一番付き合ひが長い白虎だが、それゆえにその差をひしひしと身近で感じ取つてきたの
だろう。白虎の言うことにはほぼ同意である。しかし、白虎本人も顔は悪くはないゆえ
か、圭熊や翔馬からしたら、その部分だけ嫌味にしか聞こえなかつた。

「ま、そんなことよりもさ。ギリシヤは冬に雨が多いいえ、降りすぎだと思ふんだけ
ど。今回の大雨」

と、白虎は部屋の窓から外の様子を眺めた。外はこれまでにない大雨が降っており、
窓が割れそうな勢いで、ガタガタと音を鳴らしながら、雨に打ち付けられていた。

今回の大雨は少し異常性を感じ取れた。ギリシヤは冬に雨が降りやすい気候とはい
え、ここまでの大雨になると少し警戒してしまうものがある。幸い、今回の大雨は一日
で終わつてくれるらしいが、それでも警戒を解くことはなかつた。と、いうのも、白虎
の心の中で先日の任務の時のことが引つかかつていたせいである。

(この世界を肅清するためには、全てを帳消しにしなければならない、か)

白虎はこのセリフとこの大雨が妙に連動しているような気がしてきて、仕方ないのだ。人間や平和な大地というのは、こういう自然災害によつて、たやすく排除される。もし、白虎の見解が合つてるとすれば、この大雨、海鬪士、もとい海皇・ポセイドンによるものではないか。

(いや、考えすぎかな)

あまり疑り深くなつてもよくないのかもしれない。白虎はそつ、と窓から視線を外した——ところで、圭熊がテレビのリモコンを取つた。翔馬は呆れたような表情で、圭熊を見た。

「おいおい、何だ？ もう勉強はしたくないってか？」

「いーだろー。そろそろ昼だし、飯ついでに見ようぜ」

「ああ、そうか」

「そういうえげそうやね」

そういうえげ、と言わんばかりに白虎と翔馬は思い出した。時計の針はすでに12時を回り、そろそろ空腹で腹が一番活発になる頃だ。水鹿の方も問題を解くのをやめて、腕を伸ばして、テレビの方を見つめていた。

「ニュースでいいよなー」

圭熊はびつ、とテレビの電子音を鳴らして電源を入れ、ニュースをやっているチャンネルに合わせた。チャンネルを合わせると、白虎たちは予め持つてきておいたパンやカップ麺を取り出して、昼食の準備をし始めた。白虎と圭熊はパンの袋を乱暴に破いて、中身を取り出し、口に入れて頬張り、翔馬はカップ麺の蓋を開き、かやくの袋を取り出し、水鹿に至つては弁当を持参し、蓋を開けていた。

翔馬のカップ麺が完成し、それぞれらしい昼食が始まるといったところで、テレビから衝撃的なことが言い放たれた。

『この大雨はヨーロッパだけでなく、アジアやアメリカの方でも起こっており、異例の事態となっております。日本の気象庁は——……』

その言葉に、白虎たちのご飯を食べる手が止まった。

大雨が全世界中に同時に降るといふ異例の事態は、まさしく異常気象であり、また、四人は、ポセイドンが以前に復活した時にもこうした異常気象が起きていた、と聞いたことを同時に思い出していた。先日の任務でも、ポセイドン率いる海鬪士が襲撃してきたのも、この予兆だったのだろうか。

「……いや、まさかなあ」

「考えすぎだろうなあ……」

「ああ……」

「ないない」

しかし、四人はあえて否定した。もしかしたらただの偶然かもしれないし、ポセイドンによるものと判断するには材料が少なすぎる。それに、これがポセイドンによるものであれば、もっと大きな水害が起こってもおかしくはない。四人は再び昼食をお腹の方に入れ始めた。

が、次の瞬間、四人の目に入ってきたものは衝撃的なものだった。

『また、世界中の川にて激しい増水が——……』

そのナレーションと共に流れてきた映像は、どこかの川が増水し、今にも近くにある村という村を襲いそうなものだった。

『そして、沿岸地域の皆様は巨大な波に警戒を——……』

そして、その次に流れてきた映像は、波が大きく荒れ揺れ、海岸を支配している映像。まだ、近くの町や村には到達していない模様だが、今後どうなるか分からなかった。

「まさか……」

四人はここでようやく目の前の映像と現実に向き合った。

こんな世界的規模な大雨に川の氾濫、そして高波。普通ではあり得ないもので、大抵ならば異常気象で片付けられてしまうもの。しかし、四人はその一言では片付けられない何かを、この映像から感じ取っていた。そして、四人は互いに顔を見合わせて、声を

合わせた。

「こんなところで勉強して飯食つてる場合じゃねえ！」

四人は大雨の中を急いで走り、すぐに教皇の間に向かった。ずぶ濡れになるうが、なんだろうが、四人には今にでも教皇の間に向かわなければならぬ理由があった。

そして、教皇の間に辿り着けば、教皇補佐である祭壇座の海鳥が、人数分のタオルを持って出迎えてくれた。四人はありがたくそれを受け取り、雨で濡れた髪の毛や身体を拭いた。白虎に至っては恥じらいもなく、上半身だけ脱いで、その場で乾布摩擦していた。

「はあー、生き返るわあー……」

白虎の何がどう生き返るのはスルーし、水鹿は海鳥に聞いた。

「海鳥。教皇は？ よもやこんな大雨の中、外に出ているとは思えないのだが」

「ああ、いますよ。教皇ー、教皇様ー」

海鳥は教皇を呼びに、ばたばたと教皇の間の奥の方へといってしまった。水鹿はふう、と息をついて、その後ろ姿を見送り、渡されたタオルでわしゃわしゃと己の髪の毛を乱暴に拭いた。

白虎はどこからか桶を取り出し、それを受け皿にして、濡れた服をぎゅうつ、と絞つ

ていた。その絞った服からは大量の水が出てきた。

「うわあ、一回絞っただけでもこれなんやな。ここの降水量がどんだけのものか、語ってるなあ」

白虎はその量に驚きながらも、服を絞り続けた。二回目、三回目、と絞る回数を重ねていくうちに、服から出てくる水の量は減っていく。完全に水が尽きただろうというところで、服を広げて、ぴんと伸ばし、バサバサと風を起こした。着る分にはまだ冷たく、湿っているため、乾燥させたいようだ。

そうこうしている間にも、海鳥が教皇を連れてきたようで、教皇が苦笑しながらそんな白虎を見ていた。

「白虎」

「ふ、ふにやあつ!? ろ、ろろ、老師!」

白虎は非常に驚いた様子で顔を上げて、教皇の方を見た。教皇はくすくすと笑みを浮かべながら、白虎に向かって、すつ、と折り畳まれた服を差し出した。

「そんなことだろうと思つて代わりの服は用意してあるよ。これを着てなさい」

「は、はい……」

白虎はまさか教皇がこんなに早く来るとは思つていなかったらしく、顔を真っ赤にしながら、教皇から差し出された服を受け取った。それから、教皇は、普段から自分が仕

事をしている事務室への扉を指差して、白虎にそちらで着替えるように誘導。白虎は教皇にお辞儀をして、すぐに事務室の方へ向かった。

取り残された水鹿たちは「はあ」と息をついてから苦笑して、白虎が出てくるのを待った。教皇は申し訳なさそうな笑みを浮かべつつ、水鹿たちにお茶が入っている湯呑みを差し出した。

「すまないね。白虎は弟子だからああいう準備はできるのだが……温かいお茶で我慢してくれ」

「い、いえ、そんな……ありがとうございます」

水鹿は遠慮がちなながらも、ありがたく受け取り、ふー、と息を吹いてお茶を冷ました。教皇は翔馬と圭熊にも湯呑みを差し出し、受け取らせた。水鹿はそれを見ながら、お茶を口に含んだ。お茶の苦味と甘さがぐんつ、と口の中で広まった。

それからちよつとすると、着替え終えたらしい白虎が事務室から出てきて、水鹿たちの元へと歩み寄った。

「はー……超清々しいで……」

「お前はいつもいろんな意味で清々しいだろ」

「それどういう意味!?!」

水鹿の呆れたような声と、白虎の突っ込む力を入れた声でやりとりが編成された。圭

熊と翔馬は相変わらざる二人の様子に、思わず笑みを漏らした。

教皇はこほん、とわざとらしく咳をし、四人の注意をこちらに向けた。それから「それはそうと」と、話題転換とふとした疑問を四人に向かって投げかけた。

「お前たち。何故ここにやってきたんだ？」

「ああ……はい。実は、この大雨のことで……」

教皇の間に入っても十分に聞こえてくる雨と雷の怒号。教皇もこの大雨について異常だと感じ取っていたのか、すつ、と、いつになく真剣な表情になって、白虎たちの話を聞き始めた。白虎たちの声音もそれに合わせて真剣なものになった。

「先ほど、この大雨は世界的規模で降っている、とテレビでやっていました」

「それで、先日の任務と繋がることであって……」

「先日の任務、というと、ソロ家のご子息の護衛か」

「はい」

こくん、と白虎は頷いた。それから、教皇は顎に手をあてて、若干思索しているように見受けられた。

「続けてくれないか？」

「ああ、はい。先日の任務で、現れたのですよ」

「何がだ？」

「海闘士が」

「海闘士、だと……!?」

教皇は目を見開き、驚愕の表情を漏らした。白虎はさらに話を続ける。

「テロリストのような真似事をして、パーティー会場の雰囲気を変えていったんです。しかも、ご子息様を引き取るなどと言い出して」

「……そうか」

教皇は目を閉じて、教皇のみが座ることができる玉座に腰をかけた。その姿は何かを落ち着かせているようにも伺えた。

白虎はそんな教皇の様子から何かを察したのか、聞いた。

「やっぱり……先日の任務って、海闘士絡みで？」

「ああ、そうだな……先に話すべきだったかもしれないが」

教皇の目が開き、その視線が四人へと向けられた。四人は張らない程度に、しかし、心を入れ替えるぐらいに背筋をピンっと立てた。教皇は先日の任務の目的を話し始めた。

「実は、ポセイドンの依り代は代々ソロ家の者と決まっていますね。その依り代が今回のご子息なんだ。私の方から主人の方へ護衛できないかと申し出たんだ」

「そうだったんですか……」

ポセイドンの依り代は代々ソロ家の者——だとしたら、あの小さなパーティーで海闘

士が出てきたのにも納得がいく。そうだ、そもそも関係なければあんな真似事をするはずがない。そして、ポセイドンの依り代は、ご子息であるリヴァージュ・ソロ。幼き依り代であるものの、ポセイドンが依り代にする条件としては十分に最高なのだろう。

(あんな小さな子が……)

そして、海闘士側は依り代であるリヴァージュをこちらに引き渡していただきたいと求めたのだ。全ての糸が繋がった。

教皇は続けた。

「というのも、以前からポセイドンの封印が解かれたとの噂がまことしやかに囁かれていた。その真実を探るためにもお前たちを任務に向かわせたのだ」

「で、今回のパーティーの件で、それが露呈したと?」

「そういうことになるな」

教皇はこくん、と首を縦に振って頷き、白虎のその言葉を肯定した。

「ポセイドンが復活する前に、この件を黄金聖闘士に委ねようと思っっている。お前たち青銅聖闘士、白銀聖闘士に無理をさせるわけにもいかないからね」

「で、でも……」

「前回の冥闘士の時は不発だったが、今回はそうじゃない。こうなれば、お前たちに任せ

るわけにもいかないだろう」

「……はう」

白虎の目が途端に伏せていった。確かに前回はハーデス復活の件がガセ情報で、黒幕が冥闘士だったいうところから、自分たちでもどうにかできた。だが、今回のポセイドン復活はほぼ確定情報。確かに自分たちがどうこうできるはずがない。だから、今回の教皇の判断は正しかった。しかし、白虎の中で、今回の件はどうしても譲れぬものがあつた。

白虎はぐつ、と一つの拳を強く握りしめ、それから床の方に正座でしゃがみ込んだ。

「白虎？」

こんなところで正座し始めた白虎を、水鹿は不思議そうに視線を向けた。教皇もそれは同じだった。白虎はすつ、と地面に手をつき、腹と太ももを近づけ、顔を地面に近付けた——土下座だ。

「白虎！」

水鹿は驚きを隠せぬ様子で白虎の方へとしゃがみ込んだ。だが、白虎は水鹿がそこにいようがなんだろうが、身じろぎすらしなかつた。日本人である圭熊と翔馬は、その白虎の土下座がどれだけ決意を込めたものか、誰よりも知っていた。無論、教皇もその白虎の土下座の意味を察して、ただ、心の中で噛み締めていた。

白虎は頭を下げながらも、教皇の間一体に響き渡る通った声で、教皇に向けた。

「教皇よ！ この件、どうか、この私に任せていただけませんか！」

「おい、白虎！」

「確かに教皇の判断は正しい！ ですが、私には譲れぬものがあるのです！」

教皇に対する態度と言葉遣い、何より、アテナの前や舞台で放つ一人称が、今の白虎のすべてを物語っていた。

「リヴァージュ・ソロ——彼は、幼き頃に両親を亡くし、祖父母であるソロ家の主人に預けられ、とても大切に育てられております。主人方にとって、ご子息というのはたった一人の大事な孫息子なのです」

「白虎……」

「私は主人方のその心を守りたいのです。黄金聖闘士は、ご子息が依り代だと分かれば、無情の決断を下すでしょう。そうなれば主人方が……いや、今のソロ家が壊れてしまおう」

「……黄金聖闘士が信頼できないと？」

「いえ、そういう意味ではありません。ただ、ポセイドン完全復活を断つためにはご子息の肉体を滅ぼす。言わば、ご子息を殺すことが最大条件となる。私はそれを避けたいのです」

白虎の声が徐々に小さくなり、感情のこもったものになる。教皇は、ただ、黙ったまま、自分に向かって土下座している白虎を見つめていた。

「引き受けて、どうするつもりだ」

「ご子息を殺すことないよう、ポセイドンの魂を封印します」

「できるのか？」

教皇のその問いに、白虎の喉がぐつ、と詰まった。確かに、その依り代だけを助けるなどといった器用な芸当は自分の手でできるはずがない。白虎も今回のソロ家の出来事がなければ、遠慮なくリヴァージュを殺しに入っているはずだ。しかし、白虎は今のソロ家を見てきた。

だから、言う。

「できます。いや、やってみせます！ 絶対の絶対に成功させて、ご子息を、ソロ家を守ります！」

白虎は顔を上げて、教皇の間全体にその決意表明を響き渡らせた。

「……そうか」

教皇は白虎のその答えを聞けば、ふう、と息をついた。そして、玉座を立ち、白虎の元まで歩み寄った。

「教皇……」

白虎は不安そうな表情で教皇を見つめていた。もしかしたら、自分の意見がすべて否定されてしまうのではないかと。しかし、教皇はその白虎の不安をフワツと優しく払うかのように、白虎の目の前に自分の左手を差し出した。

「その決意に、間違いはないな？」

「——はいっ！」

白虎は口元を引き締め微笑み、差し出された右手に、自分の右手を重ね、ガシツとそれを掴んだ。教皇は掴まれた手を持ち上げ、白虎はそれに合わせて立ち上がった。

一方で、すぐ近くにいた水鹿は不安そうな表情で白虎を見つめていた。

「白虎……いいの？　いくらお前の決意が固いと言えど、海闘士はお前一人がどうにでもできる相手では……」

「いくらなんでも、わいだってそこまでの無茶はしようと思っておらんよ」

白虎は教皇から離れれば、クスツと笑みを浮かべながら、水鹿に返した。それから、水鹿、翔馬、圭熊の順番に視線を合わせてから、ニツと笑みを浮かべて、三人に言い放った。

「アンタらも、こつち来てよ。海闘士、ぶつ潰したいやろ？」

白虎はぱしん、と左手に右拳を当てた。圭熊と翔馬はお互い顔を見合わせて、こくん、と首を縦に振って、「おう！」と肯定の意を示した。水鹿の方にはと言えば、ため息をつき

ながらその様子を見ていた。だが、白虎の問いには概ね肯定的な様子が、その笑みから伺えた。

「ただし」と、教皇はまだ何か言い足りない様子で、白虎たちに言い放った。白虎たちは教皇の方に視線を向けた。

「ポセイドン封印のためには、アテナの力が必要だ。お前たちだけでは封印はできません」

「……はい」

「そして、これはあくまでも世界にも関わる重大な任務であることも忘れるな。ご子息を守ることもそうだが、もしもの時の優先順位は——分かっているな？」

「——はい、分かっております」

白虎は目を伏せてから、体の横でぎゅつと強く手を丸く握った。聖闘士としての優先順位は、人つ子一人ではなく世界。世界が危険になった時には、リヴァージュに情けを掛けるような真似をしてはならない。また、非情になれるほどの心を持っていなければならぬ。そして、白虎の目標は、そうなる前にもこのことについてケリを付けること。アテナの力を借りても、リヴァージュを助けるしかない。

教皇はふつ、と柔らかく笑みを浮かべ、白虎の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「大丈夫だ。アテナのことを信じていれば、奇跡は必ず起きる。ご子息のことも助けられるはずだ」

「老師……」

教皇は力強い笑みを浮かべて、こくん、と首を縦に振り、ぼん、と白虎の肩に自分の手を置いた。白虎はそれに返すかのように、こくん、と頷いて、口元を緩めた。

「アテナのことは元より、自分の力も信じています」

「……うむ」

白虎のその言葉を聞いた教皇は、こくん、と頷き、「その意気だ」と白虎に言った。それを聞いた白虎は、頼もしい笑みから一転、年相応の柔らかい笑みとなり、嬉しそうに微笑んだ。教皇は白虎のその笑みを見ながら、言った。

「差し当たっては、今度の任務、アテナと同行させてもらっても構わないか？」

「今度の任務、って……？」

白虎はきよとんと、と教皇を見つめ、その今度の任務のことを口にした。教皇は再び玉座に腰をかけ、白虎たち四人に命令下した。

「お前たちに教皇として告げる。3日後の朝、アテナを海底神殿まで連れて行くのだ」

一方同時刻同空間ソロ家の屋敷。

屋敷の部屋の一角で少年・リヴァージュは窓から外の様子を眺めていた。外は雲が曇天とし、雷がゴロゴロと鳴っていた。今にでもこちらにも大雨がくる予感がしてならな

い。そんな中で、ふと、窓を開き、キヨロキヨロと辺りを見渡した。すると、屋敷の柵の外に海魔女の鱗衣を着たヴィオラが、フルートを片手に微笑み佇んでいた。

「ヴィオラー！」

リヴァージュはその姿を見た瞬間、ぱつと表情を明るくして、ヴィオラへ手を振った。ヴィオラは手を振り返した。

ヴィオラは元々、少しながらもリヴァージュの召使いを担っていたのだが、先日のパーティーの一件から、その役目も外され、また、出演依頼を頼まれていたテレビからもキャンセルが発生した。それほどソロ家で行ったテロリストの真似事が効いたのだ。もちろんのことながら、ヴィオラにとつては海闘士のことと時間を割くことができるため、丁度良いのだが。しかしながら、リヴァージュはそんなこと形振り構わずともヴィオラのことを慕っているようで、ヴィオラの元まで行くために外に出ようと部屋を飛び出した。

ヴィオラはリヴァージュが見えなくなると、すつ、と手を降ろして、目を伏せた。

(これでいいはずなのに……何故、こんなに苦しいんだ?)

ヴィオラはそつと自分の心臓付近を、手で抑えた。こうしてリヴァージュの笑顔や純粹な態度を見るたびに、心苦しくなっていく。自分のしていることは間違つてはおらず、むしろ世界のためなことだ。心苦しくなる理由などどこにもないはず。しかし、何

故、こうして苦しくなるのだ。

(僕よ。決めただろう。世界のためにポセイドン様の言うことは何でも聞く、と)

だから、リヴァージユ一人に胸を苦しくさせることはない。ないのだから、しつかり割り切るべきなのだ。リヴァージユのことと、ポセイドンのこと。自分の今やっていることは決して間違いではないことも。

しばらくそこでヴィオラが待っていると、リヴァージユがこちらまでやってきたのか、ヴィオラの数メートル先で手を振っていた。それに気が付いたヴィオラは微笑みながらその手に振り返した。そしてお互いに互いの方へ歩み寄って行く。

「ヴィオラ。会いにきてくれたのですね」

「はい、リヴァージユ様」

リヴァージユはヴィオラに会うことができて本当に嬉しいのか、顔の筋肉全体が緩んでいた。また、ヴィオラもそれにつられて表情が綻んでおり、互いに良い再会となった。「しかし、今日はどんな用でここに?」

「……」

「それにその格好……もしかして、海鬪士とやらのしごとでこちらへ?」

「……」

ヴィオラはリヴァージユの問いに黙って頷くしかなかった。間違っではないのだ

から、頷くしかない。リヴァージュはヴィオラのその頷きに少し嬉しそうに微笑んだ。「そうだったのですか。では、何のしごとで？」

「っ、それは……」

ヴィオラの胸の奥が一瞬にしてつつかえた。そして、一言も発することができなかつた。まるで、喉の中にある器官すべてがヴィオラを口止めしているようだった。ポセイドンや海闘士に関することは目の前にいる子に話してならない。そして、決して教えてはならないのだ、と。

しかし、ヴィオラはそのすべての器官の制止を振り払うかのごとく、リヴァージュの名を口にした。

「リヴァージュ様っ！」

「は、はいっ！」

リヴァージュはその呼びかけにビシツと背筋を伸ばし、返事をした。ヴィオラの声に圧されたのだろう。ヴィオラは己からの制止に疲れ果てていたのか、「はー、はー」と息を荒げていた。そして、ヴィオラはリヴァージュのその返事を聞くなり、その場に右膝をつき、リヴァージュに跪く形となった。リヴァージュはぼかん、とヴィオラを見てから、ハツ、となつて、ヴィオラに近寄つて、視線を合わせるように少し屈んだ。

「づ、ヴィオラ！ やめてください、こんな……」

「いえ、貴方は偉大なお方。こうせざるをえないのです」

「そ、そんな、偉大だなんて……」

なんて大げさなことを言うのだろうか。自分はまだまだ子どもで、そんなことを言われるような立場ではないというのに。

リヴァージュは若干目を伏せがちに、ヴィオラに向かって困ったように微笑んだ。こんな風にお堅く跪いているヴィオラに向かって顔を上げるなどとは言えなかったのだろう。

そして、次の瞬間、リヴァージュの耳に飛び込んできたヴィオラの言葉は衝撃的なものだった。

「そう、貴方は偉大なのです。ギリシャ神話の海の神、ポセイドン様」

白虎たちはポセイドンの依り代とされるリヴァージュ、そして、世界が海に支配されないためにも、動き出していた。

アテナ・ラティエルも聖闘士たちがポセイドンに立ち向かわざんとする様子を、アテナ神殿の方から目を細めるようにして見ていた。そして、何かを決意したようにアテナの杖を手にかけていた。

また、海闘士も幼きリヴァージュをポセイドンと迎え、世界と向き合い、その姿を肅

清しようとしていた。リヴァージュは己がポセイドンの依り代として自覚するにあたって、ヴィオラの力を借りざるを得なかった。

36 : 「海底神殿」

それから三日後の朝。とうとう例の日が白虎たちの元へとやってきたのである。

白虎は龍星座の聖衣を着衣し、朝一人で教皇の間へと向かおうと、外に出た。昨日までのどんよりした空とは打って変わって、澄んだ青が広がり渡っている天井がそこにあつた。白虎はそんな青の天井を見上げた。太陽が包み隠されずそこに出ており、まだ重かつた白虎の臉にはいい刺激を与えてくれた。それから、あまりに眩しい日差しを隠すためか、白虎は臉の上に手で日よけを作った。

(この広がってる空の先で、大雨が降っているのか……)

今朝もテレビのニュース中継や新聞で、またどこかで大雨が降っていることが知らされていた。世界規模になっているこの大雨、世界の気象・天候研究家や科学者、そして学者たちからは「ただの異常気象」で済まされているのだが、自分たち聖闘士からすれば、それは全くの口からのでまかせで、本当は海皇・ポセイドンが起こしている。ただ、それは自分たちや他の神についている者以外知ってはならないことであり、また、秘密にもしなければならぬ。白虎は心苦しいのか、そうでないのはいまいちよく分からないところ立っていた。聖闘士である以上、国家に関わるかもしれないことを表では隠

さなければいけないのことは覚悟はしていたが、どうしても微妙な心境になる。もし自分が聖闘士でなければ、このことを皆に言い触らしていたかもしれない。信じる信じないはともかくとして。

あれこれ考えているうちに、十二宮を越して、教皇の間の入り口に辿り着いていた。そして、白虎は後ろを振り返り、十二宮の方を見つめた。相変わらず、合計何段になるかも分からない階段だ。これだけの階段、普通に十二宮を歩くだけで相当な時間はかかっているか測ったことはないが、おそらく一時間弱はかかっているだろう。白虎は額に手を当てて、「はぁー」と深く息を吐いた。

それから、白虎は教皇の間の中へと足を踏み入れた。教皇の間は、まだまだ午前ということで、明かりはついていなかった。だが、ところどころから差し込む朝日が、その役割を果たしてくれていた。先へと進むと、教皇の玉座が白虎の目の前に現れた。白虎はキョロキョロと辺りを見渡して、自分の師匠、いわば教皇の姿を確認したが、まだ来ていないようだった。

「うーん……どうすつかなぁー」

(ちよつと早く来すぎたかなぁ)

白虎は教皇の間に飾られている時計に焦点を合わせた。その時計の針は九時を差しており、約束の十時まではまだ一時間ぐらいいはあった。白虎は腕を組み、とりあえずと

ここ座れるような場所はないか、と探した。と、その時。

「白虎？ 随分と早いですね」

「アテナ……」

アテナ・ラティエルの登場だった。ラティエルはいつもは結び上げている髪の毛を腰の下あたりまで下ろし、白虎の目の前で佇んでいた。正直なところ、髪の毛を結び上げている時は、ラティエルからは随分と活発的な女性といった印象を受けたのだが、こうして髪の毛を下ろすとまた違う一面が見えて、髪型による印象は強いんだ、と白虎は思っていた。

ラティエルはニコツと微笑みながら、何かを取り出して、白虎にそれを差し出した。

「？」

白虎はきよとん、と目をぱちくりさせながら、差し出されたものを受け取った。ラティエルから受け取ったものは、一つの櫛だった。白虎は櫛からラティエルの方へと視線を上げ、移した。ラティエルは微笑んだまま、白虎に言った。

「今日は貴方とお話をした気分なので、『それ』を言い訳にして付き合ってもらってよろしいでしょうか？」

ラティエルが指差した先には、白虎が先ほど受け取った櫛があった。白虎は「これか？」と言わんばかりに、櫛をちよつとだけ突き出すようにして、それで上を差した。ラ

ティエルはこくん、と頷き、「そうです」と微笑んだ。しかしながら、白虎はどこか分が悪そうな表情で櫛とラティエルを見つめた。

（わいの予想が当たってたら……あー、大丈夫かなあ、これ）

外見が女性的である白虎といえども、中身は普通の男だ。やはり男女では非常に差があるのは確かなのは感じ取っているゆえ、白虎は珍しくラティエルの問いに黙り込んだ。

「あの……ダメでしたか？」

すると、ラティエルは不安そうで不思議そうな表情をしながら、白虎の顔を覗き込んだ。白虎はラティエルのその表情を見た途端、相手が女神なせいかどうかは定かではないのだが、尋常でない罪悪感に襲われた。だから、こういうしかなかった。

「……むしろ、やらせてください」

リヴァージュが目を覚ましたところは、今まで自分がいた、温かい家ではなかった。周りは岩や石でできた壁で、ベッドの方もそれなりの質の羽毛布団が敷かれているとはいえず、その土台もやはり鉱物からできたものだった。

リヴァージュはむくり、と上半身を起こしてから、自分のすぐ傍にある窓に手をあて、そのまま前へと押した。外もやはり自分が見たことがないところだった。岩がゴツゴ

ツとしてこり、その岩には苔が植物の代わりのように緑に生えていた。

「リヴァージュ様、お目覚めですか？」

リヴァージュがそんな外の気配を眺めていると、ヴィオラがベッドの横から話しかけてきた。どうやら、リヴァージュが眠っている間、そこで見守っていてくれていたらしい。リヴァージュはヴィオラの方に振り向くなり、「はい」と優しく笑みを浮かべて、こくと頷いた。

「ヴィオラの方はいかががでしょうか？」

「……ええ、十分にお休みを頂きました」

ヴィオラはリヴァージュの間に、少しだけ笑みを浮かべてそう答えた。ここでリヴァージュを見守っている以上、十分に休めないのは確かなのだが、彼を心配させまいとヴィオラは嘘をついた。少しばかり後ろめたい気分にも襲われたが、これも彼を安心させるためだ。ヴィオラは色々と我慢するように、拳を体の横で握った。

リヴァージュは安心したように笑みを浮かべてから、ヴィオラの方へ問いかけた。

「本日の予定は？」

「はっ。アテナ軍との会合を午前中に予定しております」

「アテナ……」

リヴァージュの顔は腑に落ちない様子だった。どうやら、アテナという単語にピンと

こないらしく、顔をしかめているしかなかったようだ。その様子を見ていたヴィオラは、「無理もない」と、少しだけ鼻で息を吐いた。リヴァージュは自分がポセイドンの依り代であることすら、どうもピンと来ない。そういう年齢というのもあるだろうが、こうしていきなりここに連れてこられたのも大きいだろう。

ヴィオラはポン、と目の前にいる幼き少年の肩に、自分の手を優しく置いた。リヴァージュは腑に落ちない顔を、ヴィオラの顔の方に向けた。ヴィオラはニコツと笑みを浮かべながら、「大丈夫です」と囁いた。

「あなたのことは、必ず、私がお守り致します。だから、安心してください」
「ヴィオラ……」

リヴァージュの腑に落ちない顔がパツと一気に晴れた。何もかも分からない状態でここに連れて来られたリヴァージュにとって、ヴィオラの存在はそのぐらい大きいとも言えよう。リヴァージュはニコツといつものような優しい笑みをその顔に浮かべて、「そうですね」と頷いた。それから自分の肩に乗っている相手の手の甲の上に、自分の手を重ねた。

「ありがとうございます。あなたがいれば、怖いものなしです」

「リヴァージュ様……」

二人は互いに微笑み交わした。しかし、ヴィオラの心の中はどうしても複雑なもの

だった。ポセイドンを覚醒させることが目的とはいえ、こんな純粋な子どもに、その依代という役割を担わせるのはいかかなものか、と。しかし、リヴァージュをよく知っている自分が適任なのが現状であり、ヴィオラはその心の内を、周りから見えないように隠していた。

白虎は、教皇の間の片隅にある事務室で、ラティエルと共に時間を過ごしていた。ラティエルは事務室の椅子に座りながら鏡を見て、白虎はそんなラティエルの髪の毛に、スツと櫛を通して、梳かしていた。その際の白虎の手つきは微妙に震えており、彼らしくないぐらいに緊張していた。女性の髪、特に女神アテナの髪に触れることは白虎でなくとも相当なプレッシャーというもの。そうして白虎が心臓をバクバクと言わさしている一方で、ラティエルはクスクスと笑みを漏らしながら、白虎に優しく声をかけた。

「白虎、そんなに緊張しなくても普段通りでいいのですよ。」
「えっ、いやっ、えっ、えーっ……」

白虎は肩をビクツツと震わせて、目線をキョロキョロと泳がせた。そう言われても、白虎自身、どうしていいのかわからなかった。自分が女性であれば、緊張することなくラティエルの髪の毛を梳かすこともできるのだろうが。白虎はそう思っている間にも、気付かないうちに櫛から手を離れたらしく、床の方でカッーン、と音が鳴った。櫛を床に

落としたようだ。

「えっ!? うわあっ!」

白虎は慌てて櫛を拾い上げると、汚れを吹き飛ばすように、ふうふう、とそれに息を吹き掛けた。ラティエルはその白虎の様子を見るなり、とうとう盛大に吹き出して、大きく笑い始めた。

「はははっ、ははっ……! 白虎……!」

「うぐう……! し、仕方ないじゃないですか! 美容師じゃあるまいし、女性の髪の毛に触れることなんて滅多にないんですから!」

白虎はラティエルに笑われた恥ずかしさからか、顔を真っ赤にして頬を膨らました。ラティエルは笑ったことによつて目から出てきた水滴を指で払いながら、「ごめんなさい」と言った。

「いつも堂々としている貴方が、こんな風になるなんて思いもありませんでしたから!」
「あ、当たり前です。アテナの髪に触れるとなつたら誰でも緊張しますつて!」

そう言いながらも白虎は櫛を再びラティエルの髪の毛に通した。今のやりとりで白虎の心が解かされたのか、櫛を持つ手がさほど震えていなかった。同時に白虎の心に余裕もできたのか、白虎は軽くラティエルの方に話を振った。

「こういうのって、侍女とかの役目とかじゃないですか? 私にやらせるのは何か見当

「違いなような……」

「ええ、そうですね。でも、貴方は虎鈴に似すぎてそういう問題に収まらないのですよ」
「そ、そんなに似てますかね？」

「ええ、とつても。それは貴方も自覚なさっているでしょう？」

「はあ……まあ……」

白虎は複雑そうな表情をしながら、ラティエルの髪を梳かし続けた。確かに自分は母親似であるとは自覚はしているものの、ラティエルに指摘されるまで、性格も遺伝しているとは思ってもみなかった。自分は男である以上、外形以外はまったく似ていないと思っていたのだ。

「髪型の多少の違いはあれど、貴方はまんま虎鈴だわ。重ねてはならないとは分かっているけれども、どうしても、そうしてしまう」

「……」

「貴方の生き様も、虎鈴にそっくりな気がするけど……影響されたものかしら？」

「……ええ、そうかもしれないですね」

ラティエルに問われて、白虎は強く肯定した。

「先程、あなたは私は常に堂々としている、と仰っていました。私の母親も常に堂々としていました。元々、顔のことで周りから色々なことを言われていたこともあり、幼い

ながらに自分に自信が持てなかつたんです。でも、母の堂々とした後ろ姿を見るたび、私自身も勇気付けられてる気がしていました」

「……」

「両親が死んだ時なんて本当絶望的だったんですよ。自分の心の中が何もかも奪われた気がして、何事にも関心を持てなかつた。でも——……」

「ひゅっ。」

「私が自信を持つようになったのもその時なんです。無関心なうちに、目覚めたように、自分の中の何かが動いたんです。『天国にいる両親にできる最高の親孝行とは何か。今の自分にできることは何か』って。そうしたら、今の自分に辿り着いたんですよ。それは母親の見様見真似だけど、自分を表すには十分でした。そうしたら、何もかもどうでもよくなって、顔のことも自分の誇りであると思えるようになりました」

白虎はそこまで言い終えると、ラティエルの髪の毛を三つの束に分けた。ラティエルはそれに気が付くと、髪を束ねるリボンとゴムを白虎の方へと差し出した。白虎はそれを領きながら、受け取った。

「だから、今の私がこうして聖闘士でいられるのも、母親の影響が強いのかもしれない。母親のことがなければ、こうしてアテナの横に立つこともなかつたのですから」

それから白虎はラティエルの髪の毛を緩く編み始めた。それは、そこそこ手慣れた手

付きであった。

「アテナ。私は母親に似ていることをこのまま誇りに思ってもいいのでしょうか？」

「ええ。貴方が誇りだと思ふのならば」

「はい、ありがとうございます」

白虎はニコツと笑みを浮かべた。

そうして、二人がそこまで話し終えると、白虎はキュツと編んだ髪の毛の終わりの部分にリボンを付けた。

「さて、と。こんなもんかなあ……」

「白虎。ありがとう。貴方から三つ編みを施されるなんて思わなかったわ」

ラティエルはそう言うのと、白虎に編まれた自分の髪の毛をそつと撫でた。白虎は頭をぼりぼりと掻きながら、頬を朱に染め、照れ臭そうに目を逸らした。ラティエルはくすくすと笑みを浮かべながら、ちらつと時計の方を見た。そして、白虎に言った。

「——では、そろそろ時間です。行きましょう、白虎」

「……はい」

教皇の間の玉座の前に戻って来た時には、翔馬と水鹿、圭熊の三人が、適当に駄弁りながらそこに立っていた。特に圭熊は手でオーバリアクションを付けながら、大胆に

話していた。

「でき、こう、『ドガンツ!』っていつちやうわけだよ!　すぐくね——つて、お?

白虎とアテナの姉ちゃんじゃねえか?」

と、こちらの存在に気付き、圭熊は話を中断した。他の二人も話を聞くのを中断して、白虎とラティエルの方にその視線を向けた。白虎は、自分たちの方に目を向ける三人に向かつて、微笑みながら手を振った。圭熊はニツと歯を見せながら、白虎の元まで駆け寄つて、その肩に自分の手を回した。

「よつす、白虎!　いないと思つたら、アテナの姉ちゃんと一緒にいたんだな!」

「おう!　髪の毛いじらせてもらつてた!」

「アテナの髪の毛をいじるなど、なんて恐れ多い……」

圭熊と同時に駆け寄つてきた翔馬は、白虎のその話を聞き、思わず脂汗を流した。翔馬からすれば、白虎のしたことは非常に恐れ多いこと。だから、白虎も最初は緊張でガチガチだったのだが。

ラティエルはその場にいた教皇とアイコンタクトをしてから、白虎たちに言い放つた。

「白虎、翔馬、圭熊、水鹿」

ラティエル、もといアテナに名を挙げられ、四人は顔を上げた。ラティエルは力強い

微笑みで、言う。

「ついでにきて下さい、海底神殿まで」

正直なところ、白虎たちはラティエルが海底神殿までついてこい、といったところから記憶がなかった。一体何が起こり、何があったのか自分たちの身では確認できなかったのだ。気が付いたら気絶し、気が付いたら自分たちの世界では見れないような空間にいた。それだけだ。

「うう、う、うん……？　ここは……？」

白虎は目が覚めて起き上がれば、キョロキョロと辺りを見渡し、その様子を見ていた。地面は岩や石のタイルでできており、また、白虎の視線の数メートル程度先にはギリシャにある神殿のような大理石から造られた建物が、ドン、と大胆に建っていた。白虎は立ち上がって、その建物を眺めていた。

「ここが……海底神殿？」

ふと、上を見上げると、水のようにユラユラと揺れた空が、太陽の光を介していた。その空の中には魚や貝といった魚介類たちが、のんびりと泳いでいた。

「まさか……ここは海の中アツ!？」

白虎は目を丸く見開き、驚きを隠せずにいた。海の中といえど、息はでき、しかも視

線の先の神殿——どう見たって海の中とは思えぬ光景がそこに広がっていた。海底神殿というからには、海底にある神殿だとは思っていたのだが、まさか本当に海底にあるとは思っていなかった。

白虎は想定外にして予想外の状況に、ぽかん、としているだけだった。

「つて、んな場合やない！ アテナ！ アテナは?!」

そうだ、自分がここにいる、ということとはラティエルもここにいるはずだ。見たところ、この場には自分一人しかいないようであるし、別のところにいると見受けられる。だが、ラティエルらを探そうにも、ここには初めて来たわけであって、ここから迂闊に移動しようものなら、尚更見つからず、途方に暮れるに違いない。

詰んだ、と白虎は思った。

白虎は「はー」と深くため息をついて、それから再びその場にしゃがみ込んだ。そして、今や空となった海の方を見つめて、苦い顔をした。

「どないしろつちゅーの……」

ボソツと呟いた。ここで自分一人だけ座り込んだまま、ラティエルたちが来るのを待つしかないのだろうか。白虎は体育座りになって、その場に丸くなった。

その時、自分の肩をとんとん、とする何かを感じを取った。

「?!」

白虎はその感触に気付くなり、くるつと首を回して、後ろの方に振り返った。

（桃色の鱗衣……？）

白虎が見たのは、桃色の鱗衣をまとい、優しい笑みを浮かべている一人の女性だった。その女性は、地上でもなかなか見れないような綺麗な顔立ちをしており、まさしく「美女」というには相応しいものだった。そして、女性はこちらの存在に気が付いた白虎に向かつて、ペコツと頭を下げた。白虎もそれに釣られて、ペコリと頭を下げれば、立ち上がって、女性の方をまじまじと見つめた。

周りとは違う色ではあるものの、鱗衣であることには間違いないであろう。しかし、同時に海闘士にこんな綺麗な女性がいたとは驚きが隠せなかった。一体何者なのだろうか、彼女は。

白虎がそうこう考えているうちに、桃色の鱗衣の女性は白虎について来いと言わんばかりに手を向こう側へと指し示しながら、歩き出していた。まるで、白虎が道に迷っていることを読み取ったかのようにだ。白虎は女性が歩き出すと、それについて行つた。

そうして白虎が辿り着いたのは、ラティエルたちの元だった。

「白虎！」

ラティエルや水鹿たちは待つてましたと言わんばかりの様子で、白虎の方へと駆け

寄った。水鹿は呆れた様子で、しかし、ほっとしたように白虎に向かって言葉を発した。「お前、一人だけいないから心配してたんだぞ。ここで会わなければどうなっていたとか……」

「えへへ、実は、綺麗なお姉さんがな……」

白虎は先ほどの女性を紹介しようとして、くるつとそちらの方を振り返えれば、不思議なことに、そこには誰もいなかった。

「えっ?」

白虎はキョロキョロと辺りを見渡し、その姿を探し求めた。しかしながら、それでも全く見当たらない。確か、自分はあるの女性に案内されて、ここに来たはずだ。見落とすうにも、あれほどの美女を見落とすなど、男として言語道断であろう。

水鹿は「?」と頭にクエスチョンマークを浮かべたまま、辺りを見渡している白虎を見つめていた。

「何かあったのか?」

「えっ、あつ……ううん、何でもないや」

白虎は水鹿に問われて、思わずその首を横に振った。それから、再び視線を後ろの方へと戻し、遠くの方を見つめていた。

(おかしいなあ。確かにあの人に案内されてきたはずなのに……)

白虎は「はあ」と短く息を切つて、頭をポリポリと掻きながら、目線を前の方へと向けた。一体あの女性は何者なのか、白虎はどうも腑に落ちなかつた。

それからラティエルたちとともに前の方へと歩みを進めた。海底の世界は驚くほどに地上と変わらぬ様子で、そこに存在していた。変わらぬ、といっても、ちよつとばかり、柱などのものが立っているだけなのだが。それだけでも、海底の世界が地上とほとんど変わらぬ様子で存在しているのは事実である。

しばらくすると、五人の目の前に非常に大きな建物が現れた。ドアはない相当大きな入り口に、中は赤い絨毯が広まり、城のような造りをしていた。

——きつと、ここが海底神殿の本拠地なのであろう。

そう思つて、白虎たちがその中へと足を踏み入れた時だつた。

「っー」

「！・アテナアッ！」

白虎の横にいたラティエルが、水の縄に縛られ、動けなくなつたのである。白虎は何とかして、その縄を解こうにも、水がすべてを跳ね返す勢いでアテナの周りを回つていたため、全く解くことができなかつた。

「くそっ！ 一体誰が……！」

こちらが話し合おうという気持ちでここにやってきたというのに、海王軍側からのま

さかの仕打ち。白虎は黙って怒っていられず、犯人であろう人物を探し始めた。もし見つけたらとちめてやろう、と白虎が思った時である。

「そう焦っては、目の前にあるもの全て失いかねない。まずは落ち着きたまえ」

白虎たちの耳に入った、冷静な声。白虎たちはその声が聞こえた方向へと視線と体を向けた。

「最近の聖闘士は、アテナがどうこうしたぐらいで冷静さを欠ける——哀れよ」
「なっ、なにを——……っ！」

白虎は言葉を詰まらせた。この小宇宙は、只者ではない、と。そして、白虎たちの目の前に現れたのは、海闘士だった。仮面をつけ、顔は全く分からないのだが、まどつている鎧が、鱗衣のそれであった。

海闘士は手に持っていた槍を、スツとラティエルの首に向けた。

「アテナ、あなたも哀れよ。女神としてこの世に生を受けたというのに、その力を自分のために使わぬなど。ああ、なんてもったいない」

「……」

「人間といることがどれだけ無駄なことか、あなたは分かっているのだ、アテナ。人間がどれだけ腐っているのか、あなたも知っているはずだ」

「——ええ、知っています」

ラティエルは顔を上げ、力強い笑みを浮かべた。

「でも、私には人間を信じ、守る義務がある。どんなに腐っていようが何であろうが、私は人の本来の優しさや良心を信じる。お人好しと言われようがなんだろうが、関係ありません。それが私という存在なのですから」

「義務……これまた随分と馬鹿げたことを」

「実際、神にも役割や義務はあります。それに、義務を果たすのは、人間と同じではないのですか？」

「……下らぬ」

海闘士はラティエルに向けていた槍を下ろし、そちらの方に歩み寄った。

「やはりあなたの神らしくもない人間への愛と情は異常なものだ、アテナよ。ポセイドン様も大層悲しがるであろう」

「……」

「まあ、良い。アテナ。これから貴方にはポセイドン様の元へ行ってもらおう。元々そういう約束だ」

「……はい」

「聖闘士の餓鬼ども、ご苦労だった。貴様たちはここで帰っても良いぞ」

「——は!?!」

白虎は目を見開き、海闘士とラティエルの方を見つめた。元々自分たちはラティエルの護衛のためにここまでやってきたのに、まさかこんな所で用無しになるのか。翔馬たちの方も納得いかない表情で、ラティエルと海闘士を見つめていた。白虎は齒をギリツと軋み噛み、海闘士に向かって強くぶつけた。

「ふざけるな！ わいらは——私たちはアテナのためにここまでやって来たんだ！ こんな所で引き下がるわけにはいかない！」

翔馬たちも白虎の言い分に頷いていた。何が何でも、アテナを守り通すのが自分たちの役割だ。それに、アテナ一人だけここに置いておいて、海闘士側が何をするのか分からない。

しかし、海闘士は頑として、この場を譲ろうとはしなかった。それどころか、白虎の心の中を見据えたようだった。

「アテナの護衛と、ポセイドンの依り代を助けるため、か。実に下らないな、龍星座よ」
「——っ！」

あの海闘士、読心術が何かを心得ているというのか。白虎の本来の目的でもあることが当たり前のように、海闘士の口から言い放たれて、白虎自身、かなり動揺していた。

「ゆえに、龍星座も、その龍星座についてきている聖闘士も邪魔というものだ。アテナとポセイドンの会合が終わる前に、消えてもらうぞ」

「なっ、うわあ——っ!？」

その瞬間、白虎たちの体に絶大なプレッシャーと、違和感がのしかかった。白虎はその感覚を知っていた。アテナが使っていた——テレポーション。白虎はプレッシャーを浴びながらも、海闘士の方へと声を向けた。

「なっ、まさか……アンタっ……!？」

「……超能力など、私にとつて容易いものよ」

その時、海闘士の仮面の下の顔が、キラリと黒い光を放っている気がした。白虎はそれを見た瞬間、黒い空間へと放り出され、そのまま意識を失った。

37：「黄金の血」

白虎たちが消え去った後、ラティエルは海闘士の方へ問い詰めるような形で言った。

「貴方、一体何を聖闘士たちに……！」

「『何』を？」

海闘士はラティエルの問いに対して、あざ笑うかのような声を、その仮面の下から放った。ラティエルはその声から何かを感じ取ったのか、ぐつと顔をしかめて、ただ、海闘士の方を見つめていた。海闘士は手に持っていた槍を、カチャと肩に乗せてから言い放った。

「貴女がそこまで神経質になることでもありません。ただ、あの聖闘士らには少々痛い思いをさせようと思ひましてね」

「……まさか」

ラティエルは目を見開き、ただ、海闘士の方を見つめていた。もし、自分が思っていることが本当であれば、この海闘士は白虎たちに死に向かわせていったようなもの。ラティエルは目を伏せて、地面の方を見つめた。

(翔馬、圭熊、水鹿、そして白虎……どうかご無事で……)

「うう、ん……」

（……は……？）

白虎が次に目を覚ましたのは大きな一本の柱の目の前だった。白虎はムクリと上半身を上げて、その柱を見上げ、まじまじと見つめた。海底神殿にこんな大きな柱があったのか。この柱、下手したら地上に届きそうな高さがある。

白虎がそうして目の前の柱を見つめっていると、柱の影から人影が見えてきた。

「！」

白虎はその人影を見るなり、一気に立ち上がり、足と地面を摩擦させて構えの態勢を取り、小宇宙で威嚇し始めた。人影はその姿を露わにすれば、小宇宙で威嚇している白虎に向かって、嘲笑うかのような声を発した。

「そんな威嚇、痛くも痒くもないぞ、聖闘士」

「——っ！」

（海闘士……!?!）

白虎の目の前に現れた姿は、鱗闘士の象徴であろうオレンジに輝く鎧をまとうている、海闘士の姿だった。しかも、この海闘士のまとう小宇宙、ヴィオラの時のものと同じようなものを感じ取ることができた。まさか、この海闘士も黄金聖闘士並みの力を持

つと言われている海闘士の一人というのか。

白虎が考える隙もなく、海闘士は自らを名乗り上げた。

「俺は北太平洋の柱を守護している海馬シーホースのワイト。海將軍の一人でもある」

「海將軍……!? 確か、海闘士七將軍の……!?」

「ほう、聖闘士にしてはよく知っているな。海闘士トップ7のうちの一人が俺だ」

海闘士には、海將軍と呼ばれるトップ7の総称があり、そのトップ7は黄金聖闘士並みかそれ以上の力を持つと言われている。ワイトは自分の胸を指差し、そうであることを示していた。一方の白虎はとんでもないものを相手にしてしまったと思いい、ワイトのことを睨みつけた。

そして、ワイトは柱の方を手で差した。

「地上に起こっている水害を止めなければ、この北太平洋の柱を含めた計七つの柱を破壊する必要がある。まあ、貴様には無理な話だろうがな」

「……無理かどうかは、やってみてから言ってほしいものだ!」

白虎はワイトの話を聞くなり、すぐに柱の方へと駆け出した。この柱を破壊するだけならば、自分でも可能だ、と。しかし、ワイトはその白虎の駆け走るスピードを上回る速さで、その前に周り、白虎の腹に重い鉄槌を食らわせた。

「ぐっ、があっ!」

「……女のような顔立ちをしているくせに、中身は直情的で乱暴だな」

ワイトはかなり呆れているようだった。ワイトの拳が白虎の腹から離れると、白虎は足をよろつかせながらも、その姿勢を保った。

(柱の前に、このワイトとかいう奴を倒さなきゃならないような……)

白虎はすべてを把握した。無難に柱を破壊するためには、まず、目の前いる海闘士・ワイトを倒さねばならぬこと、今回の水害の件を解決するには、海闘士のトップに君臨するであろう海將軍に打ち勝たねばならないこと。ラティエルの護衛だけのつもりが、いつの間にかこんな大事になっていたとは、白虎は把握するまで思いもしなかった。「ちよつくらポセイドンを封印しに行く」と、いった認識程度でしか受け止めていなかった。しかし、こうして目の前に海將軍が立ちはだかつて以上、そういう訳にもいかない。

白虎はワイトの方に視線を構えて、小宇宙を燃やし始めた。ワイトは「ハッ」と鼻で笑い、小宇宙を燃やしている白虎をあざ笑った。

「龍星座、小宇宙を燃やしてどうしようというのだ」

「こうするに決まっている！ 廬山、昇龍覇アアアアア——ツツ!!!」

白虎の拳から白い龍が一つの剣として放たれた。龍星座、最大奥義。しかし、ワイトはそれを片手で受け止めた。

「な、なにイツ!? 昇龍覇を片手で受け止めただとツ!?」
「ふん」

白虎が驚いている間にも、ワイトは昇龍覇の威力を握り潰すように掻き消した。ワイトは昇龍覇を受け止めた片手をブンブンと払った。

「青銅聖闘士の實力など、たかが知れてるな」

「ぐっ……! まだまだアツ!」

白虎は相手の言葉に若干イラつきを覚えながらも、ワイトに再び拳を向けた。

「猛虎烈風紫電拳——ツ!」

今度は烈風を伴った、虎の暴走。風となれば片手で受け止めることはできまいと、白虎は手応えを覚えた。今度こそ、これでワイトにダメージを与えることができるであろう。白虎はそう思っていたのだが、ワイトはこれもあつさり片手で受け止めていた。

「な、なんだ、と……!?!」

「さつきも言ったはずだ。青銅聖闘士の實力など、たかが知れている、とな」

白虎が目を見開き驚いている間にも、今度はワイトの手から、猛虎烈風紫電拳の威力が白虎の元へと、ピンボールのように跳ね返った。

「がアツ!」

白虎はその威力を真正面からまともに受け、数メートル先にあつた小さな柱へと勢い

良く背中を打ちつけた。その打ちつけたところから、ズルズルと、柱を伝いながら、白虎の体はだらしなく地面へと落ちた。

「ぐ、うう……」

その落ちたところから、白虎は尻を宙に持ち上げ、腕に力を入れ、立ち上がる。ワイトはそんな白虎を感じたように「ほう」と、声を上げながら見つめた。

「一回壁にぶち当たった程度では引かぬというか」

「私たち聖闘士は、こうして何度も何度も壁にぶち当たりながら、実践を重ねている……そう簡単には挫けない……!」

白虎は態勢を整えながらも、苦し紛れに笑みを浮かべ、ワイトの方へと視線を向けた。じりつ、と白虎の足に体重がかかる。ワイトは「ふん」と白虎を睨みつけるように横目で見てから、小宇宙を一点に集め始めた。

「その強気な態度でいつまでいられるかな?」

「なにっ?」

「フツ」

ワイトは笑みを浮かべてから、どつしりと構え、口をすぼめながらスウツと息をゆつくり吸い出した。白虎はそれを深呼吸か何かだと思ったのか、ニツと笑みを浮かべてから、「なんや」とワイトを鼻で笑った。

「大層な口を叩く割りには、舐めた真似をするんだな！」

白虎は足から高く飛んで、そのまま拳をワイトの方へ突き出した。しかし、その瞬間、白虎は何か強い強風によって吹き飛ばされた。

「な、なんつ……！」

(なにつ、この風つ……！)

一体どこからこんな強風が出ているというのだ。ここは海底で、風が吹きこむような隙間はどこにもないはず。白虎はまさか、と思い、吹き飛ばされながらワイトの方を見つめた。ワイトは口を細め、体を広げてそこに立っていた。白虎はかすかながらも、その口からこの風が流れ出ていることを確認することができた。

(い、息吹だ?!)

白虎は脂汗を流した。まさかこんな一人を吹き飛ばせるほどの威力の息吹を、人の口から吹き出されるとは。

「はっ、ぐうっ！」

それから、再び、柱に打ちつけられる。白虎は頭から地面へと落下した。白虎は振動で体を震わせながらも、手と腕に力を入れて、そこからゆっくりと起き上がった。ワイトは白虎の方にザクツと足音をたてながら歩み寄った。白虎はワイトがこちらに来るなり、ワイトの方へ顔を向け上げた。ワイトは「フツ」と鼻で白虎のその無様な姿を笑っ

ていた。

「俺の息吹——ゴッドブレスはどうだ」

「ゴッド……ブレス……」

「そうだ。何もかも吹き飛ばす、神の息吹よ」

「神の息吹……」

白虎は手を柱に伝わせながら、姿勢を保つ。それから、スツ、と柱から手を離して、拳を構えた。そして、息を整えたところで、ワイトの方を睨みつけた。

「神の息吹だか何だが知らないが、たかが息程度で私を倒せるとでも思うな！」

白虎は拳を構えたまま、そこから相手に向かって走り出した。ワイトは白虎の拳が当たる直前に、そこから姿を掻き消した。

「！」

「——遅いな」

気が付けば、ワイトは白虎の後ろに回っていた。白虎はそのことに気が付き、ワイトの方を振り向くものの、ワイトの攻撃もかなり速く、白虎は背中から吹き飛んでいた。

「がっ、はあっ！」

白虎の体は、勢いよく地面に落ちると、そのまま摩擦して、向こうまで飛んで行った。「聖闘士も軽いものだな。たかがこの程度でこんなに飛ばされるとは……」

「ぐ、ううっ……ぐっ！」

白虎が起き上がるうと上半身を起こすと、ワイトはその背中をガツと強く踏み付けた。ぐりぐりと白虎の背中にワイトの足がめり込んでいく。

「はっ、があっ……！」

「いい加減諦めたらどうだ？ 何度も言っているが、青銅聖闘士の実力なたかが知れている。お前では、柱は愚か、俺をも打ち砕くことは不可能……！」

（くそっ……！ 確かにこいつの言う通りだ……！）

白虎はこの数分の戦いの中で、ワイトと自分の実力差を目の当たりにし、悔しさを感じていた。黄金聖闘士並みの相手と、たかが青銅聖闘士の実力しかない自分。確かに勝負見込みなど絶望的にならないといっても過言ではないであろう。

（でも……！）

「やるしか、ない……！ やるしか、ないんだッ！」

白虎は背中を踏まれながらも、息絶え絶えになって言を発した。

「アテナのためにも……世界のためにも……！ やるしかないんだッ！」

白虎は拳を強く握りしめながら、グンツと上半身を力強く起こした。心なしか、自分を押さえつけていたワイトの足が軽々しいものになった気がした。

「……！ ぞかしい奴め」

スツと厳しい目つきで白虎を見る。ワイトはいつまで経っても立ち上がり続ける白虎に対し、苛立ちというものを覚え始めていた。勝てる見込みすらないというのに、自分に対してしつこく立ち向かう。非常に不愉快だ。

(まさか、聖闘士ゴのときに奥の手を使うことになるとはな……)

ワイトは目を閉じ、拳をギュツと握りしめてから、その身にまもっている小宇宙へと意識を集中させた。白虎はポロポロとなったその身と顔で、その様子を酷く驚いた様子で見つめていた。

「な、なにをっ……!!」

「シーホースの究極奥義……受けるがいい!」

「ライジング、ビロオオオオオオオウズツツ!」

その瞬間、拳だけで出せるとは到底思えない巨大な竜巻が、白虎の体を襲った。白虎の体は竜巻によって天高く舞い上がり、そのまま天井の海面まで高く持ち上がった。白虎自身、ここままでか、と天井にまで持ち上げられた瞬間思ったものの、この竜巻、まだまだ天井を突破できる様子で巻き起こっていた。

「なっ! まさかっ……!!」

「ふふ、気が付いたか……」

(この技は受けた者を地上まで吹き飛ばす能力を持っていることに……!)

ライジングビロウズは、ワイトが持っている技の中でも一番強力で強大な威力を持つ。常人であれば、この技を受けたらひとたりもたまりもないであろう。まさにシーホースの究極奥義といっても過言でない。そして、白虎はワイトのほぼ思惑通り、海面でできた天井を突き抜けて、地上まで吹き飛んで行った。白虎は地上の海面にその体を浮かせていた。

（ワイト……アンタの実力、しかと受け止めた。確かにわいとアンタとでは、アンタの方が強い。こんなの、黄金聖闘士でなければできないからな。でもな、わいには……）

ワイトは白虎が突き抜けた海面の天井を見つめながら、「フツ」とあざ笑っていた。青銅聖闘士という身でありながら、海將軍の一人である自分に襲いかかるからこうなるのだ、と。ワイトはその時ばかりそう思っていた。そう、「その時ばかり」は。

次の瞬間、ワイトは海面の方から強い小宇宙を感じ取った。

「なっ、なんだ……！」

（この小宇宙は……！）

ワイトは驚愕しながら、海面の方を見上げていた。こんな強い小宇宙、一体誰がどう出しているというのか。自分の周りに他の海將軍や海闘士はいない上に、ましてや聖闘士などいない。考え込んだワイトの脳裏に、先ほどまで戦っていた聖闘士の姿が過ぎつ

た。

「まさか……!」

いや、まさか、そんなはずはない。アレは自分のライジングビロウズによって地上に吹き飛ばされ、死んだはずだ。それに、ここに戻ってくることはほぼ不可能に近いというものだ。だが、この後、ワイトのその予想すら覆された。

「そうッ! そのまさかだアッ!」

ワイトの頭上から降りかかった、力強くも、どこか幼さを残す声。ワイトは驚愕を隠せない様子で、その姿をその目で確認した。

「龍星座ッ……!」

そう、白虎だった。白虎はボロボロになりながらも、こちらに向かって、一直線にここまでできていた。

白虎は神殿の地面に降り立つ代わりに、ワイトの頭をその足で蹴り上げようと試みた。ワイトは間一髪でその蹴りをその片手で受け止めた。白虎は自分の蹴りが受け止められると、その場で一回転してから地面に降り立った。

ワイトは化け物を見るような瞳で、白虎を見つめていた。こんなこと、あつてならない、と。白虎は今まであざ笑われた分を返すように、「フッ」と笑みを浮かべた。

「そんなびつくりせんでも、ちゃんと本人やで?」

「貴様……！ 不死身とでもいうのか！」

「不死身……？ くくつ……」

ワイトの口から放れた「不死身」という言葉に、白虎はクスクスと吹き出し始めた。ワイトは突然吹き出した相手を、不審そうに目を細めてから見つめた。

「一体何がおかしい？」

「ごめんごめん。だって、不死身とか有り得ないこと言い出すから……」

そろそろ落ち着いてきたのか、白虎は息を整えて、いつものような力強い笑みを浮かべた。

「そう、私は不死身ではない。私がこうして帰ってこれたのは、この龍星座の聖衣のお陰」

「な、なに……？」

聖衣が白虎を守っているというのか。しかし、青銅聖衣の強度などたかが知れており、黄金聖衣でもない限り、そんな力を持っているとは到底思えない。白虎は口元を緩めて笑みを浮かべてから、スツとワイトを見据えた。それから、ワイトに向かって走り出す。

「さあ、今度こそ受けてみるがいい！ 廬山、昇龍覇——ッ！」

「くつ、もう一度吹き飛ばせ！ ゴッドプレス！」

その瞬間、ゴッドブレスの息吹と、白い龍がその威力を互いにぶつけ合った。ほぼ中間なところで、その威力はくすぶっていた。

「な、なにイツ!? 先ほどまで手も足も出なかつた龍星座と海將軍の俺の力がくすぶっているだ……!?!」

ワイトは絶対に有り得るはずがない目の前の光景に、ただ、ただ、目を見開いて、見つめるしかなかった。白虎はニツと白い八重歯を出して笑み、更に小宇宙を燃やした。

「はあああああ——ツツ!!!」

白虎が小宇宙を燃やすと、白い龍が勢いをつけて相手の息吹を食い散らかし始める——
—言わば、形勢逆転だ。

(バカなツ! 龍星座の小宇宙が今までとは別人のように輝いているだとツ!?)

先ほどまでは自分にやられっぱなしで、手も足も出せなかつた白虎が、こうして自分を圧倒している。それだけでも十二分に有り得ぬことだった。

「がっはあっ!」

白い龍は息吹を尋常でないスピードで食い散らかせば、ワイトの方へと襲いかかり、その体を一気に空高く持ち上げた。ワイトは持ち上げられながらも、白虎の方をキツと睨みつけ、それから驚いた。

「……………」

(あれは……あの聖衣の輝きは……！)

いつもは翡翠を帯びている龍星座の聖衣。だが、ワイトの目に飛び込んできた龍星座の聖衣はそれではなかった。青銅聖衣とは思えぬほどの黄色い輝き——そう、白虎の聖衣は黄金色に輝いていたのだ。その様はまさしく、聖衣の最上位に君臨する、黄金聖衣そのものの輝きだった。

「バ、バカな！ 青銅聖衣が黄金聖衣のような輝きを——……ぐっ、うっ！」

そこまで言い終えたところで、ワイトの体は見事に地面に落下し、背中を強く強打した。ワイトはブルブルと体を震わせながら、白虎の方へと顔を上げた。

白虎はコツン、と聖衣のヒールを鳴らしながら、ワイトの方へと歩み寄った。どうやら、龍星座の聖衣が黄金に輝きを放っていたのは一瞬だったようで、すでにいつもの翡翠色の聖衣に戻っていた。それから、白虎は倒れているワイトに向かって、言った。

「私の聖衣は、黄金聖闘士の血によって修復されたもの。だから、この聖衣には黄金聖闘士の小宇宙が宿り、かつてないパワーと防御を秘めているんだ」

「なんっ……だと……！ そんなこと、あつて、たまるものかッ！」

ワイトはその場で一気に立ち上がり、白虎の方をとつもない形相で見つめた。

「黄金聖闘士の血によって修復されたものだろうがなんだろうが——俺は、貴様には負けない！ もう一度、受けるがいい！ 俺のライジングピロウズを！」

によつてその威力を掻き消され、また、その威力がワイトを倒すことへも繋がつていたのだ。

白虎はワイトがもう立ち上がつてこないことを察すると、無言のまま北太平洋の柱の前まで歩み寄つた。そして、柱の方に焦点を合わせて、スツと見据えた。

(柱を構成している原子を——見極めて、打ち砕くツ！)

「はあッ！」

白虎の拳から、一筋の龍が放たれた。柱など、原子を見極め、打ち砕くということを念頭に入れておけば、容易く壊せる。

——そう思つていたのだが。

「なっ……い……何だと……い……ビクともしていない……!?」

柱は、何事もなかったかのように、そこに悠然と立つていた。それどころか、白虎の拳の威力を吸収して、すべてを無に変えているようなものだった。

「拳でダメなら……こつちでどうだアツ！」

白虎は勢いよく飛び上がり、脚を柱へと向けた。拳が駄目ならば蹴りでいく、という魂胆らしい。白虎は、クルツと一回転してから、軽々しい素振り、重々しく脚を振り上げた。

しかし——。

「蹴りでもダメか……!」

白虎は柱を踏み台にして、そこからジャンプして、足を地へと戻した。それから、柱を見つめた。

空を裂き、大地を割ると形容されている聖闘士の拳と蹴りであるが、その二つをもつてしても、目の前の柱は妥協せず、砕けようともしない。それどころか、聖闘士ごとき

の蹴りと拳、とあざ笑っているようにも伺える。

「ぐ、うう……無駄だ」

「!」
白虎は自分の耳に入ってきたその声を辿って、後ろを振り返った。その視線の先には、今にでも事切れそうなワイトが、苦しそうに白虎の方を見つめていた。ワイトは蚊が鳴いているような声で、しかし、白虎の耳には届くぐらいで言った。

「海底神殿の大きな柱は黄金聖闘士の力をもつてしても壊すことはできん……それが例え12人全員の力だったとしても……」

「な、何だって……!」

「哀れだな、聖闘士よ……自分たちが非力であることが分からずに……ううつ……」

ワイトはそこまで言えば、ガクツと顔を床に落として、そこからはもう口を閉ざし、何も言わなかった。白虎はワイトの話を聞いて、「ちつ」と舌打ちをしながら、北太平洋の

柱を見つめた。

ワイトはああ言ったが、この柱を壊すことができなければ、世界を救うことができないのも同然であるとワイトが言ったのも事実だ。しかし、黄金聖闘士12人がかりでも壊せぬようなものを、自分一人でどうやって壊せというのか。小宇宙を高めたとして、先ほどのように柱にあざ笑われるだけだ。

白虎がそうして数分ぐらい柱と睨めっこしているところへ、飛んできたものがあつた。

「うわっ、はあっー！」

白虎はそれに対して、肩をビクツと思いい切り跳ねあげて、驚きから思わず声を上げた。飛んできたものは、煙をシューウウと立てて、そこに姿を現した。

「これは……！」

非常に特徴的な黄金色の箱。その模様は天秤を司っているもの——天秤座の黄金聖衣が海底神殿に現れたのだ。

「まさか……老師が……？」

白虎は、天井の上にあるであろう地上がある方向を見つめながら、ぽかん、と口を開けて呟いた。それから天秤座の聖衣箱におそるおそる触れると、白虎の師匠である教皇の小宇宙がかすかながらに感じられた。

盾は柱にぶつかると、その反動からか相当な速さで白虎の元へと戻って行った。白虎はそれを両手で受け止めれば、その力大きさに耐え切れなかったのか、足を摩擦させて、その身を後退させた。そして、その威力の大きさをその身を持って感じていた。

円盾とぶつかった後の北太平洋の柱は、ぶつかったところからヒビがピシピシと入り始めていた。

そして——大きな音を立てて、北太平洋の柱は粉々となり砕け散った。

「やったああああーッ！　とうとう北太平洋の柱を壊したぞー！」

——海底神殿、七本の柱のうちの一本を、撃破。

白虎は声を上げ、体をびよんびよんと跳ねさせながら、その喜びを体全体で現した。これで残る柱はあと六本。他の六本のうちの三本に、翔馬、圭熊、水鹿の三人がついていればいいのだが、大丈夫であろうか。

(どちらにせよ、柱は天秤座の武器がなければ破壊することはほぼ不可能……持ち運ばなきや)

と、白虎が聖衣箱に触れた時だった。

「ー、な、なんや、この地響きー！」

海底神殿全体を、いや、天地すら揺るがすぐらいの大きな地響きが鳴り響いていた。その地響きしたと同時に、小雨なようなものが白虎の頭上が降ってきていた。

「そ、そうか……柱が破壊されたせいで、振動が起こって、水位も下がっているんやな……」

白虎は「よいしょ」と、天秤座の聖衣箱を背負った。

「よし……」

(ここから一番近いのは……あっちにある柱か！)

白虎は破壊された北太平洋の柱を背にして、走り出した。自分と同じように海闘士と戦い、柱を壊そうとしている聖闘士のために。

38 : 「獣と凍気」

水鹿は、丁度北太平洋の柱が破壊されたところで目を覚ましていた。北太平洋の柱があるらしき方角から、地響きのような音が聞こえ、地鳴りもこちらまで到達していた。水鹿は地鳴りが収まれば、「よっ」と立ち上がって、辺りをキョロキョロと見渡した。

(こゝは一体どこなんだ……?)

水鹿はぼりぼりと頭を掻き、困ったように首を傾げた。確かラティエルが海鬪士に拘束されたところまでは覚えているのだが、その後が全然である。先にラティエルを助けねばならないのだが、ここがどこなのか分からない以上、下手に動くわけにもいかず、ただ、ここで呆然と立ち尽くしているのみだった。

そんな中で、ふと、目についたのは、天井に届くぐらいの巨大な柱だった。水鹿はその柱を見上げた。

(こゝなとこゝろにこゝなでつかい柱があつたんだなあ……)

海底神殿というからには、もう少しばかり小規模なものかと思っていたが、思いのほか、わりとそうでもないようだ。水鹿は、柱を一望した後、柱を背にしてそこから立ち去ろうとした。ここからは一本道しかないし、それを辿って行けば、皆に会える可能性

があるかもしれない、と思ったからだ。

しかし、その道は阻まれた。

「……………」

(女性……………?)

そう、それは儂くも美しい女性であった。美しく澄んでいるウエービーがかつた金色の髪の毛に、白いシルクのワンピース。誰もが一度は思う美女像そのままだ。女性はただ、そこに座って、水鹿のことを見つめていた。相手は誰が見ても非常に美しい美女。だが、水鹿はその女性の姿にどことなく違和感を覚えていた。聖闘士のカンというものが、それとも、状況の不自然さがそれを感じさせているのだろうか。とにもかくにも、水鹿は目の前にいる女性をただの美女だとは思ってはいなかった。更に、美女の辺りにはこちらに対して決して好意的とは思えない小宇宙が漂っていた。好意的でないどころか、攻撃的なようにも伺え、こちらが何か仕掛けたらすぐに反撃してきそうだ。しかし、あくまでその小宇宙は美女の「周り」からであり、美女自身の小宇宙ではない。つまり、この場には他に誰かがいるということになる。では、その誰かは一体どこにいたのであろうか。水鹿は目を光らせて、キョロキョロと辺りを歩きながら見渡し始めた。絶対にどこかに自分たち以外の誰かがいる。

ふと気が付けば、水鹿の足が何かに囚われているかのように動かなくなっていた。水

鹿はそのことを察知すれば、すぐに足元を見た。

「… なっ！ こ、これは、獣!？」

水鹿の足に絡みついていたのは、二、三匹の獣だった。水鹿はすぐに足を振り、その獣たちを払おうとするものの、払うことはもちろん、足を動かすことさえままならなかった。

「い、一体どこから……ああっ！」

水鹿が獣の出処を追えば、ひどく驚いた様子でその先を見つめていた。水鹿が先ほど見ていた美女は、顔つきを跡形もなく豹変させ、獣たちを操っていた。その獣は水鹿にまわりついていったもの以外にもおり、しかも、その獣たちは、「美女の腹部」からその姿を生やしていた。水鹿は「ぐっ」と歯を噛み軋めてから、拳を握った。

「このままでは動くことすらままならん。だから、そこをどいてもらおうぞ！ ダイヤモンドダスト——ツ!!」

水鹿の突き出した拳から、氷の屑がキラキラと輝きを放って放出された。その氷の屑たちは女性の方へ一直線に向かいながら、その辺りを凍気で凍らせた。

女性は水鹿のダイヤモンドダストを受けると、徐々にその存在を掻き消していき、最終的には跡形もなく消え去ったのだった。もちろん、女性が消えたことにより、水鹿にまわりついていた獣たちも消えており、ダイヤモンドダストを放った後、水鹿はその

ことを確認した。

「ただの幻影だったか……通りで不自然だと思っただよ……」

水鹿は、「ふう」と一息つきながら、頬に伝う汗を拭った。それから、辺りを見渡し、先ほど、女性の周りから感じた攻撃的な小宇宙の出処を探った。

(ここにしているとしたら、きっと海闘士だろうな……それも相当やり手の)

ふと、水鹿は先ほどから感じている小宇宙が大きくなっていることに気が付いた。

(この小宇宙……)

「白銀聖闘士か。相手に不足はなし、と」

水鹿が思い終えないうちに、その小宇宙は姿を現した。特徴的なオレンジの鎧をまとった青年——やはり海闘士であった。水鹿はその姿を見るなり、スツとその姿を睨みつけた。

「貴様、何者だ？」

「私はスキュラのクレタ。南太平洋の柱を守る海將軍の一人」

クレタと名乗った海闘士は、マントをそこに翻しながら、両腕を組み、仁王立ちでそこに立っていた。水鹿はスキュラと聞いて、何かピンときたのか、思い出したように呟いた。

「スキュラ……確かギリシャ神話ではその美しい容姿でありながら、下半身を六匹の獣

にされたという……」

「そうだ。先ほどの美女はその幻影でもある。まさか、あんなあっさり打ち破られるとは思ってもみなかったが」

クレタは途端に厳しい目付きで水鹿を見つめるようになる。

「まあ、あの程度でやられるのも面白くないというもの。お前は私の手で直々になぶり殺してやろう」

「やってみるがいい。まあ、なぶり殺す前にお前の体の方が凍ってるかもしれないがな」
「フツ、上等だ」

白銀聖闘士と海闘士が対峙した。水鹿は手の中に凍気を貯め、クレタは攻撃体制に入っていた。水鹿はスツと相手に焦点を合わせて、拳を放つ。

「ダイヤモンドダスト——ツ！」

水鹿の拳から、氷の屑が輝きを放ちながら、クレタの方へと襲いかかる。しかし、クレタは特に怖じけつく様子もなく、むしろ鼻で笑った。

「はっ、この程度、痛くも痒くも何ともないわ！　くらえ、イーグルクラッチッ！」
「なっ、なにいつ……！　ぐっ！」

クレタが放ったのは、鷲に見立てた鋭い暴風だった。鷲は水鹿のダイヤモンドダストをことごとく打ち破っていった。

「ッー！」

鷲は水鹿のダイヤモンドダストを打ち破れば、水鹿をその爪で襲った。水鹿は「くっつ！」と息と歯で声を発して、氷の鎖を作った。

「ダイヤモンドチエーン！」

氷の鎖は鷲の足や体全体に掴みかかり、その動きを封じた。だが、ギリギリ水鹿の顔にたどり着いていたらしく、水鹿の整った顔に一筋の擦り傷が走った。鷲がダイヤモンドチエーンの中で空気と化していく中で、クレタは「ほう」と意外そうな瞳で水鹿を見つめた。

「イーグルクラッチを受けて擦り傷一つで済むとはな」

「……」

「私の読み筋通り、なかなかのやり手なようだが、次はどうかかな？」

クレタはフツと笑みを浮かべながら、水鹿に向けて技を放つ。

「ウルフズファング！」

「くっつ、次は狼か！」

一匹の狼が水鹿に襲いかかった。水鹿は己の身を低くして、一旦は狼の牙から避けることに成功したものの、狼はその水鹿の低姿勢を見逃していないのか、すぐに水鹿の方へとその足を向けた。

「…………つとー！」

水鹿は聖衣の手首から手の甲にかけてついている、小さな盾で、狼からの牙のダメージを最小限にした。狼の牙が、メキメキと盾を割り切る勢いで、めり込んでいく。

「ぐうっ……………」

「…………しづとい奴め。本来ならば重傷ものの技を軽傷にするなど、面白いが、気に食わぬ奴よ。だが、次こそはお前を倒す針となろう……………」

そうして狼からの攻撃が途絶えると、更なる野獣からの咆哮が水鹿に向けられた。

「クイーンビーズステインガーッ！」

「今度は蜂か！　だがっ……………！　はあっ！」

水鹿の指から氷の輪が放たれた。その氷の輪は、己に向かって襲ってくる蜂の体にとわりつき、最終的には蜂を掻き消した。

クレタは「ちっ」と舌打ちをして、水鹿の方を強く睨みつけた。

「私の攻撃をこんなに受けない奴は初めてだ。しかし、今度こそ無事でいられるか……………」
「むっ、う…………？」

今度は、水鹿の体の周りがおかしくなった。空気やその気圧が、水鹿の体を押しつぶしているようだ。いずれ、その圧力は姿を表す。

「…………蛇!？」

そう、水鹿の体を苦しめていたのは一匹の大蛇であった。水鹿がもがけばもがくほどに、その締め付ける力はだんだんと増していく。その度に、水鹿はその圧力に苦しまれた。クレタはニイツと不気味な笑みを浮かべながら、水鹿に向かって宣言した。

「どうだ、私のサーパントストラングラーは！ この勢いで、貴様の血もこちらがいただこう！」

「なっ……！ ぐうっ！」

水鹿の体は一気に締め付けられた。それから、大量のコウモリが水鹿の頭上へと舞い降りた。

「バンパイアインヘイル——ッ！」

水鹿の首筋に数匹のコウモリが噛み付いた。

「がアッ！」

その痛みから、水鹿は声を上げて、苦痛に顔を歪ませた。コウモリたちは水鹿の血を吸い、そのお腹を満たしているようだった。

「どうだ……血を吸われる感覚は……」

「ぐっ、うう……」

(このままでは、本当に身体中の血が吸い取られてなくなってしまう……！)

まず、コウモリたちを追い払うためには、この大蛇の縛りから解放される必要がある。

水鹿は血を吸われ、だんだん意識が朦朧としていく中で、全身から凍気を放ち始めた。(成功するか分からないが……やらないより他はない！)

水鹿の小宇宙が一気に燃え上がった。クレタはその水鹿の様子に何かを感じ取ったのか、まずいといった様子で、大蛇の方に己の小宇宙を集中させた。大蛇はクレタの小宇宙を受け取ると、ググツと更に水鹿を締め上げた。

「ええい、こざかしい！ 大蛇の縛りから脱出しようなどと無駄なことをするな！」
「無駄かどうかはやってみなければ分からないだろう！」

水鹿の小宇宙はどこまで燃え上がるのか、といった様子だった。クレタはギイツと歯を噛み締めて、全身から小宇宙を湧き上がらせた。水鹿は小宇宙を高めながら、クレタのその様子を警戒していた。クレタはハツと笑みを浮かべて、拳を構えた。

「ならば、先にこれを受けてからにしてみろ！ グリズリースラップツツ！」

巨大な熊の一撃が、水鹿の元へとその拳風を撒き散らした。だが、水鹿は自分の方にそれが当たる前に、己の小宇宙を一気に爆発させていた。

「はあああああああ——ツツ！」

大蛇が、コウモリが、またもやこちらに向かつてくる熊の拳が、水鹿の全身から湧き出る凍気によって凍っていく。クレタは目を見開き、非常に驚いた様子でそれを見つめていた。

「な、なん、だと……」

（凍気だけで全てを吹き飛ばしたのだと!?!）

非常に有り得ぬ話であった。というよりも、こんなことをする余裕がある者は、余程の実力者でない限りはないはずだ。それこそ黄金聖闘士のような力を持っている者ではなければ。

（——まさか!）

クレタが「とあること」に気付いていた間にも、水鹿は大蛇の縛りから見事に脱出してみせて、そこに立っていた。その表情は、血を吸われた直後で、まさに疲れ切つてはいたものの、まだまだやれる、といったものだった。クレタは脂汗を額に垂らしながら、恐る恐ると水鹿の方へ言を発した。

「白銀聖闘士には何年か周期でかなりの実力者が出てくると言われている……まさか、貴様は……」

「……フツ、その言葉も聞き飽きたな」

クレタの読みに対し、水鹿は本当に呆れた様子で笑みを浮かべた。それから、ザツと足を一步前に出して、クレタの方をジツと見据えた。

「実力者だろうが何だろうが、オレはオレだ。白銀聖闘士なのに黄金聖闘士を凌駕する実力とか、白銀聖闘士の中では一番秀才とか……気にしてはいないけど、いちいち口す

るなどと思う。それがオレなんだから、本人が一番分かっているんだから」
「贅沢な口を……」

「オレが言いたいのは、口で言うよりも、拳で語るのが一番早いってことだ！」

水鹿はクレタに向かって直接拳を突き出した。クレタはその俊敏さに一瞬追い付かなかつたものの、何とかしてその拳を己の手のひらで抑えた。プルプルと、お互いのぶつけ合った拳と手が震える。

クレタは水鹿の拳を手のひらで抑えながら、体の方も力を入れていた。このままでは、水鹿のこの拳だけで吹き飛ばされること必至なのだ。

「そういえば、さつきから防御ばかりでお前の方に直接傷一つも付けていないな」
「……！」

「やられっぱなしというのは聖闘士として恥というものだからな。少しばかり、痛い目にあつてもらおうか」

水鹿はクレタから離れ、先ほど大蛇たちを追い払った要領で小宇宙を燃やし始めた。クレタの方も、それに合わせんとばかりに小宇宙を燃やし始めた。

「むしろ、貴様を吹き飛ばしてやろう！ このトルネードでなアッ！」

「ああっ！ 上等だアッ！」

二人の小宇宙が今一度、ぶつかり合う。

「氷槍、百蓮華エエエエ——ツツ!!!」

「ビッグ、トルネードオオオオオオツツ!!!」

無数にもなる氷の槍と、激しい気流がお互いの中間地点でくすぶった。氷の槍がその気流によって砕けているのか、氷があられるように二人の頭上に降り散っていた。

「ぐっ……五分五分といったところか!」

「一瞬でも手を抜けば……あつという間にやられる……!」

お互い、一歩も譲れぬものだった。どちらかが手を抜けばあつという間に押され、また、どちらかがどちらかの力を上回ることができなければ、しばらくはこの状態のまま、固まる。聖闘士でいう、言わば「千日戦争」状態である。

「むう……力の大きさに耐えきれず、体が後退している……!」

「こ、このままでは……!」

じりじり、と双方の足が後退し始めていた。双方の力を受けてか、己の放出している力が大きすぎるのかは定かではないが、その大きさに耐え切れなくなっているのは確かだった。

「くっ、こんなところで聖闘士なんぞに負けてたまるかッ!」

「それはこっちの台詞だッ!」

互いに負けまいと、向ける力を一気に大きくしていった。だが、大きくなればなるほ

ど、この状態は更に加速し、悪化していく。

「そろそろ負けをつ、認めろオツ……!」

「断るツ……! アテナのためにも、ここで負ける訳には……——ツ!」

水鹿の目の前にあつたのは、鷲、狼、蜂、蛇、コウモリ、熊の六匹の野獣の姿だった。それら六匹の野獣たちは、水鹿に向かってその牙を向けて襲いかかる。

「なっ、あつ! しまつ……ぐああああ——ツツ!!」

水鹿はそれに驚いて、思わず攻撃する手を緩めてしまい、気が付けば相手のストリームに吹き飛ばされていた。水鹿は後ろにあつた柱まで吹き飛ばされると、それに追突して、そのまま地面へと墜落した。

クレタは「ふん」と水鹿をあざ笑うように笑みを浮かべた。

「幻影を見せ、油断させるぐらいならお手の物だ」

「このヤロツ……!」

「おっと、卑怯だと言わないでくれよ。むしろ感謝してほしいものだ。私が幻影を見せなかつたら、双方とも確実に消えていたのだからな」

「っ……」

確かにクレタの言う通りだった。このまま続けていれば、その身を蒸発させてここから消滅していたかもしれない。ゆえに、水鹿は押し黙るしかなかった。クレタは鱗衣の

ヒールを鳴らしながら、水鹿の方へと数歩歩み寄った。

「私はどちらかが勝たず負けずというのは嫌なのでね。特にお前のような奴とは、しっかり決着をつけたいものだ」

「ああ……オレもお前とはしっかり決着をつけたいね」

水鹿の方もクレタの方を見つめて数歩歩み寄った。クレタはフツと笑みだけ浮かべてから、再び小宇宙をその手に貯めた。

（双方の力はほぼ同等ゆえに、小宇宙を高める必要がある。だから……）

（この戦い、先にどちらかが小宇宙を上回った者勝ち。ならば……）

「小宇宙を燃やすしかない！」

二人の声が南太平洋の柱の目の前で響き上がった。そして、双方の小宇宙が再び燃え上がった。もはや柱そのものさえ包んでしまいそうな小宇宙。そのぐらい、二人の小宇宙は大きかったのだ。

「いつけえええええ——ッ！ 氷槍百蓮華エエエエ——ッ！」

「させるかアツ！ ビッグトルネエエエードオオオオオツ！」

二人が技を放った瞬間、それらは激しく衝突し、先ほどのように技の主である二人を千日戦争の舞台へと引き摺り下ろした。

「また先ほどと同じようになっ……！」

「だが、今度こそは勝つッ！」

数え切れないほどの氷槍と、大規模なトルネードが両者譲らぬ勢いで、その威力を増していった。黄金聖闘士並の実力を持った者同士の戦い方としては当たり前の光景でもある。

「ぐっ、ううっ……！」

(さすが海將軍……言われているとおり、黄金聖闘士に匹敵するともたらない……だが……だがッ！)

水鹿はクレタを睨みつけるように、キツと目を鋭くして見た。

(オレには、黄金聖闘士の意志を受け継いだものがあるッ！)

「はあああああ——ツツ!!!」

水鹿の小宇宙が先ほど以上に燃え上がり、爆発し始めた。クレタはその水鹿の様子を見ながら、驚きつつも、しかし負けないであろうという確信がどこかにあった。

(フッ、あちらが小宇宙を燃やしたところで、こちらが負けるはず………なっ!!)

どこかにあった、のだが、今の光景を見てからは、そんな自信もどこかへ吹き飛んでいった。クレタはその水鹿の姿をただ、目を見開いて見つめていた。

(これは……)

「聖衣が、黄金に輝いているだとオッ!?」

そう、水鹿の聖衣は、黄金に輝きを放っていた。いや、それだけではなかった。クレタの力をわずかながらに凌駕していたのだ。クレタのビッグトルネードが、水鹿の氷槍百蓮華に押され始めていた。

「！ そんな！」

水鹿は驚愕しているクレタの目の前で、ニツと年相応の少年らしい笑みを浮かべた。

「オレの聖衣には、牡羊座の玄夢の血——いわば、黄金聖闘士の血が流れているんだ！」
「黄金聖闘士の血!?!」では、その血のお陰でお前の聖衣は……！」

「ああ！ そういうことだアツ！」

水鹿の氷槍たちが一つの砲弾のように、そこから一気にクレタのトルネードを引き裂いていった。——百蓮華からの、砲刃だ。

「くっ、くそオツ！ 出でよ、六獣たちよ！」

クレタはトルネードを引き裂かれ、焦りを感じたのか、今一度六獣たちをここに出した。これで水鹿が気を抜けば、こちらに勝機が回ってくる——はずもなかった。

六獣たちは、クレタの手から飛び出た途端、水鹿の氷槍によつて、その姿を引き裂かれ、空気と同化していった。何もかも打ち破られたクレタは、目と口を開き、ただ、氷槍がトルネードを完全を引き裂き、こちらへ襲ってくるのをただ待っしかなかった。

そうして、クレタは氷槍を真正面から受けて、吹き飛んだ。クレタは水鹿の方を睨み

付けるように見ながら、その姿を確認していた。

(まるで悪魔に魅入られたかのような小宇宙を持っている男だ……！)

一方の水鹿は力と体力を一気に使い果たした疲れからか、「はーっ、はーっ」と息を荒げ、肩をガクツと下ろした。それから、吹き飛ばされたクレタの方を見つめ、そちらへと歩み寄った。クレタは、見事に地面に落下しており、今にも事切れそうな様子で、必死に息をしながら、辛うじて生き延びていた。しかし、遅かれ早かれすぐにその息が切れるのは確実なものであった。水鹿がこのままここに居残つても仕方ないと思い、クレタの方へと背を向けた、その時だった。

「水鹿アーツー！」

「……び、白虎?！」

水鹿の目の前へと走ってきた姿——白虎のものだった。白虎は背中に黄金聖衣が入っているであろう黄金の聖衣箱をその背に負いながら、水鹿の元まで走ってきた。水鹿は聖衣箱を背負っている白虎を見て、非常に驚いていた。そして、白虎の背中にあるものを指差して、質問した。

「び、白虎、背中のはそれはどうしたんだ?！」

だが、質問されたところで、白虎はそれに問おうとはせず、むしろスルーしていた。水鹿は質問をスルーされて、目線を白虎から外して、わしやわしやと自分の髪の毛を片手

で掻きむしった。白虎は水鹿と柱を交互に見つめて、それから水鹿に聞いた。

「……あの柱、まだ壊そうとしてない？」

「えっ？」

水鹿は白虎に言われて、柱の方へと視線を向けた。そういえば、クレタはこの柱を守護するためにここにいらっしゃるらしいことを先ほど聞いたような気がした。だが、何故白虎が柱について突っ込んだというのか。水鹿は白虎を不思議そうな目で背中の聖衣箱と白虎の顔を交互に見つめていた。

白虎は「ふう」と息を付きながら、聖衣箱を地へと下ろし、その蓋を開いた。開いたところに現れたのは、天秤座の聖衣だった。

「天秤座の聖衣……？ 何故……って、うわっ！」

天秤座の聖衣の一部が、水鹿の手元へとやってきた。水鹿は突然のことに思わず目を瞑りながらも、それを受け止めて、おそろおそろその姿を確認した。黄金に輝いた、ヌンチャク——天秤座の、双節棍だ。試しに振り回してみれば、その一つ一つの動きが星のような輝きを放っていた。

「……これで何をしろと……」

「壊して」

「おっ。」

「あの柱を、天秤座の武器で壊すんや」

白虎が指差した柱——例の巨大な柱だ。水鹿はその柱と手元にある天秤座の双節棍を交互に見ながら、「いやいや」と首を振った。

「ちよつと訳を説明してくれ！　そもそも何であのや柱を壊す必要が——……」

「いいから！　早く！」

「わ、分かった！」

もはや説明する暇もないほど自分たちは迫られているのだろう。白虎の態度でそれを確信した。

水鹿はすぐに柱の目の前まで駆け走り、双節棍をグツと構えた。天秤座の武器は星も砕くと言われているぐらいの破壊力——この柱、それほど強固だということか。

「っし……」

水鹿は双節棍の先の方を柱へと向けた。そして、狙いを定めるために目を細めた。

（老師、使わせていただきます！）

「だアツ！」

水鹿は双節棍を柱の方へと強く打ち付けるように振り回した。柱の硬さもあいまつてか、その反動も予想以上のものであり、水鹿の体が若干後退した。そして、双節棍のうち、振り回した方の先をパシッと掴み、その威力も実感していた。水鹿と白虎は脂汗

を額に一滴垂らしながら、柱の様子をジツと見つめていた。それから数秒も経たないうちに、柱の一部にピシツと軽くヒビが走った。

「！」

ヒビが入ってからはとても早く、その小さなヒビからピシツピシツと、柱全体へと広まっていった。それから、柱はそこから一気に粉となり、砕け散った。

「やったあ！ 二本目の柱を壊すことができた！」

白虎は水鹿の横でガツツポーズを決めて、その喜びを体で表した。一方の水鹿はポカン、と口を開いたまま、柱が粉碎されていく様子を見ていた。

そして、この柱を守護していたクレタは柱が粉碎されていく様子を見ながら、フツと笑みを浮かべ、そこで眠りについた。

柱が粉碎されたあとは、白虎の時と同じように大きな地鳴りとパラパラとした小雨、それから、天井である海面が数メートル程度こちらへ近づき、低くなった。水鹿は何が起こったのか分からない様子だったが、二回目の白虎は非常に落ち着いた様子で、天秤座の聖衣箱を再び背負い、壊れた柱を背にした。

「じゃあ、水鹿、行こうか」

「えっ、い、行くって？」

白虎は何も知らない水鹿に対して、呆れたようにため息をついた。海將軍を倒したの

は確認できるものの、その海將軍からは何も聞かされていないのだろう。白虎は壊れた柱の方へを視線を向けてから、説明を始めた。

「この海底神殿には、七つの柱がある。地上で起こっている水害を止めるためには、最初にその七つの柱を壊す必要がある。だから、地上を守りたければ——……」

「早く壊すしかない、ということか」

「……そうやね」

察しが良い水鹿に対して、白虎は八重歯を見せるようにニツと笑みを浮かべた。それから、白虎と水鹿なお互いの拳をコツン、と当てて、コクンと首を縦に振った。そして、他の柱へと続くであろう道へと視線を向けた。

「他の柱に圭熊と翔馬はいる。水鹿とわいがいたのだから、きつと……」

白虎はスツと目を閉じて、二人の小宇宙を感じ取ろうとしていた。水鹿も白虎のように二人の小宇宙を感じ取ろうと目を瞑った。そして、感じ取った二人は、目を開いて、お互い同じ方向を向いていた。

「……水鹿」

「……ああ」

二人は最後に確認するかのようになり、お互い首を縦に振ってから、その場から駆け出した。

——残る柱は、あと、五つ。
白虎と水鹿は、他の柱に仲間がいることを信じて、次の柱へと向かっていた。

39：「氷上での戦い」

水鹿が目覚めたのと同時刻ぐらいに、翔馬も目を覚ましていた。翔馬は遠くの方から聞こえてくる地鳴りを聞き、上半身を起こしながら、気絶していたその頭で、今までの出来事を振り返っていた。

（えつと……確か俺は白虎たちと一緒に海底神殿にきて、それからアテナが……——ッ！）

翔馬は全てを思い出した途端、即座に立ち上がった。そうだ、アテナが海闘士によって連行されていったのだ。自分のことよりもアテナが第一な翔馬。こんなところでジツとしていられるはずもなく、真つ直ぐ伸びている道の方へと駆け出した。何故自分が気絶し、こんなところにいるのか、まったくもって訳が分からなかった。少なくとも、ここにいるのは自分の意思ではないことは確かなのだが。

しばらくその一本道を走り続けると、ふと、光を反射し、キラキラと輝きを放っている透明の何かが、翔馬の目に入ってきた。

（？　な、なんだろう……？）

翔馬は最初は自分の目を疑って、ゴシゴシとその目を擦った。それから再び目の前を

見た。だが、やはり幻覚ではないらしく、目を擦ったところで、その透明な何かは消えるわけではなかった。

翔馬はどうしても気になって仕方ないのか、小走りでそこまで駆け寄り、ジツと見つめた。それから、そつと、その何かに触れた。

(……！ つ、冷たつ……！)

あまりにも冷たすぎて、触れた途端、すぐにその何かから手を離した。それから、ひんやりと冷たくなつた片手を、もう片方の手で温めるようにギュツと握つた。

「まさか、これは氷……？ でも、何でこんなところに……？」

翔馬は不思議そうな顔をしながら、指先で、ちよん、と目の前の氷の壁に触れた。指先で触れただけでも、その冷たさは十二分に翔馬の方へと伝わつた。

そして、ふと、頭上を見上げた。この壁がどこまであるのか、気になつただけなのである。気になつただけなのだ——。

「！」

翔馬の目に飛び込んできたものは、この壁の天辺だけではなかった。あまりに高すぎて、ぼやけて見えてしまうものの、特徴的なオレンジ色の鎧——その姿、まさしく、海闘士だった。

その海闘士は翔馬の姿をずっと見ていたらしく、翔馬がこちらに気が付くなり、己が

腰掛けていた氷の壁の天辺から飛び降りた。海闘士は足を地につけると、翔馬の方へとその顔を向けた。翔馬は警戒の構えを見せながら、相手の顔をジツと見つめた。

「貴様……海闘士か」

「——ええ」

翔馬の問いに、海闘士はコクンと頷いて答える。

「私は北氷洋の柱を守護している、海魔人クラーケンのエルヴァルと申します。以後、お見知り置きを」

海魔人クラーケンのエルヴァルと名乗った海闘士は胸に手を当てて、ペこり、と丁寧にお辞儀をした。翔馬は、敵を目の前にしているとは思えないあまりにも丁寧な相手の対応に、拍子抜けしてから、グツと視線を強くした。

エルヴァルは「おや」と警戒しているであろう翔馬を見ながら、顎に手を当て、フツと笑みをその顔に浮かべた。

「随分と警戒なさられているようで。まあ、聖闘士である以上、海闘士に警戒するのは必然的なものではないでしょうか……」

「柱を守護している海將軍なのが、なおさらそれを促進させているよ」

「そうですか」

エルヴァルは目を細くして、翔馬を訝しげに見つめた。

「にしても、何の解説もなしに海將軍のことをその口から出せるとは。ちよつと予想外でした」

意外そうに、そして呶くように言ったエルヴァルに、翔馬は腕を組み、「フン」と少しばかり誇らしげな笑みを浮かべた。

「元々、ポセイドンとその闘士たちについてのことは心得ている。無論、あの柱を壊すことで地上を救えることができることも、知っている」

「そうですか。ならば話は早い」

エルヴァルは右耳にかけている片眼鏡を人差し指でクイツと上げながら、翔馬に一步近づいた。

「私と貴方、早速戦いましょう」

「ああ、もちろんだ」

翔馬はコクンと頷き、右拳を左手のひらに、パシツとあてた。

エルヴァルと翔馬は互いの目の前に立ち、対峙し、数秒間睨み合ったあと、先にエルヴァルがその手から氷を放って、翔馬に攻撃を仕掛けた。翔馬はすぐにジャンプして、上へと避けた。

(やはり凍気使いか！)

先ほどの凍てつくような氷の壁から察したとおり、エルヴァルは水鹿と同じ凍気使

い。エルヴァルは感心したように声を発した。

「さすが天馬星座……素早さだけならば確実なもの。ですが……」

エルヴァルは指と指の隙間に、凍気を溜め込み始めた。翔馬は地面に足をつけ、少し遠いところからエルヴァルを見つめる。エルヴァルはニコツと優しく笑みを浮かべながら、構えた。

「こちらも飛び道具を作ることは可能ですので、対等な条件下と言えましょう」

「なっ！」

エルヴァルが指の間に凍気を溜めていたのは——その飛び道具の生成だったのだ。エルヴァルはその生成が済むと、走り出して、氷のクナイを翔馬の方へと投げた。

「くっ！」

翔馬はバク転やジャンプをしながら、自分に向かって飛んでくる氷のクナイたちを避けた。しかし、クナイ自体はいくらでも生成可能なようで、いくら避けても避けようがなかった。

「避けてるだけでは私を倒せませんよ」

エルヴァルは優しい笑みを浮かべたまま、そんなことを翔馬に言ってくる。翔馬は歯をギリツと軋ませながら、エルヴァルの方を見つめた。エルヴァルは「ううん」と口への字に曲げながら、翔馬にクナイを投げ続ける。

「しかし、なかなか素早いですね……青銅聖闘士だからと、少し侮っていました」

エルヴアルはクナイを投げ止めるのを止める。翔馬は「はー、はー」と息を切らしながら、何をするんだ、とエルヴアルの方へ視線を向けた。エルヴアルは生成したクナイを地面に捨てるように落とせば、手のひらに凍気を貯め始めた。

「少し手荒いですが……はあっ！」

そう言うと、エルヴアルは凍気を貯めた手を地面にあてて、そこから氷を広がらせた。

「！ 地面が！」

エルヴアルの手によって、デコボコとした地面は真つ平らとなり、つるつるとした氷の床へと変貌を遂げて行った。翔馬は足場注意状態の床をグツと力いっぱい踏みしめた。少しでも動いてしまえば、あつという間に足を滑らせて、動きを封じられてしまう。そのぐらいに、氷の床は翔馬にとっては天敵と言えよう。

エルヴアルは氷の床に足をつき、そこから足を勢い良く滑らせた。

「さあ、これでやつと面白くなりますよ」

「っ！」

エルヴアルは凍気をまとった拳を翔馬に向けて放った。翔馬は何とか避けようとするも、床が凍りつき、思うように動くことができない。間一髪のところの上へと跳ねようとしたが、足元が滑り、跳ねることはできず。そして、エルヴアルの拳をその腹で受

け止めた。

「ぐあつ、はアツ！」

普通なら吹き飛ぶところのはずだが、地面の張りがそれを許すわけもなく、翔馬は勢い良く体ごと地面を滑った。翔馬は起き上がろうにも、この地面では滑って転ぶだけであり、起き上がる気すらままならなかった。

相変わらずエルヴアルはニコニコと微笑みながら、翔馬の様子を見ている。翔馬はそのエルヴアルの笑みがどうしても不快にしか思えなかった。明らかに、こちらを真剣な敵として見てはいない。

一方、エルヴアルは氷上でも、普通にその足を歩かせた。翔馬は怪訝そうに、平気で歩いているエルヴアルを見つめていた。

「私め、極寒の地で育ったものでね。こういうところで歩くのは慣れているのです」
「……そうか」

翔馬はどうにかして、ゆっくりと立ち上がっていた。この床ごと氷を破壊すればどうにかなりそうだが、そんなことをしているうちはこの戦いには勝てないだろう。

（この氷、壊そうとしたところでビクともしないのも確かだ。きっと、絶対零度に近い凍気で作られている）

そう、この氷の床、絶対ただでは割れないと確信できるほどの冷たさと、その固さを

感じることができなのだ。先ほどエルヴァルが滑ったところは、本来であれば摩擦によつて削れているはずが、そんなことを微塵も感じさせないぐらい平らで綺麗な氷である。

(とりあえず、手当たり次第滑るしかないか……)

確かな移動手段は、現時点ではそれしかない。そう確信した翔馬は、近くにあつた柱に手を伝わせながら、そつと前に進み始めた。生憎、翔馬にはアイススケートの経験がない。これで上手くいくかどうかは定かではないが――。

「やるしか、ないっ……!」

翔馬は感覚が掴めてきたところで、一気に駆け出し始めた。最初は姿勢が悪い状態から始まったが、少し走つた程度でも、綺麗な姿勢へと変わつていた。

「はあっ!」

翔馬は相手の足に向かってスライディングキックを決めようと、姿勢を低くして滑り込んだ。エルヴァルはそれを見事に足でしっかり受け止めた。

「っ!」

「流石、聖闘士。周りより十分鍛錬を重ね、筋肉を鍛えているだけはある。しかし――
……」

エルヴァルは翔馬を一瞬だけ見据えてから、翔馬の足をそのまま蹴り上げた。翔馬は

そこから一旦吹き飛ばされかけてから、バク転をして何とか姿勢を保った——はずが、ここは氷上。簡単に姿勢を取れるはずがなく、すぐに滑ってしまった。

「くっ……！」

思うように立つことも姿勢を取ることもしない氷上で、翔馬はギイツと歯を軋ませた。

「こんなところで、引き下がってられる、かアッ！」

そして、再び駆け出した。エルヴァルは呆れたようにため息をつきながら、クナイをその手から生成した。

「少し凍りつきなさい」

そう呟いてから、エルヴァルはクナイを翔馬の足元へと投げ始めた。

「わっ、と……！」

翔馬は滑りそうになりながらも、その投げ付けられるクナイを懸命に避けた。だが、エルヴァルは何かを読み取ったように翔馬の足元へとクナイを投げ続けた。

「な、何のつもり、だっ、と！ この程度で足止めになると思っ、た、ら！ 大間違……い……！」

そこまで言い終えて、翔馬は足元に違和感を覚えた。だんだんと動きにキレがなくなってきた気があるのだ。

（一体どういふことだ……？）

翔馬は、今まで避けることに必死で注意がいかなかった足元へと目線を向けた。

「——！」

足が、爪先からピシピシと音を立てながら氷に覆われていくではないか。しかも、それだけではなく、

「……っ、震えが」

翔馬の体温にも影響し始めていた。聖衣越しで、しかも己を覆っている氷は微量だというのに、こうして体温を奪われるとは、本当にエルヴアルは油断も隙も無い。エルヴアルは暖かい笑みを浮かべながら、翔馬の方へと視線を向けた。

「どうでしょうか、私のハイポサミア・ダイヤモンドは。どんどん相手の体温を奪い、死に至らせるという、慈悲深く、そして残酷な技」

「ぐうっ……」

「勿論、この技を受けた以上、どれだけ足掻いても無駄です。寧ろ体温が奪われるのが早くなるのみ。小宇宙を燃やすなど以ての外。それでも私を倒したいというのならば、ご勝手にどうぞ」

「——ああ、勝手にさせてもらおうか」

翔馬は徐々に体温を奪われていく感覚を味わいながら、スツと腰に拳を携えた。エル

ヴァルは若干目を細めて、翔馬のその様子を見ていた。

「まさか本当に勝手にされるとは思いませんでしたよ」

「聖闘士は大体諦めが悪い奴がなるものだからな。勝手にしちゃうのは仕方ないのさ」

翔馬はニコツツと笑みを浮かべてから、拳をエルヴァルの突き出した。その拳は幾多からなる流星のようにエルヴァルの方へと駆け抜けた。

「ペガサス、流星拳——ツツ!!!」

翔馬の十八番の技・ペガサス流星拳だ。だが、エルヴァルはこちらへ襲いかかる流星の威力を、その手で受け止め、何もかも無効にしていく。翔馬はそのことに関しては既に分かり切っていたことかのように、ただ、平然と流星を放ち続けた。

エルヴァルは呆れたように息をついた。

「こんなものを放ったところで、貴方に勝ち目など、ありません」

エルヴァルはそう言うのと、流星を受け止めている手から、猛吹雪を繰り出した。

「なっ、ぐうっ!」

ペガサス流星拳の威力がごとくこちらに返ってくる上に、その吹雪は翔馬の体を吹き飛ばすぐらいの勢いで、強く当たってきたのである。

(このままでは足元だけではなく、全身がつ……!)

翔馬がそんな危機を感じたところで、吹雪の勢いが一気に弱まり、消えて行った。翔

馬は「ハア、ハア」と息を荒げながら、吹雪によつて起こつた煙が完全に消えるのを待った。その間、その煙越しにだが、何か煌めきを放っているものがあることに、翔馬は気が付いた。

「！」

煙が完全に消えた後に、その姿は一気に明らかになつた。その正体は、エルヴァルが両手に小宇宙と凍気を貯めており、煌めいていたものだった。その凍気と小宇宙が尋常でない大きさになつてゐることに、見た瞬間気が付いたものの、足元を固められている翔馬には逃げることはおろか、避けることさえできない。

こちらにぶつけられる前にどうにかしなければ、と思つたのもつかの間、エルヴァルは両手に貯めていた小宇宙と凍気を合わせ、一つの塊にした。

「さあ、これでおしまいです」

エルヴァルはにこやかにそう言い放つと、翔馬に考えさせる隙を与えず、その塊を翔馬の方にぶつけた。

「オーロラ、ボレアリス」

その瞬間、翔馬の体が一気に極寒に包まれた。先ほどの吹雪の時もそうだったが、それ以上にこの技は相手を凍らす勢いものだ。顔を覆っている腕が早くも凍りついており、元から凍りついていた足も勢いづけて全身を凍らせてきた。

「くそっ……!」

「ふっ、悔しいですか？　ですが、こうなることは当たり前なのです。私——いえ、私たち海將軍は、黄金聖闘士と同程度の強さがある。青銅聖闘士ごときに簡単にやられるはずもないですよ。ほら」

そう言いながら、エルヴアルはオーロラボレアリスの威力をさらに強めた。

「があっ、ぐ、アッ!」

翔馬の足元で凍りつき支えていた氷も、オーロラボレアリスの猛吹雪に耐え切れなくなったのか、とうとう崩れた。そして、翔馬の体が天高く吹き飛んだ。

(く、く、く、く、く……!)

ふと、チラリとエルヴアルの方を見ると、エルヴアルはにこにここと笑みを浮かべた。ま、翔馬が吹き飛んでいるのを見つめていた。まるで、翔馬がこうしてやられていくのを楽しんでいるかのようにだった。

(くそっ!　俺はこのままやられゆくしかないのか……!)

——悔しい。悔しい。悔しい。

翔馬の心の中は、エルヴアルに何もできない自分に対する憎しみと哀れみで埋まっていた。しよせん自分などこの程度でいたのかと。青銅聖闘士は黄金聖闘士を超えることすら不可能なのかと。

「がつ、はあつ……！」

その天高く吹き飛んだ勢いのまま、翔馬の体は見事に頭から地面に落下し、そこから動かなくなった。

エルヴアルは落下した翔馬を少しだけ見た後、一息ついたかのように「ふう」と息を吐いて、そのまま後ろを振り返って、柱の方へと向かった。翔馬は完全にやられているものだと、この時ばかりはエルヴアルは思い込んでいた。——だが、その思い込みも、次の瞬間に崩れ去った。

（——っ！　なんだ、この小宇宙は！）

エルヴアルはすぐに辺りの異常に気が付き、バツと後ろを振り返った。そして、エルヴアルの目に映ったものは——今までの状況からして有り得ないものだった。

「——っ……！」

翔馬が、その水上に、立っていた。

己の限界など、もう何もかも割り切っている様子で、エルヴアル一点を見つめた。しかも、それだけではない。その水上が溶けるほどに翔馬の小宇宙は燃え上がっていた。そう、今まで、かつてないほどに。エルヴアルはその翔馬の様子を見て、何か化け物を見るような目つきになった。

「貴方……一体……！」

「……なあに、ただの、青銅聖闘士さ」

エルヴアルのその問いに、フツと笑みを浮かべて、そう答えた。だが、エルヴアルは腑に落ちない上に、相当驚いた様子で翔馬のこゝろを見つめたままだった。

(いや……青銅聖闘士どころか、絶対零度を溶かすほどまでの小宇宙なんて、黄金聖闘士でも出せるかどうか……いや、待て。まさか、この青銅聖闘士——……！)

エルヴアルは翔馬の全てを察したかのように、ハツと声を上げた。翔馬は未だに微笑みを浮かべたまま、床に張っている氷を小宇宙で溶かしながら歩き始めた。

「海闘士もなかなか察しが良い奴がいるものだな……。まあ……お前に察せられたところで、大した問題ではない。アイツら——白虎たちにバレなければそれでいい。その時が来るまでな」

「……貴方、一体何を企んでおられるのですか？」

「企み？」

翔馬は「ハツ」と鼻で笑った。

「そんなものはない。俺は——俺の今すべきことを、成そうとしている。ただ、それだけだ」

その瞬間、翔馬は目にも留まらぬ速さで、エルヴアルの背後につき、その背中を蹴り上げた。

「ぐうっ……いー」

エルヴアルは勢い良く飛ばされたものの、足を地面にスライドさせながら、姿勢を取り戻した。

（この聖闘士、今までとは別人のような強さを……——っ！）

エルヴアルは翔馬を見た瞬間、目を見開き、驚いた。

翔馬の青銅聖衣が、黄金色に輝きを放っていた。

エルヴアルの心臓がドクンと強く波打った。普通の青銅聖衣がこんな黄金色に、よもや、黄金聖衣のように輝くことは、通常ならば有り得ないこと。じゃあ、一体何故こうして、今、輝きを放っているのか。翔馬は一步前に出て、ポツポツと話し始めた。

「何故、俺がここまでされても平気なのか、教えてやろう……」

「ー」

「俺の聖衣は双子座のラピスの血、言わば黄金の血によって修復されたものだ。つまり、この聖衣には黄金聖闘士の小宇宙と意志が詰まっている……」

「黄金聖闘士の……？」

「そうだ。だから、お前の攻撃を受けてもこうして最小限の傷でいられるというわけだ」

「なるほど……」

——ならば、なおさら面白い。

エルヴアルは再び両手に小宇宙と凍気を貯め始めた。翔馬もそれに呼応するかのよう
うに、スツと体の横に拳を携えた。

「次でお終いにしてあげましょう！」

「それはこつちの台詞だ！」

お互いの小宇宙と、拳が、ぶつかつた。

「オーロラボレアリス——ツツ!!!」

「ハイエスト、アルティテュードオオツツ!!!」

エルヴアルからは氷が、翔馬からは電撃をまとつた拳が放たれる。エルヴアルは

「ハツ」と鼻で笑みを浮かべ、翔馬の技をあざ笑つた。

「そんな拳程度で、私に勝てるので、も——……ツ！」

翔馬の拳が、電撃が、エルヴアルのオーロラボレアリスの中を一直線に貫き、エルヴアルの方へと向かつた。

「な、なんだとオツ！」

「貫けエエエエエエエエ——ツツ!!!」

その電撃の拳はオーロラボレアリスの氷さえも自分の味方につけるように、その身に帯びて、エルヴアルを貫いた。エルヴアルは貫かれたところから血を噴出し吐き出しながら、その場に倒れた。

翔馬は「ハアハア」と息を立てながら、エルヴァルが倒れたのを確認した。あの攻撃を受けたエルヴァルが無事でいられるはずもない。よもや、こんなに大量の血を出しているのだ。

(すまないな……でも、これもアテナと地上のためだ。許せ)

翔馬は倒れているエルヴァルに向かって心の中から言い放つて、エルヴァルに背を向けた。そして、大きくそびえ立っている北氷洋の柱へと向かった。

(……本当に大きいな)

翔馬は柱を見上げながら、そこに自分の手を乗せて、その大きさを実感していた。この柱、天井である海面を貫き通そうとするぐらいの高さで、ここに立っている。確か、天井である海面を支えるためのものでもあったと、どこかで聞いたことがある。

翔馬は柱から一歩離れて、距離を取った。

(こんな巨大なものを壊せるかどうか定かではないが……よし)

翔馬は拳を握り締めて、キツと柱を睨みつけた。そして、飛び上がり、拳を柱へと向ける。

「ペガサス、彗星拳！」

流星が一つの塊になった彗星を柱へとぶつけた。翔馬は地へと足をつけて、柱の様子を見た。

「やったか……?」

だが、やはり、といったところか。柱は技の威力を受けることはおろか、ヒビ一つすら入っておらず、ビクともしていなかった。それどころか、自分のことを愚かそうに見下げていると言つても過言ではなかった。翔馬は悔しさからか、氷で覆われている地面を「ドンツ!」と拳で殴りつけた。

「一体どうすれば……!」

翔馬は、今、まさしく絶望の淵にその身を置いている気がした。彗星拳で壊すことができないれば、流星拳でも壊すことはできない。一体、自分にどうしろというのか。

と、顔を上げた時だった。

「翔馬——! 翔く——!」

翔馬後方から聞こえてくる聞き慣れた声。翔馬はパツと振り返って、その姿を確認した。

「……! 白虎! それに杯座!」

そう、そこにやってきたのは、翔馬がよく知っている二人組・白虎と水鹿だった。白虎は翔馬の姿を確認するなり、ブンブンと手を振りながら、そちらの方へ駆け寄つた——が。

「しようにく……どわっはあっ!」

「……」

白虎が翔馬の方へ駆け寄りうとした瞬間、派手にすつ転んだのである。翔馬は思わずそれに対して額に手を当てて、ため息をついた。そういえば、この辺り一面は氷で覆われていることを先に言うのを忘れた、と。白虎は「あいたた」と尻に抑えながら、地面を見つめた。

「すつげえー！ 北洋氷の前だけ凍ってるで！ ふざけんよ！ 危ないやないか！」

白虎は床に向かってギャーギャーと文句を言い付けた。こればかりは文句を言いたくなるのも翔馬も分からはなかつた。自分もこんな目に合ったら、白虎のように騒がなくとも、床を強く睨みつけるだろう。

一方で水鹿は、床に文句を言っている白虎を呆れたように見ながら、翔馬の方に歩み寄って、背負っていた黄金の聖衣箱を差し出した。翔馬はきよとん、と目をぱちくりさせて、水鹿の差し出したそれを指差した。

「……これは？」

「柱をぶち壊すための道具として、老師がこちらまで送ってくれたらしい。有り難く使えよ？」

「ということは、天秤座の聖衣か……！ なら、言われたとおり、有り難く使わせていただこう！」

翔馬は微笑みながらコクンと頷き、水鹿から聖衣箱を受け取ってから、地面にそれを置いて、箱の蓋を開けた。そこに現れたのは、天秤座の聖衣のオブジェだった。そして、オブジェは何かを読み取ったように、翔馬の手元へ向かってオブジェの一部を飛ばした。翔馬は驚きながらもそれを受け取った。

「三節棍……トリプルロッドか……」

手元の武器と柱を交互に見つめてから、翔馬は柱の目の前に立ち、態勢を取った。

「老師——使わせていただきます」

翔馬はその一言だけ小さく言い放って、スツとトリプルロッドを両手で伸ばし、狙いを定めた。

（星を砕くほどの威力がある天秤座の武器……小宇宙を込めて、柱に当てれば——……！）

「はあっ！」

翔馬は三節棍の先を、柱の方へ投げつけるように強く当てた。その感覚は今までに味わったことがないので、当てるだけでもその振動が伝わってきた。一度柱の方へぶつけると、三節棍の先は翔馬の手元へ戻ってきて、翔馬はそれを目を瞑って片手で受け止めた。その時も、翔馬はその反動に少しばかり耐え切れなかったのか、足を摩擦させて後退。その破壊力と威力の強さを実感していた。

そして、スツと目を開き、柱の様子を確認した。最初はまだ無傷で「また先程のようにダメなのか」と思ったのだが、しばらくすると、三節棍を当てたところから一気にヒビが広がり始めた。

「……………まさか!」

翔馬が嬉しそうに声を上げた瞬間、柱は煙をたてながら、粉々となって崩れ落ちた。翔馬は拳をギュツと握って、引き締めるように、肘をグンツと後ろへ引き締めた。

「やった! 柱を壊すことができたぞ!」

その後ろに水鹿もニツと笑みを浮かべて、翔馬の肩に自分の手を置いた。

「つし! やったな、翔馬!」

「ああ!」

いつもは表情の変化が少ない翔馬の顔が、満面の笑みだった。水鹿はそれに釣られるようにクスツと笑みを浮かべてから、白虎の方へと視線を向けた。

「白虎。行くぞ」

「ふ、あ、ふにやつ!! あれっ!! あれれっ!! いつの間に終わってたん!」

水鹿に話しかけられて、すでに事が終わっていることに気がついた白虎は焦るようになり、辺りを見つめながら、二人の元へと駆け寄った。

——残る柱はこれで四つになる。

40:「理想への逃避」

——南大西洋の柱。

柱の前に佇み、フルートを吹いている青年の姿があつた。その青年は特徴的な羽がある鱗衣を纏っていた。その鱗衣を纏える人物と言つたら、現代には一人しかない。海魔女セイレーンのヴィオラだ。ヴィオラはフルートの音色を柱の目の前で響かせながら、目の前をただ、細目で見つめていた。海將軍のうちの誰か一人が、ここへやってきた聖闘士を海底神殿の方へ飛ばしたと聞いたが、多分、こちらには飛んでないのだろう。一向に聖闘士の姿が見えない。もし来れたとしても、自分の力に敵うはずもないし、ただやられるのみであるが。

しかしながら、ヴィオラは先ほどから心の中に突つかかっているものがあつた。

(……なんだか、だんだんと海面の水位が下がっているような気がする)

ヴィオラはここでは天となっている海面を見上げながら思った。先ほどから、地鳴りと小雨を繰り返しながら、天井がだんだんと低くなっている気がするのだ。自分が感じただけでも、それは三回ほど起こっている。

ヴィオラはフルートを演奏する指を止め、口をフルートから離して、柱から一步離れ、

辺りを眺めた。——やはり、見る限りでは、海面下降は気のせいではなく、実際そうだった。しかし、何故海面が下降したのか、今までの経験から推測できなかった。ヴィオラが頭を抱えて考えていると、脳内に直接声が響いた。

『……………るか、聞こえるか？ セイレーン』

「……………貴方はシードラゴンか」

『うむ、伝わっているようで良かった』

その声は自分と同じ海闘士であり、北大西洋の柱を守護している海龍シードラゴンのものだった。シードラゴンはヴィオラに自分の声が届いていることを確認すれば、真剣な声で話し始めた。

『セイレーンよ、よく聞いて欲しい。実は、北太平洋、南太平洋、そして北氷洋——計三つの柱が破壊されたのだ』

「…な、なんだって!？」

シードラゴンのその言葉を聞き、ヴィオラは目を丸く見開いて、驚いていた。黄金聖闘士全員がかりでも絶対に破壊されないと言われている海底神殿の柱が、こんな短時間で三つも壊されているとは、思ってもみなかったのだ。ヴィオラは声を若干震わせながら、先ほどから気になっていたことをシードラゴンにぶつけた。

「もしかして、海面がだんだんこちらに近付いてきてるのは……………」

『海界の中心であり、天井を支えている柱が壊されたことによる影響。また、壊されるようなことがあれば、もつと下がる』

「……そんな」

ヴィオラは呆然とし、愕然ともした。これ以上柱が壊されてしまったら、自分の中の「世界を一からやり直しさせる」という目的はどうなるのだろうか。黙り込んだヴィオラに、シードラゴンは優しく声をかけた。

『セイレーン。お前、本当にこの世界をやり直しし、肅清したいと思っているのか?』

「し、シードラゴン。君は何を……」

『そして、リヴァージュ・ソロをポセイドンとして仕立て上げることに対して微かな抵抗があるんじゃないか?』

「っ—」

ヴィオラは言葉を詰まらせ、一切言葉を発さなくなった。リヴァージュをポセイドンに仕立て上げることに対しての抵抗——ヴィオラの中でこの言葉だけが旋回し、離れなかった。

確かに、最初は年端もいかない子どもにポセイドンであることを告げることや、こういう戦場に立たせることを望んではいかなかった。だが、海闘士である以上、そのことを表に出してはならないのと、むしろポセイドンの復活に喜ばなければならぬこと。

ヴィオラはひたすら本心を隠して、ポセイドンの復活を喜ぼうとなっていた。喜ぶうちに、リヴァージュとポセイドンのことを割り切れると思ったからだ。しかし、こうして改めてシードラゴンにそのことを突っ込まれ、こうして動揺している。もう、すでに割り切ったものであると、自分の中で思っていたのに、だ。

ヴィオラが沈黙を保つ中、シードラゴンは「ふう」と最初にため息をつけてから、話し始めた。

『やはり、抵抗があるのだな。まあ、リヴァージュ・ソロに数年間仕え、その愛に触れてきたお前がそう思わないはずはないか』

「……すまない、シードラゴン」

『何故謝る？ 別に私は責める気はないぞ。小さな子どもにポセイドンの役目を果たすのに抵抗があるのは私も一緒だからな』

「シードラゴン……」

『それに、私が海底神殿にいるのは、ポセイドンのためではない。ポセイドン以上に邪悪な奴を倒すためだ。小さな子どもをポセイドンに仕立て上げてまで、戦わせようとするなど、とんだ邪悪で、外道。皆はその正体にまだ気付かぬが——何れは聖闘士中心に気付く者は増えるはず。セイレーンよ。その時までいい。リヴァージュ・ソロのことを支えてやって欲しい』

ポセイドンとなったりヴァーヂュを支える。それができるのは、今現在ではヴィオラしかない。ヴィオラはコクンと領いてから、答えた。

「……ああ、もちろんさ。でも、いいのかい？ いらぬことをペラペラと話して」

『なに、心配は無用。どちらにせよ、そのうち皆にバレるのだから。むしろ予め話しておいた方が面倒な説明はいらないだろう？』

「……随分とポジティブ思考でさっぱりしているのだね、君は」

それは突然やってきたのだった。

「白虎！ おい、白虎！ しっかりしろ！」

「う、ううん……」

南氷洋の柱へと向かう途中、白虎が突然倒れ、そこで眠ってしまったのである。水鹿が倒れた白虎をしゃがみ抱え、必死になって声を掛けるも、白虎はぐっすりと眠り込み、目を覚ます気配もない。とりあえず眠り方そのものは大して不健康なものではないし、ただの睡眠不足かと思っただが、それにしてもあまりにも不自然すぎる。今まで眠気など知らんぐらいの元気を保っていた白虎がこんないきなりに、そして、あつさり寝るなど、一体何にやられたというのだろうか。翔馬も不安そうに、そして不審げな目で白虎を見つめていた。

——その時、だった。

「きししっ！ 兄者もやつりおるなあー！ これでこの聖闘士は永遠に目を覚まさないぞおー！」

辺り一面に鳴り渡った、楽しそうで、愉快そうな声。水鹿と翔馬は倒れている白虎の目の前に立ち、体制を整えた。

「そんなに警戒されても困るんだものー！ まあ、何かしないという保証はし・な・い・け・どおー！」

上からでんぐり返ししながら、やってきた一つの小さな姿。その姿は地面に足をつくると、ドンツと仁王立ちをし、したり顔な笑みをその幼い顔に浮かべ、水鹿たちを見つめた。水鹿と翔馬はポカーンとしながらその姿を見つめた。

相手の姿は、なんと、まあ、愛らしいことか。自分たちよりも10センチメートルは余裕で低いであろう身長と、何より、無邪気な表情が似合う、身長に見合った幼い顔立ち。しかし、纏っているものはオレンジ色の鎧、いわば鱗衣。何というミスマツチだろうか。水鹿と翔馬は思わず吹き出した。

「こ、子どもが海闘士……」

「すごい破壊力だな、こりゃ」

「わ、笑うな！ お前らみたいなガキよりは一回り年上じゃい！」

海闘士のその一言による、一瞬の沈黙。翔馬と水鹿は無表情の真顔のまま、相手をじつと見つめていた。だが、やはりどう見ても自分たちより年上には見えなかった。海闘士は「ハンツ！」と鼻で声を上げて、水鹿と翔馬を見据えた。

「おらつちがこんな姿なんは、相手の小宇宙を吸い取るドレイン能力によるもんよ。いろんな奴の小宇宙を吸い取って、自分の若さを人の倍以上保つのだ」

「！」

水鹿と翔馬は、驚きながらお互い顔を見合わせた。小宇宙ドレイン能力——いわば、かつて自分たちが戦った人物・クオーツと同じ能力だ。

「で、おらつちの場合は相手に夢を見させるタイプなのじゃ。いかがわしいことがない夢魔だと思ってもらって構わないだろう？」

「夢魔……」

「でも、おらつちの兄者は年齢相応の外観だぞー？ 兄者は相手の夢の中に潜り込むことで、そいつにいい夢を見させる。おらつちみたいな小宇宙ドレインなんてふざけた能力はないから、安心しなされ」

「……って、言われてもな」

クオーツのことを思い出し、水鹿と翔馬の顔付きが徐々に厳しいものとなっていく。クオーツは小宇宙をドレインすることで若さを保ち、そして、その強大な力さえも支配

してしまうといったものだった。だから、少なくとも今、目の前にいる相手に対しては安心し切れない。

海闘士はため息をついてから、二人を指差した。

「まあ、信じてもらえないのも無理はないってわけで、プレッシャーダウン！」

「！」

「っ！」

二人の体が何かに押しつぶされるように一気に重くなった。立つことはおろか、起き上がることもすらままならない。海闘士は「うひひ」と相変わらず子どものような笑みを浮かべながら、二人の目の前まで歩みを進め、大胆にもそこに座った。

「まー、そこで見てなよ。絶対に楽しいから」

「……っ！」

（白虎っ……！）

ふと、目を覚ますと、白虎はベッドの上に身を置いていた。服の裾でゴシゴシと目を擦り、視界をさっぱりさせてから、辺りをキョロキョロと見渡し、自分がどこにいるのか確認した。

（わい、確か海底神殿に……って、あれ!? こゝって……！）

白虎の心臓が酷く波打った。そして、目を見開き、呆然として虚空を見つめていた。そして、頭を抑え、目を見開いて、激しく動揺した。

(まさか……！ ウソだ、そんなことは有り得ない……！ だって、ここはあの時すでに捨てたも同然のはず……！)

そう、ここは——白虎が五老峰に住む前、かつて住んでいた、母親の実家かつ、例の祖父母の家だった。

数年前のあの出来事から、ここには一切顔を出そうともせず、連絡もしようとせずだった。五老峰での修行や鍛錬、そして聖闘士であることの喜びが、白虎のその感情を増幅させていたのだが。とりあえず白虎はベッドから降りて、自分の姿を鏡で確認した。ちゃんとした寝巻きを着ており、聖域や五老峰の時のように私服のままではなかった。

(何で……!?! もしかして、海底神殿でわいの存在が……!?!)
「うえ……やだ……」

白虎は顔を真っ青にして、目線を床に落とし、自分の身を抱え込み抱きしめるように、腕を抱えた。もうここには戻ってこないものだと思い込み、すっかり安心し切っていたのだが、どうやら甘かったようだ。また、あの地獄のような日々が自分に降りかかってくると思うと、胃の中のものを全て吐き出してしまいたいそうさ。しかし、「でも」と白虎は

鏡に再び視線を向けた。

（もう、あの頃の自分じゃない。今のわいには、自分も他人も守れる強さがある。五老峰や聖域で過ごした数年間は絶対に無駄にならないはず……!）

そうだ。それに、ここに戻ったからと言って、顔を真っ青にして胃を痛めているなんて、今の自分らしくない。もっと、前を向かなければ。白虎は鏡に自分の手を起き、改めて自分の顔を見つめた。母譲りの淡麗な顔立ちは、白虎の唯一の希望だ。白虎は鏡に置いた手をギュッと握りしめた。

（大丈夫、大丈夫だ、自分……今までの自分を、貫き通せ!）

そう、白虎が決意を固め、部屋の扉へと顔を向けた時だった。「コンコン」と誰かが部屋をノックしたのだ。白虎はビクツと肩を震わせて、祖父母の顔を過ぎらせた。祖父母から何か言われるのではないのか、と。だが、もう逃げないと決めた以上、怯えながら祖父母と話すわけにもいかない。

白虎は意を決して、扉の目の前までまで歩み寄り、そのドアノブに手をかけた。そして、ガチャリと扉を開いた。

「はい、何か御用でしょうか……」

白虎は扉を開き、そこに現れた人物を見た瞬間、目を見開き、絶句して、声を出せずにいた。

その人物は腰まである長い髪の毛の一部を使って、後頭部に団子を作っている髪型に、自分よりオレンジ寄りの色素を持つ茶髪。桃色を基調としたチャイナ服は、そのスタイルの良さを強調するようなぴっちりしたもので、その人物が着ると芸術か何かの一つとなるほど。そして、何より、白虎とは目元がよく似ている、というよりも顔の比率がほとんど白虎と同じな顔立ちが特徴的だった。160センチメートルはある白虎よりも高い長身なのも特徴的だった。白虎は、この全ての条件をすべて満たしている人物を一人、いや、一人しか知らない。

「虎鈴、お母、さん……」

白虎は、今は亡き人物であるはずの名前を口から吐き出した。それは、目の前にいる人物に向けられたものだった。

（何で……何で、お母さんが……!? 確かわいが物心付くか付かないかの頃に死んだはずなのに……!）

白虎はもう何もかも信じられない様子で、ただ、目の前にいる女性を見つめていた。一体何なのだろうか、今日は。信じられないものがたくさんじゃないか。白虎の母親と思いき女性は、白虎の異変にキョトンと首を傾げながら、その様子を見ていた。

「白虎? どうしたの? 気分が優れないの?」

「えっ、あつ……な、何でもない、です……」

「そう？　あまり無理しちやダメよ？」

「は、はい……」

いつもの優しい母親の声に、白虎はそう答えるしかなかった。

「じゃあ、朝御飯用意してあるから、こっちにいらつしやい」

虎鈴はニコツと優しい笑みを浮かべて、そつと白虎の手を取った。白虎は顔を真っ赤にして、「そ、その……」と小さく声を発した。

「ん？　どうしたの？」

「し、私服に着替えてもいいですか……？　寝巻き姿で家の中をウロチョロしたくないというか……」

「ふふ、良いわよ。白虎も身なりを気にする年頃だものね。部屋の外で待つてるから、着替え終わったら呼んでちょうだい」

「あ、ありがとうございます……」

虎鈴は微笑みながら、白虎の手を離して、部屋の扉を閉めた。白虎は扉が閉まると、「はあ」と息を吐いて、扉に寄り掛かり、そこからズルズルと座り込んだ。そして、自分の手を見た。

（一体何がどうなっているんだろう……わいの体は普通に13歳現在のままだし、昔に戻ったというわけではないのか……）

白虎は、寝巻きを脱いでから服を手にし、それを己の見にまとわせながら、考えていた。

先ほど鏡でも自分の姿を見たが、母親が死ぬ前までに体が巻き戻っているわけでもなさそうだ。だとしたら、今、目の前にある光景は一体何を意味しているのだろうか。そもそも、ここは本当に「現実」なのかどうか——……白虎はどうも疑り深かった。

(悩んでも仕方ないだろうけど……でも、どう考えたって、お母さんが生きてるなんてありえない。それだけは十分承知してる)

白虎はすべて着終えると、虎鈴から言われたとおり、部屋の扉を開いて、母親の姿を確認した。そして、その姿を見つけるなり、声をかける。

「お母様、着替え終わりました」

「うん。では、行きましょう」

虎鈴は白虎の着替えが終わったのを確認すれば、白虎の手をギュツと握り、リビングまで案内した。白虎は「もう13歳なのに……」と頭を抱え呆れながら、自分と虎鈴を繋いでいる手を見た。

(……昔は、こうして一緒にお母さんと出かけたっけ)

昔は白虎が一人で泣いていると、虎鈴が白虎を元氣付けようとどこかへ連れて行ってくれて、その度に白虎の涙は吹き飛んだものだ。今となってはそれもいい思い出で、大

切な母親との思い出だ。

(……お母さん)

虎鈴の手を握る白虎の手の強さが、一層大きくなる。もし、目の前にいる人物が、本当に自分の母親ならば、自分は一体どうすべきなのだろうか。偽物とは思わない(逆に、虎鈴に成り済ますことができる人物などいない)が、本物とも思えなかった。今、目の前にある事象が信用できない自分が、少しばかり悔しかった。

あれこれ考えているうちに、リビングに着いたようで、白虎は虎鈴に自分の席を案内された。自分の席は相変わらずの場所で、安心したというか、何というか。やはり、大きくなっても普遍なのだな、と白虎は思った。

白虎は席に着くと、リビングを見渡し始めた。あの祖父母と兼用の家になっているはずだが、白虎の今いるところは、祖父母のところから少し離れた場所なようだ。家は相当広い上に、同じ家で離れた場所で暮らすのは一応可能ではあった、ということか。祖父母から完全に離れるには家から出なければならぬのは確からしいが。

「白虎、どうしたの? そんなまじまじと家の中見つめて」

「えっ、あつ、いや……」

白虎は虎鈴に突つ込まれて「ははっ」と苦い笑みを、その顔に浮かべた。

(わいの今の心情とか、そういう色々なことを言ったら、変な顔されるかもなあ……)

白虎は「ふう」と息をついて、手に頬をついた。もし、これが現実だとしたら、虎鈴は死んだだの何だの言ったら、変な顔されるのはほぼ間違いない。そして、自分が五老峰で修行して聖闘士になったことも、否定されるに違いない。「そんなことは絶対にありえない」と。真実なのに現実ではないかもしれないと言った矛盾に、白虎は頭を抱えるしかなかった。

「今日は本当に様子がおかしいわよ、白虎。大丈夫なの？」

先ほどから思い詰めている白虎の様子に、虎鈴がテーブルに朝食を置きながら、心配そうに話しかけてきた。白虎は置かれた朝食を見ながら、虎鈴の問いに応えるように「ええ」と頷いた。

「大丈夫です。お母様が心配することではありませんから」

「本当の本当に？」

「本当の本当にです。……まあ、ちよつと今、目の前にある光景が信じられないだけで」
「……信じられない？」

虎鈴は不思議そうに、キョトンとしながら首を傾げて白虎を見つめた。

「なあに？　もしかして悪夢でも見ちゃったの？」

「……そう、かもしれないね」

祖父母に両親を銃殺され、地獄のような日々を過ごして——現実ではあるものの、確か

に悪夢と言えば悪夢だろうと、白虎は虎鈴の言葉に頷いた。虎鈴は「そう……」と不安そうに白虎を見つめてから、白虎の隣にある椅子に座って、白虎の頭を優しく撫でた。白虎は撫でられると、ビクツと肩を震わせて、思わず驚いた。虎鈴は「あら？」とクスツと笑みを浮かべて、驚いている白虎を見つめた。

「どうしたの？ やっぱりお母さんとはいえども、思春期の身としては、意識しちゃう？」

「し、してません！ 変なこと言わないでください！」

白虎は今まで男だらけで、特に気にもせず言われなかつたことを言われ、思わず顔を真っ赤にして反論した。白虎が「もう」と真っ赤になりながら息を吐いているの横で、虎鈴はクスクスと笑っていた。

「まあ、早く食べてしましましょう。朝食が冷めてしまうわ」

「は、はい！ そうですね！ いただきます！」

虎鈴に言われて、白虎はすぐに朝食にあり付けた。白虎からしたら、久々の虎鈴の手作り料理。昔と今ではどれほど感覚が違うのだろうか。白虎は焼いた食パンにバターを塗って、それから、それを口の中で頬張った。

（相変わらず美味しいな……）

ただパンを焼いただけでも、ここまで美味しく感じられるとは、虎鈴の存在は侮れな

い。白虎にとっての母親という存在は、それほどまでに生活に影響を及ぼすのだろう。(……今、自分の目の前にある光景を「現実」だと信じてもいいのだろうか。もし、信じることができのならば……お母さんがいなかった数年間を穴埋めしたい)

白虎は、そろそろ今の光景を信じてもいいかもしれない、と思い始めていた。最初は夢か何かかと思っていたが、何の変哲もない食パン一枚がこんなにも美味しく感じられるのだ。祖父母もここからは離れている場所にいるようだし、このままならば、ここにいってもいいかもしれない、と。今の光景は、ある意味、白虎にとっての「理想」と言えよう。

「……あの……お母様」

「なあに? どうしたの?」

白虎に呼ばれて、虎鈴がこちらを振り向く。白虎は「その……」と照れ臭そうに言葉を詰まらせながら、言葉を発した。

「朝食を食べたら、一緒に庭園の方へ出ませんか? ちょっと外に出たくて」
「ん、いいわよ。食べたら一緒に出ましょう」

「……はいつ、分かりましたっ」

白虎はニコツと微笑みを浮かべた。虎鈴もそれに釣られるように、「うん」と頷きながら、優しく微笑んでいた。

(わい、なんか、今、すごい幸せかも……)

白虎は朝食を口に含みながら、普通の幸せというものを感じていた。こうしてまともな会話できる年齢になってから母親と会話することができて、白虎はどことなく嬉しかった。もし、両親とあの祖父父母が許してくれるのなら、ここに戻ってもいいかもしれないと思えるぐらいには、だ。

白虎はチラッと横目で、自分の隣に座っている母親の姿を見つめた。相も変わらず悠然とし、そして美しいその横顔は、実子の白虎でさえも見惚れてしまうほどだった。小さい頃は、そんな母親の横顔がとても頼もしく見え、一種の憧れでもあった。そして、自分はその母親まんまそっくりだとよく言われるので、何とも恐れ多かった。

(……わいって、そういう血筋だけは恵まれてるんやろうなあ)

こうして大きくなってから、母親と対面して、改めて思った。自分は恵まれている、と。色々考えているうちに、朝食を食べ終えた白虎は、母親と共に家の庭園へと向かった。家の庭園は、どういう風に表しているのか分からないぐらいに広かった。聖闘士的に例えるならば、簡単な修行や鍛錬ぐらいは容易くできるぐらい。まあ、せいぜい一回り100メートルぐらいはあるだろうといったところだが。

白虎はそんな庭園につくなり、一回軽くランニングをし始めた。どうにも体が落ち着かないのだ。虎鈴はそんな白虎を見るなり、驚いたような目で見つめていた。庭園を一

周したところで、虎鈴が白虎を呼び止めた。

「び、白虎……」

「はい？」

「運動苦手じゃなかったの……？ この庭園を30秒もしないで一周するなんて……」

「お母様、それは昔の話ですよ。今の私は体力も筋肉もバリバリなんです」

「そ、そう……」

にっこり笑みで答える白虎に対して、苦い笑みを浮かべて頷く虎鈴。

（……そういえば、五老峰来るまで運動は苦手だったな）

と、虎鈴に言われて昔の自分を思い出していた。

昔の白虎は、外見通りの性格と運動神経をしていて、かけっこやリレー、そして鉄棒などといった運動全般は大の苦手だった。今のように他人に拳を向けるなど言語道断、しようものなら逆にやり返された。だから、聖闘士になりたいと思った時は「絶対に無理だ」と思いながら、師匠になりたいことの旨を伝えたものだ。今ではこうして運動のことしか脳にないような、単純な奴になってしまったが。いや、運動のことだけではなく、歌もか。とにかく、昔から引き継いでいる名残など、最早外見しかなくも同然なのだ。そんな自分を虎鈴が見たら普通に驚くのも無理はない。

白虎はもう一周したところで、手に持っていたタオルで汗を拭った。涼しい風が、白

虎の顔にも気持ち良く当たってきた。何という爽やかな陽気だろうか。

——と、思ったのだが。

「んっ」

（上から水滴……？　　つてことは、雨……？）

そう、突然雨が降り出してきたのだ。雨の中でも鍛錬を重ねてきた白虎からすれば、どんな土砂降りでもどうってことはないのだが、虎鈴の前ではそうはいかないので、とりあえず屋内へと戻ることとした。

白虎は先ほどとは打って変わってどんよりした空を屋内から見つめていた。天気と
いうものとは不思議だ、と。虎鈴はそんな白虎を見つめながら、微笑んでいた。

「白虎」

「はい？」

「貴方がここにいたかったら、いつまでもいてくれていいのよ？」

「お母様……でも……私には使命が……」

白虎が反論する前に、虎鈴は白虎のことを強く抱きしめた。白虎は驚きながら虎鈴に包まれ、そして、虎鈴の顔を見るために、上目遣いで上を見上げた。虎鈴は優しく微笑みながら、ただ、白虎の頭を撫でていた。

「使命……それはとても辛いものなのでしょう？　　白虎、私はね、貴方にこれ以上、辛い

思いはさせたくないの。だから、ずっとここにいて、私たち家族と時間を共にしまし
う」

「……………」

白虎の中の何かが、瞬発的に何かに反応するように、虎鈴を突き離れた。虎鈴は驚いたように白虎を見つめて、ただ、呆然としていた。白虎は目の前にいる母親——いや、母親の格好をした何をキツと強く睨みつけた。

「私の母は……私の憧れだった母は、子どももの決めたことに、そんな風に優しく引き止めるようなことはしない！ 『辛い思いをさせたくない』？ いや、私の母ならば、子どもの辛そうな姿を見たところで、そんな甘えた口をきいたりはしない！」

そう言った白虎の身体に、龍星座の聖衣がどこから現れ、それが纏われた。白虎は虎鈴の姿をした何かに対して仁王立ちをし、強く言い放った。

「——姿を現すがいい！ 『海鬪士』！」

41：「怒りの歌が鳴り響き」

「な、何だ!? 白虎の小宇宙が激しく燃え上がっている……!」

そのことにいち早く気が付いたのは翔馬だった。深い睡眠に落ちているはずの白虎の体から、これまでにない闘争心の塊であろう小宇宙が感じ取ることができた。水鹿もその白虎の様子を見て、少しばかり啞然としていた。一体、白虎の中で何があったのか、と。海闘士を名乗る小さな少年は、あわあわと焦りながら、白虎のその様子を見つめていた。

「ま、まさか……この畏に引つかからない奴がこの世にいるはず……んぎやあッ!」

そして、焦っている海闘士を誰かが吹き飛ばした。翔馬と水鹿は思わず目を見開いて、ただ、ぼかん、とそれを見つめていた。そんな二人の目の前に現れたのは、ブラウン色の聖衣を纏い、海闘士をその少年らしい顔つきで睨みつける人物。

「圭熊ッ!」

そう、大熊星座の聖闘士・圭熊だった。圭熊は目の前にいる海闘士は強く睨みつけながら、そちらの方へと歩み寄った。海闘士はあわあわと肩をガクガクと震わせながら、圭熊の睨みつけに怯えていた。

「な、ななな、なん……で……」

相手のあまりの怯えように、圭熊は呆れたようにため息をついきながら、相手を指差した。

「おいおい、お前の肝っ玉も体の小ささと同じぐらいかよ。よくそれで海闘士になれたもんだぜ」

「う、うう、うるさいっ！ 戦闘は兄者の方が優れて……」

「……その兄者とやらは、お前の小宇宙の念で創り出したもんだろ？ 言わば『理想』」

「ぐぬぬ……」

凶星なのか、押し黙る海闘士。翔馬と水鹿は、いまいち状況が把握できないのか、ぼかん、と口を開けて二人の話聞き、見ていた。何もかも見据えているような圭熊の瞳は、海闘士を捉えて離そうとしない。

「さあ、姿を現せ、海闘士。これ以上私の母の名を騙れると思つたら大間違いだ」

白虎は母譲りである垂れ目を、キツと鋭く光らせ、目の前にいる母親擬きを強く睨み付けていた。睨まれた虎鈴は「チツ」と舌打ちしてから、先ほどとは別人のような邪悪な笑みを浮かべて、そこに立っていた。

「最後まで誤魔化せると思つたが……仕方あるまい」

「虎鈴はそう言うと、一回転した。すると、虎鈴の姿が掻き消され、今度は鱗衣を纏った男性の姿が現れた。白虎はごくんと唾を飲み、その男性の姿を強く睨みつけた。男性の様子から察するに、この姿が本当の姿のようだった。白虎は悔しさと怒りから、激しく小宇宙を燃やしていた。」

「お前が……お前が、私の母の名を……!」

「……それがどうした?」

「よくも……よくもつ、よくも、よくもオオオオオツツツ!!!」

悠然で冷静たる様子の海闘士に向かって、白虎は勢い良く掴みかかった。海闘士は逃げるところか、避けることはせず、その無表情を保ったまま、白虎に押し倒された。白虎は相手の鱗衣の上にぼたぼたと大粒の涙を流しながら、声を発した。

「ござ、けるなっ……! 生き返させろ……! こんなことするなら……わいのお母さん、生き返らせてよ……! 10年振りだった……! あの出来事から10年振りにお母さんに出会えたの……! なんて、なんで、本物じゃないの……? なんて、なんで……!」

白虎からすれば、虎鈴が偽物だということは酷い仕打ちだった。白虎の憧れの全ては母親にあり、その背中を追い続けた。だからこそ、こうして簡単に母親を騙られることが悔しかった。そして、それに騙された自分に激しく怒りを覚えた。

白虎は落ち着いたところで、相手に顔を向けないように顔を俯かせて、海闘士の上からその身をどかし、海闘士を解放させた。海闘士は白虎が上からどくと、立ち上がって白虎の顔を見つめた。白虎は黙ったまま、そこから動こうとしない。海闘士はそれを不審げに見つめるものの、特に気にしていない様子で、拳を握った。

(むしろ、このまま黙ってくれている方が攻撃しやすいものだ……)

海闘士は若干助走をつけて、白虎の腹へと目掛けてその拳をくわえようと、振りかざした——その瞬間。

「——はあッ！」

白虎は全身という全身に力を入れて、聖衣を一瞬にしてその場に脱ぎ捨てた。突然の出来事に、海闘士は驚きながら、その様子を目を見開いて見つめるしかなかった。白虎は聖衣を脱ぎ捨てるなり、「フン」と鼻を鳴らし、腕を組んで仁王立ちをした。白虎の横髪だけ長い髪の毛が、風に揺れる。海闘士は不審げにその姿を見つめていた。

「貴様……聖衣を脱ぎ捨てるなど、何を考えている?」

「別に。何も考えてなどいない。私の背中の虎が苦しそうだったから脱いだだけ」

そう言うと、白虎は背を海闘士の方に向け、その状態を見せつけた。そこには、中国の四神の一匹である白虎の顔が、くつきり浮かび上がっていた。海闘士はそれを見て、何かに気が付いたのか、脂汗を垂らした。

「その紋は、天秤座の……」

「海闘士のくせに、そういう知識だけは無駄にあるようだな。まあ、別に困りはしないけど」

白虎は足を一步前に踏み出して、片手を広げた。白虎の中の小宇宙が、激しく燃え上がり、その場にある草木を燃やしそうな勢いだった。

「私の怒りの小宇宙、その身で感じて頂こうか」

海闘士が動揺しているお陰か、翔馬と水鹿は強い圧力から解放されて動くことができようになっていた。先にそれに気が付いたのは水鹿であり、水鹿はそのことを翔馬にボソリとだけ伝えてから、立ち上がった。それから、圭熊と海闘士の対峙を見守っていた。圭熊の小宇宙からは、手だし無用の文字が湧き上がっているようにも伺える。圭熊は「ふう」と軽く息を吐いてから、相手に聞いた。

「で、ガキ。お前の名前は？」

「おらっちは海幻獣リウムナデスのジュニア！　ってか、ガキじゃないって言うてるじゃろうがッ！」

「……ふうん。ジュニア、ね」

圭熊は顎に手をあてて、ふむ、と相手の様子を見た。それから、何か据えたのか、拳

をグツと握りしめた。

「——だアツ！」

そして、遠慮なく、ジュニアの方へその拳を突き出した。ジュニアは避けようととも逃げようともしない。だが、それも当然だった。

「……小さいは小さいなりによく考えてるよな」

圭熊の拳は、ジュニアの数センチ手前で止まっていた。それは、ジュニアの周りに固い防御壁があるという証拠だった。ジュニアはニコニコと顔に見合った無邪気な笑顔を浮かべながら、圭熊に言った。

「おらっちは戦闘には疎いけど、防御では海將軍の中では一番優れてるのだ。そう簡単には破れないのだ」

「なるほどな、なかなか面白えな。——だから、兄ちゃんと翔馬は部外者になっちゃったっぽいから、早く先へ行ってくれ！」

「あ、ああ！」

「天秤座の聖衣、白虎の横に置いておくからな！ 天秤座の武器である柱を壊してくれ！」

「柱……？」

圭熊はきよんとししながら、翔馬が言うその柱を見つめた。その柱は、天高くそびえ

立ち、そこから海界をすべて見下ろしているようにも伺える。翔馬のその言葉から全てを察した圭熊はコクンと首を縦に振って、「分かった」と呟いた。

「とりあえず、このチビ倒して柱壊せばいいんだな！ お安い御用さー！」

「ああ、頼むぞー！」

そうして、二人と圭熊はその場を別れた。圭熊は二人がここから去った後、ジュニアから少しばかり距離を保つように離れた。ジュニアは余裕そうに笑みを浮かべながらそこに立っているだけだ。今現在分かっていることは、目の前にいるジュニアさえ倒せれば、自分の後ろで眠っている白虎は助けられるということ。そして、目の前にある大きな柱も壊さなければならぬということ。

見たところ、というより聞いたところ、ジュニアは戦闘には突飛した実力を持つているわけではなく、むしろ、それとは逆に防御力の高さで海将軍として認められているようだ。だから、ジュニアの防御力を上回るぐらいの拳を入れることができればいいのだが、できるだろうか。だが、やるしかない。

「——っし、絶対にお前を倒すぞ、リユムナデス！」

白虎の小宇宙が激しくこだまする。海闘士はその小宇宙に影響されて、動くことすらままならなかった。白虎はその海闘士の様子に不信感を覚えた。

(向こうは黄金聖闘士並みの力を持つている海將軍の鱗衣をまとっている……なのに、わいが小宇宙を燃やしたぐらいで動けなくなる……?)

明らかに不自然だった。白虎の小宇宙に圧倒されていいのは青銅聖闘士までだ。だから、黄金聖闘士並みの実力を持つている海將軍が動けなくなるはずがない。——まあ、動けなくなるに越したことはない。すぐに済ましてしまおう。

一方の海闘士は、白虎とは違い、ここがどこだか把握していたゆえに、まずい状況になつたのは、はつきりと分かつていた。

(ここは『夢』だ……そして、この夢の主は私ではなく、あの聖闘士。そして、夢というのは、その夢の主の意思に影響される……!)

そう、海闘士が動けなくなつたのもそこにあつた。海闘士が相手の夢の中に入り込み、操つているとはいえ、あくまでも夢の主は向こうである。もし、その夢の主が操られなくなるほどの意思を持ち、想像を持つてしまえば、この夢の中ではほとんどがその通りになつてしまう。つまり、白虎の海闘士に対する恨みと怒りが、海闘士を動けなくさせたということになる。結論的に言えば、白虎はこの夢の中では最強になるということ。何とも酷い話だ。だが、こうなつてしまつた以上、海闘士に勝ち目はない。もはや受け入れるしかないのだ。

当然そんなことを知らない白虎は、小宇宙を燃やして、海闘士の方を睨みつけていた。

「さあ、聞くがいい。私の憤りを。遊舞乱虎——！」

白虎の周りから、ちよつとした風が吹き始める。そして、白虎は口を開き、歌い始めた。

「目の前にある草木に何を問おうか……自分の誇りか、それとも覚悟か？」

歌うために声を上げること、白虎の小宇宙が強くなつていく。今回は特に、その小宇宙の振れ幅がいつも以上に激しかった。

「もう、立ち上がっているであろう——覚悟を決めたその心が——ツ！」

「ぐうっ！」

早くも本領発揮した白虎の遊舞乱虎。辺りが激しい暴風に包まれ、海鬪士を吹き飛ばす勢いで、ぐるぐると白虎中心に旋回していく。

「もう舞台の幕は落とされてる——っ！ 幕に対する答えは一つだろう——ツツ！」

ジュニアはクスクスと陽気な笑みを浮かべたまま、圭熊の方を見つめた。圭熊はその余裕そうなジュニアの笑みに対し、何か不快感を覚えたのか、ぐつ、と拳を一層強く握り締めた。

「無尽熊拳ツツ!!!」

鋭く光る圭熊の拳が、熊の手となつて、ジュニアの方に襲いかかる。だが、やはりジュ

ニアにはその熊の手は効かない、届かない、受け付けないの三拍子だった。圭熊は「ちいっ」と舌打ちしながら、拳に込める小宇宙を増幅させる。

しかし、いくら小宇宙を込めてもジュニアには全く効かない。ジュニアはケラケラと大きく笑って、相手のそのザマを見下していた。

「あつはつはつは！ 残念だねえ、聖闘士さん！ おらつちにそんな弱小拳で挑もうたって、そうはいかんさ！ ほうらあつ！」

ジュニアが両手を思い切り広げた途端、圭熊の拳の威力が一気に跳ね返された。

「ぐっ！」

こちらにその威力が衝突する前に、圭熊は何とか避け切ろうとするものの、背後では白虎が未だに熟睡している。圭熊は白虎にだけは当たらまいと、片手でその威力を受け止めた。

「——っ！」

ジュニアの防御壁を破壊するために、目一杯の小宇宙を込めた、圭熊の拳。その拳の威力は、こうして圭熊が感じているように、並大抵のものではなく、使った本人さえ吹き飛ばされそうなくらいだ。こんな威力を持った拳を、ジュニアの防御壁は軽々と防ぎ、跳ね返したのか。圭熊はどうしても悔しくて、手元にある威力を、再びジュニアにぶつけようと試みた。聖衣の手のひらを覆う部分が、ピキピキとヒビを入れていたが、

そんなことはお構いなしだ。

まず、圭熊は、威力をグツと強く握り締めて、絶対に吹き飛ばされないようにした。それから、片足を一步引いて、威力を受け止めている方の腕を後ろへ引いた。

「跳ね返しを、跳ね返してやるぜエエエ—— ツツ!!」

そして、大きく腕を振りかぶり、ジュニアの方へその威力を投げつけた。ジュニアは目を大きく見開いて、信じられない様子で圭熊のこゝを見つめていた。

(威力の跳ね返しを跳ね返す……?!? しかも投げて!?)

そんな無茶なことをするような人物、この圭熊が初めてだ。しかも跳ね返されたそれは、先ほどよりも威力が上がっている気がしてならない。無論、ジュニアの防御壁であれば防ぐことは可能なものではあるものの、威力の変化については、僅かながらもこちらに影響を与えた。

防御壁にそれが当たれば、なんと、物凄い勢いでこちらに食い込んできたのである。さすがのジュニアもそれは想定外、というより、圭熊の跳ね返し方からもはや想定外だった。

(この聖闘士……なかなかやれる!)

ジュニアは何とか防御壁に力を込めて、熱を帯びせ、食い込んできたそれを何とか消滅させた。

「聖闘士、貴様、なかなかやりおるな。おらっちの完璧無欠な防壁をここまで追い詰めるとは」

「……いや、まだこんなもんじゃねえよ。俺の小宇宙は、こんなもんじゃねえぞ！」

圭熊の小宇宙が一気に燃え上がる。ジュニアはその様子にニツと笑みを浮かべて、「そうかそうか」と腕を組んだ。

「まあ、その強気な態度もどこまで保つか……見物よなあ」

「なに？」

圭熊がパチクリとさせる中で、ジュニアはフンと鼻で笑ってから、防壁に無数の棘を作った。

「なっ……!!」

「はあっ!!」

圭熊が驚く暇もなく、その無数の棘は防壁から圭熊の方へと飛び出し、圭熊を襲った。

「ぐあああアツツ!!!!」

圭熊はその棘に吹き飛ばされ、背中を強く壁に打ち付けた。吹き飛ばされている間に、棘が無数に圭熊に掠っていたようで、圭熊の体の至るところから血がタラタラと流れていた。圭熊は地に足をつけば、壁をつたい、体に力を入れて立ち上がった。

「どうじゃ、おらっちのトゲ砲は」

「そう、だな……なかなかの威力だ……」

圭熊は「はー、はー」と息を荒げながら、白虎の方の安否を心配していた。見る限り、白虎は外傷自体は受けていないようだ。圭熊はそれだけ確認すれば、圭熊はゆっくりジュニアの方へと歩み寄った。

「でも、俺も負けてらんねえ……いや、負けてたまるかよ。白虎のこと、ぜってえ助けるんだからな」

ゆらゆらと、圭熊の背後で小宇宙が激しく燃え上がる。ジュニアは「ハッ」と鼻息でその様子を笑い、嘲笑した。

「無理無理無理無理！ 確かに貴様はなかなかのやり手。このリウムナデスが保証しちやる。でも、おらっちを倒すほどの実力なん——て……っ!？」

(な、なんだ、この小宇宙の燃え方は！)

ジュニアは顔を上げて、その異常さを目で確認した。圭熊の小宇宙の燃え方は、明らかに従来のものとは違い、青銅聖闘士が燃やすようなものではない。それこそセブンセンスに目覚めるぐらいの。しかも、圭熊の聖衣も、小宇宙に釣られるように先ほどよりもその輝きを増している。いや、その輝き方には、聖衣の元の色は殆どない。

——黄金聖衣の、輝きだ。

「ば、バカな！ 青銅聖衣が黄金聖衣のように輝くことなど……！」

「俺の聖衣はじいちゃんの血を……黄金の血を受けて復活したんだ。だから、このぐらゐの奇跡、容易いものさ」

圭熊はユラユラと静かに小宇宙を燃やしながら、ジュニアの方へと歩み寄る。ジュニアは額に脂汗を流し、圭熊がこちらに歩み寄ってくるのを、黙って見つめていた。圭熊は先程の無尽熊拳と同じ構えで、しかし、小宇宙の集中の仕方を先程とはさっぱり変えていた。先ほどは拳だけに集中させていたのに対し、今はその先を見つめているような燃やし方だった。

「受けてみる……俺の全力をな！」

圭熊はニツと笑みを浮かべながら、ジュニアの防御壁に向かって、一矢の拳を放った。

「さあ、アテナの戦士よ——ツ！ 前に進むのだアアアア——ツツ！」

曲が佳境に入ってきたところで、夢の中で吹き荒れている暴風が一気に激しさを増した。白虎自身、ここまできたら最早何もかも相手にぶつけようとしていた。それほどまでに、白虎の怒りというのは強大だったのである。

動くこともできない海闘士は、ただ、白虎のその暴風を受けるしかなかった。

「あなたにはあるのだろうか、譲れない思い、譲れない誓いッ！ ここから何も！ いら

なーいイイイイイイイイツツツ!!!

「ぐっ、ううっ……っ!!」

(ま、まずい……! 夢界が崩れてきている……!?)

海闘士は空を見上げて、そこに亀裂が大胆に走ってきていることに気が付いた。白虎の眠りがだんだんと浅くなってきているのと、白虎の攻撃による圧力が重なった結果といえよう。だが、このままでは、白虎自身はともかく、海闘士自身の身が危ない。

(私はジュニアの小宇宙によって生まれた半身のような存在……ここで私が消滅したら、ジュニアの身も危ない……!)

言わば、一心同体なのだ。ジュニアとこの海闘士は。だが、そんなことを知らない白虎は、ますますその歌声に小宇宙を込めた。

「さあ、飛ばたけエエエツツ!!! 戦士ならばツ! 明日を輝かせ、勇気を胸に——
—ツツ!!!」

——そして、白虎の歌の一節と、圭熊の技の掛け声が放たれるのは、同時だった。

「宣誓をオオオオオオオオオ—— ツツ!!!」

「二矢、熊、けエエエエエエエエん—— ツツ!!!」

その瞬間、白虎の夢界は一気に崩壊した。空からガラガラと粉のようになって崩れ去り、何もかも、灰となって、消えてゆく。辺り一面に生えていた草木たちも、枯れなが

ら悲鳴を上げ、跡形もなく、砂となって消えて行った。その攻撃を直に受けた海闘士といえ、声を上げることも、手を出すこともできぬまま、ゆつくりと、その身を空気と風に任せた。その瞬間に、海闘士の目の中に映ったものが、あった。

——白虎の、微笑みだった。

白虎はニコツと笑み浮かべながら、海闘士に対して、こう言い放った。

「仮初めの母親……すごい悔しくて、イラついたりもした……でも、お母さんに会わせてくれて——ありがとう」

海闘士は「ありがとう」と言われ、一瞬戸惑った。自分は相手の大切な人物を騙り、騙そうとしたのだ。もちろん、そのことが分かった向こうからの怒りもこうして買った。だから、こうして最後の最後に「ありがとう」など、礼を言われるとは思ひもしなかった。だが、礼を言われること自体に悪い気はせず、むしろ、どこか気持ち良かった。人を騙すことしか能のない自分だが、やはり、礼を言われるのは嬉しいのだ。

(ジュニア。もし、私が人の心を癒すためにこの力を使えたら……私は……)

海闘士はそのまま目を閉じて、白虎の崩れていく夢の中で一緒に溶けていった。

圭熊は見事、一矢熊拳でジュニアの防御壁を突破した。矢となった熊の拳が、ジュニアの周りを引き裂き、そのままジュニアの元へと向かった。ジュニアは自慢の防御壁が

突破され、最初は驚いていたが、その束の間、自身も熊の拳の餌食となった。

ジュニアがボロボロになり、その場に倒れたのを目の辺りにした圭熊は、ジュニアに対する謎の罪悪感を心の中ですくい取っていた。やはり、自分より子どもではない年齢といえども、こうして幼い人物を相手にするのは抵抗があるというものと、いった矢先に老化したら怖いのだが。

(んなことねえよなあ)

思ったとして、まあ、そうして一蹴である。

それから、圭熊は水鹿と翔馬に言われたことを思い出しながら、白虎の横にある天秤座の聖衣箱の蓋を開けた。天秤座の聖衣がそのオブジェ状態を保ちながら、そこに存在していた。圭熊が、その中から武器を取ろうとした——その瞬間だった。

「ふぁーあ……めっちゃスツキリしたぁーッ！」

「び、白虎ー！」

白虎が大きく欠伸をし、腕を伸ばしながら起き上がってきたのである。白虎は起き上がるなり、「んー」と声を上げながら、キョロキョロと辺りを見つめながら、わしわしと自分の頭を掻いた。

「ん、あれ……圭くん……？ わい、何で……」

「目覚めてよかったァーッ！ お前、今の今まで、ずっと熟睡してたんだぞー！」

「…………ふにやつ!? にやつ、にやあつ!?」

白虎は状況をやつと把握したのか、変な声を上げて、目の前にある柱を見つめた。どうやら、今の今まで、夢の中にいたとは思っていなかったようだ。圭熊は「ははっ」と苦笑してから、再び天秤座の聖衣の方へと視線を向ける。

白虎は圭熊と天秤座の聖衣を交互に見つめた。

「圭くん、もしかして……」

「ああ。あの柱を、コレでぶち壊す」

白虎の質問を先読みして、先に答えた。圭熊は天秤座の聖衣の目の前でしゃがみ、ふと、目についた武器を手にした。最初はナイフか何かだと思っていたのだが、それを先から伸ばしてみると、剣になった。

(…………これで柱を壊せつてことだな)

圭熊は足を広げて、両手で剣を持ち、スツと構えた。それから、柱の方へと身構える。天秤座の武器の威力がどんなものか圭熊には全くだ——が、こうして教皇が送り込んでくれたのだ。きつと、こんな柱など楽々に壊せるに違いない。

「おっしや、行くぜエツ!」

チャキン、と剣を片手に鳴らして、圭熊は柱に向かって走り出した。

「だアアアアア—— ツツ!!」

地を蹴り上げ、勢い良く飛び上がり、刃を柱に向けて、そのまま突き刺し、そこから、柱にヒビが入っていった。ヒビが全体に広まる前に、圭熊は柱から剣を抜き、足を地に付けた。そして、柱が崩れて行く様子を白虎と共に見つめた。

柱は、剣を突き刺されたところから、ピキピキと音と砂を立てながら、ヒビを入れた。そこからは、すぐ一瞬だった。ヒビが広まると、そのヒビは柱全体に入り、柱を灰と粉化として、すべて風となって消えていった。

白虎と圭熊はそれを見た瞬間、互いにガッツポーズを作って、体全体でその喜びを表した。

「やったアツ！ これで四本目撃破だアツ！」

「うっし!! これでいいのか……って、うわっ！」

天地に轟くような地鳴りと、ポツポツとこちらに降り注ぐ小雨。圭熊は突然のことに、唾然としながら、辺りをキョロキョロと見渡していた。

「な、なんだ……こりや……」

「神殿を支えている柱が壊れたことにより、海面の水位が下がつとるんよ」

白虎は本日何度目の説明になるのか分からないことを、戸惑っている圭熊に説明した。圭熊はそれを聞けば、「へえ……」とこちらに下がってきている天井の海面を見つめた。

「ま、とりあえず、これで残る柱は三本や。他の三本もとつと壊して、とつとアテナを救い出すよ！」

「おうよー！」

二人はお互いの拳をコツン、とぶつけた。これで残る柱はあと三つ。とうとう七つのうちの過半数を壊したのだ。そして、こちら側は四人もいる。力を合わせれば、絶対に勝てる。それに——……。

(御子息さんのことも……絶対に助ける……！)

海底神殿に乗り込んだ元々の目的といえば、リヴァージュを助けるためでもある。ソ口家の平和を守るためにも——白虎は、リヴァージュを助けなければならぬ。白虎は決意を更に固めて、足を前に一歩踏み出した。圭熊もそれに釣られて一歩踏み出した。

そうして、次の柱へと向かうのだが、ふと、圭熊はこちらの柱に向かうまでのことを白虎に話してくれた。

「白虎、聞いてくれるか？」

「うん、どうしたの？」

「……いや、実は、さ」

圭熊はいつものような少年らしい、いい意味でふざけた雰囲気を取っ払って、真剣な様子になった。白虎は一体どうしたのだろう、と圭熊の話に耳を傾けた。

「実はさ、俺、目覚めたのって、あそこの柱じゃなくて、向こうの柱だったんだ」

「向こうの……?」

圭熊が指差した方向へ、白虎は視線を向けた。圭熊は白虎の確認に、こくん、と静かに頷いた。

「それでな、誰も人がいなくて、何したらいいか分からないからお前らのところ来たんだよ」

「……」

白虎は顎に手を当てて、圭熊の話から色々考えた。

(柱に誰もいない……? 海將軍のうちの誰か一人が守護していると聞いたけど、例外と有り得るということ? でも、それにしては……)

「——こ、白虎。おい、どうしたよ?」

「……いや、なんでもない」

突然考え込み始めた白虎に、圭熊が不審そうに声を掛ける。それに気が付いた白虎は、現実世界に戻って、再び目の前に歩みを進め始めた。

「——とりあえず、その柱に行ってみよか」

で、天秤座の槍を用いて柱の破壊にあたったわけである。

(何でこの場だけ海将軍がいらないのか……ちよつと不思議だな)

白虎はそう心の中で思いながら、天秤座のオブジェを聖衣箱の中に仕舞うと、背中にそれを背負って、破壊されたインド洋を圭熊と共に後にした。

アテナとポセイドンの会合場。その扉の目の前で、海闘士二人が対峙していた。一人はヘルメットを深くかぶってその顔はよく見えず、はもう一人は仮面を被り、その顔すら見せようとしなかった。

「シードラゴン……君は一体何を考えているのかね？」

「貴様こそ、何を考えている、クリュサオル」

ヘルメットの方はシードラゴン、仮面の方がクリュサオルである。双方はお互いに対して小宇宙を放ち、威嚇していた。その小宇宙は、海闘士のものではなく、「黄金聖闘士そのもの」の小宇宙だった。特にシードラゴンの方はその黄金聖闘士そのものが強かった。クリュサオルは黄金聖闘士のもの以外に、黒い何かが混ざっていた。

クリュサオルは手に持っていた槍の取っ手の先を地面にあてて「コツン」と鳴らした。「私は何も考えておりませぬ。ただ、ポセイドンの復活と世界の肅清を望んでいる。海闘士として、当然のことしか望んでおりません」

「……本当にそうだろうか」

シードラゴンはクリュサオルに背を向けて、かかとを鳴らし、一步足を踏み入れた。

「本当にそう思っているならば、インド洋の柱をほっぽり出して、こんなところで現を抜かしていないはずだ」

「……ほう」

「現に、インド洋の柱が破壊されたとの情報が入った。これを聞いて、お前はとも思わないのか」

「どうって……」

クリュサオルはフツと声を漏らした。

「別にどうも思いません。七つの柱が壊されたところで、メインブレドウィナを破壊できなければ、聖闘士の負けも同然というもの。守護するだけ無駄というものでしょう」

「……」

シードラゴンはぐつ、と押し黙る。確かにメインブレドウィナを破壊されなければ、こちらの勝機は確実だ。しかし、シードラゴン自身、現状をよく思っていないからこそ、複雑な心境にある。

「ところで、よろしいのですか？ 貴方にも守るべき柱があつたはずでは？」

「……ああ、そうだな」

クリュサオルに言われて、シードラゴンは自分の持ち場である北大西洋の柱へとつくことにした。だが、シードラゴンは心の中にある、クリュサオルに対する疑念がどうしても晴れなかった。

一方のクリュサオルは槍を手にして、その刃を去ろうとするシードラゴンの方へと向けていた。クリュサオルは仮面の下で「フン」と鼻で笑みを浮かべながら、シードラゴンに狙いを定めた。

(これ以上、あの海鬪士に邪魔されてたまるものか……私の計画は、こんな奴に邪魔されるほどヤワではない……)

そうしてクリュサオルはシードラゴンの背中目掛けて手に持っていた槍を投げ出した。そのことに気が付かなかったシードラゴンは、槍が背中に突き刺さって、ようやく自分がクリュサオルに殺されそうになっていることに気が付いた。

シードラゴンは、その勢いから思わず地に膝をつけると、そのまま横にならぬように、地に手をつけてから、クリュサオルの方を振り返った。クリュサオルの顔は仮面をかぶり、表情すら伺えないものの、小宇宙からして、こちらをどこかしらあざ笑っているのは分かった。クリュサオルは仮面の下から、低い笑みを漏らしながら、シードラゴンの背中を踏みつけた。シードラゴンはその圧力に耐えられなかったのか、体を地につけ、そのまま倒れこんだ。

クリュサオルは「クックツ」と少しばかり高い笑みを浮かべて、足でシードラゴンの背中を押さえつけながら、刺さっている槍を抜いた。

「随分とあつさりだな、シードラゴン……。それでも死にはしなかったようだが」

「ぐ、う……。クリュサオル……。貴様はやはり……!」

「シードラゴン……。君の考えなど、すでに読み取っているよ。私をどうにかしようたつて無駄だ」

クリュサオルは槍を肩に乗せ、その仮面をシードラゴンの方へと向ける。シードラゴンは手に力を込めて、そこから立ち上がるうとした。

「し、かし……。クリュサオル、貴様のやっていることは神の怒りを買っても仕方がないこと……。それを分かった上でこんなことをしているのか……!」

「神? はっ、笑わせるな」

クリュサオルは、シードラゴンを踏みつけている足を、その背中からどかし、シードラゴンを解放。シードラゴンは背中からぼたぼたと血を地面に垂らしながら、その場に立ち上がり、クリュサオルの方へと顔を向けた。クリュサオルは「フン」と鼻で笑って、槍の刃をシードラゴンの方へと向けた。

「よいか、聞きたまえ。私は『神』である男だ。最も神に近い男など、私のプライドが許さぬ、いや、許してはならないのだよ」

「……だから何をしても許されると?」

「左様だ。私は神なのだからね」

クリュサオルの言葉に、シードラゴンは口をギユツと押しつぶすように結んだ。クリュサオルは槍を下ろして、シードラゴンに背を向けた。

「最も、アテナやポセイドン、そしてハーデスなど、私にとつては三流神。地上を巡つてまで何もかも統治したいなど、なんともアホらしい神たちだ。だから、私はそのアホどもの代わりに地上も何もかも統治するのだ」

「……代わりに、だと?」

「期待していてくれ。私はこの世界をすべてを統治する神になるのだ……」

クリュサオルはそれだけ言い残して、そこから去つて行った。シードラゴンはその背中姿を身と届けると、槍で刺されたダメージからか、ぐつと口元を歪ませた。そして、無理を押しして自分の持ち場まで走り出した。

(あやつが神になるなど……! もしなつたとして、何が起こるか分からないぞ……!)

一方、その頃、南大西洋の柱には白虎と圭熊が早くも辿り着いていた。白虎と圭熊は辺りをキョロキョロと見渡しながら、誰かいないか確認していた。そのうち、白虎は何か、感じ覚えのある小宇宙をその体で読み取っていた。

(この小宇宙の感じ……どこかで……)

その小宇宙の正体が、白虎たちの目の前に現れるのは決して遅くはなかった。白虎たちが、柱に辿り着く前に、それは現したのである。

「まさか、ここまでくるとはね。青銅聖闘士にしては上出来だな」

「……この声……」

どこかで聞いたことがある、男性の声。男性はフルートを片手に、オレンジ色の鎧をまとい、そこに現れた。周りとは明らかに違う、光に透けるような紫がかった銀髪に、憂いを感じ取れるような紫色の瞳。白虎と圭熊は、この姿を前に見たことがある。

「海魔女、セイレーンのヴィオラ……」

そう、海魔女セイレーンのヴィオラだった。ヴィオラは白虎と圭熊の姿を、目を細めて見つめながら、そっちの方へと歩み寄った。

「聖闘士、音楽を奏でる者同士、また会うことができ嬉しいよ……と、言ってる暇もないか」

「ああ、その通り」

白虎は足を一步前に出してから、腰に手をあてて、睨みつけるようにヴィオラの後ろにある巨大な柱を指差した。

「私たちは、海界の七柱を壊すためにここにやってきた。アンタと会話を交わすために、

来たわけじゃない」

「……やはり君たちが柱を壊していたのか」

ヴィオラは特に驚く様子もなく、ただ、目の前に立ちはだかっている白虎を見つめていた。

白虎は自分の横に立っている圭熊に、言い放った。

「圭くん。この場はわいに任せて、先に行つてくれへん？」

「な、何でだよ！ お前だけに任せるわけには……」

白虎は、圭熊の口に自分の指を差し出した。どうやら、これ以上は何も言うな、というこもらしい。圭熊はそのことを察すると、それ以上何も言わなかった。白虎は続けた。

「わいは、音楽の奏者として、あのセイレーンとちゃんとカタをつけなければならん。分かって？」

「……ああ、分かったよ！ 絶対に勝てよ！」

「うん！」

二人はお互いの拳を重ねてから、力強く微笑み、コクン、と頷いた。それから、圭熊はニツと笑みを浮かべながら、ここから去って行った。

白虎はその背中姿を見送ってから、再びヴィオラの方へと視線を向けた。

「それに、前に一度戦った時のこと、忘れたわけじゃない。セイレーン、それはアンタも同じだろう？」

「……ああ、そうだな」

ヴィオラはコクンと頷いた。

「あの時はリヴァージュ様のために、君から戦いを放棄したが……」

「無論、今回は違う。完璧たる戦場で、最後まで戦い切る。今回は何も障害はない。互いにとつては……」

「まさに、好都合ッ！」

その瞬間、二人の拳が衝突した。白虎とヴィオラは拳を震わせながら、己の勢いを保っていた。

「少しは腕を、小宇宙を上げてきたようだな！ 青銅聖闘士ッ！」

「そつちこそ！ 小宇宙の勢いが、以前と今でまるで違うッ！」

ガチン、とそこでお互いの拳が離れる。二人は足を摩擦させて、地に足をつけた。それほどまでに、お互いの小宇宙は燃え上がっているのである。

ヴィオラは体制を整え直してから、白虎に問いた。

「青銅聖闘士、君の名を聞かせていたどうか」

「ああ……私は龍星座の白虎だ」

「白虎か……奏者の一人として、僕の胸にその名を刻んでおこう」

ヴィオラはフルートの吹き込み口に自分の唇を重ねた。白虎はそのヴィオラの構えを見て、即座に身構え、己の胸に手を当てた。ヴィオラはフツと微笑みを浮かべた。

「君とこうして音楽で対決するのは二回目だね、白虎」

「ああ。フルートと歌……どちらが勝つか……この場ではつきりさせてもらおう！」

そう言いながら白虎は構えた。しかし、ヴィオラはその隙を与える暇もなく、すぐに攻撃体制へと入った。

「君に歌わせる前に、手を打たせてもらおう！ デッド・エンド・シンフォニー！」

ヴィオラのフルートから奏でられる音色が、白虎の体全体を震撼させた。白虎の身体中にある感覚の全てが、一気に奪い取られていくようだ。

「があっ、あっ……！」

そのせいか、声を出そうとしても、出すことができない。ヴィオラは先に白虎の声を潰して、そこから一気に畳み掛けるつもりなのだろうか。もし、そうなれば白虎の勝機もほとんど失ったも同然。

（こっちの武器を失わせるなら……あっちの武器も失わせなきゃ、対等にならない！）

だが、白虎の脳裏に浮かんだのはそれだった。こちらの武器がなくなるのならば、あちらの武器もなんとかする。歯には歯を、目には目を、だ。

まず、手始めに白虎はヴィオラの方まで歩み始めた。だが、それを細目で見ているヴィオラは、白虎がこちらに来るのを拒否するかのようになり、デッド・エンド・シンフォニーの威力を強めた。ヴィオラの元から、とてつもない強風が吹いてくる。

「ぐうっ……!」

「ザ・ストリーム・シンフォニー!」

一気に白虎に向かって暴風が吹き荒れた。白虎の体は浮き上がりそうになり、その上目を開くことができない中でも、ヴィオラの元へと向かおうと、足を一步一步踏み出していた。しかし、ヴィオラの暴風は決してそれを許すわけではなかった。

あともう少しというところで、白虎の足は暴風によつてすくわれ、そのまま向こうまで吹き飛んだ。

「がはあっ!」

白虎は勢い良く背中から南大西洋の柱へとぶつかり、そのまま意識を朦朧とさせた。視界がぼやける中で、白虎はヴィオラの方を強く睨みつけた。ヴィオラはフルートを弾き続けたまま、白虎の脳に小宇宙で直接語りかけた。

(白虎……僕からフルートを取り上げようとしても無駄だ。こうしてストリームがその邪魔をするのだからね)

「念、話ッ……!」

(そして、今までの海闘士は奇跡で勝てたようなものだが……僕に関してはそうは行かない。実力も、何もかも、差がある)

「……………っ!」

(そう、目的に対する意志の強さもね。僕と他の海闘士ではあからさまに違いすぎるのだ)

ヴィオラはザツと足音を立てながら、白虎の方へと近付いた。

(僕は本気でこの世界を肅清したいと思っている。罪もない人々を殺す世の中を、ね)

ヴィオラはフルートを奏で、弾き続けた。それは綺麗な旋律だった。しかし、どこか熱意がこもった、情熱的な、そして、憎しみに満ちた重いメロデーでもあった。ヴィオラのその決意は、その音色からしても伊達ではなく、かなり重いものとして受け取ることができる。ここから先は、誰にも邪魔させず、通させず。そこには確かにヴィオラ以外の何者も入れない何かがあった。

白虎は、その重き旋律をその身に受けながら、そこからゆっくり立ち上がった。確かにヴィオラの言う通り、罪もない人々を殺す世の中というのは、一度真つ新たな状態にしてから、新しく作り直し、肅清を加えた方がいいのかもしれない。だが、白虎は今一度、思う。

「それでっ……………それで肅清できるんだったら……………とつくの昔に実行してるやろツツ!!!」

白虎は大声でそう言い放てば、「ハーツ、ハーツ」と息を立てながら、ヴィオラの方をギロツと睨みつけた。ヴィオラはフルートの演奏を止めて、スツとそれを下ろした。

「何を言う。粛清しようとしたところで、アテナに邪魔されるんだぞ」

「アテナがポセイドンの計画を邪魔すんのは、その『粛清』が必要ないからだ！ 地上のことはアテナが全て把握してる！ その気になったら、アテナが粛清し直すに決まってるだろう！」

白虎は体制を整え直しながら、ヴィオラの方へと歩みを進めた。

「セイレーン、アンタ、根本から……原動力から間違ってるよ。『恋人が殺されたから、世界を粛清する』ってさ……この世界は、アンタのためにあるわけじゃない！」

「僕が間違っている？ ふざけるな！ 僕は至極真つ当なことを言っているじゃないか！」

「そういうのが独りよがりなんや！ 恋人を、大切な人を失った辛さは、わいにも分かる！ でも、昼ドラの恋愛関係よりも筋が通ってない理由で、ポセイドンに加担する方が分からへん！」

「この世界の理不尽さは、常軌を逸しているんだと言いたいんだ！」

ヴィオラは小宇宙を激しく揺るがしながら、燃やし始めた。白虎に自分の意志を否定されたことにより、怒りが湧き上がっているのだろう。白虎はそのヴィオラの小宇宙を

その身に浴びながら、相手を見据えていた。

「まあ、君のように真つ当で綺麗な心持ち主には、僕の考えは理解できないだろうが……僕には君のその真つ当な心が理解できない！」

「……」

「自分の根本は人を助けることにあるなど……全くもって理解不能だ！」

ヴィオラはそう言った途端、再びフルートの吹き込み口に口を付けた。

「その生意気な口を閉ざしてあげよう、デッド・エンド・シンフォニー！」

「——っ！」

ヴィオラがその音色を奏で始めた途端、白虎の五感が瞬く間に奪われて行く。先ほどとは打って変わって、完全に憎しみを込めた音色へと、そのフルートの音色は変貌を遂げていた。

白虎は、それがとても悲しく、辛いものだった。最初、ヴィオラの音色を聞いた時は、非常に心惹かれそうになったものだ。世の中にはフルートでこんな綺麗で儂い音色を出し、演奏できるのか、と。そして、それで観客たちを引きつけてしまうのか、と。同じく音楽を嗜む白虎からしても、その音色は心地よいもので、それに合わせて鼻歌まで歌ってしまうほどだ。しかし、今はどうだろうか。ヴィオラはその音色を武器として使い、しかも、その音色は普段とは違い、憎しみがこもっている、黒い音色だった。確か

に白虎は、綺麗で儂い音色をどうして武器に使えるのか、とは最初は思ったが、今現在のヴィオラのフルートの音色にも、とても悲しく思った。音色というのは、その奏でる人物の人の心に影響されてしまうのか、と。

もし、こんなヴィオラの姿を見た、ヴィオラの恋人はどう思うのだろうか。もし、白虎がその恋人だったら、どうして彼がここまで変貌してしまったのか、訳が分からず、そして悲しくもなるだろう。今までの優しい音色を奏でていた彼とは違うのだから。

無論、白虎は決着をつける前に、暴走しているヴィオラを止めたいと思っていた。出会った時から、ヴィオラは恋人を失ったショックから、どこか狂ったように暴走していると思えないのだ。ポセイドンに着いている闘士としてではなく、彼個人として。

白虎はこちらに襲ってくる重い音色に耐えながら、再びヴィオラの方へと歩み寄ろうと足を歩んだ。このままヴィオラにやれられてしまうわけにもいかない上に、この過ちを背負わせたまま、ヴィオラに恋人の元へと行かせてやることはできない。

ヴィオラはフルートを奏でながら、未だこちらに歩み寄ってくる白虎をギンツと睨みつけた。

（まだこちらに歩み寄ってくるというのか！ 何度やったところで無駄だというのが分からないのか！）

「分からないよ！ だって……まだ、諦めてないもの！」

(小癪なっ……!)

「ザ・ストリーム・シンフォニーッ!」

フルートの音色の音波によってできた暴風が、再び白虎の方へ向かって吹き荒れた。その暴風の激しきは、白虎のまどつている聖衣がヒビを入れて物語っていた。だが、白虎はそれでもなお、こちらに歩み寄ろうとしていた。

(くっ……! ……これならどうだ!)

しつこくこちらに歩み寄ってくる白虎に向かって、暴風の威力を強めた。これならさすがの白虎もこちらに歩み寄ることはできない。だが、白虎はその暴風に対して、地面に這いつくばり、抵抗を少なくしようとした。

(な、なんだと!)

ヴィオラはその白虎の姿に目を見開いた。何としてでもこちらに歩み寄ってくるつもりなのか、この聖闘士は。そして、白虎は、先ほどからヴィオラしか見ていない。でなければ、ここまでしつこく歩み寄ろうとはしなかった。

ヴィオラは、こちらに歩み寄ってこようとする白虎に対して舌打ちをしながら、フルートの音色の焦点をストリームから、デッド・エンドの方へとシフトしていった。

「デッド・エンド・シンフォニーッ!!」

「ぐっ!」

白虎の動く体が止まった。ヴィオラに近付けば近づくほど、己の五感が失われている。やはり、いくら無鉄砲な白虎とはいえども、己の五感は惜しいということか。歌を歌う以上、五感を失うことは死と同等なのは、きつと、白虎も肝に銘じているのだろう。ヴィオラはそこを突き続けるように、デッド・エンドの音色を奏で続けた。

白虎はこちらに襲ってくるデッド・エンドの音色に、ハアハアと息を切らしながら、グツと拳を握って、体に力を入れた。そして、手のひらを地面につき、膝をぐぐつとついで、その場に立ち上がろうとしていた。ヴィオラはそれを細目で見ながら、フルートを奏で続けていた。

「ふっ……うっ……」

視界がぼやけ、目の焦点が合わない。明らかにデッド・エンドにその体を蝕われている典型だった。五感を失ったことは以前にもあったが、あの時は一個一個奪われたもので、こうして改めて一斉に失い出すと、それこそ絶望の淵に立たされたようにも伺える。しかし、白虎はそれでも諦めようとはしなかった。だから、立ち上がれるのだ。

ヴィオラはフルートを吹きながら、心の中で軽く舌打ちをかました。ヴィオラからすれば、白虎の諦めの悪いその精神が全くもって理解できないのだ。いや、そもそも、白虎のその真つ当な姿勢すら理解できなかつた。一体、何故、ここまでして立ち上がろうとするのか。ここまでされたら普通は降参するだろう。

白虎は、身体中の感覚が失われていく中で、再びヴィオラの方へとその足を進めた。

「絶対……絶対、諦めないッ……！」

足はよろつき、まともに歩けるような状態ではない。それは白虎自身一番分かっていたこと。しかし、それでも白虎はヴィオラの元まで歩き出した。だが、ヴィオラは演奏を続けながら、白虎の全身にある神経を順調に奪い続けていた。

(白虎よ……いくら諦めの悪い君でも、ここまでできたら、小宇宙も完全に弱っている。大人しく負けを認めた方が、潔いぞ)

ヴィオラは、念話でその旨を白虎の方へと向けた。いくらなんでも、ここまでできたら、諦めた方が平和に終わるというものだ。だが、白虎はこちらに闘志を燃え上がらせたまま、諦めようとする素振りは見せなかった。

「確かに……そっちの方が平和に終わるかもしれない……。でも、それでわいが納得するんなら、とっくにしてるッ……！」

(……フン、何という往生際の悪さだ！)

「デッド・エンド・ストリーム！」

フルートの音色によって起こる暴風が、更に強さを増した。それは、周りの地面やものを浮き上がらせるほどで、白虎など天高く舞い上がるほどだろう。無論、その通りに、白虎は天高く舞い上がった。

「くっ、ううっ！」

(ワイトの時ほどでもないけど……！ ダメージを受けた今のわいには……！)

十分な鉄槌になった。白虎はある程度まで舞い上がると、頭から地に落ちて、そのまま気絶した。

ヴィオラは白虎の元まで歩み寄り、相手が気絶したのを確認すれば、息をついて、その場に膝をついた。「ハアハア」と息を荒げ、顔には幾つもの水滴、いわば汗が滴っていた。どうやら、今の白虎との戦いで、体力を相当消費したらしく、そして、リヴァージュを見張るために休んでいなかった影響が今になって出始めたのだ。

(——っ、いけないっ……！)

ヴィオラは歪み始めた視界を抑えるように、その視界を手で覆った。きつと、このまま白虎と戦い続けていれば、自滅の道一本だったであろう。そう考えたら、このタイミングはとても良いタイミングだったのかもしれない。

「はあっ……」

(このままではダメだ……とにかく、柱を死守しなければ……)

ヴィオラは立ち上がる。だが、その途端に、視界はグラグラと揺れてしまい、まともに立てる状態ではなかった。しかし、ヴィオラはそれでも、立ち上がろうとした。己の目的と、世界の粛清のために。

「絶対に、譲る、もの、かつ……！」

ヴィオラがそう呟いた時だった。

「ッ！」

(な、なんなんだ、この小宇宙は……！)

唐突に湧き上がってきた、自分以外の小宇宙。その小宇宙の出処は、一瞬にして分かった。

「白虎か！」

そう、白虎だった。白虎は、気絶から目を覚まして、小宇宙を燃やしながらその場で立ち上がろうとしていた。ヴィオラは目を見開いて驚きつつも、すぐにフルートの吹きこみ口に己の口をあてた。

「本当に往生際が悪いッ……！」

そして、その吹き込み口に息を吹き込もうとした瞬間だった。

「！」

何者かが、自分の腕を掴み、演奏を阻止しようとしていたのだ。ヴィオラはバツとその掴まれたところを、その目で追った。

——白虎が、ヴィオラの腕を掴み、ジツとその顔を見つめていた。

「言つたやろ……まだ、諦めてない、と！」

白虎は上半身の筋肉に力を入れて、ヴィオラの腕を掴んだまま、聖衣を己の身から離した。ヴィオラはあんぐりして、突然脱衣した白虎を見つめていた。

「君は……死ぬつもりか……!?!」

聖闘士の命とほぼであると言われる聖衣を脱ぐということは、つまり、死を意味する。だが、白虎は、ヴィオラが驚いている前で、ニツと笑みを浮かべた。

「アテナの戦士ならば、死は元より覚悟の上。それに、背中の虎ちゃんも解放されてすごい嬉しそうやしな」

そう言うと、白虎はヴィオラに背中を向けて、その虎ちゃんを見せつけた。その背中には、一匹の白い虎の顔が浮かび上がっていた。ヴィオラはその虎から何かを伺ったのか、若干後ずさった。

白虎は、ヴィオラの方に前面を向け、ニツと八重歯を光らせた。

「さあ、聞くがいい! 龍の雄叫びを!」

4 3 : 「本音の覚悟」

ギリシャ聖域十二宮。聖衣のところどころに水たまりがたまるぐらいの大雨が降っている中、ラピスは双児宮前の階段で、傘もささずに、空をジツと眺めて見上げていた。ラピスや他の聖闘士たちも、この大雨の正体はどこかしら知れ渡っていた。だが、皆あえて口に出さない。教皇から正式な発表がない以上、下手な噂は現状の聖域では許されないのだ。

ラピスは、「ふう」と息をつけば、双児宮の建物内へと足を運んだ。これ以上外にいては、風邪を引いてしまう。と、その時だった。

「おや、双子座の君はラピスかい？」

優しく、穏やかな老人の声。ラピスはどこか聞き覚えがある気がして、その声の方へと振り返った。そこにいたのは、元・牡牛座の聖闘士、コーラルだった。コーラルは優しく微笑みながら、軽く会釈をした。ラピスは慌てながらも、それに合わせて会釈をすれば、コーラルはクスクスと笑みを浮かべた。

「なに、そんなに焦らなくともいいんだよ？ 今の私はしがない老人なのだからね」

「い、いえ、そういうわけにはいきません。引退なされたとはいえ、心はアテナの聖闘士

であることは変わらなすから」

「はは、そうかい」

コーラルは「真面目だね」と後から付け足してから、ラピスに一枚のタオルを差し出した。ラピスはきよんとしながら、その差し出されたタオルを見ていた。コーラルはニコニコ笑みを浮かべながら、相手の頭にそれをかぶせてやった。

「すごい濡れていたからね。聖衣にも水たまりがいくつかできてるし」

「あつ……」

ラピスはコーラルに指摘されるまで気が付かな使ったのか、顔をちよつとだけ赤くして「す、すみません」とペコツとお辞儀した。コーラルは「いいんだよ」と、お辞儀してくるラピスに申し訳なさそうに笑みを浮かべながら言った。ラピスはそんな相手を見て「更に気を遣わせてしまった」と思ったのか、ブンブンと首を横に振って、「いえいえ！」と照れ臭そうに微笑んだ。

「す、すごい嬉しいですから……。こういう風に気遣いされるの、すごい久しぶりだったもので」

「……そうか。そういうえば、君は聖域だと年長さんのうちに入るんだったね」

と、コーラルは見事にどんよりした空を見上げていた。ラピスは渡されたタオルでワシヤワシヤと髪の毛を拭きながら、「年長さんか……」とポツリと呟いた。

「でも、教皇とか見てると、年長とかそういうのあんまり実感沸かないな……しかも、他の同年代の仲間はいなくなっちゃったし」

ラピスは目線を斜め下にやりながら、昔の仲間達や過去のことを思い出していた。もうあの頃には戻れないのだ、とラピスは強く実感していた。コーラルはそんなラピスをただ、黙って見つめていた。

「さあ、聞くがいい。龍の雄叫びを」

白虎は白い八重歯を見せつけるように笑みを浮かべ、両腕を胸元でクロスさせた。ヴィオラはそんな白虎に対して、「無駄だ」それでも言うように、フルートの吹き込み口に自分の口をあてた。ヴィオラ自身、最初は白虎の突然の脱衣には驚いたものの、相手は青銅聖闘士。そう身構えるまでもないはずだ。

しかし、白虎の小宇宙の燃え上がりようはただのものではないのも確かであり、油断も隙も無いのも事実だった。ヴィオラは、何故、自分がここまで追い込まれているのか分からなかった。しかし、こちらの勝機は確かなはずだ。ヴィオラはフルートにその息を吹き込んだ。

「デッド・エンド・シンフォニー！」

「遊舞乱虎！」

フルートの音色と白虎の歌声が同時に鳴り響いた。最初に出会った時とほぼ同じ状況だ。だが、あの時とは違い、それぞれの胸にそれ相応の覚悟と決意を抱いていた。

「寂しさを感わす風に、何を問えばいい？」

白虎は歌い出したかと思えば相手に向かって走り出し、蹴りを繰り返した。ヴィオラはフルートを吹きながらも、それを軽々と避けた。

「今を問うか、それとも過去を問うか」

だが、ヴィオラが避けたところで、白虎の攻撃は収まらない。白虎は勢い良く飛んで、そのままヴィオラの首目掛けて蹴りを入れようと試みた。

「そして、自分自身に何を問おうか——……ッ！」

ヴィオラの首に蹴りを入れようとした瞬間、ヴィオラの片手が白虎の足を静止していた。ヴィオラは片手と口で、フルートの音色を奏で続けていた。

「自分を問うか、それとも他人を問うか」

白虎は静止されれば、そのまま突き破ろうとはせずに、すぐに足をヴィオラの手から離して、地に足をつけた。

（片手でも演奏できる技術を持っているなんて……さすが海闘士。でも、そう派手な拳や蹴りを、こちらにくわえることはできないはず……）

ヴィオラはフルートという道具を扱っている以上、白虎のような派手な攻撃には出ら

れない。白虎はできればそこを突きたいと思っている。そして、この演奏が終わるまでヴィオラを倒さなければ、技の名前通りにこちらがデッド・エンドしてしまう。そんな前にも、決め手を打たなければ。

「もう、覚悟はできているんだ、この身を捧げるぐらいのことならば」

と、なると、もうこの手が今の白虎にできる最大限となる。白虎は即座に踊りの構えに出た。本来ならば、踊り（舞い）と歌で構成される遊舞乱虎。血を吐き出そうがなんだろうが、本来の遊舞乱虎を相手にぶつけるしかない。それが、白虎の今の最大限。

「さあ、アテナの戦士よ、今こそ忠誠を誓え——ツツ!!」

白虎の歌声が、ヴィオラのフルートのシンフォニーにぶつかつた。ヴィオラは若干ながらも相手の歌声に押されていることに気が付いたのか、フルートに乗せる小宇宙を強くした。

「何も恐れることはない、誓ったのならば、その誓いを胸にしてエエエエ——ツ！」
「ぐうっ！」

（以前は僕のフルートに対抗しきれても、ダメージは免れなかつたはず……！　なのに、何故、この青銅聖闘士はこうして僕と対等に渡り合えるのだ……！）

やはり、小宇宙をどう燃やしているのかの違いか。白虎の小宇宙は、今までよりも燃え上がっており、下手をすればこちらと同等の小宇宙を燃やしていた。ヴィオラは降り

かかってくる歌の圧力に、フルートの音色の圧力で対抗しようにも、相手はその勢いを跳ね返すぐらいいに、その圧力に対抗しようとしていた。

「何も怖がらなくともいい、さあ、飛び立とう空へとオ——ッ！」

「くっ……………」

（いけないこのままではっ……………！）

ここちらが吹き飛ばされてしまう。ヴィオラはそうなる前にも、フルートの音色に乗せる小宇宙の乗せ方を変えていった。

「明日を照らし出せ、もう恐れない……………」

「させるか……………」

「未来へとオオオオオオオ——ツツ!!!」

「デッド・エンド・クライマックスウウウウ——ツツ!!!」

白虎の咆哮と、フルートの雄叫びがお互いにぶつかり合う。白虎はクライマックスに入ったらしいフルートの音色を耳にしながら、顔をしかめ始めた。

（体が……………熱い……………！）

身体中という身体中が熱くなり始めたのだ。血が沸騰して、その場で爆発しそうになるぐらいに。白虎は何をしたのか、とチラッとヴィオラの方へと視線を向けた。ヴィオラはフルートを奏でながら、白虎の脳内に念話を向けた。

(デッド・エンド・クライマックス……デッド・エンド・シンフォニーの最高潮部分だ。この曲を聴けば最後、四肢がバラバラとなる)

「ぐう、うう……！」

(さあ、無駄な足掻きはやめて降参したらどうだ)

自分のフルートの音色により苦しみ出している白虎を冷めた目で見つめながら、直接脳内へと語りかけた。ここまで言ったら、白虎も引くであろう。さすがの聖闘士といえども、こうしていると己の命は惜しいはずだ。しかし、そう思ったヴィオラの耳に入ってきたものは、白虎の歌声だった。

「目のつ……前にある、草木に……何を問おうかつ……、自分の誇りか……、それとも、覚悟かつ……！」

白虎はヴィオラのフルートの音色によるクライマックスに息を殺されかけながらも、歌を歌い続けていた。ヴィオラはその驚きから、思わず演奏する指を止めた。

(な、何故だ……何故、そこまでして戦おうとするんだ、君は！)

四肢がバラバラになると宣言したのにも関わらず、どうしてこのように自分に歯向かい続けるのか。ヴィオラは不思議でたまらない様子で白虎を見ていた。白虎は、念話に對して念話で答えた。

(この歌は、アテナに對する宣誓の曲、言わば忠誠曲。死は元より覚悟の上つて、さつき

も言うたけど、つまりそういうことなんよ。聖闘士のアテナに対する忠誠というのは、それほど深きもの。それはポセイドンに従ってる海闘士、そしてアンタも同じやないの？

「——っ！」

今のヴィオラの心に、はつきりと心の迷いが出た。自分が忠誠を違っているのは確かにポセイドンだ。ポセイドンのはずなのだが、どうしても心に引つかかる。本当にポセイドンに忠誠を誓っているのならば、こんな風に心に戸惑いが出ないはずだ。しかし、何故、こうして戸惑っているのだ、自分は。

そして、その間にもヴィオラのフルートの音色は、一瞬ながらに揺らぎ始めていた。
(……迷いが始めた、か)

白虎は、その揺らぎ具合からそう悟った。ヴィオラ of 思想から、何となく悟ってはいた。亡くなった恋人のためにここまでする覚悟はできたものではあるが、そんな彼の口から、ポセイドンに関する一切出ていないことが、どうしても白虎の中で、どうにも歯痒い感覚となつて、もやもやしていた。

そして、白虎は相手の音色から、彼の本心はこうではない、と思ひ始めていた。今の彼はポセイドンに世界の肅清を望んでいるわけではない。ましてや、世界を一回真つさるにすることすら望んでもいないかもしれない。彼は海闘士になつた時点で、そういう

目標は立てたであろうが——もつと、それ以上に彼の心の中に入り込むものがあるのだ。

(音色の威力も弱まっている。これ以上、攻撃するのも……悪いか)

白虎はヴィオラの攻撃力が弱まっているのを察すると、こちらの小宇宙もすぐに下げ、遊舞乱虎の威力を振り払った。最後まで放っていない上、それなりの余波が来るだろうが、今回は最後まで放っていない上に、ヴィオラのフルートの音色の威力に合わせていたためか、余波は起きなかった。ヴィオラは技を取り払った白虎の方を見つめてから、フルートの演奏を止めて、それを下げた。

ヴィオラは目を斜めに伏せて、フルートをギョツと片手で握りしめた。

「……何のつもりだ」

「あのまま戦っても、勝敗は決まっている、って思って。だから、これ以上の攻撃は無駄だと思っただんや」

「ということとは、つまり、諦めたのか？」

「いや、違う。諦めてなどいない。ただ……」

白虎はブンブンと首を横に振って、ヴィオラの顔とフルートを交互に見つめて、言う。「ただ……アンタの心の迷いがあの演奏から見えたから。ブレブレの旋律で、どうやって技を放つつもりなん？」

「…………っ！」

ヴィオラの目が勢い良く見開く。それから、ヴィオラは膝と手をついて、地面へと視線を向けた。白虎はそんなヴィオラに向かって「悪いけど」と、追い打ちをかけた。

「そんな状態じゃ、どんなに実力の差があるうがなんだろうが、アンタの負けは確実。自分の覚悟が定かでない者に、勝利は絶対に来ない」

「…………」

ヴィオラは、黙り込んだまま、白虎に何も返さなかつた。いや、返す言葉がなかつたのだ。白虎はヴィオラの元まで歩み寄れば、相手の視線に合わせるようにしやがみ込んだ。そして、優しく話しかけた。

「別にな、覚悟が定かではないことを否定しているわけやない。むしろ迷いがあつてもええんよ。でもな、中途半端に覚悟が揺らいでる状態で、戦場で勝てるはずがないのよ。わいは、そんな状態のアンタとは戦いたくない」

「…………」

「本当は、恋人のために世界を肅清させるつてのは建前に近くなつとるんやろ？ 最初は本気だったけど、いつしか、海鬪士である自分を忘れないための言葉へ変わつていった。違う？」

「…………っ」

ヴィオラはブンブンと首を横に振って、白虎の問いに対して「そうだ、お前の言う通りだ」といった意思を見せた。白虎は「そっか」と呟いて、さらに問う。

「アンタのその、『恋人のための粛清』を覆してるのは何？」

「……」

本当はヴィオラは薄々感じていた。世界を粛清したところで、恋人のエリーは絶対に喜ばない。エリーは自分に対して、もつと別のことを望んでいるだろう、と。そして、ヴィオラは今、自分が何したいのか、どうしたいのか、本人がはつきりしていなかった。恋人のためと口語してきたものは、もはや今となつては建前。これ以上は、自分を誤魔化すことはできない。

ヴィオラは地面の上で、ギユツと拳を握った。白虎に問われて、自分の脳裏に過つたのは、リヴァージュの笑顔だった。そして、シードラゴンに言われた、「リヴァージュをポセイドンとして仕立て上げる」——ヴィオラはこの言葉も思い出し、その本心を徐々に明らかにしていった。

（僕は——……）

「僕は……」

ヴィオラはどうとう何かが見えたのか、声を発した。白虎は、ただ、それを黙って見つけていた。そして、ヴィオラは自分の今の意思をその声で紡いだ。

「僕は……リヴァージュ様を……リヴァージュ様を守りたい！ いや、失いたくない！ ポセイドンとしてのリヴァージュ様でなく、自分がお慕いしている少年の一人としての、リヴァージュ様を、エリーの時のように失いたくない！ そして、ポセイドンに仕立て上げたくないんだアツ！」

ヴィオラは気が付けば、顔を上げて白虎を見つめていた。目に涙もうつつすら浮かべて、ただ、ただ、白虎を見つめていた。白虎は呆れたようにため息をつき、しかし、ニコツと笑みを浮かべた。

「それが、アンタの本音で間違いない？ 大丈夫？」

「ああ、勿論だっ……！ 勿論だともっ……！ これ以上、自分に嘘はつけないっ……！」

ヴィオラはボロボロと涙を流し、号泣した。今までの自分の愚かさをとても憎く感じ得ているのだ。どうして今の今まで、こんな簡単なことに気付けなかったのか。いや、気付くタイミングはたくさんあったはずだ。ああ、なんて愚かなのだろう、自分は。ヴィオラはゴシゴシと目をこすり、涙を拭き取った。

「今なら……今なら、君の真つ当な生き様も分かる気がするんだ……。大切な物が増えたら……守りたくもなるし、助けたくもなる……。」

「うん……やっつと、分かってくれた？」

白虎はニコツと笑みを浮かべて、立ち上がった。

「わいも両親失った時は、アンタのような考え方してたんよ。だから、アンタの気持ちは本当に痛いほどよく分かる。でも……そんな気持ちのまま生きてたって、親は喜ばないから……」

「……そうか」

ヴィオラは白虎の話を聞きながら立ち上がる。ヴィオラは首にかけていたペンダントを見つめ、それをギユツと手で握り締めた。

白虎はそこまで話し終えると、チラツと横目で天秤座の聖衣箱を見た。そして、そういえば、と自分の役割を白虎は思い出し、それから、天秤座の聖衣箱の方へと向かった。箱の蓋を開け、聖衣の武器を取り出す。そうして白虎の手の中に収まったのはトンファーであった。白虎はトンファーと柱を交互に見ながら、ヴィオラの方もチラリと見た。このまま柱の守護者であるヴィオラを無視して、破壊に専念して良いものなのか、白虎はどうも決めかねるのだ。

しかし、ヴィオラは白虎の視線を感じると、フルフルと首を横に振った。

「ポセイドンへの裏切りを覚悟した以上、もはや僕は海闘士ではないし、柱を守護する義務もない。遠慮なくやってくれたまえ」

「……うん、わかった。ありがとう」

白虎はヴィオラの言うことにコクン、と首を縦に振って、トンファー片手に柱の目の前に立った。そして、トンファーに自分の小宇宙を込める。

「D a m m i i l p o t e r e — L , a r m a t u r a d e l l a B i l l a n c i a —」

歌による、小宇宙上昇。白虎は目をギラギラとギラつかせ、ザツと構えを取った。十分に小宇宙を燃やしたところで、白虎は柱の方へと勢い良く走り出した。

「はあああああ——ツツ!!!」

そのまま飛び上がり、トンファーを柱の方へと打ち付ける。白虎はトンファーを打ち付けたのを確認すれば、宙で回転し、柱に背を向けて右足と左膝を地に付けた。その瞬間、柱はトンファーを打ち付けたところからピシピキと音を鳴らし、そこから、一気に砂煙を発して、ドシャアツと音を立てながら崩れていった。白虎はそれにより巻き起こった風を背から受けながら、その場に立ち上がった。

——南大西洋の柱、撃破。これで残りの柱は七本のうち、あと一本となった。

白虎は柱を破壊すれば、すぐにヴィオラの方へと歩み寄って、話しかけようと——した時だった。

「！・ ヴィオラさん!?!」

「っ、は……」

ヴィオラは顔を真っ青にして、その場に倒れ込んだ。白虎は突然倒れこんだヴィオラに、驚きを隠せない様子で、すぐに駆け走った。そして、ヴィオラの上半身をその手で持ち上げた。

「ヴィオラさん、どうしたんよ！　こんな、いきなり倒れ込むなんて……！」

「いや……心配はいらないさ。日々の疲れが溜まっているだけだ。それよりも……早く北大西洋の柱へと向かってくれ」

「で、でも……！」

「安心したまえ、僕は死にはしないさ……だから、行ってくれ」

「……分かった」

白虎はコクン、と頷いた。ヴィオラはフツと微笑みを浮かべた。

「北大西洋の柱の守護者であるシードラゴンはきつと、君たちの味方になってくれるだろう……彼はこの戦いの裏事情を察しているようだ……」

「裏事情……？　なあ、それってなんなの……」

気が付けば、ヴィオラはスウスウと寝息を立てていた。白虎は「はあ」とため息をつきながら、適当な場所にヴィオラを寄り掛からせ、「よし」と、ぱんぱん、と手を払った。そして、天秤座の聖衣箱を背負い、北大西洋の柱の方へと走り向かった。

(ヴィオラさんの言う『裏事情』って、一体……？)

「い、これは……！」

北大西洋に辿り着いていた翔馬たちが見たものは、信じられない光景であった。なんと、この柱の守護者であろう海闘士が、背中から血を流して倒れていたのだ。翔馬と水鹿は敵と分かっているながらも、すぐに海闘士の方へと駆け寄り、その上半身を起こした。

「おい、大丈夫か！ しっかりしろ！」

「ん……ん……」

どうやら意識はあるようで、微かながらも翔馬の問いかけに答えてくれた。翔馬と水鹿がそれにホツとしたところで、後方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「翔馬ー！ 兄ちゃんっ！」

大熊星座の圭熊である。翔馬と水鹿は圭熊の姿を見るなり、手を振って、自分たちはここにいることを相手に示した。圭熊は翔馬の方へ駆け寄ると、海闘士と二人を交互に見つめて、不思議そうに問いた。

「おい、どうしたよ、この状況。さすがにお前ら二人力合わせても、こんな綺麗な撃ち方はできないだろ」

「……ああ。俺らがここに来た時には、すでにこうなっていた」

翔馬はコクン、と頷いて海闘士の方を見つめた。圭熊は「とりあえず」と、適当な場

所に指を差した。

「お前が持ち上げてるままじゃ難だし、そいつ、あつちにも寄り掛からせようぜ」

「……ああ」

翔馬は圭熊の言うことに首を縦に振り、その通りに海闘士を寄り掛からせる場所に移動させた。その間、翔馬はこの海闘士から、どこか懐かしい小宇宙を感じ取っていた。出会ったのは初めてなはずなのに、どうしてここまで懐かしい気分させられるのか、いささか疑問だった。

翔馬たちは海闘士をその場所に下ろすと、「ふう」と息を吐いて、海闘士を囲うように見た。海闘士の顔はヘルメットを深くかぶっていることによりまったく見えず、一体どうなっているのか分からない状態だった。翔馬は何となくだが、このヘルメットを外さなければならぬ気がした。

「なあ、二人とも。こいつのヘルメット……外してもいいかな……？」

「ああ、別に大丈夫だと思っぞ」

「おう」

翔馬の問いに、微笑みながら肯定する二人。翔馬は不安そうな表情から、どこか安心したようなものになり、二人の肯定にコクン、頷いた。そして、海闘士のヘルメットに手をかけた。おそるおそる、ゆっくりゆっくり、とヘルメットを上へとずらしていく。

「——っ！」

翔馬は相手の目が見えてきたところで、言葉を失った。それから、急いで相手のヘルメットを外した。

「そん、な……！」

「！」

「マジかよ……！」

翔馬だけでなく、他の聖闘士二人も声を失った。さらに、翔馬はガタガタと体を震わせ、ただ、ただ、海闘士の顔を見つめていた。あまりにも驚愕な情景に、どうリアクションしていいのか分からないのだ。しかし、翔馬はこの言葉だけは発することはできたのである。

「どうして……どうして貴方がここにいますか……！」　我が師、獅子座のアンバー……！」

棚引くように細すぎる金色のポニーテールに、特徴的なジトリとした碧眼——彼こそが、翔馬の師匠・獅子座のアンバー、その人である。

アンバーは無表情を保ったまま、翔馬たちのことをジッと見つめていた。背中から血を垂らしているわりには、随分とさっぱりした表情だ。圭熊と水鹿はアンバーのあまりの無表情さに、汗を垂らしながら、こう思っていた。

(ヘルメット、あつてもなくても同じなんじゃないか……?)

と。しかし、翔馬にとつては、十分何か分かるらしく、どこかソワソワとしていた。やはり、師弟にしか分からない何かがあるのだろう。圭熊と水鹿には全く分からないが。翔馬はアンバーと柱を交互に見ながら、ボソリと呟くように言った。

「……とりあえず、柱を壊せばいいんですね」

(何も言つてないのに通じてる……)

この二人は何か以心伝心でもしているのか、と水鹿と圭熊は肩の力を思わず抜いてしまった。にしても、柱を壊すにしても、自分たちの力では絶対に壊せない上、天秤座の武器すらもない。一体どうしたらいいのだろうか。一同が悩んでいる中、アンバーはピクツと眉を動かして、視線を道へと動かした。翔馬はそれを見逃すことなく、アンバーの視線の先を見つめた。

アンバーの視線の先にあつたのは、一つの人影だった。後ろ髪の短さに反して、胸元まで届きそうな横髪にして、整った顔立ち。そして、何故か半裸——白虎の姿だった。

「白虎！」

白虎が来たことにより、その場の雰囲気が一瞬にして変わった。

白虎は四人の元まで歩み寄ると、背負っていた天秤座の聖衣箱を置いて、北大西洋の柱を見つめた。そして、辺りをキョロキョロと見渡した。

「海將軍は……?」

「……とてもじゃないが、戦える状態ではない」

「……そっか」

白虎はそれだけ聞くと、天秤座の聖衣箱の蓋を開き、武器を取り出した。取り出した武器は、剣。そして、白虎は翔馬にその剣を手渡しした。翔馬は目を見開いて、白虎と剣を交互に見つめていた。白虎はフツと微笑みながら、翔馬の肩に自分の手を置いた。

「頼んだよ」

「……ああ」

翔馬は白虎から離れるついでに、肩に置かれていた手をパンツと叩くように握った。互いに微笑みを交わして、翔馬は北大西洋の柱へと向かった。

翔馬は柱の目の前に立ち、剣を構えた。そして、目を瞑り、柱の一点に意識を集中させた。

（大丈夫……いける……）

「はあああああ——っ!」

翔馬は柱に向かって走り出し、勢い良く飛び上がった。翔馬の手に持っている剣は、一瞬一瞬が星のように眩しく輝いており、大きく振りかざすと、その輝きが一つの軌跡のようになつて、その場を照らした。白虎たちはその軌跡を目を見開きながら、見てい

た。

「……綺麗」

白虎はそう呟くしかなかった。これまでに天秤座の武器を扱って、こんなに綺麗なものを見たことはなかったのだ。

そうして皆がそれに見惚れている間にも、柱は一気に崩壊した。綺麗な閃光を描いた剣は、いつしか天秤座の聖衣箱の中へと戻り、そこから柱の崩壊を見守っていた。

白虎はニツと笑みを浮かべながら、グツと拳を握って、崩壊していく柱の方を見つめ、言う。

「やったアアアア—— ツツ！ これで七つの柱全部壊したぞー！」

——北大西洋の柱、撃破。残る柱の数、0本。

これで、アテナが救える、世界が救える、と聖闘士一同は思っていた。しかし、アンバーの口から吐き出された言葉は、その聖闘士たちの喜びを無にした。

「いや……まだ、壊さなければならぬ柱はある」

44：「ポセイドンへ」

「今、何て……」

「まだ、壊さなければならぬ柱はある、と言った」

アンバーは無表情で、はつきりと言い放った。小雨が白虎たちを襲う中、そのアンバーの言葉は白虎たちの背中に重くのしかかった。黙り込んだ白虎たちに、アンバーは抑揚のない声で更に言った。

「メインブレドウィナ……海底の七柱を壊さない限り壊れない、巨大な海底神殿の大黒柱。それを壊さなければ、世界の水害は完全に収まらないだろう」

「そんなあ……」

白虎は明らかになった新たな事実に対して、ガクツと肩を下ろした。では、本当の戦いはこれからだと言うのか。今まで自分たちが苦労してきたことは、その前戯にしか過ぎなかったのか。

白虎は水鹿たちの方へ、その顔を向けた。水鹿たちは白虎にこちらを振り向かせるなり、その首をコクンと縦に振った。水鹿たちは、どんなことがあるかとやる気なのだろう。白虎はそんな水鹿たちを見て、全身から抜けていた力が、再び入ってくるような気

がした。白虎はグツの拳を握り、そちらの方へ視線を移した。

そして、アンバーの方へと顔を向けて、一步前へと足を踏み入れた。アンバーはそれを相変わらざる無表情で見ながら、しかし、どこか軸がある視線で見つめた。白虎はそんなアンバーに対し、ニコツと微笑んだ。

「アテナと世界と……そして、皆のためにも、メインブレドウィナ、壊してきます」

「……ああ、健闘を祈る」

「はい、ありがとうございます」

白虎はペコリとお辞儀をし、そのままアンバーの方へ背を向けようとした。だが、アンバーはそれを引き止めた。

「待て。まだ言っていないことがある」

白虎はアンバーに引きとめられて、思わずその足を止める。アンバーは白虎が止まれば、コホンと咳払いしてから言った。

「この戦いには、ポセイドン以外の力が働いている。特にポセイドンは依り代となる者が満16歳になるまでは、依り代に手出しはしないと聞く。ポセイドンが血迷った、というよりも、この戦いを利用している悪党がいるということの方が信憑性はあるはずだ」

「……！」

(もしかして、ヴィオラさんが言ってた「裏事情」って……!)

アンバーが今言ったこのことか。白虎はアンバーの言葉を更に傾聴して、その「裏事情」を深く追いかけてようとした。アンバーは淡々とした口調で、更に話を続けた。

「元々、私はその悪党を追い掛けてここまでやってきた。その悪党は黄金聖闘士だというのに、自分のためならば地上を省みないといった輩でね。そんな奴だから、あのアテナからも見離されかけていた。そんな時、偶然あやつはポセイダンの封印を解いた。そう、本当に偶然にね。それからあやつは聖域に來なくなり、私はそいつを探し出すために、任務に駆り出された。それが、我が弟子、翔馬が聖闘士になってすぐ後のこと、つまり二年前だ」

アンバーは一通り話終えると、目の前の聖闘士四人を首を回しながら見た。そして、何も言わなくなり、ただ、ジーツとその聖闘士たちの姿を見つめているだけとなった。白虎たちもアンバーのその様子を真剣な様子で見っていたが、アンバーは本当に何も言わない。

白虎たちはそのうち、苦笑しながら、アンバーの弟子である翔馬に視線で助けを求めた。翔馬はその視線を感じると、うーんと顎に手を当てて、アンバーの方に問いた。

「師匠、一つ聞いてもよろしいですか?」

「……」

アンバーはコクン、と頷いた。翔馬は少しばかり真剣な様子で、アンバーの方へと疑問を投げ付けた。

「何故、こんなところで海闘士を？」

「……」

翔馬に疑問を投げつけられ、アンバーは黙り込んだ。そういえば、何故こんなところで海闘士をやっているのだろうか。さっさとその悪党を捕まえればいいのに、と、白虎たちは思っていた。そして、黙り込んでいるアンバーは、どう答えていいのか悩んでいるのだろう。白虎たちはアンバーからの回答を待った。

アンバーはしばらく思考した上で、翔馬の質問に答えた。

「さっき言った悪党を捕まえるタイミングを掴むためと……」

「掴むためと？」

ゴクリと白虎たちは息を飲んだ。一体、次にはどんな答えが返ってくるのか、緊張した面持ちで耳を傾けた。そして、アンバーは表情を整えて、口を開いた。

「それ以外何もない」

「そんな凜々しい顔で答えるなよ、オイ！」

すっかり緊張感のきの字すら失くした白虎たち一同は、メインブレドウィナの方へと

着々と進んでいた。アンバーのお陰ですっかり気が抜けた白虎たちは、歩きながら向かっていたのである。何だか、もう、アンバーを見ているとどうも力が抜けすぎるとい
うか。

「翔くん……あの人、本当に黄金聖闘士であり、君の師匠なん？　すごいマイペースつぷり
りで逆に不安なんやけど……」

「ああ、れつきとした黄金聖闘士だ。それだけは保証する」

「……そう」

微笑み、キラキラと目を輝かせている翔馬を目の前にし、白虎は更に力が抜けていく
ような感じがした。翔馬のいつもの冷静さというか、口数の少なさは生まれ付いてのも
のではなく、アンバーの無口に影響されたのではないかと思えた。自分も師匠に影響さ
れている部分はあると思うので、人のことは言えないのかもしれないが。

そうして白虎たちがぐったりとしながら歩いていると、感じ覚えのある小宇宙が四人
を包んだ。

「！」

四人はバツと顔を上げて、辺りをキョロキョロと見渡した。

「アテナが……」

「導いてくれている……？」

白虎と翔馬がそう眩いた途端、その小宇宙が一層強くなった。ここまで大きな小宇宙を放てる人物と言ったら、やはりアテナしかいない。圭熊と水鹿もそれを察したのか、翔馬と白虎の方を見つめて、コクンと首を縦に振っていた。白虎と翔馬も、お互い見つめ合ってから、頷き合い、ダラダラと動かしていた足をシャキツとさせ、一気に走り出した。

アテナの小宇宙を迎れば、もしかしたら、メインブレドウイナに辿り着けるかもしれない——確信はないが、四人はそう信じた。アテナの導きは絶対のものだと、思っているからこそこのことだ。

しかし、四人が走っている中、その道を妨げる一人の海闘士がいた。

「待ちたまえ、若き聖闘士たちよ」

白虎たちはその声を聞いて思わず立ち止まる。同時に、この声にどこか既視感を覚えていた。

「……!」

そうして、白虎たちの目の前に現れたのは、自分たちにとって見覚えのある姿だった。表情が見えないように施されている仮面に、槍を手にしている姿。間違いない——海底神殿にやってきた時、アテナを拘束したであろう海闘士の姿だ。

海闘士は鱗衣のヒールをコツコツと鳴らしながら、白虎たちの元まで歩み寄れば、前

線に立っている白虎の首に槍を突き付けた。刺されるか刺されまいかの、後のない状態といったところか。海闘士は槍を光らせながら、白虎に向かって言った。

「まさか、お前たちのような聖闘士が柱を全部壊してここまでやってくるとは……海闘士も弱くなったものだ」

「……っ」

「これでは私の計画という計画が全て台無し……その責任は、君たちの命をもつて償ってもらおうか」

「計……画……？ まさか、ポセイドン復活も計画のうちとでも……!？」

（まさかこいつが……アンバーさんの言っていた……!）

——悪党ということか。

海闘士は「フツ」と鼻で笑いながら、己の仮面を外した。

「そうとも。この、海皇子クリュサオル……いや、乙女座バルゴのジャスパールが神になるための計画の一過にしか過ぎないのだ！」

そうして外された仮面の下に映し出されたものは、アルビノに輝きを放つ瞳と、中性的な顔立ちが特徴的な、男性の顔だった。

そして、ジャスパールと名乗るその海闘士は、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、更に白虎の首にその槍を近付けた。しかし、白虎は相手をジッと見つめながら、相手の槍から

一步遠ざかった。

「神になる？ 神々の意志、言わば、ビッグウィルに到底したとも言うのか？」

「……いや、飽きたのだよ。神に最も近いと言われるのも、神様のようだと言われるのもね」

ジャスパーは槍を下ろして、槍の持ち手の先で地面を一回突いた。

「何が神に最も近いだ。何が神様のようだ。私はそんな中途半端な存在ではない。私は完璧なのだ」

「完璧……？」

「そう、完璧。私は完璧ゆえに、ちゃんとした神になれるはずだ。周りから讃えられるよ
うな、神に……！」

ジャスパーの槍を握る手が一層強くなる。白虎はただ、そんなジャスパーを睨みつけていた。ジャスパーは目を大きく見開いて、口が抉れるぐらい大きく開いて、声高く笑った。

「ハッハッハッハ！ だから、そのためにも未覚醒であるポセイドンを利用してもらうのだよ！ 私は神なのだ！ 神を利用するぐらい許されるはずだアツ！」

その途端、ジャスパーから強力な小宇宙が放出された。とてもではないが、それは黄金聖闘士とは思えない邪悪な小宇宙。白虎たちはそれに圧倒され、ただ、そこにいるこ

としかできず、動けずにいた。黄金聖闘士並みの力を持っていると形容されている水鹿ですら、ジャスパーの小宇宙を目の前にして、顔を真っ青にし、動けずにいる。ジャスパーの小宇宙がどれだけのものか、分かるだろう。

確かに、これだけの小宇宙の大きさだけであれば、神には及ぶこともあるだろう。黄金聖闘士ですら、辿り着けない領域に達することもあるかもしれない。だが、こんな邪悪な小宇宙で、神になろうなどと、愚かだ。

(早く……どうにかして、コイツを止めなきゃ……！)

白虎はこの世の危機を、ジャスパーの小宇宙から感じ取っていた。しかし、白虎たちがときに相手になるような相手ではないのだ。黄金聖闘士だったことに加え、神になるうとしている奴だ。自分たちにどうこうできる相手ではない。

「そうだ！ ひれ伏せ！ ひれ伏すがいい、人間どもオツ！ 自分たちが無力な手前で、

ひれ伏すがいい——ツツツツ！！！！」

「……っ！」

(ダメだ……！ 動こうにも……あの小宇宙に圧倒される！)

ジャスパーの小宇宙は、白虎たちや前に進むことを拒否し、なおかつ、後退させようとしていた。白虎が前に進むもうにも、すぐに後退して、話にならない。ジャスパーは狂ったように大きく高笑いしながら、白虎たちのその無様な姿を見ていた。

「貴様らガキごときが、私に齒向かうことなどできるはずなのだ—— ツツ!!! それどころか、アテナやポセイドンといった神さえも！ 私に！ 齒向かえるものかアツ！」

その瞬間、その場にいた四人の聖闘士たちが、一氣に向こう側まで吹き飛ばされた。「があっ！」「ぐっ！」「っあ！」「うっ！」

白虎たちは勢いよくそこにあつた壁や柱に衝突した。ジャスパーは白虎たちがそれらに衝突して、動けずにいるうちに、槍を片手に、倒れて動けない白虎の元まで歩み寄つた。白虎は顔を上げるようにして、こちらに歩み寄ってくるジャスパーを見た。ここまできても、なお、ジャスパーを前にして必要以上に動けない自分に、腹が立つ。

ジャスパーはニイツと口が裂けるほど不気味な笑みを浮かべて、白虎の左胸に槍を近づけた。

「まずは貴様からだ、龍星座。その明るく輝き、正義に満ち溢れる小宇宙……聖闘士らしくも、なんと目障りなことよ」

「……」

「さあ、消えたまえ！ この、ゴミが！」

白虎の左胸、心臓部分にジャスパーの槍が振り落とされる。白虎は反射的に目を瞑つた。

(やられる！)

だが、槍は白虎の胸元に辿り着く寸前で、ピタツと止まった。白虎は予想していたことが起きなかったことに、「？」と頭にクエスチョンマークを浮かべて、瞑っていた目をそつと開いた。

一つの槍を手に行っている人物が、ジャスパールの他に一人いた。その人物はプルプルと腕を震わせながら、白虎の胸元にその槍が刺さるのを阻止してくれていた。白虎はその阻止している手を辿って、その顔を見た。

「…………… ヴィオラ、さん……………」

海魔女セイレーンのヴィオラの姿があつた。ヴィオラは白虎にニコツと微笑みかければ、すぐにジャスパールの方を睨みつけて、槍を一層強く握りしめた。

「貴様が……………シードラゴンの言っていた邪悪か……………」

「邪悪？ ああ、あいつからは私にはそう見えるらしいね」

ジャスパールは白虎とヴィオラからその槍を離し、構えた。ヴィオラは離された反動から、足元を一瞬崩すも、すぐに戻って、ジャスパールの方を睨みつけた。そして、フルートを取り出し、吹き込み口に口をあてがった。

ジャスパールは「フン」と鼻で笑いながら、ヴィオラの様子を見つめていた。

「そんなフルートの音色如きで、私に敵うとでもいうのか？ 貴様の小宇宙と実力など、

たかが知れているというに」

「いや……僕は貴様に勝つためにここににいるわけじゃない……」

ヴィオラは聖闘士たちの方に視線を向けた。

「白虎たち聖闘士よ、早くアテナとリヴァージュ様の所へ行きたまえ！」

「えっ、でも、ヴィオラさん、体調……！」

ヴィオラは先ほど、白虎と戦ったのち、そこから睡眠不足による体調不良で眠りについたほどだ。顔色もあまりよくないゆえ、ヴィオラは万全完璧な体調ではないことは確かだ。しかし、ヴィオラはニコツと微笑みを浮かべて、白虎に言い放った。

「案ずるな。このぐらい、リヴァージュ様のためならば、どうってことない！」

「ヴィオラさん……！」

だが、やはり白虎は心配そうに見つめる。ヴィオラはもつと大声で白虎たちに向けて言い放った。

「だから、早く行くんだ！」

「……分かりました！」

白虎はいち早く、そしてゆっくり立ち上がり、他の三人もそれに釣られるようにゆっくり立ち上がった。そして、ジャスパールの横を通り過ぎるように走り始めた。だが、ジャスパールはそれを許すはずもなく、すぐに白虎たちを引きとめようとした。

「行かせるかアツ！ 貴様らのようなゴミに、メインブレドウィナを壊させ——ッ！」
ジャスパーの動きが一瞬にして止まった。ジャスパーはヴィオラの方を振り向き、その様子を確認した。

ヴィオラは、フルートで優しい音色を奏でていた。だが、前のように、儂く、触れられずぐに崩れそうな音色ではなく、芯が強く、通っていて、暖かいものであった。白虎との戦いと話し合いにより、迷いが消えた影響なのだろう。ヴィオラは、もう、前しか見えていない。それを感じさせる音色であった。その音色はジャスパーにとつて脅威となっているのか、ジャスパーの邪悪な小宇宙の威力が一気に下がっていつている気がした。

「ヴィオラさん……！」

「今のうち、早く！」

「……っ！ ご健闘を祈ります！」

白虎たちはヴィオラとジャスパーを背にして走り出した。ジャスパーは四人に向かって手を伸ばそうにも、ヴィオラのフルートの音色がそれを許そうとしなかった。

「ぐっ、ううっ……！」

ジャスパーはヴィオラの音色を聞いているうちに、頭を抱えて苦しそうな表情を浮かべ始めた。ヴィオラはフルートを吹き終えると、それを下ろして、ジャスパーに言い

放った。

「クリュサオル……僕は君を絶対に許さない。まだ幼子であるリヴァージュ様をポセイドンの依り代に仕立て上げ、利用しようとした罪は、とても深い。今にでも、ポセイドンからの怒りも買うであらう……!」

「怒りっ……? バカな……ポセイドンなんか私が私に怒りを向けるとでもっ……?」
 「当たり前だ。君のやっていることは神を冒瀆しているも同然だ。遅かれ早かれ、ポセイドンは目覚め、地上が更なる水害に見舞われるに違いない……!」

ヴィオラはそれだけ言うと、再びフルートを口にした。ジャスパーはヴィオラの話を聞けば、その場で胡座をかき、そのまま宙に浮かんだ。そして、フツと口元を鋭く緩め、ヴィオラを見た。

「ヴィオラ、忠告を感謝する。だが、それを恐れては完璧になどなれぬ……!」

ジャスパーの小宇宙が開花するするように燃え上がり始めた。ヴィオラはそれに対抗するように、音色を奏で始めた。

「テッド・エンド・シンフォニーイイイ——ツツ!!!」

ヴィオラの情熱的な音色が、辺りに広まった。だが、ジャスパーはそれに対して、自分の周りに小宇宙の結界を張って対抗していた。

（甘い、甘いぞ、クリュサオル。結界でこの技を防げるわけがな——ツ?!）

ヴィオラは目を見開き、相手の様子を見て、啞然とした。ジャスパーの結界は、何もかも吸収かつ、防いでいた。ヴィオラの技は、耳に直接ダメージを働くのではなく、脳内に直接ダメージを与える技なため、音を遮断したところで無駄なはずなのだが、まさかこんな防御方法があるとは思ってもみなかった。

ジャスパーは、ヴィオラが驚き演奏を止めたところで、小宇宙を一気に放出した。

「はあっ！」

ジャスパーに向け、吸収されたヴィオラの攻撃的な小宇宙が、一気にヴィオラの元へと跳ね返された。ヴィオラはそれにより、勢い良く向こう側へと体を吹き飛ばされた。

「ぐあああああッツ!!!」

人間の五感を奪いに行くほどの技を跳ね返され、無事でいられるはずもない。ヴィオラは地面に衝突してから、しばらくは動けずにいた。

ジャスパーは「ふう」と息をつき、胡座をかいていた姿勢を戻した。そして、倒れて動けないヴィオラを鼻で笑いながら見つめた。

「セイレーン、君にはちよつと失望したぞ。こうして聖闘士たちに感化され、ポセイドンより、その依り代の大事を選んだ。君のしていることは海闘士として、如何なものかな？」

「じ、自分のことは柵に上げるのか……」

「私は神だ。だから、ポセイドンに何しようが勝手だ」

「ぐうつ……………」

ヴィオラは顔だけジャスパーの方へと上げて、強く睨みつけた。ジャスパーはニヤニヤと笑みを浮かべたまま、ヴィオラを見つめて離さない。

「最初は恋人のためと謳い、世界の肅清を望んで……………しかし、いざとなったら子どもを優先……………ブレブレだな」

「……………」

「君こそポセイドンからの怒りを受けるべきではないかね？ 神を蔑ろにした罰はそう軽くはない。君こそ、神の怒りを受けるにふさわしい。そう、私よりもね……………」

「……………フン、バカバカしいな」

ヴィオラはジャスパーの話を鼻で笑いながら、その場でゆっくりと立ち上がった。ジャスパーはそんなヴィオラを何か汚いものを見るような瞳で見つめた。

「……………何がおかしい？」

「ああ、十分におかしいさ……………」

ヴィオラは一步一步ゆっくりと足を踏み入れながら、ジャスパーの方へと進んでいった。

「僕は『過去』よりも『今』を選んだ……………たったそれだけの話だというのに、何故君にそ

のようにならなければならぬ？」

ヴィオラは額や唇から血を流している中、フルートを取り出して、それを口にあてがった。そして、ジャスパールの方をキツと睨みつけ、小宇宙を一気に増幅させていった。「幼子でポセイダンの依り代に抜擢されたリヴァージュ様のことを考えれば、ポセイダンの怒りなど、まだまだ軽いものよ！」

その瞬間、ヴィオラのフルートの情熱的かつ攻撃的な音色が、辺りに鳴り響いた。ジャスパールは再び胡座をかき、防御壁を作った。

「カーン！」

先ほどよりも強力な防御壁がヴィオラの音色を阻んだ。だが、ヴィオラは「フツ」と笑みを浮かべ、音色に乗せる小宇宙を一気に高めた。

「デッド・エンド・シンフォニーイイイ——ツツ!!!」

フルートの音色が増大なものになり、ジャスパールの防御壁へとぶつかっていく。だが、ジャスパールはニツと笑みを浮かべて、どこか勝利を確信していた。

（私の防御壁は黄金聖闘士三人でやっと破ることができる、最強の壁！ 海闘士一人程度に壊されるはずはないのだ……!）

何もかも跳ね返す、ジャスパールの防御壁。だが、ヴィオラはそれでも、なお、攻撃を続けていた。防御壁があるがなんだろうが、脳に響くものは響くはずだ、と。

そして、そのヴィオラの思惑通りにジャスパーに若干ながらのダメージが与えられていた。

「……………っ！」

微かに余裕そうなその顔が歪んでいくジャスパー。やはり、物理的攻撃と、音による攻撃では訳が違うということだろう。ヴィオラはジャスパーを追い詰めるために、更にフルートを奏で続ける。

だが、ジャスパーはダメージを受けながらも、その小宇宙を貯め続けていた。

「オーム！」

ジャスパーの周りに小宇宙が一気に集まっていく。花開くような、綺麗な小宇宙だった。ヴィオラはその光景を見つつ、フルートを吹きながら、額に脂汗を流した。

(アッド・エンド・シンフォニーは相手の小宇宙を奪い取る技……なのに、クリュサオルはそれを逆手に取っている……！)

このままでは、またこちらが先程のようにやられてしまう。ヴィオラは一旦フルートを止めて、体制を整え直した。

ジャスパーの方は、両手の間に光の玉を作り始めていた。それはジャスパーの小宇宙からできた、小宇宙玉のようなものだ。その間に、ヴィオラの音色を感じなくなると、防壁を消して、胡座から立ち上がった。

「さあ、セイレーンよ。神の手によって死ぬることを光栄に思いたまえ」
「……上等だ！」

ジャスパールとヴィオラはお互い睨み合った。そうして、ジャスパールは両手の間に貯めた小宇宙をボウツと光らせて、ヴィオラは再びフルートに口付けた。お互いの小宇宙が、これまでにないぐらいに燃え上がっている。

「セイレーンよ、一つ聞きたいことがある」

「……何だ？」

「君は私に勝つために挑んでいる訳ではない、と言った。じゃあ、何のために挑んでいるのだね？」

「……それは」

ヴィオラはスウツと息を吸い込み、フルートに当てがう指の位置を調節した。

「未来ある聖闘士たちに、光ある路へ導くためだ……！」

その瞬間、お互いの小宇宙が爆発した。

「天魔降伏ウウウウウウ—— ツツ!!!」

「ザ・ストリーム・シンフォニーイイイイ—— ツツ!!!」

その爆発は、アテナの元へと向かっていた白虎たちの体感と小宇宙にも届いていた。

(この小宇宙……い。まさか、ヴィオラさんとクリユサオルが……い)

白虎はそのあまりの爆発の規模の大きさに、ただ、ただ、驚愕するしかなかった。今すぐにでも戻って、その様子を見たくなるが、せつかくヴィオラが自分たちのために路を作ってくれたのだ。白虎は、ヴィオラは生きていると信じて、アテナの元へと向かった。

神殿の中枢部とも言えるこの場所で、リヴァージュとアテナ・ラティエルが会合を行っているはずだ。白虎は記憶を頼りにして、その場所の部屋であろう扉を勢い良く開けた。

「アテナアツ！ 御息さぁんツ！」

白虎は二人の名前を大声で呼んだ。

白虎の目の前に飛び込んできた光景は、ラティエルとリヴァージュが微笑みながら、会談を交わしているところだった。白虎は「ハアハア」と肩で息をしながら、ニコツと笑みを浮かべて、さも安心したようにその場に膝を付いた。白虎についてきた他の三人も、こればかりは微笑みを交わしていた。

そんな聖闘士たちの存在に気が付いた二人は、白虎たちの方へ駆け寄った。

「白虎！ 大丈夫ですか？」

「ああ……いや……というか、アテナ。確か拘束されてたのでは？」

白虎は苦笑しながら、ラティエルがここに来る際に拘束されていたことを思い出して、ラティエルの方を指差した。今のラティエルは拘束されておらず、普通の状態だった。ラティエルはクスクスと笑みを浮かべながら、「ああ、これはね」と話し始めた。

「私には何も問題はないわ。あの海闘士がいなくなつた後、すぐに解きました。最初に拘束された時にもすぐに解こうと思つたのだけれど、あの海闘士——いえ、ジャスパーの前だと、警戒してしまつて、どうもそれもできなくてね。ごめんなさい。辛い思いをさせてしまつて」

「い、いえー！ アテナと御子息さんが無事で安心しました！」

白虎はブンブンと首を横に振つて、こちらにお辞儀してくるラティエルにそう言い放つた。ラティエルは白虎に言われてニコツと微笑みをながら、顔を上げ、白虎に手を差し出した。

「では、行きましょう。メインブレドウィナを壊しに」

「……はい」

白虎が力強く微笑み、ラティエルの手に自分の手を重ねようとした——その瞬間だった。

「！」「まさかつ……！」

二人は一齐にそちらへ振り返つた。そこでは、リヴァージュの小宇宙が、神のごとく

燃え上がっていた。白虎たち聖闘士はそれを目の前にしてそして、動けずにおり、また、ラティエルは目を見開いてそれを見つめていた。その背には、鎧状となったポセイドンの鱗衣が浮かび上がっていたのである。

これは、まさか——……。

「ポセイドンッ！」

45：「思いを一矢貫いて行けると」

ポセイDONはリヴァージュの体と意識を通し、アテナと聖闘士たちをジツと見つめながらそこにいた。今までのリヴァージュからは感じなかった小宇宙が、そこにあった。その小宇宙からは神々しく、ただの人間では辿り着けない領域、言わばビッグウェルを感じられる。

白虎たちはリヴァージュにポセイDONが取り憑いたのを目の前にすれば、アテナを囲うように、アテナの元まで駆け付け、ポセイDONと対峙した。リヴァージュ——言わば、ポセイDONは白虎たちを見つめながら、言い放った。

「貴様らに、メインブレドウィナを破壊させはせん」

「なっ……」

ポセイDONから宣言された、言葉。白虎たちは「ふざけるな」と口から言い放ちそうだったが、ここはあえて口を紡いだ。相手がどれだけ強大な神であるか、そして、強大な力を持っているのか、この全身で圧迫感を味わっているからだ。

ポセイDONはメインブレドウィナへと続く背後にある道にチラツと視線を移し、それから白虎の方に視線を戻した。

「メインブレドウィナは海界の言わば大黒柱。そんな重要な柱を、貴様ら聖闘士ごときに破壊させるわけにはいかぬ」

ポセイDONはそう言うのと、アテナの方に指差した。その指先から、小宇宙が発せられ、その小宇宙は縄状となって、アテナの方へと襲いかかった。

「きやつ………！」

そして、アテナの体を、水の縄で縛り付けた。アテナがグツと力を入れてみても、それだけでは解けそうにない。白虎はそれを察すると、すぐにアテナの方を振り向き、その縄に手をかけた。

「アテナ！ くっ………！」

ジャスパアの時のような縄ではあった。しかし、そこに神の力が加えられ、聖闘士では触れることすらできなかった。白虎は脂汗を垂らし、息を飲んで、顔を真っ青にし、ポセイDONの方を見つめた。そんな白虎の頭の中には、「絶望」の二文字が浮かび上がっていた。

(せっかく………せっかく、ここまで来たのに………！)

白虎は体の横でギュツと拳を握り締めた。ここでポセイDONに阻止されてしまつては、何もかもが泡となつて消えてしまう。白虎たちはアテナのために、海底神殿を周り、七柱を壊してきた。それはメインブレドウィナを壊すための序曲にしか過ぎず、最終的

にはここまでやってきた。そして、その最後の試練は目の前いる海皇・ポセイドンを倒すということか。

なんて絶望的だろう。いや、絶望的すぎる。

しかし、白虎は絶望感をこうして味わったぐらいでは、怯むこともなく、恐れることもなかった。ただ、いつものように、真つ直ぐで、一直線に相手を——リヴァージュを見るだけだ。自分がここにきた意味と理由。それさえ自分の中にあれば、白虎は行動できる。白虎は胸に拳をあてて、自分の今、すべきことを感じ取った。

ポセイドンは手に持っていた三叉の鉾を白虎たちに向けて、手を差し出し言い放った。

「さっさと諦め、アテナをこちらに引き渡すのだ」

白虎たちはポセイドンを睨みつけたまま、アテナから離れようとはせず、むしろアテナにより近付き、守りを固めた。ポセイドンはそんな聖闘士たちの姿を見るなり、目を瞑って、「そうか……」とボソツと呟いた。

「貴様らがその気なら、こちらもその気で行かせてもらおう」

リヴァージュの体から、一気に小宇宙が燃え上がった。その小宇宙は白虎たちの攻撃は通じないのでは、といった不安がかき立てられるぐらいの大きさだった。

そして、一番リヴァージュの目の前にいて、近くにいる白虎が、それを買った。白虎

はりヴァーシユの方へと歩み寄り、小宇宙を燃やし始めた。水鹿はこれから白虎がすることを察して、止めに入った。

「おい、白虎！ 無茶な真似はやめろ！」

「……通じるか、通じないかは、やってみなきゃ分からへんやろ！」

白虎は水鹿にそう言い捨てて、その場でザツと構えた。ポセイドンの冷たい視線を浴びながら、白虎はポセイドンへと狙いを定めた。

「廬山、昇龍覇アアアアアアアア—— ツツツ!!!」

助走をつけて、右拳から白い龍をポセイドンに向けて放った。ポセイドンはそれを放たれても微動だにせず、ただ、立っていた。白虎はそれを「しめた！」と思った。あのまま動かなければ、昇龍覇の威力はポセイドンに必ずぶつかる。そして、傷付けることができる。だが、ポセイドンは「神」であった。

「なっ……!?! 龍が消えていく……!?!」

ポセイドンに当たってはたはずの昇龍覇の白い龍が、ポセイドンの周りであつという間に昇華されていったのである。それだけではなく、その威力も吸い取っているのか、白虎の方へとそれが返ってきた。

「ぐっ、はアッ！」

白虎は勢い良く飛ばされたが、すぐ近くにいた水鹿たちがすぐに受け止め、支えと

なつてくれて、壁への追突は免れた。

白虎は水鹿たちに支えられながら、ポセイドンの方へと再び視線を向けた。そして、地にしっかり足を踏み締めて、拳を握り締めた。だが、水鹿はその拳を下ろさせるように、ガシツと白虎の腕を掴んだ。白虎は腕を掴まれ、水鹿の方を振り向いた。水鹿は真剣な様子で白虎を見つめていた。

「いくら攻撃したところで相手には通じないんじゃないか？ もつと効率的なことを——
……」

「構わん！ それでも、構わない！ わいは……私は、ポセイドンを倒す！」

白虎は水鹿の制止を振り払って、再びポセイドンの前まで走り出した。

「白虎、やめろ！ 戻ってこい！」

水鹿の再びの制止の声は、すでに白虎の耳には届いていなかった。白虎は走りながら拳を構えて、ポセイドンの方へと拳を突き出した。

「猛虎烈風紫電拳——ツツ!!!」

ポセイドンに向かって虎となつて暴れ出している拳風が放たれた。だが、やはりそれもポセイドンには通じず、ポセイドンの周りだけ通さず、暴風が前に進んでいた。

「ふ、ぐうっ……！」

だが、それでも白虎は猛虎烈風紫電拳を放ち続けた。放ち続けていけば、必ずやポセ

イドンに通じるということを感じて。しかし、ポセイドンはそんな白虎を見下しているように見詰め、それから、猛虎烈風紫電拳のすべてを跳ね返し始めた。

「ぐあうッ！」

先ほどとは打って変わって、暴風を弾き返したためか、白虎は宙に浮き上がった。いや、白虎だけではなく、そこにいた聖闘士たちも宙に浮き上がり、そのまま地面へと落下した。アテナだけは翔馬が守ってくれていたそうで、大きな怪我はなかったようだ。

白虎は地面に落下すれば、その場に突っ伏して、手をぶるぶると震わせた。そして、ポセイドンとリヴァージュの方をググツと睨み付けた。それから、ゆつくりと立ち上がって、再びそちらの方へと向かった。水鹿も起き上がって、その白虎の姿を見れば、すぐにそちらへ腕を伸ばした。

「白虎！ やめろ、やめるんだ！ さつきから何度も……！」

「……っ、はぁ」

だが、白虎はいつもの通り、水鹿の制止に耳を傾けようとはしない。ただ、自分のやりたいことをやっているだけだ。白虎は、今度は攻撃しようとはせず、ひたすら、リヴァージュの元まで歩み寄っていた。そして、リヴァージュの元まで辿り着いたところで、リヴァージュに向かって話しかけた。

「御子息さん……私の声、聞こえますか……？」

「……」

何も言つてこないポセイドンもとい、リヴァージュ。当たり前と言えは当たり前で、同時にリヴァージュの意識はどこかへ行つてしまったという証拠でもあるのだろう。

しかし、白虎はそれでも構わない、と言つた様子で、微笑みながら、リヴァージュに向かつて優しく、柔らかに話し続けた。

「戻つて……きてください。まだ、貴方にポセイドンの依り代になるには早すぎる……。それは一部の海闘士も感じていたこと……。だから、もし、私の声が聞こえていたら、こちらに戻つてきてください……っ！」

白虎が最後まで言い切る前に、ポセイドンは烈風を繰り出し、白虎を向こう側まで追いやつた。ここで、また、水鹿が白虎を受け止め、抱え込んだ。

「もう、やめろ。相手には攻撃おろか、言葉のやりとりさえままならないんだ。だから、やめろ」

「……だから……だからとてッ！」

白虎は自分を抱え込んでいる水鹿の腕をギュツを握り、そこから立ち上がろうとしていた。

「ここで諦めてしまったら、何にも救えない！ 諦めたら世界は救えるのか!! 水鹿、お前はそう思つとるんか!!」

「違う！ そうじゃない！ ポセイドンは倒すのではなく、封印を——……」

「なら、尚更ポセイドンをどうにかしなきゃならんやろ！ 封印の道具とかその他諸々を探している間にも、ポセイドンから御子息さんへの侵食は進んでいる！ 黙ってられるか！」

白虎はそう強く言い放つと立ち上がって、リヴァージュとポセイドンの元へと走り始めた。

「白虎！」

水鹿の制止も聞かないとなると、もう白虎を止めることができる人物はいない。水鹿は呆れたように立ち上がって、白虎を追いかけ始めた。それを見た圭熊は、驚いたような表情で水鹿を見た。

「お、おい、兄ちゃん！」

「オレはあのバカを止めに行く！ 止めたいと思うなら一緒に来い！」

「わ、分かった！ 白虎のやつ、無茶ばっかしやがって！」

圭熊も白虎に対して呆れを見せながら、水鹿についていった。一人残された翔馬は、アテナと共にその様子を見ていた。

「ポセイドン！ 覚悟……って、うわあああああ——っ!」

そう、白虎が拳をポセイドンの方へ突き出そうとした、その瞬間、白虎は背後から謎

の圧力をかけられて、そのまま前に倒れこんだ。白虎は「いてて」と呟きながら、顔を上げて、自分の背後へと視線を移した。

「な、なんつ……つて、圭くんと水鹿……」

白虎の視線の先にいたのは、圭熊と水鹿であった。二人は、白虎をこれ以上先に行かせまいと、その体を必死に抑えていた。白虎はその間をぬって行こうとするも、二人の力が大きすぎて、それすらままならなかった。

水鹿と圭熊は白虎に対して口々にした。

「白虎！ 色々なことが重なって落ち着かないのも分かっけどよ……聖衣がないお前が立ち向かってても、危険なだけだったの！」

「そうだぞ、白虎。何にしろ、落ち着け。話はそれからだ」

「で、でも……！」

白虎はリヴァージュとポセイドンの方を見つめた。リヴァージュは白虎を見下したまま、そこから瞳が明るくなる気配がない。白虎は目を瞑り、顔を下に向けて、拳をギュツと握り締めた。それから、震えた声でボソツと言った。

「……分かった。不承不承ながら、二人の言うことを聞き入れよう」

本当に嫌々で、渋々な様子であった。水鹿と圭熊は一安心した様子で、白虎の上からどき、白虎を解放。白虎は二人がどくなり、すぐに上半身を起こして、二人を見つめた。

そして、言った。

「……ごめんな、二人とも」

「いや、いいさ。お前の無茶苦茶はいつものことだ」

「水鹿……」

「そうそう。それに、止められてよかったよ。お前がその無茶苦茶を重ねる前にさ」

「圭、くん……」

三人は同時に立ち上がった。白虎は「くっ」と歯を合わせて、自分の無鉄砲さとその無茶苦茶さに対して、後悔していた。この様では、背中に刻まれた虎に笑われてしまう。周りに言われて冷静になるようでは、まだまだ自分は未熟だと言っているようなものだ。白虎は痛感していた。

そして、圭熊と水鹿は白虎の一步手前に出て、その拳を鳴らした。

「白虎……せめて、お前の無茶苦茶に付き合わせてくれよ！」

「そうだ。この任務、お前だけのものではないのだから。そこまで通すのならば、オレたちにも付き合わせて貰わないとな」

「ふ、二人ともっ……!?!」

白虎は非常に驚いた様子で二人を見ていた。水鹿に至っては、ポセイダンの封印という点を重視していたが——きつと、言うことを聞かない白虎に対する呆れの一部でもあ

るのだろう。あんなに言うことを聞かないのならば、自分も白虎に付き合おう、と。

水鹿は翔馬の方を振り返って、ニコリと微笑みながら言い放った。

「翔馬……お前はアテナをしつかりお守りしてろ」

「……分かった」

翔馬はアテナをちらつと見つめてから、コクンと頷いた。

だが、翔馬も翔馬で、グツと拳を握り、何かしたげに三人を見つめていた。アテナはそんな翔馬の拳に自分の手を重ねた。翔馬は重ねられ、アテナの方へと顔を向けると、そこには、力強く笑みを浮かべて、アテナの顔。翔馬はその笑みから何か感じ取ったのか、コクン、と首を縦に振って、重ねられた手に、更に自分の手を重ねた。そして、軽く会釈をして、その場を離れた。

アテナは、戦場へと旅立って行く翔馬の背中を見届けて、自分を縛っている水の縄を見据えた。

水鹿と圭熊はポセイドンとリヴァージュの方を見つめながら、その小宇宙を燃やし始めた。ポセイドンはフン、と鼻を鳴らしながら、槍の先端に小宇宙を集中させた。

「貴様ら人間ごときの攻撃など、効かんぞ！」

「分かつてるさ、氷槍百蓮華エエエエ—— ツツ!!!」

「無尽熊拳—— ツツ!!!」

ポセイドンの元へと、氷槍と熊の手が放たれた。しかし、やはりといったところか、先ほどの白虎のように全く通じない。水鹿と圭熊はそのことに対して顔を歪めながら、杖を放ち続けた。そして、その二つの中に、龍が追加されるのは遅くはなかった。

「！ 白虎！」

「わいの無茶苦茶に付き合うのなら、わいもここに参加しなきゃな！」

「……そうだな！」

水鹿はニコリと微笑み、白虎の言うことに頷いた。龍が追加されたことで、こちらの勢力は一気に強くなった。しかし、ポセイドン相手にはそんなもの赤子同然であり、全く通じない。そして、相手の槍の先端に小宇宙が貯まり続けている。できれば、あの小宇宙が放たれるまで、粘ってみよう、と三人がそう思った時だった。

「！」

こちらから押す小宇宙がまたもや強まったのだ。白虎たちはキョロキョロと辺りを見渡して、その姿を確認した。その視線の先に見つけたものは、翔馬の姿だった。

「翔馬！」「翔くん！」

翔馬は名前を呼ばれると、ニツと笑みを浮かべて、それに答えた。水鹿は「アホ！」と呆れたように、こちらにやってきた翔馬に口出しした。

「お前、アテナの傍にいらって言っただろ!？」

この戦場だ。アテナには聖闘士が一人ついていなければ、どうなるか分からない。何より、そんなアテナを第一に考える翔馬だ。ここに翔馬がくる理由はない。だが、翔馬は水鹿に切り返した。

「少しぐらい、お前たちのバカに付き合わせろ。こうして、白虎のバカとお前たちのその釣られように付き合えるのも俺なんだからな」

「翔馬……」

「因みにアテナはアテナで自分で防御壁を張れるようだから、心配ないと言っていたぞ」
「相変わらず頼もしいよなあ、あの人……」

白虎はもつと守られてもいいのに、とアテナに対して思っていた。アテナは力を吸い取られていなかったり、弱ったりしていない以上、少しぐらい無茶苦茶したところで、何ともないのは確かなのだが、まあ、この場ではあまり気にしない方がいいのか。しかし、白虎は翔馬の参入を同時に嬉しく思っていた。そして、ポセイドンとリヴァージュの方を見つめて、技を放ち続けた。

しかし、ポセイドンはその白虎たちの努力を全て無にした。ポセイドンは鏝に小宇宙が貯まると、その小宇宙を白虎たちの放つ小宇宙に向けて放ち始めた。

「！」

明らかに圧倒的なものであり、四人の合わせた小宇宙が跳ね返されるどころか、消滅。

そのまま四人に襲いかかった。

「があっ!」「はっ、あっ!」「ぐっ!」「っあ!」

四人は勢い良く向こう側まで飛ばされ、宙に浮かんだ。四人が落下する際、アテナがその衝撃を和らげようと、小宇宙を使って四人の体をゆっくり降ろさせた。

「四人とも、大丈夫ですか!?!」

「え、ええ……」

白虎はコクンと首を縦に振って、アテナに無事であることを示した。それは他の三人も同じであった。アテナの手助けのお陰で四人のダメージは最小限にはなったものの、ポセイドンから受けたダメージは、一度でも相当なものだった。白虎に至っては先ほどのから跳ね返さたり半裸だったりで、他の三人よりボロボロであり、水鹿たちを心配な顔にさせた。だが、白虎はリヴァージュのためにも、三人と共に立ち上がった。ソロ家の笑顔を取り戻すために。

ポセイドンは再び小宇宙を鋒の先端に向け始めた。白虎たちも同様に、己の拳に小宇宙を貯め始めた。また、先ほどのように失敗するかもしれないが、やるしかない。四人は小宇宙を貯め終えたところで、ポセイドンに向かって、それぞれの技を放った。

「廬山、昇、龍、覇アアアアアアア——ツツ!!!」

「二矢、熊、拳——ツツ!!!」

「ペガサス、彗、星、拳——ツツ!!!」
 「氷槍、砲刃——ツツ!!!」

龍と熊の手と彗星と氷槍が重なり合い、ポセイドンを貫く剣——にはならなかった。それぞれの最大奥義といつてもいい技がこうして重なり合っても、ポセイドンには全く届かない。

「くっ、そおっ……!」

ポセイドンはそのうち、鉾の先端に貯めていた小宇宙を、白虎たちに放った。白虎たちの小宇宙が重なり合った攻撃が、そのポセイドンの攻撃によって、また、先ほどのように消滅していく。白虎たちはどうにかして攻撃を続けたものの、ポセイドンの攻撃を直に受けた。

「水鹿! 翔馬! 圭熊! 白虎——ツ!!」

アテナは今度は吹き飛ばされてこない四人に、呼びかけるように声を上げた。それから、ポセイドンにより縛られ、何もできず、聖闘士たちを見守ることしかできない自分が、腹立たしく思える。

ポセイドンは、自分の目の前に立つ煙をただ、ジツと見据えていた。これで、不必要なもの全て取り除いただろう、と、ポセイドンは心の中で思っていた。煙が晴れば、そこには白虎たちの亡骸があるだろうと。しかし、次の瞬間、ポセイドンの目に飛び込

んできたものは、有り得ない光景だった。

煙が晴れ、はつきりしていく中で、それは姿を現した。黄金に輝きを放つ、一つの大
きな天秤——紛れもない、天秤座の黄金聖衣だった。その天秤座の聖衣の背後には、白
虎たちの姿があった。

「な、なにいい!?!」

偶然近くにあった天秤座の聖衣が、白虎たちのピンチを救ったのだ。白虎は目を見開
き、天秤座の聖衣を見つめていた。

「天秤座の聖衣……ええの?」

白虎がそう呟くと、天秤座の聖衣は黄金の輝きを一層放ちながら、オブジェ状態を解
除し、分解して鎧姿になった。そして、その状態から白虎の腕や足、そして、胴を包み
込んだ。

「まさか……!?!」

「天秤座の聖衣が白虎に……!?!」

「装着された……!?!」

そうして他の三人の目に映ったものは、天秤座の聖衣を装着し、悠然とそこに立って
いる白虎の姿だった。白虎は自分に天秤座の聖衣が装着されたのを確認すれば、手のひ
らを見つめ、グツとその手を握り締めた。

「老師……天秤座の聖衣、お借りします」

白虎は目を瞑り、そう呟いた。こうして、天秤座の聖衣の力を借りて、敵に挑むのは三回目だ。クオーツの件、ファイロの件、そして、今、目の前にいるポセイドンの件。白虎は尻のガード部分を、大胆にも取り、それを伸ばして槍を作った。

ポセイドンはそれを見るなり、フンと鼻で笑みを浮かべて、こちらも槍を白虎の方に向けた。

「武器を持った程度で、私に敵うというのか」

「……別にそんなこと思ってもいない」

白虎は槍を手を持ちながら、コツコツとゆっくりヒールを鳴らして、ポセイドンの方へと歩み寄った。そして、立ち止まれば、その場で槍をポセイドンの方へと向けた。

「ただ……ここを通してくれない限り、私たちは、貴方に抵抗し続ける！」

「人間ごときが生意気な！ 私に逆らったことを後悔するがいい！」

「勝手に言ってるオオオオオオツツ!!!」

その瞬間、白虎はポセイドンに向かって手に持っていた槍を思いっきり投げつけた。白虎の精一杯の小宇宙を込めた、渾身の一撃でもある。しかし、その槍はポセイドンの一歩手前で止まった。

「な、なにいつ!?!」

「フツ」

ポセイドンが鼻で笑みを浮かべた途端、天秤座の槍は、白虎の元へと返ってきて、白虎の左胸を突き刺した。

「な、あ……」

「白虎——ツ!!」

水鹿たちは倒れた白虎の元まで駆け寄り、ポセイドンは呆れたように白虎を見つめながら、フンと鼻を鳴らした。

「天に唾する者は、己に跳ね返る……つまり、神に拳を向ければ、自分に返ってくる。龍星座……お前はそのことをつい先ほど、その身を以て知ったはずだ」

「……ぐ、うう」

白虎は左胸から血を垂らしながら、ヨロヨロと立ち上がり、自分の左胸に刺さっている槍を、引っこ抜いた。流れ出る血の量が少し多くなったが、命には別条がないことが、白虎の様子から伺えた。

ポセイドンは無事でいられた白虎をスツと見据えた。

「ほう、一命は取り留めたようだな」

「コレでほんの数ミリズレていたら、完全に死んでいたけどね」

白虎はニツと笑みを浮かべ、再びポセイドンの方へ槍の先端を向ける。ポセイドンは

その白虎の様に、目を閉じて、呆れたように言った。

「龍星座、お前は同じ過ちを繰り返すつもりでいるのか？ 投げたところで、結果はさつきと同じ……諦めた方が自分の身のためだぞ」

「だからって……だからとて、ここで諦めたら、龍星座の名と天秤座の聖衣が泣くー！」

白虎は片目を閉じ、リヴァージュの後ろにいるポセイドンへと狙いを定めた。先ほどは勢いに任せて槍を打ち付けてしまったが、それだと、リヴァージュを間違えて打ってしまう。何にしても、リヴァージュだけは死守しなければ。白虎の集中力が、小宇宙と同時に燃え上がる。

白虎は狙いが一気にこちらの視線に迫った瞬間、槍を大きく投げつけた。

「見えたアアアアアア——ツツ!!!」

槍は真つ直ぐに、一直線に、ポセイドンの方へと伸びていく。今度こそ、ポセイドンの元へと届く、と白虎は信じて疑わなかった。しかし、白虎のその信じも届かず、無情にも槍は白虎の方へと襲いかかった。

「そんなっ！」

白虎は目を見開き、動けずについて、ただ、ただ、槍がこちらに戻ってくるのを待つしかなかった。その白虎に槍が届くまでの数秒間、白虎は誰かに抱き着かれ、その者と同じ時に、後ろの方へと倒れ込んだ。その間、白虎は時が遅く進んだように感じた。白虎が

倒れ込んだお陰か、跳ね返された槍は、誰の体にも刺さらずに、この部屋の壁へと突き刺さった。

白虎は誰に抱き着かれ、こうなっているのか確認するために、恐る恐る視線を移してみた、が——誰もいなかった。

(え……嘘やろ……?)

確かに誰かに抱き着かれ、こうして押し倒された気がするのだが、気のせいだったのだろうか。白虎は頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら、むくりと上半身を起こき上らせた。

水鹿たちは白虎の元へと歩み寄り、口々に「大丈夫か」「怪我はないか」など、白虎に言い放った。どうやら、周りにはその抱き着いた人物が見えていないようで、聞こうにも聞くことができなかった。白虎は周りに囲まれながらも立ち上がり、無事であるように見せつけた。

「……今んところ、大丈夫やで」

どうしてもあの正体が気になってしまいが、今はそんなことを言ってられないだろう。白虎は聞きたくなるのをグツと堪えた。白虎が無事であることが確認できた水鹿たちはホッと一息ついてから、白虎を守るように囲った。白虎はその三人の様子にびつくりした。

「アンたら、何してん……!?!」

「白虎、オレたちが盾になるから、槍を何度でもポセイドンに投げつける!」

「な、そ、そんなこと……!」

「いいから、投げろ! お前にダメージが来ないように、守ってやるから!」

「……っ!」

白虎は歯を噛み締め、今度は下半身を守るためについているガード部分を、手にし、伸ばそうとした——その瞬間だった。ポセイドンから、尋常でない小宇宙を感じ取ることができた。白虎たちはその小宇宙にびっくりして、思わず顔を上げる。

どうやら、ポセイドンには白虎を押し倒した人物が見えていたらしく、一層白虎を睨み付けていた。

「こんなところに思わぬ伏兵がいたとはな……龍星座、侮れん奴よ!」

「えっ、あつ……」

「お前には今すぐにも死んでもらおう!」

その瞬間、白虎の方へ一直線にポセイドンの銚が放たれた。水鹿たちは何のことがさっぱりであったが、あの銚が白虎の元へ届かないように、一気にその周りを固めた。(ダメだ、これじゃ皆が死んでしまう……!)

白虎はそれだけではどうしても避けたかった。自分はともかく、他の聖闘士に死なれた

ら、白虎はどうしていいのか分からなかった。そして、白虎は前を向いて、槍の方へと視線を集中させた。もう、これしか皆を守る方法はない——白虎は水鹿たちを押し退けて、槍へと走り向けた。

「白虎！」 「白虎！」 「白虎——ッ！」

そうして、水鹿たちが白虎の名前を口々にした瞬間、白虎の歌声が辺りに鳴り響いた。「さあ、眠りましょう——……私の腕の中で……」

その束の間、白虎はポセイドンの銚の刃をその手で掴み、ポセイドンをキツと睨み付けていた。

46：「光の一閃、世界の平和」

「——さあ、眠りましょう、夢を見るために」

白虎は、歌うことにより小宇宙を燃やして、ポセイドンの放ってきた鉾をその手で受け止めていた。ポセイドンは目を見開き、白虎が己の攻撃を手で受け止めたことに対して衝撃を受けていた。同時に、白虎の姿を、誰かと重ね合わせていた。

ポセイドンがそうしている間にも、白虎はポセイドンへと鉾を投げ返した。

「はああああああ——ツツ!!!」

「ぐっ!」

見事ポセイドンの額に命中。ポセイドンは白虎の姿を見ながら、額から血を流し、頭の中で思い返していた。

歌を歌うことで小宇宙の上昇を図ることができ、また、歌を武器にして、周りに攻撃ができるといった人物はポセイドンの知っている限り、数人はいるものの、この白虎、そのうちの一人にまんまそっくりだった。そして、先ほど、白虎を庇うために、白虎を押し倒し——すべて合点が行った。

「お前、まさか、ムーサの三柱の一人にして、歌唱を司る女神、アオイデーか!」

「ふにやつ、はっ、はあっ?!」

知らない人物の名前が出てきた白虎は、変な声を上げるしかなかった。しかも「女神」とは一体どういうことだろう。自分は男の体をしているし、ポセイドンだって先ほどまで自分のその姿は見ていたはずだ。白虎は一体何がどうなっているのか分からなかった。

だが、ポセイドンは「くっ」と声で舌打ちした。

「そうか……ならば、ここまではしつこいのも納得……あやつは性格こそは大人しいものの、とても粘り強く、頑固だ……」

「……」

「しかし、今まで出てこなかった……何故今、さ、ら……」

ポセイドンの小宇宙はそこで途絶えた。リヴァージュはポセイドンの小宇宙が消えたことにより、ふ、とその場で眠るように気絶し、アテナを縛り付けていた水の縄も跡形もなく消えた。

そんな中、白虎は一人、ポセイドンが言っていた名前を頭の中でぐるぐると巡回させていた。

「……」

(歌唱を司る女神……アオイデー……)

白虎の中で、非常に心の中に引つかかっていた。自分と似ているところや、何より、「歌唱」を司る女神であること。自分も歌を嗜んでいるが、ここまでの偶然はあるのだろうか。ポセイドンが言ったとおり、自分がそのアオイデーに似ているということは、自分はそのアオイデーの何かを引き継いでいる、ということだろうか。白虎はグツと拳を握った。

「白虎」

ふと、気が付けば、アテナが白虎の後ろに立っていた。白虎は後ろへ視線を向けて、アテナの方を見つめた。アテナはニコツと微笑み、白虎の手を取った。

「アテナ……」

「ポセイドンの言うことを気にしてても仕方ありません。先へ行きましょう」

「……はい！」

白虎はコクンと力強く首を縦に振って、アテナの手を強く握り返した。アテナはニコツと凜々しい笑みを浮かべ、白虎の手を上へと引つ張り上げ、その場に立ち上がりさせた。

ふと、ポセイドンとしての意識をなくし、気絶したりヴアージュの方を見つめた。このままりヴアージュのことを放っておいてよいものか、白虎としては微妙な気分になる。小さな子ども一人、この場に置いていくわけにもいかなかった。白虎は、アテナか

ら手を離し、リヴァージュの方へと歩み寄って、リヴァージュの様子を見た。

すっかりポセイダンの意識が途絶え、リヴァージュの小宇宙はもはやただの子ども同然であった。ポセイダンが背後にいた時の小宇宙の片鱗はどこにもなかった。白虎はリヴァージュを持ち上げて、近くにあった玉座に座らせてやった。リヴァージュはスウと落ち着いたリズムで寝息を立てていた。

「御息さん、すぐに終わらせるので、待つててくださいね」

白虎はリヴァージュの右手を両手で包み込むように握り締めた。しばらく握り締めたのち、そっと離して、アテナたちを引き連れて、メインブレドウィナへと向かった。

——そして、白虎が立ち去った後、ポセイダンの小宇宙は瞬く間に燃え上がっていた。

「アレがメインブレドウィナかな！」

「ええ、あれがメインブレドウィナ、海界の大黒柱です！」

白虎たちは急いでメインブレドウィナへと向かっていた。七柱を壊しても、メインブレドウィナを壊さなければ、世界を救うことはできない。早く壊して、地上の平和を掴まなければ。

「早く、急いで！」

——と、白虎たちが建物の出口から伸びている階段を降り立った時だった。

「！」

突然一同の背後から立ち込めてくる巨大な小宇宙。その圧力はかなりのもので、アテナの足でさえ止めてしまうものだった。この小宇宙に対抗できる者は、神でなければ対抗できぬだろう、といったぐらいに。白虎たちはまさかと思ひ、おそろおそろ後ろの方へ振り返った。

「っ、そん、な……！」

白虎は掠れた声で、そう呟いた。信じられない、いや、信じたくない。今、自分の目の前に広がる光景に対して、誰か嘘だと言つて欲しかった。

「御子息さん……！」

白虎は震えた声で、相手の呼び名を口にした。そこにいたのは、ポセイドンの小宇宙をまとつたリヴァージュだった。その背には先ほどのように、リヴァージュの口のみ借りている、ポセイドンの姿もあつた。ポセイドンは鋒の先から、小宇宙の光線を白虎に向けて放った。

「っ！」

「危ないっ！」

白虎が戸惑っている間にも、圭熊がその盾になり、その光線を直接受けた。圭熊は光線を受けると、体をピリピリとさせて、その場に崩れた。白虎は圭熊が崩れれば、すぐ

に駆け寄ってその肩を支えた。

「圭くん！ 大丈夫!？」

「白虎つ……お前は早くアテナの姉ちゃんとメインブレドウイナへ……」

そうしている間にも、また、ポセイドンは圭熊に向けて小宇宙の光線を放とうとしていた。圭熊はそんなポセイドンに向かって、立ち上がって、こう言い放った。

「来るならこいよ、ポセイドン！ この先は絶対譲らねえから！」

「圭くんっ！」

光線が圭熊に向かって一直線に放たれる。圭熊はそこから一步も動こうとはせず、ポセイドンの光線が、ただ、こちらに来るのを待っていた。

——そして、光線が圭熊のほぼ直前に来た時、それは起こった。

圭熊は反射的に瞑っていた目を、ソツと開いた。何かが黄金の輝きを放っているらしく、眩しかった。そして、圭熊の目の前に広がっていたものは、衝撃が走るものだった。

「！…これは！ 牡牛座の黄金聖衣!？」

そう、圭熊の目の前にやってきたのは、オブジェ状の牡牛座の黄金聖衣だった。牡牛座の黄金聖衣は、圭熊の目の前を陣取り、ポセイドンの光線から、圭熊を守っていた。

圭熊は唖然とした様子で、目の前の牡牛座の黄金聖衣を見ていた。まさか、こんなところに来て来るとは思いもしなかったのだ。圭熊が唖然としている間にも、牡牛座の黄

金聖衣はそのオブジェ状態を解き放ち、圭熊をまとう鎧となった。

「牡牛座の黄金聖衣が、圭くんをまとった……!?」

白虎が驚く中、圭熊は手のひらをギユツと握り締め、それを見つめた。そして、ポセイドンの方へと視線を移し、ザツと構えた。

「きつと、じいちゃんが俺に力貸してくれたんだ……。ポセイドンに対抗できるための力を、俺に与えるために……!」

圭熊は、拳をコキコキと鳴らしながら、一層拳を握る手を強くした。その次の瞬間、圭熊はポセイドンに向かって、一矢を放った。

「一矢、熊拳——ツツ!!!」

一矢となった熊の手が、ポセイドンの方へと放たれる。だが、ポセイドンは光線を再び放ち、その一矢を圧倒した。

「っ!」

圭熊は何かその光線の威力がこちらに来るのを抑えてはいるものの、かなり限界が近く、こちらが吹き飛ばされるのも時間の問題であった。

「ぐ、ううっ……!」

早くも圭熊の体が後退し、その時は刻々と迫ってきていた。白虎はその様子を黙って見ていられず、そろそろ圭熊の手助けに入ろうかと、圭熊の左横に並ぼうとした瞬間

だった。

「—」

圭熊の放っている拳の中に凍気が混ざっていた。まさか、と思い、二人は視線を右隣へ集中させた。そこには、凍気を放ち、ポセイドンの威力を抑え込もうとしている水鹿の姿があった。

「兄ちゃん!」「水鹿!」

「ぐ、う……二人の力を以てしてもポセイドンの光線は防げないというのか……」

水鹿が加わったところで、時間稼ぎにしかならなかった。水鹿の体も早くも後退しており、このままではあつという間にやられてしまう。

「二人とも!」

「ぐあああああ——ツツ!!!」

そして、とうとう二人の小宇宙がポセイドンの小宇宙に圧倒され、吹き飛ばされる——その時だった。水鹿の目の前に、一つの黄金の光が舞い降りてきたのだ。

「これは……水瓶座の聖衣……!」

そう、まごうとなき水瓶座の聖衣だった。水瓶座の聖衣は水鹿の方をその向きを向けるなり、オブジェ状態を崩して、水鹿の体にまとう鎧となった。水鹿は水瓶座の聖衣をまたとえば、ポセイドンの方へと視線を向けた。

「黄金聖闘士たちが力を貸している今、オレら三人であれば、ポセイドンに立ち向かえるかもしれない……!」

三人はザッとポセイドンと対峙するように、その体制を整えた。ポセイドンはリヴァージュを通して、そんな白虎たちを哀れな目で見つめていたが、白虎たちはそれでも構わなかった。アテナと翔馬はその三人の様子を後ろから見つめながら、緊張した面持ちを見せていた。

白虎たちは、ポセイドンのスツと見据えながら、それぞれ構えた。それと同時に、三人の小宇宙が一気に燃え上がる。

「二人とも、御息さんには当たらんようにするんやで!」

「ああ」「わーってるよ」

ここまで来ても、リヴァージュに対する優しさを忘れたわけではない。リヴァージュはポセイドンに借りられているだけだ。あそこにはポセイドンの姿はあるのも、リヴァージュの姿はないのだ。三人はポセイドンに狙いを定めた。

そして、それぞれの思いを胸に、渾身の一撃をポセイドンに向かって放った。

「廬山、昇、龍、覇アアアアアアア——ツツツ!!!」

「一矢、熊、拳——ツツツ!!!」

「氷槍砲刃——ツツツツ!!!」

白い龍と熊の手と大きな氷槍が、ポセイドンに向かって放たれる。だが、ポセイドンはそれを自分の目の前で払うように、四方へと威力を分散させた。

「無駄だ。いくら私に攻撃したところで、通じるはずがない！」

「ぐうっ……！」

白虎たちは悔しそうに顔を歪めた。自分たちの攻撃はこれ以上通じないのか。しかし、白虎たちは悔しくしながらも、諦めようとはせず、その力を放ち続けた。通じなくとも、燃やし続けられれば、一瞬でも通じると信じて。

そんな中、辺りに響いたのは、白虎の歌声だった。

「目覚めた時の輝く日差し……！」

水鹿たちは思わず白虎の方に自分の顔を向けた。一体何事なのか、と。そして、白虎はただ、リヴァージュ一点を見つめて、その歌を響かせていた。

「小さなあなたは、何を考えているの？　小さな体に、何を抱くの……？」

「ぐっ、ううっ……！」

その歌を聞いていたポセイドンが、苦しみ始めた。同時に、リヴァージュから感じられる小宇宙が、ポセイドンが乗り移る前と同様のものになってきていた。白虎は昇龍覇を放ちながら、微笑み、歌い続けた。

「Shiny Dream——思い出して、小さな夢だけど……！」

ここで、とうとう白虎たちの技の威力が、ポセイドンに勝ってきていた。ポセイドンとリヴァージュから感じられる小宇宙からして、白虎の歌によりリヴァージュの意識が目覚め始めたということか。圭熊と水鹿も、白虎の歌を聞きながら、自分たちの勝利をどこか確信して、コクン、と互いに頷いて、ポセイドンに向けて放つ技の威力を一気に増幅させた。

白虎はリヴァージュの意識がここに戻ってきているのを確認すれば、歌の最後の一節を一層大きく高らかに、そして、リヴァージュに向けて言い放つように、その口から発した。

「Shiny Pray——私にだけ話してくれた……大きな願い——……」

その瞬間、三人の攻撃が見事にポセイドンへと衝突した。ポセイドンはその攻撃を浴びながら、どうしてこうなったのか、その頭で疑問を感じ取っていた。

（まさか、これが奇跡だとしても言うのか……バカな……神の前で奇跡など有り得ぬ……）
ポセイドンはそう思いながら、意識をそこから霞めていった。一方のリヴァージュは、ポセイドンの意識が消えたことにより、先ほどのようにその場に倒れ込んで、意識を失った。そこで駆け付けたのは翔馬だった。

「翔くん……」

「……ここに黄金を携えているのは、水鹿、圭熊、そして白虎だ。あとはお前たちに任せ

る」

「うん、分かった！ 行こう！」

白虎はアテナたちを引き連れて、メインブレドウイナへと向かった。翔馬はそれを見送ると、そばにあったポセイドンの鱗衣を見つめて、ギョツとその拳を握った。

とうとうメインブレドウイナの目の前にやってきた白虎たちは、その大きさに呆然としていた。今まで見てきた七柱よりも断然巨大なそれは、地上に続いていると言わんばかりの高さで、そこにそびえ立っていた。本当にこんなものを壊せるのかどうか、白虎たちは不安になったが——本当にやるしか、ない。

まず、白虎は三節棍を構えた。そして、それをメインブレドウイナへと向けて振り回した。

「はあっ！ って、えっ、あっ、ちよっ！」

しかし、当てる間もなく、すぐに戻ってきた。白虎はその速さに戸惑いながら、戻ってきた三節棍を受け止めた。

「嘘やろ……七柱はこれで壊せたのに……」

白虎は呆然としていた。あの非常に強固な七柱をすべて壊した天秤座の武器が通用しないなど、とても信じ難かった。

「つし、次は俺に行かせてくれ！」

呆然としている白虎の手前に出てきたのは、圭熊だった。圭熊は双節棍を手にして、メインブレドウイナの前に立った。

「てやあつ！」

三節棍と同じように、メインブレドウイナへと振り上げた——が、先ほどと同じように、またもや当てる間もなく圭熊の手元へと双節棍が戻っていく。

「嘘だろオツ！」

圭熊は何とか受け止めたものの、やはり唾然としてメインブレドウイナを見ていた。白虎や圭熊でもダメとなると、残されたのは水鹿だ。

「……よし、やるぞ！」

水鹿はチャキツとトンファーを構えた。トンファーに小宇宙を込めて、メインブレドウイナへと投げつけた。

「つ、はあ！」

今度こそは、何か手応えを感じることができはるはずだ、と白虎たちは期待していた。青銅聖闘士相応の自分たちにはできなかったことでも、黄金聖闘士並みの力はあるであろう水鹿であれば、できるかもしれない、と。

しかし、無情にもトンファーは水鹿の元へと跳ね返ってきた。

「ぐっー！」

水鹿はそのトンファーを足を後ろに摩擦させながら受け止めて、メインブレドウィナを見た。

「一人でダメなら……」

「……分かった」

白虎は水鹿が何を考えているのか察したのか、まだ使われていない天秤座の武器三つ、言わば、剣、槍、盾を取り出して、それぞれの手に渡らせた。白虎たちは、天秤座の武器をそれぞれ携えて、メインブレドウィナに目標を定めながら、小宇宙を極限に高め始めた。白虎は剣を携えながら、他の二人に唱えた。

「破壊することの根本は原子にある！ その原子を砕くことができれば……」

「おうよ、こんな柱も……」

「楽勝に壊せる、ということだな」

水鹿と圭熊は、その白虎の唱えに対し、ニツと笑みを浮かべながら答えた。

「行くでー！」「おう！」「ああ！」

三人は天秤座の武器を構えて、一斉に柱へと飛びかかった。

「いつけエエエエエエエエ—— ツツツ！！！！」

三人が武器をメインブレドウィナに当てた瞬間、それは跳ね返された。

「なっ！ うわあっ！」

そのまま勢いよく天高く吹き飛び、地面へと尻餅をついた。白虎は顔を上げて、それぞれの無事を確認した。

「ふ、二人とも、大丈夫？」

「ああ、何とか……」

「な、なんだこりや……硬すぎじゃねえの……」

三人はメインブレドウィナを見た。メインブレドウィナは傷一つも付かず、その場にそびえ立っていた。

「う、嘘やろ!? 天秤座の武器を以てしても傷一つもついていないなんて……」

黄金聖闘士が12人がかりになっても壊れないと言われていた海界七柱を壊した天秤座の武器を三つ使っても、メインブレドウィナはビクともしていなかった。傷一つも付かず、真つさらな状態。一体どうしたものか。

アテナは、メインブレドウィナを見つめながら、白虎たち三人に言い放った。

「ポセイDONを封じるための壺が、この中にあります」

「!」

「白虎と圭熊と水鹿、そして、私の小宇宙を合わせれば……メインブレドウィナもきつと破壊できるはず」

「アテナ……」

アテナはコクン、と三人に向かって首を縦に振って、それから再びメインブレドウィナへと視線を向けた。

白虎からすれば、アテナがおり、自分たちに手助けしてくれるということが、とても心強かった。アテナは、白虎たちにこの無理難題を押し付けようとせず、自分も出来る限りのことは尽くそうとしてくれている。それだけでも、白虎の心は一層軽くなる。アテナがそこにいるだけでも、心強くなるというのに。圭熊と水鹿もそれは同じだったのか、白虎に視線を合わせてきた。

白虎は他の三人より一歩前へと出て、メインブレドウィナに近づき、ジッと見つめた。それは非常に強固なもので、あの七柱を壊すことができた天秤座の武器も全く通じず、何がどうあっても壊すことができない、目の前の柱。それを壊せる確率は、ほぼ0といっても過言ではないであろう。天秤座の武器で壊せないということは、白虎たちからすればほぼ不可能に等しいのだ。しかし、先ほどはほぼ不可能に等しいポセイドンへの攻撃が通じたのだ。それは自分たちが通じると信じて、攻撃をし続けたおかげ。もし、ポセイドンの時のように信じて、メインブレドウィナへと攻撃を続けていけば、きっと不可能を可能に帰ることができるはずだ。

白虎は目を瞑って、歌をその口から放った。

「Dammi il potere——L'armatura della Billanciana——……Forza sacra……」

その瞬間、白虎の体から、これまでにないぐらいに小宇宙が燃え上がった。白虎は目の前にそびえ立つメインブレドウィナを見つめてから、水鹿と圭熊に顔を向けて言い放った。

「二人とも、わいに力を貸してくれへん？」

「力……？」

二人がキョトンとしている中、白虎はコクンと頷いて、無事であるもう一方の天秤座の剣を手にして、それを二人に見せつけた。

「この天秤座の剣に皆の小宇宙をこめてメインブレドウィナを壊そうと思う」

「で、でも……武器は……」

「そう、通じない。でも、皆の小宇宙を込めた剣なら、壊せるかもしれない」

「……分かった」

水鹿と圭熊はコクンと頷いて、白虎の提案に肯定の意を示した。白虎はさらに続けた。

「そして、わいは廬山龍飛翔でメインブレドウィナへと飛ぶから、二人にはその後押しをそれぞれの技でやってほしいんや。そして、その小宇宙をこの剣に送り込む」

「で、でも、それじゃあお前が……」

そう、あまりにもリスクが高すぎる。たとえ無事に柱を壊すことができても、二人分の全力を受けて、白虎の体が無事でいられるかすら分からない。だが、白虎は余裕な笑みを見せた。

「ええんよ。世界の平和のためなら、わいの命一つどうってことない」

白虎はフツと微笑みを浮かべて、それからアテナの方へとアイコンタクトを交わした。そして、お互いニコツと笑みを浮かべて、頷き合った。そして、白虎はアテナの手をギュツと握りしめた。

「アテナ……力を、お貸してください」

「ええ、もちろんです」

白虎はニコツと笑みを浮かべてから、メインブレドウイナへと体を向けた。

「ポセイドンがまた復活する前に……全てを終わらせる！」

三人の小宇宙が一気に燃え上がる。白虎は勢いがつくように姿勢を低くして、水鹿と圭熊はそれぞれの技の構えを取り始めた。白虎はその二人の中を割ってはいるような位置にいた。

「白虎！」

「行くぞ！」

「よし、こいー！」

白虎は二人の小宇宙とアテナの小宇宙をその背に受けながら、その時をその身で受けた。

「氷槍砲刃——ツツツ!!!」

「一矢、熊拳——ツツツ!!!」

「廬山、龍飛翔オオオオオオ——ツツツ!!!」

白虎は二人の技の威力を背に受けて、勢い良く飛び上がった。それは技もあつてか、龍のようなものだった。白虎が飛び立ち、それを見つめている中で、残された二人とアテナは白虎にただ、ひたすら願いと小宇宙を送り続けていた。

そして、白虎は二人とアテナの小宇宙を更に手に持っていた天秤座の剣にこめていた。アテナら三人と、自分の小宇宙——白虎は一人ではないことを実感していた。例えどんなに離れたとして、例えどんなに遠くにいたとしても、小宇宙が燃え続ける限り、その繋がりは消えない。リヴァージュのことも、聖闘士たちのことも、そして——母親のことも。

（皆がいて、アテナがいて、母ちゃんもこの胸の中にいる……この程度の奇跡、容易く起こしてみせる！）

白虎はメインブレドウィナの目前に来たところで、剣をチャキンと鳴らして、そのま

まメインブレドウィナへと振りかざした。

「光の一閃！ Illuminare Canzone——ツツ!!!」

剣を振りかざせば、そこには光の軌跡の一閃。その軌跡はメインブレドウィナへと向かって走り出した。

それを下の方から見つめていた水鹿、圭熊、アテナは何か花火でも見るような目つきで、その一閃を見つめていた。それだけ、白虎の放った一閃は美しいものだったのである。

剣の一閃は、メインブレドウィナへと見事に直撃した。そして、メインブレドウィナは当たったところからピキピキとヒビを入れて、そこから大きな衝撃音とともに、大胆に大きく崩れ去った。今までの七柱とは違う規模の崩れ去り方であった。

「……これは……?」

白虎はメインブレドウィナが破壊されると、そこから浮かび上がってきた一つの壺を掴んだ。蓋の上には札が貼ってあり、それが何かの圧力を抑えているようにもうかがえる。

「まさか、これが——って、うわっ!」

白虎は地に足を付けば、辺りの惨状を見渡して驚愕した。海底神殿が大きな洪水に飲み込まれ、崩壊を始めていた。白虎は辺りを見渡し走り出して、アテナらの姿を探した。

「や、やばっ……あ、アテナーっ！ どこにおられるのですかーっ！」

白虎はこちらにやってくる水を上手く避けながら走った。何とかして、この壺だけでもアテナに渡さなければならぬ。

「アテナーっ！」

白虎が声を荒げながら、その姿を探し出そうと必死になった——瞬間だった。

「！」

白虎は横から誰かにアテナの壺を触れられた気がした。白虎はその方向を振り向き、その姿を見つめた。そこには、自分が探していた人物が優しく微笑みながら、立っていた。

「アテナ……」

「白虎。ご苦労様でした。あとは私にお任せください」

そう言つてアテナが見つめた先は、今にでもリヴァージュを使って再びその意識を埋め込もうとしているポセイダンの姿だった。ポセイダンはアテナの視線に気が付いたのか、すぐにアテナの方を見つめた。アテナは壺の蓋を開けて、それをポセイダンの方へと向けた。ポセイダンは震えた声で、その壺を指差しているように放った。

「まさか、その壺は……！」

「ええ……白虎と……白虎と圭熊と水鹿が起こした奇跡の賜物。貴方の帰る場所はここ

にある……！」

その瞬間、壺の中から激しい光が放たれた。その光はポセイドンを包み込むようにして、辺り一面を覆った。ポセイドンはその光の中に吸い込まれながら、アテナへと言い放った。

「アテナ！ アテナのやっつていることは愚か、愚かなこと！ あなたははずれ、今やっつて
いる行為に後悔することになる！ そのことをよく覚えておくがいい————ツツ!!!」

ポセイドンがそこまで言ったところで、アテナはスツとその壺の蓋を閉めた。アテナはニコリと微笑みながら、その壺をソツとか抱え込んだ。その瞬間、アテナと白虎は洪水の波がこちらまで近付いていることが分かり、即座にリヴァージュの方を見つめた。

「御子息さん！」

「リヴァージュ・ソロを助けなければ！」

そうして二人がリヴァージュの方へ駆け出した瞬間だった。リヴァージュが倒れている奥の方から、桃色の鱗衣をまとった女性が現れた。その特徴的な鱗衣は一度見たら忘れることはない。白虎は、その鱗衣をまとっている女性を、一度見たことがある。

「あ、アンタ、わいがここに来た時に案内してくれた……」

「……ヴィオラと、リヴァージュ様は私が必ず地上へお返しします」

女性はニコリと笑みを浮かべた。確かによくよく見てみると、女性はリヴァージュ以

外にもヴィオラをその腕に抱え込んでいた。しかし、何故、この女性はヴィオラとりヴァージュを助けるのだろうか。

女性は微笑みを浮かべたまま、白虎とアテナに話し始めた。

「私は、生前、ヴィオラの恋人でした」

「えっ……?!? ヴィオラの恋人……?!?」

白虎はひどく驚愕した。まさかヴィオラの恋人がこんなところにいるとは思ひもしなかった。しかも、死んでいるのなら、何故、このようにしてここにいられるのか。女性はその疑問に答えるようにつらつらと並べた。

「私は海で溺死し、魂も海の底で漂っていたのです。そこで、海底神殿を見つけ、ポセイドン様の力を借りてこうして海闘士として活動しているのです」

「……」

「ヴィオラが海闘士になった時は少々驚きました。そして、それ以上に私の死を引きずって世界を滅ぼそうとしていることに対し、悲しくなりました。私は、彼には幸せになつてほしかった。でも、こんなことでは、その幸せすらどこかへ行ってしまう……。だから、そんなヴィオラの心を変えてくれたりヴァージュ様と、そして、面と向かつてヴィオラと話してくれたあなたには感謝しています。これで、やっと私は自分の使命を全うできる……」

女性がそこまで言うとは、海底神殿は本格的に崩壊し始めた。白虎は波に飲まれ地上に戻って行く中で、女性が涙を流しながら、微笑みを浮かべている姿を、その目で確かに見た。

——そして、ポセイドンとの戦いはこれで決着がついた。

白虎は今回の戦いをこう振り返る。

——『愛を知る戦いだっただけ』——……と。

ポセイドンとの戦いも終わり、それぞれの生活を取り戻していた。

リヴァージュはソロ家に戻され、以前の通り暮らしているという。また、ヴィオラも今後はあのような行為——言わば、リヴァージュの誕生会という場で、テロリストのような真似事はしない、と厳重に注意され、契約した上で、召使いとして再びリヴァージュの傍にいたることになった。

そして、今日はヴィオラの恋人・エリーの命日でもあった。

ヴィオラは花束を手にし、エリーの墓元にそれを置き、目を閉じて顔の前で手を合わせた。そして、髪の毛を風に任せながら、目を開いた。

「ヴィオラ」

そんなヴィオラの後ろには、年端もいかないであろう少年・リヴァージュの姿があつ

た。ヴィオラは名前を呼ばれ、リヴァージュの方へと振り向いた。リヴァージュはニコニコと微笑みながら、ヴィオラの横まで来て、そこに座った。

「エリーさんのおはかですか？」

「……ええ、そうです。今日は彼女の命日なので、花をやりに来たのです」

「そうだったのですか」

リヴァージュはフフツと笑みを浮かべ、墓にやったという花を見つめた。そして、墓の先に広がる海を見つめ、二人は互いに見つめ合った。ヴィオラはふと、思い出したようにリヴァージュに言った。

「しかし、何故でしょうね。ここ最近まで、死んだ彼女に見守られていたような気がするんです……」

それは、決して気のせいではなかった。エリーは確かにいたのだ。

『人魚マーメイドのエリー』として。

しかし、ヴィオラはそれを知る由もない。

アトロポス編

47:「バルナツソス」

白虎はかつて、遊舞乱虎を放って吐血、そこから病院沙汰になったことがあった。今でこそ吐血はしなくなったものの、昔はどんなに体調が万全な状態だったとしても、一度放つただけで、その小さな体で大きくなつた己の小宇宙を受け止めることができなかつた。なのに、その時は、体調が優れない中での技の披露だった。

白虎はその時の光景を少なからず覚えていた。白虎が心配で仕方がない教皇の焦っている顔、連絡を受けて飛んできた水鹿の真つ青な表情、そして、己の鮮血で染まっている、手のひら。それを見ると同時に、自分はもうダメだ、と意識を朦朧とさせ始めていた。自分はここで死ぬんだ、両親の元へと行けるのだ、とも。

しかし、白虎は死ぬことはなかつた。

白虎の体内の血の3分の2も失っている中、輸血を申し出た女性が一人いたのだ。白虎はその女性の顔を薄つすらながらも覚えていて、一言で言えば、とても優しそうな女性だった。女性は柔らかい声で「大丈夫だよ。助かるからね」と言つて、白虎の頭を撫でてくれた。

白虎はそこから先は覚えてはいないものの、目を覚ました時は女性はすでにそこにはいなかった。教皇によれば、白虎に血を提供した後、すぐに帰ってしまったとのことだった。白虎は一度はお礼を言いたいと思っていたのだが、ちよつと寂しくなつてしまった。

今でも、白虎はその女性に対する恩義を忘れたわけではない。会うことができれば、精一杯のお礼はするつもりでいる。

白虎はそう思いながら、日々の鍛錬に明け暮れていた。

「うーん……」

白虎は朝の眩しい日差しで目を覚まし、上半身からベッドを起こして腕を伸ばした。それから、足を床につけて、そこに立ち上がった。今日は思ったよりも晴れていそうな陽気だ。

ポセイドンとの戦いからおよそ二ヶ月程度。あれから春がやってきて、ギリシャでも菜の花が咲き、ポカポカとした温暖な陽気になり、白虎は春という季節を自覚していた。白虎は髪の毛を整えるために、鏡の前に出でだった。ポセイドンとの戦い以降、不自然に短かった後ろ髪が、今では肩甲骨辺りまで伸びている。一体何故こうなっているのかさっぱりだが、きつと、ワカメの食べ過ぎであろうと白虎は思っていた——なんてこ

とはない。

「えっ……う、嘘やろ……?」

実は、白虎の髪の毛は一晚にしてうなじ付近から肩甲骨辺りまで一気に伸びたのである。決してポセイドンとの戦い以降、じわじわと伸びたわけではない。白虎は目を見開き、非常に驚いた様子で、自分の姿を鏡で見つめていた。何か既視感を覚えるな、と思えば、以前ラティエルが白虎に見せてくれた母の少女時代の写真か、ではなく。

「あ、が……な、なんじやこりやアアアアアア—— ツツ!!!」

——鍛錬場。髪の毛が伸び、男女共々一躍の脚光を白虎は浴びていた。外見だけであれば可憐な少女と見まごうその容姿は、やはり周りからの視線を奪いやすかった。

「……す、すげえな、オイ。一晚でここまで伸びるのかよ」

圭熊は呆然としながら、一晚で変化した白虎の髪の毛に驚いていた。白虎は顔を真っ赤にしながら、岩の上で体育座りになっていた。やはり、こうして一晚で変化するとすると、恥を知らないような白虎でも照れるところがあるのだろう。

「お前、元から男なのか疑われるほどの容姿してんに、更にそれに磨きをかけてどうすんだよ」

「ええい、う、うるさいわ! 別に伸ばしたくて伸びた訳ではないっての!」

水鹿にそこを突っ込まれ、顔を更に真っ赤にして声を荒げる白虎。いつも以上におしとやかな外見にはなったものの、中身は相変わらずそこらへんの男子よりガサツで手荒いようだ。白虎を見つめていた聖闘士やその候補生たちは思わずサツと視線を逸らした。

白虎はむすつとしながら、地に足をつけ、そこに立ち、伸びた髪の毛を右手でサラツと掻き上げた。ふと、白虎はこちらを見てくる視線に気が付いた。その視線の方向へ振り向くと、翔馬が険しい顔をしながらこちらを見つめていたのだ。翔馬は何か思い詰めた様子で、白虎はどうしてもそれが気になったのか、翔馬の方へ歩み寄って、聞いた。

「翔くん？ どないしたんよ？」

「あつ……いや、何でも、ない……」

「……そっか」

聞かれた途端、こちらから目線を逸らすように顔を俯けた翔馬に対し、白虎はどうしても疑念に近い何かか払えなかった。自分の髪の毛が急に伸びたことを重く受け止めている、かつ、自分の髪の毛がどうしていきなり伸びたのか知っていそうだ。

「あ、あのさ……」

何か知っているのではないかと白虎が翔馬に問い掛けようとした時だった。

「白虎……貴方、随分可愛らしくなったわね……」

「……あ」

白虎はロボットののように、ギギギと音を鳴らしながら、その声のする方向を開いた。そこには、目をキラキラと輝かせながら、白虎を見つめているアテナ・ラティエルの姿があった。白虎はヘラヘラと気まずそうに笑みを浮かべながら、ラティエルに挨拶した。

「ア、アテナ……お、おはようございます……」

「ええ、おはよう。髪の毛……いじつてもいいかしら？」

「あ、は、はい……」

白虎はラティエルの問いにそう答えると、ラティエルの方に後頭部を向けた。白虎は見つかつたら大変なことになるであろう相手に見つかり、もはや気力を失くしていた。

このまま色々な髪型に弄られ尽くされるのだろうな、と白虎は思っていたのだが、白虎のその予想とは正反対に、ラティエルは何かに気が付いたように、訝しげに白虎の髪の毛を手を取って見つめていた。

「これは……」

ラティエルはそう小さく呟くと、白虎の髪の毛から己の手を離れた。白虎はラティエルのその反応に、「頭」「？」とクエスチョンマークを浮かべながら、ラティエルの方を振り向いた。すると、ラティエルは白虎の手をギュツと握り締めて、こう言った。

「白虎、少し、ついてきてくれないかしら」

そして、時間はそこから一気に飛び、その日の夕方に当たる。白虎は聖衣箱を背負いながら、ギリシャのとある山をその足で登っていた。その山の名は——パルナツソス山。ここは、アポロンとコリキアンのニンフたちを祭っていると言われており、アテナともそれなりに関わりはある場所らしい。らしい、というのは、白虎は今までパルナツソス山は名前だけしか聞いたことがなく、知識そのものは微妙なところなのだ。

白虎は夕日が入り込んでくる中で、何故、自分がここに行かなければならないのか、ラティエルから説明されたことを思い出していた。

今朝、ラティエルは、白虎のいきなり伸びた髪の毛に触れて、すぐにその異常に気が付いた、とのことだった。

白虎の髪の毛から感じ取ることができると小宇宙がその証拠だとされており、その小宇宙の大きさは、黄金聖闘士ですら感じ取ることができないほど、かすかなものだと言われている。もちろん、髪の毛が伸びた本人もそのかすかな小宇宙に気付くことはできない。もし、このままラティエルが気付かなければ、白虎はそのことに気付かず過ごしていたらだらう。

そして、その小宇宙は、アテナ以外の女神の小宇宙に似ている、とのことだった。だ

が、似ているというだけで、本当にその女神のものかどうかは定かではないので、一度確認する必要がある。そのために、まず、手始めにパルナツソス山に行ってみよう、ということだった。

白虎は何故、ラティエルがパルナツソス山に行くことを最初に勧めたのか、いまいち読めなかった。だが、ラティエルには何か考えがあるのだろうと思い、白虎はそのままパルナツソス山の道を進めて行った。

一方、その頃翔馬は、天馬星座の聖衣をアテナ神殿の方へと置きに行っていた。聖衣をアテナに返却するということは、言わば、聖闘士を引退することを告げる鐘でもあった。

(もう、これ以上は天馬星座の聖闘士としての役目を果たせない……今の俺には、それ以上を為すべきことがある)

翔馬は天馬星座の聖衣箱を見ながら、ギユツと体の横で拳を握りしめた。こうなった以上、翔馬はここにいたくとも、いることもできない上に、聖闘士としての役目も果たすこともできない。そして、それ以上の役目もできてしまった。ならば、聖闘士の名前を返上した方が、アテナにとっても失礼にはならないだろう。

翔馬は天馬星座の聖衣に背を向けて、そこから立ち去ろうとした時だった。

「翔馬！ お前、何してんだよ！」

圭熊が、翔馬を追いかけ、翔馬の元まで歩み寄ってきたのだ。翔馬は圭熊の突然の登場に驚きを隠せないながらも、フンと鼻を鳴らした。

「何って……アテナに天馬星座の聖衣を返却しにここに来たんだ。お前こそ、何でここにいるんだ？」

「いや、俺はお前を飯に誘おうと思つて、お前んとこの師匠を訪ねたんだよ。そうしたら、ここに行つたつて言うから……」

圭熊は、返却された天馬星座の聖衣箱を見ながら、ギユツと拳を握りしめた。

「でも、まさか、聖衣を返却してるなんて思つてなかつたよ。だって、お前、アテナのこゝと第一に考えるような奴だし、これからもずっと聖闘士やつてるかと思つてた」

「……」

「なんで……なんで、聖闘士やめようとしてんだよ、お前……。兄ちゃんがこのことを知つたら、多分俺と一緒に止めに入るだろうし、白虎だつて殴るまではすると思うぞ」
圭熊がそう言つたところで、翔馬は特に表情を変えようとしなかつた。翔馬は圭熊に向かつて冷たく言い放つた。

「別に、俺が聖闘士辞めようがなんだろうが、俺の勝手だろう？ お前が止める義理はないはずだ」

「確かに……確かにそうだけどさ……」

圭熊は顔を下に向けた。確かに自分が翔馬の聖闘士をやめるといふ意志を止める権利はない。翔馬のことは翔馬だ。だが、圭熊の中にはどうしても譲れぬ何かがあった。

圭熊は顔をバツと上げて、翔馬に言い放った。

「でも、辞めるなら辞めるで俺らに理由ぐらい話してくれよ！ 何も言わずに聖闘士やめるなんて絶対許さねえぞ！」

翔馬は目を若干開いて、圭熊を見ていた。やはり、翔馬も翔馬で、辞める前に言いたいことがあるのだろう。だが、翔馬はそのことにはギョツと固く口を紡ぎ、圭熊へと背を向けた。そして、冷たく言い放つ。

「俺がお前に理由を言う義理もない。もう頭を突つ込まないでくれないか」

「……翔馬」

圭熊は黙り込んだ。翔馬は圭熊が黙り込むなり、その場から歩いて去っていた。そこに残ったのは、持ち主がいなくなった天馬星座の聖衣と、ただ、呆然と翔馬の後ろ姿を見送っている圭熊だった。

「つはあ……」

（かれこれ数時間ぐらい歩いとるはずなのに、まだ辿り着かないんかなあ……）

白虎は近くにあつた木に手をつけて、その場に止まった。随分と歩いた気がするのだが、なかなか何かに辿り着かない上に、何も掴めるようなことはない。

白虎が下に顔を向けると、伸びた髪の毛が、サラッと白虎の顔の横と肩にかかった。白虎はそれを手で摘み見て、ふと、思い出したことがあつた。

(歌唱を司る、女神……)

ポセイドンが言っていた、歌唱を司る女神・アオイデーの存在。白虎は、その時以降は思い出しても「後で調べるか」程度で、特に何も思いもせず、寧ろすぐに忘れてしまふぐらいに小さなことだった。しかし、今、こうして改めて思うと、もしかしたら、自分の髪の毛の毛のことで何か関係があるのかもしれない、と思えてくるものだった。

もし、ポセイドンとこととアテナの言うことを合致させれば、アオイデーが白虎の髪の毛を伸ばしたと予想しても、過剰なものではない。しかし、そこで新たに、何故白虎の髪の毛を伸ばしたのかの謎も出てきてしまうわけでもあるのだが。

白虎は木から手を離すと、再び前に向かって歩き始めた。随分と歩き、白虎の体に負担もかかっているはずなのだが、聖闘士の体は鍛え抜かれた頑丈なもの。この程度の道のりなど、どうってことはない。白虎は未だに見えぬゴールを目指して歩き続けた。

「んっ」

(なんや、この小宇宙……)

だが、白虎がその足を進めて行くことに、辺りの雰囲気や小宇宙はおかしなものになっていく。目的地へと近付いている証拠でもあるのかもしれないが、それにしてもどこかしら不自然だ。なんというか、この小宇宙、ぼんやりながらも白虎に向けてられている敵意そのものでもある気がするのだ。白虎はここに来るのが初めてゆえに、こうして尋常でない敵意を向けられる筋合いはないと感じていた。警戒しているなら警戒しているで、こんなに遠回しに自分にこんな小宇宙を向けたりなどしないはずだ。白虎は辺りを気にしながら、歩き続けた。

そうして白虎が歩き続けていると、ぼんやり薄っすらとしか感じ取れなかった自分に対する敵意が、剥き出しになるがごとくはつきりとそこに現れ始めた。

「……………」

(おかしいっ…………… この一带、何かがおかしいっ……………)

白虎は思わず立ち止まり、キョロキョロと頭を回して、辺りを見渡し始めた。まさか、バルナツソス山にも、聖闘士のように数々の闘士がいるというのか。いや、可能性的には十分にあり得る。こんな神聖なる山だ、闘士がいない方がおかしいであろう。

白虎は見渡すのを止め、額に脂汗を流し始めた。そして、聖衣箱を背負うためのベルトをギュッと握り締めた。

(よくよく考えたら、わいの背負っている龍星座の聖衣、修復してもらっていない……。ここで聖衣をまとったところで、後で脱ぐことは必至……！)

そう、白虎の聖衣である龍星座の聖衣は、海底神殿での戦い以降、全く修復してもらっていない。というのも、最近は大きい戦いの兆候も見られないおかげで、こうなるとは思っておらず、玄夢に修復を頼むのを後回しにしていたのだ。水鹿から何度も玄夢の元に行けと言われていたが、素直に水鹿の言うことを聞けば良かった、とここで実感していた。

白虎は仕方あるまい、とここで逃げるように走り出した——途端だった。

「わあっ、なっ、なあっ?!」

白虎の足止めをするように、どこからか矢が飛んできたのである。白虎はビックリして、思わずその場に転げ、尻餅をついた。自分の足先の目の前にある矢を見ながら、ハアハアと呼吸を整えていた。

「い……一体これは……」

白虎が汗を拭っている間にも、それは迫っていた。白虎は背後から謎の気配を感じ取れば、頭にクエスチョンマークを浮かべながら、そちらを振り向いた。

振り向いた白虎の視線の先にあったのは、聖衣のような鎧を纏った、女性三人の姿だった。その女性三人の背中には、小さいものの、それぞれ鳥のような羽がついており、

また、その三人は少なくとも白虎よりは年上であるような体と顔つきをしていた。

そんな三人のうち、真ん中いた一人が、「ふむ」と白虎を見るなり、意外そうに溜息をついた。

「ふうん、男の匂いがしたと思つたら……何だい、女と変わらない顔立ちしてるじゃないか」

「は、はあ……」

「おや、声まで女のようなだね。変声期を迎えたか迎えてないかの年齢のようだが、それにして可愛すぎる」

「ど、どうも……」

(な、なんや、この人……)

白虎は思わずのぞけてしまった。初対面から自分のことを分析して、この女性は一体何がしたいのだろうか。というより、「男の匂い」というのが、まるでここは男子禁制みたいな言い方だ。まさかラティエルは女にしか見えない自分なら大丈夫だろうとここに送り込んだのか。いや、あのラティエルに限ってそんなことはないと思いたい、信じたいのだが。

女性はどうと溜息をついて、それから弓矢を取り出した。

「女のような容姿だろうが、ここは神でもない限り男は基本的に立ち入れないのでね。」

お前が女の子だったら、こんなことしないで済んだのだが……ま、許せ」
「なっ、えっ、あっ……」

白虎は座り込みながら、そこから一気に後退した。同時に、自分の命の危機を感じ取っていた。

（わい……このままだと、殺されるんじゃない……）

そう思っている矢先にも、白虎に向かってその一矢が解き放たれた。

「うぎゃあっ！」

白虎はすぐにそれを避けて、地面に落ちていている小枝や葉っぱを踏みながら、逃げるように勢い良く走り出した。

「くっ、こいつめ！ 待てエ——ッ!!」

「ふにやああああ——ッ!!」

そうして、パルナツソス山で、白虎と女性三人による追いかっこが始まった。女性三人は、その手に弓を携えて、いつでも白虎を攻撃できるようにしていた。白虎は追い付かれないように走りながら、どこか隠れることができる場所を探していた。

（せめて、男子禁制の区域があるぐらい言ってくださいよ、アテナアッ！）

少なくとも、自分はここに来るのは初めてで、男子禁制の区域があるということを知る由もなかった。そして、自分の外見が女性らしいとしても、この三人相手には外見が

女性らしいというだけでも誤魔化せないだろう。性別に関することは「匂い」で判断しているようだ。

「いにやああああ——ツ!!」

そして、次々と自分に襲いかかってくる、幾多なる矢。白虎はそれを避けながら、走り続けた。女性たちは笑みを浮かべながら、白虎にその矢を放ち続ける。

「これに懲りて、もうここには来るんじゃないぞ!」

「ふ、ふにやあつ……!」で、でも、私にはここに来る意味が……!」

「男に、そんな意味があるはずがないだろうっ!」

「にやあつ!」

白虎に向かって、鋭い一矢。白虎は涙目になりながら、その一矢を避けた。

このままでは自分ほとんど向こうにやられっぱなしだ。白虎はこうなったら仕方あるまい、と思い、走るのを止めて、女性たちの方を振り向き、小宇宙を燃やし始めた。女性三人も白虎が走るのを止めるのに合わせて、その足を止めた。女性三人のうち、右にいた人物が、白虎に問いた。

「貴方、何のつもり? 死ぬ気になってくれたの?」

「いや、違う……私は女の人とはあんまり戦いたくはないし、手を上げることも母から『ダメだ』と注意されてきたが……ここまでできたら、こちらも、そういう手を打ちかねな

「い」

白虎は聖衣箱を下ろせば、特に恥ずかしがる様子もなく、その身に纏っている服を脱ぎ、ズボンも下ろして、その肉体を露わにした。前回、パーティーで全裸になった白虎からすれば、女性三人に自分の全裸を見せることはどうってことないのだろう。

一方の女性たちは、白虎が子どもとはいえ、男性の裸を見て気がでないようだが、女性たちは目をその手で覆いながら、顔を真っ赤にしていた。

「ち、ちよっ……！ す、すこしぐらい隠さないよー！」

「そ、そうだ！ 私たちを女扱いするんだったら、下半身のそれぐらいは隠さないか！」
二人の白虎に対する意見に、先ほどから何も話していない大人しそうな一人の女性が、コクコクと顔を真っ赤にしながら頷いていた。

だが、白虎はそんな女性たちの意見を聞き入れる気もなく、目を瞑って、スウツと息を吸い始めた。

パルナツソス山、中枢部にある神殿。その更に中心核ともいえよう建物では、一人の女性が何かを察して立ち上がっていた。その女性は、髪の毛が綺麗に透けている茶髪で、その髪の毛は知りより下にまで伸びている。そして、瞳は垂れており、優しそうなものだった。

女性は、その優しそうな瞳についている眉をひとそめて、窓から見える空の様子を見つめていた。

「……」

（何かが……何かが、始まろうとしている……）

女性が体の横でギュツと拳を握った——その途端。

「アオイデー様、アオイデー様ッ！」

「！」

女性は騒がしいその声に反応して、そちらの方を振り向いた。そこにいたのは、急いで走ってきたのか、ハアハアと息を切らしている女性メイドの姿だった。メイドは女性の方に顔を上げた。女性はメイドの肩を支えて、驚くように、かつ、メイドを心配しているような表情で、聞いた。

「エール、どうしたの？ 一体何があったの？」

メイド・エールは、息を整わせながら、「は、はいっ」と女性の顔を見つめた。

「じ、実は、スパロウとレイヴンとカナリーの三人が侵入者の男を見つけたようで、今、その男に対する攻撃に回っているようです」

「侵入者……？」

教えられた女性は、スツと目を細めた。エールは更に女性に伝えた。

「はい。なんでも、髪の毛の長い、女の子のような顔立ちをした男の子ということ……背中にはおっきな箱を背負っていたようです」

「……まさか!」

女性は全てを把握したのか、バツと顔を上げた。エールは、突然顔を上げた目の前にいる女性を、きよとん、と見つめた。女性はエールに言った。

「エール。グルースの羽衣をまどつたらここにきて頂戴」

「よ、よろしいのですか……?」

「ええ、少なくともその侵入者は敵ではありません。今すぐ止めに入りますよ」

「わ、分かりました!」

エールは女性に言われるとすぐに走り出して、そのグルースの羽衣をまどいに行った。女性も、エールと共に行くために、準備を始めた。

(白虎……とうとう、ここまで来てくれたのね……)

白虎は目を瞑り、小宇宙をユラユラと揺らしながら、そこに全裸で立っていた。女性三人はその小宇宙から、何かを感じ取ったのか、「うっ」と喉を詰まらせた。もう、白虎の全裸姿に恥ずかしがっている場合ではないのだ。

白虎はしばらくすると、ゆっくりと目を開き、目の前にいる女性三人に焦点を合わせ

た。女性たちはその白虎の視線に、ビクツと肩を跳ね上がらせた。何か、何か、白虎の周りから出ている。そんな気がするのだ。特に、女性三人のうちのリーダー格であろう中心にいる人物は、白虎をおどろおどろと見ていた。

（こいつの雰囲気から、ただの人間にはないものを感じる。しかし、それは一体何だ？）
女性が悩んでいるうちに、白虎は声で音楽を奏で始めた。

「目の前にある草木に、何を問おうか？」

「！ 歌を歌い始めた!？」

女性三人はあまりの驚きから、目を見開き、白虎を見つめた。白虎は歌い、その小宇宙を高めながら、女性三人の方へ小宇宙で問いかけた。

（なんだ？ 私がふざけているとも思っているのか？）

「い、いや、違う……!？」

リーダーである女性は、ガクガクと足を震わせ、顔を真っ青にしていた。そして、白虎を指差しながら、掠れ声で叫ぶように言い放った。

「戦闘に歌を用いるというのは、神とムーサでもなければほぼ不可能……! ただの間でも歌で人を苦しめることはできるかもしれないが、歌いながら攻撃に走ったり、小宇宙を高めることは、この世界では本当に特殊なうちに入る……! 一体、何故、貴様のような人間がそのように歌を……!」

(……気が付いたらできるようになっていたんだ。それ以外に、何の理由がある?)
「氣付い、たら……!?!」

更なる女性たちの驚愕。白虎は、何故こんなに女性たちが怯えているのか全く分からなかった。だが、一つ分かることは、自分が本当の本当に特殊な人間であることだけだ。ここまでの話を聞いて、今まで黙り込んでいた女性の一人が、その弓の矢を白虎に引き始めた。

「か、カナリーー! お前は……!」

「だ、だって……こんな人間に……しかも男に、ムーサらしい芸当できるはずない……お、おかしい、もん……だから、ここで殺す、の……!」

白虎に向けているその矢は、ガクガクカタカタと震え、とてもではないが、こちらに当たりそうな気がしない。当たったところで、心臓には当たらず、足や腕に当たってしまっただろうが。

(……向こうを殺さない程度に、風を巻き起こす!)

その瞬間、女性たちに向かつて、暴風が吹き荒れ始めた。女性たちはそんな風の中、ギリギリ立っていられているが、先ほどから矢を向こうに向けている一人の人物は、木に寄りかかりながら、白虎に狙いを定めていた。

「カナリーー! やめないか! この暴風に矢を放つてしまえば、こちらに返ってくるか

もしれないんだぞー！」

「そ、そうよ！ 今は弓矢を仕舞って！」

「スパロウ、レイヴン……大丈夫……絶対、絶対にあいつを仕留めて、みせる……！」

「カナリイイイイ——ツツ!!!!」

そして、矢が放たれたと同時に、それは起こった。白虎に放たれたであろう矢が、誰かの手によって、白虎の放つ暴風を目の前にして止まり、直角になって地面に落ちたのである。女性三人はそれに驚き、白虎も技を止めてしまうほど、非常に驚いていた。

白虎と女性三人の計四人が、ほかん、としていると、こちらへやってくる足音と同時に、更に一人の女性の声がそこに鳴り響いた。

「スパロウ、レイヴン、カナリー。今すぐここから撤退しなさい。これはアオイデー様の命令よ」

そこに現れたのは、女性三人とは形状が違うものの、同じような鎧を纏った一人の女性であった。その女性は眼鏡をかけ、微笑みを浮かべながら、そこに立っていた。

「あ、貴女は、アオイデー様の側近のグルース!?」

女性三人がその登場に驚いている中、白虎はポカーンとしながら、その情景を見ていた。グルースと呼ばれた女性は、女性三人——スパロウ、レイヴン、カナリーの方へと歩み寄った。

「確かにここは男子禁制の区域で、男子が入ることは許されません。ムーサの戦士たちにも男嫌いは多いですし、攻撃するな、とは言いません。しかし、事情も聞かず、いきなり攻撃に走るのは如何なものかと思えます」

「うっ……」「ひう……」「ごめんなさい……」

グルースに叱られて、思わず黙り込む三人。白虎がポケットとしながら、その様子を見つめていると、グルースは笑みを浮かべながら、白虎の方へと歩み寄った。そして、白虎の目の前に来るなり、ペコリとお辞儀をした。

「うちの戦士たちが申し訳ございません。ただ、悪気があったわけではないので、見逃していただけるでしょうか？」

「い、いえ、こちらこそ、男子禁制とは知らず、パルナツソス山に入ったこと……非常に申し訳なく思っております」

白虎もそれにお辞儀し返した。グルースは「そうですか」と呟いてから、向こう側を振り返った。そして、誰かを手招くように手首を動かした。

「アオイデー様。貴女様の言うとおり、やはりこの方は敵ではないようですね」

「ええ。言ったでしょう？ だから、なにも追い出すことはないわ」

そこに出てきたのは、髪の毛の長い、女性だった。女性はグルースにニコリと笑みを浮かべると、白虎の方を振り向き、白虎の方に歩み寄り、その目の前に立った。

白虎は、その女性の姿を見るなり、驚いたように、その姿を見つめていた。

(この人……昔、わいに血を分けてくれた人——……!?)

48：「新たな戦いの信号」

白虎の目の前に現れた女性は、その昔、白虎に血を分けてくれた女性と同じ人物だった。髪型、顔、声、何もかも白虎の記憶の中にいる女性と完全一致した。白虎は驚きから、思わずその場で呆然としてしまった。まるで、何か裏で糸のようなものが引かれているみたいだった。

女性は驚いている白虎の顔に、ソツと自分の手を重ねた。白虎はその感触にびつくりして、つい肩を跳ね上げた。そして、上目遣いで目の前にいる女性を見つめる。

「あ、あの……その……」

白虎が心臓をドクドクと響かせる中、女性はニコツと優しく微笑みながら、白虎の頭をこちらに引き寄せた。白虎は思わず「えっ」と声を出して、女性の顔を見上げた。女性は白虎を優しく見つめたまま、その白虎の頬を撫でた。

「よく……よく、ここまで来てくれましたね、白虎。最初、アテナから事情を聞いた時はちよつと不安だったのだけれど……良かった、無事で。本当に、良かった」

「な、何故、貴女が私の名前を……？」

女性の口からサラツと出てきた自分の名前に、白虎は目を見開いた。自分と女性はこ

ここでは初対面のはずなのに、どうして向こうが一方的に自分の名前を知っているのだろうか。女性はニコニコと微笑んだまま、そのことに対して答えようとはしなかった。

ふと、女性は気が付いたように、白虎を抱き寄せたまま、グルースの方へ言い放った。「グルース。あちらに戻つたら、この子に服を着させてあげて。女兒用でも、婦人服でもどちらでも構わないわ」

「ど、どつちも女物じゃないですか！ 私は男ですよ!? グルースさん、なるべくなら男物の服をお願いします！」

白虎は思わず女性の言うことに突っ込みを入れた。やはり、ここでも自分はそういう扱いなのか、と白虎は肩をガツクリ落とした。女性は白虎のその反応に対して、「あら」と心外そうに白虎のことを見つめた。

「ここ」帯は男嫌いの方が多いのよ？ 昔からムーサの神の媒介は男性の方が多いのね」

「は、はあ……ば、媒介、ですか」

白虎は苦笑しながらも、心の中で「媒介」という単語が引つかかった。今までは依代という言い方をしていたのもあるかもしれないが、それ以上に、白虎の心の中に引かかるものがあつた。

グルースは苦笑しながら、白虎の脱ぎ捨てた服をホイホイと拾い上げて、その腕にか

けた。

「だから、色々攻撃されないためにも女装はしつかりしておいた方がいいですよ。貴方のその容姿と声だったら、言わなければ男とはバレないでしょうし、バレても可愛がられるかもしれませんね。それでも嫌うのはあの三人ぐらいしかいませんし」

グルースはチラツと白虎に攻撃をしかけた三人へと視線を向けた。三人はビクツと肩を跳ね上げて、それからしおしおと顔を俯かせた。

「さて、アオイデー様、戻りましょうか。あ、貴女たち三人はいつも通り門番お願いね」
「はい……」

グルースに言われて、元の持ち場へと戻っていく三人。白虎はその背中姿を見送りながら、グルースの言っていたことを思い出し、不安を抱いていた、というより不安しかなかった。

(可愛がられるとか……嫌な予感しかないッ……！)

モテる分には問題ないが、それはあまりにも自分の理想とは掛け離れすぎており、どうしても良い予想ができなかった。

「では、白虎様。私たちについてきてください」

「は、はい……」

グルースに言われて白虎はその後ろをついていった。その際、白虎は先ほどからアオ

イデーと呼ばれている女性の後ろ姿を見つめながら、何か思い馳せるようにギョツと拳を握りしめていた。

白虎が案内されたのは、パルナツソス山のほぼ中心部にあるであろう神殿だった。それは、青々とした芝生に囲まれ、花が咲き、その周りを蝶々がヒラヒラと舞っていた。これぞ、まさしく「楽園」の二文字が合っていると思われるものであろう。白虎は辺りをキョロキョロと見渡しながら、更にグルースとアオイデーの後ろからついていった。

神殿内は、わりと現代風の装飾が施されており、テレビや電気など、設備もしっかりとっていた。グルースは苦笑しながら、白虎に言った。

「こうして設備が整ったのもつい最近なんですよー。今まではムネーメ様が現代の機器に疎くて、なかなか整いませんでした」

「ムネーメ……?」

「はい。アオイデー様の妹で、記憶を司る女神様です。とてもお厳しい方ですが、それもあってか、ムーサの指揮官を務めたりしているのですよー。普段は書庫室に籠っていて、その姿を目にすることはなかなかありませんが……」

「へえ……」

(記憶を司る女神、ムネーメ、か……)

白虎はどこことなく、その名前から色々と感じ取っていた。今は関係ないが、どこか遠い未来、それこそ何百年先になるか分からないが、きつとそのムネーメにお世話になるであろう、と。

グルースはどこか思い詰めている白虎を微笑みながら見つめれば、もうその場所についたのか、部屋のドアをガチャツと音を鳴らして開いた。そこに広がっていたのは、ベッドや机やら、生活に必要なものがすべて揃っている部屋であった。

「ではでは、白虎様。こちらで少々お待ちになつててくださいね。アオイデー様は服の方をちよつとだけ点検させてもらいますので、私の方へついてきてください」

「ええ、分かりました。白虎、少し待つてね」

「あ、ああ……はい。了解です」

グルースは去る際に、ペコリと白虎にお辞儀をしてから、部屋のドアを閉めた。白虎もそれに釣られてペコリとお辞儀をし、閉められたドアを、ただ、ぼーつと見つめていた。

(アオイデーって人が、ここのリーダー的な人なのかな……)

周りはアオイデーを「様」付けで呼んでいる。もし、アオイデーがここでのリーダーのような人物であれば、何故、白虎の髪の毛がこうして突然伸びたのか、原因が分かるのかもしれない。

それから、白虎は目についた部屋の鏡で、自分のその顔を見つめた。自分の顔立ちが母親の遺伝子が濃いせいだと思っていたのだが、もしかすると、この髪の毛のことで深く関係していたりするのであろうか。白虎は更に出てきた疑問に、頭を抱えた。

しばらくそうして考えていると、トントン、と部屋の中に扉を叩く音が鳴り響いた。白虎は誰だろうと思いつながら、鳴らされたドアのノブに手をかけて回し、こちらへと引いた。すると、そこにいたのは、一人の女性メイドの姿であった。

「白虎様、服の方をお持ちしました」

「ありがとうございます。そして、この声……まさか、グルース？」

白虎は服を受け取りながら、メイドの声が聞き覚えのある声であることか気になり、メイドの方へと質問を投げかけた。メイドは「はい」と微笑みながら、白虎の質問に答えた。

「私はグルースこと、エールと申します。普段はムーサの女神・アオイデー様のメイドをしているのです」

「へえ……」

白虎はまじまじとメイド姿のグルース、もとい、エールを見つめる。だとすると、グルースというのは聖闘士という星座のようなものか。エールは苦笑しながら、「では」とお辞儀した。

「服を着たら、ドアから向かって右手の階段の方を降りて、そこで待つててください。食堂まで案内致しますので」

「はい、ありがとうございます」

白虎もそれに合わせてペコリとお辞儀をし、それを見てからエールはパタンとドアを閉めた。

白虎は相手が去れば、渡された衣類をベッドまで持ち運び、それをベッドの上でバツと翻しながら広げた。

「うひゃあ……」

白虎をそれを見て、思わず苦笑する。ベッドの上に広がっているのは、まさしく女物の白いワンピースそのものだった。体の線が出ないように、裾はかなり余裕があるものだったが、どうにもこうにもヒラヒラとした衣装を着るのは気が引ける。しかし、自分のために用意してくれたのだから、着ないのも勿体無い。

「……よし、着るか」

白虎は服に手をかけて、自分の身をまとわせた。何というか、以前にドレスを着た時感じたのだが、微妙に足元がスースーとして落ち着かない。女性は皆こんなものを着ているのかと思うと、白虎はどこかしら「すごいなあ」と思わざるをえなかった。

それから白虎はドアノブを引き、部屋の外を出る。部屋の外は先ほども見たのだが、

やはり、白虎の頭では考えられないような大理石造りの部屋であった。床は赤い絨毯が一直線に敷かれ、壁の前には一定の距離ごとに、観葉植物が置いてあった。

(えっと、確か……右手の階段、だっけ……)

白虎はエールの言われたとおり、右手の階段へ向かうために、向かって右の方へと足を向けた。様々な絵や彫刻が壁に飾られているのだが、時々女性の全裸の彫刻や、男性の全裸の彫刻などがあり、白虎はそれらに視線を向けないようにさっさと廊下を歩き抜いた。

廊下を歩き抜き、階段を降りると、階段の下の方には先ほどの女性・アオイデーと、メイドであるエールが白虎を待っていたらしく、そこに立っていた。エールは白虎の姿に気が付くなり、ちよいちよいとアオイデーの肩を突つき、こちらへと指差した。アオイデーはエールの指差した方へ顔を向けて、ニコツと微笑みを浮かべた。

「白虎。そのワンピース、よく似合っているわよ」

「そ、それって嫌味ですか……？　そもそも任務とかならともかく、こういう場で女装ですごくい恥ずかしいんですけど……」

「あら、心外ね。嫌味ではないわ。褒め言葉よ、褒め言葉」

「……はあ」

白虎は苦笑しながら、トントン、と階段を降り、アオイデーたちの元へと着いた。ア

オイデーは女装している白虎を愉快そうな表情で見つめていた。

(なんだろうなあ……この人、本当に女神なのかなあ……)

白虎はフウと溜息をついて、チラツとアオイデーの方を見つめた。エールは先ほどのさり気なく、アオイデーが女神であると言い放ったのだが、こうして見ると、ただの女性とほとんど変わらない気がするのだ。アテナの方もただの女性として過ごしているので、何の疑問もないが、女神も女神でやはり女性なのだ、と思う。あくまでも白虎の一見解に過ぎないのだが。

エールは白虎が来るなり、ニコニコと微笑み、二人を引っ張るかのように前に出て、歩き出した。

「では、食堂まで案内致します！」

エールが案内してくれたのは、言った通り、神殿の中にある食堂である。食堂は非常に綺麗なもので、テレビで良く見る、大きな縦長いテーブルが、そこに一個置いてあるのだ。白虎はこんなテレビのような世界が実際にあるとは思ってもみなかったのか、キラキラと目を輝かせて、「ほわー」と声を上げてその感動を伝えた。

アオイデーはそんな白虎を見ながら、クスクスと笑みを浮かべ、エールに案内された席に座った。白虎も同じく案内された席に座り、皿やご飯が全てそこに置かれるのを

待った。アオイデーは「へえ」と意外そうに一切ご飯に手をつけない白虎を見つめた。

「普通の男の子なら、ここでご飯を食べようとしてはたかれるところなんだけど……」

「老師と……私の祖父母がそういう礼儀作法に厳しかったもので」

「あら、そうだったの。貴方なら、すぐにあり付けてしまうイメージがあっただけれど……」

「そうですか……」

白虎は太ももの上で、ギユツと拳を握った。祖父母のことを口にした程度でこんなに感傷的な気持ちになるとは、どうにも自分らしくない。というより、ここに来てから微妙に心が敏感になっている気がするのだ。一体何が白虎をそうさせているのか、全く分からなかった。

「ご飯がすべて置かれたところで、白虎は顔を上げて、それを見た。ハンバーグやら白飯やら味噌汁やら。」

「美味しそう……」

「ええ、このコックの料理は美味しいわよ。さあ、頂きましょう？」

「そう言うアオイデーは、スプーンやフォークを一つずつ取って、それを自分の席に置いた。」

そして、聖域付近の食堂では、圭熊と水鹿と私服姿であるアンバーの三人が、夕食を共にしていた。水鹿はカレーを食べながら、アンバーはピキリアを口にしながら、圭熊の話聞いていた。圭熊は「畜生」と涙を流しながら、酒を一气飲みするかのように、オレンジジュースを飲み干し、そのコップをドンと音を鳴らしながらテーブルに置いた。

「何なんだよアイツ！　白虎たちと仲良くなって丸くなったと思つてたのに！」

「まあまあ……」

「何でこんな時に白虎はいねえんだよ！　髪の毛が伸びた理由なんて調べたつて意味ねえだろ！」

圭熊は翔馬に突っぱねられて、相当感傷的な気分になっていたようだった。翔馬は白虎たち時に出会い、前のように孤独を好むような性格ではなく、ちゃんと他人と笑みを交わせるような人物になっていた。そのはずなのに、何故、今になってこんなに翔馬は周りを省みなくなつてしまつたのか。何故、友人とも言える人物に聖闘士をやめる理由を言つてくれないのか。圭熊はさつぱり分からなかつた。

アンバーは目線を伏せがちにしながら、コップの中に広がる水面へと目線を落とし

た。
「……あの子は、私にもそれを言つてくれなかつた」

「！」

圭熊と水鹿はアンバーの方へとその視線を向けた。アンバーはコップに口を付けて、中にある水を喉に通した。それからコップを机の上にコトンと置いて、圭熊たちの方へと視線を向けた。

「いや……それ以前に、あの子は……翔馬は私たちに言えない何かを隠している気がしてならないのだ。最初に私と出会った時も『俺には天から授けられた使命がある！』などと言いながら、弟子入りを志願してきたからな」

「そ、そんなことを……」

水鹿は苦笑しながらその場面を想像した。冷静なわりには随分と天然が入った翔馬のことだろう、小さい頃からそんなペースでも大したことではないのかもしれない。一方の圭熊は、アンバーのその話を聞いて、オレンジジュースが入ったコップをギュッと強く握りしめた。

「天から授けられた使命……か……」

フウ、と息をつく。何かの冗談だと思いたいのだが、今のアンバーの話を聞く限り、そうとも思えない。アンバーにも聖闘士をやめた理由を話さないぐらいに、翔馬は行き詰まっている、ということなのだろうか。

兎にも角にも、これから翔馬を探し出し、そのことの決着をつけなければならない。絶対に翔馬を見つけて、何としてでもその内を聞き出してみせるのだ。もしかしたら、

翔馬はあえて圭熊たちに言わないで、一人で孤独にどこかへ行こうとしているのかもしれないのだから。

(覚悟してろよ、翔馬。絶対、お前を探し出して、その理由、聞き出してやつからよ)

「……美味しい!」

白虎は用意された料理を口まで運び、口に含めてもぐもぐと咀嚼をすれば、キラキラと目を輝かせながら、アオイデーとエールにそう言い放った。アオイデーは白虎に「でしよ?」と一言言い返して、ホワツと口元を緩めて微笑みを浮かべた。

「結構美味しいでしょう?」

「はい! すごく!……すごく、美味しいです!」

そう言った白虎の食はかなり進んでいた。アオイデーもそれを見て、どうやら満足しているようだ。しかし、一方でアオイデーは思い詰めたようにして白虎に言った。

「白虎。ごめんなさい。貴方には……色々辛い思いをさせてしまったようで」

「え?」

白虎はキョトンと目を丸くさせて、不思議そうにアオイデーの方を見つめた。何故、アオイデーが自分に対して謝っているのか、理由が全く分からない。アオイデーは申し訳なさそうな顔をしながら、手にしていた箸を、パチンとテーブルの上に置いた。

「お母さんのこととか……貴方の祖父母のこととか……色々苦勞をかけてしまったように」

白虎は一瞬だけ自分の中が何となく真っ白になったような気持ちになった。だが、すぐにそれは色を取り戻して、目の前にいるアオイデーへと向けられた。白虎はアオイデーの方へとそのまま耳と視線を向けた。

「本当は、ここで産まれるのが一番良かった。貴方にとっても、貴方のお母さんにとっても、ね……」

「それって、どういう……」

白虎は全くもって訳が分からなかった。ここで生まれるとか、そうじゃないとか。そもそも、このムーサとかいうのと、白虎とその母は一体どんな関係を持っているのか。一から説明してくれないければ、分からない。

アオイデーとエールはお互い顔を見合わせてから、コクンと頷き、白虎に説明し始めた。最初はエールが口を開いた。

「まず……ムーサのことですね」

「はい」

「ムーサというのは、舞踏や歴史に天文……そして歌などといった、文芸を守護している神々の総称なのです。その頂点に立つであろうお方が、この歌唱を司る女神・アオイ

デー様ということなのです」

エールに紹介されると、アオイデーはペコリと軽く会釈をした。

「そう、私は歌唱を司っている女神、というわけなのです。アテナが地上をお守りしているように、私も歌という文化を守っています」

「歌を……」

「ですが、ここにいるアオイデー様は『ムーサの古き三柱』といった存在で、本来は裏方に回り、こうして表に立つことはないんです。アテナ様やハーデス様のように、率先して行動するのはヘシオドスが定めた九柱なのです」

「じ、じゃあ、なぜ表に出ることが……?」

「……貴方の存在と、関係があるのです」

アオイデーがそこまで言えば、どこからか別の召し使いが皿を下げてきた。白虎はそれを黙って見ながら、アオイデーの次の言葉を待った。皿がすべて片付けられたところで、アオイデーの話は再び始まった。

「私たち三柱は、その力を最大限に引き出すためにも人間の媒介を必要とします。無論、必要としなくても出せることには出せるのですが……ただ、私たちはその力に対応できる肉体を持つておらず、この世から消滅してしまうのです」

「つてことは、ここにいるアオイデーさんは幽体みたいなものなんですか?」

「ええ、それに近いものとなります。この世に残ったアオイデーの力の残骸と言っても過言ではありません。そして、ムーサの世界はそんな三柱の小宇宙の残骸によって保たれているのです」

「そんな……」

魂だけになった神々は何体もいるものの、こうして小宇宙の残骸としてこの世に残ってまで己の世界を保っている神がいたのか。アオイデーはニコツと微笑みながら、更に言葉を重ねる。

「そして、白虎。貴方はそんな残骸である私の媒介であるのです。だから、私も安心して表に出ることができるようのです」

「えっ」

白虎は目を点にして、アオイデーの方を見た。アオイデーは「フツ」と口に手を当てて笑っていた。白虎は自分を指差してから、アオイデーの方も指差した。

「わいが……貴方の……媒介……です、か……?」

「はい。髪の毛が急に伸びたり、生まれついでに可憐な容姿も私の影響です」

「……はあ——ツツ?!?!」

アオイデーのあつさりと放ったネタバレに、白虎は大声を上げて、その驚きを示していた。そして、肩をプルプルと震わせて、アオイデーの方に質問責めをした。

「じゃあ、わいがここに来たのは!？」

「必然です」

「アテナはそのことを知っていたのですか!？」

「察してはいたはずですよ」

「何でわいを母さんそっくりな容姿にしたんですか!？」

「そちらの方がこちらに来る時に風当たりも必要以上には強くないし、それに、女神の媒介としては結構いいものでしょう?」

「にや————ツツツ!!」

アオイデーからの回答に、白虎は絶叫という名の叫びを上げた。それから力無くテブルの上へと上半身をうつ伏せに倒れ込んだ。

(まさか……まさか、こんなことになるなんて……!)

白虎にとって、このことは衝撃が大きすぎた。ただ、髪の毛が急に伸びた理由のヒントを掴みにきただけなのに、何故こんなことにならねばならないのか。自分が神の媒介といった事実は、いつか知らなければならぬものではあるものの、それでもやはり衝撃が大きすぎる。今まで普通の少年として、普通の聖闘士として全うしてきたはずなのに。白虎はワシヤワシヤと頭を勢い良く、その両手で掻きむしった。

アオイデーは若干申し訳なさそうに笑みを浮かべながら、白虎に言い放った。

「ごめんなさい、ビックリしたでしょう？　でも、今のうちに言っておかないと、このまま知らずに過ごしていただろうから」

「は、……」

こちらとしてはビックリどころではないのだが。とりあえず白虎は顔を上げて、アオイデーの方へ再び目線と顔を向けた。

「で、何故、私の髪の毛が急に伸びたんですか？　そっちの方が可愛いとかそういうのはナシですよ」

「そうですね……そっちの方が可愛いのは確かなんだけど……理由はもつと別のところにあります」

「……」

アオイデーが最後の一文を言う時、先ほどとは違いそこだけ妙に低い声になったのが効いたのか、辺りは静寂に包まれ、白虎も一気に真剣な目付きになって、アオイデーにその目線を集中させた。

アオイデーの方も意識を切り替えるためか、一度「ゴホン」とわざとらしく咳をして、白虎の方へと声を向けた。

「白虎。貴方の髪の毛が伸びたのは、新たな戦いの始まりであるということを念頭に入れておいて頂戴」

「……………」

「基本、ムーサの神々は自分の媒介へと合図をする時に、媒介の髪の毛を伝つてその信号を送ることはすごく多いのです。もちろん、しない神も中にはいますが、私はそのパターンに当てはまります」

「へえ……………」

白虎は自分の髪の毛をくるくると弄りながら、感嘆の声を漏らした。だから、いきなりこんなにも伸びたということか。合図するにももう少し夢の中に登場するとか、そういうロマンがある合図の仕方でもいい気がするのだが。

一方で、出てきた疑問を白虎はアオイデーにぶつけた。

「そして、合図……………とは……………？ 一体、ムーサに何が……………？」

「……………モイラ、というものを知っていますか？」

「モイラ……………？」

白虎はまたもや今まで聞いたことがない単語に腕を組み、首を傾げた。そして、申し訳なさそうな顔でアオイデーに返した。

「申し訳ございません。小耳にしたこともないようです……………」

「そうですか……………では、説明致しましょう」

アオイデーはコクンと首を縦に振り、それからモイラについて説明し始めた。

「モイラ、というのはギリシヤ神話における『運命の三女神』の総称です。モイラはクロト、ラケシス、アトロポス——この三人がそれに相応します。そのうちの一人、未来を司るアトロポスは、三相女神では『破壊者』に相当される、とてつもない力を持った女神でもあります」

「いわゆる『破壊神』みたいなものですか？」

「そうですね、そういうことになります」

アオイデーは簡単な白虎の例え方に、満足したような微笑みを浮かべながら、コクンと頷いた。

「アトロポス、彼女の役目は運命の糸を断ち切ること。つまり、人にある一つ一つの未来を意図も容易く奪ってしまえるということですよ」

「……」

「クロトの紡ぐ力と、ラケシスの維持する力によって、そのアトロポスの大きな力は抑えられてきました。しかし、現代になって、とうとうそのバランスが崩れたのです」

「……！」

「その手始めに、こちらの三柱の一人であり、表現を司る女神・メレテーの媒介となる者が、こちらでは生まれず、別の世界線の方で誕生してしまった」

「なっ……！」

白虎は思わず声を上げた。そういえば、アテナから聞いたことがある。この世には幾つもの世界線があり、それぞれの神がいると。しかし、その神ですら、お互いの世界に踏み入れることは決して許されない。何故ならば、それを実行すれば、自分たちが、いや、神ですら想像がつかないぐらいに世界のバランスが崩壊していく、と。言わば、アトロポスのやったことは、その琴線に触れることでもあるということか。それぞれの世界の運命をいじめることは、許されざる行為であろう。

アオイデーは無念な表情で、それ以上は何も言わなかった。こちらの戦力どうこう以上、こちらの世界の者が別の世界で産み落とされるという運命を、どうすることもできなかったのだ。白虎もギョツと太ももの上で拳を握り締めた。そして、アオイデーと白虎はお互い沈黙に包まれた。

(アトロポス……とんでもないことをする女神やな……)

人の運命を弄れるなど、本当とんでもない女神だ。しかも、別の世界線に触れたなどと、他の神々からしたら許されざることをしているのだから。だが、だからこそ、白虎のその決意の火は燃え上がるというものだ。

白虎は「フウ」と息をつき、アオイデーの方へ顔を見上げた。

「アオイデーさん」

アオイデーは名前を呼ばれ、その顔を上げた。白虎は力強い笑みを浮かべながら、

言った。

「私は……私は、そのアトロポスを倒すために、あなた方に協力すればいいんですよね？」

「白虎……！」

白虎はニツと少年らしく、だが、全てを籠めた微笑みをアオイデーに向けて、その決意を露わにした。

「絶対に……絶対に、アトロポスを倒して、世界の平和を守りましょう！」

49：「心を剣にして貫く」

その日の夜。翔馬は明かり一つもない、ひと気のない山で、キョロキョロと辺りを見渡して、自分のいる場所を確認していた。それから、自分の手をジツと見つめて、その手で、ギユツと拳を作った。

（もう、ここからは引き返すことはない……いや、できない。やるからには、徹底しないと）

聖闘士を辞めて、ここまでやってきたのは自分の意思だ。自分の正体を隠し、白虎を『監視』していたことも自分の役目で、自らの意思から来ていること。だから、この日が来ることは何れ分かっていたことで、必然のようなものだった。

——なのに、どうしてなのだろうか。

（どこか後ろめたくて……心苦しい……）

翔馬は思わず自分の手から目を逸らした。翔馬は先ほどから、必要以上に「これは自ら臨んだことだ」と言い聞かせていた。いや、正確にはアテナ神殿に天馬星座の聖衣を返した後、言わば圭熊とやりとりをした後からだ。どうにもこうにも、翔馬の中の何かが引つかかって、スツキリしないのである。

翔馬は胸元を抑えて、深く深呼吸をした。

(俺は……一体どこにいたらいんだ……?)

「あそこ」も、きつと翔馬のいるべき場所ではない。だが、聖域にも翔馬の居場所はきつとない。

(アイツらが……白虎たちが用意してくれた居場所……)

そう、「聖域」は白虎たちが自分のために引き入れてくれた、居場所でもある。無論、聖闘士としてしている分には、「聖域」が居場所でも問題はない。だが、今の翔馬は聖闘士ではないのだ。その上、アテナさえも裏切り、白虎たちさえも裏切るような行動し、こんな自分があのまま聖域にいれるはずなどないのだ。

(——って、そんなことを考えている暇ない……。行かなきゃ……。行かなきゃ、「あの方」の元へ……)

翔馬は目を瞑り、その奥底にある、本来の——聖闘士としてのものではない小宇宙を引き摺り出し、燃やした。その瞬間、翔馬の足元には、アニメやその手の本でよく見るような魔法陣のようなものが浮かび上がった。白い光がそこに燃え上がり、翔馬を包んでいく。そんな光に包まれて行く中で、翔馬は聖域を見るように、ここまで通ってきた道をチラッと見つめた。

これから先、二度と聖域に戻ることはない。楽しくて、心地良い聖域に、もう、戻る

ことは決してない。

ふと、翔馬の足元に、ポタポタの数滴の水滴が落ちてきていた。雨が降ったのかと、翔馬は空を見上げてキョロキョロと辺りを見渡したが、雨は降っていないどころか、空に星が満点だ。そして、その星を見上げている間にも、目の前がじわじわと歪んだ。翔馬は目にゴミが入ったのかと、ゴシゴシと目をこすった。

「……っ、おかしいな。何で……あれ……あれ？」

水滴は、翔馬の目から頬を伝い、ポタポタと流れ出ていた。翔馬は何故自分がそうなっているのか、全く分からなかった。いや、分かるうともしなかった。翔馬は、目が痛くなるほどゴシゴシと目をこすって無理矢理その水滴が出てくるのを止めた。それから顔を上げて、ポツリと呟いた。

「杯座、圭熊、それから白虎……ありがとう……」

——それから、翔馬は完全に光に包まれ、そこから消え去った。

しかし、これからの翔馬には、少しずつ、辛い運命が迫りつつあった。それは必然か偶然によるものか、分からない。ただ、神は翔馬の味方をしてくれない。それだけだ。

「絶対に……絶対に、アトロポスを倒して、世界の平和を守りましょう！」

白虎はニコツツと笑みを浮かべて、声高らかに誓うように、アオイデーとエールの方へ

と宣言した。

「アトロポス……どれだけ強いのか分かりません。でも、アテナに協力してもらえば、きっと私たちが勝つはずですよ！」

「白虎……」

アオイデーはホツしたような笑みを浮かべて、しかし、どこか妙に切なげな視線を白虎に向けていた。エールはそんなアオイデーを心配そうに見つめ、アオイデーもまた、エールの方を不安げに見つめていた。アオイデーのその口は、何か白虎に言いたげなもので、しかし、なかなかそれを発することはなかった。

白虎はそんな二人の様子を見て、「？」と頭にクエスチョンマークを浮かべながら、疑問そうに首を傾げた。

「アオイデーさん、エールさん。二人とも、一体どうしたのですか？」

「えっ、あつ……な、何のことでしょうか？」

二人は白虎に質問されて、あわあわとその場で笑顔を取り繕った。白虎は二人の様子をジトーツとジトリとした目で見つめていた。それから、ハアと呆れたように息をつき、二人に言い放った、

『何のことでしょうか？』じゃないですよ。急に二人で目を合わせて、何かあるような顔して……一体全体、本当どうしたんですか？」

「エール……」

「アオイデー様……」

二人は白虎にそう言われて、言うか言わまいか迷っているようだった。やはり、他人には言いづらいことなのだろう。しかし、アオイデーは覚悟を決めたように、瞳をキラッと輝かせて、エールの方を見つめて、コクンと首を縦に振った。エールもそれを見送るかのように、ペコツと会釈した。

アオイデーは白虎の方へと真つ直ぐ視線を向け、白虎もまた、アオイデーの方へと真つ直ぐ視線を向けて、見つめた。アオイデーは一旦深く深呼吸をしてから、白虎の方へとその心内を打ち明けた。

「本当は、貴方を巻き込みたくはなかったの。アトロポスのことだけならば、こんな気持ちにならず、白虎の戦いに真つ直ぐな心に答えられるのかもしれないけれど……」

「まだ……何か問題がある？」

「ええ、そうなるでしょう」

アオイデーは白虎の神妙な問いに、神妙な返し方をした。

「実は、上の神の方は、私たち三柱の存在を快く思っていないのです。そろそろ、ヘシオドスが新たに定めた九柱にムーサの全てを任せるべきではないか、と……」

「そんな……」

「過去の私たちの媒介は、そうして天界からやってきた使いによって、その力を発揮する前に命を落としています。多分、白虎もきつとその命を落とすことになる……」

「……っ！」

白虎の心臓がドクン、と強く鳴り響いた。聖闘士は死は元より覚悟の上なのが常識ではあるが、こうして、直々に「死ぬ」と言われてしまうと、いくら打たれ強い白虎でも固まってしまうというものだ。

アオイデーの方もテーブルの上でギュツと拳を握り締めた。白虎の迫り来る、避けられない運命は、自分の力を持ってしてもどうにもならない。守ることも、今までの自分の媒介たちを守ることができなかったのだから、今回もきつとほとんど不可能に近いだろう。

アオイデーは白虎の方へと顔を上げて、白虎の方を見つめ、言う。

「それでも……貴方はアトロポスに立ち向かいますか？」

「……」

白虎は思案するかののように顔を俯かせ、アオイデーのその問いに答えようとはしなかった。やはり、自分に「死」が迫っているとと言われると、その決意も揺らぐというものだ。それに、白虎は聖闘士である以上、ムーサの媒介でなくともアトロポスとの戦いは避けられぬもののはずだ。ムーサの力を借りなくとも、聖闘士である白虎なら立ち向

かえる。

アオイデーはフツと優しく微笑み、その場から立ち上がろうとした。

「そうよね……やっぱり、貴方には私の媒介という役割は重過ぎる——……」

「……アオイデーさん、確かに私たちのしていることは間違ってるかもしれない」

「—」

アオイデーは自分が言い切る前にそんなことを言った白虎の方を見つめた。白虎は顔を上げて、その場に立ち上がっているアオイデーの顔をしっかりと、芯の通った瞳で見据えた。

「でも……それが、それが正しいと思うなら、ひたすら真っ直ぐに……貫き通すしかない。私は、今までそうして戦ってきた」

「白虎……」

アオイデーが若干悲しそうな表情をしている前で、白虎はニコツと優しく微笑みを浮かべた。

「どんな結果になろうが、どんな運命が待ち構えているようが、私は私自身の正義を剣にして、一直線に貫くだけです。死ぬことを恐れて、それを曲げたら——男が廃ります」

その場が、しん、と静まった。白虎の決意が本物の証ということなのだろう。アオイデーは驚いたように白虎の方を見据えていれば、ハツとなって我に返った。そして、白

虎の方をしつかり見つめた。

「……。そう、それが貴方の答えなのね？ 白虎」

「はい。この決意に……答えに、揺るぎはありません」

「そう……分かったわ」

アオイデーは椅子をテーブルの中に仕舞うと、白虎をこちらへと誘導した。

「じゃあ、こつちに来て。貴方に……貴方に相応しい武器を授けようと思うの」

「武器……？ 武器って……わ、私は聖闘士ですよ？ 武器なんて持ってたら、アテナに

何を言われてしまうか……」

そう、聖闘士はアテナによつて、武器の使用禁止を定められている。唯一武器の使用が許されている天秤座の聖闘士でさえ、緊急時以外はアテナの許可がなければ使えないというのに。白虎が頭を抱えている前で、アオイデーはニコリと笑みを浮かべた。

「大丈夫。アテナには私の武器であることを話して、普段は持ち歩かないようにすればいいだけ。話してくれば分かってくれる人なのだから、きつと、許してくれるはずよ」
「う、うーん……は、はい……」

白虎は渋々ながらも、アオイデーの言うことに了承を重ねた。しかし、武器を与えられるという事は、自分にそれを使うということなのだから、やはり、聖闘士として複雑ではある。遅かれ早かれ、そのムーサの武器を使う日はきつと来るのだろう。

アオイデーはニコツと微笑みを浮かべながら、白虎の横に立ち、その手を白虎の方へと差し出した。白虎はその上にソツと自分の手を重ねて、そのままアオイデーに引つ張られるように、立ち上がり、歩き始めた。

圭熊は寮の自室で、本人が驚くぐらい考えに更けていた。それほどまでに、翔馬のことが相当心に引つかかっていたのだ。翔馬に絶対にその心内を聞き出してやる、とは決意したものの、どうやってその決意を聞き出せばいいのか全く分からないのだ。だが、どちらにせよ、翔馬が聖闘士を辞めることを本心ではないのは、どこか察することはできた。もし、本当に聖闘士を辞めたいと決意しているのならば、自分たちに予め言ってくるか、辞める際にあんなことにはならないはずだ。

それと、アンバーの言っていたことも妙に心に引つかかって、仕方がないのである。

（『俺には天から授けられた使命がある！』、ねえ……）

アンバー曰く、翔馬が弟子入りを志願した時に言っていたとのことだが、この一文から、翔馬が何か、抱えていることも否定はできなくもないのだ。もし、その「天から授けられた使命」を果たすために、今回のようなことになっている、となれば――。

「……ああっ！」

圭熊は思わずその場から勢い良く立ち上がった。

(何か……何か、分かりそうなんだよ！　こんなバカな俺にもさ……！　今のアイツのこと……！)

だが、どうしても分かりそうな心の一步手前で止まってしまい、結局分からないのだ。圭熊は頭を抱えて、その場にうずくまった——とここで。

「圭熊……お前、何してんだ？」

「え、何って……翔馬のことで悩んで……って、えつ、あつ……ああつ！　兄ちゃんつ！」
見覚えのある声に、顔を上げてみると、気が付けば、水鹿が自分の横に立っていた。水鹿は圭熊のその姿を見るなり、呆れたように溜息をつき、言った。

「声が聞こえてきたから、何があつたのかと部屋のドアを開いてみれば……これだぞ。お前、悩むにしても、もう少し静かな態勢で悩めないのか……」

「うっ……い、いやあ！　ほら！　こういうのは、形からって言うじゃん！」

「その形からすらなつてないよ、お前は。そもそも、悩むのに形からも何もないだろ」「う……うっす……」

圭熊は水鹿に指摘されて、ビシツとその場に正座した。水鹿はフツと呆れながらも優しく笑みを浮かべて、手に持っていたビニール袋を、部屋の机の上に置いた。圭熊はその置かれたビニール袋をキョトン、とした目で見つめながら、水鹿の方もチラリと見つめた。

そして、袋を指差し、水鹿に質問するかのように声を上げた。

「兄ちゃん、その袋……」

「ああ、ジュースでも飲んで、翔馬のこととかじっくり話そうと思つてな。戸惑いが隠せないだろうが、早めに整理しておかないと、今後の任務にも支障が出るかもしれないし。それに、夕飯の時はまだ直後で色々落ち着いてなかったゆえに、圭熊の独り言大会になって、話し合いもクソもなかった。でも、時間が少し経った今ならすっかり話せるんじゃないかと思つたんだ」

「そ、そつか……ごめん……」

「いや、いいよ。見たところ、それなりに落ち着いて、しっかり悩んでいるようだしな。悩める余裕があるなら、話し合いも十分にできる」

そう言うのと、水鹿は部屋の机の前に座り、ビニール袋の中からジュースのボトルを取り出した。

「圭熊、コップは？」

「ああ、はいはい。ちよいとお待ちを」

圭熊はコップが置いてあるだろう棚のところまで行くために、立ち上がって歩き始めた。その間にも水鹿は、ふう、と息をつき、窓の方を見上げてゆっくり空を眺めていた。

(そうか……白虎が……あいつが聖闘士になって既に半年か……)

時の流れは速いものだな、と水鹿は今更ながら思う。白虎が聖闘士になったのは、白虎の誕生日の一週間後ぐらいだったと記憶している。それから色々あって、今現在に至るわけだが、お互い、それぞれに成長した部分はあるのだろうか。

水鹿はフウと息をついて、圭熊がこちらにコップを持ってくるのを待った。

白虎とアオイデーは神殿の庭園であろう所の扉から、神殿外へと出た。辺りはすでに真つ暗で、とてもじゃないが、目が慣れるのに時間がかかった。アオイデーは白虎の手を優しく握りながら、こちらだこっちだなどと、白虎を誘導していた。

「よつと……つと……」

白虎は足場が安定しない場所で、ひよいひよいと軽々しく歩いていった。アオイデーの方もこちら辺は慣れているのか、スタスタと軽く歩いていった。コウモリや鳥の翼が鳴り渡り、木の葉たちが風に揺れる。その風は、春らしく、生暖かいもので、白虎たちの横を通り過ぎるたび、その風で白虎たちを包んでくれていた。

白虎は歩きながら、辺りをキョロキョロと見渡していた。

（山って、こうして明かり一つも差し込まないから、こんなに怖くなるんだなあ……）

今はアオイデーという存在が近くにあるため、そこまで恐怖感を感じないのだが、もし、自分一人がここにいるとなれば、右往左往しながら、どうしたらいいのか分からな

くなるかもしれない。

そのまましばらく歩き続けていると、一つの洞窟の方へと辿り着いた。その洞窟は、本格的に明かりが無ければならないぐらいに真つ暗闇なことが、この暗い山の中でも分かるほどだった。白虎がボケーッとその洞窟を見ていると、アオイデーはさっさとその中へと入って行つた。白虎はそちらの方へと手を伸ばして、思わず引き止めるかのように声を放つた。

「あつ、あの……アオイデーさん……」

「あら……私としたことが、自分の媒介を置いて勝手に進むなんて。ごめんなさい。これなら、大丈夫でしょう?」

アオイデーは白虎に話しかけられれば、申し訳なさそうにクスクスと笑みを浮かべながら、そちらの方へと顔を向けて、白虎の方へと歩み寄り、その手をぎゅつと握つてやつた。白虎は「たはは」と苦笑しながらその手をぎゅつと握り返した。

二人は手を繋ぎながら、洞窟の中へと入って行つた。アオイデーは白虎の手の体温を実感しながら、白虎に向かって言い放つた。

「白虎……私、こうして自分の媒介としつかり話すの、初めてだと思うの」

「……!」

「今までではしつかり話す前に殺されてしまつたりしているから……武器をこうして媒介

に授けることができるのも、初めてなの」

「そう、ですか……」

「きつとね、貴方がここまで生きてこれたのはね、貴方が聖闘士であることが理由なんじゃないかと思っているわ。でも、その前に……私が血を与えていなければ、貴方は死んでいた可能性もあつた」

「！ や、やつぱり、あの時の女の人は……！」

白虎がそう声を上げた瞬間、洞窟内の灯り、言わば火が燃え上がった。数々の炎に照らし出され、アオイデーの表情が見えるようになった。アオイデーはその炎たちにその顔を照らし出されながら、ニコリと白虎にその笑みを浮かべていた。

「白虎、貴方の中には私の血が、神の血が巡っているわ。そのことは、忘れないで」

白虎は心ここに在らず、といった状態でアオイデーのことを、ただ、見つめていた。ふ、と我に返れば、己の手のひらをジツと見つめた。

（わいの中に……神の血が流れている……）

白虎は見つめていた手を、ギュツと丸く握り締めた。白虎は何故か驚きはしなかった。きつと、予め自分がアオイデーの媒介であるということを知っていたからだろう。

白虎はそのままアオイデーに釣られるように、前へと進んだ。ここから先は灯りがついているため、アオイデーの手に引かれなくとも、その後ろからついていくことはでき

た。因みに、洞窟の中は、大理石創りの神殿とは一転して、さすがに岩だらけであり、ところどころ足場の踏み場が危ないところがあった。だが、白虎とアオイデーはひたすら前へと歩き続けた。

そのまま歩き続けければ、洞窟の中に唯一あるであろう一本道から、一気に広い空間へと出ることができた。白虎はキョロキョロとその辺りを見渡して、その様子を確認していた。その空間は、キラキラとどこか光を帯びており、壁に何か金属でも埋め込んでいるのではないかというほどだ。そんな中、アオイデーは、ある一点に集中して、その歩を進めていた。白虎はきよとん、とそんなアオイデーを見つめていた。一体何があるのだろうか、と。

アオイデーはその一点の目の前——縦に伸びている岩の目の前に立った。そして、その岩に自分の手を翳して、小宇宙を放って、壊した。

「！」

そうして岩の中から出てきたのは——地面に突き刺さっている剣だった。アオイデーはその剣を見るなり、ニコリと微笑みを浮かべて、白虎の方へと目線で合図を示した。白虎はそのアオイデーの合図を察して、剣の方へと歩み寄った。

「アオイデーさん……」

白虎はアオイデーの方へと目線を向けて、確認した。アオイデーはその確認に対し

て、コクツと軽く首を縦に振って、肯定した。白虎はその肯定を受け取れば、ニコツと笑みを浮かべて、剣の目の前に立ち、柄の部分でギョツと両手で握り締めた。

(真っ直ぐに……天へと……一直線に……！)

「はああああああ—— ツツ!!!!」

白虎は勢い良く、天へと投げけるように、目の前の剣を地面から引き抜いた。その剣を引き抜いた瞬間、剣は輝きを放って、その周りに暴風を放った。白虎とアオイデーは目を瞑ってその暴風に耐えた。その暴風は何れ、剣の刃を包むケースと化し、その姿を徐々に現していった。

「！ 剣がっ……わあっ！」

暴風が止むなり、剣は一瞬だけとてつもなく眩しい光を放って、それで辺り一面を覆った。白虎は片目を半開きにしながら、剣の様子を見届けた。剣は光を放った瞬間、下の方からその光がメッキとなって剥がれていった。

——そして、その下から現れていたものは、純白に包まれた、白いケースだった。

「これは……」

白虎はそのケースかスツ、と剣を抜いてみた。剣は銀に輝きを放ち、非常に鋭い刃であった。

「REID—DAMOCLES……貴方の武器となる剣です」

気が付けば、アオイデーが白虎の横に立ち、ニコツと優しく柔らかく笑みを浮かべていた。白虎はアオイデーの方へ顔を向けてから、剣の方へと視線を向けた。

「リート……ダモ……クレス……」

白虎は目の前にある剣の名前を呟き、その柄を一層強く握り締めた。これが、自分とこれから付き合うことになるであろう武器、剣。白虎はアオイデーの方に顔を見上げて、体も振り返った。

「これで、アトロポスに本格的に対抗できる準備は整った、ということにはなるんですか？」

「ええ。でも、その前に貴方のボロボロである聖衣もどうにかしなければならぬのだから……」

「あつ……」

白虎はハツと気が付いて、どこからか出てくる恥ずかしさから、頬を若干ながら朱に染めた。

そう、白虎は龍星座の聖衣をろくに修復もせず、ここにやってきていた。無論、そんな聖衣を着ることはしなかったものの、やはり修復しておけば良かったという後悔は湧き上がってきていた。聖闘士にとって、聖衣というのは己の命同然のものだ。その証拠に、聖衣の破損が酷い時には、人の致死量である沢山の血を聖衣に使う。だから、修

復を頼める環境下の中で、ボロボロのまま放置というのは、周りの、他の聖闘士からすれば頂けないものだ。

アオイデーは照れている白虎に対して、クスクスと口に手をあてて、笑みを浮かべれば、「大丈夫よ」と言った。

「聖衣の修復はムーサの戦士たちである羽闘士の一部の得意分野だから。そして、エルがその者たちに頼みに行っているはずよ」

「せ、聖衣の修復がこちらでも……？」

「ええ。ムーサの戦士である以上、文芸の分野が突飛して優れているもの。聖衣の修復ぐらい、お茶の子さいさいよ」

「へえ……」

まあ、それもそうかな、と白虎は思う。聖闘士には必ず誰か修復士がいるように、アオイデーの今言った羽闘士にも、そういう修復に優れた者がいても特におかしくはないはずだ。白虎はニコツと笑みを浮かべて、「そうですね」と、アオイデーに向かって呟いた。アオイデーはそれに応えるように、微笑んだ。

「では、もう夜も遅いし、ムーサの神殿で一夜を明かしてちょうだい。寝床は先程案内した部屋でもいいかしら？」

「はい、お願い致します」

——そして、一夜が明けた。

白虎は起きるなり、綺麗になった自分の服に着替えて、神殿の外でアオイデーと共に自分の聖衣がやってくるのを待っていた。アオイデーは残念そうに笑みを浮かべながら、白虎に向かって言い放った。

「せめて朝ご飯だけでも食べて行ってもいいのに……」

「そうしたいのは山々ですが……私のもので、貴女たちに手間をかけさせるわけにはいきませんから。それに、アテナや他の皆も心配しているだろうし」

「そう……貴方の判断なら仕方ないわね。気を付けてね」

「はいっ」

白虎はニコツとその顔に笑みを浮かべながら、コクツと小さく首を縦に振った。しばらくはここもお別れだが、また、近いうちにここに来るであろう。今度は圭熊や水鹿、そして翔馬と共に泊まってみよう。白虎がそうして、未来のことを想像していると、騒がしい足音が耳に届いた。白虎はその足音のする方向を振り返って、それを見れば、パツと笑みを浮かべた。足音の正体は、龍星座の聖衣箱を背負ってきたエールだった。

エールは白虎の元まで走れば、ハアハアと息を荒げ、肩で息をしているかのように、そ

の肩を上下に激しく動かしていた。そんな苦しい中で、エールは背負っていた聖衣箱を白虎へと差し出した。

「白虎さん、しつかり、綺麗に、なってます。確認等、お願いします」

「……はい、分かりました」

白虎はコクン、と首を縦に振って、エールから龍星座の聖衣箱を受け取った。それから、聖衣箱を地面に置き、そのまま蓋を開いた——瞬間だった。

「わあっ!」

箱の中から、天に向かって一直線に、一つの閃光が放たれたのである。白虎は目を手で覆って、その眩しさから逃れようとしたが、その手の隙間から、その閃光の様子を見つめた。その閃光の中にあつたものは、修復が完了した、龍星座の聖衣だった。

「……!」

白虎は手で目を覆うのやめて、聖衣の方へと視線を向けた。

「……よし、いこうか」

そして、聖衣の方へと腕を伸ばして、小宇宙を燃やした。その刹那の一瞬、風が巻き上がり、白虎の前髪を逆立てさせ、同時に龍星座の聖衣が分解した。聖衣は分解すれば、白虎の腕、足、胸、肩を包み込み、最後には耳を覆うようにヘッドパーツであるカチューシャを白虎の頭に置いた。

白虎は「フウ」と息をついて、聖衣の着心地を確認した。手や腕共々問題は無いのだが——その違和感は足にあった。

「ヒールが、高い……」

そう、いつもよりもヒールが高かったのだ。それこそ、女性が履いているハイヒールのようだ。白虎がむー、と違和感を感じていると、アオイデーはニコツと笑みを浮かべながら、申し訳なさそうに言った。

「ごめんなさい。やっぱり、ムーサが修復してしまうと、どこかしら女性的なパーツが出てきてしまうわね。慣れるまで頑張って頂戴」

「えーっ、絶対友達にからかわれるじゃないですかー」

白虎はブーブー文句を言いながら、頬を膨らませた。アオイデーはそんな白虎をクスと笑みを浮かべながら、その背中をトンと押してやった。

「ほら、早く行かないと、ね」

「はーい……」

白虎は小学生のように間延びした返事をすれば、アオイデーの一步前に出て、そちらに向かって手を振った。

「じゃあ、行ってきまーす！」

50 : 「覚悟は己の誇りを描く」

白虎が聖域に完全に帰還したのは、その日の夕方だった。色々寄り道をしたりなどして、少しばかり遅くなってしまった感じが、何とも言えなかった。多分、アテナやその他の聖闘士たちも自分のことを心配しているだろうし、教皇こそ、白虎の師匠だ。きつと、教皇に関しては周りが想像もつかないほど心配してくれているに違いはない。

白虎は「はふう」と、息をついて、聖域内へと足を踏み入れた。いつもと変わらぬ聖域の光景が、白虎を出迎えてくれた。

「圭熊ー、水鹿ー、翔馬ー？ どこにおるんよーっ！」

白虎は声を大きく上げながら、自分の友人の姿を探し求めた。だが、いくら声をあげたところですぐにその三人が出てくるわけではない。白虎はフウ、と息を吐き、とりあえず先に教皇の間へ顔を出すことが優先だと、十二宮の方へ歩みを進めた。

「白虎、よく戻ってきてくれた。一夜をあちらで過ぐすと聞いて、少し不安になっていたのだが、余計な心配だったようだな」

「いやあ……はは……」

白虎は苦笑しながら教皇の言ったことを受け止めた。確かに自分もあのまま生きて帰れるかどうかすら不安だったが、とりあえず戻って来れてよかったとは思っている。それにしても、パルナツソス山がほぼ男子禁制の区域であることを言ってくれなかったラテイエルに対して、少し複雑な心境な面持ちになってしまおうが。

教皇は、本当に白虎が帰ってきてくれたことが嬉しいのか、ニコニコと笑みを浮かべながら、白虎に言い放ち、質問した。

「白虎よ、パルナツソス山では一体何があつたんだ？ 髪の毛が伸びた理由以上に、大切なことを言われてきたのではないか？」

「……やっぱり、分かります？」

「勿論。私は白虎の師匠にして、親代わりなのだからね。大体のことは言わなくとも分かる。何より、白虎の持ってきた剣が、その証拠ではないのか？」

「あつ……」

白虎は教皇に指摘されて、自分の手に持っていた剣を持ち上げて、見つめた。確かにこの剣がここにあるのは不自然だろう。白虎は思わずオドオドとした瞳で教皇を見つめたものの、教皇は優しく笑みを浮かべたまま、そのまま白虎を問い詰めようとはしなかった。

「武器の使用禁止というところから、少々風当たりが強いかもしれないが……見る限り、

それなりの強力な武器と見える。是非とも大切にしなさい」

「はい……元よりそのつもりです」

白虎は跪き、教皇に肯定以上の意を示した。教皇は「うむ」と頷き、ニコツと笑みを浮かべた。

「では、アテナには私から事情を話しておくから、詳しいことは明日にでも話しなさい。今日は疲れているだろうし、ゆっくり休んで明日に備えるように」

「はい、了解いたしました」

白虎はそう言うのと立ち上がって、教皇に向かって軽く会釈をした。教皇もそれに対して、軽く会釈を返して、白虎は教皇の間を後にした。

白虎は手にしている剣——REID—DAMOCLESを見ながら、教皇の間から天秤宮の方へと足を向けていた。白く純白に輝くケースは、アオイデーの穏やかな人格と白い衣装を象徴しているようで、剣の鋭さは、白虎自身の揺るぎない心を指し示しているようにも伺えた。

(本来ならば、女神が扱う武器……任せられたんだ、大切にしないと……)

白虎がそうして、一つ、階段を降り立った時だった。見覚えのある、色素の薄いポニテールの男性が、白虎の目の中に映し出されたのである。その男性は薔薇を片手に、白虎の方を見つめていた。その姿は魚座のジェイド、その人だ。

どうやら、いろいろ考えているうちに、双魚宮に辿り着いたらしかったのだ。白虎はジエイドを見るなり、明るいトーンの声で、しかし若干小さめな声で、その名を口にした。

「ジエイドさん……」

ジエイドは白虎に小さいながらも名前を呼ばれると、ニコツと微笑み、白虎の方へと歩み寄った。

「ちよつと出会わないうちに、随分綺麗な女の子になったね、白虎」

「……ええ、まあ」

素なのかからかいなのか、白虎からすればどちらに値するのか分からないのだが、ジエイドのことだろうから、きつと後者の方が強いだろう。無駄にキラキラとした微笑みが、さらにそれを増幅させているようにも伺える。

ジエイドはくすくすと笑みを浮かべながら、白虎に向かって言い放った。

「白虎。少し、双魚宮で休んでいく？ 山から帰ってきたと聞いたけど、結構お疲れのようだし」

「えっ、でも……」

それはさすがに申し訳ないし、どこか後ろめたい。だが、ジエイドはニコツと微笑んで、白虎に言い放った。

「確かに天秤宮となればそれなりに距離は短いけど、それでも十二宮の階段を降りるのは疲れるもんだからね。だから、少しだけ休んで行きなよ」

「……そ、それじゃあ、遠慮なく」

白虎はジェイドの言葉に甘えさせてもらうことにした。ジェイドは白虎を双魚宮内まで案内すると、適当に座れる椅子を持ってきて、そこに白虎を座らせた。

「じゃあ、お茶淹れてくるね。ジャスミン茶でいい？」

「はい、お願いします」

ジェイドの質問に、白虎はペコツと軽く頭を下げてそう答える。ジェイドはその白虎の答えを聞くなり、お茶を淹れるために、パタパタと厨房の方へ入った。白虎はその背中姿を見送りながら、椅子の背もたれに体重を乗せて、双魚宮の高い天井を見つめた。そういえば、こうして天秤宮以外の宮に長居するのは初めてかもしれない。そもそも黄金聖闘士は任務が多く、なかなか十二宮にいないことがあり、こうして招待されてお茶を飲むのも初めてだ。

ちよつとだけ時間が経つと、ジェイドが両手に一つのお盆を持って現れた。そのお盆の上には、ポットやカップ、そして急須などといったお茶の道具一式が乗っていた。

「お待たせ。紅茶は自分ではあまり淹れないから、ちよつと緊張しちゃうな」

「えっ？ 淹れないんですか？ ちよつと意外かも。ジェイドさんって、紅茶淹れるの

手慣れてそうなイメージがあったから……」

「ううん、全くそんなことないよ。私は紅茶より普通の水の方が好きだからね。必然的に紅茶や他のジュースは飲まなくなるんだよ」

「へー……なるほど……水かあ……」

そんな世間話を駄弁りながら、ジェイドはジャスマン茶を淡々と用意し、カップの中に淹れていった。ジャスマン茶の甘い香りが、双魚宮内を包んでいく。カップの中の10分の8を淹れ終えたところで、ジェイドはそのカップを白虎に差し出した。

「ほら、入ったよ。少し冷ましてから飲まないよ、舌火傷するから気を付けてね」

「はい……」

白虎はジェイドにジャスマン茶が入ったカップを差し出されると、そのカップの周りを、自分の両手で包んだ。ジャスマン茶を淹れたばかりで、カップの周りはホカホカと温かかった。白虎はそんなカップの中の水面に映る自分の顔を見つめていた。

髪の毛が伸びたのは、新たな戦いの合図である、ということを知り、どことなく心が落ち着いていないのかもしれない。自分の体に唐突に現れた変化が、まさかそんな意味を持っているだなんて知ったら、色々恐ろしくなってしまう。どこからか湧き上がる不安と焦燥感と、そして、恐ろしさ。パルナツソス山へ行つてから、白虎の心の中はそれらに支配されていた。

白虎の雰囲気と様子がいつもと違うことに気が付いたらしいジェイドは、白虎の顔を覗き込みながら、声を掛けた。

「白虎、大丈夫？ 予想以上に疲れ溜まってるんじゃない？」

「あ…………いや…………」

白虎はジェイドに話しかけられて、思わず笑みを取り繕った。それから、ジャスマミン茶の方をチラッと見つめて、目を伏せ、ジェイドへ質問を投げ掛けた。

「やっぱり…………わい、おかしいですか？」

「…………うん、そうだね」

ジェイドはコクリと頷いて、用意していた自分のカップの中に、急須に残ったジャスマミン茶を入れた。

「ちよつと大人っぽくなったのかな、とは思ったけど、それ以上に何か白虎らしくないっていうか…………。それに、いつもなら、もっとワイワイ騒ぎ立ててくれるからね」

「そうですか…………」

やはり、抑え目な声に答え。ジェイドはジャスマミン茶を口にしながら、白虎の方に聞いた。聞いた。

「ねえ、白虎？ パルナツソス山で何かあったの？ 疲れているにしては元気なさすぎじゃないかな」

「いや……ちよつと……」

白虎は思わずジエイドから視線を逸らした。ジエイドはやはり心配そうだ。白虎がこんなに元気がないとすると、こちらも調子が狂ってしまふ。

「……まあ、必要以上に追及するのは、私の役目じゃないから、これ以上何があつたかは聞かないよ。そういうのは、水鹿や圭熊、翔馬の役目だしね」

「はい……ごめんなさい……」

「謝らなくていいよ。さつさとセンチメンタルから抜け出して、いつものバカで元気な白虎を見せてね。それが白虎なんだからさ」

「バ……バカって……」

白虎は思わずジエイドの言つたことに顔を上げて反応した。自分がバカであること否定はしないが、わざわざこんな場面で言う必要があるのか。何というか、いちいちジエイドの確信的なもの透着て見える。ジエイドはニヤニヤと笑みを浮かべながら、白虎を見ていた。

（わざとだ……絶対にわざとだあーッ！）

なんというか、何故、自分の周りはどういう人が多いのだろうか。白虎はもはやヤケになって、ジャスミン茶の入ったカップを手にして、それを口付けた。瞬間、白虎の舌が火がついたように、燃え上がった感覚がした。

「ふにやつ、はつ、ああつ、がう、ぐおおあああ——ツツツ!!!」

その感覚に、白虎は思わず絶叫して、口を手で覆い、その場にうずくまった。ジェイドは突然絶叫を上げた白虎を、目を丸くしながら見つめていた。

「ど、どうしたの、白虎……大丈夫?」

「ぐ、うう……おみず……くらひやい……」

白虎は舌を口の外へ放り出し、顔を真っ赤にして、プルプルと体を震わせながら、ジェイドの方を振り向いた。どうやら、ジャスミン茶で舌を火傷して、涙目になってしまったらしいのだ。ジェイドはその白虎の様子に、ビクツと肩を跳ね上がらせつつも、急いで水を用意した。

すっかり己が猫舌だったことを忘れていた白虎は、ヒーヒーと舌を冷やすように息をした。ジェイドは呆れたようにその笑みを浮かべながら、氷水が入ったコップをその手の中にし、白虎の方へと差し出した。

「だから少し冷やせて言ったのに」

「ううー……ごめんなひやい……」

白虎はシュン、としながら、ジェイドからコップを受け取り、それに口をつけ、口の中に水を流し込んだ。氷もあることよって、なお、冷えた冷水が、白虎の火傷した舌をだんだんと癒していった。ある程度話せる状態まで舌を冷やしたと思った時に、コッ

プから口を離して、「ふはー」と息を吐いた。

ジェイドはクスクスと口に手を当てて小さく笑みを漏らしながら、白虎の方を見た。「今度から気を付けるんだぞ?」

「き、肝に銘じておきます……」

白虎は水を飲み、何かから開放されたような表情をしつつも、しつかり背筋を通して座りながら、ジャスミン茶が冷めるのを待った。

そんな中、ジェイドは何か思い出したように「あ」と声を上げて、白虎を見た。視線を向けられた白虎はきよんとしながら、ジェイドへとその視線を返した。ジェイドはゴホンとわざとらしく咳をしてから、白虎に言い放った。

「そういえばさ、白虎はパルナツソス山に行つてて知らなかったと思うんだぞさ……言つてもいいかな?」

「うん、はい? どうぞ?」

そのあまりにも真剣なジェイドの様子に、白虎は首を傾げてジェイドを見つめた。そこまで言うことを躊躇うような内容なのだろうか。ジェイドは、「ふー……」と、深く息を吐いてから、白虎の方へ言い放った。

「実はさ……翔馬、天馬星座の聖闘士、辞めちやつたみたいなんだよね。皆にロクも挨拶もしないでさ」

「えっ……」

白虎の中に、衝撃という名の電撃が走った。翔馬が聖闘士を辞めるなど、今の状況からして考えられないのだ。このあいだまで、一緒に戦いを切り抜けてきた仲だというのに。

ジェイドは申し訳なさそうな表情をしながらも、更に続けた。

「私も正直驚いているんだよね。直接話したことはないんだけどさ……でも、アンバーとの鍛錬とかで見ると、アテナのために聖闘士になるんだってのがすごく伝わってきたから。だから、そんな翔馬が聖闘士を辞めるなんて、すごい意外だと思って……」

「そんな……」

（翔くん……嘘、でしょ？）

白虎は顔をジャスミン茶の水面に向けて、目を見開き、ただ、目の前にあるそれを見つめていた。

翔馬は、最初、白虎と出会った時、本当に孤独な少年で、一人狼ならぬ一人馬だった。誰にも相談できず、頼れず。その上、自分も何もかも信じられない、絶望的な立ち位置にあった。だが、白虎はそれでも翔馬に手を差し伸べた。最終的には水鹿も白虎と一緒に手を差し伸べ、翔馬をその絶望の海からすくい上げた。それから、翔馬は白虎と水鹿についていくように、行動を共にするようになった。それこそ、最初、翔馬はここに

てもどうか悩んでいたこともあったが、結果的に馴染むことができ、徐々に笑みというものを見せていった。きつと、今後もこうして戦いを共にし、一緒に切り抜けることができる——と思つた矢先がこれだ。

白虎は、翔馬が決めたことならば、その理由を言おうが言わまいが、特に引き止めることはせず、そのまま見送ることもできた。しかし、白虎は、そうであつてもどうしても引つかかつてしまうのだ。仲良しだったからこそ、翔馬の今の心情を読み取ることができない。翔馬は、白虎たちと行動を共にしている間は、本当に楽しそうで、ちよつと変わったところは師匠に影響されてしまったものの、やはり優しい少年であつた。そして、ジエイドが言つたとおり、アテナに対する忠誠心も強く、かつ、聖闘士としての強さも十分に備わつていた。だから、翔馬がそう安々と聖闘士をやめることなど考えられなかつた。白虎がその場に居合わせていれば、そんなに引つかかることもないのかもしれないが——白虎はギユツと太腿の上で拳を作つた。

ジエイドは顔を俯けて、何か考え込んでいる白虎に向かつて、言おうか言わまいか視線をチラチラと逸らしたものの、やはり言わなければならぬ、と思ひ、頭をポリポリと掻いて、白虎の方へと、その顔と声を向けた。

「それでさ、ここからは圭熊自身が話してくれたんだけど……圭熊が翔馬のその場面に居合わせていたんだって。翔馬が、アテナ神殿へ天馬星座の聖衣を返還する場面をね」

「……」

白虎は思わず、勢いよくバツと顔をジェイドに向かって上げて。ジェイドは白虎がこちらに顔を向けるなり、ジャスミン茶をもう一度口にして、白虎に言い放った。

「やつぱり、その時の翔馬の様子、いまいち読み切れないんだつてよ？ 何か後ろめたいことでもあるのかなつて、ぐらいにはね。それに、圭熊が問い質したところで、翔馬は翔馬で勝手にさせるの一点張りでき。白虎がいたら、意地でも止めてくれるだろうなつて、寂しそうに話してたよ」

「圭くんが……そう、ですか……」

白虎は目の奥から何か出てきそうなのを堪えるように、必死になって目を手で抑えた。その頃には既にジャスミン茶は冷えており、舌は火傷しないぐらいにはなつていた。

白虎はジェイドの淹れたジャスミン茶を堪能したのち、天秤宮へとその足で戻り、用意されていたベッドの上に、その体を寝転がせた。自分でも疲れているのがわかるぐらいに、その体は若干ながら重くなつていた。普段はあまりこんなことがないので、白虎は少々驚いていた。いや、ポセイドンとの戦いや、ハーデス城への潜入後などは、大体こんな感じに何もかも無気力になつてベッドに向かつていたか。白虎は、どこから笑い

が込み上げてきたのか、「フツ」と軽く笑みを浮かべた。

（何度も戦いの窮地を乗り越えてきたけど……次の戦いに対するプレッシャーが重いのは、きっとアオイデーさんの媒介というのが大きいな……）

白虎はベッドのすぐ近くに置いてある、龍星座の聖衣箱と、そこに寄せてかけてある REID-DAMOCLES を見つめながら、パルナツス山でアオイデーに言われたことを、少しばかり思い出していた。

基本、ムーサの神々は、自分の媒介へと合図をする際、媒介の髪の毛を通じて、それを伝えることが多い。同時に、それは白虎がムーサの媒介であるという証拠にもなり、白虎は嫌でもその戦いに巻き込まれていく。もちろん、幾多なる戦いを重ねてきた白虎にとつて、また戦いが来るのは全然構わないのだが、問題はそこにはなく、むしろ別のところにあつた。上の神、下手したらアテナより権力があるであろう神々が、天界から刺客を送つて、白虎を殺しに来るのではないか、といった問題だ。今回は媒介が聖闘士であるゆえ、そう簡単にはやられはしないだろうが、その刺客がどれだけの実力が分からない以上、白虎もどう動いていいのか分からなかつた。しかし、黄金聖闘士並みの実力はあるであろうと言われている海闘士を倒した身で、そういうことは言っていられないだろう。

そして、自分の背中には、天秤座の正統後継者である証として、虎の刺青が刻み込ま

れている。もちろん、本当に天秤座の聖闘士になれるかどうかは分からない。しかし、黄金聖闘士になる者が、この程度でセンチメンタルな気分になつてはならないのは、確かなことでもあつたのだ。アオイデーの媒介として、そして、次代の天秤座の聖闘士になる者として、もつと、もつと、決意を固めて、これからの戦いに備えなければ。

（――よし）

ここまで考えたら、それなりに気分は楽になつたのか、白虎は天井の明かりに掲げるようにして、拳を上の方へと突き上げた。

（くよくよ悩んだって仕方がない！ このぐらいのプレッシャー、バネにして、力の源にしてみなきゃ！）

夕飯すらスルーして、すっかり熟睡してしまつた白虎は、翌日の朝、腹を空かせながら、鍛錬場で軽くランニングをしていた。人は腹を空かせていた方が色々好調とは聞いたものの、確かに満腹の時よりも体は軽く、しつかり走れてしまう。今度からのランニングは朝ごはんを食べる前にやってみよう、と白虎は思った。

「白虎ー。お前、随分朝から精が出るじゃないかー」

「おつす、水鹿！ 元氣バリバリやでー！」

白虎は水鹿に話しかけられるなり、すぐにそちらの方へ駆け寄つて、首にかけていた

白いタオルで、自分の顔に流れている汗を拭き取った。水鹿は手に持っていたペットボトルで水を飲みながら、白虎に言った。

「ところで、白虎よ。お前さん、昨日何してたのよ。探しても探しても見つからなかったから心配したんだぞ」

「ああ、うん……天秤宮で爆睡しとった」

白虎は苦笑しながら、水鹿の質問に対してそう答えた。水鹿は呆れたように笑みを浮かべながら、白虎に水が入った未開封のペットボトルを差し出した。

「ったく……お前は仕方ない奴だな。水やるから、水分補給しとけ」

「うん、ありがとなー」

白虎は水鹿から差し出されたペットボトルを受け取れば、ペットボトルの蓋をパキッと開封して、その中身を喉に通した。水の冷たい感覚が、喉を通ってお腹へと伝わった。水鹿は「ふう」と息をつけば、白虎の方へと質問を投げ掛けた。

「なあ……圭熊を知らないか？」

「……あー、あいつな」

圭熊の名前が出されるなり、白虎は呆れたように、いつもの柔らかい女声を低いダミ声へと変化させて、水鹿に答えた。

「さつき、メール出したけど、『10時ぐらいに起きるから、そんな時にまたメールしてく

りー』って、きて……また眠ったと思う」

「……そうか」

さすがの水鹿にもそれに対して呆れというものが出る。白虎は唇を尖らせながら、圭熊のその様子に呆れていた。聖闘士である以上、睡眠時間は、長すぎず、短すぎず、適度に取りなければならぬというのに。圭熊が何時に寝たのかは知らないが、10時はさすがに起きるのが遅すぎる。

ふと、白虎は右隣を見つめた。いつもなら、ここに翔馬がいて、翔馬も今の話を聞いたら、同じように呆れてくれるだろう。やはり、翔馬の存在は白虎にとって大きかった。……なあ、水鹿。わいら、また、翔くんのこと、こつちに引つ張れるかな」

「白虎……?」

「昨日ジェイドさんか聞いたの。翔くんが聖闘士辞めちゃったって」

「……ああ」

「それでな、わい、無理に聖闘士を辞めるのやめろとは言わないけど、やっぱり、何も言わないまま、去つちやうの嫌だなんて」

白虎はペットボトルを、分かりやすいように自分の近くに置き、すぐ近くにあつた岩に腰こけた。

「だから、あの時のように……わいと水鹿が手を差し伸べた時のように、また、翔くん」

手を差し伸べたいって思ってる。翔くんが何してるのか、何しようとしてるのか分らないけど……何も言わないまま、ここから去ったら、しばらくしてから、後悔すると思う。わい、翔くんにそうなってほしくないから……」

「……そう、だな」

水鹿は白虎の話を聞くなり、自分の手のひらを見つめて、それでギュツと拳を握りしめた。

翔馬が聖域にきて、白虎らの仲間になってくれたあの日のことは、昨日のどのようなように覚えている。翔馬の涙、翔馬の握った手の体温、それに対する白虎の力強い微笑み、そして、その様子を傍観していた自分。何もかも、覚えていた。でも、それ以上に覚えているのは、何度も何度も翔馬に対して手を差し伸べて、かつ、翔馬と真剣に戦った白虎のはずだ。白虎と翔馬の関係というのは、言葉で表すことが野暮だと思わせるぐらいに、深く入り込んでるものであったのだ。

水鹿は、ぼんぼん、と白虎の頭に手を置いてやれば、ニコツと微笑みを浮かべた。

「まだ、何が確定で何があるのか分からない。でも……翔馬に再び手を差し伸べたい気持ちというものは、オレも同じだ」

「水鹿……」

白虎は水鹿の方へ顔を見上げた。水鹿は微笑みを浮かべながら、コクンと首を縦に

振った。白虎はその微笑みに釣られるように、いつものような力強い、引き締まった笑みを浮かべて、首を縦に振り、頷いた。

「せやな……わいらだからこそ、差し伸べる手がある！」

白虎と水鹿はお互いの拳をコツン、と軽くぶつけて、ニツ、と年相応の笑みを互いに浮かべた。ここに圭熊がいないのが何とも言えないのだが、きつと、圭熊もこの話を聞けば賛同してくれるに違いない。圭熊だって、翔馬の友人の一人なのだから。

地上ではない場所で、その計画は練られていた。どうやってこうしようか、どうしたらあなるか——様々な意見が、そこには交わるように弾き出されていた。しかし、その交わりは大きな一喝とも言える女性の声によつて、打ち碎かれるように終わった。

「静粛に。私は、お前たちの無駄な雑談を聞きに、ここに居るわけではないのだぞ」

「……はっ、申し訳ございません」

その女性から声が掛かるなり、言葉を交わしていたであろう三人の青年が、ビシッとそこに跪いた。女性は、その三人の青年の数十センチ上にあるであろう玉座に座り、その青年たちを見下すように見つめていた。

「良いか？ 今度の狙いはムーサの女神のアオイデーの媒介の少年だ。そいつの首を取ってくるのだ」

「し、しかし、今回は今までとは違い、聖闘士ということですが……」

「そこで怖気つくな。お前たち天闘士の実力は黄金聖闘士と五分五分のはずだ。たかが青銅聖闘士一人に、怖気つくでない」

「は、はあ……申し訳ございません」

三人のうち、髪の毛の長い青年の一人が、女性に向かってへこへこと謝っていた。その右隣にいた、仮面をつけている青年は、周りに聞こえないように「フン」と鼻を鳴らして、呆れたように横目でその青年を見つめた。

女性はその仮面の青年に視線をやり、問う。

「イカロスよ。人間界に何年もいたお前だが……だからこそ、あのアオイデーの媒介をやつてのけるな？」

「はい、もちろんです」

青年は女性の問いに、自信満々な低い声で答えを発した。

「あの媒介のことは、ここにいる誰よりも深く知り尽くしているつもりです。必ずや、このイカロスが仕留めてご覧に入れましょう」

「……ふふ、期待しているぞ、イカロス」

イカロスは目を薄めながら床を見つめれば、床についている手にグツと力を入れた。

（白虎……お前を、絶対に……絶対に、仕留めてみせる……アルテミス様のために……



51：「天からの使者」

「アテナ……と、いうことなのですが……」

「ええ、事情は大方把握できました。しかし、パルナツソス山が男子禁制になっていたとは知らず……ご苦勞をかけてしまい、本当に申し訳ございません」

白虎は鍛錬場で水鹿と言葉を交わした後、そこから別れて、聖域での正装代わりの龍星座の聖衣を着衣してから、アテナ神殿の方へと向かった。そして、ラティエルへ一昨日から昨日にかけて起こった出来事を、思い出せる限りで話した。もちろん、ムーサの女神・アオイデーから授かってきた、純白の剣・REID-DAMOCLESのことも包み隠さずに。

ラティエルは白虎から話を聞くなり、眉をハの字に下げて、申し訳なさそうに謝罪の言葉を白虎に向けながら、その頭を下げた。白虎はラティエルに謝られるなり、「いい、いいえ、そんな！」と驚いたように声を出して、両手をブンブンと振った。そして、ラティエルに対して軽くなながらもフォローを入れた。

「こちらもこちらで調査不足なところはありましたし……あなたが謝ることではありません」

「なら良いのですが……本当にごめんなさい」

ラティエルはもう一度頭を下げて、白虎に謝罪の言葉を向けた。白虎はラティエルに何度も謝られ、本当にどうしていいのか分からない笑みを浮かべた。そして、ラティエルに顔を上げるように遠慮がちに言いながら、思う。

（まあ、最初は何で男子禁制だったのをわいに伝えなかったのか、すごい複雑やったけど……アテナが知らんうちに勝手に決まっとつたんやな……）

そう。パルナツス山の男子禁制の件については、アテナが知らないうちに、勝手に決まっていたとのことだった。なので、白虎からその話を聞いた時は非常に驚いた様子で、こちらを見てきたのである。今回は生きて帰ってこれたとはいえ、次にこういうことがあった場合、一体どうなることやら、分かりやしない。なのでアテナもこうして必死に謝っているということである。

白虎は涙目になっているラティエルを目の前に、「ふう」と軽く息をついて、今、自分が着衣している龍星座の聖衣を見つめた。髪が長くなり、今度は聖衣までもが、女性らしいフォルムになっている。無論、白虎に女を磨く気は一切ないのだが。この聖衣の変化について、ラティエルから聞いたのだが、ムーサの戦士たちは大抵は地上の男に聞わらないように育ってきたため、何もかも女性的なものになるらしい。なので、白虎の聖衣もこうして女性的なものになったとのことらしい。アオイデーが言っていた「ムーサ

が修復すると、どこか女性的なパーツが出てきてしまう」というのは、そういうことでもあったのか。

ラティエルは、そろそろ落ち着いてきたらしいのか、「はあ」と息をいったん吐き、気を静めた。そして、胸に手を当てて、撫で下ろし、白虎の方へと再び視線を向ける。

「白虎……今度からムーサに行く際は、必ず私を通してアオイデーに連絡してくださいね。今回のようなことが、二度と起きないようにしなければ……。ああ……なんてこと……」

「う……うっす……胸に刻んでおきます……」

完全にお通夜状態なラティエルに向かって、白虎は額に変な汗を垂らし流しながら、変な返事をしてしまった。それほどに、ラティエルは取り乱していたというわけだ。やはり、こういう面では、ラティエルも人間らしいところがあるのだな、と白虎は思う。

それはそうと、白虎は気になったことをラティエルに向かって口にした。無論、今、アテナに聞くことと言えば一つ——翔馬のことであった。きつと、アテナであれば、何か知っているかもしれない。そう思って、ラティエルに向かって翔馬のことを問うのである。

「アテナ。天馬星座の翔馬が、聖衣をこのアテナ神殿の方へと返還しに来た、という情報があるのですが……。あなたは何かご存知でしょうか？」

「ああ……ええ……そうですね。でも、ごめんなさい。私は気が付いたら、アテナ神殿に天馬星座の聖衣があったことぐらいしか分からないのです……。貴方の期待に沿った答えがでずに、申し訳ございません」

しかし、ラティエルの方も翔馬のことに關しては自分たちと同じぐらいの情報量しかなかったのである。ラティエルは先程に次いで、なおさら申し訳なさそうに、声を縮こまらせた。白虎はラティエルに申し訳ないことを聞いてしまったと思い、ペコツと頭を下げた。

「いけ、こちらこそ申し訳ございません、アテナ。聖闘士のことを誰よりも知っているであろう、あなたであれば、我が友人である翔馬の行方を察していると思つたのですが……。余計なプレッシャーをかけてしまったようで……」

「び、白虎……。な、何もそこまでして謝罪の言葉をかけなくてもよろしいのですよ？ほ、ほら、顔を上げてください。せつかくの虎鈴から貰ったきれいな顔が台無しになつてしまいますよ？」

「は、はい……」

白虎はラティエルに言われた通り、母親である虎鈴から譲り受けた、その顔を上げた。ラティエルはニコリと優しく笑みを浮かべて、白虎の頭に自分の右手を置き、ゆつくりとなでた。白虎はなで受けながら、上目遣いでラティエルの方を見つめた。

「アテナ……」

「翔馬のことは、きつと大丈夫です。貴方が信じていてさえすれば、また会えます。だから、そんなに暗くならないで？」

「……はい」

白虎はラティエルの言うことに少し涙目に、そして涙声になりながらも、コクンと首を振って頷いた。ラティエルの優しい一言が、どこことなく白虎の胸の中に響き渡る。今、何が一番大切なことをラティエルが言ったからこそ、だろう。白虎は腕でゴシゴシと乱暴に涙を拭き、胸に手を当てて、その手をギユツと握りしめた。

「アテナがそう言ったのならば……また、会えるんだろうな。オレたちが信じていれば」
「だよなー！ アテナのねーちゃんの言うとおりでだろうな！ 俺たちが翔馬のこと、信じてやらねえと、だな！」

「うんっ、せやねっ！」

白虎は二人の言うことにニコリと微笑みながら頷いた。白虎はアテナ神殿でラティエルとの話を終えたあと、再び鍛錬場に戻って、水鹿と合流した。その場には、アテナと白虎が話している間に起きてきたであろう圭熊が、水鹿と共にランニングをしたり、基礎トレーニングをしていた。

「しっかしなあ、白虎の聖衣のヒール、めっちゃや高くね？　少なくとも、そこらへんの女聖闘士並みはあるんじゃないの？」

「うう……本人が一番気にしていることを」

圭熊が白虎の聖衣のかかと部分を見て思ったことをはつきりと言ってやれば、白虎は胸に包丁が刺さったように、顔を歪ませた。さすがと白虎といえども、聖衣が女性的になつてしまったのは、なかなかダメージが大きいらしい。圭熊はそんな白虎を知つて知らずでか、さらに続けた。

「お前とさつき会つた時、『なんか身長高くなつてんなー』と思つたら、聖衣のヒールが高くなつてるもんな。ある意味ずるいだろ」

圭熊の言つたことに同調したのか、後ろの方にいた水鹿が、「うんうん」と腕を組み、首を縦に振つて頷いていた。水鹿も水鹿で、白虎の聖衣のヒールに思うことはたくさんあつたのだろう。白虎はそれに対する反応に困つたのか、苦笑しながら、そんな二人を見ていた。

それから、顔を見上げて、何となくながらに空を見つめた。太陽がこちらに射し込み、とても眩しかった。白虎は太陽の光から逃れるように、自分の顔の上に自分の手の甲を重ねて、その指と指の間の隙間から空を見るようにした。

「今日もなかなか晴れてるよなあ……すごい眩しいよね」

「ああ、ここんところ、ポセイドンの水害時の反動のせいかな雨すら降っていないからな。その眩しさに磨きがかかるのも当然だろうな」

水鹿が白虎の眩いた独り言に、「フウ」と息をつきながら答えた。水鹿は、目の上に垂直になるように手を乗せて、その日差しを避けていた。白虎は水鹿のその答えに「そっか」と、眩きながら、その答えに少しばかり引つかかっていた。

（雨が降っていない、か……。そういえば、最近、雨が降っていない気がする。ポセイドンのこともあるし、何かの前兆なのかもしれないけれど……。ううん、考えすぎかな？）

白虎は、水鹿の『雨すら降っていない』という言葉に対して、どことなく胸騒ぎを感じていたのである。もちろん、白虎が考えすぎなだけでは、というのもあるだろうし、たまたま雨が降っていないだけなのかもしれない。しかし、ポセイドンの時の異常気象を体験したり、何より、アオイデーからのあの忠告を聞いた後だ。ちよつとした天気の変化に敏感になっているのも仕方ないのかもしれない。白虎は「考えすぎか」といったん息をついて、空からその視線を外した——その時だった。

「っー」

その場の空気と、辺りの小宇宙の雰囲気、突如として変化を遂げたのである。白虎は腰掛けていた岩から勢いよく立ち上がって、キョロキョロと辺りを見渡して、その小宇宙の雰囲気を感じ取っていた。水鹿と圭熊もその変化を感じ取っていたのか、聖衣箱

片手に、白虎の背中につくように辺りを見た。

三人がそうして警戒していると、向こうの方から、三つの人影が現れた。白虎たちは、更に内に秘めている小宇宙を高めて、その警戒も強めた。その三つの人影がくつきりに見えるようになると、一人聖衣を装着している白虎はザツと地面を鳴らしながら、構えの体制を取った。

(この辺り一面の雰囲気が変わってしまったのは、あの三人のせいか……。そして、わいが、雨が降らないのは前兆とか違うとか考えている間に……。タイミングがいいのか悪いのかまったく分からん)

白虎は、その三人のうちのリーダー格であろう仮面をかぶっている青年をジツと睨み付けるように見つめた。青年は、白虎に睨まれても大して反応はせず、ただ、黙ってそこに立っていた。そして、三人のまわっている、天使のような羽が特徴的な闘衣。それがすべてを物語っているようにも伺えた。

白虎は、こちらを睨みつけてくる仮面の青年に向かって、いつもの調子で、聞いてみる。

「アンタら……いや、アンタたちは、何者だ？ 聖闘士でなければ、聖域の者でもない。一体どこからやってきた？ 答えろ」

そこで、春の生ぬるい風が吹いた。白虎と仮面の青年はお互い対峙しながら、視線と

眼光を鋭くして睨み合っていた。仮面の青年は、白虎に向かって声を放とうとする気配はない。一体それが何のつもりなのか、白虎はますます不審な目で目の前の三人の闘士たちを見つめた。白虎にさらに睨まれるなり、仮面の青年の右隣にいた髪の毛の長い青年が、他の二人の青年の一步前に出た。

「なかなかコイツが答えないので、僕が代わりに答えてあげよう。僕らは、月の女神アルテミス様を始め、オリュンポス12神に仕える闘士、天闘士だ」

「エン、ジェル……?」

「そう。その名前の通り、僕らはホンモノの天使! ……なわけなんだけど、こいつだけ色々あって、人間ってわけなんだけどね」

髪の毛の長い青年は、片目を閉じ、ウイंकを決めて、仮面の青年の方へと視線を向けた。仮面の青年はそれに対して、特に何も反応せず、ただ、そこに立っていた。何も反応がないのが少しだけ寂しかったのか、「やれやれ」とため息をついてから、髪の毛の長い青年は再び白虎の方へと視線を向けた。

白虎は「オリュンポス12神に仕える闘士」と聞いて、とあることが頭によぎっていた。

アオイデーは、上の神の方が使いを送り、白虎を殺しにくるかもしれない、と言っていた。そして、目の前にいる三人の青年は、その上の神に仕える闘士だと自称していた。

「まさか……アンタら……私を殺しにここに来たのか!？」

「!」

圭熊と水鹿は、突然白虎の口から出てきた物騒な言葉に、ビクツと肩を震わせて反応した。圭熊は「……ははっ」と反応に困ったように笑みを浮かべながら、白虎の肩に自分の手を添えた。

「び、白虎。そういう変なこと、冗談でも言うのはやめろよ。お前が殺されるってなんだよ。笑えないっての……」

だが、白虎は圭熊のそれに対して何も言わない。むしろ、ギユツと拳を強く握り締め、いろいろと堪えているようだった。圭熊はそんな白虎の拳を見れば、すぐに白虎の肩から自分の手を離れた。白虎は、冗談ではなく、本気で言っていた。それだけが、圭熊と水鹿には伝わった。

白虎の問いに答えたのも、髪の高い長い青年であった。青年は、ニコニコと笑みを浮かべ、白虎の質問に向かって答えた。

「ふふ、察しがよいね。まったくもってその通りだよ。僕たちは君を殺しに来たんだ。そう、ムーサの女神の一人・アオイデーの媒介である君を、ね」

それを聞いた白虎の三人を見つめる目線が、厳しいものになる。状況がよく読み込めていない水鹿と圭熊は、三人の天闘士と白虎のことを交互に見つめるだけしかできない

かった。

白虎は後ろにいる二人を庇うように、片腕を伸ばし、一步前に出た。そして、髪の長い青年に向かつて、言い放った。

「なら、私以外の聖闘士たちには手を出さないと約束してほしい。アンタらの目的は、あくまでも私……だから、血を流して死ぬのは、私だけでいい」

「び、白虎！ お前……！」

「ふふ、構わないだろう。もつとも、僕たちは君だけのためにここまでやってきたんだ。他の誰かを相手にする余裕など、どこにもない」

髪の長い青年は、フツツと笑みを浮かべた。白虎の方もフツツと安心そうに笑みを浮かべて、胸をなでおろしていた。しかし、それを認めないとばかりに、圭熊が白虎の肩をつかみ、白虎を無理やり自分の後ろへとやった。白虎はその圭熊に対して驚きを隠せないのか、すぐに声をあげて、圭熊の方へ肩を置いた。

「圭くん！ 何を……！」

「ダチが殺されるって言われて、黙ってる奴なんていねえだろうが！ それに、お前に翔馬のように、何もかも一人で抱え込んで、消えてほしくねえんだよ！」

「……っ！」

「だから、白虎を殺すってんなら、俺を殺してからにしろ！ 何が何だか分からねえけ

ど、でも、白虎はおめーらみたいな奴らに殺させはしねえ！」

圭熊は己を自分の親指で指差して、三人の天闘士たちに言い放った。それを聞いていた、三人のうちの一人が、「フン」と鼻を鳴らしながら、圭熊を見下すように見つめていた。

「たかが青銅聖闘士が、我ら天闘士の相手になるとは思えない……今なら、まだ見逃せる……だから、その言葉、取り消してほしい」

「カトレウス……」

今まで一切言葉を放つことがなかった一人の天闘士を、髪の毛の長い青年は、驚きながら見つめていた。カトレウスと呼ばれた青年は、コクンと首を縦に振って、続けた。

「天闘士は黄金聖闘士並みの力を持ってして生まれてきた天使……青銅聖闘士がどうこうできる相手じゃない」

「ならば、黄金聖闘士並みの力を持った、優秀な白銀聖闘士はいかなかな」

「！」

そこで出て来たのが、杯座の水鹿だった。水鹿はニコツと笑みを浮かべながら、カトレウスの方へその目を向けていた。カトレウスはほぼ無表情に近い顔で、少しだけ目を見開き、それから、水鹿に言い放った。

「どんなに優秀だろうが、なんだろうが、戦力の差でそちらの勝機は見えない……それで

も良いのなら、そちらの要件を飲む……」

「カトレウス……!」

「断ったところで、あの聖闘士たちは、我らが要件を飲むまで頼み続ける……。すべては友情のために……。ならば、その友情のために、頼みを聞くのも、慈悲の一つ……。違う？」

「……相変わらず、何を考えているのか、さっぱりなやつだ」

髪の長い青年は「フウ」と息をついて、額に手を当てた。それから、何も言わない仮面の青年の方を向き、さらにため息をついた。しかしながら、二人がその気であれば、仕方あるまいと、髪の長い青年も目の前にいる三人の方へ顔を向けた。

「二人は、キミたちの要件を飲むそうだね。もつとも僕にはその毛頭もないが……。二人が飲むというならば、僕も飲む。こちら三人、キミたちも三人、だ。アテナの一对一は絶対という決まりにも適っている。まあ、確かにそう不都合もあるまい」

髪の長い青年は、ニコツと背中に薔薇を抱えているような優雅な笑みを浮かべながら、三人に向かってそう言った。圭熊と水鹿もちよつとだけ笑みを浮かべて、ニコツと微笑んだ。

「上等、上等ッ! でも、舐めてかかんじゃねーぞ! こちらとら、何度も戦いを重ねて、セブセンシズにすら目覚めたことがあるんだからなッ!」

「天闘士……随分と余裕そうだが、聖闘士の手にかかれば、敵ではないはずだ」

それぞれの思いを天闘士三人にぶつける。そして、思い思いのことを言うと、二人は白虎の方を見つめた。しかし、白虎の顔はどこか晴れていない、暗いものだった。そして、白虎は胸に拳をあてて、二人に、いや、五人に言い放った。

「私は……私は、この要求には賛同できない」

「！」「はあっ?！」

水鹿と圭熊はあからさまに驚いた表情で白虎のこゝを見つめていた。いつもの白虎ならば、こんなことを言わずに、自分たちに乗ってきてくれるはずなのだが。一体、何が白虎をこんなに弱気にさせているというのか。

白虎はシユンと笑みを浮かべながら、圭熊と水鹿に言い放つ。

「だって、これは元々私の責任だから……私が原因だから……関係ない二人を巻き込むなんてできない。それに、さっきも言ったとおり、狙われているのは私なんだから、血を流すのは私だけで十分だろう?」

「白虎、お前……本当どうしちゃったんだよ。俺たち、いつも一緒に戦ってきた仲間じゃねえかよ……!」

らしくもない、冷たいことを言い放つ白虎に向かって、圭熊はその胸倉を掴んだ。白虎は、その顔を見つめたまま、何も言わなかった。圭熊はグツと歯を強く食いしばって

から、言い放った。

「どうして……どうして、そんなこと言うんだよ。俺たち、友達だろ!」

「友達だろうがなんだろうが、関係ないものは関係ない」

「友達だから、友達だからこそ大いに関係あるだろうが! それに、翔馬のことも……!」

「翔くんのごとは、ここでは関係ない! これは私の問題だ!」

二人は互いに強く睨み合った。友のためと譲らぬ圭熊に、周りを巻き込みたくない白虎。利害がどこも一致してなかった。圭熊は、白虎の胸倉を掴みながら、天闘士に向かつて言い放った。

「なあ、天闘士さんよ。時間をくれないか。三日だけでもいい。その間にこいつの意見が変わらなきゃ、また、その時考えてくれねえか」

「もちろん。何も僕たちも何もここで今すぐに戦おうなどとは思っていない。二人も構わないだろう?」

髪の毛の長い青年が、他の天闘士にその意見を向けた。二人はコクン、と頷いて圭熊の意見に対する同意と了承を見せた。髪の毛の長い青年は、二人の了承を心得ると、圭熊と白虎の方を見つめて、フウとあきれたように笑みを浮かべた。

「仲間割れも構わないが……ちゃんとその三日後にはちゃんと決着をつけたまえよ?」

僕たちもさすがに仲間割れしているキミたちと戦おうなどとは思わないからね」

「……………ああ」

圭熊は白虎の胸倉を掴む右手を、一層強く握り締めた。白虎の方も、圭熊から視線を逸らして、体の横で拳を強く握り締めた。

そして、天闘士たちはここから風のように去っていった。また、三日後にはここに来ることを念頭に置きながら。水鹿はそれを見送るように見つめてから、圭熊と白虎の方へと顔を向けて、その間に割って入るように、圭熊の白虎を胸倉を掴む右腕掴んだ。

「圭熊、白虎。とりあえず、落ち着くんだ。確かに互いの意見が一致しないゆえに、こうなるのは致し方がないが……………だが、オレたちが仲間割れしたって仕方ないだろう？」

「う……………兄ちゃんがそう言うなら……………」

圭熊は水鹿にそう言われて、パツと離れた。圭熊は微妙に不服そうではあるものの、水鹿の言うことは正論で、仕方なく従うしかない。離された白虎は圭熊に掴まれた胸倉の部分を、伸ばしながら、圭熊と水鹿の方を見つめた。その目には、どこかしら二人に対する心配と不安とそして、失望みたいなものが混じっていた。

その瞳から、白虎の心情から察した圭熊は、ジリジリと白虎に歩み寄り、ジイツと睨みつけるようにした。

「おう、白虎。まあだ、何か言いたげな瞳してやがるな」

「圭熊！ だからやめろって！」

水鹿は、圭熊に向かって制止の言葉をかけるも、圭熊は水鹿の言葉に耳を傾けようとせず、目の前の白虎しか見ていなかった。それほどまでに、圭熊の怒りは湧き上がっているということだろう。圭熊は距離を一定まで保てば、更に白虎のことを睨みつけた。

「お前、本当さつきから何なんだよ。言いたいことあるなら、はつきり言えよ。そうやって黙ってばっかじゃ、兄ちゃんも俺も困るんだっての。分からないのか？」

「……」

しかし、白虎は圭熊にそう言われても、答えようとはせず、むしろ、さらにその口をギユツの握るように硬く結んだ。圭熊はその白虎の口元を見た瞬間、心の中で何かが爆発したのか、拳を握り締めた。

「お前がその気なら……こっちだって、その気になってやらあ！」

圭熊は白虎に向かって駆け走り、その拳を白虎の方へと突き出した。その突き出し方は、まさしく一矢のごとし。これを受けた者は絶対に生きて帰れないであろう。圭熊は「ヘツ」と笑みを浮かべて、白虎を見た。しかし白虎は、その圭熊の拳を難なく片手で握り締めるように受け止めた。そして、白虎がその手で拳を作ると、その圭熊の拳の威力は、空気の中へと消えて行つた。

「な、なんだ、と……」

白虎の異常なまでの頑丈さと、黄金聖闘士のような攻撃の受け止め方に、圭熊は驚くしかなかった。同じ青銅聖闘士でも、短期間でこんなに実力差が出てしまうのか、と。いや、それ以上に、白虎の中で何かが働きかけているのか。

白虎はふう、とその手についた汚れを飛ばすように息を吹きかけてから、圭熊の方を再び見つめ直し、ザクザクと足音を鳴らしながら歩み寄った。そして、ある程度の距離まで圭熊に歩み寄れば、ピタツと足を止めて、その肩甲骨まで伸びた髪の毛を、風に揺らした。

「圭くん……確かに、君から見たら、今の私はおかしいかもしれない。自分でもらしくない、って自覚してるから」

「じ、じゃあ、何で……」

そんなに自覚するほどらしくないのならば、どうして自分からそこから脱出しようとしなののか。そして、何故自分たちにそんなに頑なに言おうとしないのか。何が白虎をそうさせているのだ。圭熊は、それらが頭の中でぐるぐると回って、旋回していた。

白虎は圭熊のその問いに答えるように、寂しげにニコリと優しく、そして柔らかく笑みを浮かべた。それは、今までの白虎の笑みとは違うものだった。圭熊は一瞬ドキリとしたが、すぐに戻って、怪しげに白虎を見つめた。白虎は、水鹿と圭熊を交互に見ながら、言い放った。

「だって……黙ってるしかないじゃない。こんなこと……誰にも言えないから……」
「……っ」

「圭くん、いい？ いくら友人でもね、言いたくないこと、探られたくないことはある。だから、わいは言いたくない。水鹿と、圭くんを巻き込みたくないから……」

「……」

「だから……だからね……私……一人で……一人で天闘士に立ち向かってくる。私だけ、一人で……そう、三日後に」

「なっ!?」「白虎っ!」

圭熊と水鹿の目が一気に大きく見開かれた。白虎はニコツと笑みを浮かべて、二人に更に言い放った。

「何度も言ったけどね、私は二人を、友達を巻き込みたくない。だから、天闘士に一人で立ち向かっていく。二人は、その後ろ姿を黙って見送ってほしい。それが……それが、今のわいの望みだから」

白虎のその言葉に、圭熊は叫ぶように必死に反論をした。

「で、でもよお！ それって、いろいろと無茶苦茶すぎんだろ、白虎オ！ お前が一人で天闘士に立ち向かう？ バカ言うなよ！」

「——バカでも、なんだっていい。それがわいの決めたことだから」

白虎はそう言うと、二人に背を向けて、その場から去ろうと歩き出した。二人はただ、呆然とその後ろ姿を見つめているだけで、特に引き止めるという選択肢も頭に浮かべることができなかつた。

白虎が完全にそこから去つたのを見送れば、ハッと意識を取り戻して、圭熊と水鹿、互いに顔を見合わせた。

「兄ちゃん……」

「……」

圭熊はその少年らしくキリツとした瞳からポロポロと水滴が垂れ流し、その場でガクツと膝を下ろして、地面に手をついた。それから、その水滴を地面へと落として、水鹿に向かって叫ぶように言い放つた。

「もう俺どうすりゃいいんだよ……こんな短期間で友達二人もなくすとか……どうすればいいんだよおっ！」

しばらくは鍛錬場から、圭熊の嗚咽が鳴り響いた。水鹿は黙って圭熊の側につき、しやがみこんで、その頭をぼんぼん、となでていた。水鹿の方も思い思いのことがあつたが、必死に我慢して、堪えていた。

52 : 「Dead or Dead、友さえ棄て」

「はあっ！」

その日の昼下がり。白虎は天秤宮の近くにあった木に向かつて、見事なブローを決め込んでいた。白虎のそのブローは、木を一個倒す分には十分な威力を持っており、普通の人間ならば死んでいるほどだろう。そう、「普通の人間」ならば、である。白虎がこれから倒しに行くのは、その「普通の人間」ではない。「人間の形をした何か」である。白虎はそのことを念頭に置きながら、木を倒した拳を見つめて、更にその拳を強く握りしめた。

今日の朝、天から突然やってきたであろう三人の闘士・天闘士。天闘士は、黄金聖闘士並みの力を持つてして、オリュンポス12神を守っており、たかが青銅聖闘士である白虎が対抗できる相手ではない。しかし、白虎は、そんな天闘士三人に向かつて、一人で出撃することを決意したのである。自分が青銅聖闘士で、天闘士に対抗できるほどの力がなからうが何だろうが、今の自分にはその道しかなかった。圭熊と水鹿のことを絶対に巻き込みたくないゆえだ。

白虎は再び拳を握り締めて、近くにあった木に、再びその拳を固めて、穿った。

「はあああああ——ツツ!!!!」

拳は直径何十センチもあるであろう木の幹を見事に貫いて、その威力の大きさを白虎に知らせていた。貫かれ木からは、どれほどの摩擦を受けたのだろうか、煙がシユウと空へ舞い上がっていた。白虎は貫いた木から、その拳を引き抜いた。その際、白虎の腕は、貫いたことによつてできたトゲが刺さり、血がボタボタと地面に流れ落ちていた。しかし、今の白虎には、そのぐらい無茶しなければならぬ理由がある。このぐらいで、引き下がつて鍛錬をやめるわけにはいかない。

白虎は右腕から血を垂らしながら、近くにあるそれなりの大きさの岩に目をつけた。白虎はそちらまでゆつくりと歩き、そこにスツと血まみれの拳をつけた。

(物を破壊するということは、原子の根本を破壊すること……)

「——たあッ!」

白虎は拳を目の前の岩の方へと突き刺し、衝撃を与えた。岩は拳の衝撃を受けたところから見事にヒビを入れ始めて、そこから一気に崩壊し、辺りに砂煙が立ち込めた。白虎はその砂煙を吸わないように、ゲホゲホと咳をしつつ、口に手を当てた。しばらくし、砂煙が晴れば、そこには、岩の痕跡がないほど、小さく砕け散った、数々の破片の姿があつた。

(これじゃあ……破片が残る程度じゃ、アイツらに勝てるはずがない!)

白虎はその結果にすら満足していないのか、厳しい目で見つめ、すぐに標的を別のものに定めんとばかりに、それに背を向けた。この程度で、やつら天闘士に勝てるはずがない、と白虎は一人で勝手に思い込んでいた。

「白虎。強くなりたいというその気持ちは分かるが、むやみに物を壊したり、破壊したりするのはどうかと思うぞ？」

その時、白虎の耳に聞き覚えのある男性の声がスウツと入ってきた。白虎はその聞き覚えのある声に反応して、クルツと体を回して、後ろを振り返った。そこにいたのは、腰の下まである、長く黒い髪の毛を持った人物、言わば、白虎の師匠であり、聖域の教皇でもあった。

「ろ、老師！」

白虎は、まさか教皇がここにくるとは思ってもみなかったのか、非常に驚いた様子で教皇を見つめていた。教皇は白虎にその名で言われるなり、「うむ」と首を縦に振って、白虎の方へと歩み寄った。

「天秤宮から活発的な小宇宙が感じられるな、と思つて来てみたら……お前だったか、白虎。そんな、腕からも血を流して……」

「も、申し訳ございません……。でも、強くなるにはここまでしなきゃ、と思つて……」

白虎は教皇に申し訳なさそうに顔をシユンとさせて謝罪の言葉を並べれば、自分の血

まみれになった腕と拳を見つめた。確かに周りからすれば「やりすぎ」と思われなくてもいいのだが、それでも白虎はその「やりすぎ」を超えるぐらい鍛錬をしなければならぬと思うっていた。

「白虎は「ふむ」と、自分の手の上に顎を置き、白虎の血まみれになった拳を見つめた。そして、辺りに生える数々の木を見つめて、言い出す。

「白虎。お前は昇龍覇をしっかりと撃つことができるか？」

「は、はい、もちろん。そもそも、昇龍覇を完成させることができなれば、龍星座の聖闘士にはなれないと申したのは老師じゃないですか」

「ふふ、そうだったな。失敬失敬」

「白虎は白虎の鋭い指摘と突っ込みに、苦笑しながら謝罪の言葉を連ねた。それから、辺りを見渡し、白虎の前に立った。

「白虎よ。お前には言っていないが、昇龍覇を撃つことができれば、そのワンランク上に進むことができるんだ。多分、お前の『強くなりたい』という思いにも答えられるぞ」

「ワンランク上……!?!? ろ、老師! ぜひとも教えていただけませんか!」

「まあまあ、落ち着きなさい。今のお前であれば、確実にそこに進めるものだろうから」
「白虎は瞳の色を変えて、こちらに詰め寄ってくる白虎を「どうどう」と宥めた。白虎

はその宥めと、教皇の言葉に答えるかのように、その場はいったん黙り、静かになった。教皇は白虎が黙るなり、さらに続けた。

「廬山昇龍覇は、確かに絶大な威力を誇るが、それ以上に見極めが簡単な技ともいえよう。そして、お前ぐらいの実力にもなれば、龍を一つ出したところで、満足しないことも多々あるはずだ」

「まあ……そうですね。現に、いろんな技と併用してますしね」

白虎は自分の技の数を指を折りながら数えていた。昇龍覇を含めるだけでも、五つぐらい白虎の持ち技というものはある。今、教皇が言った廬山昇龍覇、廬山龍飛翔、猛虎烈風紫電拳、虎咆龍飛、そして、白虎の技の中でも最大の威力を誇るであろう、遊舞乱虎。廬山の技じゃないものも三つはあった。これが多いのか少ないのか定かではないが、少なくとも周りよりは技のパターンは多くあるのは過言ではない。

教皇は今の白虎の「いろんな技」という言葉にコクコクとうなずいた。

「そう、普通の拳に拳風、体当たり、そして歌と踊り……お前の技はさまざま種類がある。しかし、ペガサス流星拳のように、短時間で拳を当てる技はないね？」

「……あー」

白虎は言われて気が付いた。確かに今までは気にしてはいなかったものの、短時間で拳をあてるような技は白虎の中にはなかった。確かに技のパターンは多くあり、幅広く

カバーしているといってもいいが、その中にペガサス流星拳のような技は含まれていない。しかしながら、教皇は、なぜ、今になってそのことを指摘したのだろうか。

教皇は「フフ」と笑みを浮かべながら、どこからか布を取り出し、白虎の右腕そつと手にとつて、そこから流れている血を拭き取つた。傷自体はかなり浅かつたようで、出血はすでに止まっていた。教皇は血を拭き取りながら、白虎の方に真剣な眼差しを向けて、言い放つた。

「廬山昇龍覇よりも強大で、壮大な技を……お前に教える」

「……！」

「圭熊……それはきつと辛かつただらうねえ。白虎が一人で前線となつて戦うなんて、なおさら心配だろうに」

「うん……でも、アイツ頑固だからさ、俺たちの言うこと全然聞いてくれないのよ」

圭熊はハアとため息をつきながら、目の前にいる老人にそう話した。圭熊は、かつては我が師匠・コーラルの守護宮だった金牛宮で、今まで起こつたことをコーラルに話していた。圭熊にとつて、そういう悩みを打ち明けることができる大人の存在というのは、コーラルぐらいしかいなかった。

コーラルは圭熊から話を聞くなり、圭熊の頭をぽんぽんと撫でて、ニコリとほほ笑ん

だ。

「でもね、圭熊。こんな状況で白虎を心配するのは当たり前だよ。特に圭熊は白虎のお友達なんだからね。だから、少しだけキツイことを言ったり、怒ったり……結構普通かもね」

「……」

圭熊は、手にしていたコーラの缶をギュッと握り締め潰しながら、目を伏せた。感情のままに白虎の胸倉を掴んでしまったこと、それを少しばかり気にしていた。それから、白虎のとある言葉が圭熊の頭の中を旋回して、そこから離れようとはしなかった。

（『こんなこと……誰にも言えないから……』かあ……）

白虎の指す『こんなこと』がどうしても圭熊の中で気になって気になって、仕方がなかったのである。本人に聞いたところではぐらかされてしまうのは見えているので、特に問おうとする気はないのだが、それでも気になってしまふのだ。白虎にも、黙ってここから去って行った翔馬と同じようになってしまふのではないか、という不安を裏に抱えながら。友達とはいえども、白虎からしたら、所詮自分など友達という名の他人なのかもしれない。しかし、こちらには白虎の何もかもを知った上で白虎と共に戦う権利というのは、水鹿にも、そして自分にもあるはずだった。白虎とこんなに溝ができてしまつてから、そういう風になるのは難しいのかもしれないが。

コーラルは座っていた岩の椅子から、よつと立ち上がって、圭熊の方を優しく穏やかに見つめた。圭熊はコーラルが立ち上がるなり、そちらの方へと視線を注目させた。コーラルはニコリとした優しい表情を崩さないまま、圭熊に静かに言い放った。

「圭熊に『この技』を教えるのは、まだまだ早いと思っていたけど……わりかし、そうでもないかもしれないね」

「じい、ちゃん……?」

圭熊は一体何のことで、どういったことをコーラルが言っているのか分からずに、ポカンとした様子で自分の目の前に立っている老人を見ていた。コーラルは「うん」と目を細めて、口元を緩めながら圭熊に向かって言い放った。

「牡牛座の伝統技といえよう『あの技』をね、圭熊に授けようと思ったんだよ。今の圭熊ならば、それを授けるに値すると思っただからね」

「じいちゃん……!」

つまり、それはコーラルが自分を「その器」だと認めた証といってもいいのであるろうか。圭熊は曇らせていた表情に、光が差したように笑みを浮かべた。一方で「ただし」とコーラルは人差し指を立てながら、圭熊に言い放った。

「何度も前から言っているけど、聖闘士の技は私利私欲のためではなく、他人のために、アテナのために使うものだよ。それだけは、しっかりと心得て、この技を放つようにね」

「……うん、分かつてるさー！」

圭熊は当たり前だと言わんばかりの様子で、こくこくと首を縦に振って、コーラルの言ったことに賛同した。コーラルは圭熊が賛同するなり、圭熊に背を向けて、言い放った。

「圭熊、おいで。向こうで練習しよう！」

——それから白虎と圭熊の二人は、お互いのために、お互いの力のために、自分の師匠から技を受け継ぐための猛特訓を重ねた。

水鹿はその二人の様子を交互に見るようにして、天秤宮と金牛宮を暇がある時に訪ねた。水鹿の方はわざわざ練習するまでもなく、ちゃんと師匠からすべてを受け継いでいるので、二人のことをひたすら見守っていた。しかし、当事者二人に挟まれたところで、胸が苦しくなったのも確かだった。

（二人は同じことをしているのに、互いに違うこと、相反することを考えている……本当、ついこの間まではお互い仲良しだったのにな。白虎、圭熊……）

翔馬のように白虎にいなくなっただけでほしくない圭熊に、自分だけの犠牲になるのならば友情さえ棄てていく白虎。

二人は似た者同士だと思っていたのが根本の間違いだったのかも知れないと、水鹿は

この件でひどく痛感していた。いや、似た者同士だからこそ、考え方が一つでも違えばこうして簡単に喧嘩してしまうものか。水鹿は宝瓶宮の中にたどり着くとコーラの蓋をパキッと回した。

「あの……」

「んっ……あつ、お前は……」

そんな時、水鹿の目の前に現れたのは頭の側面の髪の毛が跳ね上がっている金色の髪の毛を持つ少年・山猫座の凜猫であった。凜猫は水鹿の姿の見るなり、ペこりと丁寧に会釈をして、にこりと優しく温かい微笑みを浮かべた。水鹿は凜猫の姿を見るなり、そちらの方へと歩み寄った。

「久しぶりだな、凜猫。あの12月以来か？」

「はい、そうですねー。あの日以降、いろいろあつて、こうして会える機会もありませんでしたが」

「そっかそっか。まあ、ここでゆっくりしていつてくれ」

「ありがとうございます」

凜猫は水鹿から天然水が入った未開封のペットボトルを渡されると、それを受け取り、水鹿の隣に座るようにそこにあった椅子に座った。凜猫はその渡されたペットボトルの蓋を開き、それに口を付け、中身を喉に通せば、自分の頭より上にある水鹿の顔の

方へと自分の顔を向けた。水鹿はキョトンと首を横の方に傾げ、こちらを見てくる凜猫の方を見つめた。

凜猫はペットボトルの凹んでいる部分をギュツと握り締めながら、水鹿に質問するよ
うに言い放った。

「あの……圭熊と白虎……最近の二人、ギスギスしてるっていうか……」

「……ああ、そうだな。何があつたとは言わないけど、お互いの意見が合わなくて、雰囲気は悪くなってるよ」

「そうなんですか……」

凜猫は水鹿のため息を漏らしている様子を見て、それに釣られるように「フウ」と息を漏らした。

「何というか、こういうの見てると、こっちは関係なくても辛くなるものなんですな」

「……そうだな」

水鹿は手にしていたコーラが入ったペットボトルをギュツと一層強く握り締めながら、凜猫の意見に首を縦に振って賛同した。

「特にあの二人はあの戦い以降、相棒かというぐらいに仲が良かったからな。事情を知ってる者からすれば、見てて辛いよ、こういうのは」

「そうですね……所詮は他人事だと思われるかもしれないけど、僕たちはあの二人を

よく知っているから、自分のように辛いんですよね」

「ああ」

水鹿はコクンと首を縦に振ってから、スツと椅子から立ち上がり、手にしていたペットボトルをテーブルの上にコトンと置いた。凜猫は突然立ち上がった水鹿をキョトンと不思議そうな目で見つめていた。

「水鹿さん？」

「いや……そんな中であいつらが頑張ってるのに、オレはのんびりコーラ飲んでるなんて、ちよつとおかしいなって思ってたさ」

「……ですね」

凜猫は水鹿のその話を聞き、賛同の意を見せれば、手にしていたペットボトルを水鹿のペットボトルの横に置き、やはり立ち上がった。水鹿は立ち上がった目の前の相手を少し驚きたように見つめ、凜猫はニコツと口角を緩め、微笑みを浮かべながら、水鹿に言い放った。

「僕も……僕も、二人が頑張っているのに、こんなところでジツとしていられないなって思ってた」

「そうか」

水鹿はフツと微笑み、宝瓶宮の出入り口の方へと顔と体を向けた。と、何となく湧き

上がった疑問を凧猫にぶつけた。

「ところで凧猫は今誰を師匠に据えているんだ？」

「えっ？」

「いや、さすがに上がいなくて鍛錬や修業を重ねるなんてできるはずないだろ？ 自主

練とかならともかく」

そう、凧猫の師匠は半年前に聖闘士と冥闘士の乱を起こした首謀者・天貴星のフィードである。凧猫はそのフィードに騙されて冥王ハーデスの依り代を演じさせられたり、しまいにはアンドロイドに己の小宇宙を吹き込むなど、いろいろな目に遭ってきた。無論、首謀者であるフィードは白虎の手により倒されたものの、師匠を失った凧猫は、それ以上の鍛錬をどう重ねているのか、水鹿は若干気になったのだ。

凧猫は水鹿に聞かれるなり、「あー、そうですねえ」と呟き、顎に手をあて水鹿に言い放った。

「現在は海鳥さんにお世話になってますね。あの人とは結構気が合うので、楽しく鍛錬させていただけます」

「……そうか、海鳥か。なら、心配いらなかな」

なるほど、と水鹿は言葉通り心配はせず、安心したような微笑みを見せながら呟くように小さく言い放った。海鳥は水鹿の友人であり、普段は教皇補佐を努めている祭壇座

の白銀聖闘士でもあるのだが、そんな海鳥の下で鍛練を重ねているのならば何の問題もないであろう。むしろ、前よりもっと強くなつてそんな気がしなくもない。それに、凜猫と海鳥は互いに落ち着いた性格をしているので、日常生活も上手くやつていつていはずだ。

水鹿はフツと笑みを浮かべながら、これ以上は凜猫に余計な詮索や心配を重ねように、宝瓶宮の出入り口へと向かいながら、凜猫に言い放つた。

「凜猫。海鳥との鍛練、頑張れよ」

「……はいっ」

凜猫は一瞬ばかり瞳をパチクリとさせてこちらに背を向けている水鹿を見たが、すぐにいつものような優しい笑みを浮かべ、コクンと首を縦に振つた。

水鹿は宝瓶宮から外に出ると、目を細めて、天秤宮、金牛宮がある方角を見つめた。

——それから三日後、とうとうその日はやってきた。白虎は結局最後まで「一人」で狂うように鍛練を重ねた。無論、その中でも師からの助言などはしつかり受け入れたものの、周りからの関与は極力避けてきた。白虎にとつて、そのぐらいいなければ絶対に強くなれないと思つたからだ。水鹿からの差し入れもこの期間だけはすべて断つた。傍から見れば、それは完全に異常ではあるものの、白虎はそれを自覚していながら、こ

の体と身、すべてを捧げて鍛練に打ち込んだ。

白虎は翡翠色に輝きを放つ龍星座の聖衣をその身にまといながら、三日前に天闘士たち三人が現れた場所へと足を運んだ。明確な場所は向こう側から指示はなかったものの、一番心当たりがあるといえ、やはりこの場所ぐらいしかない。その証拠に、微かだが、あの三人の小宇宙を感じ取ることができる。

(よし、ここに待つか……)

それだけでここで待つのもおかしいかもしれないのだが、白虎としては待たざるを得ないのであった。白虎はどこか腰掛けることができそうな場所を探し出し、そこにドン、と尻を乗せた。

ふと、白虎は天闘士のうちの一人が言っていたことを思い出していた。

——仲間割れも構わないが……ちゃんとその三日後にはちゃんと決着をつけたまえよ？ 僕たちもさすがに仲間割れしているキミたちと戦おうなどは思わないからね。(……結局、圭くんとは仲直りしないでここに来ちゃったなあ。まあ、それが大した問題とは思わないけど)

白虎は腰掛けているため、ほぼ水平になっているであろう太ももをテーブル代わりにし、そこに肘をついて、その手に自分の頬を置き、ふう、と息を漏らした。

白虎からしたら、圭熊と仲間割れした程度、どうこうとした問題でもない。そもそも

この問題は自分が殺されてしまえば解決するというもの。そこに圭熊は関与していない以上、結局部外者の一人でしかない。それは今まで自分が付き合ってきた者たちも同じ。聖闘士だろうが、友人だろうが、なんだろうが、結局はこの件には関係はないのだ。そんな人物たちを巻き込むなんて以ての外でしかない。

(確かに圭くんとは何度も激しい戦火を切り抜けてきた仲だ。でも、そんな親友でも、私は絶対に巻き込ませたくはないんだ。この件ばかりは、絶対に)

白虎は地面に視線を落としながら、グツと拳を握り締めて、その意思の強さを露わにしていた。これは自分の問題なのだから、圭熊たちが関与する隙はどこにもない。だから、白虎はこうして水鹿の意見さえも押し退けてここにきている。すべては友人を、親友を巻き込まないために。失わないために。

白虎がしばらくそこに腰掛けて待てば、感じ覚えのある小宇宙が、白虎の方へとほのかながらに流れてきた。白虎はまさか、と思い、その場で立ち上がって、首を横へと動かしながら、辺りの様子を伺うかのように視線を動かした。

やはり、白虎の読みというのは当たっていたのだろう。この小宇宙——明らかに、あの三人のものであった。

「やあ、龍星座の聖闘士。三日ぶりだね」

気が付けば、天闘士三人はそこに並んで立っていた。そのうちの髪の毛の長い青年は非常

ににこやかな様子で白虎の方へと歩み寄った。この三人の中心的人物といえ、やはりこの青年なのであろう。白虎はこちらに天闘士が一人歩み寄ってくるなり、ぐつと相手の方を鋭く眼光を光らせ、睨み付けた。

白虎の目の前の天闘士は「おや」とクスクスと悲しそうに笑みを浮かべながら、そこからニツと悪戯そうな口元へと変貌した。

「そんなに警戒しなくともいいだろう？　こちらとて、そんなに痛くしようなどとは思ったりはしていない」

「……」

「そして……見る限り、結局和解はしなかったようだね」

天闘士は一人でここにやってきた白虎に向かって鋭く言い放った。白虎も最初はその天闘士の言葉に対して、「うっ」と言葉を喉の奥の方で詰まらせてしまったものの、しかしすぐにいつものような強気な姿勢に戻る。

「和解をしようがしまいが、そちらには関係はないはずだ。仲間割れをしている私たちとは戦いたくはないと言ったが——最終的な目的は私であることには変わりはないのだからな」

「ああ、そうだね。仲間割れしている君たちとは戦いたくはないが……はつきり言わせてもらえば、君一人いれば十分だ」

天闘士はハツと息で白虎のことをあざ笑うように笑みを浮かべれば、そこに両足を広げて立った。そろそろ攻撃体制に入るべき時なのであろう。白虎の方もスツと視線を据えれば、体を構え始めた。そして、口を開いた。

「ところで……アンタの名前を聞いていなかったな。教えてくれるか？」

「いいだろう。僕の名前は——デュカリオンというんだ」

天闘士・デュカリオンはそう言うのと、手のひらを広げたかと思えば、そこに小宇宙を溜めながら、白虎の方へと駆け出した。

「教皇！　じゃあ、白虎は一人で奴らに——天闘士たちのところへ挑みに行ったのかよ!?　そりやねえよ！」

教皇の間の中で、少年と青年の狭間のような声が鳴り響いた。その声の主は圭熊である。

圭熊は今日の朝起きるなり、すぐに教皇の間へと向かった。無論、その目的は白虎である。圭熊自身、この三日間、一度も言葉を交わすことができなかった相手に対して、いろいろ話したいことがたくさんあったのだ。せめて天闘士と会う前に、それらをちゃんと話しておきたいと思っていた。しかし、いざ、教皇の間に来てみれば、白虎はすでに天闘士たちの元へと向かっていて、ということだった。

白虎の師匠でもある教皇は、眉間にしわを寄せながら、圭熊の白虎に対する気持ちを心と体で痛感していた。一方で、白虎のあまりにも独奏的すぎる行動に、少し悲しんでいたところがあつた。基本、白虎は友情を大切にしている少年であり、きつと、圭熊と白虎が逆の立場であれば白虎も同じようなことをしているはずだ。そんな白虎が、どうしてこのように友人を蔑ろにするような行動を取るのか分からなかつた。

ゆえか、圭熊と水鹿はこちらに何か白虎に関する回答を求めているようにも伺えた。きつと師匠である自分であれば、最近の白虎のおかしい様子の理由を教えてくださいのだからと思うっていたのだろう。しかし、教皇自身もそこについては何にも知らなかつた。だが、ここ最近の白虎の異常さは分かっているつもりで、圭熊たちと同じような不安にも駆られていたのも事実でもあつた。

「二人とも……白虎がいつからおかしくなったのか、分かるか？」

「えっ……」

二人は逆に質問されて、若干戸惑いを隠せない様子で互いを見合わせた。ふと、教皇の方へと視線を合わせると、その表情は真剣そのもので、自分たちにさまざまなかを求めているように見受けられた。二人はそれを若干ながらも察するなり、再び互いの視線と顔を合わせて、コクンと首を縦に振って確認して、教皇の方へと言い放つた。

「確か、パルナツソス山に行った後辺りからだと思うぜ。何というか……パルナツソス

山で何か言われたっばいんだけど」

「やはりパルナツソス山に行った後か……」

「で、確実にアイツがおかしくなったのは、天闘士たちが現れてからだと思います。自分を殺しに来たのだのなんなの言つて、オレらに対して冷たい態度？ を取ったり……」

「……なるほどな」

教皇は二人からの話を聞くなり、スツと目を閉じて、両腕を組んだ。

「白虎は海底神殿での戦いで奏でることができたシンフォニアを、無理矢理カデンツアにしようとしているんだな……」

「合奏から独奏、ということですか？」

「ああ、そうなる」

水鹿が加えた説明に、教皇は首を縦に振って頷いた。シンフォニアとカデンツアは、それぞれイタリア語で合奏と独奏を意味し、また、それは音楽用語の一種でもあった。

「なぜ、白虎自らがカデンツアになろうとしているのかは分からない。しかし、そのカデンツアが再びシンフォニアを奏でることができるようになるには、お前たちの力が必要だ」

「俺らの……」「力……！」

圭熊と水鹿は、拳を片手に握り締めつつ、互いの顔を今一度見合わせた。教皇は互い

の顔を見合わせている二人の方を見据えつつ、コクンと頷いた。その表情には、二人に對する信賴が見えており、二人にとってその視線は何か自分たちの心を動かすものがあつた。

53 : 「カデンツァからシンフォニアへ」

「……っ、槍、か」

気が付けば、白虎の体には擦れ傷程度ではあるものの、軽い傷がついていた。そのことに気が付いた白虎は、自分を掠ったものが刺さっているところを見ながらそう呟き、デユカリオンの方へと顔を向けた。白虎に視線と顔を向けられたデユカリオンは、ニコツと柔らかい笑みを浮かべるものの、しかしそこにはいつものような爽やかなものはない。白虎はそんなデユカリオンがどうしても気色悪く感じるのか、小宇宙を燃やしなから、更にその警戒を強めた。

デユカリオンは「酷いなあ」と小さく呟きつつ、白虎に向けていた手のひらを下ろし、そちらの方へと歩み寄った。

「そんなに警戒するほど、僕を怖がるのかい、君は」

「勿論。目の前の敵を怖がらずして、戦場は切り抜けられない。当たり前のことだろう」
「ふふ、随分と暴論だね。まあ、それも君らしくていいと思うけど」

デユカリオンは他の天闘士二人にその視線をチラリとながら向けてみた。他の天闘士二人はどこかしら納得したように首を縦に振って頷いていた。白虎はその三人の様

子をキョトンと見つめながら、一体何があるのだろうかと思ひ、同時に警戒もさらに強まった。

デユカリオンは白虎の方へと視線を戻し、小宇宙を燃やし高め始める。

「確か……女神アオイデーの武器は剣だったかな。で、僕は槍んだけど……槍と剣、どちらが強いかわからないか」

「……」

無論、白虎はこの場にアオイデーの剣であるREID—DAMOCLESを持つてきてはいないが、デユカリオンは気分だけでも剣を持つてみせろ、と言っているのだろう。白虎は自分の手のひらを見つめて、そこに剣があると想像し、その剣を握るようにギョツと拳を作った。そして、デユカリオンの方へと視線を移した。

（この勝負……絶対に勝つ！）

白虎は拳を引き、そこから一気にデユカリオンの方へ駆け出した。

「はあっ！ 廬山昇龍覇——ッ！」

白虎は拳を突き出すと、白い龍がデユカリオンの方へと放たれる。しかし、デユカリオンはその龍を小宇宙を高めている方の手で容易く抑えた。

「！ 私の昇龍覇をあつさり……！」

「青銅聖闘士」ときの攻撃、こちらには効かないということだよ」

デユカリオンはそう言った瞬間、白虎の昇龍覇を投げるかのように跳ね返した。白虎はその跳ね返しをその手で受け止めようと、右手の手のひらを突き出して、その龍へと向けた。

「っ！」

龍の威力や力は、こうして改めて受けてみると、青銅聖闘士の自分からしても十分すぎるぐらいのものであり、むしろこれで人が死なない方がおかしいだろうというものであった。しかし、相手からすればこの程度どうってことがない。白虎はそのことがどうしても悔しく感じられた。そうこう思っているうちにも、白虎が今現在受け止めている白龍は、白虎を徐々に追い詰めていた。白虎は白龍の威力にどうも耐え切れなくなっているらしく、その証拠に、白虎の足が意思に背いてだんだんと後退していることが分かる。

デユカリオンはそんな白虎を見れば、ハツと鼻と息で嘲笑し始めた。

「自分の攻撃の威力すら跳ね返すことができない聖闘士とはお笑い物だなあ。自分の攻撃なのだろう？　なんてダサイ……」

「そ、そんな戯れごっ……ぐうっ！」

相手の、デユカリオンの言う通り、白虎は自分の攻撃を跳ね返せない状態にあった。それどころか、龍の威力はなぜだか増しており、白虎に対して跳ね返しさせない、といっ

た意思を見せているようにも伺えた。

(な、なぜ、龍の威力が……まさか……)

白虎は龍に押されながらも、何かに気が付いたように顔を上げて、デュカリオンの方を見つめた。デュカリオンの先ほど跳ね返していた手からは僅かに小宇宙を感じ取ることができ、同時に、この龍からもデュカリオンと同じような小宇宙を感じ取ることができた。

(そんな……あいつが、この龍の威力を増幅させているというのか!? 他人の技にそんな芸当ができるなんて……!)

「あつ、ぐつ、ああつ!」

白虎がデュカリオンの方へと驚愕の視線を向けているうちに、白虎の龍を押さえる力が弱まっていたのか、そのまま龍によって体を持ち上げられ、そのまま勢いよく吹き飛んだ。デュカリオンはそんな白虎の様子をニヤリと怪しい笑みを浮かべながら見つめ、それを見ていた白虎は吹き飛ばされながらも、鋭く視線を放った。

(……いつ……故意にやっているのか……!)

白虎はそう思いつつも、地面に落ちる前に体を器械運動でもするかのようにクルッと回転させて、そのまま足から着地。その場で跪いた体制をとった後、すぐにデュカリオンの方へとその視線を向けた。デュカリオンは残念そうに眉をハの字に下げた。

「残念だね……せつかく、わざわざ技の威力を増幅させたのに……倒すことすらできなかつたなんて」

「じゃあ、あれはやはり故意かつ……!」

「おや、気付いていたのか。さすが、幾多なる戦いを切り抜いてきただけはあるね」

デュカリオンはほう、と感心したように声を上げた。一方で白虎はふぎけん、といった形相でデュカリオンの方を睨み付けていた。デュカリオンはそんな白虎をクスクスと笑みを浮かべながら見つめ、コツコツとかかとを鳴らしながらゆっくり白虎の方へと歩いた。

「何やら怒っているようだが……その怒り、僕に向けられても困るだけだよ」

「分かっている。ただ……それを故意にやっておいて、バカにしたのが気に食わない」

「ふふ、そうか。まあ、こちらはそういう戦略であるからね。多少ずる賢いのは許してくれるとありがたいかな」

「……自覚していたのか」

相手の言い方は、まるで今のやり方がずる賢いといった言い方で、白虎は相手がそういったことに対して少しばかり驚きを隠せない様子でいた。デュカリオンは「おつ」とついでにやってしまったような顔をして、口の上に自分の手を重ねた。

「こんな無駄話、君にしたところで仕方ない」

ふふ、と笑みを浮かべながら、髪の毛を掻き上げて、改めて白虎と対峙するようにそこに立った。

「さて、龍星座。こういう芸当ができる奴が相手にして、本当に一人で立ち向かうつもりでいるのかい？」

「……当たり前だ。これが、龍星座の白虎としての選択だからな」

白虎は両拳を握りしめ、肘を後ろに引き、そこから小宇宙を一気に燃やし始めた。小宇宙を燃やしたことにより、髪の毛や瞳が炎のようにゆらゆらと揺れる。

「貴様一人……この龍星座の白虎の敵などではない」

「果たして本当にそうなのか……その実力、見せていただこうではないか」

「……上等だアッ！」

その瞬間、白虎のゆっくりと燃えていた小宇宙が激しく、弾けるように燃え始めた。

白虎は相手に狙いを定めて、足を肩幅まで広げ、声を張り上げた。

「響け、私のカンツォーネよ！ 龍飛虎咆——ッ！」

「させるか！」

デュカリオンは白虎が歌うのを阻止しようと白虎の方へと走り始めた。しかし、歌を歌うことにより、小宇宙をさらに高めることができる白虎は、デュカリオンのその阻止を避けようとそこから高く宙に飛び、舞い上がった。

「な、なにいつ?!」

デユカリオンはその高さに驚愕の形相を見せた。その高さは自分の身長は何倍あるのだろうかというところだった。下手をしたら、2倍程度では済まされない高さかもしれない。白虎はニツと口元をキリツと引き上げながら、その口から音楽を放ち始めた。

「さあ、歌を奏でよう、龍の名の下に……」

「くっ!」

デユカリオンは宙に高く舞い上がった白虎に向かって、手のひらから槍をいくつか放ち始めた。だが、白虎はそれをリズムよく、テンポよく移動しながら避ける。

「我が歌は響き合う、虎の叫びと共に」

白虎はそこから体を宙返りして、その体制を整え直し、足の裏の先にデユカリオンがいるようにした。デユカリオンはこちらに足が向けられたことに対して、相も変わらずハッと余裕そうに鼻で笑った。

「僕を蹴ろうというのか! なんて無駄な悪足掻きだ!」

「その虎は烈風となり、宙を舞あああつてえええッ!」

その瞬間、白虎の足の裏とデユカリオンの瞬時に頭を覆った腕が衝突した。デユカリオンはこの攻撃程度、どうということはない、と思っていたものの、白虎の聖衣のヒールは、周りの聖闘士の聖衣とは違い、女性が履くようなハイヒールであり、そのダメー

ジは予想以上のものであった。デユカリオンはその痛みから、ぐつと顔を歪めた。

白虎はデユカリオンが顔を歪ませたのを見るなり、すぐにデユカリオンの腕から自分の足を離し、地面へとその足を着けた。

「龍はその風に身を任せた——……！」

だが、白虎の歌はここで終わつたわけではなく、まだまだこの場に鳴り渡っている。小宇宙がまだまだ高まる、ということとは攻撃が続く合図なようなものだ。白虎はデユカリオンの方へと走り出して、攻撃を仕掛けようと拳を硬く握り出した。

デユカリオンはまだ鳴り渡る白虎の歌声を制止しようと、白虎と同じく、白虎の方へと勢いをつけて走り出した。

「思いを貫く、我が心」

「っ！」

白虎は今度は先ほどのように高くはないものの、デユカリオンの頭上まで舞い上がった。デユカリオンはそれを呆然と見ながらも、すぐに対抗しようと飛び上がろうとするも、その頬には一槌の鉄槌が下された。

「虎のように、こだましてく」

「ぐ、ああっ!？」

「我が命を照らす、カンツオーネよ——ッ！」

気が付けば、デユカリオンの頬には白虎の足が当たっており、デユカリオンはその足によって頬からそのダメージを受けていた。そして、そのまま情けなく、向こう側まで吹き飛ばれたのである。ドシヤツと音を立てながら、デユカリオンはその体を地面へと任せてしまった。

「ぐ、うう……」

(た、たかが青銅聖闘士如きにこんな手間を取らせるなど……！)

デユカリオンは体をガクガクと震わせつつ、白虎の方へとその顔を向けた。白虎はデユカリオンの方を見つめたまま、その肩甲骨まである髪の毛を風に任せていた。そして、白虎の声は小宇宙として、デユカリオンの小宇宙まで届いていた。

(デユカリオン。アンタ、今、たかが青銅聖闘士如きに、とか思っただろう?)

「……っ！」

いつの間に白虎に自分の心の声を聞かれていたのか。デユカリオンは驚愕の表情を漏らしながら、白虎の方を見つめ続けた。白虎は倒れているデユカリオンを見下すかのように見つめながら、デユカリオンの小宇宙に話し続けた。

(確かに私はたかが青銅聖闘士だ。しかも、たかが青銅聖闘士になってやつと半年経つたぐらいだ。そう思われたところで仕方ないと思うしかない)

「……」

(でも……でも、私には……)

「天秤座の聖衣を引き継ぐという立派な使命があるんだ！」

気が付けば、白虎は小宇宙で話していたつもりが、直接声に出してデュカリオンに言っていた。その瞬間、白虎の構えの体制が変わったのは言うまでもなかった。白虎の小宇宙は雄々しく鳴り渡り、それは猛虎の如く。デュカリオンは雄々しく燃え上がる白虎の小宇宙を感じながら、上半身に力を入れて起き上がっていた。

「天秤座の聖衣を……!? バカな！ 青銅聖闘士如きに黄金聖闘士が務まるとでも……」

「なら、その証拠を見せてやろう！」

白虎はそう強く怒鳴りつけるように言い放てば、全身の筋肉に力を入れて、その場で聖衣を脱ぎ出した。その下から出てきたものは、白虎の白い体であった。デュカリオンはつい拍子抜けしてしまったのか、ハッと息で笑って、その白虎の姿を嘲笑った。

「ふん、その証拠に聖衣無しで戦おうというのか！ 随分と馬鹿げたことを……」
「そういうことは、私の背中を見てから言うんだな」

デュカリオンが額に手を当てて、脱いだ白虎を馬鹿げていると高らかに嘲笑っている目の前で、白虎の重い声がのし掛かる。デュカリオンは白虎のその重い声を聞くなりすぐに笑うのを止め、白虎の方へと視線を向けた。白虎はデュカリオンの方へと背中を向

けて、「その証拠」であるものを見せつけた。

「——なっ……ここ、これは……」

デユカリオンは驚きから言葉を詰まらせた。白虎はデユカリオンを睨み付けるように尻目で見つめながら、その背中に浮かび上がる中国の四神の白虎を描き出しているの「紋」を見せつけていた。

「背中に浮かび上がっているこの紋こそが、私が天秤座の正統後継者という証だ。いつも背中の中の虎ちゃんとか言って可愛がっているけれど、実態は非常に重要なもの。そして、この紋に恥じぬような戦いをするのが、私の今の役目」

「恥じぬ戦い？　今まで散々恥を晒してきたくせにか？」

「——そうだな。でも……本人が恥と思わなければ、それは恥ではないっ！」

瞬間、白虎の小宇宙が爆発するかのように燃え上がった。その様子は、龍星座の幾多なる星が瞬くようだった。白虎は目を閉じて、片腕を上げ、もう片腕を股間辺りまで下げた。

（老師——貴方から授かったもの、ここですべて放出いたします！）

白虎の目がカッと光を放つように開かれたのはその瞬間だった。白虎は目が開くと同時にデユカリオンに向かって、その両手を伸ばし、叫んだ。

「廬山、百龍覇アアアアア——ツツツ!!!」

白虎の両手からデュカリオンに向かって放たれたのは、幾多なる龍の数々だった。その龍は煌めく星のごとく、デュカリオンの体へと突進した。白虎は百龍覇の強大な威力によるその反動からか、僅かながら足を摩擦させつつ後退させた。

デュカリオンは百龍覇の威力を耐え切ろうと最初は足に体重をかけて踏ん張りを効かせた。しかし、百龍覇の威力というのはその程度で抑え切れるものではなく、その踏ん張りもすぐに限界を見せた。

「ぐあああああ——ツツ!!!」

デュカリオンは限界を見せるなり、そのまま龍たちに連れ去られるように宙を舞った。

(く、くそっ！ まさかここまでとは……！)

デュカリオンはそこまで思えば、その時点で頭から強く地面に激突。それによって出てきた血は相当な量で、倒れたデュカリオンの周りをあつという間に真っ赤に染め上げてしまっていた。白虎は体力の消費によって出てきていた汗を拭いながら、倒れたデュカリオンを前に呟くように言い放った。

「たかが、天闘士か……」

たかが青銅聖闘士だと言い放ったデュカリオンに対して返そうと思っていた言葉である。白虎はその言葉だけを言い放てば、デュカリオンと共に行動していた他の天闘士

二人の方へと視線を向けた。そのうちの一人である仮面の青年が、こちらを見てくる白虎へと歩み寄った。青年は白虎のことを仮面越しに睨み付けているように伺えた。

仮面の天闘士は白虎の方へとその歩みを寄せるなり、白虎と対峙する位置に立った。白虎はニツと白い八重歯を見せて、笑みを浮かべた。

「今度はアンタさんが私の相手になるのか？」

「……」

仮面の天闘士は、白虎に対して言葉では対応しようとしなかった。しかし、その天闘士が燃やしている小宇宙は白虎に対する敵意があつたのである。白虎はその小宇宙からすべてを察したように、一歩前に出て、天闘士の方へと歩み寄った。

「……上等だ。ここでお前をぶちのめしてくれよう！」

白虎はそう思い切つて空に打ち付けるように言い放てば、そこにはないマントを翻すように片腕を伸ばし、相手に対抗して小宇宙を燃やし始めた。

（先ほどのデユカリオンのように、ちゃちゃつと片付けられれば……っ?!）

天闘士は速かった。そこらへんにいる聖闘士なんかより、断然速かった。その姿、天翔る天馬の如し、だ。気が付けば、天闘士は白虎の後ろへとおり、その目の前にある背中を蹴り上げようとしていた。そのことにすぐ気が付いた白虎は、すぐに後ろを振り向いて、天闘士の攻撃を防ごうと右腕の盾を向け、寸でのところで相手からの蹴りを防ぐ

ことができた。その時の音は、盾が修復で強化されていなければすぐに壊されていたであろう、非常に鋭くも思い音だった。逆に言えば、それほどに向こうの蹴りというのは強力なものなのだろう。

白虎は相手の足を強制的に下ろすように盾を下ろそうとすれば、天闘士はすぐに盾から自分の足を下ろして、その足を地に着けた。白虎はそんな天闘士の様子を見つめながら、ジリツと足を後ろの方へと踏み込んだ。

(コイツ……デュカリオンなんか塵以下になるぐらい強い……い)

相手の天闘士の素早さやその蹴りの破壊力、そして、小宇宙の大きさは、尋常のものではなかった。デュカリオンが1とすれば、この天闘士は100であろう。そのぐらい、この天闘士から強さを感じ取ることができた。

「イカロス……」

仮面の青年の後方にいた、無表情が特徴的な青年・カトレウスは驚いたように、ポツリと青年の名前を呼んだ。どうやら、仮面の青年・イカロスがこうして自ら戦いに入ることを珍しがっているようだった。白虎はそのことをカトレウスから察するなり、「フン」と鼻を鳴らし、イカロスの方へとその笑みを浮かべた。

「なるほどなあ……。まあ、さっきのデュカリオンがガツカリだった分、アンタとの戦いは楽しめそうやけどな」

白虎の口調が時代かかったものから、いつもの関西弁の訛りが入ったものになっていた。自分がいつもの自分になるぐらい、仮面の天闘士と戦うことが楽しみになった、ということだ。

イカロスは仮面の下から白虎の方を凝視し、白虎もまた、そんなイカロスを凝視した。そして、互いに片足を後ろへと引き、相手に狙いを定め——拳を突き出した。

「だあっ！——」

二人の拳がそうして激突し合った瞬間、その衝動によって激しく風が舞い上がり、見ていたカトレウスは吹き飛ばされそうになった。その上、目も開けていられないほどの暴風だった。カトレウスはそんな暴風の中、何とか目を開いて、二人の戦いを見守っていた。

白虎とイカロスは互いの拳を押し合うように力を入れつつも、その腕をプルプルと震わせていた。やはり、互いの力と小宇宙はほぼ同等ということなのか。白虎とイカロスは額に汗を垂らしながら、この時点でそのことを察し、互いの拳を離れた。

「つとー！……」

二人はその離れた勢いにより、足が摩擦し、砂煙を立てつつ、後ろの方へと体が動いた。その距離、センチ単位ではなく、メートル単位といったところか。白虎はその距離の大きさに驚きつつも、再びイカロスの方へ、ジッと視線を向けた。

(イカロスつつたか、コイツ……何となく、どこかで感じたことがある小宇宙や……)

そう、白虎はイカロスの小宇宙から、どこか既視感のようなものを覚え、心の中が落ち着かないのである。本当に何となくだが、白虎にとつて身近な誰かの小宇宙にイカロスの小宇宙が似ていたのである。だが、本当に何となく程度に似ているので、一体誰の小宇宙と似ているのか、なかなか思い出すことができなかつた。

(それに……他の二人とは違って、人間だとデュカリオンは言っていたけど……)

そう、白虎はそこにもどうも引つかかつていた。デュカリオンはイカロスだけ訳があつて人間だと説明してくれた。では、なぜ、イカロスは人間なのに天闘士としてこうして自分の目の前に立ちただかつているのか。本当にイカロスに関しては謎が多く、分からないことだらけであつた。

(でも……気にしたら、アカンのやろうな。いや……深く追求していったら後悔する気がするのはいのせいのだろうか……)

白虎はイカロスのさまざまな点を気になり出した途端、胸のざわつきが奥の方から突き上げるように巻き起こつたのである。白虎はそんな自分の心臓を抑えるように、胸を強く搦んだ。これ以上イカロスのことを深く追つていったら白虎となぜかイカロス、互いに心に傷を負いかねない気がして仕方がない。もつといえ、このイカロスとは戦いたくなかつた。

(でも……ここぞ戦わなきゃ……その理由さえも分からない！)

白虎はカッと目を見開き、そこから一歩走り出した。

「だあああああ——ッ！」

イカロスに向かって拳を突き放とうと、白虎は体の横に拳を携えていた。だが、イカロスからすれば、その拳というのは痛くも痒くもないのであろう。白虎が拳をイカロスに当てようとした瞬間、イカロスはその拳を軽々と片手の手のひらで抑えてしまった。しかしながら、白虎からすれば、このぐらいは計算のうちだった。

(このぐらいい、想定内だッ！)

白虎は抑えられた拳を軸にし、そこから下半身をフワッと跳ね上げて逆立ちした。逆立ちしたところからバク転をするかのように、足をイカロスの頭上からその後方へと出し、その際に同時にイカロスの手から自分の拳を離れた。そして、上半身も宙に起こして、片足を曲げ、イカロスに近いもう片足を、相手の首の方へと当てた。そこから、白虎は跪くように片膝を地面に置き、着地。これだけでも、0コンマ5秒である。聖闘士だからこそでできる早技といったところだ。

イカロスは首に足を当てられ、一瞬間のめりになって、地面へと突っ伏しかけたものの、何とか堪えたのか、すぐにその体制を整え直し、後ろにいる白虎の方へと顔を向けた。そこに膝をついている白虎の髪の毛が、フワリと風に揺れた。白虎はすつくと立ち

上がり、イカロスの方へとその顔を向けた。そこで、再び白虎とイカロスに向かつて風が吹かれた。

(そうか……なるほど……この小宇宙の既視感のこと、分かりたくはなかった……けど) 白虎の母親譲りの女性のような顔立ちは、相手のすべてを察したように見受けられた。しかし、まだ、それが確信ではないことも確かでもあり、白虎は腕を組み、そこに仁王立ちになった。

「アンタ、イカロス、と言ったか」

「……」

白虎の口調に時代がかかる。白虎は何も答えないイカロスに対して、フツと笑みを浮かべ、ドンと言い放った。

「イカロス……アンタの渾身の必殺技を私に撃ってみろ」

「！」

「アンタのこと……まだ、完全に見極めていないからな」

「……」

イカロスはそう言われると、ピタツと別人のように動きが止まった。何もしてこないであろう相手に対して必殺技を放つか放たまいか、迷いを見せているのだろう。白虎はそんなイカロスの戸惑いに、顔を若干ながら歪ませ、さらなる不安を抱いた。遠慮なく

放つてくれないと、こちらとしてもその疑いがハッキリというものだ。白虎としては、その疑いが晴れてほしいわけなのだが、こうなるとさらに疑心暗鬼気味になる。

イカロスはしばらく迷いを見せたのち、ギユツと拳を握り締めて、白虎の方へと視線を向けた。

「……」

(来るか……！)

白虎が心の中で構え出した途端、イカロスはスツと両腕を上げ、そこから見覚えのある腕の動きをし始めた。それで描いているのは、とある星座の13星の軌跡。白虎はそれを見た瞬間、驚きから、思わず目を見開いて、その場で固まってしまった。

(嘘だ……私の予想が当たって……)

その瞬間、白虎の元へと放たれたのは幾多なる拳——流星だった。

「ぐっ!? ううっ!」

白虎はあくまでも仁王立ちの体制を崩さないように、相手からの流星の拳を浴びた。だが、威力が威力ゆえか、このままでは吹き飛ばされることも必至。白虎は後退している足元に力を踏み入れながら、目を凝らして相手の方を見つめた。

(やはり、イカロスは「アイツ」だ……信じたくはないけど……でも……！)

白虎の読みは、やはり当たっていたのだ。白虎からすれば、それは信じがたい事実で

あつたが、しかしながら、これが現実なのだ、受け入れるしかなかった。

「——はあっ！」

「っ！」

(この声……もう、やめて……！)

初めて聞いたイカロスの声。しかし、白虎にとってはこの声は初めて聞いたものではなく、むしろ聞き慣れたものだった。この場において現実逃避しようなどと、自分らしくない。しかし、白虎にとってはそのぐらいの衝撃だったのである。

衝撃を受けている間にも、白虎はその流星によつて向こうまで吹き飛ばされた。

「ぐあああああ——ツツ!!!」

体の側面から強く打ち、白虎はそのまま地面へとトランポリンのように突っ伏した。その衝撃は非常に強いもので、打ったところには、尋常ではない激痛が走った。

「ふ、ぐう……」

白虎が悶え苦しんでいる間ですら、イカロスはその鉄槌を下すことをやめようとはしなかった。イカロスは白虎の方へと歩み寄れば、フウと息を漏らしながら、再び拳を握りしめた。それが天に向かって掲げられるなり、白虎はその影をその身に受けながら、一瞬だけ諦め掛けていた。

(ダメだ……このままじゃ……)

イカロスが白虎に向かって拳を振り下ろそうとし、白虎もまた、それによるダメージを最小限にしようとして体を締め込めた時であった。

「っ！」

白虎の目の前に、イカロスとは別の影が一つ見えたのである。その影は、白虎にとっては見慣れたものであり、かつ、この三日間は全く見ていなかったものだった。白虎はその影を受けながら、その姿の名前をポツリと言い放った。

「圭、くん……」

54：「もう、何失わぬと誓った」

「圭くん……どう、して……」

白虎は目の前にいる人物を見るなり、小さい声でボソボソと呟くようにそう言えば、ただ、黙って相手の方を見つめていた。なぜ圭熊がここに来たのか、そしてどうして自分を助けたのか、さっぱり分からなかった。

圭熊はコキコキと片手で指やら手やらの骨を鳴らしながら、ブラウン色に輝く大熊星座の聖衣を太陽の光に照らし、イカロスの拳をもう片方の手で抑えていた。一方のイカロスは突然の圭熊に驚きを隠せないでいる様子で、圭熊に攻撃を封じられるなり、すぐにその拳を引いた。

イカロスが圭熊から拳を引くなり、圭熊はイカロスの方から白虎の方へと視線をピツタリとシフト。白虎はそんな圭熊と目を合わせ、その姿をただ、呆然としながら見据えていた。圭熊はこちらを座ったまま見つめている白虎の頭の頂点に向かって、一発ゲンコツを食らわせた。

「あだあつー」

白虎はゲンコツを食らわせられたところを両手で抑えながら、その痛みからうつすら

の目の上に涙を浮かべ、圭熊の方をキツと鋭く睨み付けた。圭熊はそんな白虎に対して、呆れたような表情を浮かべながら、白虎と視線を合わせるかのようにながみ込んだ。

「お前、本当に一人でこいつらと戦ってんのなあ……しかも一人倒しちゃってるし」

「わ、悪いか！ それに、もつと苦戦していると思つてたら大間違いだ！」

ため息を漏らしている圭熊の目の前で、白虎は若干機嫌を悪くしたかのように、むすつとむくれた。圭熊は思わずクスクスと笑みを浮かべながら、白虎にさらに言い放つた。

「まあ、そうだな。この三日間狂気の如く特訓したお前がそんな簡単に苦戦を強いられるはずもねえよな」

「な、何で、それを……」

圭熊とは三日間顔を合わせず、言葉も交わさずだったのに、なぜ自分のこの三日間の過ごし方を知っているのか。疑心な表情をそこに見せている白虎に対し、圭熊はほほ笑みを浮かべながら、コクンと首を縦に振った。

「教皇から……お前んトコの師匠から聞いたんだよ。腕から血を流しながら特訓して、強さを求めているお前の姿を見ていたってな」

「……」

「俺も兄ちゃんもこの三日間、特訓重ねてたけどさ……そんな、自分の身体や周りに構わず特訓するほど、俺らの存在は重要じゃなかったのか？ 確かに強さを求めて特訓する心意気は分からんでもねえよ。でもさ……だからって顔を合わせないぐらいに、んで、あまつさえ兄ちゃんさえも突っぱねるぐらいに、孤独になつて特訓する必要なんかないだろ」

「でも……」

「まあ、もつとはつきり言っちゃうとな……」

圭熊は白虎の額を左手の人差し指で、ツンと軽く突いて、今までより若干低めの声で言い放った。

「お前には俺らをもつと頼つて欲しいわけよ。ポセイドンの時だつてそうだけど、こうして形振り構わず一人で立ち向かおうとするのはやめろ。俺が言いたいのはそれだけだよ」

「……………」

白虎の目から、つうと水滴が一滴だけ零れ、それが地面へと落ちた。そこから、白虎の視界が歪み、圭熊がはつきりと輪郭で捉えられなくなっていた。白虎は自分が泣いていることに気が付けば、そこから顔を地面の方へと向け、しゃくり上げながら圭熊の方へ言い放った。

「でもっ……でも、私情で……私情で自分の命が危ないって時に……周りを頼りたくない。それで巻き添えで圭くんや水鹿が……私の大切な人がみんな死んだら……嫌だっ……！」

圭熊はそんな白虎の考えに反論することも、同調することもなく、ただ、黙って白虎の話聞いていた。白虎はボロボロと溢れ出てくる涙をその手首で拭い取りながら、続けた。

「もうっ……もう、何も失わぬと誓ったんだ。自分のせいで……自分のせいで、これ以上人を失いたくない……！」

そんな白虎の脳裡には、両親を失ったあの日のことが鮮明に蘇っていた。自分を大切にしたいせいで、祖父母に奪われた両親の命。白虎はあの時のようにもう、誰も失いたくないと心の中で強く決めていた。しかし、そんな白虎に反して、圭熊は爽やかに言い放った。

「でもな、お前が一人で抱え込む必要はないんだって。何もかも自分一人で悩み込んで、それで結果的にお前したこと失ったら、それこそ元の子もないんだよ」

「でもっ……でもっ……！」

「確かに俺らは所詮はただの他人同士だよ。友人なんて、その他人同士の中で生み出された称号にしか過ぎないかもしれない。でも、そんな称号があるこそ、安心して背中を

預けるってこともできるだろ？ お前からしたらその称号ごときに安心を求めらるってのがおかしいこともしないけど、俺らからしたらそういうもんなんだよ」

「……」

「なあ、白虎。お前にとつて、俺らはお前の力になれないほど頼りないか？ それとも、軟弱そうに見えるか？」

「……」

白虎は圭熊に問われ、ブンブンと首を横に振って、そうは見えないと否定した。白虎にとつての友人という存在は、やはりただの他人にしか過ぎないといったものではなかったのだ。圭熊はそんな白虎の否定に安心したのか、フツと柔らかく笑みを浮かべながら、そこに立ち上がった。

「なら、ここから先は俺らに任せてくれよ。俺らだって、この三日間、黙っていたわけじゃねえしな」

「……で、でも」

「んだよ。遠慮すんなって。俺らはお前のために巻き込まれようがなんだろうが、自分で決めたことなら、死んだって構わない。そんな奴らなんだよ」

「……」

白虎は何か気が付いたように、ハッと目を見開いた。白虎から何か憑き物が落ちた

みたいで、改めて真つ正面から圭熊の顔を見つめていた。

圭熊はこうして真つ正面から自分に向かつてぶつかってきたくれているのに、自分はそれを振り払って、自分の考えを盲信し、一人で突き進んだ。だが、それが正しいかといったら、大きな間違いであろう。自分はポセイドンとの戦い時に学んだはずだ。「友情は友の力にも影響する大きな戦力である」と。白虎はそう学んだはずだったのに、勝手に一人で突き進もうとしていた。

自分の軽率さ、身勝手さ、そして独りよがりさ——白虎は自分の何もかもに後悔を覚え始めていた。

(なんて……なんて愚かだったんだろう……ちよつと前に学んだことを、こうして忘れてしまうなんて……。いや、愚かとかそういう問題じゃない……私は……)

白虎は溢れ出ていた涙を強制的に止めるように、目を一層強くゴシゴシと擦った。そして、前を見て、圭熊の方を強く見つめながら、スツとその場から立ち上がった。圭熊は白虎が立ち上がったのを見るなり、微笑みを浮かべながら白虎と向き合った。白虎は圭熊の微笑みを見ながら、自分がどれだけ友に恵まれた環境か実感した。

白虎はまだ涙が乾き切っていない顔で、ニコリと笑みを浮かべて、圭熊に言い放った。「圭くん……ごめんね。今まで自分の都合や事情ばかりで、他人に頼りたくないって思ってたけど……逆にそれが迷惑だったなんて思ってもみなかった。一人ですべてを

背負うこそが、周りへの迷惑を最小限に抑えることだとばかり思ってたから。でも……圭くんその話を聞いてさ、その考えも間違いだっただって、思えてきた。皆を頼っても……いいんだよね」

「おうよっ!」

圭熊は白虎の言葉に、ニツと少年らしい歯を見せた笑みを浮かべて、首を縦に振って、しつかりと張った声で返事をした。

「誰もお前の代わりにはなれない。けど、お前の辛さを一緒になって背負うことはできる。だって、俺らはそういう仲間だからさ」

「……そうだね」

白虎はくすくすと笑みを浮かべ、圭熊は口元を引き締めつつ、笑みを浮かべていた。二人の間にいつものような笑顔が戻った瞬間だった。

「さて、と」

二人が互いの仲が回復したのを実感すれば、すぐに圭熊の後ろにいるその天闘士へと視線を移動させた。その天闘士——イカロスは二人を見つめたまま、ジツと黙って動かなかった。ご丁寧にも、イカロスは二人の話が終わるまで、あえて手を出さなかったのである。

圭熊はそれだけ察すると、フン、と鼻で笑みを浮かべながら、イカロスに向かって一

歩近付き、言い放った。

「手を出す隙はいくらでもあったのに、俺と白虎の話が終わるまで待つててくれたなんて、なんて律儀なんだよ、お前」

「……」

「まあ、それだけは感謝するよ。正直、いつ攻撃されるかビクビクだったけど、ちゃんと最後まで話すことができたからな」

圭熊はイカロスと対峙し、向き合った。その瞬間、風が吹き、二人の髪の毛をゆらゆらと揺らした。圭熊は風が吹き終えるなり、ピシッと右手の人差し指で、イカロスの方を指した。

「そんなわけで、ここからのお前の相手は俺がする。白虎はまだやれそうな様子だけど……友の辛さを背負うって決めた以上、俺も戦わなきゃならん」

「圭くんっ……」

そこまで圭熊が言うと、白虎が圭熊の名前を口にしながら、圭熊の肩をぼんつと叩き掴んでみせた。その顔は重要なことを言いたげな様子だった。圭熊はそんな白虎の方へと顔を振り向かせるなり、フツと優しく笑みを浮かべて、白虎の手をそつと掴み、自分の肩から離した。

「大丈夫だって。そんな心配しなくても、俺は絶対に勝つからさ」

「違うッ！ そうじゃないッ！」

「そんな必死になって引き止めなくても……ぐおうっ!？」

圭熊は突然白虎に胸ぐらを掴まれ引つ張られて、間髪入れず変な声を上げた。白虎は話を聞け、といった様子で圭熊を睨み付けるように見つめていた。圭熊はそんな白虎の睨み付けに対して思わず圧巻されてしまったのか、つい、黙り込んでしまった。白虎は、圭熊が黙り込むなり、首を縦に振って、ボソボソと話し始めた。

「あの天闘士……イカロスは、多分、私たちの知り合いだと思う」

「!? 知り合い!？」

圭熊は引つ張られながらも、イカロスの方へと顔を向けて、その姿を確認した。イカロスの顔は仮面に覆われており、なかなか見えなかった。一体何をして知り合いだと言っているのか圭熊はさっぱり分からなかったが、圭熊は白虎の話信じ、白虎の方へと顔を向き直して聞き続けた。

「イカロスの小宇宙の既視感と、攻撃の仕方。そして、少ししか発せられない声。多分、圭くんだったら、小宇宙の既視感だけでも誰だか察しだけはつくはず」

「っ……」

（マジかよ……）

圭熊はイカロスのあの特徴的な姿を想像しながら、昨日、天闘士のうちの一人が言っ

ていたことを思い出していた。

『——こいつだけ色々あって、人間ってわけなんだけどね』

(……だとしたら、白虎の読みもそれなりに当たつちまいそうだな。何より証拠も十分出揃ってるし……でも、一体誰なんだ、コイツは)

圭熊はこちらを掴んでくる白虎の手を離すなり、ザツと白虎の一步前に出て、イカロスの方を見つめた。イカロスと圭熊は互いが敵同士だと察した瞬間、その小宇宙を燃え上がらせた。

その間にも、一人取り残された天闘士・カトレウスは白虎の方を見つめながら、そちらの方へと歩み寄り、呟くように相手の方へと言い放った。

「龍星座。消去法で自分が相手になるが……よろしいか」

「……ああ、構わない」

白虎とカトレウスはそこに対峙すれば、イカロスと圭熊のように小宇宙を燃やし始めた——のだが。

「お前の相手はオレがする」

その声とともに白虎の背後から現れた人物の姿があつた。白虎とカトレウスはその声がする方向へと顔を向けた。その二人の視線の先にいたのは、若干紫みがかかった聖衣をまとい、方まで伸びている藍色の髪の毛を揺らしている人物の姿——杯座の水鹿の

姿だった。

白虎はその友人の姿を見るなり、なぜここにいると言わんばかりの表情をしながら、相手に向かつて声を張り上げた。

「水鹿!?! な、なんでここに!?!」

驚きの様子を見せてくる白虎に対し、水鹿はコクンと首を縦に振って、カトレウスの方へとその瞳を向けた。水鹿はカトレウスのことを目を細め、じつと見据えるなり、白虎の一步前に歩み出て、それから白虎の方へと言い放った。

「白虎、お前はアテナのところへ行つてこい」

「!?! で、でも……!?!」

白虎は水鹿にそう言われるなり、すぐに圭熊と水鹿の方を交互に見つめた。白虎としては、二人を置いてどこかへ行くという真似はしたくないのであろう。確かに二人は強いが、それ以上に自分だけ楽をしたくない、という気持ちが強かった。だが、水鹿は白虎の両肩をガシツと掴んで、その顔を見つめて離そうとはしなかった。白虎はそれに迫力されて、次に出そうと思っていた言葉を喉の奥の方へと押し込んだ。

水鹿は白虎が何も言わなくなるなり、言い放った。

「白虎。オレはお前が殺されるとかどうとか、事情はよく掴めてはならない。でも、アテナに言えば、なにか助けになってくれるかもしれないぞ」

「そ、そうなのかな……」

白虎はこれだけはアテナに相談しようとも思ってもみななかった。確かに自分はアテナに気に入られている自覚はあるものの、ただそれだけであろう。自分一人の命ぐらい、アテナからすればほんのミクロもないはずだ。だから、今の水鹿の提案にはなかなか賛同できないところがあつた。神が人間一人を助けるために苦勞するなど、あつてはならないこと。しかし、水鹿はにこりと優しく笑みを浮かべながら、白虎に言い放つた。

「ああ、そうさ。アテナであれば、お前のことを助けてくれるに違いない」

「水鹿……」

「それに、見る限り向こう側の関係者から狙われているからな。どんな結果であれ、アテナに相談するのは間違いではないはずだ」

「……い、そ、そっか……い」

それもそうだ、と白虎は納得した。確かに自分の命はオリュンポス12神の一部から狙われている。アテナはそのオリュンポス12神の関係者でもある。助けてくれなくとも、多少のヒントや事情は教えてくれるはずだ。

白虎はそのことをすべて察し、水鹿の考えを受け取ると、コクンと首を縦に振って、水鹿の側から一歩引いた。

「とりあえず、アテナの元へ行って、事情を話して……それから、これからのことを考えればいい。そういうことか？」

「……ああ、そういうことさ」

白虎の答えであり質問に対して、水鹿はコクンと頷いて、その通りだ、といった考えを見せた。白虎は水鹿が頷くなり、フツと笑みを浮かべ、そのまま背を向けた。そして、圭熊と水鹿に向かって吐き捨てた。

「……武運を祈るぞッ！」

白虎はそこから地面を蹴り上げるように走り出した。カトレウスとイカロスは走り出した白虎目掛けて、その足を向けようとしたが、それもすぐに聖闘士たちの手によって阻まれた。イカロスは圭熊に先に抜かされ、カトレウスにいたっては水鹿のダイヤモンドチェーンに捕まってしまい、そこから動くことすらまならなかった。

カトレウスはこちらを縛ってくる水鹿を見つめながら、そのダイヤモンドチェーンに手をかけ、ピンツと伸ばせるまで伸ばした。そして、手を立てて、そのまま手を振り落とし、手刀でそのダイヤモンドチェーンを粉々に砕いてみせた。砕かれたダイヤモンドチェーンは、パラパラと地面に落ち、キラキラとした氷の雫となった。

「……あの仮面の天闘士は相当な実力と見受けられるが……お前のさんの方も結構な実力を持っているようだな。ダイヤモンドチェーンを手刀一つで砕くなんて、黄金聖闘士

じやなきや無理だ」

水鹿はダイヤモンドチェーンが砕かれるなりそう言えば、パラパラと砕かれたその破片を出て払い落としながらカトレウスの方へとその顔と目を向けた。カトレウスは手から氷の雫を地面に落としながら、水鹿に向かってボソリと呟いた。

「天闘士の生まれ持つてした力はとても強力。だから、この程度は普通」

「そうか……天闘士とは力や小宇宙の時点で物騒なモンなんだな」

水鹿はカトレウスから話を聞くなり、ぽりぽりと頭を掻いて苦笑した。しかし、そういうことであれば、水鹿の相手としては不足なし。遠慮なく存分に戦えるであろう。最も、白虎はそんな強い天闘士を一人倒してしまっている。ゆえに、もしかしたら、というところもあるかもしれないが。

「さて、お前さんはカトレウスといったか。どれほどの実力か……見せてもらおうか」

「上等。黄金聖闘士並の力がどうかこうとか知らないけど、勝つのは自分」

二人は互いに向かってそう言い放った途端、その小宇宙がその場を燃やすかのように一気に燃え上がった。黄金聖闘士並の力を持った者同士がぶつかる、ということはこういうことなのであろう。

圭熊はそんな二人の小宇宙をその身で感じながら圧倒されていた。

「す、すげえ……」

(この域まで達することができるのは兄ちゃんだからこそ、なんだろうな。俺にはまだまだ辿り着ける気がしない)

水鹿に関しては、素直に感心するし、素直に尊敬してしまう。そして、圭熊はそんな人物を自分たちの味方に持つことができ、非常に心強く思える。だからこそ、こうして安心してイカロスを目の前に戦えるというものだ。

圭熊は自分の目の前に立っている仮面の天闘士を見つめながら、再びその小宇宙を燃やし始めた。戦おうとしたところを白虎に止められてしまったせいで、圭熊の体がうずうずとして止まらなかった。それはイカロスも同じようで、その小宇宙は圭熊のようにこれからの戦いを楽しみに行っているものだった。圭熊はそれをイカロスの小宇宙から察すると、ニツと笑みを浮かべながら、イカロスに向かって言い放った。

「じゃあ、楽しく戦おうじゃねーか、イカロスさんよ！」

「……っはあー！」

白虎は十二宮の目の前まで来れば、今まで消費した体力を取り戻すかのように、そこで一旦立ち止まった。相当全力で走ったゆえ、息切れが若干起こっていた。白虎はハアハアと肩を上下に動かしながら、足を開き構え、その膝に自分の手を置いて中腰になり、汗を地面に垂らしながら白羊宮へと続く階段を見た。

(……そういえば、天秤宮にはアオイデーさんから授かった剣、REID-DAMOCLE
ESがあつたはず……よし)

「つ、だあつ!」

白虎はグツと視線に力を入れると、そこから一気に走り出した。階段を駆け抜け、十二宮の中を突つ切るように、まっすぐに一直線に走っていく。白虎はただ、ひたすら夢中になって白羊宮の中心を駆け走っていた。

「ダイヤモンドダスト!」

「……!」

水鹿が突き放った拳から、非常に冷たい氷の塵がぐるぐると旋回しながら放たれた。その氷の塵が放たれるなり、放たれたカトレウスは、少し驚きながらも、ひよいっと体を軽々しく跳ね上げて、それを避けてみせた。避けられた水鹿は「くつ」と歯で舌打ちしながら、次の攻撃体制へと入った。

カトレウスは足を地に着けてから、体を構えさせ、水鹿の方へとその腕を伸ばし、手を向けた。水鹿はそんなカトレウスの姿を見るなり、カトレウスに向かって笑みを浮かべながら言い放った。

「その体制、一体何をするつもりだ?」

「……自分のターン、行こうかかって」

そう言うと、カトレウスは足元から後ろに向かつて続いている地面が突然唸り上げ、ボコボコと浮き上がった。水鹿はそれを見た途端、一本本当何をするつもりなんだ、といった様子で睨みを利かせながら、早急に小宇宙を燃やし、凍気を貯め始めた。カトレウスの方は、いつもの無表情の中に、熱情という熱い心を持ち合わせ、その浮き上がった地面を分裂させて、そこから幾多にもなる矢を作った。

「土の矢……!?!」

「……そう、これが自分のできること。杯座。お前にこの土の矢を、刺してやろう」

そう言うと、カトレウスは水鹿へと狙いを定めてから、その土の矢を水鹿の方へと何発も同時に放った。水鹿も水鹿で丁度攻撃できるぐらいには準備はできていたのか、放たれた途端、こちらも氷の槍で、相手のその土の矢に対抗した。

「氷槍、百蓮華——ツツ!!!!」

カトレウスの方に向かって、氷の槍が何発も放たれた。その氷の槍はこちらに襲ってくる土の矢を次々と壊しながら、カトレウスの方へ一直線にまっすぐな線を作り、襲いかかった。しかし、カトレウスは土の矢が氷の槍に敵わないと悟った瞬間、手を大きく上げ、自分の周りに小宇宙で作ったバリアーを張った。すると、そのバリアーに当たった氷の槍は、すべて水となって蒸発し、溶かされていった。

水鹿は自分の放った氷の槍が溶かされる場面を見ながら、両拳を体の横で握り、「くっ」と歯を強く噛み、悔しそうな様子でカトレウスの方へと視線を向けていた。カトレウスは何にも関心を持たない瞳で、氷の槍が溶かされるその様子を見つめていた。そして水鹿の方へと視線を向けて、その瞳を鋭く光らせ、見据えた。

「なるほど……凍気使い……」

「……」

こちらを吟味するようにつめてくるカトレウスに対して、水鹿は少しばかり顔をしかめ、睨みを利かせた。カトレウスは睨まれるなり、「ふう」と息を漏らして、水鹿の方へと言を発した。

「自然のものを武器として使えるという点では自分と同じ……つまるところ、互いにはぼ対等に立っている……だが、そちらとこちらでは、やることが全く違う……」

「……どういうことだ？」

カトレウスの言っている意味が、分かるようで分からないのか、水鹿は首を傾げながらカトレウスの話を聞いていた。カトレウスは氷の槍がもう放たれないと察するなり、作っていたバリアーをすぐに引つ込めた。

「土は………氷に比べてとても柔らかく、そして、とても弄りやすいということ」

カトレウスがそう言い放った瞬間、カトレウスは全身の小宇宙を足元に広がる大地へ

と広め始めた。水鹿はその小宇宙がこちらまで広まり渡っていることが分かるなり、すぐに地面とカトレウスを交互に見つめた。カトレウスは今まで無表情で、変化がなかった口元を、フツと緩めて、小宇宙を広まり渡らせた地面をいじるかのように、指や手を動かし始めた。そして、そのカトレウスの動きと同時に、地面がグラグラと揺れ始めた。「な、なんだっ!?!」

水鹿は突然の地面の揺れに驚愕の表情を見せながら、カトレウスの方への視線は外さなかつた。カトレウスは「フン」と鼻で笑みを浮かべながら、右手をゆつくりと肩の位置まで上げ、親指と中指でパチンと指を鳴らした。瞬間、地面は水鹿とカトレウスを中心に一気に隆起し、盛り上がった。そこから、カトレウスと水鹿の足元の地面がそこだけ取り除かれるかのように天高く伸びた。

水鹿は最初、その激しい揺れようにバランスを崩し、戦う前から死ぬのではないのかといった不安に襲われたものの、全くそのようなことはなく、少しばかり安堵した。カトレウスは両腕組み、水鹿に対峙するようにそこに仁王立ちしながら、目線の下にある地上を見つめ、ふ、と目を閉じた。

「……土は氷のように固くはなく、脆い。弄りやすくとも、とても脆い」

そう言うのと、カトレウスは閉じていた目をスツと開け、目の前で呆然としている水鹿の方へと視線を向け、その身に風を受けながら、切なげな笑みを浮かべた。水鹿はそん

なカトレウスをきよとん、とした瞳で見つめていた。

カトレウスはコクンと首を縦に振り、水鹿の方へと話を向けた。

「杯座……杯座の水鹿。わざわざこのように自分たちだけ、戦場を隔離したのにはちゃんと意味がある。ちゃんと……ちゃんと伝えねばならぬこと、ちゃんと自らの口から言わねばならぬこと……たくさんある」

「カトレウス……お前は……」

「……自分はただのしががない墮天使。この戦いは自分が天闘士に戻るためのものに過ぎない。けれど、先ほどのイカロスを見て、思うことはたくさんある。このまま墮天使のままでもいいと。だから、イカロスのこと、話したい」

「イカロス……の、こと？」

イカロス、といえ、その名前には聞き覚えはないが、今現在の圭熊が戦っている仮面の青年のことであると、なんとなく察することができた。そして、そんなイカロスのことを自分に話すということは一体なぜだろうか。確か、イカロスは人間だということ。誰かから聞いた気がするのだが、それと関係があるだろうか。

カトレウスは、自分の足元の地面と同時に浮き上がっている土の塊を手に取り、それを一瞬だけ光らせて、土人形へと変えた。水鹿はそれを見ながら、カトレウスの方へと耳を傾けた。

「もう、何も失わぬと誓ったと自分に話してくれたイカロス——でも、イカロスはその失いたくない人物を自ら殺しに来ているといえよう。自分は、その時の表情が忘れられない」

「……自ら、殺しに?」

カトレウスはコクン、と頷いてから、手にしている土人形をボゴボゴと自分のほぼ同じ目線のところで握り潰した。その握り潰し方にはさまざまな後悔や複雑な感情が入り混じっているように伺えた。カトレウスは、目の前の水鹿にだけ聞こえるように、静かに言い放った。

「イカロスの正体は……お前たちの友人でもある聖闘士——……」

55 : 「真実、それは残酷な運命」

「アイツが……イカロス？」

水鹿はカトレウスから聞いた真実の衝撃が大きすぎたのが、呆然としながら自分たちより下にいる仮面の天闘士の姿を見つめていた。イカロスは、自分たちがこうしている間にも圭熊と何発も拳を交えながら、そのやりとりを繰り返している。水鹿は、しばらく、その姿を見たのち、「ハッ」と息を漏らしながら笑みを浮かべれば、馬鹿馬鹿しいというまでに首を横に振って、カトレウスの言ったことを否定した。

「つまり、アイツは実は天闘士であって、名前もイカロスにしてるだつて？　ないない。あいつはこんなことしないって」

「本当にそう思うなら、そこで見物していればいい。今にもイカロスの素が出るはず」カトレウスはそう呟きながら、水鹿のことを横目で少しばかり睨みつけていた。水鹿はカトレウスの言ったことをジョークか何かだと思っていたゆえか、その真剣な様子のカトレウスの睨みつけにビクツと肩を跳ね上げて、思わず視線を逸らした。そして、視線を完全にイカロスの圭熊のやりとりにシフトさせ、相手の言われた通り見物することにした。

そんな中で、水鹿はカトレウスに対して、若干疑心暗鬼気味になっていた。

(しかし……このカトレウスという天闘士の言うことを信じてもいいのだろうか……)

水鹿は顎に手を当てて考えていた。こういうことを言ってくるとはいえ、相手は天闘士——言わば自分たちの敵だ。簡単に信用していいものではないことは、水鹿も分かっていたつもりだった。もちろん、カトレウスも簡単に信じてもらおうなどとは思っていないはずだ。ただし、イカロスのことだけはそうも行かないようだったが。

そして、水鹿たちが自分たちよりも物理的に上にいることに今更気が付いた圭熊は、ポカーンと口を開き、その様子に驚きを隠せないようだった。

(すげえ……なんか、向こうの敵はああいう芸当もできんだな。でも……)

圭熊は驚いた表情から一転、真剣な表情をしながら、目の前にいる的の方へと視線の焦点を合わせて、スツとその姿を見据えた。イカロスは圭熊が視線をこちらに据えるなり、圭熊に対する構えの体制に入った。圭熊はその構えに合わせるかのように、瞳をギリつかせながら、己の小宇宙を炎のごとく燃やし始め、ニツと笑みを浮かべた。

(……つちも……つちで、面白いんだよな！)

瞬間、圭熊は地面を勢いよく、かなりの速度で等間隔で蹴り上げながら、その足でイカロスの方まで向かった。イカロスの方は拳の中に電気のような何かを溜めながら、圭熊の方へと狙いを定め、ロックオンしていた。

「うおおおおお——ッ！ 無尽熊拳——ッ！」

圭熊は走りながら、その速度・マツハ以上にもなる無数の拳をイカロスの方へと繰り出し、放つ。その拳は熊の手のごとし、イカロスの方へと襲いかかった。しかし、イカロスは圭熊がこの技を出してくるタイミングを読んでいたかのように、襲われる前に、こちらからも攻撃を繰り出した。

「……！」

イカロスは必殺技も何も言わないまま、圭熊の無尽熊拳を掻き消すように、その電撃を帯びた拳を放った。圭熊はその拳からこちらの危機を察すると、その拳がこちらに当たる直前に、急いで左の方へと足をスライドさせて、何とか当たらないように避けた。避けられたイカロスの拳は、その先に障害がないゆえか、空中で自然消滅した。圭熊はその自然消滅した拳を見つめながら、ハアハアと息を立てていた。かなりギリギリで避けたのであろうことが、その息の荒立てようから伺える。

圭熊は頬の上にタラリ出て来ている汗を、手で拭いながら、イカロスの方へ視線を据えた。

（なんておつかねーんだ……。俺の拳を一掃するなんて……やっぱり、こいつは……）

白虎の言う通り、イカロスは自分の知っている「アイツ」ということなのか。しかし、その「アイツ」はこんな電撃を帯びている拳を放ったはなかった。いや、もしかしたら、

この時になるまで使わなかったのだろう。獅子座のアンバーのライトニングプラズマやライトニングボルトを見て育った「アイツ」ならば、いつの間にか取得して、いつの間にか使えるようになっていても不思議ではなかった。

イカロスは、「ふう」と息を漏らしながら、再び圭熊の方へと視線を据えて、狙いを定め、その拳をグツと握った。

(また来るか！)

圭熊の方もそれに合わせて、拳を構え、拳を握っていないもう片方の手を前面に出し、本格的な構えを取った。

そして、先ほどから技名も何も言っていないイカロスのせいで、この場合は常に沈黙を帯びているわけなのだが、騒ぎたい放題の圭熊からすれば、この沈黙というのは打ち破り、思い切つて騒いでみたいものだった。圭熊は互いに攻撃に入る前に、イカロスに向かって言い放った。

「なあ、イカロスさんよ。お前さん、さつきから何も言っていないけど……本当は何か言いたいこと、たくさんあるんじゃないか？」

「……………」

真つ平らであったイカロスの口元が歪みを見せた。どうやら、圭熊のその言葉に反応したらしく、拳を構えている腕も若干下がっていた。イカロスのその様子から、圭熊は

何かを察したのか、ニツと口元を緩めて、また、イカロスの方へと言い放った。

「お前、無口なだけじゃなくて、単に何も言い放ちたくない……それだけなんだよな。小宇宙からひしひしと伝わってくるぜ？」

「……！」

「……分かりやすいまでに凶星だな、お前」

イカロスが言葉を詰まらせるように口を開き続け、拳を構えるのをやめた。圭熊はその分かりやすいイカロスの様子に呆れた様子を見せながら、額に汗を一滴垂らした。同時に、イカロスの本来の性格は、無口でクールというわけじゃなく、わりと分かりやすく、表情に出やすいタイプと見受けられた。白虎が「イカロスは自分たちの知り合い」だと言っていたが、このままでは向こうから先にボロを出してくれるかもしれない。そうなったら、こちらでも結構助かるわけなのだが。

圭熊は、「よし」と小さく呟きを言い放ってから、拳をギユツと引き締めて、肘を少しばかり後ろの方へと引いた。

（お白虎さんよ……お前さんの予想、もしかしたら当たってるかもしれないねーぜ。ここまですら無口になれるってことは、それぐらいに正体を隠したいみたいだからさ）

圭熊は今のやりとりで、それを確信した。イカロスは正体を隠し、自分とこうして戦っている、と。しかし、一方で圭熊の方も、先ほどの白虎と同じように、イカロスの

正体を探ってしまったら、後悔する気がしてならなかった。無論、相手の正体を知ったところで、普通はどうにもならないはずなのだが、なのに、なぜ、こうして相手の正体を知るのが怖くなるのだろうか。この感情は友人の可能性があるだけではなく、何か別のものが働いているようだ。

だが、こうして戦場で鉢合わせている以上、その知りたくないという感情に負けてしまつてはならない。圭熊は拳を腰辺りまで下げて、その小宇宙を燃やし始めた。また、先ほどのように当たらないかもしれないが、ここは戦場。何度も繰り返すようだが、ここは戦場である。諦めるようなことがあつては、絶対にならない。

圭熊はキツとイカロスに狙いを定めてから、勢いよく地面を蹴り上げて、そこから一気に走り出した。ダダダッ、と軽快な音音が辺り一面に鳴り渡る。イカロスにあと2メートルぐらい、というところで、圭熊は一気に地面をバネにして、そこから数メートル飛び上がった。

「いつけエエエエ—— ツ！—— 一矢ツ！—— 熊拳ンンンン—— ツ！」

圭熊の拳は自分より下にいるイカロスへと向けられ、その拳は突き出した途端に、巨大な熊の手となって、イカロスへと襲いかかった。イカロスは少し戸惑っているところから、片手のひらを突き出して、その威力を受け止めようと試みた。熊の手は、その手の上でいくつかの何股にもなつて、その威力が分担され、イカロスの体へと直撃しない

形となった。

しかしながら、圭熊はイカロスに攻撃を止められたとあって、諦めるような性ではなく、むしろ燃え上がるような性であった。

「うおおおおお——ッ！」

圭熊の小宇宙は、イカロスの足さえも摩擦で後退させるほどに、燃え上がっていた。イカロスはどうかして圭熊の攻撃に耐えぬこうとするも、圭熊の小宇宙と技の威力は、どんどんこちらを圧倒していくばかりだ。イカロスの顔には焦りが出始めていたのか、額に脂汗が流れていた。

「イカロスが……圧倒されている……？」

カトレウスは呆然とした様子で、ただ、目の前で繰り広げられるその光景を見つめていた。どうやら、イカロスは天闘士の中でもかなりの実力らしく、こうして他人に圧倒されることなんて、予想だにしていなかった、ということだろう。カトレウスを横で見ている水鹿は、「ふうん」とイカロスの方を見つめた。

イカロスは聖闘士の世界だと、青銅並みの力しか出なかつたわけなのだが、天闘士になり、いろいろ鍛えのかさそうでないのかは定かではないが、とりあえず、こちらにいる時よりも断然に強くなっていることは明らかだった。なんとというか、こちらにいる時のイカロスと、天闘士のイカロスとで、何らかの差を感じてしまうのだ。別に「悔しい」と

いうわけではないはずのだが、水鹿は戸惑いを隠せずにはいた。

水鹿は圭熊とイカロスの戦いをその目で見つめながら、それを右手の人差し指で指差して、微妙な心境をしながら、愚かな質問だと分かっていつつも、真剣な面持ちでカトレウスの方へと質問を向けた。

「なあ、カトレウス。アイツは本当にヤツなのか？」

「……嘘を言っても、仕方が無い」

カトレウスはこちらに向かって質問してきた相手をジッと睨み付けるように見つめてから、戦っているイカロスと圭熊の方へと視線を向けて、そう冷たく言い放った。心の中で、水鹿に自分の言ったことを疑われて心外に思っているのだろう、その横顔は少しばかり不機嫌そうなものだった。水鹿は、「そうだよなー」と気まずそうに引きつった笑みを浮かべながら、相手から視線を逸らした。確かに、こんなところで嘘を言っても仕方が無いし、意味もないであろう。というより、訳が分からない。

カトレウスは、「フウ」と呆れたようにため息をついてから、ジッと相手の方を見つめた。

「……杯座。このまま見ているのも暇だし、どうせならこちらでも戦って、その心意気を見せてもらっても構わないか？」

「心意気……？」

水鹿の方へと顔を向け、こちらを見てくるカトレウスに対して、水鹿はそう呟くように疑問系を相手にぶつけながら、首を横に傾げた。カトレウスは相手の疑問のような呟きに対して、コクンと首を縦に振りながら、水鹿より一步離れ、小宇宙を高め始めた。

「友情に対して熱くなるその心意気を……こちらに見せて、ぶつけてほしい」

カトレウスは小宇宙を燃やしながら、相手の方へと指を差した。指を差された水鹿は、相手の小宇宙を感じながら、キツと顔を引き締め、相手のようにその小宇宙を燃やし始めた。

「ああ、上等だ。こちらも生半可な友情を持ち合わせて、アイツらと戦ってきたわけではないからな」

「……そうか。なら、いい」

カトレウスと水鹿は一定の距離まで離れて、互いの視線を合わせた。

「この地上とは少し離れた戦場で……見せてもらう」

そう言うと、カトレウスは地面の土からボコボコと砲を作り始めた。その数、数え切れないほどに及ぶ。水鹿は、その砲たちが作られるなり、こちらも凍気その手に貯めて戦闘態勢へと入った。

「さあ、始めようか。我らの戦い——……」

カトレウスがそう言ったのと同時に、圭熊の大きな悲鳴が上がったのも同時だっ

た。

「ぐあああああッ！」

圭熊は体を横に回転させながら地面に落下したのち、そのまま地面に転がって、身体中ボロボロとなつて、そこに止まった。圭熊はその痛みからか、「ぐっ、う……」と苦しうに唸り声を上げて、片目を閉じた状態で、イカロスの方を見つめた。その圭熊の額からは血がポタポタと垂れていた。

カトレウスと水鹿がやりとりをしている間にも、イカロスと圭熊の形勢が逆転し、圭熊がこうして吹き飛ばれられている、というわけだ。

どうやって逆転したかといえば、イカロスは圭熊の一矢熊拳の威力の集中のさせ方や、技の成り立ちまで知っているような様子で、こちらにやってくる熊の手の威力を、前身体である無尽熊拳のように、その手で威力を分散させたのである。その威力は当然のことながら、圭熊の方へと跳ね返った。そのあとのことは、お察しの通り、だ。

圭熊は腕に力を入れて、上半身をグツと起き上げれば、体の所々から血を地面に落としながら、足に力を入れて、そこに立ち上がった。その息は、「ハアハア」と息切れを繰り返しており、そのダメージと疲れは誰が見ても明らかなのであった。

「まさか……一矢熊拳の威力を無尽熊拳のように分散させるなんて……予想もしてなかったよ……っ……っ……」

そう言いながらイカロスの方へと歩み寄る圭熊の足は、今にもその場に崩れそうなもので、そこに立っているのも精一杯なようだった。しかし、圭熊には、ここで立ち止まってはならない理由と意志が、その心の中にあつた。

圭熊はニコツと微笑みを浮かべながら、その足でイカロスの方へと近付いていった。

「なあ、イカロス。俺にはさ……友達がいんだ。そいつとは最初、定期的に行われる聖域の組手つーか、模擬戦で出会ったんだよ。そいつはさ、俺とは全然真逆で、無口で物静かなワケ。でも、アテナに対する忠誠は、その小宇宙以上で……。俺ら、その頃どっちも成り立てだったけど、勝負の勝敗に関しては結構ギリギリだったわけ。確か俺が勝ったんだよな。その時に、お互いに、『またいい戦いをしよう』って約束したんだけど……そいつ、俺と戦った何日か後に、行方不明になって、どつか行っちゃった」

圭熊の話し始めた昔話に対して、イカロスの仮面の下の瞳が、ゆらゆらと揺れ始めていた。圭熊が話を続けるたびに、お互いの視線は近付いていた。

「で、次に出会ったのがその2、3年後ぐらいだった。俺、その時、そいつの仲間と対峙しちやつて、そんな時にそいつがいい顔しながらそこに登場したの。そいつ、友達とか基本的に作らない主義だったみたいだったけど、とうとう作ったらしくてさ。まあ、そんな時は何なんだよって思ったよ。うん、思ったさ。でも、そこからそいつの仲間とも仲良くなつてさ、すごい心地良くてさ。そいつがそこにいるのも分かるんだよ。そいつが

いるからこそ、さまざまなバランスが、均衡が取れてるんだって、思ったりもしたこともある。だって、その仲間のリーダーみたいなのがさ、人3人分ぐらいのバカ元気を所持ってたんだよ。冷静なそいつがいなきや、まじで話になんねえだろ」

圭熊は当時のことを思い出しながら、大きく笑いを浮かべているのを我慢しているようで、苦い笑みを浮かべながら、イカロスに向かってそう言い放った。イカロスはそんな圭熊を見ながら、「自分に話して何がしたい」と疑り深い視線を、その仮面の下から覗かせていた。なぜ、相手が自分にこんなことを話し始めたのか、イカロス自身さっぱりだったのだ。

だが、圭熊は笑って過ごせる昔話から一転、そこから一気にイカロスに畳み掛けるように、悲しげな表情になった。

「そう思ったのに……思ったのにさ。あいつ、聖闘士辞めてさ、黙ってここからいなくなっちゃったんだぜ？　最初は聖闘士辞めるなんてありえないって思ってたよ。俺の知り合いの中でも、あいつのアテナに対する忠誠心は本物だった。だからこそ、辞めるなんて本当、信じられなかったのよな……」

「……」

「で……俺はな……」

瞬間、圭熊の手が、イカロスの腕を掴んでいた。圭熊は長々と昔話をしながら、順調

にイカロスの方へと近付いていったのである。イカロスは、圭熊に腕を掴まれても、それを受け入れるかのように、ただ、黙ってそれを見つめていた。圭熊は掴んだ腕を、自分の顔の付近まで持ち上げて、イカロスの顔を睨んでいた。

白虎はイカロスと圭熊がそうして対峙し、戦っている間にも、天秤宮でREID―D AMOCLESを持ち出して、アテナ神殿の方へと向かうため、十二宮の階段を登っていた。そして、アテナなら何かしてくれるに違いない、という水鹿の言葉を半信半疑気味ながらも信じていた。もしかしたら、アトロポスの件もどうかできるのではないか、という淡い希望もそこにあつたからだ。

（アオイデーさんの件についてはともかく、アトロポスの件だったら、アテナだって黙っていられないはずだ……！）

白虎は教皇の間に辿り着いたところで、その足を止めた。さすがに教皇の間からは、走るよりも歩く方が騒がしくなくていいだろう、と思つたのだ。白虎にとつて、教皇の間からの十二宮というのは、それほどまでに神聖なものであつたのだ。白虎は目を細めながら、教皇の間をその足で歩いた。

教皇はどこかへ買い物でもしに行っているのか、どうやら不在らしく、いつも見ている玉座の上には誰もいなかった。白虎は何かを思うかのように、玉座の手すりをそつと

撫でた。

(「教皇、か……」)

白虎からすれば、それは自分の師匠そのものを表す言葉である。だからこそ、白虎は教皇職というものに対して、謎の拘りと感情を持つていた。最近、教皇が白虎に対して、「教皇の座を他の誰かに譲ろうと思っっている」と言っていた。教皇もそろそろその職に限界を感じてきているのだ。200年も教皇を続けるなど、どれだけの苦勞が崇つているのか分からない。多分、黄金聖闘士の誰かだとは思いますが、それでも白虎は教皇は自分の師でいてほしい、と思うわけである。そもそも、教皇が入れ替わるまでに自分が生きているかすら分からないが。

そう思いながら白虎が玉座から、視線を動かすと、見慣れない人物の姿がそこにあつた。

「……………」

白虎は思わず目を丸くして、その姿を見つめていた。その人物は獅子座の黄金聖衣を着ており、その背には他の黄金聖闘士のように白いマントが翻られていた。髪の毛は金髪で、若干の癖つ毛。長さはショート。そして、水鹿よりも年下のように見える丸い目と、身長は何よりの相手の特徴とも言えよう。

白虎は見慣れない人物が、自分がそれなりに見知った聖衣を着ている光景を目の前に

して、思わず言葉を失った。白虎としては、獅子座、イコール、アンバーのイメージが強かったのである。だからこそ、衝撃が隠せない。

獅子座の黄金聖衣を着た謎の青年は困ったように、固まっている白虎を見つめながら、「ええと」と声を発した。

「な、何か教皇様にご用事でも?」

「あつ、ぐつ、い、いえっ! いえいえ!」

白虎はハツとなつて、ブンブンと両手と激しく首を横に振つて、教皇に用事があることを強く否定した。どうやら、目の前の青年は教皇の代わりにこの門番もしているようだ。青年は激しく動く白虎に対して、面白おかしいと感じたのか、クスクスと笑みを浮かべながら白虎の方へと言い放った。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。僕は君とは何十回も何百回も会っているし。あ、妄想とかじゃなくてね」

「そ、そうです、か……つて、はい?」

白虎は目をくりくりと丸くさせて、相手のその姿を見つめた。相手曰く、自分とは何十回も何百回も会っているらしいのだが、自分は相手の姿に見覚えはない。むしろ、初対面といった方が正しいであろう。そして、相手は初対面ではないことを、妄想ではないと否定しているわけで、白虎の頭の中はこんがらがっていた。

獅子座の青年は、「無理もないか」と相手には見せないように、しかし、笑っていることが分かるように肩を揺らしながらクスクスと苦い笑みを浮かべながら、小さく呟き、少しだけ息を漏らし、改めて白虎の方へと顔を向き直し、見つめ合った。

「獅子座の聖闘士としては、お初にお目にかかります」

「獅子座の……聖闘士と、して？」

獅子座の青年は「はいっ」と白虎の返事に対して、軽く首を下げて会釈。白虎はそんな相手の姿を目を丸くして、ポカーンとしながら、ただ見つめていた。獅子座の青年はニコニコと笑みを浮かべた。

「元々祭壇座の白銀聖闘士だったのですが……本来目指していたところに辿り着くことができましたっ」

「……えっ、あつ、ふにやああああッ!？」

その一言ですべてを察した白虎は、口を大きく開けて、体をぶるぶる言わせながら、目の前の青年を指差し、変な声を出して絶叫した。目の前の青年——海鳥は、そんな白虎の大袈裟なリアクションに対して、どう反応すればよいのか分からなかったのか、ひたすら笑みを浮かべていた。

白虎はひとまず絶叫したのち、すぐにその場でしゃがみ込んで頭を抱えた。

「う、嘘やろ……ってか、海鳥さん白銀から黄金って……えっ……えっ……えっ……？」

もう何もかもが信じられなかった。というよりも、そもそも、どうして海鳥が金髪で癖つ毛のある髪型になっているのだろうか。海鳥は基本的に茶髪で、何一つ癖がないサラサラヘアーだったはずなのだが。もしかして、今まではそれを隠していたというか。その逆もしかり、なのだが。

海鳥は突然自分の目の前で白虎がしゃがみ込んでしまったものだからか、何かあったのかと気になって、白虎の方へと少し歩み寄って、その背中を心配そうに見つめていた。「あの……白虎さん？　大丈夫ですか？」

「はっ、はいっ！」

白虎は海鳥に話し掛けられるなり、ビクツと肩を跳ね上げて、そちらの方を振り向いた。そして立ち上がりながら、苦笑して言い放った。

「す、すみません……。なんとというか、突然のことに心の準備ができなかったし、何より一体何がどうなってるのか……」

「んー、そうですね。話したいのは山々なんですけど……白虎さん、用事があってここに来たんじゃない……」

「ああああ——ッ！　そうだったアーツ！」

白虎は海鳥にそれを言われるなり、大きく声を上げながら、そこから一気に走り出した。

海鳥は走り出した白虎に向かって、引き止めの声をかけようとしたものの、引き止めたところで聞く気配はなさそうなので、そのまま黙っておいた。そして、頭をわしやわしやと掻き、その背中姿をフツと微笑みながら見つめた。

圭熊はボロボロになり、体の至る部分から血を流している状態で、イカロスの左腕を掴み、それを自分の視線があるところまで持ち上げ、その腕の上から視線を覗かせて、イカロスの方を睨み付けていた。イカロスは何も言わず、抵抗もせず、ただ、黙って圭熊の方を見つめていた。その代わり、掴まれている腕の拳をギユツと握り締めていた。

圭熊はイカロスを睨み付けたまま、その口を開いた。

「で、俺はな。そいつが勝手にここから去っちゃったことが気に食わないわけよ。だって、アイツが何も言わずにここから去るなんて俺らの仲からしたら絶対にありえないし。だから、せめて、そのこともひつくるめて、そいつがここから去った理由を知りたいわけだよ」

「……………」

イカロスの喉から、唾を飲む音がした。圭熊は、その音を聞くなり何かを確信したのか、目を閉じながら、イカロスの腕からそれを掴んでいた自分の手を離した。そして、圭熊はイカロスから少しだけ離れて、対峙するように向き合った。

「よく考えたら、こうして対峙して戦って……って初めてだよな、翔馬」

その瞬間、圭熊の微笑みがすべてを物語っていた。イカロス——いや、翔馬の胸が一気に高鳴った。なぜ、暴露してしまったのか、何も言わなかったのに、どうして、どうして。翔馬は冷静を失いかけていたものの、すぐに元に戻り、圭熊に初めて声を放った。「何で……何で、分かった。小宇宙だって、完全に天闘士のものだし、何より声を発していない」

「……まあ、な。でも、白虎や俺の目はごまかせねえよ」

圭熊はフウ、と息を漏らしながら、頭をポリポリと搔いて苦笑した。そして、改めて翔馬の方へと視線を向けて、その右手の人差し指を翔馬の方へと差し出して、指差した。「まず、白虎が教えてくれたよ。イカロスは俺らの知り合いなんじゃないかって。その言いっぷりからして、白虎は全部気が付いていたようだったぜ？ もちろん、これを白虎に教わらなければ、俺は永遠とお前が翔馬だつてことに気が付かなかった」

「……他には？」

「そうだな、お前は前々から分かりやすくって単純な……そう、バカ正直な奴だったことが幸いだったかな。驚く様子とか、まさしくお前そのものだったしな」

「……」

翔馬は圭熊の分析に対して、思わず黙り込んでしまった。まさか、ここまで自分のこ

とを分析されていたとは夢にも思わなかったのだ。もちろん、それは、いつも一緒にいるからこそ、の分析だった。翔馬は改めて、自分がいかに分かりやすい変装をしていたのかを知った。

圭熊は翔馬の方を指差す腕を下ろしながら、その腕の拳を固く握りしめて、それをもう片方の手でパシッと受け止めた。圭熊はニツと笑みを浮かべるのだが、その笑みは翔馬との再会を喜んでいるようにも伺えた。

「じゃあ……やるか、翔馬さんよ。ここで再会したのも何かの縁だ」

56 : 「向き合うこの瞳は君のために」

翔馬は顔を覆っていた仮面を、右手であっさりと取った。仮面をしたところで、圭熊には正体が暴露しているし、白虎にも暴露している。これ以上仮面をしたところで、無駄だと感じたのだろう。水鹿に聞かしては、もう二人から暴露してしまえば普通に暴露するだろう、といった様子であった。そして、数日ぶりに、「翔馬」としての自分をさらけ出した。

圭熊は数日ぶりに見ることができた友人の顔に対して、フツと微笑みを浮かべた。

「心なしか、前よりいい表情してんじゃん」

「……お前の気のせいだろう」

そして、相変わらずの反応。圭熊はいつも通りの翔馬の対応に、ププツと腹を抱えて吹き出しながら、「安定してんな」と言い放った。翔馬はいつものように、そんな圭熊をジト目で見つめているだけだ。圭熊は自分の笑いが収まったところで、「ふう」と息を漏らしながら、翔馬の方へと視線を改めて向け直した。そして、拳をコキコキと骨を鳴らしながら、翔馬の方へと一歩、歩み寄った。二人の間に、これまでにないほどの小宇宙が燃え上がっていた。

圭熊はニツと笑みを浮かべれば、翔馬に向かって言葉が発した。

「まあ、久々にこうして対面したんだ。つまらん戦いにはするんじやねえぞ」
「……もとよりそのつもりだ」

翔馬は圭熊のいつもより真剣な様子を、その身に受けながら、拳を握り締めた。心なしか、その拳に宿る小宇宙もいつもよりも燃え上がっているように伺えた。

「天翔るペガサスの流星——受けてみよ！」

「なら、無尽に広がる熊の爪、受けてみな！」

翔馬が圭熊に向かって言い放つと、圭熊もそれに返すように言い放った。やはり、そこらへんの息だけは互いにピツタリと言うところか。二人はそれを少しだけ意識してみれば、フツと笑みを浮かべながら、互いの拳を、マツハの速度で繰り出される数多なる拳を、繰り出した。

「ペガサス、流星拳——ツ!!」

「無尽、熊拳——ツ!!」

二人は互いの拳を相手の繰り出してくる拳に当てるように突き当てた。とある拳は流星の威力によってそれが掻き消され、また、とある拳は熊の爪のごとく引き裂かれていた。そんな拳がところどころにあるのだから、言わば二人の実力は現時点では五分五分、といったところだろう。

「圭熊ッ……お前、あの時より全然強くなっているなッ……！」

「そっちこそッ！ やつぱり、数々の死闘をくぐり抜けただけはあるよなあ！」

翔馬の場合は天闘士としての力が目覚めたのもあると思うのだが、圭熊にとってはそれは先ほどまでの戦いとやりとりで証明されたようなものだ。そのことに関しては敢えて口を閉ざしておいた。

そして、翔馬はふと気が付いたように笑みを浮かべながら、言い放った。

「……しかし、差はついたようだな」

「えっ……っ、ぐはあっ！」

圭熊が驚くのも束の間、自分の腹に鉄槌の一撃が落ちたことに気が付き、そのまま足をよろつかせて、その体制を崩した。そこからは圭熊は相手に向かってなに一つ手が出ない状態だった。

「くっ、ううっ……っ！」

翔馬の流れて来るようにこちらにやってくる拳に対して、圭熊は腕や手やらで直撃しないように受け止めるのに精一杯だった。

「……圭熊、お前、随分と弱くなつてないか。前のお前は、俺のパンチ一つすら許さなかつたはずだ」

「……ハッ！」

瞬間、圭熊は鼻で笑いながらも、流星拳の筋道を見つけ出したのか、今度は人差し指

一つを翔馬の拳に向かつて差し出して、その動きを止めてみせた。その際に、翔馬の拳風が激しく巻き起こっていた。

圭熊はググツと人差し指の頂点に力を入れながら、翔馬の拳の動きを差し押さえていた。

「前の俺はお前のパンチ一つすら許さなかったのなら……今の俺は、お前のパンチ一つ許したところで、どうにもなんねえってこたあ」

「……強くなってるのか、そうでないのか分からないな」

「さあな、俺にも分かんねえ。ただ、面白い戦いができるのは確かだろ？」

「ああ……そうだな」

翔馬は圭熊の言うことに同意して頷くなり、すぐに圭熊に防がれた拳を引いて、もう片方の手の拳で圭熊の腹に向かつてそれを入れようとした。だが、圭熊はそれを察するなり、すぐに横移動。その拳の腕を、自分の手で掴んでみせた。

「……！」

翔馬は、「速い」とでも言いたげな様子で、圭熊の手と顔を視線を双方に動かしながら見つめていた。

「この程度の拳じゃ、俺には勝てねえよ」

圭熊の翔馬に対する強気な姿勢。翔馬は掴まれていない方の拳にギュツと力を込め

て、そこに小宇宙を溜め始めていた。翔馬からすれば、この程度のことなんぞどうってことない上に、予測の範囲。まだまだ、これから、といったところか。

圭熊はそんな翔馬の変化に気が付いたのか、すぐに腕を離して、翔馬から一定の距離を持った。翔馬は、圭熊に狙いを定めているようで、圭熊を見つめながら、その視線を外そうとはしなかった。

「先ほどはちゃんと技名を叫ばなかったが……今度は叫んでやろう」

「！」

翔馬は圭熊のことを下から覗き込むように睨み付けた。圭熊はこれが何かのスイッチの前触れだと思ったのか、その警戒を更に強めた。翔馬は、拳に光を溜めながら、圭熊の方へと一歩近付いた。

「受けるがいい、光の鉄槌……ハイエスト、アルティテュード——ツ——」

翔馬の拳が電撃をまといながら、圭熊の方へと突き出された。圭熊はそのまま避けようとしたものの、そのハイエストアルティテュードの拳の面の大きさは、尋常な大きさではないものだった。

「ぐっ、ああっ！」

圭熊は避け切ることができず、見事にその電撃の拳に向こう側まで吹き飛ばされ、その地面に倒れこみ、激突の衝撃から頭から少しばかり血を流れ出していた。圭熊は、頭

に走る激痛の中、翔馬の方を見つめて、地面の土を握り締めるように、その拳をギュツと硬く結んだ。

少しばかり地上から離れた、地面が何メートルも盛り上がっているところで、カトレウスと水鹿は拳を一戦交えていた。そんな中、二人はこのままではキリがつかないと思ったのか、双方の顔の直前で、互いの拳を拳風も交えながらも止めた。カトレウスは、息をハーハー上げながら、ボソリと水鹿に向かって呟いた。

「お前が黄金聖闘士並みの力を持っている、とは聞いていたが……自分は少し見誤っていたのかもしれない。黄金聖闘士のこと、お前のことも」

「フツ。それは結構だな。オレは舐められるほど、甘いモンじゃないからね」

水鹿はカトレウスの顔から拳を引いて、少しばかりカトレウスから離れた。

「しかし、今のお前の発言で、天闘士は全体的に聖闘士を見くびっていることが分かったよ。まあ、そこらへんは海闘士たちも同じだったかな」

カトレウスは水鹿のその発言を聞きながら、体制を取り直していた。

「それは仕方あるまい。聖闘士は基本的に選ばれたただの人間がなるもの。だから、鱗衣に選ばれた海闘士や、人間ではない我ら天闘士からすれば、舐められて当然の部類だ」

「……なるほどなあ。ま、それでも、たかが聖闘士ごとき、とは思われたくないからな」

水鹿はそう言い放った途端、パシントンと拳と平手を互いにぶつけ合い、相手の方をスツと見据えた。その小宇宙の様子は傍から見ても、今までのものとは雰囲気が違うと感じ取れるものであった。カトレウスはそんな水鹿の雰囲気の違いに、少しばかり引けを取っていた。

——水鹿はこれから、自らの本気をこちらにぶつけてくる。

カトレウスはそれだけを察すると、こちらもすぐに戦闘態勢に入った。向こうが自らの全力をぶつけるのなら、こちらもちからの全力をぶつけて応える、というのが筋だ。カトレウスはフウと息を漏らしながら、両手を構えて、目をカツと開き、小宇宙を燃やした。

水鹿は向こうも本気になったことに気が付いたのか、集中するために閉じていた瞳を、チラツとでも相手を見るために開いた。カトレウスの小宇宙は、さすが天闘士と云ったところで、天使のごとく真白に輝いていた。周りよりもちよつと強い人間の小宇宙である自分からしてしまえば、その真白に輝く小宇宙は羨ましいを通り越して、憧れにまで達する勢いだ。だが、だからといって、こちらが向こうに怯んではならないのも確かだった。

(お互いの全力をぶつけ合って……ハッキリさせる！)

水鹿とカトレウスの小宇宙がとうとう攻撃体制へと入ったのはほぼ同時だった。水

鹿はその全身に凍気をまといながら、足を大きく開き構え、両手を組み、互いの指をその隙間隙間に重ねた。そして、それをまつすぐに、一直線に、頭上へと掲げた。カトレウスは今まで見たことがない水鹿のその構えに、更なる警戒を持ちながら、己の周りに土を浮かせた。

水鹿はカトレウスに狙いを定め、また、カトレウスは水鹿に狙いを定めながら、互いに睨み合った。そして、そこから水鹿の腕が振り上げられるのと、カトレウスの操る土が水鹿に向かって放たれるのもほぼ同時のことだった。

「オーロラエクスキューション——ッ！」

「スオーロパティボロ——ッ！」

土で作られた数々の刃と、ほぼ絶対零度に近い水鹿の冷気が、何もかも貫く勢いで打ち放たれ、その場でぶつかり合い、くすぶつた。

「ぐっ、ううっ……！」

「っ、はあっ……！」

お互いの全力の力はほぼ同等ということなのだろう、そのくすぶりはなかなか収まる気配がなかった。だが、先にダウンしそうなのは、誰からどう見てもカトレウスの方だったの言うまでもなかった。カトレウスは技を水鹿の方に放ちながらも、その額に脂汗を乗せて、必死になって水鹿に対抗していた。

(このままでは、押され始めっ……——！)

カトレウスの放っている土がその場で凍り付くのは遅くはなかった。水鹿の冷気は、自分が放っている土の刃を次々と打ち砕くどころか、凍らせていた。その氷は次々とカトレウスの方へと近付き、いずれはカトレウスの手に辿り着いた。カトレウスは最初は、小宇宙を燃やしながら、こちらが凍りつくのを避けていた。

しかし、絶対零度まで冷めた冷気が、そんなちよつと小宇宙を燃やした程度で止まるはずもなかった。

「……自分の、負けだ」

すべてを察したカトレウスは潔く、そう呟いた途端、その小宇宙を空気へと溶かして、水鹿の冷気が自分の元に来るのを許した。

圭熊の小宇宙は、その場で激しく燃え上がっていた。今までにないほどの圭熊の小宇宙の高鳴りようは、まさしく、刃を剥き出しにし、鋭い爪を露わにした罠のものだった。それほどまでに、圭熊の小宇宙は激しく苛烈に燃え上がっていたのである。翔馬はそんな目の前の人物の小宇宙を、ほぼ近いところで感じながら、いつもとは違う様子の相手であることに気が付いていた。自分に攻撃されたことが、その刺激になったのか、それとも、今までとは違う環境によって、大熊座のその牙が見えたのか——いや、その両方

か。何にせよ、警戒するより他になかった。

圭熊は、立ち上がり、その体を起き上げながら、小宇宙を燃やして、翔馬の方へとその焦点を合わせていた。

「翔馬……」

「！」

ボロボロとなり傷付いた彼から発せられた、自分を呼ぶ声。翔馬はその声に対して、ピクツと眉を動かして、反応していた。圭熊は己から沸き立つ強大な小宇宙を感じながら、翔馬に向かって、ニコツと微笑んだ。

「そんな……そんな、天闘士とかいうの辞めてさ、もう一度聖闘士やろうぜ……。お前のいるべき場所はこつちだよ……」

圭熊は天闘士となった目の前の友人に向かって、小さいながらも、はつきりとそう言った。その声には、翔馬をこちらに引き戻すことができる、という希望が詰まっていた。しかし、翔馬はその圭熊の誘いには、無情にも突き放すような言葉で答えた。

「俺はアルテミス様から、使命を授かってこの人間界に生まれてきた。元からこうなることは分かっていたし、そもそも聖闘士になったのも白虎を殺すための力を、天闘士になる前につけるためだ。再び聖闘士になる気はない」

「そう、かよ……」

翔馬からのその回答を聞き、圭熊は悔しそうに歯をグツと締めた。今の翔馬からすれば、聖闘士になること自体、天闘士になるための通過点に過ぎなかったのだろう。だが、その通過点で関わってきた自分たちは一体どうなってしまうのか。翔馬と友人として関わった日々は無駄になってしまおうということなのだろうか。

いや——無駄にはさせたくなかった。

自分が無駄にしたくないのもそうだが、翔馬にとつても無駄にさせたくはなかった。自分たちはあの楽しく、辛い日々を一緒に乗り越えてきた仲間なのだ。天闘士だろうが、なんだろうが、その日々を糧にして、これからを生きていてほしい。

圭熊は呼吸が整い、体の軸が安定し始めるなり、足を大股に開き、その両腕を組んだ。そして、まっすぐに翔馬の方へと視線を据えた。翔馬はその圭熊の態勢に対して、苛立ちを持ったのか、不機嫌そうな口振りで言い放った。

「その態勢……バカにしているのか」

「ハッ」

圭熊は翔馬の言葉に対して、鼻で笑ってみせた。

「バカにしているのはそっちの方だろうが。この態勢はな、伝統ある技の構えなんだよ」

「その態勢が……!?!」

翔馬は相手のその構えに非常に驚いている様子だった。両腕を組んで、何もできない

状態から攻撃を放つ技など、まったく見たことがなかった。まさか、目の前の大熊星座はこの構えから攻撃を放つ技を身につけて自分の目の前に、いや——白虎を助けに、自分たちの目の前に現れたというのか。しかも、この三日間で。

一方の圭熊は、小さく吹いている風を、目を閉じて、その身で感じていた。

（じいちゃん……アンタから授かった、すべてを……すべてを、ここで放つよ。アンタの弟子はここまで成長したんだって……見せるよ！）

圭熊はゆっくり目を開いて、翔馬に狙いを定めた。翔馬は圭熊の雰囲気が一気に変わって、攻撃体制に入ったのを感じるなり、すぐに対抗するように圭熊にぶつけるための小宇宙を、その拳の中に集中させ始めた。

（伝統ある構えかなんだか知らないが……攻撃する前に手を出せば、こちらの勝利は確実というもの。圭熊、俺を見誤るんじゃないぞ）

「ペガサスすいせい……」

翔馬が拳を圭熊に向かって突き出して技名を言い放とうとしたのと同時に、圭熊も技目を言い放っていた。

「グレートホーンツ！」

圭熊はそう言い放つと同時に、両腕を瞬間的に抜き、翔馬に向かって放った。その時、ゼロコンマ何秒になるかすら分からなかった。そのぐらいに、圭熊の拳は速かった

のである。

翔馬は最初は圭熊の両腕を開いた態勢を見、何事かと思っていたが、瞬時、それによる己の体の変化に気が付いた。

「っ！」

気が付けば、翔馬の体の節々が痛み始めており、そして、咳をした自分の口からは少しばかりの血が流れ出ていた。

翔馬は口から血を垂らしながら、圭熊の方へと鋭い目線で見据えていた。圭熊は肩を上下に揺らしながら、腕を下ろして、翔馬の方へとゆっくりと歩み寄った。翔馬は、圭熊がこちらに歩み寄ってくる際に、激痛に耐え切れなくなったのか、その場にしゃがみ込んだ。圭熊はそんな彼の目の前に来て、言い放った。

「翔馬……お前が天闘士のままでいいなら、俺は文句は言わねえ。だがな……せめて、別れの言葉を言ってから、聖闘士辞める。黙って去られちゃ、こっちだって格好がつかねえのよ」

「……」

翔馬は圭熊から目線を外して、極力目を合わせまいと、目を逸らしていた。彼に対する気まづさからか、それとも、目の前の彼のまっすぐな態度が眩しいからか、どちらとも取れるような雰囲気翔馬はそのまま黙り込んだままで、何も言おうとしなかった。

——アテナ神殿。

白虎は手に白銀に輝く剣を持ち、聖衣のヒールを鳴らし、階段から神殿の中に歩み入った。神殿の中には、見上げても何とか顔が見えるぐらいのアテナの像が、そこにそびえ立ち、聖域全体を眺めていた。天に届くか届かないかの大きさのアテナ像。白虎は今の時点では、このアテナ像が何を意味しているのかが分からなかった。

白虎はそこから再び歩き出して、アテナ・ラテイエルの姿を探し始めた。多分、アテナはこの神殿の中にはいるのだろうが、一体彼女はどこにいるのやら、白虎には分からなかった。そうして白虎が頭と視線を動かして、アテナの姿を探していると、聞き覚えのある女性の声が白虎の耳の中に入った。

「白虎」

白虎はそちらの方へと振り返って、その声の姿を確認した。——自分が探していた人物であった。

白虎は相手の正体がアテナだと分かるなり、こちらの方へとゆっくり歩み向かってくる相手に向かって、片膝をつき、顔を伏せるように視線を床に向けて、その場で跪いた。アテナはそんな目の前の聖闘士を見るなり、「あら」と少し驚いたように目をぱちくりすれば、クスクスと手に口をあてて笑みを浮かべた。

「白虎。普通に立ってもらって結構ですよ」

「い、いえ……いくら緊急事態とはいえ、アテナに対する敬意は忘れてはならないと……」

「ふふ、真面目ですね。でも、今はそんな体勢で話すよりも、立ち上がって話した方がいいですよ」

「……はい」

ニコニコと微笑みを浮かべながらこちらに言い放った彼女がそう言うなら、と白虎は立ち上がった。アテナは白虎が立ち上がるなり、自分と視線が近くなった白虎と向き合うように、一歩下がった。

「そして……白虎。貴方、先ほど緊急事態だと言っていました。が、聖域にやってきた天闘士のことか……それとも……」

「……『その両方』とも取れるでしょう」

白虎は何かを心の中で決めたように息を漏らしながら、手に持っていた剣をアテナに見せ付けるように差し出した。

「アテナ。私は貴女にあえて言わなかったことがあります」

「あえて……言わなかったこと？」

アテナは神妙な顔付きで白虎の方を見つめ、白虎はそんな神妙な顔付きで呟き放った

相手に向かつて、コクンと首を縦に振って頷いた。

「アオイデーの媒介……いえ、ムーサの古き三柱の媒介は代々その命を天界の神々から狙われているのです。私も例外ではありません」

「！」

アテナのその時の表情は、非常に衝撃を受けたような表情だった。目を開き、何か信じられないものを見つめているかのように、アテナは目の前の少年を見つめていた。白虎の話は続いた。

「そして、このことを言ったところで、私と貴女は所詮、人と神。私の命ぐらい、失ったところで痛くも痒くもないでしょう。龍星座の聖闘士だつて、すぐに代理が——……」

「白虎」

剣に、自分以外の重み。白虎はその重みの正体がアテナの手によるものだと分かる。と、視線をアテナの方へと合わせた。アテナはさまざまな感情を堪えているような表情で白虎のことは見つめていた。白虎はそんな目の前の女性の氷上を見れば、目を見開き、想定外の反応だつたと言つた様子だつた。

アテナは白虎の手に持っている剣を一層強く握り締めながら、震えている声で言い放つた。

「白虎……私は神だからといって、人の命を無下にしたりはしません。私は、この人間界

を守るために、人間の姿で生まれてきたのです」

「し、しかし……」

「私は、守れる命があるのならば守りたいと思っています。それがどんな悪人でも、善人でも変わりません。それは貴方も例外ではないのです」

「アテナ……！」

白虎は今にも崩れそうな震える顔を堪えながら、アテナの方へと強く視線を据えた。アテナはニコツと微笑みを浮かべ、剣からその手を離した。

「それに、貴方の命はさまざまな人物の思いが宿り、守られた命です。今度は……私にも守らせてください」

アテナの表情は非常に柔らかく、それだけでも白虎を安心させることができた。そして、それ以上にアテナは慈悲深く、懐が深い、ということが白虎の心の中をさらに突き動かした。

「所詮は人と神だから」といって、アテナに何も言わなかったことを間違いだと、白虎はアテナとのやりとりで、ひどく感じ取っていた。目の前にいるアテナは、元からどんな命でもその身をかけて守ろうとしてくれるような人物であり、神であることは、馬鹿な自分でさえもすっかり分かっていたはずだ。アテナはその体と瞳がある限り、個々ともしつかり向き合ってくれる。どんなことがあっても、だ。今なら、水鹿がなぜ、アテ

ナに言えと提案したのか理解できる気がする。そういうことを伝えるのに値する人物なのだ、アテナという人物は。

白虎は、今にも自分の瞳から出てきそうな温かい水を出さまいと堪え、目頭を熱くさせながら、一度顔を俯け、そこから再びアテナへとその顔を向けた。しつかり面と向かつて、アテナと真剣に話すのはこれが初めてだろう。自分がそういうアテナと面と向かつて話ができる立場ではない、そういう身分ではないことはしつかり分かつていた。しかし、アテナは白虎に面と向かつて自分と話すことを望んでくれていたのだ。それは、一人の聖闘士としても、一人の少年としても。白虎は口の端を緩め上げて、少しばかり目を細めた。

「アテナ、ありがとうございます。そして、私は貴女のことを少し見誤っていました。貴女は元から、人の命を重きに置く……そんな方でしたね」

目の前の少年の言葉に、アテナはニコツとその顔に笑みを浮かべながら、静かに首を縦に振って頷いた。そして、己が握っていた剣からその手を離し、小さく後ろへ一歩足を引いた。

「確かに神からすれば、人の命など一瞬のものにしか過ぎません。ですが、その一瞬でも、私は大切にしたいと思っております。私たちの生きている空間は、一瞬の一瞬の重なり過ぎませんから」

「そう、ですね……」

自分たちがこうして生きている空間は、一瞬の一瞬の重なり——確かに、それは最もかもしれない。時間の流れは一秒一秒が重なり合って初めて成すのだ。白虎も、アテナのようにこれからの一瞬一瞬を大切にできる人物でありたいと思った。

同時に、自分がそうあるためには、自分の命を大切にしなければならなかった。白虎は、持ち上げていた剣を降ろし、その先を地面に着けて、アテナに向かって言い放った。「しかし、アテナ……貴女よりも立場が上の神から狙われていて、私が生き残ることなどできるのでしようか……」

「大丈夫です。アオイデーが現世に君臨してきた、ということは、アオイデーの力も必要になる日が来た、ということ。貴方がその力を、来るべき時に発揮できれば、逃れることは可能でしょう」

「……」

白虎は、手の下で立っている剣を見下ろすように見つめた。詰まる所、アテナの言っていることは、白虎の言葉で言い換えると、「さっさと実績を残して、神々からの認識を変えてしまおう」ということだ。その実績というのは、今回のアトロポスのことだろう。そのアトロポスをさえ倒してしまえば、その計画も成功の一途を辿るであろう。だが、同時にリスクが高いのも確かでもあり、アトロポスを倒せなかった場合は確実に首をはね

られる。アトロポスが倒せない、イコール、アオイデーは不必要、ということになってしまふ。そうなつてしまえば、もしかしたら、自分だけではなく、アオイデー、いや、ムーサ全体を揺るがすことにも成り得なかつた。

しかし、白虎はそんな不安を裏で抱えながらも、自分の力を信じていた。ここで自分を信じることができなければ、一体誰を信じろというのか、と。白虎は剣を再び持ち上げて、肩に乗せれば、そこから剣の先端をアテナの方へと向けた。その意思の強さをアテナに見せつけるように、笑みを浮かべた。

「分かりました。アオイデーの媒介として、その提案に乗りましょう」

「白虎……」

いつものように堂々し、はつきりとした白虎の態度に、アテナは安心感を覚えていた。白虎はコクと短く首を縦に振り、アテナに向けていた剣を降ろした。

（圭くんがいて、水鹿もいる。そして、アテナもいる。無理に一人で戦わなくてもいいんだ。私は……もう、一人じゃない！）

白虎は目を閉じ、胸に手を置きながらそれを実感すれば、目を開き、その手を自分の顔の横から、まるで、自分にはありもしないマントを広げるかのように、そのまま斜め下へと大胆に勢いよく振り下げて、アテナ神殿から、全世界へと告げるように、声高らかに言い放つた。

「そして——最高で最強のステージの幕を上げましょう！」

(もう迷うことはない……！ ううん、迷っても、皆がいてくれるから……迷わない！)
白虎は空を見上げながら、その青い空を仰ぐように視線を強く据えた。何も恐れることはないのだ。誓ったのならば、その誓いを胸にすればいいだけのこと。迷いなど、白虎の中にはすでに無いも同然だった。

そして、白虎より遠い空間の地で、アトロポスはアテナとアオイデーの媒介が共同戦線を張り、動き出したと聞いて、その準備を構えていた。だが、自分を止めることなどほぼ不可能にして、ほぼ無理である。アトロポスはその顔にニヤリと不気味な笑みを浮かべながら、その姿をあざ笑っていた。

(ふふ……アオイデーもアテナも愚かな神へと成り下がったものだ……。この運命を断ち切ることができる私を目の前にして、勝てることはないというのに……なんて滑稽よ)

アトロポスは、その緑がかった薄い色素の髪の毛を、自分の顔の前に垂らしながら、アテナとアオイデーの二人を見下していた。

57:「Get the future」

「翔馬……お前が天闘士のままでいいなら、俺は文句は言わねえ。だがな……せめて、別れの言葉を言ってから、聖闘士辞める。黙って去られちや、こつちだつて格好がつかねえのよ」

圭熊のその一句一句が、翔馬の心の中に刃のように突き刺さり、翔馬の声を抑えていた。翔馬は、目の前の大熊星座の少年と目を合わせるのが辛いのか、目を逸らしたまま、そちらの方へと合わせようとはしなかった。無論、それは翔馬にとつての、一種の逃げみたいなものであつた。

こちらに何も言わない、言い返してこない目の前の天闘士の少年に対して、圭熊の方もそこからは何も言わなかつた。これ以上自分が口出したところで、翔馬は何も言葉を発さないであろう。圭熊は別に翔馬のことを聖闘士としてここに連れ戻す気はない。ただ、別れの一言を言つて欲しかった。それだけの思いで、ここまでやつてきたのだ。だから、あえてこれ以上は何も言わまいと思うのである。

そうしてしばらくの間、二人がその沈黙を守っていると、それを破るようにとある青年の声が、二人の耳の中を刺激した。

「イカロスは本当に翔馬だったんだな」

二人はその声の正体を知るために、その声のする方向へと顔を向けた。そこにいたのは、二人がよく知る人物——杯座の水鹿であった。

圭熊はその姿を見るなり、声を上げて水鹿に向かって質問を投げた。

「兄ちゃん……そつちはもう終わったのか？」

「ああ。とつくのとうに終わったよ。圭熊の方は、一旦事が済んだ……とは言い切れないようだけだな」

水鹿はチラツと目の前の圭熊から、かつては天馬星座であった少年の方へと、その視線を逸らしてみせた。その少年は、水鹿にその視線を向けられるなり、先ほどの圭熊の時のように、目線を水鹿から外した。やはり、圭熊とも気まずければ、水鹿とも気まずいということか。二人に対してこれゆえに、ここに白虎がいたら、その気まずさも半端ではなかっただろう。

圭熊はこちららに対して一度も目を合わせようとしないう翔馬を見ながら、水鹿の方へと呟くように言い放った。

「なあ、兄ちゃん。俺らはこれからどうしたらいいんだろうな。翔馬をアテナのところまで連れて行くか、それとも、このまま逃がすべきなのか……」

「ああ……」

水鹿は翔馬の方を見つめた。確かにこれからこの少年をどうすべきか、悩むところだろう。ただ、今回の件については神々が絡んでいるとなると、こちらの対処法が適切だと思い、圭熊に向かってその答えを言い放った。

「今回のことは、オリュンポス12神に關わることだ。なるべくなら、アテナの元に連れて行った方が賢明だろう。本来ならば、三人ともアテナのところへ連れて行く方が妥当だろうが、他の二人は倒しちやっただけだからな。まあ、それは問題じゃないけどな」
「そっか……」

圭熊はチラツと翔馬の方へと視線を数秒程度向け、すぐに水鹿の方へとそれを戻した。アテナのことだろうから、翔馬の首が跳ねるといふことはないだろうが、それでも、圭熊は翔馬を許してほしいと心の中で、どこかしら願っていた。甘い、と言われればそれまでもかもしれないが、友人として翔馬がここで許されないというのは、すごい複雑な気持ちになるのだ。

水鹿は、そんな圭熊の気持ちをも小宇宙から感じ取ったのか、ポンツとその肩を聖衣越しに、軽く叩いた。圭熊は叩かれるなり、ビクツと肩を跳ね上げて驚いたように水鹿の顔を凝視してみせた。

「兄……ちゃん……」

「圭熊。お前の気持ちも分からなくはないが、それ以上に白虎を殺すための刺客として、

こいつはここにやってきたんだ。その友人思いの気持ちは捨てるな、とは言わないけど、それだけは忘れるんじゃないぞ」

「……うん」

圭熊は、水鹿の言うことがもつともすぎるせいで、何も言い返すことができず、その瞳の前で、首を縦に振ることしかできなかった。

水鹿は圭熊の頷きを見るなり、翔馬の方へと歩み寄って、その手を差し伸べた。翔馬は目線を逸らしたままだが、その手には気が付いていたようで、ピクツと肩を動かし反応していた。

「翔馬。オレたちと共にアテナのところまで行ってもらおうぞ」

「……了解した」

翔馬は目線を逸らしたまま、自分の手を水鹿の差し伸べた手に置いた。自分たちが出会い、和解を果たした時に、水鹿はこの手を差し伸べてくれたが、今のこの手は、然るべき制裁を受けるための通過点として、その役目を果たしていることに過ぎなかった。

「アテナの血を……この像に……？」

白虎はアテナの顔と、その後ろの方にあるアテナの像を交互に見つめながら、そう呟き放った。アテナは白虎のその呟きに対し、コクンと首を縦に振って頷けば、その瞳を

アテナ像へと向けた。

「ええ。このアテナ像は、戦いにおいて重要な役割を果たします。そのためにも、まずはこのアテナ像に私の血を与えるのです」

「重要な、役割……か……」

白虎はアテナ像を見上げるように仰いだ。アテナ像のことは、ただの飾りのようなものにはか思っていないかった故に、そういう事実があることにまず、驚いた。アテナ像はここに存在していること自体に意味があつたということなのだ。白虎はそのことに対してひどく感心していた。

アテナはアテナ像をぼーっと見つめている白虎の目の前で、どこからか針を取り出して、それを自分の白い指に突き刺した。その小さく開いた指の穴からは、濃く赤い鮮血が流れ出ていた。白虎はぼーっとしていると、アテナの指から血が流れ出ていることに気が付き、すぐに心配そうに眉を歪めた。

「あ、アテナ！」

「大丈夫です。戦女神として、通らねばならぬ道ですから」

アテナは心配そうな白虎を目の前に、ニコツと優しく目を細めて口元を優しく緩め、そのままアテナ像の方へと視線を向けた。アテナ像はこちらに何かを訴えかけるように、そこにそびえ立っていた。アテナはそれに答えるように、アテナ像に視線を据えて

から、血を垂れ流している指を、アテナ像の土台の方へとあてた。

「さあ、その本当の姿を現わすのです」

アテナがそう呟いた途端、アテナ像はどこからか小宇宙を漏らし、輝かしいばかりの白い光を発し始めた。白虎は何が起こったのか分からない上に、その光の眩しさに耐え切れず、その目を腕の下にやった。

そして、その腕の下の方から、その光にまったく臆していないアテナの後ろ姿を見受けることができた。白虎はそんなアテナに向かって、一体どういふことなのか、と声を発した。

「あ、アテナ……これは一体……!」

「このアテナ像は……私の身をまとう、聖衣なのです」

アテナが白虎の問いにそうつぶやき言い放った途端、光の中から、小さくなったアテナ像がその姿を見せていた。その時はすでに、発せられている光が目にとって痛くはなかったのか、白虎は目を覆っていた腕を下ろして、その小さいアテナ像——いや、アテナの聖衣を見つめていた。その小ささは、自分の手一本でも持てるぐらいのものだった。

アテナはアテナの聖衣が目の前に現れれば、その下に自分の両手を差し出して、降りてくる聖衣をそこに受け止めた。聖衣は、その時には光を発するのをやめていた。

白虎はアテナが聖衣を受け止めるなり、すぐにアテナの方へと駆け寄った。アテナはこちらに駆け寄って来た龍星座の少年に向かって視線を据えれば、優しく微笑みを浮かべ、手にしているアテナの聖衣へとその目を向けた。

「これで、いざという時に安心して戦うことができます。そして、アトロポスのことも……」

「アテナ……」

と、いうことは、アトロポスとの戦いとのために、わざわざこのアテナの聖衣を出したというのか。白虎はアテナのその思いを無駄にはしない戦いを、アトロポスと描こうと思った。

そして、アテナは聖衣を手にながらも、白虎の胸に触れるように、白虎のまもっている聖衣にも触れてみせた。突然こちらに触れてきたアテナに対し、ビクツと体を跳ね上げ、その驚きを隠せない様子で見つめていた。

「あ、あの……」

「……」

白虎が声を掛けた時に、アテナは聖衣から何かを感じ取る事ができたのか、目を開き、白虎の聖衣を凝視していた。

(この感じは……アオイデーの……)

普通の聖衣からは感じる事ができないはずの小宇宙に、アテナは戸惑いを隠せず、冷静を保てずにいた。一体、どこからこの小宇宙が出ているのか、そして、一体どこからどうやって、この龍星座の聖衣から出ているのか、分からなかった。

アテナの様子がどこかおかしいことに気が付いた白虎は、自分の聖衣を凝視して固まっているアテナに対して、片手を上げて、遠慮がちなながらもそつと声を発し掛けた。

「あの、アテナ？ 私の聖衣に何か変なものでもついていましたか？」

「えっ……ああ……」

白虎に話し掛けられ、ハッと気が付けば、アテナはその硬直状態から解除され、白虎に何か返そうとしているのか、どこか引きつっているような苦い笑みを浮かべた。白虎はそんな相手を目の前にして、どうしても心配せずにはいられないのか、少し腰を曲げて、アテナの顔を覗き込むように、その表情を見つめた。そして、大丈夫かどうか確認するために、質問を投げかけた。

「大丈夫ですか？ もしかして、体調が優れないとか……」

「あ、うん。大丈夫。大丈夫ですよ、白虎。貴方が心配するようなことは何もございませ
ん」

心配し、こちらに何度も確認を促してくる白虎に向かって、アテナは眉をハの字に下げ、しかし笑みを浮かべながら答えた。しかし、その笑みは、やはりどこかぎこちな

いもので、白虎の中の心配を加速させるしかなかった。

「本当の本当に、大丈夫なんですか？」

「ええ、本当の本当にです。それよりも、天闘士が現れたというところを教えてください」

しかし、白虎の心配に反して、アテナは話をすり替えようとしていた。白虎は腑に落ちないような表情をしながらも、アテナのその提案に乗るように、「はい」と一言だけ返事をした。返事をした白虎を見るなり、アテナは安心したのか、ホッと息を漏らして、それから、少しだけ思いに更けた。

（まさか……白虎の聖衣は、アオイデーの血によって……いえ、十分にありえるかもしれないわ。私の血でも聖衣は蘇るのだから、アオイデーの血でも可能なはず。そして、何よりも白虎のアオイデーの媒介……今の龍星座の聖衣の方が、白虎の力を十分に發揮できるかもしれないわ）

翔馬、水鹿、圭熊の三人は、アテナ神殿へと向かうために十二宮を歩いていた。聖闘士としてはではなく、聖域への侵入者としてここを歩いている翔馬は心の中がそわそわして、どうも落ち着かなかつた。その上、いつもは何も考えずに歩いている十二宮だったゆえ、なおさら緊張感で張り詰めていた。他の二人に関しても、まさかこんな形で再

び翔馬と十二宮を歩けることになるとは信じられず、ただ、各々の拳に、その気持ちを含めていた。唯一の救いと言えば半分以上の黄金聖闘士たちが任務により十二宮にいないことか。もし、黄金聖闘士が全員いれば、さらに面倒なことになるこの上ない。

三人はそうして十二宮を歩き続けた。特に何も障害もなく、黄金聖闘士にも対面せずといったところか。そうして天秤宮の中へと三人が足を踏み入れた時だった。

「……い」

——天秤座の聖衣が、自分たちを出迎えるかのようにそこに存在していた。その身に黄金の光をまとい、薄暗く、外からくる光しか照らすものがない中で。

水鹿は天秤座の聖衣を見るなり、すぐにそちらの方へと駆け寄って、その上に自分の手をかざして様子を確認した。水鹿はこちらに流れてくる天秤座の光をその身に受けながら、天秤座の聖衣の質感や冷たさをその手で実感し、光に対して目を細めていた。しばらくその状態で過ごした後、水鹿は天秤座の聖衣からその手を離れた。

一連の流れを見守るように見ていた圭熊は、一体どんなことが天秤座の聖衣から読み取ることができたのか気になったのか、水鹿の方に向かって、不思議そうな疑問そうな表情をその少年らしい顔に浮かべながら、その疑問を投げかけてみた。

「なあ、兄ちゃん。何か分かったか？」

「……いや」

水鹿は圭熊の方へと体を顔を向けて、質問に対して答えるかのようにわずかに首を横に振りながら、相手の方へと一步一步足音を立てながら歩み寄った。ちらりと天秤座の聖衣の方へと視線を向ければ、顎に己の手をあて、目を若干細め、眉は少しだけシワを寄せて、その整った顔は少しばかり難しそうなものになった。

圭熊は、きよとんと元から丸みを帯びている目をさらに丸くして、それを閉じたり開いたりさせながらパチクリとし、難しげな表情をそこに浮かべている目の前の青年を目を凝らすように、目に力を入れてジツと見つめていた。そのぐらい、水鹿のことが気になっっている、ということである。

こちらを凝視してくる目の前の彼に対して、水鹿は、「ん」と口を閉じながら喉と鼻だけでだけで声を発してから、クスツと、落ち着いたように静かに息で笑い声を立てて、宥めるかのように圭熊の肩に自分の手を置いた。

「圭熊。そんな期待されるほどの内容じゃないよ」

「な、なんだー……すんごい難しい顔してるから、何か深刻なことがあるんじゃないかと驚いちゃったよ」

圭熊は水鹿から話を聞くなり、「ハア」と大きく口を開いて息を吐き、張り合いがなくなり全身の力が抜けたように、その場で脱力した。しかし、「ただ」と水鹿はまだ何か言いたげな表情と言葉を放ってから、両腕を組み、天秤座の聖衣の方へとその体を向けた。

圭熊の方もそれに釣られて天秤座の聖衣の方へと、体を向けた。その手は腰にあった。

水鹿は圭熊が向こうへと体と視線を合わせるなり、「ただ」という言葉から続けようとしていた言葉を言い放った。

「天秤座の聖衣が白虎の元へと連れて行って欲しい、と言っているような気がしたんだ」
「……聖衣がアイツのところへ？」

「ああ、オレの中ではそう聞こえたよ。白虎のところへ連れて行ってほしいってね」

圭熊の質問に対して、首を縦に振りながらそう答えれば、近くにあった黄金色の天秤の文様が描かれた聖衣箱の方へと歩み寄ってから、そのベルトを掴み、それを持ち上げて天秤座の聖衣の前へと置いた。その瞬間、天秤座の聖衣は再び黄金の光を放ちながら、その場に浮かび、自分のあるべき居場所、言わば目の前の聖衣箱の方まで動いて、その場で降りてその身を置いた。

水鹿は天秤座の聖衣が聖衣箱の中へ仕舞われるなり、その蓋を閉じて、ベルトを自分の肩へとかけた。それから圭熊の方へとスツと視線を動かして向け、言い放った。

「あのバカはアテナ神殿にいる。多分、こちらに戻ってきたとしても、途中で遭遇はするだろう」

「で、その時に、その天秤座の聖衣を渡すってこと？」

「……そういうことだ」

圭熊の読みは一句も逃さず見事に当たっていたようで、水鹿の顔は、これから言おうとしていたのに、と微妙な呆れと複雑な感情が見え隠れしており、その眉も若干ハの字になって下がり、口からため息が吐き出されていた。圭熊は自分が水鹿の言おうとしたことをすべて言ってしまったことに対し、ハハツと誤魔化すようにどう反応していいのか何となく笑みを浮かべていた。

水鹿はそんな圭熊を、「フウ」と息を吐きながら、口端を緩めながら見つ、天秤座の聖衣箱を背負いながら、そこから翔馬と圭熊の後ろに立つて歩き始めた。

「ま、いいさ。ほら、行くぞ」

「あつ、ちよつ、待つてくれよー!」

先に歩き出した水鹿に向かって、圭熊はその後ろ姿を追いかけるように、いそいそと足を小走りさせてそこから進み始めた。翔馬はそんな二人の後ろ姿を、一人歩きながら見つめれば、視線を地面の方へと伏せた。

——瞬間の出来事だった。

『イカロス……イカロスよ……聞こえますか』

「!」「!?!」「なんだあつ?!」

その声は、改めてアテナ神殿へと向かい始めた三人の足をピタツと止めた。一度も感じたことがない小宇宙に対して、水鹿と圭熊は一体何事かと、互いに背中を合わせて、天

秤宮内を見回しながらその場で警戒して、翔馬に至っては、「なぜだ」と言いたげな様子で、かなり驚いている様子で、目を見開いて天秤宮の天井を見上げていた。

こちらの方に語りかけてくる声の主は、翔馬に向かって、強く、芯のある声で言い放った。

『他の実力の天闘士が倒され、生き残っているのは貴方のみです、イカロス。なのに、聖闘士に捕まっているなど……情けない』

「……っ」

相手のその言い方に、翔馬の声は喉の奥の方で詰まり、その顔は悔しく、そして悲しく歪んだ。自分でもそう思っているからこそなのだろうか、それとも、そんな自分が嫌だから、そういう表情をしてしまっているのだろうか。

圭熊はそんな翔馬の顔を見れば、体の横で拳を握り締めて、声に向かって反論するようには見えない相手がいるかもしれない天井へと顔を上げて、そこを右手の人差し指で差し、宮全体に鳴り響くような大声で言い放った。

「おい、そこのお前ッ！ お前が白虎を殺そうとしたり、翔馬をその使命に架せた犯人か！」

「圭熊ッ！」

水鹿は反論に入った圭熊を宥めるように、合わせていた背中をそこから離し、圭熊の

背中へと視線を向け、相手を抑えるようにその肩に自分の手を置いた。だが、圭熊はそれに構わず、言い続けた。

「どんだけお偉い神だか何だか知らねえけど、なんで白虎のことを殺そうとしたり、それを翔馬に背負わせたりしてんだよ！　こんなの、酷すぎるだろうがよ！　まだ子どもの俺たちにとってはさ！」

圭熊は、思い思いのことを姿も見えない相手に向かってぶつけていた。そうだ。まだまだ子どもである自分たちにとって、こんな状況はあまりにも酷すぎる。だが、その酷な状況を何とも思わないのが、相手であり、そして、「神」なのであろう。

声を主は、そんな圭熊に向かって、冷たく言い放った。

『今の状況が「酷」？　——下らない、少なくともこれは、二人に対して与えられた運命にしかな過ぎない。二人はそうあるべき運命だったのだ。そもそも、この二人が仲良くなることなど私は予想だにしていなかったのだ』

「だからって——！」

『では、聖闘士。貴様が二人の運命を塗り替えてくれるというのか？　神でも何でもない、ただの聖闘士の少年である貴様が、この状況を塗り替えてくれる、というのか？』

「そ、それは……ッ！」

圭熊はそこまで言われて、握ってきた拳を緩めて、視線を地面の方へと落とし、思わ

ずその場で押し黙ってしまった。

(くそっ……！)

圭熊の齒はギリツと音を立てて、その圭熊の悔しさを表現していた。自分にそんな真似ができたなら、どれだけ幸せになれるのだろうか。確かに自分はただの聖闘士であり人間で、神が定めた運命などに逆らうことなどほぼ不可能。確かに自分など、所詮は神の養分しか過ぎないのかもしれない。圭熊はそのことに対して、反論する術など持つていなかった。だからこそ、何か反論しなかった。

「運命など、所詮はただの道でしかない。ならば、私たちでもその運命は塗り替えることができるはず」

「……この声……！」

聞き覚えのある声と、一つの足音が、天秤宮の中で鳴り渡った。圭熊と水鹿、そして翔馬は思わずそちらの方を振り返った。その足音と声の主は、翡翠色の聖衣を光らせ、その肩甲骨まで伸びた髪の毛を揺らし、周りより若干高めな聖衣のヒールから音を立てていた。

——白虎だった。

「白虎……」「白虎ッ！」「……！」

白虎は宮の天井を睨みつけるようにして見つめながら、手に持っている白い剣を床に

突き立てて言い放った。

「自分の運命は自分で描き出すものだ。定められた運命なんて、所詮は私たち人間が逆らうためにあるものでしかない」

『アオイデーの媒介ごときが生意気だな。運命に抗うことなど、不可能だ』

「少なくとも、私はそうは思わない。だって、私たちは何度も何度も戦いを切り抜けてきた。今回も、皆で力を合わせれば……」

『バカを言うな』

冷たく張り詰めるような口調。圭熊たちはビクツと肩を跳ね上げながら驚き、白虎はそれに対して特に何も反応を示さず、ただそのまま視線を天井に据えていた。

『力を合わせたところで、どうにもならない運命というのはあるものだ。それを貴様は変えられるとでもいうのか？ 誰もが、いや、神さえもがその運命に抗うことは不可能なのだぞ』

白虎はその言葉に対して、コクンと首を縦に振って、言い放った。

「もちろん。『奇跡』という言葉は、その不可能を可能するためだけにある。なら……この奇跡、私たち聖闘士が起こしてみせるッ！」

『……愚かな人間よ』

白虎のその言葉を聞いた途端、相手は一言だけ残してから、その小宇宙がフツと途絶

えてしまった。白虎は両腕を組み、その腕を一層強くギユツと抑えるように硬く結ぶように組み、小宇宙が途絶えた今もその天井を見つめていた。圭熊と水鹿、そして翔馬はそんな白虎の後ろ姿を見つめながら、そこに黙って立っていた。

白虎は、「フウ」と息を吐きながら、組んでいた両腕を離し、片手には剣、もう片手には自分の頭をポリポリと搔かせて、首と体を回し、三人の方へと視線を向けた。

「あーあ。愚かっって言われちゃったやー。まったく、こっちがどれだけの勇気を振り絞って、そっちに反論したと思ってるんだか」

神に反論した後とは思えない、白虎のその反応に対して、三人は驚くどころか、苦笑してその反応を見せていた。白虎はそんな苦笑している三人をよそに、「まあ」と続けた。

「神の数人……いや、数十人ごとき、今の私たちからしたら怖くなどない。いや、怖がっていたら、戦いになどならない。そうだろう？」

「……そうだな」

白虎の言葉にいち早く同意の言葉を述べたのが、圭熊だった。圭熊は目の前にいる相手に、ニツと笑みを浮かべながら、右手で作ったその拳を、方の高さまで上げた。白虎はそれを何の意味を持つのかすぐに察したのか、こちらも同じように、そして相手と向かいになるように、左手を握りしめた拳を方の高さまで上げた。

「俺らはアテナ以外の神には逆らうつもりで、聖闘士やってんだよな。なら、もう何も怖くなんてないよな」

「うん」

そして、二人の拳が互いの方へと伸び、その真ん中で二人の拳がコツンと合わさった。その拳合わせは、二人の決意や意思の固さをそのまま表していた。もう、これ以上、何も迷うことはないんだ、と。アテナ以外の神に逆らうことなど、自分たちにとっては何も怖くないのだ、と。そうして互いに笑みを浮かべ合った。

一方で、ここにいるには非常に気まずいであろう翔馬の存在に、白虎は気が付いていた。白虎は圭熊から視線を離して、翔馬の方へと流した。翔馬は白虎に視線を向けられるなり、やはりといったところで、視線を、ふいっと逸らしていた。白虎は、「仕方ない」と翔馬の反応を見ながら思いつつ、そちらの方へとゆっくりと歩み寄った。

「翔くん」

「……」

白虎が呼び掛けたところで、その視線は逸らしたままだった。白虎はその気持ちは十分に分かっていていたものの、どうしてもやり切れない気持ちというものもあった。白虎は右手で剣を持ち上げれば、その先を翔馬の方に向けた。

「アテナが大事か、それとも、自分の使命の方が大事か……返答によつては裏切り者とし

て、ここでその首を斬らせていただく」

白虎の言葉は当然のものだった。聖域を裏切る以上は、そのぐらゐの覚悟は持つていて当然というものだ。そして、同時に白虎のその言葉は翔馬を試すものではなく、本気であった。白虎の小宇宙は、他を一切許す気もない怒りで燃え上がっており、言い訳をした上で許しを請う者であれば、それこそ処刑すら躊躇わない。翔馬は今の白虎には何も通じない、と思いつつも、その口を開いた。

「俺は……」

その時起こったのは、翔馬からしたら驚くようなことだった。

「……」

突然、自分の元に光が降り立ってきたと思えば、その中から現れたのは天馬星座の聖衣だった。翔馬はその電撃のような衝撃から、何も言えないのか、ただ、黙ってその天馬星座の聖衣を見つめていた。それについては、水鹿と圭熊も同じであった。白虎は、フツと笑みを浮かべながら、剣を下ろし、翔馬と天馬星座の聖衣の両者を見つめ、呟いていた。

「聖衣は嘘を吐かない、か……」

気が付けば、天馬星座の聖衣は翔馬の体を覆って、そこに聖闘士としての鎧で姿を現していた。翔馬は天馬星座の聖衣に体を纏われれば、その顔を白虎の方へと向けて、な

ぜだと言わんばかりに目を見開いていた。白虎は微笑みを浮かべながら、翔馬の方へと歩み寄って、その肩を、ポンと叩いた。

「天馬星座の聖衣がここに来たってことは、アンタがまだ聖域側の人間であることを示している証拠。だから——もう一度、わいらと一緒に戦ってくれるね？」

威圧感のある物言いではなく、いつもの訛りが入った口調での、優しい問い掛け。翔馬は目頭を熱くさせながら、しかしそれを堪えるように目を閉じて、体の横でその拳を握りしめた。

「ああ……もちろんだッ……」

58 : 「ステージの幕開け、開戦」

「なあ、ところで白虎。お前、本当何の事情をパルナツソス山？　で告げられてきたのよ。これからどうすべきか、お前が一番知ってそうなんだけど」

「あ、ああ……」

圭熊が首を傾げながら、こちらをキョトンと見つめながらこちらに聞いてくれば、白虎は微妙に曖昧に首を縦に振って頷きながらも、そちらの方へと顔を向けた。白虎は一回、辺りを見渡すかのように、首を左右に動かしながら自分以外の三人のこゝろを見つめれば、圭熊のその質問に答えるかのように、言い放った。

「パルナツソス山にいる神から聞いた話なんだけど……。実は、モイラという運命の三女神のバランスが崩れて、世界の境界線でもんでもないことになっているそうなんだ。特にその元凶の奴がとんでもない力を持っていて、私はそいつをどうにかするために、この剣を預かってきた」

そう言うと、白虎は圭熊たちに向かってスツと、その手に持っていた白銀に輝きを放つ剣を差し出した。圭熊たち三人はその剣と白虎の顔をまじまじと見つめた。こういう黄金ではない武器が聖域に持ち込まれるのが珍しいためか、少年心ゆえ、なんとなく

惹かれるものがあるのだろう。白虎もそれを分かっているわけではないわけではないもの、こうして見つめられると恥ずかしいところもあるのか、すぐに剣を引き、下ろした。そして、話を続ける。

「特にその元凶のやつは、他の世界線とこちらの世界線の運命を見事に狂わせたらしい。詳しいことは言えないが、例えばこちらに生まれてくる予定だった人物を、その他の世界線で生まれさせたりしてね。だから、その元凶のやつをぶっ飛ばしてこよう、と先ほどアテナと話してきたところだ」

白虎は一通り説明を終えると、「フウ」と息を吐いて、剣を地面へと立てた。そして、翔馬の方へと視線を向けた。

「翔くん。そんなわけだから、そいつを倒すまでは、私は殺されるわけには行かないんだ。察してくれ」

「……ああ、それは了解した……が」

どうやら、翔馬は聖闘士に戻れたとはいえ、天闘士としての役目も忘れていないのか、白虎の言うことに冷静に頷いていた。しかし、その言葉は何か質問が一つある様子だった。白虎はこちらに疑問を持っているらしい翔馬を、頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら見つめた。

「何?」

「ああ……」

翔馬は白虎に話しかけられるなり、非常に疑り深そうな瞳で、相手の方を見つめていた。白虎はまた何か言いたいことがあるのか、と翔馬の方を睨み付けるようにして、そのおっとりした垂れ目の瞳を鋭く光らせていた。圭熊と水鹿はその二人の様子を慌てているように見ているようで、その額には、内心に秘めている二人の中の不安を表すかのように、数滴の汗を垂らしていた。

翔馬と白虎はそんな二人の様子を知ってか知らずでか、数秒間、睨み合うように互いを見つめれば、先に翔馬の方から口を開いた。

「お前のその時代がかった口調は、何か企みでもあるのか？」

「……は？」

白虎は目を見開き、相手が言い放ってきた言葉に驚き、水鹿と圭熊に関しては、拍子抜けして、体の力が抜けたのと同時に、そのことに関してはあえて口を閉ざしていたのに、と憂鬱そうな表情をしながら二人のやりとりを見つめていた。

翔馬から質問を向けられた白虎に関しては、何を突然、という表情を先にしてから、質問の意味を汲み取り、理解。向こうがあまりにも真剣な様子で、どうでもいいことを聞いてくるので、意味が分かった途端、白虎の方も心の中でその緊張感がほぐれていった。そして、白虎はそれを感じるなり、翔馬の方へと右手の人差し指を向けて、歯からは八

重歯をちらりと見せながら、相手へと言い放った。

「特に何も企んでいるわけじゃない。この口調だって、わいの一部やもん」

白虎はそうして以前は当たり前のように浮かべていたやんちゃそうな、悪戯が大好きそうな子どもの微笑みを、その大人びてきた顔に浮かべ、向こうへと向けた人差し指を、「バーンッ」と口で効果音を発しながら、銃を上げるように、天へと向けた。

「ま、はつきり言っちゃえば、『気分』ってものやで？ あんまり気にしちやアカンよ」

「ぐ、ぐう……」

こんな時ばかりいつもの調子に戻る白虎に対して、翔馬は悔しそうに顔を歪ませながら、この場はおとなしく引き下がることにした。圭熊と水鹿に至っては、「何やってんだ」といった様子で、白虎と翔馬の二人に向かって、呆れのような視線を見せた。

そして、水鹿は何かに気が付いたように、ハッとその視線を白虎一点に集中させた。

白虎自身も、水鹿のその視線の変化に気が付いていたようで、水鹿の方へと顔を向け、質問した。

「何や、水鹿。アンタもまだ質問があるん？」

質問はもういい、といった様子で、白虎は水鹿を見ていた。だが、水鹿はそれに対して、白虎に対して否定から入った。

「いや、違うよ。オレらはお前に『コレ』を届けようと思って、アテナ神殿へと向かって

いたことを思い出したんだよ」

「コレ?」

白虎が水鹿の言葉に対して、キョトンと瞳をパチクリとさせている前で、水鹿はその背負っていた黄金の聖衣箱——天秤座の聖衣箱をそこから離して、ベルトを片方持ちながら、白虎の方へと差し出した。白虎は「！」と若干驚いている様子で、水鹿から差し出されたそれを受け取った。そして、首を傾げながら、水鹿の方へと視線を向けた。

「天秤座の聖衣……? なぜ……?」

水鹿は疑問そうな顔をしている白虎に対し、「ああ」と小さく声を上げながら、白虎の手に行っている天秤座の聖衣箱に自分の手を置きながら、言い放った。

「天秤座の聖衣の小宇宙が『白虎の元に連れて行って欲しい』と訴えかけていたような気がしたんだよな。何でかは分からないけど」

「天秤座の聖衣が、か……」

白虎は聖衣箱のベルトを一層強く握り締めながら、その目線を地面の方へと落とし、天秤座の聖衣が自分を呼んだ、ということはその時がきた合図なのだろうか。それにしても、随分急な気がしないでもないし、白虎の中では違和感らしい何かを拭えなかった。白虎は聖衣箱にそつと手を当てて、その小宇宙を感じ取った。

「……!」

すると、何かに気が付いたように、目を見開き、顔を上げて天秤宮一体を見つめるように、キョロキョロと視線と顔を動かした。そして、目の前にいる水鹿の横を通り過ぎるように、そのまま前の方へと歩き始めた。

突然、白虎が行動を起こしたものだから、それを見ていた水鹿たち三人は、驚きの色をその顔から隠せない様子であり、白虎のその背中姿を見つめていた。圭熊は突然にして歩き出した白虎を見るなり、白虎の方を指差して、これまた驚きを隠せない声音で白虎に質問を向けた。

「び、白虎？ い、一体、何を感じたんだ？」

「……いや」

白虎は圭熊に引きとめられるように質問されるなり、そこまで進んでいた足を、ピタツと止めて、圭熊には背中を向けたまま、その質問に応えるように言い放った。

「天秤座の聖衣が何かを感じ取ってたようで、わいらに誘導をかけている気がするんよ。それが一体、何を意味するのか……わいには分かりかねるけど」

白虎はそこまで言うのと、クルツと体を回し、その視線と体を三人の方へと向けた。

「だから、アンタらにも着いてきてほしい。この天秤座の星の路の誘導のままに、さ」

「おうよ、もちろんだ」

「ついて行かない手はないさ」

「……」

三人は白虎に向かつて了承の意を見せるかのように、微笑みを浮かべながら、コクンと首を縦に振って頷いてみせた。白虎は了承の意を見せてくれた三人に向かつて、その顔に笑みを浮かべながら、言い放った。

「ありがとう。じゃあ、行ってみようか」

白虎はそう言うと、再び背中を向けて、足を一步一步前進させ始めた。水鹿たちもその背中を追うように、白虎の後ろからついていった。

そうして四人は天秤座の聖衣に導かれるままに、その場から歩き始めた。白虎たちの進んでいる方向は、十二宮の上の方、言わばアテナ神殿の方であった。きっと、アテナに何かヒントがあるのだろう、と思い、白虎たちは天秤宮から天蠍宮、天蠍宮から人馬宮へと進んだ。同時に、白虎は一步一步アテナ神殿へと近づいた。気がなっていたことがある。

(……この小宇宙の雰囲気、いつもの十二宮とは違うような気がする)

そう、アテナ神殿へと近づいたときに、先ほどの十二宮とは違う雰囲気と小宇宙を感じ取ることができるのである。これが一体何を意味しているのか、白虎たちには知り得ないが、ただ、アテナ神殿の方で何かが起こっていたのは確かであろう。白虎はアテナ神殿へと近づく毎に、目を細めながら、その警戒を強めていった。天秤座の聖衣が誘導す

るほどだ。アテナ神殿に異変が起こったに違いない。

白虎たちはアテナ神殿に辿り着くなり、その異変をすぐに察知した。いつも自分たちが来ているアテナ神殿は、もつとアテナの小宇宙によって覆われているような気さえするのだが、その小宇宙を圧力するかのように、何者かの小宇宙が、アテナ神殿へとそれを広めていた。白虎に至っては、天秤座の聖衣箱をその背に背負いながら、神殿の中を小股で早足に歩いたり、小走りをして、自分たちが忠誠を誓っている神の姿を探し始めた。この小宇宙の変化に、聖闘士が落ち着いていられるはずもなく、水鹿たちも白虎に釣られるかのように、アテナの姿を探し始めた。

白虎はその顔を不安で歪ませながら、アテナの姿を探していると、ふと、目についたものがあつた。それは地面へと突っ伏して倒れている人で、髪の毛は透けるような茶髪——白虎はそこまで確認するなり、すぐにそちらの方へと勢い良く走り出した。

「アテナアツ！」

白虎の目線についたのは、その場で倒れ、突っ伏しているアテナ・ラティエルの姿だった。白虎はまさかとは思つたものの、こんなことになっているとは思つていなかったのか、アテナが倒れていることに衝撃を覚えずにはいられなかった。

「どござして……」

(なぜ、一体こんなことに……!)

ポセイドンにさえ、全く屈していなかったアテナが、こんな何も変哲のないところで倒れるなど、そうそう有り得ないことだった。白虎はアテナの元まで駆け寄り、近寄れば、すぐにその手を使ってアテナの体を揺らし、意識や息を確認するために、相手の口元へと己の耳を近付けた。白虎の耳には、アテナの少しばかり荒めな吐息と呼吸が入ってきた。

(よかつた……とりあえず安静なところでゆっくりさせなきゃ……!)

白虎がそうしてアテナを持ち上げようとした時、他の三人が自分とアテナの方へと駆け寄ってきた。こちらに駆け寄ってくるなり、早速その状況に驚いたのは圭熊だった。

「白虎ーっ！ って、アテナの姉ちゃんどうしたの!? 大丈夫なのか!」

圭熊は白虎の元へと駆け寄るなり、白虎が腕と手を使って持ち上げているアテナの姿を覗き込むようにして見ながら、目を見開いて、心配と驚きが入り混じっている表情を浮かべた。他の二人も、大きなリアクションはそれには見せなかったものの、この状況だ。何ともいいがたいような難しい顔をし、こちらの方を見つめていた。

白虎は緊急事態に脂汗を一滴額の上に垂らしながら、自分の元に駆け寄ってきた三人に対して、言い放った。

「大丈夫、安心して。アテナは気絶しているだけ」

「そ、そっか……」

事を伝えられた三人の表情が一瞬にして柔らかくなつた。だが、そう簡単には安心はできないのか、三人の表情はすぐに難しいものに戻つて、その視線をアテナ一点へと集中させた。白虎もその例外ではなく、自分の腕の中で気絶しているアテナをジツと見据えながら、この抱えている力を若干強めた。

（一体、何者がアテナをこんな風にしたんだ。この小宇宙の雰囲気では、聖闘士やそういう方面の奴らのものとは考えにくい。唯一考えられるのは……）

——神、か。

白虎は目を細めて、アテナが倒れた場所へとその視線を向けた。アテナの加護によって包まれているこの神殿と十二宮。それを意図もたやすく破り、アテナに攻撃しにくるなど、神ぐらいしかないものだ。では、神にしても、一体どの神がアテナに攻撃したというのか。ハーデスやポセイDONは現状では有り得ないので、除外することにして、自分がかつて顔を合わせたことがあるムーサの神々でさえ、アテナとはそういう仲には見えなかった。オリュンポス十二神の可能性も高いわけだが、その神々はあくまでも自分を狙っているわけで、わざわざ、アテナを攻撃するといった遠回しな真似はしないであらう。

そして、思考はどの神がこんなことをしたのか、といったところまで戻る。白虎は拭

えない疑問に頭を悩ませながらも、アテナがゆっくり安静にできるように、教皇の間にある医務室の方へと足を進め始めた。

(ハーデスでもポセイドンでもなければ、オリュンポス十二神でもない。だとすると……)

白虎は考えられる可能性に、思わずその足を止めた。

(そうだ……先日から散々その話題を出したはずだ……なんで……なんで、すぐに気が付くことができなかつたんだろう！)

白虎は自分の後ろからついてきている、青少年三人に構わず、そこからは走って教皇の間へと向かい始めた。昨日の今日まで何度何度も自分の頭の中から離れようとしなかつた神の名前があつたはずだ。なのに、どうして、こんな時に限ってすぐにその名前が脳裏から出てこなかつたのか。

圭熊は白虎が走るなり、それを追いかけてようと自身も追いかけて始めたが、すぐに水鹿に肩を掴まれ、止められた。圭熊は止められるなり、水鹿の方を振り返つた。

「兄ちゃん……」

「あいつ、何かに気が付いたようだな。とりあえず、今はここで見張っておこう」

水鹿は圭熊にそう言い放つなり、目線を目の前の少年の方から、元々アテナ像があつた場所へと移した。水鹿は先ほど、神殿へと足を踏み入れた時から気になっていたの

だ。なぜ、あんな巨大なアテナ像が、忽然とその姿を消しているのか、と。ちよつと遠く離れた場所で、聖域の方を振り向くと、必ず見えるのがアテナ像なのだが、そのアテナ像がこんな一晩で姿を消している。

（もしかして、今回のことと、このアテナ像のこと、関係が結びついていてもいいのか？ だとしたら……）

水鹿は白虎が向かった先、平たく言えば聖域全体を見回すことができる方向へと顔を向け、そちらの方へと視線を据えた。途端に、神妙な顔つきになる。

（今回のことは、すでに戦いが始まっている、という合図なのか。そして、今日までの話を繋げてしまえば、白虎はその戦いの重要人物ということになるのか……白虎が重要人物とは、世の中も末だな……）

白虎が戦いの重要な役割を担うとなると、破天荒な展開しか思いつかなくなるわけで、水鹿は思わず笑みを漏らさずにはいられなかった。水鹿は世の中も末だ、とは思ったが、それも悪い意味ではない。

（白虎、頼むぞ。アテナを最後までサポートし切れるのは、多分お前だろうからな）

白虎は教皇の間まで走り抜き、医務室の扉を蹴散らすように足で開くと、すぐにベッドへと直行。そこにアテナを横にさせて、その体に羽毛を被せた。それから、背負って

いた天秤座の聖衣をその近くの床に下ろした。白虎はそこまでの作業を終えるなり、「はー」と長く息を吐いて、その場で少し滑りつつ引きずるように、床に膝をつけて崩れた。そのまま腕を目の前のベッドの縁へと伸ばし、それを手で掴んだ。

（まさか先にアテナに来るなんて……盲点だった。天秤座の聖衣が教えてくれなければ、気付くこともなかった……）

白虎はちらり、と天秤座の聖衣の方へと視線を向けた。この天秤座の聖衣が、誰よりもいち早く聖域の変化を察知したということ、白虎はそれに感謝せざるをえなかった。もし、このまま水鹿たちと共に戻っていたら、こんな重大で重要な危機に気が付くことができなかった。

そして、一方で白虎は、本格的に戦いが始まった、ということを実感し始めていた。アオイデーから知らされた時は、まだまだ先のことだと思っていたが、そんなことはなかった。白虎は崩れた膝を持ち上げるかのように、その場に立ち上がり、アテナの方へと視線で言い放つ。

（アテナ、タオルを水に濡らして、それを持ってきますね）

そうして、白虎がその場から離れようと、一步步き出した、次の瞬間だった。

「……!?!」

白虎の体を押し付け潰すかのように、多大なプレッシャーが襲い始めた。白虎はプ

レッシャーにより、その場で立っていられなくなったのか、足どりの不安定感を実感しながら、よろめき、そのまま勢い良く膝を床に落とした。そして、白虎は両手を床に付けて、その場で四つん這いになって、そのレッシャーに対して負けていた。

白虎は息苦しい中、「はあはあ」と息を荒げながら、その顔を上げて、動かし、医務室を見渡した。このレッシャーから感じる小宇宙、明らかに先ほどアテナ神殿で感じた小宇宙のものだった。あまりの息苦しさに声を発することも億劫だった。もし、これで声が出せたら、いつものように声で振り払うことも可能なわけなのだが、それもできない。

「ぐっ、うう……」

だが、白虎は立ち上がろうと、その場でよろめきながら、膝を床から持ち上げた。この程度のレッシャーに負けていたら、アテナの聖闘士の名が廃る。白虎は足を、全身を震わせながら、前の方へとその目を見据えた。この小宇宙とレッシャーの主は一体どこにいるというのだ。白虎が探し出そうと、ゆっくりと歩き出した途端のことだった。

「アオイデーの媒介……噂には聞いていたが、本当に男とは思えぬほど端麗な外見だ……」

突然、白虎の耳の中に入ってきた声。白虎はその声が聞こえてくるなり、まさかとは

思いながらも、すぐに顔を上げ、そちらの方へと顔を向けた。

白虎の視線の先にいたのは、一人の女性だった。女性は、床に着くぐらいにスカートが長い真つ赤なドレスの上に鎧を着、そこから伸びる白い腕と顔は、同じように肌が白い白虎とは違って、赤みなどはなく若干不健康そうにも伺える。その瞳は赤く切れた釣り目、そして、髪の毛は暗い煌めきを放つ黒髪の腰まであるロングヘアであった。女性はその赤い口紅が塗ってある口元を、怪しく緩ませながら、白虎の方へと一歩一歩歩み寄った。

「アオイデーには勿体無いぐらいだ。私の媒介——いや依り代であればどれだけ幸せであらうか……」

「な、何者だ……」

こちらに歩み寄ってくる女性に対して、白虎は苦しそうな表情を浮かべながら、喉の奥に詰まっているものを必死に絞り出すようにして言い放った。女性は、「フツ」とだけ笑みを浮かべれば、手に持っていた杖を地面につけて鳴らし、言い放った。

「私はモイラの三相一体の破壊者である、不可避の女神・アトロポス。運命の糸を断ち切る者よ」

「お前が……アトロポス、だ、と……？」

白虎は自分を名乗り上げた女性・アトロポスの方を睨み付けるように見つめた。その

瞳の中には、とうとうその姿を現したか、といった感情が込められていた。しかし、その視線もこの状態では説得力の欠片もなかった。アトロポスは白虎の目の前まで歩み寄れば、白虎の白い顎をその手で持ち上げるように触れた。

「そうだ、私がアトロポスなのだ。愚かな人間どもの運命を切り、変えるアトロポス。昔から人の運命を調節する役目を担っていたが、人の運命など、いじったところで全く面白くもないのだ。いつそのことならば、神々に関係するところで、その運命をいじりたい」

「まさか……そのためだけに、メレテーの媒介の少年を……!?!」

「ああ……そんなこともあったな。お前だけはそれに干渉されなかったようだが」

アトロポスは悔しく、そして諦めきれずにいた、といった表情で、白虎のことを見つめていた。どうやら、白虎のことに関しても、別の世界線で生まれさせようと企みを持っていたようだった。一方で白虎の方は、到底神とは思えない自分勝手な行動をしている目の前にいる女神を名乗る女性に対して、何とも言えぬ苛立ちを覚えていた。どんな形であれ、世界線のそれぞれの運命をいじることは、どんな偉大な神でも許されぬこと。そのことを分かっている上で、いや、分かっていたとして、この女神には関係ないのであろう。ただ、自己満足のために仕出かしていることなから。

アトロポスは白虎に対して嘲笑するかのように、鼻息で笑みを浮かべれば、白虎の顎

を持つているその手を、今度はその横にある髪の毛へと手を伸ばした。ムーサからの報告により、すっかり伸びてしまった髪の毛。アトロポスはその髪の毛に触れるなり、途端に厳しい表情となる。

「……気に食わないな」

アトロポスは目を細めながら、それだけ小さく呟きつつ白虎の方へと言い放てば、すぐにその髪の毛から自分の手を離して、白虎の方から一步後ろへと下がった。

「そう、アテナとアオイデーといった二人の女神から守られているお前が気に食わないな。あまりにも恵まれすぎる。お前はこの世界線に生まれるべきではなかった」

アトロポスはそれだけ言うと、目の前の白虎に対して自分の背中を向けて、医務室の中を、まるで聖域全体を見渡すように、首を動かしながら見つめていた。

白虎はそろそろ向こうからかけられているプレッシャーにも慣れてきたのか、息苦しさはなくなってきたっており、体の方も幾分か普通に動かせるようになっていた。そして、それを確認するなり、白虎はアトロポスの方へと改めて視線を向けた。アトロポスは手に持っている杖を、小さく鈴の音を鳴せば、その横顔を白虎に見せて、こちらの方へと鋭い視線を向けた。

「お前のように何もかも恵まれている者を見ると、虫酸が走る。破壊者と恐れられている私からすれば、お前のような者は壊したくなるほど嫌いなんだ」

アトロポスがそう言い放った瞬間、いつの間にか、白虎の首元に数本のナイフが向けられおり、白虎は思わずビクツと肩を跳ね上げて、今にもこちらに襲いかかつてきそうなナイフをその目で見つめていた。多分、これはアトロポスの能力によるものである。白虎はそこからその身をあえて引こうとはせず、黙ってアトロポスの方を見続けた。

アトロポスはその視線に対して、更なる不快感を覚えたのか、その黒く煌めく小宇宙を燃やしていた。本当に神のものとは思えない、黒く染まった小宇宙だった。

「そのまっすぐにこちらを見つめてくる目……今すぐにも抉り取ってしまいたいぐらいだ。まあ、それでも物足りないが」

「なら、目だけではなく、体内にある内臓も抉り取ってみたいと思わないか？」

「！」

アトロポスの言葉に対して、挑発的な口調で返す白虎。アトロポスはそれに反応して、横顔だけ見せていたものを、すぐに体全体を再び白虎に向き直した。白虎はその言葉に似つかわしいぐらいに、口元を緩ませ、相手を刺激するような挑発的な笑みを浮かべていた。そして、その手にあつたのは、アオイデーから授かっていた剣であった。白虎はその剣の柄を片手で持って、その刃をアトロポスの方へと向けた。自分の方に幾多なるナイフが向けられていようがなんだろうがお構いなしだ。

アトロポスは刃を向けられたその意味をすぐに察したのか、白虎に釣られるように、こちらにも挑発的な笑みを浮かべ返した。

「上等だ、アオイデーの媒介。すぐに戦場——いや、お前の墓場へと連れて行ってやる」

その小宇宙の変化と異変は、聖域全体を揺るがすものだった。各宮を守護していた黄金聖闘士たちは、思わず自分たちの目線より上にある神殿の方へと目を向けて、また、十二宮にいない者、つまり、鍛錬場や聖域の敷地内で見回りや監視をしていた者さえもが、アテナ神殿の方へとその顔を向けていた。

そして、アテナ神殿で待機していた圭熊、翔馬、水鹿の三人も、その小宇宙の異変には反応せずにいられなかったのか、教皇の間の方へと駆け出していった。

教皇の間に辿り着き、医務室の扉を開くと、あろうことか、そこにはベッドでアテナが寝息を立てて眠っている姿だけがあった。圭熊たち三人はもう一人、アテナをここまで運んでいたはずの聖闘士の姿を、辺りをキョロキョロと見渡しながら探し始めた。

「白虎!? どこにいるんだ、白虎!」

——白虎は、アトロポスと共に、ただの人が行ける場所ではない戦場——いや、ステージへと向かっていた。白虎からすれば、これが最後のステージであり、そして、戦いに

なるかもしれない。だが、白虎にとって、それは問題ではないのだ。問題は、アトロポスに勝てるかどうか、なのだから。

59 : 「何も怖がらなくともいい」

「っ……んん、うう？」

白虎が目を覚ますと、そこは自分が一度も見たことも、来たこともない、全く目新しい空間であった。その空間は、暗い天井に星が優雅に煌びやかに輝きを放っており、また、地面の方は自分が全く知らない質感で、硬いのと柔らかいのが交互にあるようになっていた。白虎はそんな不思議な感触の地面に突っ伏していた体の上半身を地面から離し上げて、そこからとまどいを隠せない様子で、キョロキョロと辺りを見ていた。いつの間に自分はこんなところに来たというのか。

白虎は体をくるつとちよつとばかり回転させて、背中を地面と合わせ、そこからしっかりと体の上半身を曲げるように起き上げ、確認するように、再び辺りを見渡し直す。そして、正面の方へと視線を戻して、その目を自分の太ももへと落とし、悩み込むように、額に右手を当てた。

（ええつと、わい、何でここにおるんやろう。確かアテナを医務室まで運んで、それからアトロポスがやってきて……—そうだつ！）

白虎はそこまで思い出すと、すぐにその場で勢いをつけて立ち上がり、その場から

ダッシュして走り始めた。確か、自分はアトロポスによってここまで連れて来られ、氣絶。そして、この流れから察して、これからそのアトロポスと戦うはずだ。白虎はそのアトロポスの姿を追いかけるように急いで探し始めた。

(どこだ、どこにいる、アトロポス！)

不思議な地面の感覚が、白虎のその走りを妨害するかのようになつたり硬くなつたりするものの、それを気にしていられる状況ではなかつた。一刻も早くアトロポスを探し出して、その決着を付けなければならぬ。

白虎はそうしてしばらく走つたのち、「ハアハア」と息を荒げながら、足を大きく開き膝から曲げ、そこに手をついた。いくら走つたところで、アトロポスの姿はどこにもなかつた。自分から誘つておいて、こちらに姿に見せないなどは、運命の女神も落ちたものだ。白虎がそう思ったその瞬間、とある女性の声が白虎の耳の中に入ってきた。

「ふふ、ここがお前の墓場だ、アオイデーの媒介よ」

同時に鳴り響く、ヒールで鳴らしている高い足音。白虎はそれに気が付くなり、ハツと顔を上げて、その足音のする方向へとその目と顔を向けて、その姿と対峙した。——
そう、アトロポスと、対峙した。

白虎がこちらに冷たく、厳しく鋭い視線を向けてくると、アトロポスはそれに向かつて嘲笑するかのよう、「フツ」とだけ小さく笑みを浮かべて、白虎の方へと一歩ずつ一

歩ずつ、歩み寄って行く。白虎はこちらにアトロポスが歩み寄ってくることに、その警戒を強めるかのようにその小宇宙を激しく燃やしていた。

「これでどうとう、戦うことができるというものだな、アトロポス。まあ、こちらはお前のことを倒す、というよりも封印のような形でこの戦いを終了したいと思っではいるが……」

白虎はアトロポスに剣を向けながらそう言うなり、チラツと自分の後ろと周りを見つめ、一瞬だけ不安な表情をその堂々とした、いで立ちの中で見せていた。

(圭くんもいない、水鹿もいない、翔くんもいない、そして、アテナすらこの場にもいない……この場でアトロポスと戦うのは私だけ……)

そう、この場でアトロポスと戦うことになったのは自分だけだった。アトロポスは目の前にいる威勢のいい自分だけ連れて、ここにやってきたのである。アテナのことは眼中にすらないように、だ。そして、白虎が一人でアトロポスと戦い、勝つことなど、限りなく不可能に近いことだ。アトロポスは簡単に一対一で戦っていい相手ではないのだから。

だが、しかし、白虎はそこまで思うと、すぐに剣を握り直し、いつものように堂々とした態度をアトロポスの方へと見せつけた。自分一人しかいないのであれば、もう自分がやるしかないであろう。他からの助けを求めようが、今の自分は孤独に生きている戦

士だ。今、自分がすべきことは他でもない、目の前にいるアトロポスを倒し、その力を封じる。そのみだ。白虎はアトロポスに向けていた剣をこちらに引っ込めて、とうとうその両手で剣を持ち、宙に向かって差し出した。片方の手は白く光る柄の部分をしっかり持ち、もう片方の手はその刃を封じている、白銀に輝きを放つ剣のカバーにあてられた。

(そう、もう、やるしかない。確かに一人では心細いし、アトロポスは倒せないかもしれないけど、それでもやり遂げなければならぬ意味が、私にはある！)

「……さあ、その姿を見せよ、歌の剣・REID—DAMOCLES—」

白虎はそう声を上げながら、剣の刃を封じていたカバーとその柄を左右へとゆつくりと開いて、その姿をアトロポスの方へと見せ始めた。剣の刃は、そのREID—DAMOCLESの真つ白にきらめきを放っている外見通り、真白の輝きを放っている銀色の鋭いもので、その頂点は三角形の頂点のように尖っていた。白虎はその剣の全貌を見せるなり、その先を目の前にいる女神の方へと再び向けた。

「アトロポス。この剣で、お前の喉を掻っ切つてやろう」

「望むところだ、アオイデーの媒介——いや、龍星座の聖闘士・白虎」

その二人の会話は、二人の戦いの開始の合図であった。

まず、白虎はそこからジャンプして、飛び上がり、剣をアトロポスの方へと振り落と

そうとしていた。その剣を振り落とそうとしたのと同時に、白虎の口からは、とある曲のメロディが流れ始めた。

「寂しさを感わす風に何を問えばいい?」

白虎が遊舞乱虎で必ず歌う「S w e a r — 宣誓—」である。この曲は歌詞からも分かる通り、聖闘士としての自分からアテナへの宣誓を表したもので、その曲調に関しても今の白虎にとってはピッタリのものであった。自分はアテナの聖闘士としてここに散るのだ、という決意が、その歌声には籠っていたのだから。

「今を問うか、それとも過去を問うかッ!」

そして、その歌詞と同時にアトロポスの方へと剣の刃が振り落とされる。しかし、アトロポスはその振り落とされた刃をその片手で容易く受け止めた。

「そしてッ! 自分自身に何を問おうかア——ッ!」

だが、それでも白虎はアトロポスへの攻撃をやめようとはしなかった。その小宇宙は、歌を歌うごとにどんどん膨れ上がっていく。白虎の剣は、アトロポスの抑えているその片手を潰す勢いで力が入っていた。

「自分を問うか、それとも、他人を問おうかアア——ッ!」

だが、アトロポスは白虎の小宇宙を剣越しに受けたところで、何にもならなかった。白虎は相手に通じないと分かるなり、アトロポスからその剣を離し、自分の足を地面に

置いた。

「もう既に覚悟はできているんだ、この身を捧げるぐらいのことならば……」

白虎は剣を両手で握り直し、ジリジリと音を立てながら、一時そこからゆつくりと後退。一定の距離を保ったところで、白虎はそこから助走をつけて、アトロポスに向かって走り始め、その剣を横からアトロポスへと振った。

「さあ、アテナの戦士よ！　今こそ、忠誠を誓えエエ——ツ！」

そこから、白虎は何度も何度も、アトロポスに向かって剣の刃を向け、それを振り続けた。一点集中攻撃が駄目であれば、もはや無造作に剣を振り続け、弱点を見つけるしかない。白虎はそれだけを頭の中に入れて、アトロポスの全身を狙い続けた。

「何もツ、恐ることはないツ！　誓ったのならば、その誓いを胸にしてエエツ！」

しかし、アトロポスの表情や体は、一切その変化を見せる様子もなく、ただ、ただ、白虎だけが大変なだけの乱れ打ちとなっていた。白虎はアトロポスが何も変化を見せないことに対して、微妙な焦りを感じながら、歌い、剣を振り続ける。

「何も、怖がらなくともいいーッ！　さあ、旅立とう、空へとオオ——ツ！」

白虎は息を切らせながら、アトロポスに向かって剣を何度も何度も、音を立てながら当て続けた。しかし、歌の一番の終わりに入っても、アトロポスは特に何も表情を変えずに、むしろ余裕そうな笑みを浮かべながら、白虎がこちらに当ててくる剣を、バリア

や片手で防ぎ続けていた。まるで、自分には何も通じない、とても言うかのように。

白虎は悔しくなつて、顔を歪ませながら、その小宇宙を巨大から莫大なものへと変化させ、その小宇宙を剣に込めながらぶつける。

「明日を照らし出せ、もう恐れぬ——未来へとオオ——ツ！」

瞬間、自分の全身の小宇宙を込めた一撃。白虎はこれで倒れない者はいないはずだ、と思ひながら、最後の歌詞とともにアトロポスへとその剣を振り落とした——のだが。

「ぐつ、がつ、ああつ！」

アトロポスは、それをいい機会だと思ふようなように、白虎のその渾身の一撃を一気に跳ね返した。白虎はその跳ね返された衝動で、一気に向こう側までその体が吹っ飛び、体全身を地面の方へと強く打ち付けた。

「ぐつ、ううつ……」

白虎はゆっくりとその体を起き上げながら、アトロポスの方を睨み付けるように、その視線と顔をアトロポスへと向けた。アトロポスは無様に吹き飛ばされた白虎を、「フツ」と鼻で笑いながら見つめていた。

「神の媒介とはいえ、所詮は媒介。神そのものである依り代であれば、もつと違う、面白い戦いになつたかもしれぬが……今のお前では、もはやそれも無理。何とつまらぬものよ」

「……………」

白虎はそのアトロポスの言葉に対し、苦しそうに顔を歪ませながらも、何とかその場で足に力を入れながら立ち上がった。そして、剣を持ち直して、アトロポスの方へとその先を向き直した。

「お前がつまらなくとも……こつちは命かけて必死に戦っているんだ。あまりバカにしないでもらいたいものだな」

「必死、か……まさに下らぬ。さすが人間。こんなことに必死になるなど、バカバカしいにもほどがあるぞ」

「……………言ったそばから」

言ったそばから、こちらをバカにしてくるその口調と態度。まさしくアトロポスクオリティといったところであろう。だが、白虎はそのアトロポスクオリティに屈することなく、再び地面を蹴り、相手の方へと駆け出した。

「そして——行くしかないでしょう、アトロポスと白虎の元へ」

白虎とアトロポスが戦っている最中、教皇の間にある医務室でアテナとともに水鹿、圭熊、翔馬の三人の少年聖闘士たちは時間を過ごしていた。アテナは気絶した状態から目覚めていたのか、ベッドの上から起き上がって、自分たちを見つめてくる三人を見つ

め返していた。

アテナはこちらに三人がやってくるなり、先程白虎と何を話し、語っていたか、詳しく話していた。白虎は随分と端折って、それを話していたが、アテナの方は関係者ゆえの詳しきというものがあつた。今はその話がすべて終わったところで、アテナは医務室の窓から見える風景を見つめながら、言い放つた。

「これは神さえも問題視することなのですから。アトロポスの問題行動——女神として、これ以上黙って見過ごすわけにいきません」

アテナはそう言うと、ベッドから降り立ち、三人の方を見つめた。三人は互いに視線を合わせながら、こちらを見つめてくるアテナに対してコクン、と首を縦に振って意思を見せた。自分たちも神ではないが、今回のアトロポスの件は見過ごせなかつた。そんなに自分たちの世界にアトロポスが影響しているとは全く知らなかつた。いや、知る由もなかつた。ゆえに、なおさらアトロポスのしていることが、三人にとってはどうしても許せなかつた。

翔馬に至つては、「くつ」と歯で音を立てながら、悔しそうに顔を歪め、呟いていた。「アオイデーの君臨はそういうことか……くそつ。アトロポスのことに気付けなかつた自分が憎い……」

翔馬にとって、それは当然の台詞だつた。何も事情を知りもせず、上に命令されたか

らといった理由で、ムーサたちの存在を白虎を殺すことで否定しようとした、天闘士の自分が憎くなる。もちろん、これが翔馬でなくとも、他の者が天闘士だった場合も怒りというのは湧き上がるであろう。今、ここでアテナからしつかり事情を聞くことができ、よかつた、と翔馬は思う。

そして、同時に翔馬にはアテナに対するふとした疑問——いや、不安が、心の奥から湧き上がってきていた。その不安を、翔馬は直接アテナへとぶつけた。

「アテナ……俺には……白虎を手助けする資格があるのでしょうか……」
「翔馬……」

当然の疑問と不安である。先程まで白虎を殺そうとしていた人間が、その白虎を手助けするなど、前代未聞であろう。それに、その白虎を殺そうとしてかしたことは、アテナにとっては裏切りに値するものだ。そう、やすやすと白虎に手助けをしてもいい立場にはいない。

しかし、アテナはそれらをすべて許すかのように、フツと優しく口元を緩め、微笑みを浮かべながら、翔馬の手をギュツと握り締めた。翔馬はこちらの手を握り締めてきた目の前の女性の行動に対して驚きを隠せないでいるのか、相手の方を目を見開いて見つめていた。アテナの暖かい体温が、こちらの手の方へと伝わってくる。アテナは翔馬の手を自分の胸元の位置まで持ち上げて、言い放った。

「もちろんです、翔馬。貴方には白虎を助ける資格はありません。大切なのは、『昔』ではなく『今』。昔の貴方がどうしていようが、今の貴方には関係のないこと」

「ア、テナ……」

「翔馬。今の自分の気持ちに正直になって。生まれたままの、自分の気持ちに、ね」
「……」

翔馬はアテナにそこまで言われ、自分の後ろにいる水鹿と圭熊の二人に目を向けた。二人の方もアテナの意見に賛同しているのか、こちらに顔を向けてきた翔馬に向かって、しつかりと微笑みを浮かべていた。翔馬はそんな二人を見るなり、すぐにアテナの方へと顔を向けて、そこから顔を伏せた。今の自分の表情は、他人には見せられないぐらい情けなくなっているだろう。だって、こんなにも目頭が熱く、泣きそうになっているのだから。

「ごめん、皆……それと、ありがとう……」

そして、翔馬はその伏せたまま、一同に向かって礼と謝罪の言葉をかけた。一体何度謝り、礼を済めば気が済むのだろうか、自分は。しかし、言わずにはいられないものが、翔馬の中にはあった。

アテナはその翔馬の様子を微笑み、優しく暖かい目線で見つめてから、すぐに戦闘態勢に入るかのように凜とした表情になった。アテナが表情を変えると、翔馬たちの雰囲気

気も変わり、その視線もアテナの方へと向けられる。翔馬に關してはゴシゴシと出てきそうな涙をあらかじめ拭き取ってから、アテナの方へと視線を向けていた。

アテナはその場で腕を伸ばすと、手品か何かのように、その手の中から二ケの杖を出して、その持ち手の先を、トン、と床へと置いた。

「では、参りましょう。戦場へ——……」

「だあつ！ はあつ！」

白虎は劍をアトロポスに向かって振り回していた。その軽快とも取れる足音は、同時にアトロポスに対する苦戦を表すものでもあった。こうして劍を振り回したところで、アトロポスはまったく引く様子はなく、むしろ、余裕そうな表情ばかり浮かべるようになっていた。白虎はそんなアトロポスの表情を崩そうと、劍を振り回すごとに、その威力を強めていっているものの、その表情は崩れる様子を見せない。

アトロポスはこちらに向かって何度も何度も劍を振り回してくる白虎に対し、ニヤリと口から齒を見せて、目が点になるほど大きく見開きながら、大きく笑いを浮かべて言いつ放った。

「はっはっはっはアツ！ たかが人間ごときが神の武器を振り回した程度で、私に敵うわけがなからうツ！ 特に貴様のような青銅聖闘士ごときが、私に刃向かうなど、片腹

痛いわー！」

「……………っ！」

アトロポスの白虎に対する反撃がとうとう開始された。アトロポスは自分の周りに小宇宙の塊をいくつも作りながら、それを白虎の方へとぶつける。白虎はそれを剣で斬り裂きながら、その塊の威力は尋常なものではないと、剣を伝って感じ取っていた。アトロポスは高笑いをしながら、白虎に向けて攻撃を続けていた。

「そんな剣ごときが、私の攻撃をかわしきれはるはずがないッ！」

「ぐっ、ううっ！」

このまま斬っていくだけでは、アトロポスからの攻撃を避け切れないと悟ったのか、剣を盾にして、アトロポスの攻撃が当たらないように防ぎ始めた。アトロポスの攻撃の威力は尋常ではなく、剣で防いでいるはずの白虎の体を、それだけでだんだんと後ろへ後退させていくほどだった。

「さあさあ、滅びるがいい！ その身も、心もなアッ！」

「あつ、ぐううっ！」

（まずいッ……………このままじゃ……………！）

そろそろ自分の力がアトロポスの攻撃の威力に耐え切れなくなっていた。アトロポスの攻撃は、当たってしまえば一網打尽にやられてしまう。先ほどから白虎が避けてい

る砲弾が地面に当たっているわけだが、その時点で地面に大穴を開けたりなど、威力は語るまでもない。白虎はこちらを押しよってくるアトロポスの攻撃をどうにかして、避けたいが、もうこのままではやられるしかない。

「ハツハツハアツ！　さらばだアツ！　アオイデーの媒介よ！」

「う、ぐううつ……ううつ！」

（やられるっ！）

瞬間、アトロポスの砲弾が白虎に当たり、そのまま噴煙の砂煙を宙へと放ちながら、爆発した。その爆発の大きさは、白虎から少し離れていたアトロポスの目の前まで来ており、常人であれば跡形もなく消え去っていると信じているところだ。アトロポスはそんな巨大な煙を目の前にし、「ククツ」と歯で笑みの音を漏らした。

（まあ、なんとも容易いものよ……アオイデーには悪いが、龍星座の首は……）

「——ツ!？」

いや、白虎はまだ死んでなどいなかった。砂煙の中から感じることもできるこの小宇宙、明らかに白虎がそこに存在している証拠である。と、同時に、

（い、一体、この小宇宙は……）

白虎の小宇宙以外にも感じ取ることができるとは、全部で四つあるわけだが、そのうちの三つは聖闘士のもの、そして、そのもう一つは、莫大なものだった。聖

闘士のもものと思われる四つの小宇宙より、まったく強く、偉大で、何もかも包み込んでしまうような、暖かな小宇宙。アトロポスは、この小宇宙の正体を知らなかったわけではない。むしろ、知らない方がおかしかった。

（まさか……）

砂煙は、その小宇宙を中心に去って行く。そして、その小宇宙の正体はその砂煙の中から姿を現した。髪の毛は長く、尻までまっすぐ伸びたもので、優しい茶色であった。そして、純白のドレスから出ているその白い腕は、スラリとしており、白虎たちを守るようにそこに伸ばされていた。

「お久しぶりです、アトロポス」

「あ、貴女は……アテナ……!?!」

そう、そこにいたのは、戦女神アテナであった。アテナは後ろに聖闘士たちを仕えながら、アトロポスの目の前に立ちはだかっていた。白虎はまさかのアテナを目の前に、目を見開いて驚きを隠せないでいた。アテナは、ニコツと微笑みを浮かべながら、自分の後ろで構えたままの白虎に柔らかく声をかけた。

「白虎……頑張ってくれましたね。もう、大丈夫です。ここからは、私たちが何とかしましょう」

「アテナ……」

白虎とアテナはお互いの顔を合わせ、見つめ合った。一方でアトロポスは、グツと歯を軋ませ、歯をその唇と唇の隙間から見せれば、アテナに向かつて声を放った。

「しかし、アテナツ……貴女が今更来たところで、運命など変わるなどない！ いや、変わらせるものか！ モイラは貴女たちオリュンポス十二神の運命さえも決めているのだ！ そうやすやすと……」

「いえ、変えられます」

アテナは、はつきりと、アトロポスに向かつて反論した。アトロポスはアテナのはつきりと言い放った口調に驚きながら、アテナの話へと耳を傾けた。アテナはアトロポスの方へと鋭く視線を光らせながら、凜と言い放った。

「いえ、変えてみせます。聖闘士たちと一緒に——この運命、変えてみせましょう」

そのアテナの言葉に、聖闘士たちが心打たれたの言うまでもないであろう。アトロポスの方もアテナのその言葉に何かを感じ取ったらしいのか、グツと押し黙った。自分より上の立場にいる女神に、真つ正面から言われると、どうも強く出れないらしい。それが、恥ずかしさによるものか、自分の小物さによるものか、その両方か。アトロポスは少し黙り込んでから、言い放った。

「……なら、やってみるがいい。やってみるがいいさ。このアトロポスの、いや、モイラたちの定めた運命を、曲げてみせよ。その、聖闘士とともにな」

「ええ。元よりそのつもりです」

アテナはアトロポスの言葉にコクンと首を縦に振りながら、その意思を見せた。アテナは、自分の目の前にいる女神に見せつけるかのように、小さなアテナの像を差し出すように取り出した。

白虎は何かをその像とアテナから感じ取ったのか、胸元で拳をギュツと軽く握り締めつつ、不安の色で染まっているその女性的な顔立ちをアテナに向かつて見せた。白虎にもそれがどういった意味なのか感じ取れたゆえの表情だったのだ。アテナ像は、自分たちアテナ軍と、アトロポスの決着を見せる——白虎はアテナの方を見つめながら、ポツリとアテナの名前をその口から放った。

「アテナ……」

「白虎、ここからのアトロポスのことは、私にお任せください」

アテナは不安げな表情をしている白虎に対してニコツと優しく笑みを浮かべれば、その像を小宇宙の光に包ませて、宙に浮かせた。アトロポスはその意味をすぐに察したのか、途端に厳しい目付きになってアテナのこゝろを見つめた。アテナはこちらに厳しい視線を向けてくるアトロポスにさえも、優しく微笑みを浮かべ、そのアテナの像を自分の胸元まで持って行こうとした——瞬間だった。

「！」

その像がアテナの元に降り立つ前に、その像は何か強い力によつてアテナの頭上よりも高く舞い上がった。アテナは像が舞い上がるなり、すぐに目の前の女神の方へと視線を向けた。その表情は突然の事態に追い付けていないように見えた。

アトロポスはしてやった、といった喜びの笑みを浮かべながら、その手の中までやってきていたアテナの小さな像を納めた。アトロポスはその像を握り締めながら、アテナに向かつて少しばかり歩み寄り、言い放った。

「残念だが——貴女には、私に倒すことなど到底不可能。私はオリュンポス十二神以上の強大な力を持つことができのだから」

「なっ……！」

アトロポスは、「フン」と鼻で笑いを浮かべながら、手に持っていた杖をその場で一回離して持ち直し、その先をアテナに向け、そこに自分の小宇宙を電撃として貯め始めた。その小宇宙は、アテナにだけではなく、その後ろにいる聖闘士たちにも向けられていた。白虎たちは意を決したように、そして、その意思を確認するかのように、互い互いにコクンと首を縦に振り合い、そこから白虎筆頭にアテナを囲うようにアトロポスの方へとその体を向けた。アテナは聖闘士たち四人に囲まれると、驚いたように目を見開いて、四人のこを見つめた。

「白虎、圭熊、水鹿、翔馬……！」

アテナの眼前にいた白虎は、自分たちの名前を驚いたような声で挙げたアテナに向かって、そしてアトロポスの方へと向けて、その場で声を張り上げた。

「アテナをお守りするのが、私たち聖闘士の役目。その身を犠牲にしても、アテナを守る資格が、私たちにはある！」

「くっ、人間のくせに生意気な……！」

アトロポスはその黒い小宇宙を、さらに燃やしてその怒りの度合いを白虎たちに向かって見せつけた。自分より全く下の立場にいる白虎たちが、そんな口を自分に叩いていいはずがないのだ。ここでは自分が優勢だ。アトロポスはその手の中にアテナの小さな像を握り締めながら思っていた。

小宇宙を向けられた白虎は、途端に鋭い視線になって、それをアトロポスの方へと向けた。そして、強く言い放った。

「もう、覚悟はできているんだ。この身を捧げるぐらいのことならば。さあ、こい。アトロポス！」

「白虎ッ！」

アトロポスに何も恐れを感じず、むしろ自分に攻撃を受けさせようと、仁王立ちになっっている白虎の肩を、アテナは後ろから掴んだ。今度はアテナが不安になる番だった。しかし、白虎はこちらを掴んでくるアテナに向かって、ニコツと微笑みを浮かべた。

がら、言い放った。

「アテナ、私は……アトロポスを倒せばそれでいいですから」

「しかし……」

「いいんです。もう、ここで死ぬつもりですから」

白虎はザツと地面から音を鳴らしながら、足を踏み入れて、アトロポスの方をキツと鋭く睨み付けた。アトロポスは、ニイツと怪しく笑みを浮かべながら、杖の先に貯まっている小宇宙を白虎に向かって放つ準備をしていた。

「なるほど……お前がその気であれば、私は貴様に向かって放つてやろう、龍星座。さらばだッ！」

「白虎——ッ！」

一同の叫び声とともに、白虎に向かって黒い小宇宙が黄色い閃光の電撃として放たれた。そして、それが白虎に当たって、煙となり、アトロポスたちの視界を防いでいた。

アトロポスは白虎に当たったのが分かれば、「ククッ」と息で笑みを漏らしてから、その煙の向こうを見据えようとして、そちらへと視線を向き直した。これで、アオイデーの媒介と言う面倒なものはここから消え去った。残るはアテナのみ——のはずだった。

「！」

アトロポスは、煙の向こうにいる人影を見、目を見開いて驚愕していた。何故ならば、

そこにいたのは紛れもない、白虎だったのだ。

「な、なぜっ……!?!」

白虎は——天秤座の聖衣をそこにまといながら、純白に光を放っているREID—D
AMOCLESを片手に、アトロポスの視線の先に立ちはだかっていた。

60：「翼を授けられた戦士たち」

「言っただろう……覚悟はできている、と」

白虎は天秤座の聖衣のかかと部分を、コツコツと音を立てて鳴らしながら、驚愕の表情を漏らしているアトロポスの方へと一歩一歩、ゆっくりと歩み寄った。アトロポスだけではなく、アテナと他の聖闘士たちにとつても、驚愕以外の何物でもなかった。今まで龍星座の聖衣をまとっていた白虎が、アトロポスに攻撃されて天秤座の聖衣をまということなど、あり得ぬことであった。だが、白虎は特に違和感も何も感じることはなく、ただ、アトロポスの方へと視線を向けていた。

アトロポスはこちらに歩み寄ってくる天秤座の聖衣をまとった白虎を目の前にし、驚きを見せるも、すぐに元に戻って、再び杖の先を向けた。

「黄金聖衣をまとったところで、私に勝るとでも思っているのか。天秤座の聖衣は、過去に神により粉々となって行方不明になったことがあるのだぞ」

「……ああ、そうだな」

白虎はその事実を突き付けられて、特に意地を張ろうと否定しようと思わず、認めざるを得なかったのか、コクンと首を縦に振って頷いた。

白虎の今現在着ている黄金聖衣についている盾にも、その金色の中に少しヒビが入っていたのだ。きつと、先ほどのアトロポスの攻撃の衝撃に何とか耐え切れた証拠であろう。白虎はそのヒビの入ったところをギョツと押さえるように手を当てた。今回は何とか耐え切れたものの、今度アトロポスの攻撃を受ければ、確実にこの天秤座の聖衣は粉碎する。白虎自身、それだけでも避けたかった。確実にアトロポスの攻撃を耐え切れるであろうアテナの聖衣はアトロポスの手中にあり、REID—DAMOCLEESも攻撃に耐え切れるものの、使用者である白虎のこともあり、その力を最大限に発揮することはない。いわば、白虎たちはこれからどうやってアトロポスからの攻撃を耐え切ろうか、危機的状況に陥っていたのだ。しかし、ここまでくれば、もはや白虎の中の覚悟は決まっているというものだ。アテナのためにその身を死へと捧げるのは、当たり前。だから、もう怖がることはない。天秤座の聖衣はそんな白虎の意志の強さによって、今の状況下で何とか反応できたのだから。

一方でアトロポスは、なぜこの空間に黄金聖衣が来ることができたのか、考えていた。ここはアトロポスの作り上げた空間であり、通常であれば、自分が招待した者や神以外には絶対訪れることができない場所。だからこそ、天秤座の聖衣がここにあることが、異常なまでに不自然であったのだ。白虎の危機に反応するにしても、ここまで来れるほどの小宇宙は黄金聖衣にはないはず。なのに、なぜ、ここにくることができたのだろう

か。

(いや、黄金聖衣自体がここに來れたわけではない。何者かによつて送り出された、といった方が正しい。こんな芸当ができるのは……まさか……！)

アトロポスはその正体に気が付いた途端、言葉を失つたまま、空間の天井へと視線を向け、そこを睨み付けるようにした。まさかとは思うが、あの人物が白虎に手助けをしたとでもいうのか。その確証はどこにもないが、今までのアテナと聖闘士の関係からすれば、十分にあり得ることだった。

「リヴァージュ様、オレンジジュースなどはどうでしょうか？」

「わあ、オレンジジュースですか！ 飲みたいです！」

「ふふ、了解致しました」

年相応の子どもらしい無邪気なリヴァージュを目の前に、ヴィオラはニコニコと優しく笑みを浮かべながら、リヴァージュの求めているオレンジジュースを取ろうと、そこから離れた。

リヴァージュとヴィオラは、あの戦いの後、家であるソロ家の屋敷の中で、その平和な日々をのんびりと過ごしていた。それは、ヴィオラが望んでいたことかつ、リヴァージュにとつても望みであったことだった。特にヴィオラは前回のポセイドンの戦いで、

その気持ちが一層強まっていた。もうこれ以上誰も失いたくない、そして、失うわけにはいかないのだ、と。そのためには、リヴァージュをこれ以上戦いに巻き込むわけにはいかなかった。今はすっかりただの少年と化したリヴァージュ。だが、海闘士としての力を失っていないヴィオラは、そのリヴァージュを守る役割があつた。

（僕にとつて、今の支えはリヴァージュ様。そのリヴァージュ様を失わないためにも、僕はこれから最善を尽くさねばならない）

ヴィオラはオレンジジュースとコップがある冷蔵庫へと足を向けて、歩き始めた。普通の者からすれば、この程度の暮らし、当たり前のことであろうが、大事な恋人を失い、そして、戦いを経験している以上、この日常は「奇跡の賜物」であることを痛く感じていた。ヴィオラにとつて、こうして大切な者と暮らせることは奇跡に値するのだ。

そうして、ヴィオラは冷蔵庫の目の前までくると、その冷蔵庫の蓋を開き、オレンジジュースが入ったそこそこでかい瓶を取り出した。その重さ、海闘士を体験しているヴィオラですらすらと腕にくるほどである。冷蔵庫の蓋を閉め、コップがある棚へと顔を向けた——その時だった。

「ー」

ヴィオラは何かに気が付いたように、バツと急いでリヴァージュの方へと顔を向けた。リヴァージュから感じ取ることができる小宇宙が、明らかに今までの少年のもの

は違かつたのである。ヴィオラはまさか、と思ひながら、瓶を床へと置き、おそるおそるリヴァージュの方へと近付いた。ヴィオラのその表情は、不安の色に包まれていたものであつた。また、何か戦いの合図なのか、と。この日常が早くも崩れ去つてしまふのではないのか、と。

リヴァージュは黙り込み、その小宇宙をまといながら、ヴィオラの方へと視線を向けた。その視線は、今までのリヴァージュのものとは違つていたものだつた。まるで、こちらのをすべてを見透かされているような気分になるものである。そんな視線をリヴァージュから向けられたヴィオラは、ビクツと肩を跳ね上げ、「やはりか」といった様子で、リヴァージュに向けて言い放つた。

「貴方なのですね……ポセイドン様！」

ヴィオラはすぐにその場にひざまずき、リヴァージュの方へと頭を下げた。——そう、ポセイドンが、リヴァージュの体の中へと降臨していたのである。

まさか、このタイミングでポセイドンがリヴァージュの体に降臨するとは思つてもみなかつたのか、ヴィオラのその跪きの行動からは焦りというものが感じ取れた。同時に、ポセイドン降臨確定という面から、ヴィオラからは別の不安がさらに湧き上がつていた。一体これから何が起ころうというのか、そして、このポセイドン降臨は一体何を意味するというのか——ヴィオラはその胸に緊張感を抱きながら、ポセイドンにひざまず

いていた。

リヴァージュ、いや、ポセイドンはリヴァージュの声と口を借り、ヴィオラの方へと言い放った。

『ヴィオラよ。お前は分からないであろうが、この世界の運命が狂い始めている』

「運命が……？」

『お前たちからすれば、本当に些細なことかもしれないが……我々からすればこれは死活問題でもあり、その狂いはいずれ、この世界にも大きな影響を及ぼすことになるであろう』

「……」

『そして、その元凶となった女神と、今、戦っているのが、アテナとその聖闘士たちだ』
「白虎たちが……!?!」

ヴィオラは目を見開いて、驚いた様子であった。まさか、自分たちがこうしてのうとうと暮らしている間にも、アテナと白虎がこのような事態に巻き込まれているとは思ってもしなかったのである。自分たちはその戦いに巻き込まれることはない、と思いつつも、海闘士としては複雑な気持ちになる。一方のポセイドンは、自分たちには何もできないが、といった様子で、ヴィオラの方へと言い放った。

『そして、その聖闘士たちに少しずつ、お節介を焼こうと思ひ、こうしてリヴァージュ・

ソロの体へと再び降臨した所存だ。そのお節介は、あやつを目の前にして役に立つかは分からないが……未熟な聖闘士たちの心の支えにはなってくれるはずだ」

ポセイドンはそこまで言うのと、すぐにその小宇宙と気配をどこかへと掻き消し、空気と同化するように消え去ってしまった。ポセイドンがリヴァージュの体の中から消え去るなり、リヴァージュはフツと意識を失い、そこに倒れそうになった。ヴィオラは倒れそうになったリヴァージュをすぐにその両腕で受け止めた。

「つと……」

(白虎……水鹿、圭熊、翔馬、そしてアテナ。どうか、ご武運を……)

(まさか……貴方が黄金聖衣をここに送り込んだとも言うのか、ポセイドン……！)

そう、ポセイドンがこの空間まで天秤座の聖衣を白虎のところまで運び込んだのである。やはり、アトロポスのしていることは、ポセイドンも悪と見なしたのである。いずれば、白虎たちだけではなく、あのアテナの背後にいる聖闘士たちにも、それぞれの黄金聖衣が送られてくるであろう。アトロポスは白虎たちの背後には、アテナだけではなく、ポセイドンたちもいることに對し、尋常でない危機感を覚えた。

(アテナは聖衣を奪われ、ポセイドンはその本来の力を引き出すことができない……はずなのに、何だ、この緊張感は……)

そして、アトロポスを襲う謎の緊張感。立場上、アトロポスの方が有利なはずなのに、一体どうしてこんなにも不安になるのだろうか。アトロポスは体の横で拳を強く握り締め、目の前にいる天秤座の聖衣をまとっている白虎を見つめた。

白虎は剣の先をアトロポスの方に向ければ、それを一度持ち直した。剣の刃が、光を反射して、キラキラと白い輝きを放ちながら、アトロポスを目標として、そこに構えられていた。

「さあ、アトロポス——今一度、光の鉄槌をくらつてみせろ！」

白虎はそう言うと、己の小宇宙をまといながら、剣を体の横へと構え、アトロポスの方へと向かつて走り出した。

「目の前にある草木に、何を問おうか……自分の誇りか、それとも覚悟か！」

白虎は「Swear—宣誓—」の二番を歌いながら、アトロポスの方へと剣とともに突進した。しかし、やはりアトロポスにこちらの攻撃は効かない上に、むしろ跳ね返されるだけだった。アトロポスはさっきと打って変わって、余裕そうな笑みを浮かべながら、白虎の攻撃をその手で受け止めたり、小宇宙の壁で防いだりし、白虎はその防御に対して苦戦しているのか、歌いながらも、かなり厳しい表情となっていた。

それを見ていた他の聖闘士たち三人は、自分たちにも何かできることはないのか、と互い互いに顔を見合わせていた。白虎一人にアトロポスを任せたくないからここに来

たというのに、結局白虎に任せっきりで、自分たちはこんな戦場でアテナの傍でのうとうと過ごしている。こんなこと、三人の意志に沿ったことではない。

「——くそっ！」

その状況にとうとう限界を感じ取っていた圭熊は、誰よりも早くその声を上げた。水鹿と翔馬は突然声を上げた圭熊の方へと視線向け、その驚きを隠せないでいたようだった。圭熊は白虎の歌声を耳の中に聞き入れながら、地面に拳を置いて、その悔しさを顕著に表した。

「俺らじゃ……俺らじゃ、アトロポスには立ち向かうことすらおこがましいってのかよ。白虎が戦えて、俺らにも戦えないはずがないってのにさ……！」

「圭熊……」

「俺らにも戦う力をくれよ……神の武器なんて贅沢は言わないから、せめて、アトロポスに立ち向かえる力ぐらい、くれよーッ！」

最後の方はほとんどこの辺一帯に鳴り響く叫びの声となった。圭熊は思い思いに声を上げれば、それだけで疲れてしまったのか、「ハッ」と途切れるような息を吐きながら、膝に手をつけて、その場で顔を地面へと向けた。こんなことしたところで、自分にアトロポスへ立ち向かえる力が与えられるわけではないのに、一体何をしているんだろう。圭熊は徐々に、今の自分のやっていたことが馬鹿馬鹿しく思えてきた。水鹿と翔馬も同

じ思いだったのか、その体の横にある拳をグツと握り締めながら、白虎が戦っている様子を見つめていた。自分たちがこんなところでのうのうと白虎の背中姿を観戦しているのか、と。白虎を一人にさせて、戦つていものかと。しかし、自分たちには、そんな白虎の横に立つことはできないのだ。水鹿と翔馬は、それを強く痛感していた。

だが——黄金聖衣は、圭熊の叫ぶほど強い気持ちに、そして、そんな圭熊と同じ気持ちの水鹿と翔馬に伝えてくれるのである。

「…」

圭熊の目の前に、一つの黄金の光が降り注いだ。違う、一つだけではない。水鹿や翔馬のところにも降り注いでいた。

「兄ちゃん……翔馬……」

圭熊は水鹿と翔馬の方へと顔を向けた。その表情はまったく驚いているようにしか見えず、翔馬と水鹿もそのことに関しては同じだった。しかし、水鹿に関しては、すぐにいつものポーカーフェイスに戻り、その決意を確認するかのようになり、二人に向かって首をコクン、と縦に振っていた。翔馬と圭熊も、それに釣られ、その顔の上に微笑みを浮かべ、黄金の光の方へと視線を向けた。三人がそれぞれに降り注いだ黄金の光に手を差し伸べた瞬間、その黄金の光は圭熊たちの体を包み込んだ。

アトロポスは圭熊たちの異変に本格的に気が付いたようで、すぐにそちらの方へと目

線を向けた。白虎の方も、歌をその声に乗せ続けながら、圭熊たちのその変化の意味が分かっていったのか、少しばかり柔らかい表情になっていた。

その光が圭熊たちから散らばるように離れた時、アトロポスは今度こそは驚かないものの、一層厳しい目付きになって、圭熊たちのことを見つめていた。圭熊は牡牛座の黄金聖衣、水鹿は水瓶座の黄金聖衣、そして、翔馬は射手座の黄金聖衣をまとって、そこに現れていたのだから。

白虎はアトロポスが自分から目線を逸らしたと同時に、剣の刃の先をアトロポスの首へと向けた。

「もう、舞台の幕は落とされてる……幕に対する答えは一つだろう……」

「ー！」

アトロポスがしまった、と思い、その刃に対する防御を小宇宙で放った瞬間、白虎と歌声と重なって、圭熊、水鹿、翔馬の三人の攻撃がアトロポスの方へと向けられた。

「さあ、アテナの戦士よ……前に進むのだアアアア——ッ！」

「二矢、熊拳ンンンン——ッ！」

「氷槍、砲刃ンンンン——ッ！」

「ペガサス、彗星、拳ンンンン——ッ！」

熊の爪、氷の刃、そして、彗星がアトロポスの元へと向かい、爆発した。白虎はそれ

「くくつ……お前らがいくら束になったところで、私にはどんな攻撃も通用しない、ということだ。黄金聖衣をまとい、その能力を極限まで引き出そうが、なんだろうが、な」

アトロポスはその腕で、自分の周りに広がる煙を振り払うと、白虎たちの方へと一步、ゆつくり歩み寄り、しかしながら、白虎たちとは少し離れたところで、杖の先をそちらの方へと向けた。と、同時に、その杖は刃が鋭く光る剣へと変貌を遂げた。

「これ以上はお前たちからの攻撃を受けても仕方が無い。今度はこちらから一気に攻め込ませてもらうぞ」

そう言うと、アトロポスは己の手に持っている剣と同じ形状のものを、自分の周りにいくつも作った。攻撃の仕方は先ほどと同じものであるが——今度は剣だ。先ほどとは形状が違う以上、一体何がどうなるか分からない。当たったら、即死はもちろん、体の貫通すら免れぬであろう。白虎たちはその場で、ザツと音を立てながら腕を上げ、構えた。

アトロポスはそんな白虎たちの様子を、あまりにも馬鹿馬鹿しく、面白おかしいと思えたのか、「フツ」と、息を声で放ちながら、その口元を小さく緩めて、あざ笑いの意味がこもっている笑みを浮かべた。

「さあ、受けよ、私の剣を！」

アトロポスがそう言い放った瞬間、幾多なる数々の剣が、白虎たちの方へと襲いか

かった。

「！」

白虎はそれらに対抗しようと、手に持っていた剣を向こうへと差し出すように、その場に持ち上げたのだが、あまりにも数が多すぎるもので、それで対抗しようにも対抗しきれない。すぐに剣は用無しとなり、今度は天秤座の盾を持って、その攻撃に対抗した。

「白虎ッ！」

「……ッ」

やはり、天秤座の盾をもつてしても、向こうの攻撃を防ぎ切ることは、ほぼ不可能に近いのであろうか。向こうの攻撃を防いでくれている天秤座の盾なのだが、その天秤座の盾の表面には、早くも大きな亀裂が入り始めていた。先ほど、アトロポスの攻撃から自分を守るために庇ってくれた時のダメージが、だんだんと響いてきているのだ。もし、このままアトロポスの攻撃を受け続けていたら、天秤座の盾は愚か、その後ろにある、自分のまもっている聖衣の方ですら、木っ端微塵になり得ない。

「ぐっ、ううっ……くそおっ！」

そのうち、盾の外側部分から欠け始め、少しずつその形状が変わっていった。最初はちよつとした欠けから始まり、次第に亀裂の方へとそれが向かい始めると、その欠けの大きさは倍以上のものとなった。

「くっ、白虎！」

それを察した水鹿が、すぐに白虎の方へと走るように歩み寄り、その隣で凍気で盾に向かつて氷の壁を作り、盾の損壊をカバーした。白虎は、若干驚いたように自分の右隣に立つ水鹿の方へと視線を移した。

「水鹿……！」

「っ、ほぼ絶対零度の氷壁ですら、ギリギリで防ぎ切れる、といったところか……！」

水鹿の言う通り、その氷壁ですら、アトロポスからの攻撃に耐え切れるか耐え切れな
いかの狭間にいるようで、その表面にはビシビシと、強く傷が付き始めていた。白虎と
しては少し気は楽になったものの、油断はできない状況にいた。水鹿の氷壁ですら、壊
す勢いでやってくるアトロポスの攻撃。これでは、いくら盾を作ろうとしたところで、
足りるはずがない。

アトロポスは白虎たちに向かって攻撃を放ちながら、その氷壁ですら抉る勢いで、そ
の攻撃に乗せる小宇宙を段階を踏みながら強くしていた。白虎と水鹿にもそれは伝
わっているかもしれないのだが、その変化はあまりにも微量すぎて、伝わり切れない。
「さあ、何もかも破壊するのだアツ！」

瞬間、アトロポスの周りの剣が白虎たちに向かいながら、一つの大きな刃の塊となつ
た。その大きさは確実に白虎たちの背丈と体格以上のもので、受けてしまえば一溜まり

もないであろう。——だが、白虎たちは、それを避けきることができず、そのまま真正面から、その攻撃を受けてしまった。

例の光の中の空間で、白虎はハッと目覚めていた。白虎は横たわっていた体の上半身を、むくりと起き上がらせ、キョロキョロと頭を動かして辺りを見渡していた。ここに来るのも随分御無沙汰ぶりであろうか。白虎は自分の前髪で隠れている額を、その右手で抑え、自分がここまでにくることを思い出そうと、頭の中で、その記憶を掘り起こしていた。

（確か、アトロ口ポスに専用空間みたいなところへ連れて来られて、戦って、皆と合流して、黄金聖衣がやってきて、それから……っ、死んだのかな、わい……）

白虎は一通りのことを思い出せば、顔を俯けて、太ももの上に自分の手を置き、その手をギュツと握り締め、震わせながらも拳を作った。その震えは、白虎の中からこみ上げてくる悔しきからくるものだった。ああ、せつかくここまで来たというのに、アトロ口ポスの言うとおり、死ぬ運命には抗えぬというのか、自分は。

『いや——お前はまた、死んでなどいない』

その瞬間、白虎の思考を否定するためと言わんばかりに、例の声が白虎の頭の中で直接語りかけるように響いてきた。白虎は顔を上げて、その姿を確認しようにも、当たり

前のように、相手の姿はどこにもない。とはいえ、どこも見えない、というのも癩なので、白虎は空間そのものを見上げるように、視線を上の方へと定め、何も無い空虚なところを見つめた。

『白虎よ、お前の歌は、アトロポスを抑えるための原動力になるかもしれないんだ。だから、そちらのアイデーは、REID-DAMOCLESをお前に託した。何か、アトロポスに対抗するためのヒントがあるんじゃないかと思つてな』

「……」

白虎は思わず黙り込んだ、というよりは何も言えなかった。アイデーに信用されて、武器を託されたところで、自分の歌や攻撃は、アトロポスに対して何にもならなかった。それどころか、アトロポスを逆に有利に立たせて、この体たらくになってしまった気がする。だから、こんなことを言われたところで、今の自分にはどうすることもできなかった。

白虎は拳を更に強く握り締めて、見えない声に向かって、「でも」から言葉を連ねた。「私にはアトロポスに対抗する力も、小宇宙もない。REID-DAMOCLESだつて、何の役にも立たなかった。そればかりか、巻き込みたくない友人すら巻き込んで、傷付けて……頼みのアテナの聖衣さえ、向こうの手に渡つて……これつて、あまりにも絶望的すぎるだろう」

『……いや、お前はまだ、REID-DAMOCLESの真価を發揮できていないだけだ』

「えっ……？」

白虎の絶望に打ちひしがれ、暗くなっていた声が、一気に明るく、希望を探すために前に立ち上がったものになった。

『REID-DAMOCLESは、ただの剣ではない。マイクだ。柄の先を見れば分かる』

「……！」

白虎は相手に言われて、思わず脳裏にその剣の姿を浮かべていた。そういえば、柄の先は他の剣に比べて、かなり変わった構造をしていた気がする。他が白銀に輝くの比べて、そこだけ非常にグレーが強かった。つまり、あの部分はマイクだったというのか。なら、こちらの勝利への近道はそれに賭けるしかない。同時に、白虎は相手の方へと疑問を持った。

「アンタ……そんなこと知ってるなんて……一体……何者……」

なぜ、REID-DAMOCLESのそんな秘密を知っているのか、そして、アオイデーと自分のことを知っているのか、白虎からすればかなり不思議で不可解なことだった。声は、最初にフツと笑みを浮かべたような息を放てば、白虎へと答えるかのように

言い放った。

『なに、私はお前とは別次元の世界の歌の女神の媒介だよ。本当、しがないがな——』

「く、うう……大丈夫か、皆……」

「なん、とか……」

「でも、白虎が……」

水鹿が声をかければ、二人はなんとか反応することができた。その姿は、もはやボロボロにくたれており、せっかくの黄金聖衣も細かいところで欠けていた。その上、肝心の白虎は自分たち以上にボロボロになって、そこに倒れていた。しかも反応する様子もない。一連の流れを見ていたアテナは、アトロポスの力を目の前にして、動けずにいた状態にあった。いや、アトロポスに見えない緊縛されているといった方が正しいのだろうか。アテナは顔を一瞬俯けてから、アトロポスの方へと視線を向けた。

アトロポスは白虎が一人倒れているのを見つめ、「フツ」とその鼻であざ笑った。

(なんと偉い運命よ、龍星座……残念だな、私に勝つことができなく……て!?)

アトロポスはその驚愕の表情を隠すことができなかつたのか、ハッと目を見開いた。白虎の元で倒れているREID—DAMOCLESが、その白銀の輝きを一層強めてい

たのだ。その輝きは白虎の元へと、同時に、圭熊たちにも降り注いでいた。気が付けば、白虎はその輝きに包まれながら、腕に力を入れて体を起こしていた。その小宇宙は、尋常のものではない。

「——はあっ！」

大胆で豪快な、白虎の聖衣脱衣。その背中にはいつにも増して凶暴に見える白き猛虎の顔が浮かび上がっていた。白虎はREID—DAMOCLESをその手に取って、アトロポスの方を強く睨みつけていた。圭熊たちの方もその輝きにより、立ち上がるだけの余裕はできていたようで、その場で立ち上がっていた。

「まだ……まだ、終わったわけじゃない……私たちは……わいらはまだ……諦めたわけじゃないアアアア——いッ！」

その瞬間、白虎たちの聖闘士の体が、激しく光を放つ小宇宙によって包まれた。その間に、ボロボロとなった黄金聖衣が白虎たちの身から離れ、青銅聖衣が再び装着されていた。アトロポスとアテナは、まさか、と思い、その白虎たちの姿を凝視していた。アトロポスに至っては最早あり得ないといった様子で、その声を上げていた。

「貴様ら……貴様らは一体、何なのだ！」

それに対する、白虎たちの答えは、一つだった。

「希望の戦士であり、アテナの、聖闘士だアアアアアア——ッ！」

白虎たちがそう言い放った時、その小宇宙の光は白虎たちの元から弾けるように離れた。そこに現れたのは、いつもの聖衣より白く輝きを放ち、体を覆う面積が広くなった、青銅聖衣だった。そして、その背中には、大きな翼が生えていた。全員が騎士のようである黄金聖衣のような面積の増え方をしてる中で、白虎だけは少しばかり女性的なフォルムだったが、それでも、やはり、四人と並ぶと様になっていた。

白虎は REID-DAMOCLES のマイク部分であろうところを、口元まで近付け、言い放った。

「さあ、この世で一番最大で最高のステージの幕開けだ！」

61 : 「未来への咆哮と笑顔」

「まさか、神聖衣だとオツ?!」

アトロポスはその白虎たちの姿を見た瞬間、驚きの声をその場に鳴り響かせながら、目を点にして見開いていた。神聖衣——黄金聖衣を凌ぐ以上の能力を持つと言われ、それは神が纏う神衣に一番近い状態の聖衣と言われている。しかし、それはあくまでも言い伝えだった。ゆえに、こうして実際に目にするのはこれで初めてであった。

白虎たちはそんな神聖衣に変化した自分の聖衣を何度も何度も見返すように、目や頭を動かしていた。白虎たちにとっても、これはなかなか想定外だったようで、白虎に関しては、アトロポスに対してカツコをつけてから、驚いていた。あの聖衣が、こうして黄金聖衣をも凌ぐ聖衣に変化するなど、なかなか信じがたい。しかも、自分だけ異様にドレスっぽく、女性が着ても違和感がないような聖衣というか。しかし、そんなことは今はどうでもいい。

(これは、アオイデーさんとアテナ、二人の思いが通じた結果……だから、このぐらいの奇跡——容易いものだッ！)

白虎はREID—DAMOCLÉSを持ち直し、更に、マイク部分である柄の先を自

分の口元まで近付け直した。普段、マイクを使って歌うことは一切ないので、いまいち勝手が分からないが、大丈夫だろう。そして、このREID—DAMOCLES、確実に白虎の歌に対する補正をかけるぐらいの小宇宙を放ち始めていた。このまま白虎が歌えば、その歌は増大な威力を持つことになるだろう。

アトロポスは、「チツ」と舌打ちをしつつ、神聖衣を着て、こちらを見つめてくる聖闘士たちをギョツと力の持った目線で睨み付けた。そして、先ほどと同じように、自分の周りに剣を作った。

「神聖衣一つまとったくらいで、私に勝てると思っているのか。そんな聖衣、すぐにボロボロにしてやるわ！」

アトロポスはそう雄叫びのように言い放つてから、白虎たちに向かって自分の周りに作った剣をかなりの勢いを付けて放った。白虎はそれと同時に、その口で歌を紡ぎ始めた。

「人がかつて神を信じていたとき——我らはその意味を重んじた……」

瞬間、REID—DAMOCLESの中に集っていた、巨大な小宇宙が、白虎たち聖闘士と、アテナを丸く囲い、白く光る防壁へと変貌を遂げた。その防壁は、次から次へとアトロポスから受ける攻撃を、霧のごとく消して行った。アトロポスは、思わず歯を見せて、ググツと唸り上げた。この小宇宙——明らかに人間のものではなかった。

いや、確実に人間のものではないと確証できる。

(REI-DAMOCLESを伝い、アオイデーの小宇宙があゝの龍星座の元まで来ているとしてもいいのか……！)

そう、アトロポスはこの場に限って思い出していた。白虎はあくまでも、アオイデーの力を伝える「媒介」であることを。そして、白虎はそれ以上でもそれ以下でも、何にでもなく、単純にアオイデーの小宇宙を遠慮なく使っていること。しかし、アトロポスからすれば、それが逆に自分にとって面倒なことになっていた。

一方で白虎は、喉から曲を放ちながら、水鹿たち聖闘士の方へと何かを言っているように視線をかけた。水鹿たちはそれを察すると、コクン、と静かに頷き、アトロポスの方へとその視線を向けた。白虎はそれを見て、微笑みをかけた。

「名もなき神話を心にして……我らはその話を伝承へと」

(これが……REI-DAMOCLESの真の力、か)

白虎は歌いながら、REI-DAMOCLESのその力の大きさを実感していた。実質、ただの人間の自分が、アオイデーの小宇宙を使ってアトロポスへとダメージを与えることは厳しいかもしれないが、自らを守るということであれば、アオイデーの小宇宙はかなりの威力を持つ。そして、他人へのその小宇宙を与えるのにも、だ。

アトロポスの攻撃の威力は、だんだんと強まっているのか、その剣も次第に大きく

なつて行く。そんな中で、圭熊が、白虎の前衛つぼく、そこに入った。そして、こちらに与えられてくる小宇宙を自分の拳の中に収め始めた。

「唸れ、俺の小宇宙……白虎の歌を、拳に変えつぞおおおお——ッ！」

瞬間、圭熊の拳から、その威力を語るがごとく、大きな熊の手が放たれた。それは、こちらにやってくるアトロポスの剣をすべて掻き消してしまった。当然、アトロポスへと、その熊の手は届くはずはないが、アトロポスの攻撃に、拳で立ち向かえることになったということは、絶大な意味を持つ。アトロポスは、まさか自分の攻撃が防御されるだけでなく、聖闘士の攻撃に負けるとは思ってもみなかったのか、目を点にして見開いていた。

（バカなッ……神聖衣をまとつたぐらいで、ここまでの力を得ると言うのかッ……有り得ん。絶対に、有り得んッ！）

アトロポスはこれは絶対にまぐれだと思いつつも、今度は自分の小宇宙を大きな手に変えて、それを自分の背面へと映した。いずれ、その大きな手は白虎たちの防壁を目掛けて、勢いを付けて、宙を走り出した。それに対して、今度は水鹿が白虎たちの前へと出た。

「膨大とはいえ、今のオレたちからすれば、所詮はただの小宇宙。ならば、その小宇宙を凍らすことも、容易いもの！」

水鹿はそのまま両手に凍気を貯め込み、巨大な手がこちらに直撃する寸前で、それを押し潰すように一つにまとめ、目の前の小宇宙にぶつけた。すると、アトロポスが放ったそれは、水鹿のその攻撃によって一気に氷の世界へと引きずり込まれていた。水鹿が当たるところから、徐々に凍っていき、かつ、こちらにも伝わるぐらいの冷気を放ちながら、ボロボロと崩れ、壊れていく。水鹿は、「ふう」と息を漏らしてから、グツと拳を握り締めた。

アトロポスは、先ほどよりも圧倒的な力を見せる聖闘士一同に対して、ギリツと歯を軋ませながら、すぐに先ほどと同じように、「まぐれだ」と思い直し、次の攻撃体制へと入った。それに対抗するのは、翔馬だった。

今度は翔馬は白虎たちの一歩前に立ち、前衛に立った。そして、スツ、と目を細めて、アトロポスの手の中にあるそれを睨み付けた。

(アテナの聖衣……あれさえあれば、俺たちの勝利も同然……ならば……)

チラツ、と後ろで歌い続けている白虎の方へと視線を向けた。白虎は翔馬の視線を感じて、そちらの方へと、目を動かした。それから、白虎は口を使わず、小宇宙を伝って、翔馬の方へと話しかけた。

(なんや、翔くん。何か、思い付いたんか?)

(ま、単刀直入に言えば、そんなところだな。ただ、お前の協力無くしては、成功しない)

翔馬の方も、小宇宙を伝い、白虎に向かって答えた。白虎はその翔馬の答えを聞くと、興味が出てきたのか、質問で返した。

(……どんな作戦?)

(ああ。今の俺たちであれば、アトロポスの攻撃を攻撃で掻き消すことができる。ならば、その原理を利用して、俺が直接向こうに当たることができれば、アテナの聖衣も取り戻すこともできるのではないか、と……)

「!?」

白虎の目がカッと驚きを放つように開き、歌を歌っている最中だというのに、思わず絶句しかけた。翔馬のその作戦、あまりにも無理があるというより、翔馬にとつて危険が大きすぎていた。失敗したら、確実に翔馬はこの場から消え去ってしまう。白虎は翔馬が提案した作戦に対する驚きのあまり、一瞬ばかり放心してしまつたが、すぐに自我を取り戻して、翔馬の意見に反論した。

(……ア、アホちゃうの。そんな当たり屋みたいな作戦、わいが許さないよ。わいらがアトロポスに対抗できる小宇宙を持つてるにしても、無事は保証できないよ)

(じゃあ、これからどうやってアテナの聖衣を取り返すというんだ。何にしる、このままアトロポスに当たらない限り、取り返すなんて絶対に無理だろう)

(……それも、そうだけ)

翔馬の言うことは最もであった。自分たちはここから動かずに、ただ、アトロポスの攻撃に対して攻撃で返しているだけだ。確かに、この状況のままでは、アテナの像をアトロポスから取り返せるはずはないであろう。

(だから、行つてくる。お前が俺にその小宇宙で向こうまで飛ばしてくれ)
(……っ、わ、分かった)

白虎はその翔馬の小宇宙から、何かを感じ取つてしまい、どうしても断りようがなかった。よくよく考えると、翔馬がこうして強い意志を見せて、自分に対して提案してくるなんてことはなかなかなく、もしかしたら、これが初めてかもしれない。それは、今まで自分が仕出かしたことの償いか、それとも、裏切り行為をしてしまった自分への制裁ともいえる何か、なのであろうか——どちらも同じ意味か。

翔馬は目の前を向いて、アトロポスの方へとその視線をまっすぐ向け、その視線をアトロポスの手元にあるアテナの聖衣とされる小さな像へと視線を向けた。もし、ここでアレを取り返すことができれば、万々歳というものだ。翔馬は心の中で覚悟を決めて、その時を待った。

一方で、白虎の提案された方は、やはり腑に落ちない表情で、翔馬からの合図を、その後ろで歌いながら待つていた。了承はしてしまったものの、やはり、友人がこんな危険な真似をすることに対して、白虎自身、止めたい気持ちでいっぱいだった。

だが、止めたところで、翔馬自身が止めたいと思わなければ、それに意味はない、というよりは、自分が止めると言われても止めない性格ゆえ、翔馬のその決意と気持ちがあるほど分かる。だから、ここで翔馬を止める権利など、どこにもないと思ってしまうのだ。

（水鹿だったら、この提案は絶対に飲まないだろうな。もちろん、圭くんだって、私が一人で死に行こうとした時点で、必死に引き止めたんだ……簡単に了承、しないよね）

きつと、この状況ではなくとも、確実にあの二人には話さず、自分だけにしか話してくれなかったであろう。あの二人に話したら、確実にいざこざが起こってしまう。自分だったら、あの2人にも話してしまうだろうが。そして、白虎はアトロポスの方を見つめながら、その攻撃のタイミングを見極めていた。翔馬も同じようにアトロポスの方を見つめ、小宇宙を高めながら、確実なタイミングを狙っていた。

今か、違う、もつと先か——…いや。

「今だアツ！」

翔馬と白虎はアトロポスの攻撃のタイミングをとうとう見計らうことができた。同時に、白虎の歌声の力強さは更に強まり、翔馬の小宇宙も爆発的に燃え上がった。

「うおおおおお—— ツ！ 燃えろ、俺の小宇宙オオオオ—— ツー！」

「すべては、笑顔の、ためにイイイイ—— ツ！」

白虎の歌声は、同時に叫びを上げた翔馬に釣られてしまったせいで、もはや力強いを通り越して、ほとんど絶叫に近かった。だが、翔馬を押すためのものであれば、これぐらいでなければ押し切れなかった。翔馬はその体を白虎に小宇宙で押されれば、その拳に小宇宙を集中させれば、己が青き彗星の一閃となつて、アトロポスの方へと向かった。その一閃は、アトロポスの攻撃の効果を一気に無効にし、一直線にアトロポスのところまで向かった。

「フツ、ぶつかつてきたところで、私に通じるところか、そちらの身が減るだけだぞー！」アトロポスはこちらにぶつかつてくる翔馬に対し、小馬鹿にするような態度を見せてから、小宇宙の防壁をそこに作つた。翔馬はその防壁にぶつかると、トランポリンのようにその身を跳ね上がらせて、そのまま背中から地面へと衝突。その痛みから、グツと顔をしかめたが、アトロポスへの視線を離さず、寧ろ更に凝視した。その視線の先にあるのは——アトロポスの手元にあるアテナの像、ただ一点のみ。

「翔くんッ！」

歌がキリのいいところで終わり、声を出す余裕ができた白虎は、翔馬がぶつかると、すぐさまその名前を声にして宙へと上げた。自分の名前を呼ばれた翔馬は、地面に置いていた自分の身をゆっくりと起き上げて、その場で地に足を着けて、立ち上がった。ぶつかつたことによるダメージはそれなりにあつたものの、翔馬自身の体には特に異常は

なかった。

翔馬は立ち上がるなり、小宇宙を燃やし、拳を構えて、アトロポスに対して再び戦闘態勢に入った。いつの間にか皮膚が切れていたのか、口端からは血が流れ出ていたが、翔馬にとつてそれは問題ではない。アトロポスは立ち上がってきた翔馬に対して、呆れたようなため息を附ながら、今度こそは、といった様子で、その莫大な小宇宙を、背中に現し始めた。

「くくっ……貴様、なかなか諦めが悪いようだな。この私に攻撃するということは、その身を滅ぼすことになるよ、先ほどもいったはずだ」

「今の俺には……そんなの、関係ない。ただ、俺はお前のようなドサンピン女神をどうかしたいだけだ」

「神をドサンピン呼ばわり……笑わせてくれるな!」

自分に向かって生意気な口を叩く翔馬に対して、さらに怒りが露わになるアトロポス。その小宇宙は瞬間に燃え上がっていく。翔馬はそんなアトロポスに対して、特に恐れを感じず、むしろ、像を取り返すことができるチャンスだと思った。こちらに攻撃をしている間のアトロポスは、唯一無防備であり、一番像を取り返しやすい状況でもあるのだ。それを知らない白虎たちの顔は、途端に不安になっていくものの、翔馬はそれに向かって、心の中で「大丈夫だ」と復唱していた。

（うん、大丈夫……大丈夫だ。どこにもその確証はないけど、今なら、アトロポスから取り返せそうな気がするから、きつと大丈夫）」

翔馬は、「スウツ」と息を吸い込んで、ゆらゆらと強化された小宇宙を燃やししながら、アトロポスの全身の方へとその視線を向けた。アトロポスは、生意気にもこちらに對峙してきた翔馬に向かって、右手を肩の位置まで上げ、とうとう攻撃体制を取り始めた。「ふふ……天馬星座よ、お前が望めば、その命を助けてやつてもいいんだぞ。私も鬼ではないからな」

「俺は、命乞いなどしない。もし、やってしまつたら、聖闘士の名が恥じる」
「……そうか。どこまでも生意気な奴だな」

ここまできて命乞いをしない翔馬に對し、アトロポスは更なる不快感をその心の中で抱き始めていたらしく、「チツ」と小さく舌打ちをしていた。他の聖闘士たちもそうだが、この翔馬には、「諦め」と言う言葉が頭の中の辞書にはないらしい。アトロポスにとつて、聖闘士たちのまつすぐで諦めのつかないその態度と言うのは、非常に不快なもので、その心の中の破壊心を一層強めていた。

（こつなつたら、アテナごと、聖闘士を無に返してくれよう）

アトロポスは口角を上げ、目を細めて、ニヤリと笑みを浮かべてみせた。その右手には、自分の小宇宙が徐々に集まっていき、次第に大きくなっていく。そして、アトロポ

スは翔馬だけではなく、ここにいる聖闘士全員へと狙いを定めた。それを小宇宙から察した翔馬は、すぐにその攻撃体制から、向こうへと走れるように構え始めた。

「さあ、消え去れ、何もかもおとおッ！」

「だああああああ——ッ！」

アトロポスがそうして白虎たちに向かって、その小宇宙を放った瞬間、翔馬は流星の如く、その真ん中を駆け抜けた。その拳ですべての攻撃を無にはできなかったものの、防ぐことはできた。こちらに向かって駆け抜けてきた翔馬のことを、アトロポスはただ、目を見開いて見つめていた。

無論、拳とはいえ、アトロポスの攻撃を直に受けて平気なはずはなく、翔馬の体はすでに、その神聖衣すら突き抜けて、血塗れとなっていた。翔馬は口端から血を垂らしながら、アトロポスの手に持っている、その小さな像に向かって手を伸ばした。そして、運良く、その像は見事に翔馬の方へと手に渡った。自分の不意を突かれたアトロポスは、すかさずすぐに翔馬の方へと振り向き、剣を翔馬の胸元へと刺した。

「があっ！」

今までのダメージが心臓を刺されたことにより、ピークに察したのか、翔馬は見事に略血、その量は何リットルにでもなるであろう。明らかに致死量には達していた。

「翔馬アアアアアア——ッ！」

白虎たちは翔馬が刺されるなり、すぐにそちらの方へと駆け寄った。そして、その身を抱き上げ、起き上がらせたのは、白虎だった。白虎らしいけないと思いつつも、翔馬の体を激しく揺さぶった。その手には、翔馬の血がボタボタと流れ出ていた。

「翔くんっ、翔くんっ……翔馬ッ……しっかりせえよっ……」
「う……」

意識はあるのか、白虎のその呼びかけには反応できるようだった。しかし、その顔は蒼白に染まっており、なかなかいい状態とは言えないものだった。翔馬は目を薄く開き、白虎の顔を見つめた。白虎は、自分のことを見つめ、その目から激しく涙を流し、ひたすら泣きじやくっていた。どうして、白虎は自分の姿を見てここまで泣いているのだろうか。自分は白虎に何度も何度もひどい仕打ちをし、今回もここにくるまで白虎を一度裏切ったのだ。こんな自分に流す涙など、ないはずだ。

（俺は……なんて幸せ者なんだろうな。自分に対して涙を流してくれる友がいる……そんな友を俺は一度裏切ったはずなのにな……）

翔馬は謎の安心感と満足感に包まれていた。同時に、これで心置きなく、自分はどうなっても大丈夫だろう、と思つたのもそうだった。翔馬は微笑みを浮かべながら、白虎の方へとアテナの像——アテナの聖衣を差し出した。白虎はそれを差し出されるなり、翔馬の血によって赤く染まり上がった手で受け取り、翔馬の顔を見つめた。翔馬は、今、

絞り出せる声でこちらを見つめてくる白虎に対して言い放った。

「白虎……ごめ、んな……。どんなことがあっても三人で乗り越える、って、約束したのに、天闘士へ……寝返ってしまつて……」

「翔馬ツ……いいの、もう、いいの……！ アンタが聖闘士側に帰つて来てくれただけでも満足感なの……！」

「最初は……不安だつた。自分の気持ちに分からなくて、でも、分かっているような、訳の分からない感覚がして……不安で……でも、ここまできて、やっと分かつたんだ……俺、お前たちと共に戦いたいって……あまりにも気付くのが、遅すぎた、けど……」

翔馬の声が、どんどん筋の通らないものへとなり、小声になっていく。たびたび、その口から出てくる血の量も多くなっていた。それに合わせて、白虎の涙の量も増え、翔馬の顔や体の上へとボタボタと落ちていく。白虎は翔馬が今更こんなことを言い出している意味を察したようで、もはや声を絞り出せないぐらいに、しゃくり上げていた。白虎以外の聖闘士も、そしてアテナですら、何かを堪えながら、その肩や拳を震わせていた。もう、早すぎるその時が来ているのだ、と。

翔馬は聖闘士たちの反応を小宇宙として感じ取りながら、満足したように、幸せそうな表情を浮かべ、白虎と他の聖闘士たちに向けて言い放った。

「ありがとう、みんな……この戦いの先……よろしく……たの、む……」

——そこで途切れたのは、翔馬の小宇宙だった。白虎は翔馬の小宇宙が途切れるなり、すぐにその手の脈を図り、心臓がある胸元へと耳を近付けた。しかし、翔馬の血の循環はすでに終わっているようで、白虎の耳や指には何も伝わらなかった。白虎はその結果に対し、何も言わずに、その場から立ち上がって、アテナの方へと歩み寄った。その流れを、水鹿と圭熊は見つめていた。

「白虎……」

「アテナ……翔馬の想い……私たちが繋ぎましょう……!」

白虎はアテナに向かって、アテナの聖衣を差し出した。アテナは自分の聖衣を差し出されるなり、静かに自分の目から流れ出ていた涙を拭い取り、こくん、と首を縦に振って頷き、白虎から、聖衣を受け取った。そして、アトロポスの方へとその体と顔を向けた。そこまでの一連の流れを見ていたアトロポスは、「ハッ」とバカバカしいとも言いたげな笑みを浮かべた。

「人一人の死に涙する……アテナ、貴女も随分と落ちぶれましたね」

「ええ、落ちぶれても結構です。私は——私の意思と誇りが、そうなだけですから」

アテナがそう言い放った瞬間、アテナの像が光りだし、一気に巨大。そこから、すべてのパーツが分解し、アテナを光の中へと包み込み、数秒したのち、その光は弾くように、そこから散らばっていった。そこに現れたのは、純白と純金ような色合いを醸し出

すアテナの聖衣に包まれているアテナの姿。アテナは片手に盾を、そのもう片手には二ケの杖を手にして、アトロポスの前へと降り立った。それから、ふと、アテナはアトロポスから湧き上がる黒い小宇宙に違和感を感じ始めた。

(この小宇宙、アトロポスのものではない……まさか……！)

アテナはハツとなって、アトロポスの手にしている剣の方を見つめた。この剣、いや、杖は以前自分とアトロポスが出会った頃にはなかったはず。だとすれば、すべての元凶——アテナは把握することができた。そして、白虎たちにこれからどうすべきかを小宇宙を伝って言い放った。

(白虎、水鹿、圭熊。もしかしたら、アトロポスは、自分の意思で戦い、暴走しているわけではないのかもしれませんが。あのアトロポスの手にしているものがすべての元凶でしょう。あの杖さえ処理ができれば、この戦いが終わるかもしれません)

(！)

(白虎。貴方の持っているREID—DAMOCLESなら、その処理も可能でしょう。その、アオイデーの小宇宙が籠っている剣であれば……)

白虎は手にしているREID—DAMOCLESを見つめ直した。アテナの聖衣だけでなく、この剣さえもがこの戦いの勝敗を決める、ということなのか。白虎はREID—DAMOCLESの柄の部分強く握り締めてから、マイク部分に少し息を吹きか

け、再び刃部分のカバーを外し、銀色に輝くそれを見せつけた。チャキン、と金属の鳴る音が、そこに鳴り響いた。白虎は微笑みを浮かべながら、小宇宙でアテナに聞いた。(アテナ。とりあえず、あの杖をアトロポスから手放させましょう。そうすれば、私が斬るので。……頼まれて、くれますか?)

(ええ、もちろんです。戦女神として、アオイデーの媒介である貴方に、任せましょう)(痛み入ります、アテナ。すべては……世界の平和のために——……!)

白虎はアテナのその言葉を聞くなり、すくさま剣を構え、アテナはそんな白虎の心強い小宇宙を受け、アトロポスの手元にある杖へと狙いを定めた。アトロポスはいつものような、周りを見下している笑みを浮かべながら、アテナに向かって剣となった杖を構えた。そして、アトロポスはその剣をアテナに向かって振り落とそうと走り出した。アテナはそれに向かって杖の柄の部分差し出して、支えた。途端に、自信満々だったアトロポスの表情が、苦痛によって歪んでいった。

「ぐっ、ううっ!」

「アトロポス……貴女の企みを、ここで終わらせてみせる!」

アテナはそう口から言い放てば、アトロポスの剣の効果を無効にするぐらい、自分の小宇宙を燃やし、それを杖に伝わせた。瞬間、アトロポスの意思に関わらず、剣が杖の形へと戻って行った。アテナの小宇宙のプレッシャーには、武器ですら敵わないという

ものだ。アトロポスは自分の意思に関わらず元の形状に戻った杖に対して、睨みを利かせた。

「なっ……！」

「さあ、アトロポス。そのすべての根源を、絶たせてあげましょう！」

アテナは手にしていた杖を、アトロポスの杖を当てながら、強く持ち上げ、その勢いでアトロポスの杖の持っている手を、自分の杖の柄の先で当て、そのままアトロポスの杖を、宙へと上げた。アトロポスは自分の杖が手元から離れるなり、「しまった」とでも言うような表情でそれを見つめていた。

アトロポスの杖は宙に上がるなり、白虎の元へと向かって落ちていった。白虎はこちらにアトロポスの杖がくるなり、REID-DAMOCLESをそちらへと向けて、そこから走り出した。

「白虎——ッ！」

「やめろおおおおおッ！」

アテナと聖闘士たちの自分の呼ぶ声と、アトロポスの絶叫が重なった。白虎はアトロポスの杖がこちらに近付いてくるなり、その手にしている剣を強く光らせながら、自分の小宇宙とアオイデーの小宇宙を重ねていた。

（歌の女神アオイデーの小宇宙……そして、私の小宇宙を……今、ここで、アトロポスの

杖にぶつける——……!」

白虎はその場で足をバネのように低く曲げ、そこから一気に、アトロポスの杖に向かって跳ね上がった。そして、REID—DAMOCLESの刃が杖に向かって振り落とされた。

「Illuminare Canzone——ツツ!!!」

瞬く間に、振り落とされたREID—DAMOCLESからは白い光が一閃となつて放たれ、その光にあてられた途端に、杖が真つ二つになつて斬れた。その杖の斬れたところから、黒いオーラ小宇宙が一気に湧き出て、宙へと舞い上がつて行つた。白虎はその小宇宙を、すぐにアトロポスが先ほどまで発していたものと同じものと察すれば、さらにその小宇宙をREID—DAMOCLESの刃の振り下ろした時に起こる風で、一気に斬り刻んだ。

白虎は、「はあはあ」と息を荒げながら、その黒い小宇宙が空気と一体となつて、そこから消えていくのを見届けていた。そして、その黒い小宇宙が感じられなくなれば、「はあっ」と疲れが溜まつているような一瞬の息を吐きつけながら、その場にガクツと膝を降ろした。

一方で、アトロポスは杖を失うなり、すぐにその場に倒れ、意識を失っていた。その黒かった姿は、元の姿なのであろう純白に包まれた、綺麗な色へと変化していった。ア

テナはそんなアトロポスの姿を見つめながら、ニコツと安心したように微笑み浮かべ、白虎たち聖闘士の方へと振り返った。白虎はアテナに視線を向けられるなり、こちらもニコツと口角を緩ませ、アテナに向かって言い放った。

「アテナ……これで、すべてが終わったのですね。アトロポスの戦いも、何もかも……」
「ええ、終わったのです。白虎、水鹿、圭熊に——翔馬。ありがとう、そして、お疲れ様でした……」

——終わりーファイナーに相応しい物語の終わりを、か。

私は、神聖衣をまとい、REID—DAMOCLESに向かって歌った歌詞の一端を思い出しながら、水鹿たちやアテナのこを見つめていた。

ずっと望んでいた未来は儚く、遠くなり、敵わないものになってしまったけど、その心は絶対に変わらない。それを歌で紡ぎ続け、ただの神話ではない、すべての伝承へと伝え続ける。それは、何百年経とうが、千年経とうが、変わらない。

確かに、翔くんを犠牲にしてしまったのは、私にとつても、みんなにとつても一番辛かったであろう。でも、あの子が自分の命を投げ打ってでも、アテナの聖衣を取り返さなければ、私たちの勝利は、アトロポスを目の前にして一生望めなかったはずだ。……彼には最後までちゃんとした幸せを臨ませることができなかったのを、後悔している。でも、いつまでもそんな気持ちでいたら、翔くんが悪い。

だから、私は私らしく、皆に皆らしく、前を向いて歩く。それが——私と皆の、するべきことだから。そして、私は歌を紡いだ。

「この物語を、千年後の私たちへ——ただの神話ではない、すべての伝承へ——フィーネに相応しい物語の終わりを——すべては笑顔のために……」

62:「White Songs」

あの戦いのあと、元の世界に戻れば、その日の夜に白虎はアオイデーの元へと向かった。水鹿たちからは止められたが、白虎としては行かなければならない理由——REID—DAMOCLESを元の持ち主に戻さなければならぬ、といったことがあったからだ。だが、白虎はパルナツソス山でアオイデーと出会い、話をしたところ、REID—DAMOCLESはしばらくの間は白虎が持つて欲しい、と告げられた。無論、最初は、それに対して納得できなかったが、アオイデーが持つて欲しいというのだから、持つ他にないであろう。白虎は結局剣をアオイデーのところに戻すことはなく、帰って行った。帰ってくれば、圭熊から、「無駄足お疲れさん」と大笑いしながら言われた。白虎はその顔に拳を入れた。

そして、白虎はその後に、聖域にある聖闘士たちの墓場の中にある翔馬の墓へと向かった。白虎はその墓をしばらく見つめてから、その場にしゃがみ込んだ。出会った時のこと、和解した時のこと、さまざまなが走馬灯のように思い出された。

(……翔くん、聖域の皆は元気だよ。アンタのお師匠さんも、ちゃんと元気に過ごしてるよ。まさか海鳥さんに黄金聖闘士の座を譲っているとは思ってもみなかったけどさ)

そう、本当思ってもみなかった。水鹿に海鳥のことを聞いてみれば、なんと、海鳥は数年前から黄金聖闘士になることをほとんど約束されていたようなものだったらしい。だが、本人は黄金聖闘士になるには、もつと聖域のこと、教皇のことを支えられるぐらいにしつかりしなければ、と思ひ、一度はそれを辞退したらしい。自分も黄金聖闘士になることは約束されたも同然だが、師匠でもなんでもないアンバーから約束されるなど、相当だ。

白虎は、「はあ」とため息をつきながら、空を見上げた。今日も、空は青く輝いている。

「教皇。以前、文献室でこのようなものを見つけたのですが、天秤座という点から、貴方に渡した方がいいんじゃないか、と思つて」

「そうか、ありがとう。文献室でこんな古い図書を見つけるとは、なかなかだな」

教皇は水鹿から、とある古い冊子を受け取りながら、ニコリと微笑みを浮かべていた。その冊子はかなり前に水鹿が文献室から見つけた、かつての天秤座の聖闘士がつけていた日記であつた。冊子自体、よくここまで残っていたな、というぐらいのもので、日記の中身から察するに、今から大体450年前ぐらいの、かなり古いものである。

教皇はそんな冊子の中身をパラパラと軽くページを流し見つめてから、最後のページ、いわば裏表紙へと目を運んだ——途端に、教皇の瞳からは一筋の涙が出てきた。水

鹿は突然涙を見せた教皇に対して、驚きを隠せずにしたのか、目を見開きながら、教皇に声をかけた。

「き、教皇、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……すまない。天秤座の聖闘士として、何か通じるものがあつたようだな……お前が心配することではないよ」

教皇は涙を指で拭い取りながら、再び冊子の裏表紙の方へと視線を向けた。

（老師……貴方の日記、この天秤座の紫龍が、確かに受け取りました……）

——そして、どこか、遠い世界。

そこで天秤座の聖衣をまとった青年が、五老峰の崖の上から、その世界のすべての全貌を見つめるかのように、視線を据えていた。その青年の容姿は、白虎に負けないぐらいの女性的な容姿であつたが、比較のおっとりした顔の白虎とは違って、こちらの方が若干ながらに、凛々しきが多かつた。

青年は、「ふっ」とその口元を緩めながら、崖を背にして、そこを後にした。

——次の戦いは、そんな遠い世界での話になる。

—— F i n e .